2006年10月1日発行 偶数月1回1日発行 第15巻第5号
平成12年9月12日／第3種郵便物認可

戦略・戦術・戦史 Magazine

Rekishi Gunzou

歴史群像

THE LAST BATTLE IN NORTH AFRICA

TUNISIA



チュニジアの戦い

北アフリカ戦線 最終章



Destroyer FUBUKI
Illustrated by SHIGERU KOMATSUZAKI

多様な艦種に秘められた開発の苦悩

日本駆逐艦発達史

敵中突破三〇〇里

関ヶ原 島津退き口

関東軍 北方快進撃の秘策

満州電撃戦



●赤軍の「空飛ぶ戦車」
シュトルモヴィク大研究

●地上最大の動物兵器
戦象の世界史

●蜜月を反故にした憎悪の連鎖
イラン VS.アメリカ

Motofumi Kobayashi
小林源文
ザームラント1945
Act.4

OCT.2006
No.79
10
定価 930円(税込)

2006年10月1日発行 偶数月1回1日発行 第15巻第5号
平成12年9月12日／第3種郵便物認可

戦略・戦術・戦史 Magazine

Rekishi Gunzou

歴史群像

THE LAST BATTLE IN NORTH AFRICA

TUNISIA



チュニジアの戦い

北アフリカ戦線 最終章



Destroyer FUBUKI
Illustrated by SHIGERU KOMATSUZAKI

多様な艦種に秘められた開発の苦悩

日本駆逐艦発達史

関東軍 北方快進撃の秘策

満州電撃戦

敵中突破三〇〇里

関ヶ原 島津退き口



●赤軍の「空飛ぶ戦車」
シュトルモヴィク大研究

●地上最大の動物兵器
戦象の世界史

●蜜月を反故にした憎悪の連鎖
イランVS.アメリカ

Motofumi Kobayashi
小林源文
ザームラント1945 Act.4

OCT.2006 No.79 10

定価 930円(税込)

歴史群像 2006 OCT. 10 No.79

チュニジアの戦い ●満州電撃戦

Gakken

歴史群像 2006 OCT. 10 No.79

2006年10月1日発行 平成12年9月12日／第3種郵便物認可
発行／株式会社 学習研究社

定価930円 本体886円

雑誌 09677-10
610-17170
4910096771066
00886

戦略・戦術・戦史Magazine Rekishi Gunzou

歴史群像

OCT. 2006 No.79 **10**

Cover Illustration by SHIGERU KOMATSUZAKI
Cover Design by SHOZO TSUCHIDA [Little Elephant Co.]

C O N T E N T S







第1特集 北アフリカ戦線・最終章
チュニジアの戦い [荒川佳夫] 31

第2特集 敵中突破三〇〇里
関ヶ原 島津退き口 [桐野作人] 48

第3特集 関東軍 北方快進撃の秘策
満州電撃戦 [瀬戸利春] 66

多様な艦種に秘められた開発の苦悩
日本駆逐艦発達史 [田村尚也] 81

地上最大の動物兵器
戦象の世界史 [松代守弘] 94

赤軍の縦深戦略が生んだ「空飛ぶ戦車」
シュトルモヴィク大研究 [樋口隆晴] 102

Interview
福山孝之（元海軍陸戦隊 小隊長） [小畑雄二] 154

豊臣ネクスト・キャビネットの明暗
再考 幻の秀次政権 [橋場日月] 160

幻の明治新政府転覆計画
『明四事件』始末記 [田中健之] 168

プロエスティ油田を襲った空前の超低空爆撃
津波作戦 [白石 光] 176

蜜月を反故にした憎悪の連鎖
イラン VS.アメリカ [山崎雅弘] 184

ザームラント1945 Act.4 [小林源文] 197

【戦国の城】後北条氏の挟撃を阻止した、家康の野戦築城
甲斐・能見長塁 [西股総生] 2

【日本の軍用船】強行輸送を目的とした日本版LST
二等輸送艦（SB艇） [瀬戸利春] 8

より遠くへ、より多くの爆弾を
B-24重爆撃機 [白石 光] 12

【世界戦史】ナポレオン戦争屈指の大激戦
ボロディノ1812 [有坂 純] 16

【太平洋戦争フォト・ギャラリー】
「タフな米空母」を支えた艦上作業 [編集部] 22

4000年の歴史が生んだ多様な遠戦兵器
中国の投射武器 [来村多加史] 26

無数の遺構が残る、南洋の要衝の今
小笠原戦跡を行く [石本 馨] 133

信長の独断 フルスロットル [大野信長] 141

【MILITARY EQUIPMENT】
軍用ヘルメット ② [坂本 明] 150

戦場のミステリー [工藤智明] 153

INFORMATION
●全国イベントカレンダー …… 111
●歴史群像バックナンバーのご案内 …… 112
●歴史群像SHOP …… 113
●新刊紹介 …… 142
●新着情報 Cinema＆ゲーム …… 144
●読者プレゼント …… 146
●歴群フォーラム …… 148
●次号予告 …… 195
●奥付／プレゼント当選者発表／定期購読案内 …… 196



◆歴史群像シリーズ特別編集

【決定版】図説

絶賛発売中!!

幕末 戊辰 西南戦争

「目で見る戦い」をコンセプトに好評を博した『決定版　図説・戦国合戦集』の
「幕末維新」版がついに登場!

**動乱の幕開けとなった「桜田門外の変」から「鳥羽・伏見の戦い」「箱館戦争」を経て
維新の巨星・西郷隆盛による士族最後の叛乱「西南戦争」までを完全網羅。
幕末維新期〜明治初年の戦いをイラストと地図で徹底再現!
兵器・艦船なども充実した幕末ファン必携の1冊!!**

●主な内容

【幕末騒乱】桜田門外の変／薩英戦争／天誅組挙兵・生野の変・天狗党の乱／池田屋事件／禁門の変／下関戦争

【幕末擾乱】大田・絵堂の戦い／寺田屋遭難／長州戦争／坂本龍馬・中岡慎太郎暗殺／七条油小路の血闘

【戊辰動乱】鳥羽の戦い／伏見の戦い／淀・山崎の戦い／甲州柏尾の戦い／宇都宮城攻防戦／上野戦争

【戊辰大乱】朝日山攻防戦／長岡城奪還戦／会津藩防御網／白河口攻防戦／母成峠の戦い／会津攻城戦／松前攻略戦／宮古湾海戦／箱館総攻撃

【明治内乱】佐賀戦争・萩の乱／神風連の乱・秋月の乱／西郷挙兵／熊本城攻囲戦／田原坂の戦い／和田越の戦い／可愛岳突破／城山の戦い

【兵器・艦船・軍装】幕末期小銃進化論／洋式銃コレクション／維新期大砲発達史／大砲コレクション／幕末洋式船概略史／帆走装置／推進機関／艦載砲／幕末刀／近代軍装変遷史

【幕末戊辰の実相】幕末天誅事件／新選組行軍図／長州奇兵隊／幕末剣術流派略系譜／三百諸藩の動向／赤報隊偽官軍事件／奥羽越列藩同盟／ガトリング砲／軍艦甲鉄

【幕末戊辰の風景】京都三条通／京都御所／摂海防御体制／品川台場／鶴ケ城／五稜郭

【特別折込】鳥瞰イラスト 幕末江戸・幕末京都／幕末江戸・京都マップ

ほか

B5判・176ページ／定価1995円(5%税込)



◆歴史群像シリーズ特別編集



【決定版】図説

中国武器集成

好評を博した【決定版】図説・日本武器集成に
続き武器集成シリーズ第2弾。
現行の中国武術に伝わる剣・刀・棍・槍などの
各種武器から三国志に登場するような
大掛かりな攻城兵器や軍船まで古今を問わず
中国の武器・兵器を大集成。
見ているだけでも楽しいバリエーション豊かな
中国武器の数々を写真と図解のオールカラーで
歴史・構造・扱い方などを徹底分析する
中国武器の決定版!!

乞うご期待!!

2006年9月11日発売予定

B5判・オールカラー160ページ／予価：2100円(5%税込)

後北条氏の挟撃を阻止した、家康の野戦築城

甲斐 能見長塁

KAI NOUKEN-WALL

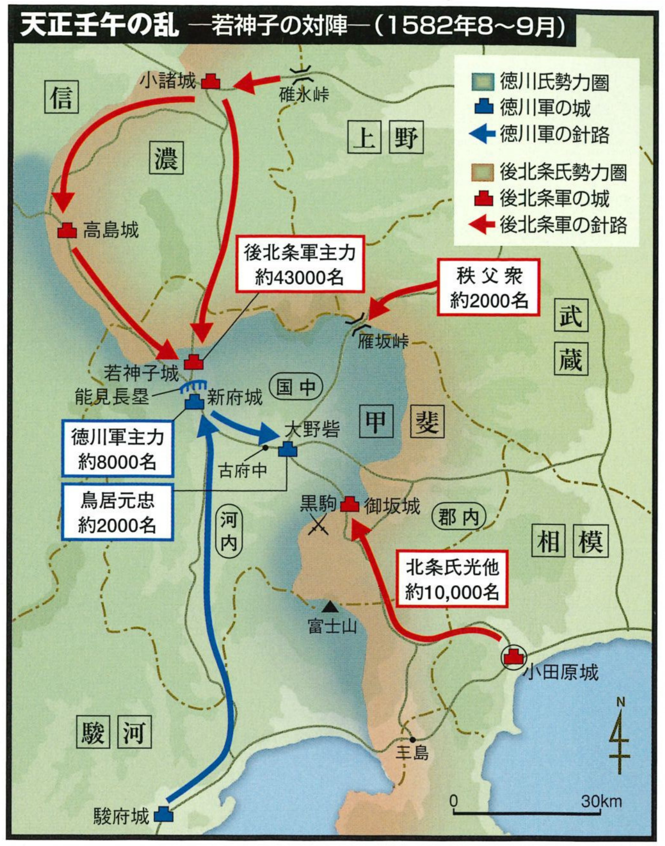
信長横死後、甲信領有を目指して
その中心部をいち早く押さえた徳川家康であったが
後北条氏の罠に陥った。圧倒的な兵力差のなかで
戦局を安定化すべく家康が打った手が
七里岩台地上を遮断する長塁の築城であった。

監修・文＝西股総生　イラストレーション＝香川元太郎



◆能見長塁鳥瞰図（推定復元）

イラストは能見長塁を北西上空から見たものである。長塁に直接配置する将兵は警戒・監視任務のため、その数は多くない。また画面右手には、「西城」と呼ばれる遺構が存在するが、復元が困難なため、イラストでは割愛した。①=Ⓑ信州往還を閉鎖する虎口②この付近は、信州往遣を側射する陣地として有効③伝「能見城」。長塁の指揮所となる陣屋が存在したと思われる ④=Ⓒ連続外枡形虎口 ⑤射撃の邪魔になる家屋は破壊された ⑥=Ⓓ堡塁状遺構（現、御名方神社）。近代要塞の閉鎖堡（周囲を豪と胸壁で囲まれた独立戦闘拠点）を思わせる施設である ⑦部隊移動を阻害する家屋も破壊された ⑧交替のため移動中の部隊 ⑨示威行動と食料調達を兼ねて、敵性の村落は焼き討ちされた。※ⒷⒸⒹは、5ページ、6ページの図と縄張り図に対応しています。



信長の横死後、いち早く信濃南部と甲斐中心部に軍を進めた徳川氏であったが、自軍の5倍の兵力を持つ後北条氏に南北から挟撃される態勢に陥り、戦略を防勢へと転換した。

新府城北方の長塁

武田勝頼の未完の居城として知られる新府城の北方約二キロ、現在のJR中央本線穴山駅の近くに、台地を横断する長塁の遺構が断続的に残されている。

延長一・六キロにおよぶこの長塁は、かつては新府城の惣構と考えられてきた。しかし、新府城から長塁までの広大な空間に、勝頼が城下町を計画した痕跡は確認できない。また、甲斐における技巧的な城郭の多くは、天正壬午の乱、すなわち天正十年（一五八二）に徳川家康と北条氏直との間で戦われた、武田遺領争奪戦に伴うことがわかっている。

こうした理由から近年では、この長塁は徳川軍による野戦築城とする説が有力となっている。本稿ではこの遺構を「能見長塁」と仮称し、築城の背景をさぐってみたい。

氏直の分進合撃作戦

天正十年三月、武田勝頼を滅ぼした織田信長は、甲斐・信濃・駿河・西上野にわたる広大な武田領を併呑した。ところが直後の六月、本能寺の変によって織田帝国は瓦解し、旧武田領は無政府状態に陥った。これを好機とみたのが、隣国の北条氏直と徳川家康である。

大軍を率いて出撃した氏直は、織田家の先兵として厩橋にあった滝川一益の軍を潰走させて、上野から信濃に侵攻。佐久盆地で旋回すると、同地方の領主層を糾合しながら南下して、甲斐に迫る。併行して、北条氏光・氏勝らを中心とした有力な別働隊が、相甲国境から郡内地方を制圧し、御坂峠に進出して甲府盆地をうかがった。

一方、決死の伊賀越えで上方から生還した家康も、ただちに軍を発して駿河から甲斐へと入った。事実上、織田家の一部将であったこれまでとは違って、家康は今や、自己の力量のみによって戦略を決し、外交を駆使しなければならない立場にあった。

一般には、甲斐の土豪層（武田氏旧臣）を多く掌握したことによって、家康が優位を得たように言われているが、ことはそう単純ではない。

たしかに家康は、国中の要衝を確保し、土豪らから誓紙を集めて、安堵状を発給している。しかし、軍事的に敗北すれば、そんなものは一夜にして紙屑と化す。

結果として乱を生き延びた土豪たちは、あとから口を揃えて「当家は、いち早く家康公に御味方申し上げてより二心なく…」と主張したであろうが、現実の戦況はどう見ても、徳川方に不利であった。後北条軍が数で圧倒していた上に、国中に入った家康は、氏直が構えるヤットコの中に、進んで首を突っ込む形となっていたのである。

家康は、本来なら国中の中心である古府中に本陣を据え、若神子に進出した氏直勢と御坂峠の双方に向けて、前衛を置くことで、南北の敵に対応可能な柔軟な配置としたいところであったろう。

だが、そうした配置をとるだけの戦力的余裕は、当時の徳川軍にはない。家康は、廃墟となっていた新府城に本陣をおき、若神子の後北条軍主力とじかに正対して、不本意な決戦に備えざるを得なかった。



北側からみた能見山（伝・能見城）。標高590.4mのこの高地は、能見長塁の中核として使用された。赤いラインが長塁の位置。

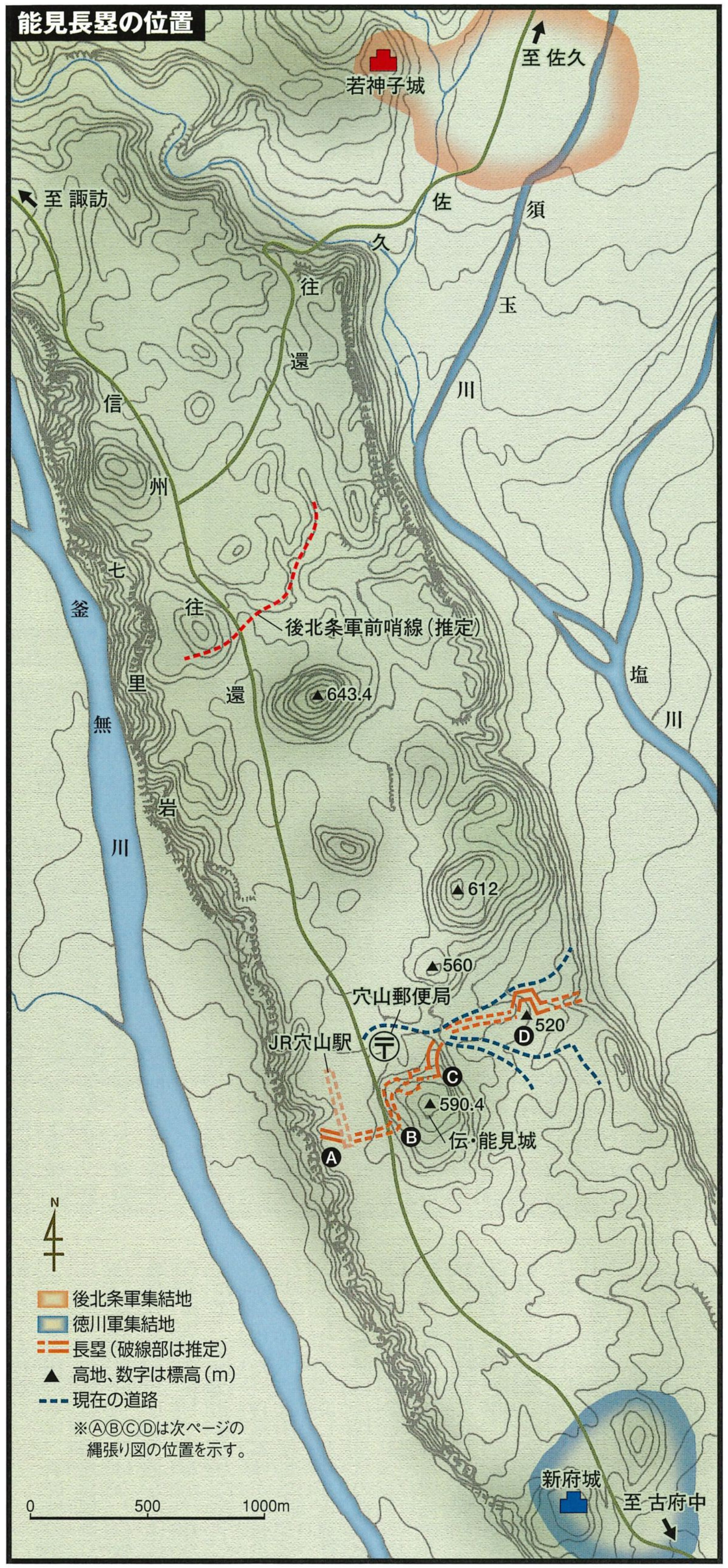
家康苦衷の野戦築城

万里の長城や元寇防塁を引き合いに出すまでもなく、長塁は古今洋の東西を問わず、普遍的に存在する防御構造物であるが、かといって全ての戦場に長塁が出現するわけでもない。では家康は、なぜここで長塁を必要としたのであろうか。

まず、人の出入りを管制することで、物資や情報の流出を阻止するとともに、間者の侵入や兵の投降を予防できる。

長陣ともなると、兵たちは食料や薪等の調達のために、陣外に出ることが多くなるが、そこで敵の待ち伏せにあったり、捕らえられたりすることも珍しくない。そうした接触から不期遭遇戦が起き、なし崩し的に無統制な戦闘に発展すれば最悪である。戦力の不用意な消耗を防ぐためにも、兵の行動を物理的に制限する施設が必要だった。

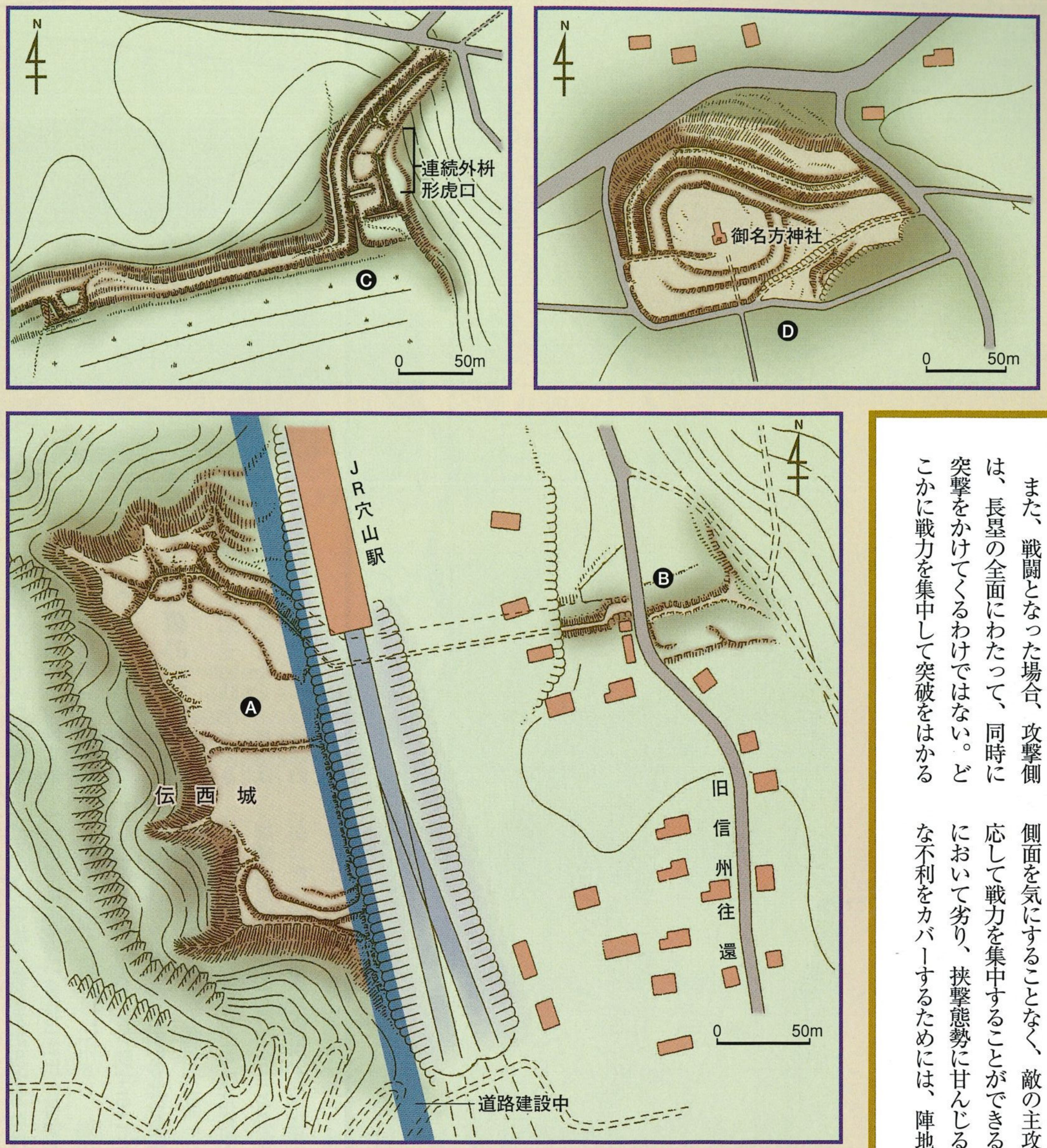
この場合、防御側は塁線に沿って兵を並べておく必要などない。要所に警戒の兵を置き、歩哨を適宜巡回させておけば、部隊は後方の陣所で、安全に宿営できるのである。何より敵の奇襲を防ぐ上で、長塁は非



能見長塁は、七里岩の台地上、新府城の北約2kmに位置する。この場所は、前方の560高地と612高地から長塁内部が見透かされてしまうが、能見山が信州往還を直接扼し、かつ長塁右翼前面は谷状の地形となっており、防御に適した場所である。

能見長塁縄張り図

作図：西股総生（2001年4月22日）



現在残る能見長塁の遺構は図の場所のみである。また建設中の道路により伝・西城の東端は消滅した。Ⓑ地点は食い違い、または枡形虎口となっていたと思われる。※ⒶⒷⒸⒹは前ページの地図に対応している。

常に有効であった。

また、戦闘となった場合、攻撃側は、長塁の全面にわたって、同時に突撃をかけてくるわけではない。どこかに戦力を集中して突破をはかるのが普通である。長塁があれば、防御側は側面を気にすることなく、敵の主攻軸に対応して戦力を集中することができる。戦力において劣り、挟撃態勢に甘んじる戦略的な不利をカバーするためには、陣地構築に頼らざるを得ない。

こうして徳川軍は、新府城の本陣から北に二キロの位置に、台地両側から谷の切れ込む地形を見出し、なけなしの戦力で前哨線を引くこととした。北方には長塁を見下ろす高地が点在しているが、兵力差を考慮すれば、これ以上敵主力に近づくわけにはいかなかった。自軍本陣から長塁まで遮るものがなく、主力が迅速に駆けつけられることをもって、よしとせざるを得ない。

長塁の要所には堡塁状の曲輪を設け、虎口には厳重な防備を施した。これは、奇襲や威力偵察で陣外に出る場合を考慮したのである。出撃した兵が、追撃を受けながら退却してくる際に、敵兵が機に乗じて突入すれば、薄い前哨線などたちまち決壊してしまう。こうした「付け入り」を防ぎ、兵の収容には確実を期さなければならない。

とくに、長塁の中心となる能見山から北に下る尾根には、外枡形（そとますがた）を重ねた特徴的な虎口が設けられた（縄張り図Ⓒ）。これは、織豊系城郭で発展する連続外枡形虎口と明らかに同じ形態である。織田軍団の一翼を担って各地を転戦する中で、徳川軍の将兵もまた、野戦築城のノウハウを体得していたのであろう。

長塁が分けたもの

氏直には、決戦を焦る必要などなかった。若神子の自軍主力と、御坂峠の別働隊というヤットコによって締め上げれば、相手方が折れてくるのは時間の問題である。

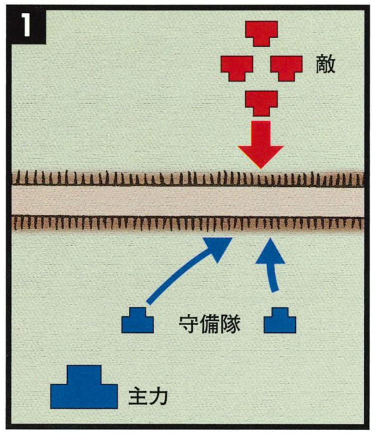


伝・西城北面の切岸。現況で3m以上の高さがある。

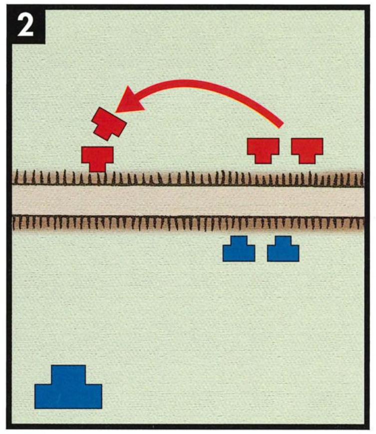


➡御名方神社（Ⓓ地点）北面に残る空堀。さらに上部にも土塁が存在し、他の遺構と合わせて考えると長塁は、二重の土塁ラインを持っていたと推定できる。

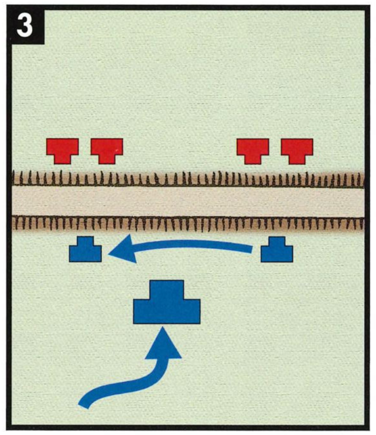
長塁の戦術的価値



敵の接近を偵知したら、待機中の守備隊は迎撃態勢をとる。



突破不可能とみた攻撃軍の一部が、新たな突破地点を作ろうと、移動する。



移動した攻撃軍が、長塁に阻まれている間に守備隊もそれにあわせてシフトする。この間、防御側主力が駆けつける。

その他長塁は、防御側の不用意な突出を防ぎ、無用な戦力の消耗を防ぐという効果がある。なお、3が繰り返されると（延翼運動という）、第1次大戦の西部戦線のように戦線が延々と延びるというような状況となるが、能見長塁では両翼が崖となっており、防御正面の幅が最初から限定されている。

ところが、八月十二日に御坂峠を下った後北条軍別働隊が、黒駒で徳川軍の急襲をうけ惨敗する。この敗北によって、氏直は作戦的に手詰まりとなったが、さりとて家康が、戦局を打開できる決定的ファクターを手に入れたわけでもなかった。

こうして戦局が膠着を続けるなか、信濃情勢の変化によって、氏直の後方連絡線は次第に不安定なものとなってゆき、かたや家康も、信長の衣鉢をめぐる上方（かみがた）の情勢が緊迫するなかで、これ以上の対陣をつづけることは困難になりつつあった。

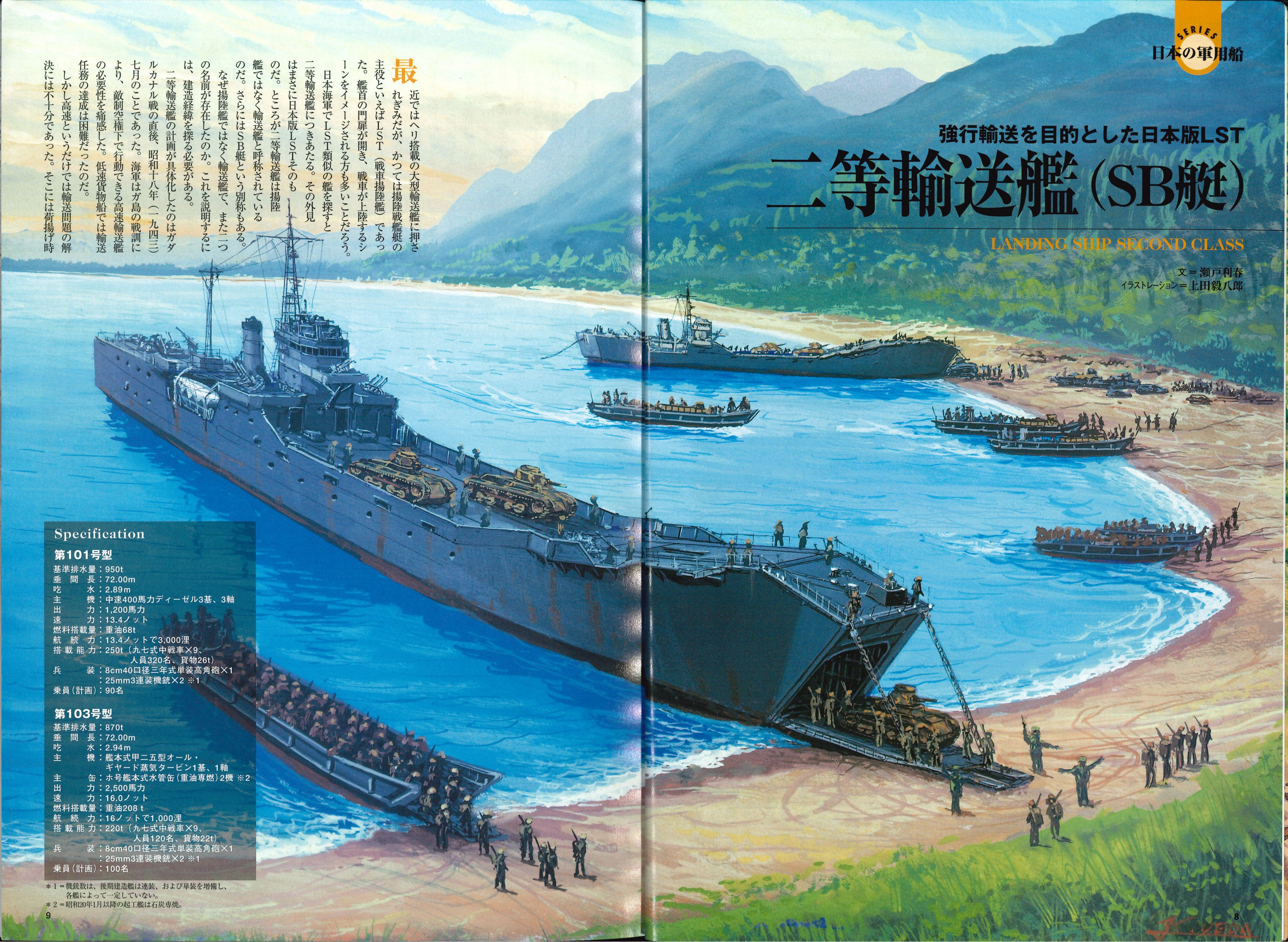
結局、氏直が上野を、家康が甲斐・信濃をそれぞれ切り取り次第とすることで、十月には講和が成立し、担保として家康の娘である督姫が氏直に嫁すこととなった。

家康は新たに広大な版図を得たが、これは氏直にとっても、それほど悪い決着ではなかった。上野領有は積年の宿願であったし、家康との講和で西部戦線が安定すれば、北関東への侵攻に全力を傾注できるからである。事実、後北条軍の北関東侵攻はこの後激化し、宇都宮・結城氏らは、滅亡の瀬戸際まで追い込まれることになる。

両軍はそれぞれの帰途につき、能見の長塁は文字通り無用の長物となった。このわずか八年後に、家康が氏直の領国に進駐し、一方が天下人への道を歩み、一方が敗残の余生を送ることなど、知るよしもない。

この時、二人の目に映っていたのは、ただ荒廃した甲斐の山野と、それを埋め尽くすおびただしい数の軍兵でしかなかった。

〈参考文献〉『日本城郭大系』第8巻（新人物往来社1980）／韮崎市教育委員会編『新府城と武田勝頼』（新人物往来社2001）／山梨県考古学協会・シンポジウム資料集『武田氏系城郭研究の最前線』（2001）／福田誠「武田遺領争奪戦」『歴史群像N0.55』（学習研究社2002）／西股総生「縄張に見る戦国期城郭の多様性」第22回全国城郭研究者セミナー資料『陣城・臨時築城をめぐって』（2005）



強行輸送を目的とした日本版LST

二等輸送艦（SB艇）

LANDING SHIP SECOND CLASS

文＝瀬戸利春
イラストレーション＝上田毅八郎

最近ではヘリ搭載の大型輸送艦に押されぎみだが、かつては揚陸戦艦艇の主役といえばLST（戦車揚陸艦）であった。艦首の門扉が開き、戦車が上陸するシーンをイメージされる方も多いことだろう。

日本海軍でLST類似の艦を探すと二等輸送艦につきあたる。その外見はまさに日本版LSTそのものだ。ところが二等輸送艦は揚陸艦ではなく輸送艦と呼称されているのだ。さらにはSB艇という別称もある。

なぜ揚陸艦ではなく輸送艦で、また二つの名前が存在したのか。これを説明するには、建造経緯を探る必要がある。

二等輸送艦の計画が具体化したのはガダルカナル戦の直後、昭和十八年（一九四三）七月のことであった。海軍はガ島の戦訓により、敵制空権下で行動できる高速輸送艦の必要性を痛感した。低速貨物船では輸送任務の達成は困難だったのだ。

しかし高速というだけでは輸送問題の解決には不十分であった。そこには荷揚げ時

Specification

第101号型

基準排水量	950t
垂間長	72.00m
吃水	2.89m
主機	中速400馬力ディーゼル3基、3軸
出力	1,200馬力
速力	13.4ノット
燃料搭載量	重油68t
航続力	13.4ノットで3,000浬
搭載能力	250t（九七式中戦車×9、人員320名、貨物26t）
兵装	8cm40口径三年式単装高角砲×1
	25mm3連装機銃×2 ※1
乗員（計画）	90名

第103号型

基準排水量	870t
垂間長	72.00m
吃水	2.94m
主機	艦本式甲二五型オール・ギヤード蒸気タービン1基、1軸
主缶	ホ号艦本式水管缶（重油専燃）2機 ※2
出力	2,500馬力
速力	16.0ノット
燃料搭載量	重油208 t
航続力	16ノットで1,000浬
搭載能力	220t（九七式中戦車×9、人員120名、貨物22t）
兵装	8cm40口径三年式単装高角砲×1
	25mm3連装機銃×2 ※1
乗員（計画）	100名

＊1＝機銃数は、後期建造艦は連装、および単装を増備し、各艦によって一定していない。
＊2＝昭和20年1月以降の起工艦は石炭専焼。

間というネックもあったのである。敵機のいない夜間に高速で輸送地点まで到達し得ても、荷揚げが天明後になると空襲に曝され、努力は無駄になってしまうのだ。

ガ島輸送では、輸送船を海岸に擱座させて沈没を免れようと試みたこともあったが、結局、激しい空襲下では荷揚げができず、物資や機材は灰燼に帰した。問題を解決するには夜間の短時間で荷揚げを終える手立てを必要とした。

その方策としてLSTのような構造が選択されたのである。実際、計画に際して米軍のLSTも参考とされたようだ。海軍は二等輸送艦を戦車やトラック、それに戦訓で必要性が判明した飛行場設営用機材（ブルドーザーやスクレーパー）などの輸送に使うことを予定した。

これらの車両類を一般の貨物船で運ぶとなると、デリック・クレーンによって一台ずつ船倉から上げ下ろしをしなければならないが、LSTならば直接海岸に乗り上げて、自走して上陸できる。またバラ積み貨物もあらかじめトラックに積載しておけば、トラックごと簡単に下ろすことができる。このような荷揚げ方式をRoRo方式（ロールオン・ロールオフ）と呼び、現在使用されている自動車運搬船のように戦後急速に発達した。

太平洋戦域では港湾でさえクレーン等の荷役設備が貧弱なので、この方式は大いに価値があった。日本海軍は戦訓によって、新しい荷揚げ方式を先取りしたといえる。

同じ頃、日本陸軍は上陸作戦に使う日本版LSTを保有しようと考えていた。戦局は悪化しつつあったが、なればこそ陸軍は敵上陸を許した島嶼への逆上陸による奪回を考えていた。

陸軍は既に部内名称でSS艇と呼ばれる同種船を保有しており、SS艇一五隻をもって海上機動旅団を編成することさえ計画していた。ところがSS艇は急速大量建造には不向きで、必要とされる隻数を満たすことは困難だった。

結局、陸海軍が共にLST的形態の船を造ることを計画していたことから両者は協力し、設計と建造を海軍が行い、鋼材を陸軍が提供する形で、この新型輸送艦を建造することが決定した。つまり二等輸送艦には輸送艦と揚陸艦の二つの顔があるのだ。

具体的な設計は、海軍軍令部の仕様を元に艦政本部が行い、十八年十一月には設計を終え、早くも第一艦の起工に漕ぎ着けた。軍令部の要求では二等輸送艦の要目は排水量九五〇トン、速力一六ノット、航続距離三〇〇〇浬で、兵装は八センチ高角砲1門と二五ミリ機銃とされた。この他、電探、爆雷も搭載した。

搭載能力は、中戦車一三両か人員二〇〇名となっているから、一隻で陸軍の一個中隊を輸送できることになる。

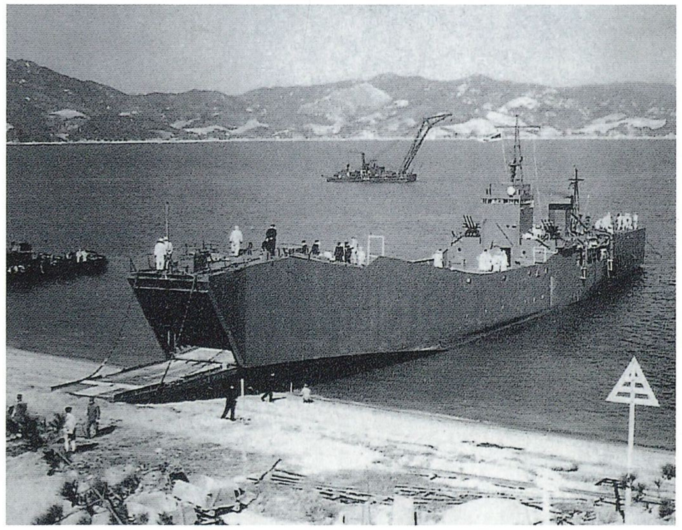
速力一六ノットは遅いように思われるが、当時の日本の優秀貨物船にやや劣る程度で、日本商船の標準からすれば高速貨物船といってよい。

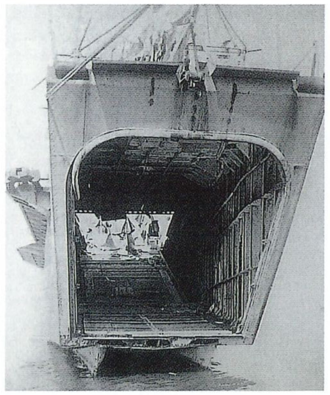
急速多量建造のため船型は徹底して直線でまとめ、艦首は道板兼用で前方に開く。建造方法は、ブロック建造方式を採用した。ブロックは前中後の三ブロックで、溶接を多用し、ブロック同士の接合は鋲接か溶接とした。この工法は成功し、二等輸送艦は、起工から竣工まで、わずか三か月で済んだのである。

機関は新規設計を行う余裕が無いために、既製の中速ディーゼル三基を採用。後にタービン搭載艦も建造された。ディーゼル搭載型は『一〇一号』型、タービン搭載型は『一〇三号』型という。有り体にいえば簡単に造れる船体に有り合わせのエンジンを載せたという訳だ。このため速力と航続力は、要求値よりも落ち、ディーゼル艦では一三・四ノットに低下。タービン艦は一六ノット出せたが航続距離は一〇〇〇浬になった。

また、艦種は二等輸送艦だが、海軍版SS艇ということでSB艇とも称された。Sは戦車、Bは海軍を表すともいわれる（当時、海軍の船はB船と呼ばれていた）。またディーゼル搭載型はSB（D）、タービン搭載型はSB（T）と分類された。

陸海軍共同で建造したので、完成艦のうち二〇隻（予定では二四隻）が陸軍に引き渡された。陸軍はこれにともない、従来のSS艇の建造を打ち切り、二等輸送艦を機動艇（揚陸任務に使用する一〇〇〇トン未満の船舶の陸軍名称）として運用した。



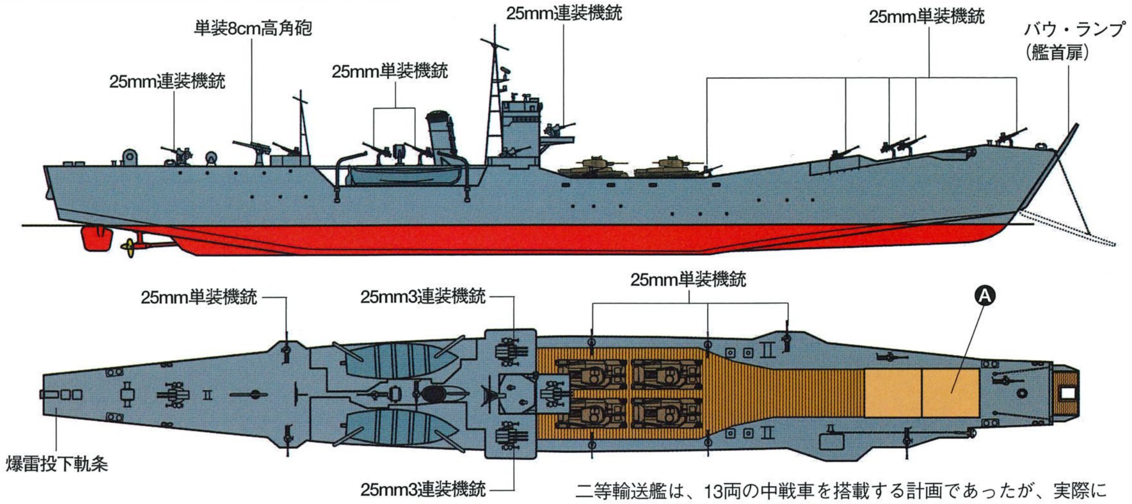


↑荒天のため門扉が脱落した第127号艦。門扉が外れたことにより船倉内部の構造がよくわかる。

←能力試験中の第149号艦。門扉を開けて揚陸準備が完了した状態である。

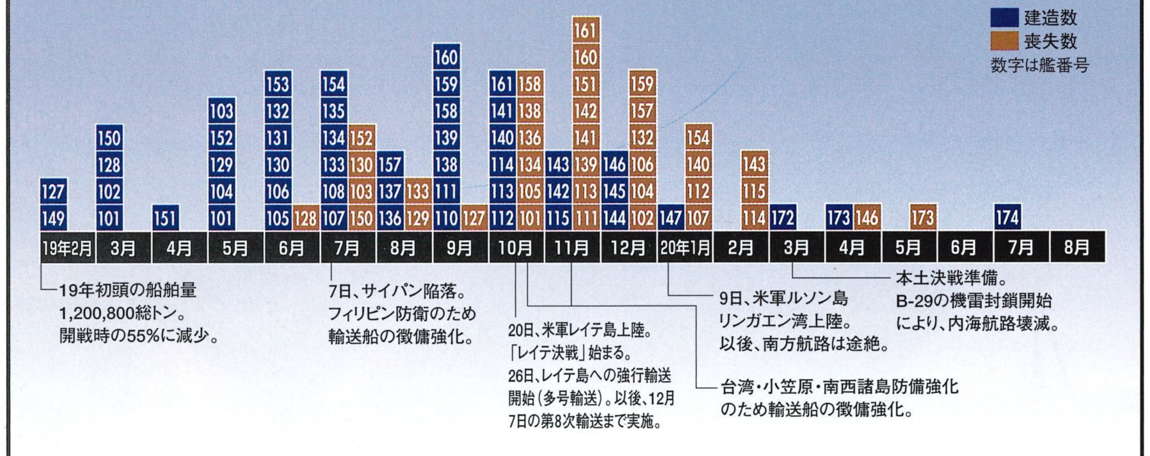
二等輸送艦（第103号型）二面図

作図：胃袋豊彦



二等輸送艦は、13両の中戦車を搭載する計画であったが、実際には4両を上甲板に、5両を庫内に搭載するのが基準であった。上甲板の車両を下ろす際は、Aの部分が下がり、バウ・ランプに接続する。

二等輸送艦の建造数と喪失数（海軍）



19年初頭から始まった二等輸送艦の建造のピークは同年6月から10月にかけてだった。そして10月からはレイテ島への強行輸送と、小笠原諸島の急速防備強化が始まる。そこで二等輸送艦は活躍するが、この期間の喪失数の多さがそれを裏付ける。フィリピン海域で失われた海軍籍の二等輸送艦は11隻になる。二等輸送艦は間に合った兵器であったのだ。なおこの他、第109、第116～126、第148、第155、第156、第162、第163、第184～188の22隻（実際には20隻）が陸軍に機動（SS）艇として移管された。

二等輸送艦は昭和十九、二十両年で一〇三隻が計画され、建造は全て海軍艦艇の建造経験のない造船所で行われた。終戦までの完成は七二隻である。二等輸送艦は計画から建造まで全てが総力戦に対応したといってよい。

完成した艦は、次々と硫黄島やフィリピン方面の輸送作戦に投入された。中には激戦さなかのレイテ島へ逆上陸を敢行して成功した例もある。当然、米軍の攻撃による被害は大きく、硫黄島方面の輸送では九隻が撃沈され、レイテ戦では船団を組んだ三隻全てが空襲により被爆炎上したこともあった。消耗の激しさは海軍四九隻の内、実に三七隻が戦没したことでわかる。完成から戦没までの期間はおおむね二か月という凄まじさであった。

それでも急速建造の小型艦としては意外にタフで（というより従来の駆逐艦が脆すぎたのだが）、往路で全滅といった例は少ない。まがりなりにも目的地に到達、揚陸任務を達成した艦は多い。

二等輸送艦は圧倒的に不利な戦局の中で、よく目的を達成した。これなくしては硫黄島やレイテ島の奮戦もあり得なかったはずだ。それだけに開戦当初から造られていなかったのが惜しまれる艦である。逆説的にいうなら、戦前の日本軍は、総力戦では輸送力が極めて重要という事を見落としていた証ともいえるだろう。

〈参考文献〉雑誌「丸」編集部編『写真日本の軍艦第13巻』（光人社）／防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書 海軍軍戦備２』（朝雲新聞社）／日本造船学会編『昭和造船史第１巻』（原書房）／牧野茂『海軍造船技術概要』



CONSOLIDATED B-24 "LIBERATOR"

より遠くへ、より多くの爆弾を

B-24重爆撃機

文＝白石 光

タイムリーだった登場の背景

一九三六年に制式化されたボーイングB17ストラトフォートレスは傑出した四発重爆撃機だったが、唯一の弱点が航続力にあった。爆弾搭載量を増やせば燃料を減らさなければならず、逆に、燃料を増やせば爆弾搭載量を減らさなければならないのはすべての爆撃機が抱えるディレンマだが、アメリカ陸軍航空軍団は、このバランスがB17よりも優れた機体を求めたのである。

事情を理解した陸軍航空軍団司令官ヘンリー"ハップ"アーノルド少将は、新型の四発重爆撃機の必要性を認めた。そして一九三九年一月にコンソリデーテッド社の技術幹部らと会合を開き、同量の爆弾を搭載した場合、既存のB17よりも遠くまで飛べる新型の四発重爆撃機が開発可能かどうかを打診した。要求性能仕様は航続距離約四八〇〇キロ、爆弾搭載量約三・五トン、最大速度約四八〇キロ、実用上昇限度約一万一〇〇〇メートルで、相応の防御火力を備えるものとされた。

実は陸軍航空軍団は、一九三八年末にコンソリデーテッド社に対してボーイング社のB17を生産する話を持ちかけたところ、同社はそれを拒否、代案として社内名称モデル31という四発重爆撃機の設計を内示しており、アーノルド少将はその事実を知っていたからこそ、この開発計画を同社に振ったともいわれている。

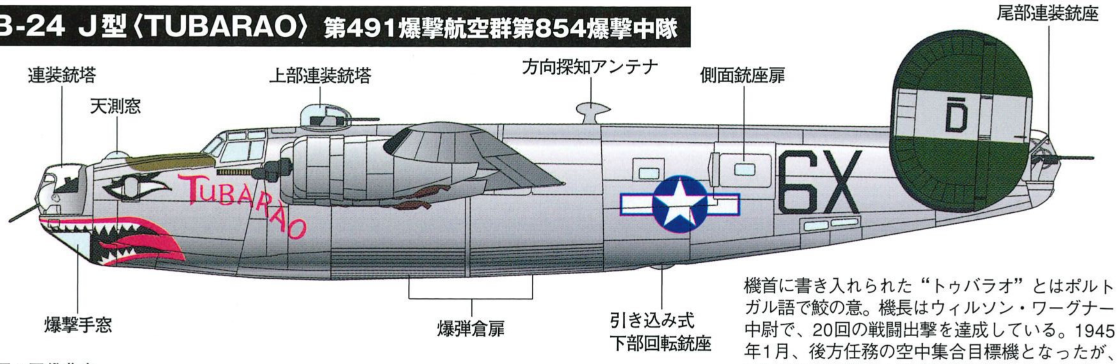
そこでコンソリデーテッド社は、モデル

イラストはルーマニア・プロエスティ油田への爆撃「タイダルウェーブ」作戦（本誌176ページ参照）で、アストロ・ロマーナ精油所を爆撃後離脱する第98爆撃航空群所属のW号機"ザ・サンドマン"（機長：ロバート・スターレンフェルス中尉）を描いたものである。
（イラストレーション＝Nicolas Trudgian）

"Operation Tidal Wave-The Ploesti Mission-" by Nicolas Trudgian. Reproduced courtesy of The Military Gallery. http://www.militarygallery.com/

CONSOLIDATED B-24 "LIBERATOR"

B-24 J型〈TUBARAO〉第491爆撃航空群第854爆撃中隊



機首に書き入れられた“トゥバラオ”とはポルトガル語で鮫の意。機長はウィルソン・ワーグナー中尉で、20回の戦闘出撃を達成している。1945年1月、後方任務の空中集合目標機となったが、同月5日に吹雪の中で離陸事故を起こして喪失。

作図：胃袋豊彦

Specification
B-24 J型

全幅	33.5m	全備重量	29,500Kg	航続距離	3,380Km（爆弾2,300kg搭載時）
全長	20.5m	エンジン	P＆WR-1830-65 空冷星型1200馬力×6	武装	‘50口径12.7mm機銃×10
全高	5.5m			爆弾	最大5,760Kg
翼面積	97.36㎡	最大速度	467km/h	乗員	10名
自重	16,550Kg	巡航速度	346km/h		
最大搭載量	12,950kg	上昇限度	8,530m		

B-17とB-24の速度、航続力、爆弾搭載量の比較

	最大速度	巡航速度	最大爆弾搭載量	最大航続距離
B-17G	510km/h	338km/h	5,440Kg	3,200Km
B-24J	467km/h	346km/h	5,760kg	3,380km

表は、B-17とB-24の後期に生産された型の比較だが、B-17とB-24の差が少なくなった時期でも、B-24が最大速度以外は全て上回っている。

31をベースにB17やダグラスXB19などの長所を盛り込んだモデル32を設計して提出したところ、約三〇か所の部分変更だけで承認され、早くも一九三九年十二月二十九日には試作機XB24が初飛行に成功した。

まだアメリカは平和だったが、この年の九月にはヨーロッパで第二次大戦が勃発しており、B24の登場はまさにタイムリーであった。そのためコンソリデーテッド社は、B24の生産専用の工場を建設するなどして傘下の三工場を動員したがそれだけでは足りず、資本のつながりがない別会社であるフォード社とノースアメリカン社の二社も、それぞれ一工場ずつを以てB24の生産に参加することとなった。

裏腹だった長所と短所

B24には三つの大きな特徴がある。

まず一つは、航続距離の増加を狙って比較的幅が狭く細長い主翼が採用されたことだ。この主翼は同社が特許を持つデイビス型という翼型で、高い揚力が得られるだけでなく、その内部に大容量の燃料タンクを収納するのにも便利な形状であった。

二つ目は、胴体の正面断面形が角を丸めた縦長の長方形であることだ。この形状は、空気抵抗という観点からは今一つだが、機内容積が広くとれるため、大量の爆弾を搭載するのみならず「何かを積む」ということ全般に向いており、やがてC87というB24の輸送機型を生み出すこととなる。

三つ目は、世界で初めて前車輪式を採用した四発機であることだ。B24以降はそれが当たり前になったが、B17やフォッケウルフFw200コンドルなど、それ以前の四発機はみな尾輪式だった。一般的に、前車輪式は尾輪式に比べて地上滑走時の操縦席からの前方視界が良好で、着陸時の接地操作も容易だといわれる。

もっとも、この三つの特徴はそれがすべて長所というわけではなく、実はそれぞれが背中合わせで短所もはらんでいた。

幅が狭いうえ、飛行中は強い揚力がかかっている主翼は、例えば高射砲弾や大口径機関砲弾などを被弾した場合、翼幅が広いB17なら折れずに飛び続けられるところが、B24の場合は折れてしまうことが多かった。そんな悲惨な状況を捉えた実戦での記録写真が多数残されている。

胴体の正面断面形のせいで、B24は一般的な外開き式爆弾倉扉ではなくローラーシャッター式の爆弾倉扉を備えていたが、爆弾倉のある胴体下面は不時着水時には真っ先に接水するため、強烈な水圧を受けてローラーシャッターがたやすく破られてしまい、爆弾倉内に激しい勢いで流れ込む海水の力で胴体が破裂することも多かった。このような事態を避けるべく、洋上飛行をするB24には、爆弾倉扉のつっかえ棒になる補強材が必ず積み込まれていた。

また、被弾や故障によって前輪が出なくなり「顎をついた」状態の不時着をすると、重心がかかっているせいで「重い」機首部分が強い力でダイレクトに地上と擦られるため、機首下面が破損するだけでなく胴体前部全体に歪みが生ずることがあり、そうなると再生は困難な作業となる。

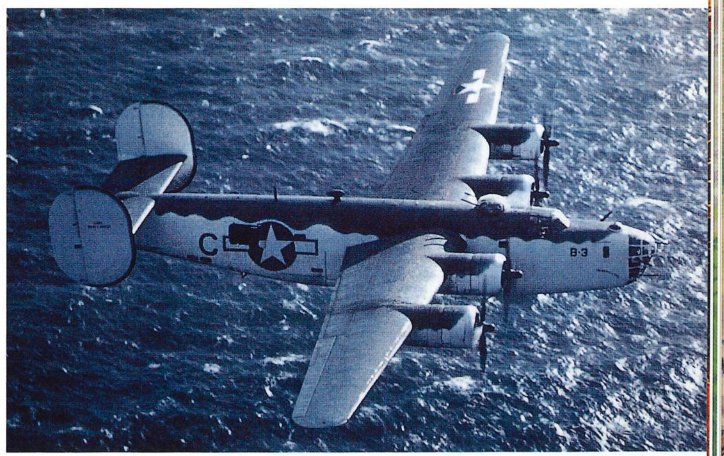
一方、尾輪式の航空機の場合は、よしんば尾輪が出なくても機尾部分は重心から外れているため「軽く」、そのおかげで破損範囲が機尾下面だけに極限されることが多かった。

B17の後塵を拝す

同時期にB17という歴史的な傑作機が同様の任務に就いていたせいで、アメリカ軍の乗員たちの間でのB24の評判は、決して芳しいものではなかった。

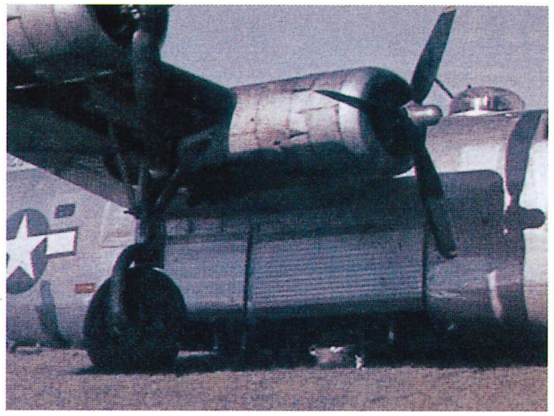
例えばB17の場合は、敵の戦闘機と空中衝突して胴体外周の三分の二が切断された状態になったり、高射砲弾の直撃で水平尾翼を片方失ったり、機首全体を吹き飛ばされたり、エンジンが二基停止したりした機体が、割と高い確率で帰還しているのに比べて、同程度の損傷を被ったB24が帰還できた例はほとんど存在しない。これがB24が空力的にB17に劣っている証拠であった。特に引き込み式の下部回転銃座を出している状態で被弾すると、飛行安定性がきわめて悪くなったという。

こういったわけで、乗員たちはリベレーターという正式な愛称には飽き足らず「空飛ぶ貨車」「空飛ぶ浴槽」「空飛ぶ棺桶」「空の市内電車」「乗員一掃機」といった縁起でもない蔑称を付けたが、B17にはこんな蔑称がひとつも付けられていないことからも、実際に「飛ばしている」人間たちがB24をどう思っていたかが推察される。



哨戒飛行中の第7艦隊航空群第103哨戒爆撃中隊所属のPB4Y-1。PB4Y-1とはB-24の海軍名称。塗装はシーサーチ・スキームと呼ばれる洋上哨戒用のもので、機体上面がダークガルグレイ、側面から下面にかけてはノンスペキュラ・インシグニアホワイトで塗られている。

また実用上の面からも、個々の戦闘機の火力が大きく、対空火網も整備されていたドイツ軍相手のヨーロッパ戦域では、「打たれ強い」B17を戦略爆撃の主力に据え、その逆の作戦環境にある太平洋戦域と、ドイツの空軍力の衰退が著しかった一九四三年以降の地中海戦域では、「足が長い」B24を主力にするという考え方がアメリカ陸軍航空軍（一九四一年六月に軍団から軍へと改編された）内部に存在したが、この意見の急先鋒だったのが、日本初空襲でその名を轟かせ、一九四四年に第8航空軍司令官に就任したジェームズ・ドゥーリトル中将であった。



不時着したB-24。シャッター式の爆弾倉扉が明確にわかる。

B24に対する別の評価

一方、イギリス空軍はB24を高く評価していた。同空軍の四発重爆撃機に対するニーズは、アブロ・ランカスターやハンドレページ・ハリファックスの例に見られるように「より多くの爆弾を、より遠くに運ぶ」という点に集約されていたが、B24はこの考え方にしっかりハマったのだ。また、海洋国家イギリスにとっての「命の綱」であるシーレーン上の随所に存在した、陸上哨戒機が到達できない「ブラックギャップ」と呼ばれる空域も、B24の長大な航続力をもってすればかなりカバーできたことも、同機への評価が高い理由のひとつであった。

実はアメリカ海軍もB24の足の長さを高く評価しており、PB4Yと命名し、洋上哨戒と艦船爆撃に重用している。特に太平洋戦域では、ともに哨戒飛行中のPB4Yと日本の二式大艇や九七式大艇が空中戦を演ずることもしばしばあったが、火力と機動性に勝るPB4Yのほうが圧倒的に有利だったようだ。

ところで、戦場からの要望によって火力や防御力を強化し、その結果、徐々に自重が増したB24の後期型を、同様に改修を重ねてきたB17の後期型と比べてみると、B24の当初のアドバンテージのほとんどが失われていることがわかる。これは、B17のほうがより発展の可能性を秘めた基礎設計を持つ機体であったことの証拠であり、B17が歴史的な傑作機と称される所以でもある。

だが、最初から爆撃機としてだけでなく輸送機や哨戒機としても転用できるキャパシティーを備えたB24は、その欠点よりも「万能の四発馬車」としての長所に対する評価のほうが高かったからこそ、最終的に約一万八五〇〇機も量産され、四発機にもかかわらず、第二次大戦中の最多生産数を誇るアメリカ製航空機となったといえそうだ。

ハリウッドの往年の名優ジェームズ・スチュワートは、第二次大戦中、第8航空軍第445爆撃航空群第703爆撃中隊長としてB24に乗って活躍したことで知られるが、そんな彼の言葉で本稿を締めくくろう。

「高度七五〇〇メートル以上の編隊爆撃だったら、B24はB17にはかなわないね。だけど、高度三六〇〇から五四〇〇メートルの間でなら、けっこういい機体だったと思うよ」

〈参考文献〉Frederick Johnsen『B24 LIBERATOR Camouflage&Markings No.17』／Larry Davis『B24 LIBERATOR in Action』／Martin Stanley『LIBERATOR』／U.S.ARMY『Men of the Eighth』

BORODINO
ボロディノ［1812］

ナポレオン戦争屈指の大激戦

ナポレオンのロシア遠征における、前半のクライマックス
史上有名なボロディノ（モスクワ河）の大会戦！
西欧連合軍とロシア軍、計27万と砲1200門が対峙した
この戦いの顛末を、ルジュンヌの名画と共に振り返る——

文＝有坂 純



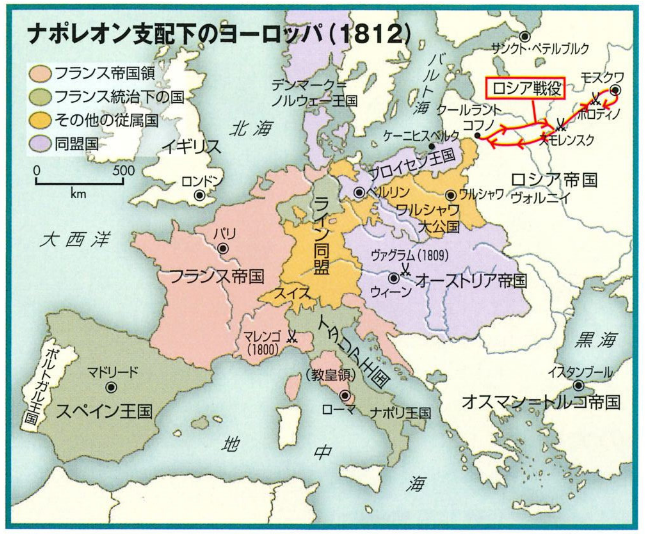
絵はルジュンヌ作『モスクワ河の会戦（1822）』。ルイ・フランソワ・ルジュンヌ男爵（1775～1848）は画家であると同時に革命戦争以来の古参の職業軍人で、ロシア戦役ではベルティエ参謀総長の幕僚を務めた。『モスクワ河』は画家が工兵将校の目で実見しスケッチを重ねた戦場のパノラマに、幾つかの叙事詩的なエピソードを配置した絵巻物風の作品である。もっとも戦闘中にダヴーの指揮所に飛び込んだ砲弾がロムーフ参謀長でなくその眼前にいた画家を引き裂いていたら、彼自身がエピソードとなる代わりにこの大作は生まれなかっただろう。画面中央奥で激戦が繰り広げられている丘の頂上が大角面堡である。手前には連行されて来るロシア軍捕虜の一団が描かれ、ソケレフ将軍からベルティエが帯剣を受け取っている。左では白馬に跨る副王ウージェーヌが、プラトフ伯爵のコサックの急襲を第84連隊の歩兵方陣で退けている（文＝有坂純 Erich Lessing/PPS）。

権力の絶頂

一八〇〇年（マレンゴ戦役）から一八〇九年（ヴァグラム戦役）に至る一連の戦争の結果として、フランスのナポレオンは欧州の列強諸国を次々に打倒し、一八一一年には彼の支配下にまだ収まっていない勢力は海洋国家であるイギリス、王家が侵略者に屈服した後も国民的なゲリラ戦で抵抗を続けるスペイン、そして同盟国であるロシアを数えるのみとなっていた。

そのロシアとフランスとの関係が急速に悪化したのは、皇帝となったナポレオンの強権的な大陸システム、つまり貿易立国であるイギリスを干上がらせるために発せられた大陸封鎖令が脆弱なロシア経済に大打撃を与えたこと、そして東欧におけるロシアの権益をナポレオンが著しく制限ないし侵害しようとしたことが主な原因である。

これらの問題は恐らく外交的な解決が可能であったが、ナポレオンは大陸システムを離脱したロシア皇帝（ツァーリ）アレクサンドル一世への一切の妥協を拒み、全欧州に動員を号令して事実上の懲罰遠征軍を準備するに至った。これが一八一二年戦役（ロシア戦役）の発端である。



1812年、ナポレオンの支配は頂点に達し、帝国領やナポレオン一族が統治する国、同盟国まで含めれば、欧州の大半を征したかに見えた。しかし兄ジョゼフを国王としたスペインではゲリラ戦の嵐が吹き荒れ、抵抗する英露両国が英雄の未来に不吉な影を投げかけた。

ニエメン河からモスクワ河へ

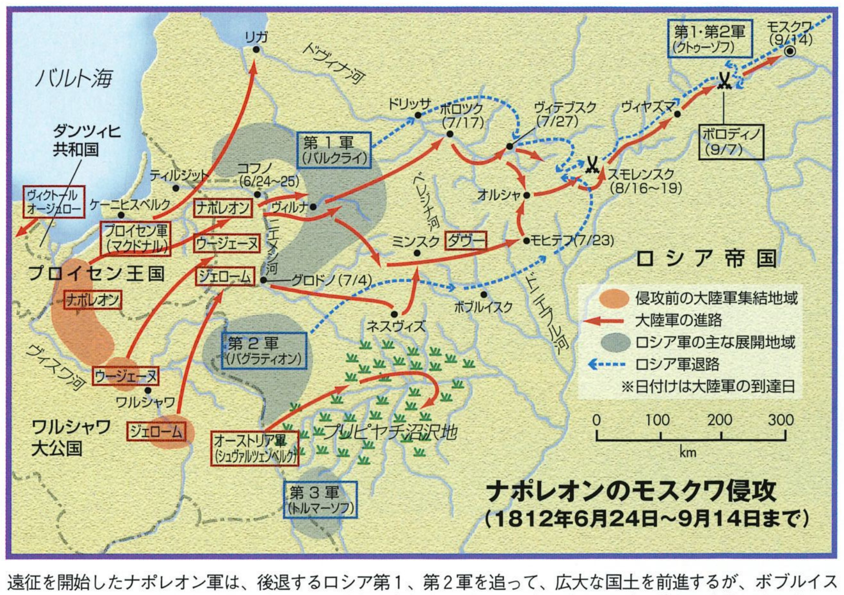
一八一二年戦役は、前工業化世界における最大規模の軍事行動だった。六月までにナポレオンがロシア国境に集めた野戦軍戦力は、チャンドラの推計によれば、本隊約二二万八〇〇〇（三個軍団、二個騎兵軍団、親衛隊）、イタリア副王ウージェーヌの支隊約八万一〇〇〇（二個軍団、一個騎兵軍団）、皇弟ジェロームの支隊約七万九〇〇〇（三個軍団、一個騎兵軍団）で、以上が中央で主攻を担任する。

加えて左翼のクールラント方面ではマクドナルのプロイセン軍約三万二〇〇〇、右翼のヴォルニイ方面ではシュヴァルツェンベルクのオーストリア軍約三万四〇〇〇、そして後方ではヴィクトールとオージュローの軍団計約八万四〇〇〇が掩護に当たる。ただし、フランス軍の歴戦の主力は依然としてスペイン・ゲリラとの戦いに釘付けとなっており、この「大陸軍（グラン・ダルメ）」の兵士のおおよそ六割はフランス人ではなかった。

未曾有の大軍を迎えるロシア軍の野戦軍は、北から南に軍務大臣バルクライ・ド・トーリの第1軍約一二万七〇〇〇、バグラティオンの第2軍約四万八〇〇〇、トルマーソフの第3軍約四万三〇〇〇。このような数的劣勢を前にしては、ロシア軍が攻勢に出るなど論外であった。

母なるロシアの広大な国土と厳しい気候が有力な味方として働く予想はあったものの、遥か後方から机上で戦争を指揮しようとするツァーリの大本営の方針、外国人*であり慎重な性格のバルクライに対する、攻撃的なバグラティオンの強い敵愾心などから、ロシア軍は緒戦に一元的で具体的な作戦指導を確立できなかった。

六月二十四日、コフノでニエメン河を渡河したナポレオンの本隊が、広く分散したバルクライとバグラティオンの間に鋭く斬り込むや、後方連絡線の遮断と各個撃破の運命を避けるべく、両将軍には遮二無二退くしかとりあえず手がなかった。



遠征を開始したナポレオン軍は、後退するロシア第1、第2軍を追って、広大な国土を前進するが、ボブルイスクとスモレンスクで各個撃破に失敗。しかし敵側の方針変更により、ボロディノの地で待望の決戦の時を迎える。

*外国人＝バルクライはスコットランド系のリヴォニア人（当時の感覚ではドイツ人）、彼と対立したバグラティオンは誇り高きグルジア貴族であった。

ナポレオンはボブルイスクでバグラティオンの包囲に失敗したばかりか、ドリッサの永久築城をあっさり放棄したバルクライをも逃がしてしまった。ヴィテブスクで陣容を建て直した皇帝は、スモレンスクでついに合流したロシア軍に決戦を挑んだが、敵はこの旧都をも自ら焼き払って捨て去り、しかもこの度は孤立したバルクライを撃破する絶好機を失った。



大陸軍の包帯所。2人の選抜胸甲騎兵に支えられる中央の若者は、大陸軍砲兵司令官ラリボワシエール将軍の次男である。瀕死の子の手を父が取り、父の副官を務める長男が皇帝から授けられたレジョン・ドヌール勲章を弟に届けんとしている。将軍は愛息を失った悲嘆から退却行で病に倒れ、ついに故国に帰らなかった。白馬の向こう側で4人の竜騎兵に運ばれているのは、突角堡の戦いで致命傷を負った第II騎兵軍団長モンブラン将軍。彼はネイ元帥の傍らで指揮中に砲弾を受けた。左端には自分の副官である死にゆく弟の腕を握る歩兵師団長モラン将軍。彼の顎を手当てしているのは外科医長ラレイ男爵である。ラレイは劣悪な当時の医療制度の改善に奮闘し、一医師としては敵兵のためにも常に最善を尽くした時代の良心であった（文＝有坂純）。

ボブルイスクとスモレンスクでの失態は、直接にはそれぞれジェロームとジュノの責任に帰せられるが、同時にそれは、ナポレオンの年齢から来る指揮力及び気力の衰えと、広い戦域において巨大な軍隊を前近代的な手段で統制することの困難さの顕れであったと言える。

スモレンスク戦後、バルクライへの世論の非難を宥めるため、ツァーリは国民的英雄である六十七歳のクトゥーゾフを総司令官に起用せざるを得なくなった。

クトゥーゾフの性格もバルクライに劣らず慎重そのものであったが、宮廷クーデタを起こされた祖父や父の運命を熟知しているアレクサンドル一世は、何が何でもこの老将に、聖都にして第二の帝都であるモスクワの前面で侵略軍との一戦を交えさせないわけにはゆかなかった。

かくして九月初旬、モスクワの西方約七〇マイル（約一一三キロ）のボロディノに陣を構えたロシア軍と、ヴィヤズマ経由で進撃するフランス軍との決戦が生起したのである。

屍山血河——ボロディノ会戦

ボロディノは、モスクワへ通じるスモレンスク新街道沿いの村である。村の東には新街道をゆるく交差してカラーチャ河が流れ、約二マイル（約三・二キロ）南には新街道とほぼ並行して旧街道が走っている。カラーチャ河の渡渉可能な小渓谷の南側は全体にゆるやかな台地で、幾つもの森林と小川、集落、農地を含む錯雑地であった。

クトゥーゾフはボロディノを中心に布陣した。右翼のバルクライはカラーチャ河を防御線として新街道を扼し、左翼のバグラティオンはボロディノからセミョーノフスカヤを経てウスーチャへとおおよそ台地の稜線沿いに展開し旧街道を扼した。手薄な左翼の防備を強化するべく、ロシア軍は伝統の野戦築城に頼り、中央の丘に土造の角面堡（有名なラエフスキ角面堡または大角面堡）、その一マイル（約一・六キロ）南に三基の突角堡を設け、さらに左翼前方のシワルディノ村付近の台上に外郭防御施設としてもう一つの角面堡を設けた。

クトゥーゾフのこの布陣は決して最善とは呼べなかった。外線の利を有する、つまり攻撃軸を自由に選べるフランス軍に対し、彼は予備をほとんど置かずに全軍を広い戦闘正面に貼り付けていた（いわゆるコルドン配備*）。また右翼側はモスクワ河に護られていたが、左翼側はがら空き同然である。後方に迂回した敵軍に対応できる予備がない場合、状況は致命的となり得る。突出しているシワルディノの角面堡は左翼の縦深を保証してくれるものではなく、果たして九月五日、戦場に到着したフランス軍の強襲を受け奪取されてしまった。

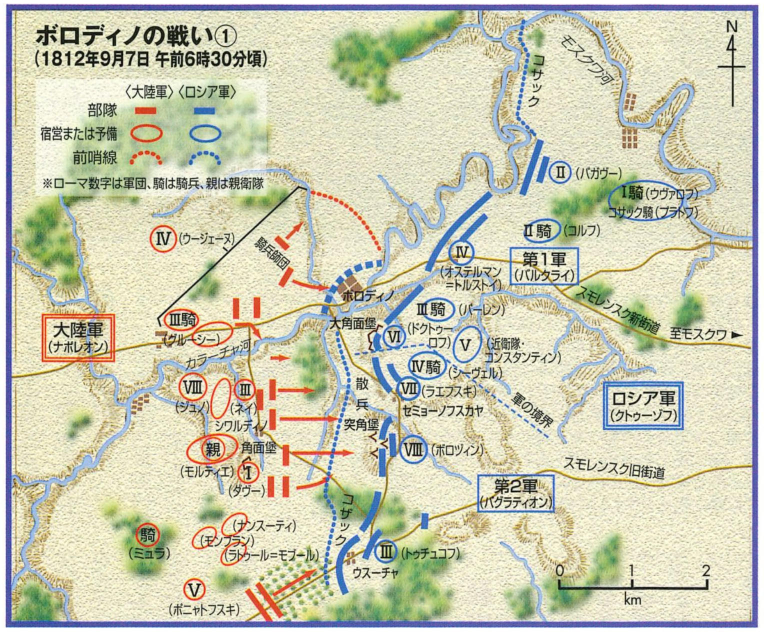
九月五日現在のフランス軍の戦力は歩兵一〇万三〇〇〇、騎兵三万一〇〇〇、砲五八七門。ロシア軍は歩兵一一万四〇〇〇（多数の民兵含む）、騎兵二万一〇〇〇（コサック含む）、砲六四〇門。

*コルドン配備＝哨兵線方式。第一線に隈なく戦力を配備する防御方式。軍の主力をこのように配備した場合、後方に予備がなく、戦闘地域外の戦力が遊兵となりやすく極めて危険である（クラウゼヴィッツ）。

シワルディノ角面堡を奪取したナポレオンは、ただちにロシア軍の布陣の弱点を見て取った。ダヴー元帥は、旧街道以南を大きく迂回してロシア軍の後背を衝くことを進言したが、ところがロシア軍を再びここで取り逃がしてしまうのを強く危惧する皇帝はあえてこの案を退けた。彼はたぶんヴァグラムの再現を欲し、代わりに戦力を集中しての敵中央と左翼への正面攻撃を準備させた。フランス軍は布陣にまる一日を費やした。

九月七日六時、砲兵の掩護の下、ウージェーヌの第Ⅳ軍団とグルーシーの第Ⅲ騎兵軍団がボロディノへ、ダヴーの第Ⅰ軍団が突角堡へ、そしてポニャトフスキの第Ⅴ軍団がウスーチャへの攻撃を開始した。ポニャトフスキは首尾よくウスーチャを奪取したものの、後方の森に拠るトゥチュコフの第Ⅲ軍団にそれ以上の前進を阻止され、ほぼ終日にわたり右翼の戦況は膠着した。

中央でもウージェーヌがボロディノを素早く占領したが、ドクトゥーロフの第Ⅵ軍団とラエフスキの第Ⅶ軍団はカラーチャ渓谷の線で激しく抵抗し、容易に進撃を許さなかった。ボロヴィンの第Ⅷ軍団が護る突角堡へのダヴーの最初の突撃は大損害を受けて撃退された。

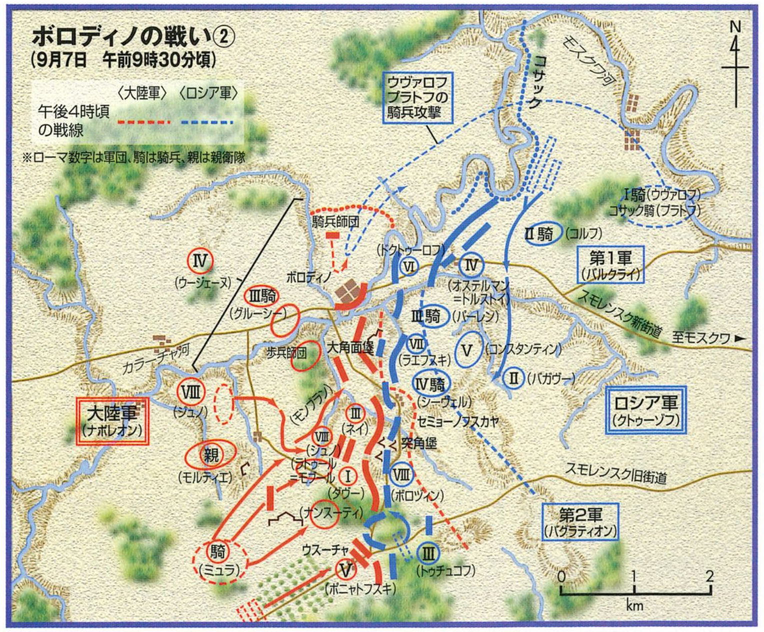


早朝に始まった大陸軍の攻撃は、右翼はウスーチャ村の線で終日膠着状態となった。また中央では、丘上や台上に配置された突角堡や大角面堡に拠るロシア軍の抵抗を受け、大きな損害を出した。

皇帝はネイの第Ⅲ軍団でダヴーを増援し、ミュラの三個騎兵軍団に彼らを支援させた。森に挟まれた狭い開豁地を進む歩兵の隊列は砲兵の恰好の標的となり、堡塁をめぐる近接戦は熾烈を極めた。散々に痛めつけられた（元帥自身も負傷した）ダヴーを助けるため、皇帝はさらに予備であるジュノの第Ⅷ軍団と若年親衛隊の一部をも投入しなければならなかった。

一方、クトゥーゾフは、遊兵と化している右翼からバガヴーの第Ⅱ軍団を急遽突角堡方面へ移動させたが、バグラティオンは致命傷を受けて倒れ、正午前にはネイは全ての突角堡を確保した。しかしロシア軍左翼は磨り減ってはいたが後方で踏み留まり、崩れる気配を見せなかった。

中央では、大角面堡に対するウージェーヌの総攻撃が始まっていた。ウヴァロフの第Ⅰ騎兵軍団とプラトフのコサック騎兵に後背を衝かれ、歩兵を伴わない彼らを撃退するのにおよそ一時間の浪費を強いられたが、改めて準備を整えた副王は、三個師団と二個騎兵軍団を北と西から大角面堡に殺到させ、四〇〇門の砲兵火力を集中した。疲れきったロシア軍の三個軍団はこれを支えられず、フランス軍は一五時までに大角面堡を確保した。



まず突角堡を占領した大陸軍は、自軍左翼へのロシア騎兵の牽制攻撃を撃退、大角面堡へ殺到した。午後３時には遂にこの堡塁も占領するが、ロシア軍はやや後退したものの依然戦線を維持していた。

戦略的敗北

皇帝の戦前の予想に反して、ロシア兵は逃げ出しも降伏もせず、驚異的な粘り強さを発揮して戦い、その戦列は健在だった。彼らにはもはや攻撃に出る力は残ってはいなかったが、それは大陸軍とて同じであった。


ジェラール師団と第Ⅱ騎兵軍団による大角面堡への総攻撃。死角ができないように直線の土塁壁を連結した角面堡（多角堡）の構造の一端が伺える。実際には画面外左からはブルシエ師団が進撃していたので、ロシア軍部隊の敗走方向は画面左ではなく向こう側ということになる。開豁地を進む密集隊形の部隊が、高所の砲兵の絶好の的になることもよく理解できる。第５胸甲騎兵連隊の先頭を白馬で疾駆するのはモンブランから軍団の指揮を承けた皇帝の副官コレンクール将軍。この直後、角面堡の後方に突破して敵の掩護部隊を突き崩す戦闘の中で、彼は銃弾を胸に受けて倒れる。その死は兄である馬事総監コレンクールの回想録を通じてよく知られている。この会戦では大陸軍の将官12名が落命し、ネイとダヴーを含む45名以上が負傷した（文＝有坂純）。

皇帝は手許に切り札である老親衛隊を残していたが、彼は敵地の奥深くで最後の予備戦力を失うリスクを冒すつもりはなかった。

この決心はしばしば批判されているが、たとえ老親衛隊が投入されていたとしても、ロシア軍を総崩れへ追い込めていた公算は高くなかっただろう。この日、悪性の風邪をひいた皇帝の体力気力が最低の状態であった事実も、消耗戦に終始した会戦の経緯には直接影響しなかった。

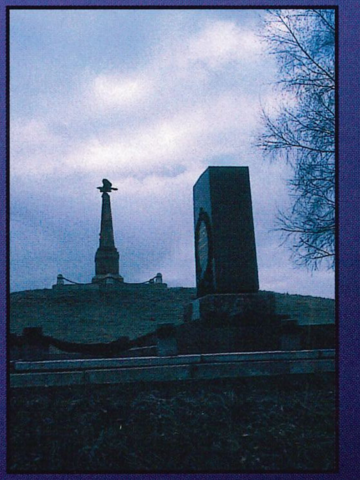
夜陰に乗じてクトゥーゾフは軍の規律と士気を保ったまま離脱し、ボロディノの会戦、フランス側呼称でモスクワ河の会戦は終わった。フランス軍の損害は約三万で、一二名の将官が戦死。ロシア軍は勇将バグラティオンを含む四万四〇〇〇以上を失った。放棄されたモスクワに皇帝が入城したのは、九月十四日であった。

ナポレオンの生涯における一貫した戦略方針は、都市や領土の占領ではなく、敵の野戦軍を殲滅し、もって敵国政府の意志を挫くことにあった。このやり方はスペインで破綻しつつあったが、皇帝は修正する必要を認めなかった。クレフェルトが実証研究で明らかにしたように、皇帝と彼の主計総監ダリューは入念な兵站計画を練って事に臨み、酷暑下の行軍、馬糧の不備による馬匹の喪失、ロシア軍と人民の焦土戦などは、それだけでは後に言われているほどの致命傷となったわけではない。

しかしロシア帝国の無限とさえ思える縦深が、ロシア軍指導部の総じて退嬰的な方針を有利に働かせ、（冬営地に使えたかも知れない）ヴィテブスク、スモレンスクを越えて決戦を希求するナポレオンの戦略を空回りさせ、さらに復路でのパルチザン戦の威力が加わって、大陸軍を出血多量による衰弱へ追い込んだのである。

その意味で、ボロディノは皇帝の決定的な戦略的敗北であった。クトゥーゾフの軍が比較的短期間で戦闘の深手を癒したのに対し、敵地深くにある大陸軍はその手段を持たなかった。

そして戦力の優劣の逆転は、決戦による戦争の勝利を実現不可能としたのである。


現在、ボロディノの古戦場には多数の記念碑が建つが、写真奥はロシア軍総司令官クトゥーゾフの指揮所跡の碑。手前は第2次大戦の記念碑（モスクワへ侵攻するドイツ軍もここでソ連軍と戦った）。現地には会戦時の軍旗や大砲を展示する博物館があるが、モスクワ市内にある、会戦を描いたパノラマ画も必見。

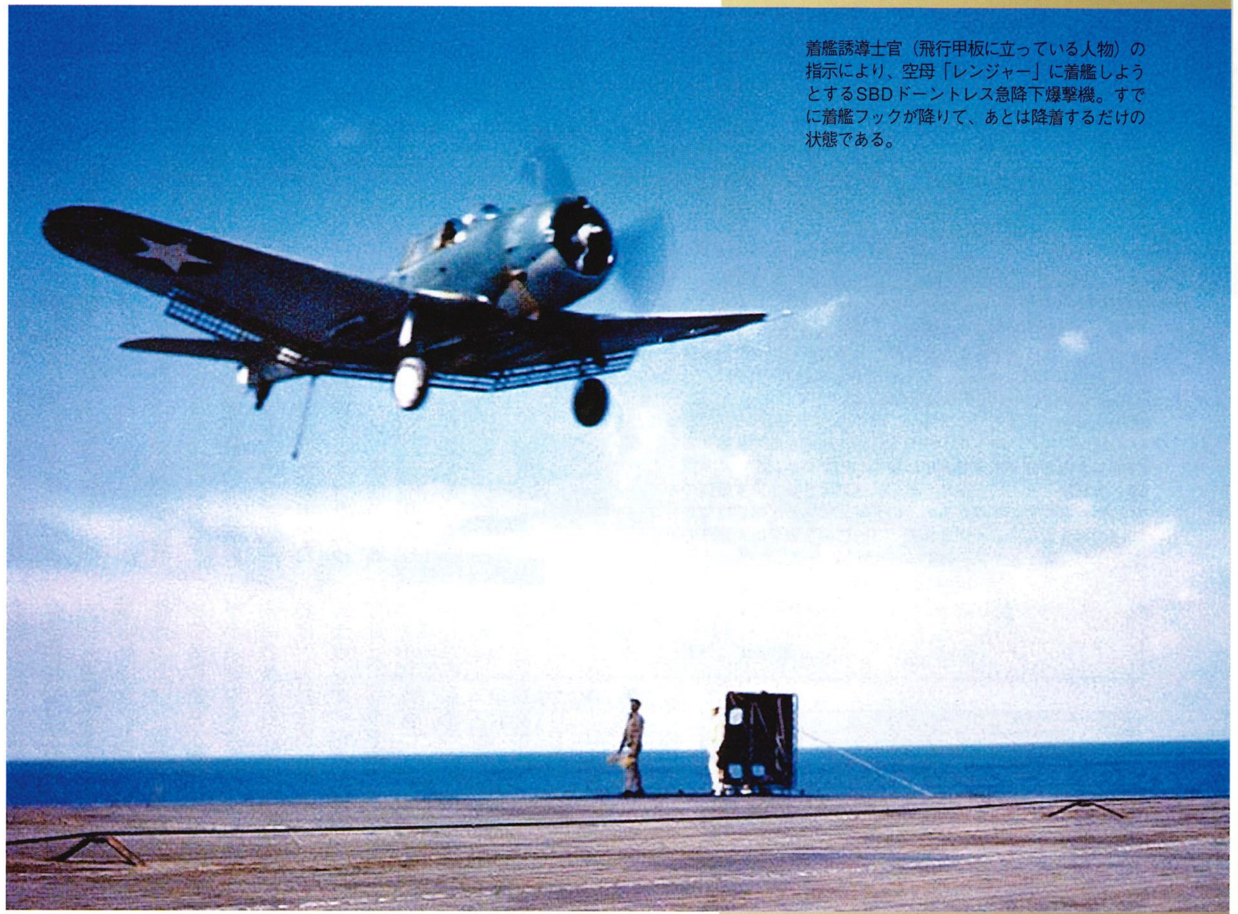
〈図版参考〉帝国書院＝ウェスターマン社『世界歴史地図』（帝国書院）／David G.Chandler『Atlas of Military Strategy』(arms and armour)／Vincent J.Esposito and John R.Elting『A Military History and Atlas of the Napoleonic Wars』(Greenhill Books)

〈参考文献〉Christopher Duffy『Borodino and the War of 1812』（New York）／D.G.Chandler『The Campaign of Napoleon』(New York)／N.ニコルソン、白須英子訳『ナポレオン一八一二年』（中公文庫）／両角良彦『一八一二年の雪』（朝日新聞社）／コレンクール、小宮正弘訳『ナポレオン ロシア大遠征軍潰走の記』（時事通信社）／M.v.クレフェルト、佐藤佐三郎『補給戦』(原書房 ※注釈省略のため原書を薦める）／トルストイ、米川正夫訳『戦争と平和 第五〜七巻』（岩波文庫）

「タフな米空母」を支えた艦上作業

激戦の太平洋戦線を駆けた米空母、その活躍は乗組員の合理的な艦上作業に支えられていた。

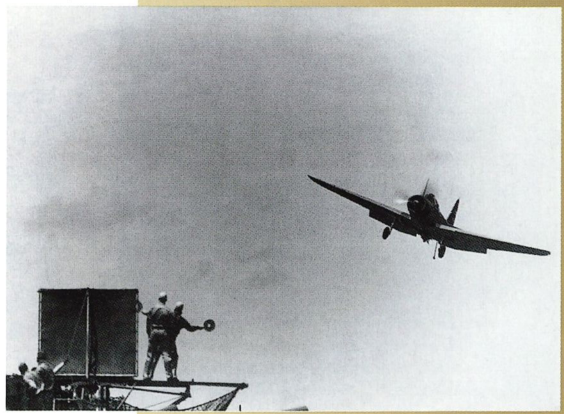
文＝編集部



着艦誘導士官（飛行甲板に立っている人物）の指示により、空母「レンジャー」に着艦しようとするSBDドーントレス急降下爆撃機。すでに着艦フックが降りて、あとは降着するだけの状態である。



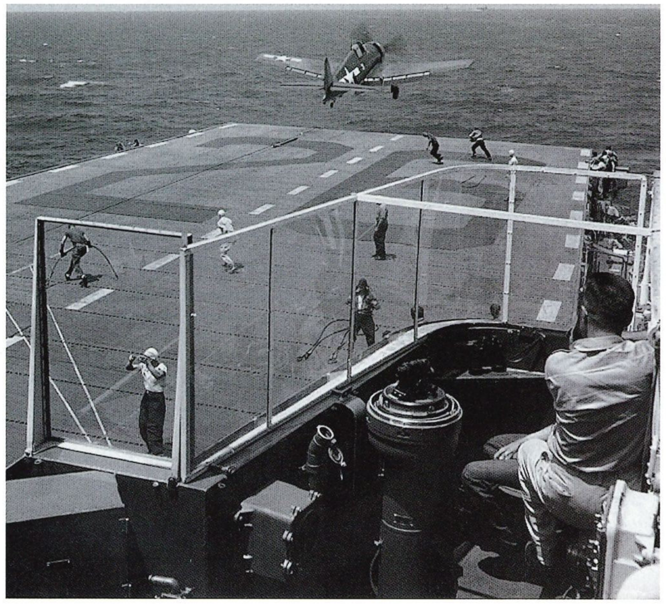
⬆パドルを手に誘導指示をしているのは空母「ワスプ」の着艦誘導士官の大尉で、その後ろに立っているのが副官の少尉。パドルはアルミのフレームに目立ちやすいように赤や黄色の布が張られていた。



⬆空母「エンタープライズ」へ着艦体勢に入ったTBDデバステーター艦上攻撃機だが、左翼が下がりすぎている。それを、画面左手前のキャットウォークに立っている着艦誘導士官が修正するよう指示している。



空母「ランドルフ」の左舷カタパルトに駐機して発艦を待つF6Fヘルキャット戦闘機。パイロットはまだ搭乗していない。カタパルトには専門の操作員が付き、発艦士官の合図を受けて操作を行った。





⬆1944年11月、マニラ湾への攻撃のため、発艦準備で空母「タイコンデロガ」の甲板に整然と並ぶF6F-5N（右翼にレーダーを装備した夜間戦闘機）。発艦士官が各機ごとに付いて指示を出している。

⬅1944年6月、マリアナ沖海戦での空母「モンテレイ」。甲板にいる二人の白いシャツ姿の人物が発艦士官。右手前の風防で囲まれたカタパルト艦橋では、士官が発艦するF6Fを見守っている。彼の左手の装置は航空用の方位盤（羅針儀）である。

艦載機の発着艦を始めとして、空母における作業は、戦艦や巡洋艦などとは違った独特な光景が見られる。その一端を、米空母の写真を例に紹介しよう。

空母にとって最も主要な作業は、いうまでもなく艦載機の発着艦である。まず発艦であるが、米空母は独自のシステムであるカタパルト（油圧式）を採用していた。この空母用カタパルトは日本海軍も研究していたが、ついに実用化には至らなかった。

カタパルトは通常、艦首の両舷もしくは左舷のみに設置されている。飛行甲板で行われる発艦は、このカタパルトを使えば搭載機の離陸距離を大幅に縮められるため、発艦と並行して行う甲板作業のスペースを十分にとれた。

発艦より難しいのが着艦だ。飛行甲板は飛行場に比べると非常に狭い。上空の航空機から見ると、大型の正規空母でもかなり小さいのだ。そのため、いかに艦載機を正しく誘導し着艦させるかが重要だった。

この誘導方法については、日米でまったく違った方法が採用されていた。米空母では、パドルを両手に持った着艦誘導士官が、キャットウォークと呼ばれたお立ち台で合図をしながら着艦する艦載機を誘導した。着艦誘導には高い技量が求められたため、パイロットの資格を持つ尉官クラスが「着艦誘導士官」となり、着艦に関する全責任を負った。通常はもう一人の副官と組んで任務に当たっている。

これに対して、日本の空母には艦尾の左



1944年10月30日、フィリピン作戦において神風特攻機の体当たりで炎上する空母「ベロー・ウッド」。消火班の作業（延焼を防ぐため甲板にも放水している）の傍らで、甲板員がTBM（GM生産機）アヴェンジャー雷撃機を避難させている。海上右奥で炎上しているのは空母「フランクリン」。

舷に着艦指導灯が取り付けられていた。パイロットはこの着艦指導灯を見て、正しい進入角度と機体の水平を保ちながら着艦するという優れた装置だった。システムとしては米軍より先んじていたといえる着艦指導灯だが、パイロットの技量に多くを依存するため、熟練パイロットが多かった大戦初期はよかったが、彼らが戦死し未熟なパイロットが中心になると、着艦はより難しくなった。一方、米空母では着艦誘導士官とパイロットが双方で状況を確認しながら着艦するため、どちらかがミスをしても修正が容易であった。たとえパイロットが未熟でも正しく誘導することができたし、負傷していても着艦誘導士官が頼りになった。

　発着艦とともに空母にとって重要な作業がダメージ・コントロールである。飛行甲板に被弾し穴が開けば発着艦が出来なくなり、空母として機能を失うが、それのみならず、飛行甲板には爆弾や魚雷を抱えた艦載機が搭載されているために、一度被弾すると誘爆を起こしやすい。そのため、被害を最小限に留め、速やかに甲板を復旧させるダメージ・コントロールが、海戦の勝敗を左右したといわれる。

　このダメージ・コントロールにも日米に差があった。その要因の一つは空母の構造の違いにある。たとえば爆弾が飛行甲板を貫通して爆発した場合、格納庫で火災が広がるのを防ぐために、艦載機や爆弾・魚雷をただちに海中へ投棄しなければならない。日本の空母では、格納庫内のものを投棄するには、基本的にエレベーターでいったん飛行甲板まで上げなければ外へ出せなかったので、密閉された格納庫で火災が発生し消火に失敗すれば、手の施しようがなかった。一方、大部分の米空母は、甲板だけでなく舷側（艦の外側）にもエレベーターがあった。格納庫にはエレベーター以外にも扉がいくつかあり、緊急時にはそこから人力や小型ブルドーザーを使って機体や可燃物を一気に海中へ投棄していた。

　米空母はタフでなかなか沈みにくいといわれるが、その例としてミッドウェー海戦での「ヨークタウン」が挙げられる。ミッドウェー海戦のひと月前に起こった珊瑚海海戦で深刻な損傷を受けた「ヨークタウン」は、真珠湾で三日間という短時間の応急修理の後に再出航したが、その後も修理工を乗せたまま作業を続けて戦線に復帰している。ミッドウェー海戦では日本軍の攻撃で一度は航行不能に陥るも二時間で復旧、二度目の攻撃で大破し、修理のため真珠湾へ回航する途中で、伊一六八の雷撃のため沈没した。この海戦で、日本空母が一度の攻撃で受けた被害の拡大を食い止められずに相次いで沈没したのとは対照的だ。

　こうした違いの背景には、戦いに対する認識の差があった。攻撃に重きを置いた日本軍では、防御の弱い空母などはいったん被害を受けると非常にもろかった。しかし、米空母は攻撃力だけでなく、防御においても十分な対処をしていたために、空母同士の戦いに勝ち抜けたのである。



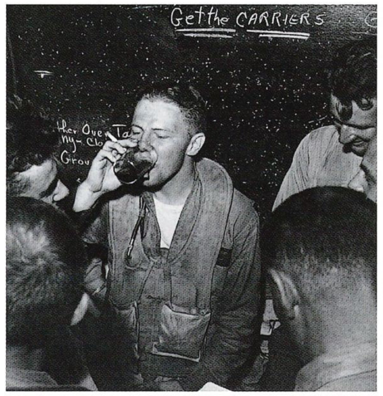


⬆ミッドウェー海戦で日本軍機の攻撃で大破した「ヨークタウン」では沈没を避けるため復旧作業が続けられた。写真は、沈みかけて傾斜した船体を復元させるために、格納庫の扉を開けて甲板員がTBD—1デバステーター雷撃機を海中に投棄しているところ。

⬅ミッドウェー海戦での空母「ヨークタウン」。日本軍機の第1次攻撃で受けた爆弾で甲板に開いた穴は、木材と鉄板でたちどころに応急修理された。画面中央奥には爆弾で犠牲になった乗組員のうち2名の死体が横たわっている。

➡空母「ランドルフ」の1等水兵が、航空士官からの指示をヘッドフォンで受けながら、格納庫や飛行甲板に配置される艦載機の模型をボード上に並べ、機種ごとの駐機プランを立てている。

⬇空母「モンテレイ」の控え室で、出撃を前にくつろぐパイロットたち。背後の黒板にはチョークで「Get the CARRIERS（空母を仕留めろ）」と書いてある。





中国の投射武器

四〇〇〇年の歴史が生んだ多様な遠戦兵器

春秋戦国、三国鼎立……悠久の大地に繰り返された幾多の戦いの中で、進化を重ねた様々な武器類——刀、槍、戟などで渡り合う前に、まずはいかに敵の力を削げるかが重要だった。ここでは、戦いの第一段階の鍵を握る、これら投射武器の数々を解説する。

文＝来村多加史

弓

弓は洋の東西を問わず、最も古典的な武器の1つで、中国では後期旧石器時代から狩猟に使われ、戦国期からは兵器として長く使用された。中国の弓は、上下対称の短弓であり、人の背丈に満たない位であったが、竹や木に動物の角・骨・筋などを挟んだ複合弓なので弾性が強く、射出力も大きかった。



弓

殷周時代の弓には、中央の弣（ゆずか）の内側に鈴音を出す弓形器が付けられていた。淵（まがり）の部分で弾性が生じる。弦には麻紐や動物の腸が使われた（イラスト＝藤井祐二）。

箭

弓で引く箭（せん＝矢）は、左手の拳先端から右頬に至る80cm以上の長さが必要である。各部は先端から鏃（やじり）、杆（やがら）、羽（やばね）、栝（やはず）と呼ぶ（イラスト＝藤井祐二）。



『太平天国軍』（南京太平天国博物館蔵。写真＝C.P.C.）。明代に火器が普及してきた後も、弓は補助的に使われ続けた。19世紀半ば、時の清朝に叛旗を翻した太平天国軍を描くこの画でも、炮の傍らで弓が使われている。

弓矢の出現

離れた獣や敵を倒す投射武器の歴史は古く、中国では早くも旧石器時代において石球が使用されていた。袋部をもつ縄に石球を込め、回転力をもって投射する「飛石索（ひせきさく）」という狩猟具があり、それは当然のことながら対人武器ともなる。

打製の石鏃（せきぞく）を装着した弓矢も旧石器時代から使用され、新石器時代には戦闘に活用されたようで、多数の石鏃が突き刺さった人骨も発見されている。

殷（いん）代になると石鏃や骨鏃に加えて青銅製の鏃（やじり）が鋳造され、鋭い切り返しがついた「双（そう）翼式（よくしき）銅鏃」が考案された。河南省安陽市の殷墟（いんきょ）遺跡（殷代後期）で痕跡が確認された矢は、直径一センチの矢柄と双翼式銅鏃を合わせたもので全長が八七センチあった。

また、河北省藁城台西（こうじょうたいせい）遺跡（殷代中期）では籐（とう）製の箙（えびら）に一〇本の矢が入れられた状態が確認されている。矢の全長は八五センチで、長さ二〇センチの矢羽が二枚つけられていた。二箇所の殷代遺跡から出土した矢の長さはほぼ同じで、その長さから　のあたりで弦を放つ作法が定着していたこともわかる。

殷代には弣（ゆづか）の内面にあてがう「弓形器」という補強用青銅器が使用され、その上下には鈴がついて音響による効果を高めていた。弦を引く右手親指を保護するキャップ型の玉製扳指（はんし）も発見されている。西周時代の弓矢は殷代のそれと変わらず、鏃も依然として双翼式銅鏃が主流であった。

弩

春秋時代に登場した弩は、投射武器の歴史を激変させた。弩は長さ50cm前後の弩臂（台木）の先端に1m前後の短い弓を横位に渡し、後部の弩機に弦をかけ矢を放つボーガンである。弩は伏せても使え、弦を張ったまま長く待機できるため、歩兵の応用範囲を広めて地位を向上させた。火縄銃の出現後、清代に至るも使用されている。



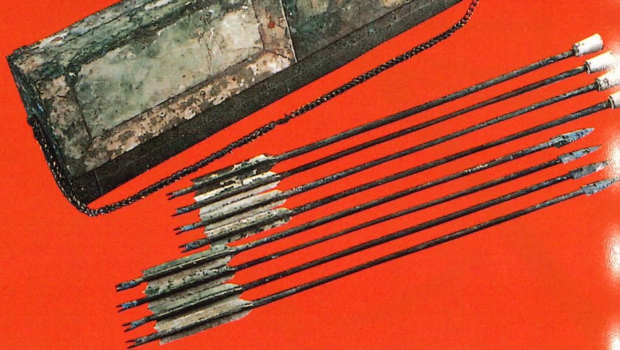
弩機

前漢代の青銅製弩機。弩機は弩の発射装置で、本体後部に内蔵されている。鉤牙（こうが）は引いた弦をかける部分、懸刀（けんとう）は引き金に相当する。それらの部品はボルトで結合され、郭（かく）という箱に収容されている。

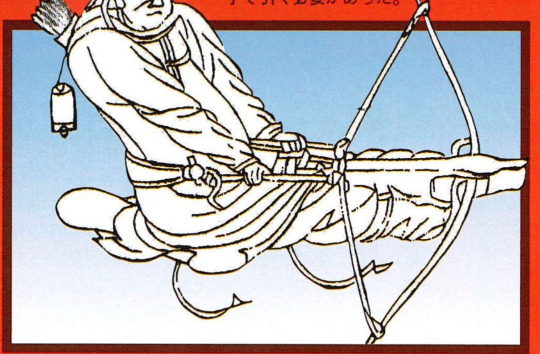
弩

秦の始皇帝陵、銅車馬坑より出土した弩の青銅製模型（写真＝C.P.C.）。弦と平行に渡された内側の縄は、着脱式の弓が万一外れた場合のストッパーと思われるが、他に例のないもの。下は同じく銅車馬坑より出土した箭箙と弩矢（写真＝C.P.C.）。箭箙は弩矢を収納するもの。

箙と弩矢



「上腰開弩圖」（『武備志』より）。弩は弓より弦の張力が強い。片手で弦を引ける「臂張（ひちょう）」の弩に対し、より射距離を伸ばすために張力を強化した「蹶張（けっちょう）」の弩は、弓に足をかけて両手で引く必要があった。



弩の登場

投射武器の歴史を激変させたのは春秋時代から登場する弩（ど）である。弩は長さ五〇センチ前後の弩臂（どひ）（台木）の先端にせいぜい一メートル程度の短い弓を横位に渡し、弩臂の後部に内蔵された弩機（どき）に弦をかけて矢を放つボーガンである。

弩機は青銅製の発射装置であり、懸刀（けんとう）という引き金を引けば、弦をかけた鉤牙（こうが）が支点を失って本体の中に沈む仕組みになっている。そのメカニズムは単純でありながら極めて機能的であり、考案した工匠たちの知恵が感じられる。

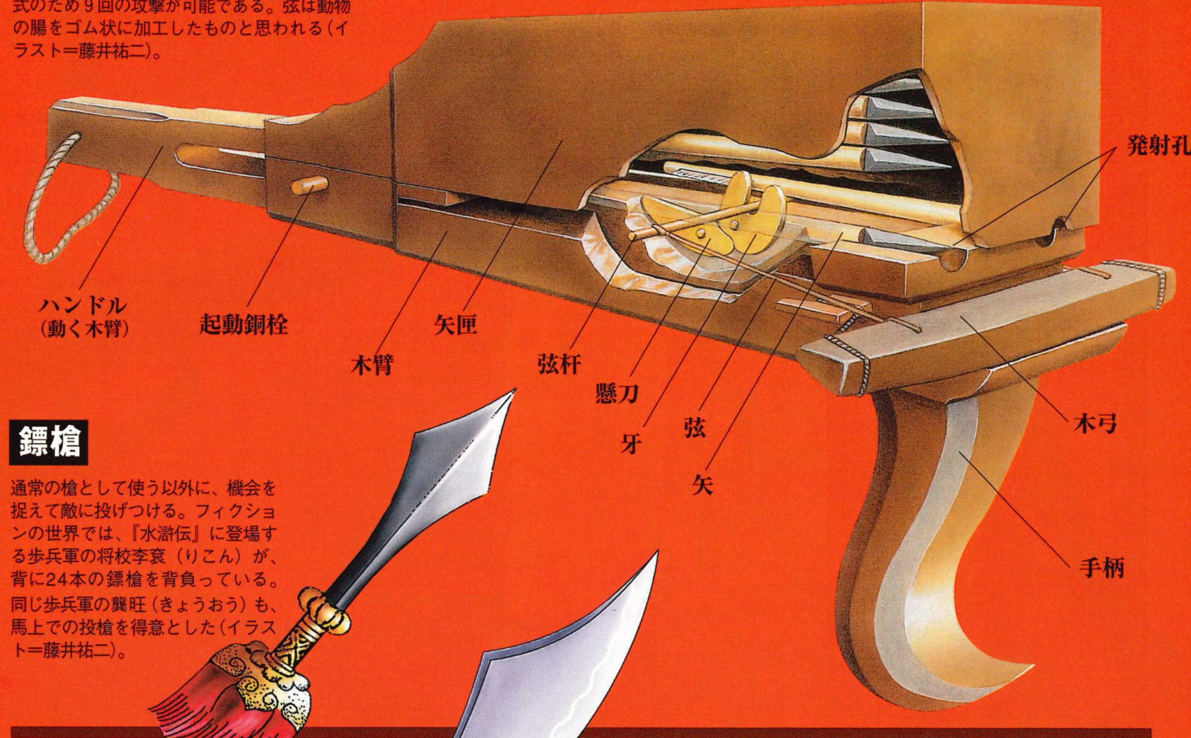
弩は弦を引いた状態で長時間待機することが可能で、なおかつ弓を水平にして矢を放つことができるため、伏兵の武器として活用された。戦国時代になると、弩を装備とした弩兵は急激に数が増えた。弩の導入によって歩兵の応用範囲が広がり、結果的に戦場における歩兵の地位が向上したことは、中国古代軍事史の画期である。

秦（しん）の精鋭軍を表現した始皇帝陵兵馬俑（へいばよう）坑では、戦車と従属歩兵よりなる縦隊の側面を守るように、左右陣側に二列横隊の弩兵が外に向けて並べられていた。また、機動部隊である戦車部隊と騎馬部隊の前方に重装と軽装の弩兵よりなる方陣が組まれていた。総兵数に対する弩兵の割合は一一パーセント強であり、それらが戦闘の需要に応じて適宜配置されていたことがわかる。

連弩

弩は優れた武器だが、装填から発射までに時間がかかる。その欠点を補うものが連弩であった。１度に複数の矢を放つ多矢単発式、１矢を連続的に放つ１矢連発式、複数の矢を連発する多矢連発式の３種がある。諸葛孔明が開発した多矢連発式「元戎(げんじゅう)」は有名だ。

春秋戦国期の楚国の都である湖北省江陵県の軍人墓から出土した連弩の復元図。長さ30cmに満たない小型武器だが、手柄で支え、後方に突き出た棒状のハンドルを引いたり、押し戻したりするだけで、内部の２つの青銅製部品(牙と懸刀)が回転し、自動的に矢の発射と装填を繰り返す。上部の矢匣には18本の矢が収納されており、発射口が２つある２矢連発式のため９回の攻撃が可能である。弦は動物の腸をゴム状に加工したものと思われる(イラスト＝藤井祐二)。





鏢槍

通常の槍として使う以外に、機会を捉えて敵に投げつける。フィクションの世界では、『水滸伝』に登場する歩兵軍の将校李袞（りこん）が、背に24本の鏢槍を背負っている。同じ歩兵軍の龔旺（きょうおう）も、馬上での投槍を得意とした(イラスト＝藤井祐二)。

飛刀

投擲用の薄手の短刀で、使い手は命中時に切っ先の向きが前になるよう、修練を積まねばならない。飛刀が主に『三国志演義』や『水滸伝』のようなフィクションで活躍するのは、使用の難易度によるものだろう(イラスト＝藤井祐二)。

特殊投射武器

弓や弩などの一般的な投射武器に対し、やや特殊なものとして投槍と飛刀がある。「敵に塩を送る」ことを嫌う中国では、敵に再利用されかねない投槍は、漢民族の実戦兵器となることは稀であった。北宋の鏢槍が唯一の例外である。飛刀は前方に重心をおいた短刀で、特殊な技術が必要だった。

漢代になると、弩の効能は匈奴(きょうど)の騎馬を迎撃する投射武器としてさらに重視された。弩機の部品は「郭(かく)」という青銅製のボックスで強化され、増強した弓の張力に耐えるような工夫がなされた。

射程距離二〇〇メートル超

甘粛(かんしゅく)方面の長城防衛を担う烽火台(ほうかだい)の遺跡からは、しばしば防衛のノウハウを伝える木簡が出土し、それによると、弩は張力によって「三石弩」や「六石弩」などと命名された。

石は重量単位で、三〇キログラムであるから、三石弩は弓の張力が九〇キログラム、六石弩は一八〇キログラムとなる。現在、弓道に使用される和弓の張力が一五～一八キログラム程度であることを考えると、漢代の弩がいかに強いものであったかを実感することができよう。

三石弩は片手で引けることから「臂張弩(ひちょうど)」と呼ばれ、六石弩は弓に両足をかけて両手で弦を引くことから「蹶張弩(けっちょうど)」と呼ばれた。蹶張の場合、弓の反発力が強いため背中を地に着けるような姿勢で引かなければならない。射程が二〇〇メートルを超える弩にも、そのような操作の煩わしさがあるため、矢継ぎ早の攻撃が可能な旧来の弓矢も継続して使用された。

弩は十六世紀後半に火縄銃が国内生産されるまで、最も威力ある投射武器として活用され、清代になっても軍備における一定の地位を失わなかった。そのため、中国の戦史は弩の発展史を抜きにして語ることができない。

異色の投射武器、投槍・飛刀

石球・弓矢・弩など以外の特殊な投射武器として、投槍(なげやり)や飛刀(ひとう)がある。

投槍は旧石器時代の狩猟民が発明して以来の歴史をもつが、古代のギリシャやローマで主要競技となるほどに発達したことに比べ、中国ではさほど実戦で活用されることはなかった。

概して投槍は狩猟民が使う原始的な利器であり、人と人の闘争では投げた槍を逆に利用される恐れがあるため、原始的なトーナメントでこそ存在意味はあれ、熾烈化する戦争においては消え去る運命にあったと言えよう。唯一、北宋時代には「鏢槍(ひょうそう)」という騎兵用の投槍が使用されたが、これは騎馬民族であるモンゴル人の狩猟法に発想を得た一時的な戦法であった。

飛刀は後漢時代の画像石に描かれた曲芸にその影を見ることができる。複数の弄丸(ろうがん)と剣を使い、上に投げ続ける曲芸であり、ローマやインドからの旅芸人が得意とするところであった。切っ先の方向を間違うことなく剣を操る技術がなければ事故となる。

投射武器として製造された飛刀は切っ先に重点をもつ短刀であり、的に当たる直前に切っ先が前を向くように回転と距離を調節する技術が必要であり、そうした修練を重ねた者たちに使用が限られる武器であった。飛刀はむしろフィクションの世界に登場し、『三国志演義』では諸葛孔明に平定された南蛮王孟獲(もうかく)の妻である祝融(しゅくゆう)夫人が飛刀の使い手とされ、『水滸伝』では芒蕩山(ぼうとうざん)の盗賊、八臂那咤(はっぴなた)の項充(こうじゅう)が二四振りの短刀を背負って自在に敵を倒す飛刀の名手として描かれる。

このほか、投射という意味では、火薬の発明とともに開発された「火器」や、攻城戦などで使用された「投石機」なども、広義には投射兵器に分類することもできる。

詳細は新刊書『図説・中国武器集成』をぜひご覧いただきたい。

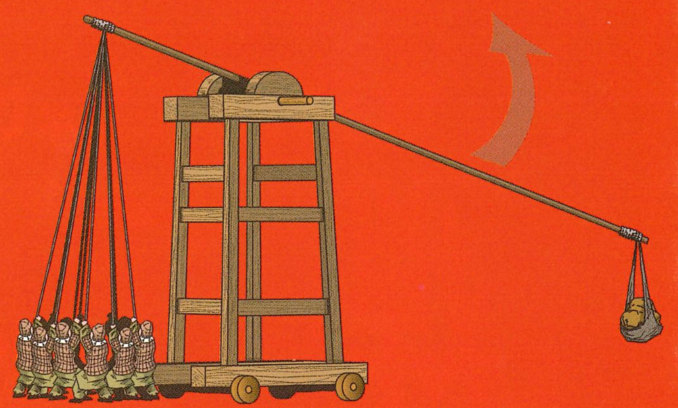
火器と投石機

世界に先駆けて９世紀初頭に黒色火薬を発明した中国。もちろん、多弾式ロケットや手榴弾、多連装銃や大口径砲などユニークな火器が目白押しだが、紙幅の関係でここでは鴉型ミサイルと、古代兵器としては御馴染み、人力による中国式投石機をご紹介しよう。

投石機

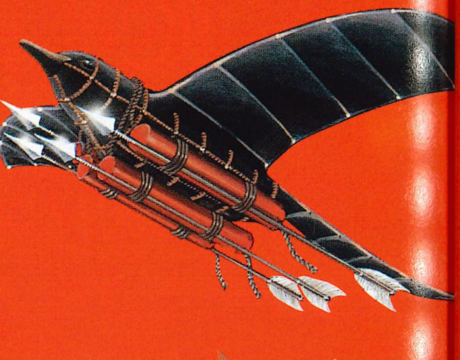
攻城戦用の投石器は、弩と並んで古代中国兵器の花形である。簡単な構造だが、宋代の『武経総要』によれば、高さ5m、アームの部分8mのものでは、50人が引き綱を引いて15kgの石弾を130m以上飛ばせたという。引き綱を引く人数が多ければ多いほど、呼吸を合わせるための訓練が必要だったろう(イラスト＝堀口順一朗)。





神火飛鴉

鴉に似せて造った明代の有翼ミサイルで、笹竹や葦を割いて骨組みを作り、綿紙を張って仕上げる。腹部に付く４本の火箭が推進力となって約300mは飛ぶ。落下地点で爆発し燃焼性の火薬を撒き散らす。主に攻城戦に使用した(イラスト＝大塚洋一郎)。



TUNISIA

THE LAST BATTLE IN
NORTH AFRICA



北アフリカ戦線・最終章

チュニジアの戦い

文＝荒川佳夫

熱砂の中で2年以上繰り広げられた激闘も
今、クライマックスを迎えようとしていた。
圧倒的な戦力で迫る連合軍に対し
枢軸軍の最後の戦いが始まる！



(上)チュニジア周辺で、連合軍を迎え撃つべく行動を開始するドイツ軍戦車部隊。
(下)「トーチ」作戦によって北西アフリカに上陸する連合軍部隊。

追い詰められる枢軸軍

エル・アラメインでの敗北

一九四二年十一月、エジプトからリビアへと続く海岸沿いの街道を、西へ西へと向かう軍団があった。それは、エルヴィン・ロンメル元帥率いる「アフリカ装甲軍」の、疲れ果てた惨めな撤退行だった。彼らはエル・アラメインの戦いに敗れ、イギリス軍の追撃をかわしながら後退を続けていたのである。

この年、ロンメルのアフリカ装甲軍は、イギリス第8軍を追撃してエジプト領内に侵攻し、七月にはナイル・デルタまであと一息の地点にまで迫った。そのロンメルの常勝軍に足止めを食らわせたのが、丘陵の連なる地にイギリス軍が築いたエル・アラメイン陣地であった。

十月二十三日、新司令官にバーナード・ロー・モントゴメリー中将を迎えたイギリス第8軍が反撃を開始すると、予備の戦車をすべて使い果たしたアフリカ装甲軍に、もはや勝機は残されていなかった。十一月四日、ついにロンメルはヒトラーの命令に背き、全軍にエル・アラメインからの撤退を命じた。

このエル・アラメイン戦以後、シーソーゲームのように攻守が入れ替わり続けてきた北アフリカの戦いは、新たな局面を迎えることになるのである。

そもそもロンメル率いるドイツ軍は、なぜ北アフリカの地でイギリス軍と戦う羽目になったのか。

事の発端は一九四〇年六月、イタリアが英仏両国に宣戦布告したことにある。イタリアの元首ムッソリーニは、英仏に押さえられていた地中海沿岸諸地域を併合し、古代ローマの栄光を復活させようとしていた。ところが、イギリス影響下のエジプトとギリシャに侵攻したイタリア軍は、どちらも反撃にあって撃退され、逆にイタリア領キレナイカ（リビア東部）をイギリス軍に占領される始末だった。

この事態を受けて、ドイツ総統アドルフ・ヒトラーは十二月十三日付でギリシャ侵攻の総統命令を発令し、翌一九四一年早々には北アフリカのイタリア軍を支援すべく、ロンメル少将を司令官とするドイツ・アフリカ軍団の派遣を決定した。

とはいえ、東方への領土拡大を第一の戦争目的とするヒトラーは、地中海沿岸地域に対し領土的野心を抱いていたわけではない。ギリシャに進駐したイギリス空軍がルーマニアの油田地帯を爆撃することと、北アフリカを失ったイタリアがムッソリーニを追放し、イギリスと単独講和に踏み切る可能性を恐れていたのだ。

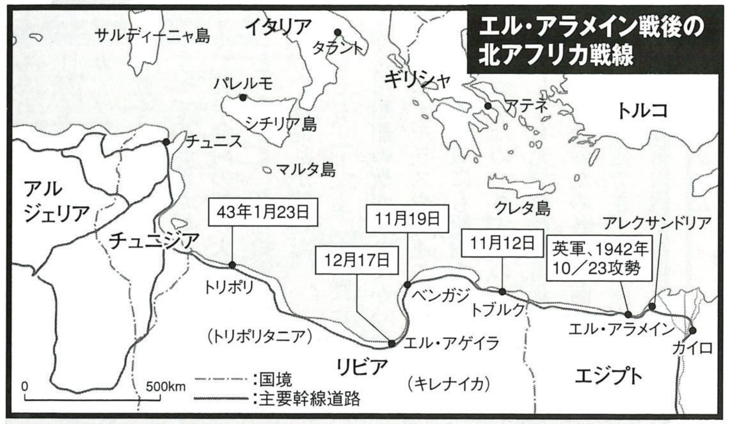
ヒトラー、そしてドイツにとっての北アフリカ戦線は副次的な戦場でしかなかった。ロンメルに満足な兵力や補給が与えられることはなく、そのためイギリス軍を完全に駆逐するまでには至らず、北アフリカでの戦いは一進一退の消耗戦に突入することになる。



補給の滞りもあって、北アフリカのドイツ・イタリア軍はエル・アラメインで手痛い敗北を喫し、以後ロンメルと彼の部隊はチュニジアへ後退することとなった。写真はエル・アラメイン戦後、捕虜となった枢軸軍兵士たちとイギリス軍装甲車。

ロンメルは少ない兵力と補給をやりくりしながらナイル・デルタまであと一〇〇キロの距離まで迫ったが、エル・アラメインで敗北し、キレナイカ、トリポリタニア（リビア西部）さえも放棄して、チュニジアまでの撤退を余儀なくされたのである。

以後、北アフリカの戦いの焦点は、



アフリカ装甲軍の戦闘序列
（1942年10月現在）

ドイツ・アフリカ軍団
- 第15装甲師団
- 第21装甲師団
- 第90軽師団
- 第164軽師団
- ラムケ空挺師団

イタリア第10軍団
- ブレシア歩兵師団
- パヴィア歩兵師団

イタリア第20機械化軍団
- アリエテ戦車師団
- リットリオ戦車師団
- トリエステ自動車化歩兵師団
- フォルゴーレ空挺師団

イタリア第21軍団
- トレント歩兵師団
- ボローニャ歩兵師団

※アフリカ装甲軍はエル・アラメイン戦によって大きな損害を受ける。

図の日付はイギリス第8軍のおよその到達日。第8軍がトブルクに達しようとしていたころには、すでに北西アフリカへの連合軍上陸作戦である「トーチ」作戦が発動していた。図を見ると、マルタ島が枢軸軍の補給に圧力を加えうる位置にあることが理解できる。左の図は、エル・アラメイン戦前のアフリカ装甲軍の戦闘序列で、チュニジアに達した時点では、これらの部隊は大きな損害を受けていた。

エル・アラメインから遥か二〇〇〇キロ西方の地、チュニジアへと移ってゆくのであった。

連合軍、北アフリカに上陸

一九四二年、かねてよりドイツに対する反攻作戦を企図していた連合軍は、ついにその手始めとなる上陸作戦を発動した。その上陸先は、ロンメルがスエズ運河に迫っていたこともあり、その後背を脅かす意味も込めて北アフリカのフランス領が選ばれた。地中海地域の確保が優先されたのは、スエズ運河を含む同地の権益に並々ならぬ執着を抱くイギリス側の強い要請によるものであった。

同年十一月八日、フランス領モロッコとアルジェリアに対し、英米連合軍の上陸作戦「トーチ（たいまつ）」が開始された。ロンメルがエル・アラメインからの撤退を開始したわずか四日後のことである。当時のフランスはドイツに降伏したあと、親ドイツ的なヴィシー政権が本土南部と各植民地を統治していた。フランス降伏時、フランスの艦艇がドイツの手に渡ることを恐れたイギリス海軍がこれを攻撃したことを恨みに思うフランス人は、概して反英的要素も持っていた。

このため英米の上陸部隊もアメリカ軍の部隊が前面に出ることとされ、イギリス軍が多数を占める部隊でもアメリカ人が指揮官となるなど、フランス人の反英感情を刺激しないよう配慮がなされた。

のちにアメリカ大統領となるドワイト・D・アイゼンハワー大将を最高司令官とした連合軍上陸部隊は、五〇〇隻を超える大船団に輸送され、十一月八日早朝、三方面からフランス領北アフリカに上陸した。ジョージ・S・パットン少将に率いられた三万五〇〇〇名の西方任務部隊はモロッコに上陸。フリーデンドール少将の中央任務部隊は三万九〇〇〇名の兵力でアルジェリアのオランへ、そしてイギリス軍を主力としながらもアメリカ軍のライダー少将が指揮を執った東方任務部隊は三万三〇〇〇名の兵力をもってアルジェ地区へと、それぞれ上陸を果たした。

自らを解放者と任ずるアメリカ兵は、フランス人の熱烈な歓迎を期待して軍楽隊さえ用意して上陸にのぞんだが、彼らを待ち受けていたのは反英派のダルラン提督らに指揮されたフランス軍による激しい攻撃であった。

連合軍はただちにダルラン提督の説得にあたり、作戦への協力を承諾させた。ダルランが在北アフリカのフランス全軍に停戦を命じたのと同じ日の十一月十日、ヒトラーは「アントン」作戦を発動しヴィシー政府管轄下にあった南フランス全土を占領させている。

ちなみにダルランの変節について、真実はついに語られることはなかった。彼は十二月二十四日に暗殺され、その犯人も正式な裁判を経ることなく銃殺刑に処されたのである。

ともあれ、英米連合軍は北アフリカへの上陸を成し遂げ、約一二万の在アフリカ・フランス軍はこれ以後、英米軍と行動を共にすることになった。だが、すべての状況が好転したわけではなく、英米合同の初の大規模作戦ということもあって、各補給港では上陸後しばらくは混乱が続いた。

そもそも、「トーチ」作戦に投入された輸送用船舶の数が足りなかった。アメリカはイギリスやソ連の支援、さらには太平洋戦域にも船舶を割かねばならなかったため、さすがのアメリカをもってしても充分な数を用意できなかったのだ。そのため各歩兵師団の装備を一度には輸送できず、上陸直後のそれらの部隊は重火砲や対戦車自走砲を欠いた状態にあった。

さらに、荷揚げ作業に従事する人員や輸送用車両も不足したため、現地のフランス人やアルジェリア人を雇い入れ、車両は旧式の木炭車までを現地でかき集める始末だった。

それでも連合軍はなんとか前進準備を整え、まずは東部任務部隊がチュニジアへと進撃を開始した。この部隊はイギリス第1軍と改称し、その指揮はライダー少将からイギリス軍のケネス・アンダーソン中将の手に委ねられた。彼らの目的は港湾都市チュニスおよびビゼルタを奪取し、枢軸軍によるチュニジアへの援軍派遣を阻止することであった。

だが、彼らが上陸や物資の荷揚げにもたついている間に、ドイツ軍は着々と迎撃準備を整えていたのである。

チュニジア橋頭堡の確立

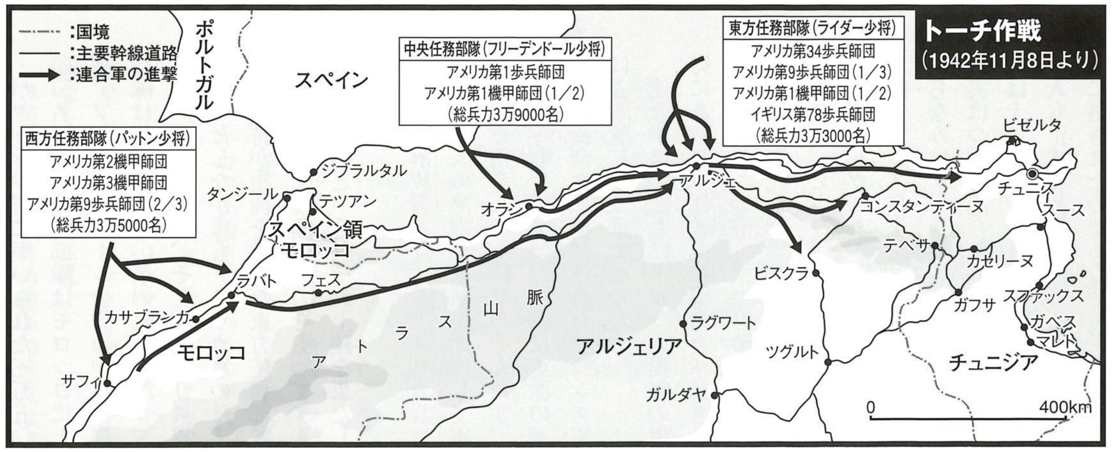
仏領北アフリカへの連合軍上陸を知ったヒトラーは、ドイツ南方軍総司令官アルベルト・ケッセルリンク元帥に対しチュニジアへの部隊の派遣を命じた。当時のチュニジアはモロッコやアルジェリアと同様にフランスの植民地であったが、ドイツはチュニジア総督を説得し、ドイツ軍の無血進駐を約束させた。

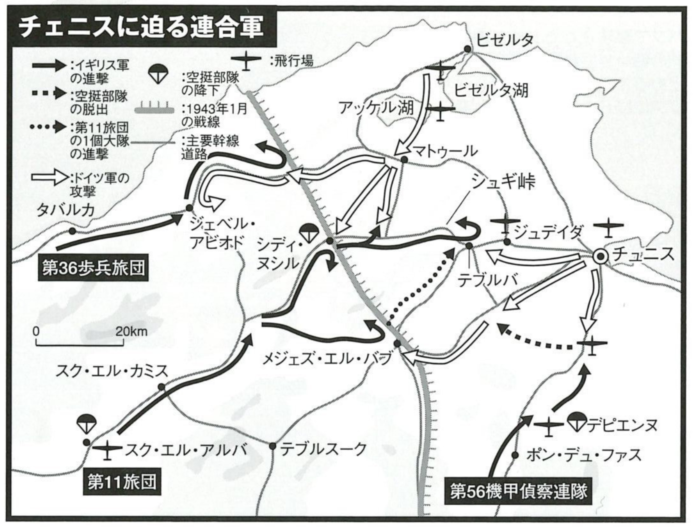
十一月九日には早くもドイツ空軍の飛行隊と対空砲部隊がチュニジアに到着し、以後、コッホ中佐やバレンティン大佐の降下猟兵連隊、フォン・ブロムベルク大佐の第190戦車大隊などが続続と送りこまれた。これらはチュニジアで新編された第90軍団の指揮下に入ることとなり、その軍団の司令官には、かつてのドイツ・アフリカ軍団司令官、ヴァルター・ネーリング大将が就任した。

ネーリングはエル・アラメイン戦で負傷して本国で療養に努めていたのだが、その傷も癒えぬうちに再び北アフリカへと呼び戻された。彼に与えられた使命は、寄せ集めの集団を指揮し、二つの港湾都市――チュニスおよびビゼルタを防衛することだった。



(右)「トーチ」作戦によって北西アフリカに上陸するアメリカ軍部隊。彼らは北アフリカの戦場で初めて本格的な戦火の洗礼を受けることになった。(下)連合軍は3か所で上陸作戦を行った。戦力的には枢軸軍を圧倒していたが、モロッコからアルジェリアにかけて存在するアトラス山脈によってその進撃路は狭く、逆に枢軸軍にとっては守りやすい地形だった。





枢軸第90軍団の編成
(1942年11月16日現在)

●チュニス橋頭堡
- チュニス第1野戦大隊第3中隊 ※1
- 第5降下猟兵連隊
- ザオアー降下猟兵中隊
- 第104装甲擲弾兵連隊第14中隊
- 対空砲中隊×1 ※2

●ビゼルタ橋頭堡
- チュニス第1野戦大隊第1中隊
- 第190戦車大隊第4中隊
- 第2砲兵連隊第4中隊
- 第190砲兵連隊第5中隊
- 第557突撃砲大隊(イタリア軍)
- 第136装甲猟兵大隊(イタリア軍)

●チュニジア南部地区
- スペルガ・インペリアーリ師団

※1:以前の降下猟兵工兵大隊。
※2:第20高射砲師団より抽出された部隊で、8.8cm高射砲を4門装備。

(上)チュニス前面は山がちな地形であり、快速部隊による機動戦には向いておらず、その進撃は幹線道路沿いに行わなければならなかった。(右)第90軍団は、このように寄せ集め部隊ともいえるものだった。

一方、チュニジアを目指すイギリス第1軍の進軍は遅れがちだったが、それはチュニジア独特の地形に起因するものだった。内陸のアトラス山脈から伸びる山岳地帯やワジと呼ばれる涸れ谷、そして赤い岩の転がる荒れ地が彼らの行く手を阻んでいた。道は高地の間を縫うように走っており、車両や歩兵はその狭い道を一列になって通過せねばならず、そのうえチュニジアに侵攻してからは、高地帯に陣地を構えたドイツ降下猟兵に進路を阻まれ、思うように進撃できなかった。

十一月二十日から二十六日にかけて、チュニス西方のメジェズ・エル・バブからテブルバ周辺において両軍による激しい戦闘が展開され、二十六日には、シュギ峠付近で第190戦車大隊の一部(Ⅲ号戦車とⅣ号戦車を合わせ一〇両強)とイギリス第1軍に派遣されていたアメリカ第1機甲師団B戦闘団(諸兵科連合の戦闘団)が遭遇し、第二次大戦で初めてドイツとアメリカの戦車部隊による戦闘が発生した。

B戦闘団の主要装備は旧式のM3リー戦車とM3スチュアート軽戦車で、第190戦車大隊の戦車と遭遇した部隊はM3スチュアートで構成されていた。この軽戦車は苦戦しつつも五両の損害と引き換えに七両の敵戦車を撃破(とはいえ、すべて修理可能だった)し、敵を後退させることに成功した。

ドイツ軍に後退を強いた連合軍はチュニスに向けての前進を再開する。このドイツ軍の危機を救ったのは街道脇に設置されていた八・八センチ高射砲だった。守護神とも言うべきこの「戦車キラー」の高射砲は、わずか二分間の戦闘で六両のアメリカ戦車を破壊し、連合軍の前進を押しとどめたのである。

チュニス前面での戦闘が続いていた十一月二十八日、一〇〇〇名からなるアメリカ軍のパラシュート兵が枢軸軍戦線後方に降下したが、この部隊はネーリングがさし向けた装甲偵察中隊とイタリア軍スペルガ師団によって包囲され、大多数が捕虜となった。

このように、ネーリングが寄せ集めの部隊で防戦を続けている間にも、チュニスやビゼルタの港には援軍が続々と到着していた。中でも期待をかけられたのが、フィッシャー少将の第10装甲師団と、リューダー少佐の第501重戦車大隊だった。重戦車大隊はその名の通り「重戦車」、すなわちティーガーI戦車(定数二〇両)を装備していた。

十二月一日、ネーリングはそれらの部隊をもって、テブルバに集結中の米英軍に対し攻勢を開始した。オリーブ畑で激しい戦車戦が展開されたが、経験豊富なドイツ軍が終始、主導権を握り続け、英米軍は包囲の環の中に封じ込められるかと思われた。しかしその時、ひとつの偶然が英米軍を救うのである。

敵戦線後方に降下したのちに捕虜となっていたアメリカ・パラシュート部

隊の一部が、脱出に成功してテブルバ周辺に迷い込んできたのだ。彼らは偶然にも、包囲を完成させる最後の一ピースにならんとしていたコッホ中佐の降下猟兵の進路に現れて、この部隊を戦闘に引きずり込んで拘束してしまったのである。

これによって、テブルバの英米連合軍には脱出の時間が与えられた。彼らは未完成の包囲を突破し、シディ・ヌシルやメジェズ・エル・バブ方面への撤退を成功させた。しかし、この戦闘でイギリス第11歩兵旅団とアメリカ第1機甲師団B戦闘団は装備のほとんどを失ってしまったのだった。

ドイツ国防軍総司令部の戦闘日誌によれば、ドイツ軍は一〇七六名の敵兵を捕虜とし、戦車五九両、装甲車三〇両、その他車両三五〇両を破壊、火砲四一門、迫撃砲四〇門、戦車五〇両と大量の弾薬を鹵獲したという。

枢軸軍は英米軍を大きく後退させることでチュニスおよびビゼルタへの圧力を排除することに成功した。彼らは英米軍との競争に勝ち、チュニジアという北アフリカへの橋頭堡を確保することに成功したのであった。



メジェズ・エル・バブで撃破されたドイツ軍のⅢ号戦車。この一連の戦いで枢軸軍は連合軍の進撃を一旦、食い止めることに成功した。しかしそれは、チュニジアに閉じこめらたことも意味していた。

枢軸軍の攻勢

「春の風」作戦

テブルバ戦の後、戦闘は膠着状態となった。おりしも十二月のチュニジアは雨の季節で、道路は泥濘(でいねい)と化しており、両軍共に大きな行動は不可能となっていた。その間、アルジェやオランの港には、未着だった英米の部隊や資材が続々と陸揚げされ、アイゼンハワーの戦力は着実に強化されていった。

ドイツ側では、寄せ集め部隊の上級組織だった第90軍団が解体され、その司令部を母体にチュニジア防衛のための新たな集団、第5装甲軍が編成された。ネーリングは療養に専念するために本国へ帰還し、代わりに東部戦線で活躍したハンス・ユルゲン・フォン・アルニム上級大将が就任した。参謀長には司令官常任全権代理を兼務するハインツ・ツィーグラー中将が選ばれた。

チュニジアに旅立つ前、東プロイセンのラステンブルクに置かれた総統司令部でヒトラーと面会した両名は、充分な兵力と補給さえあればアイゼンハワーの軍を北アフリカから退却させ得ると説明した。ヒトラーもこれに同意し、装甲師団と装甲擲弾兵師団おのおの三個、そして空軍のヘルマン・ゲーリング師団を第5装甲軍へ配属させることと、充分な補給を約束した。

一九四三年一月十八日、チュニジアへ渡ったアルニムはチュニス前面の防衛ライン強化のために「急使Ⅰ」および「急使Ⅱ」作戦を発動。その進撃は連合軍側についたフランス軍の担当するチュニス南方の戦線に向けて指向され、ポン・デュ・ファスから南へ続く高地と峠道を押さえることに成功する。

同時期――一月十四日から二十三日にかけて、モロッコのカサブランカにおいてアメリカ大統領ルーズベルトとイギリス首相チャーチル、現地のアイゼンハワー将軍らが集い、戦後世界の枠組みについての話し合い、いわゆるカサブランカ会談が開かれた。その席では枢軸国に対し無条件降伏を要求する方針と、北アフリカ戦後のシチリアおよびイタリアへの上陸が確認された

が、チュニジア戦については現有戦力のすべてをチュニス占領に集中することと、アイゼンハワーの代理として地上部隊司令官兼第18軍集団司令官となったイギリス軍のハロルド・アレクサンダー大将が、作戦全般を指揮することが決定された。

その会談の最中、すでにアメリカ軍の大部隊がチュニジア内陸部を南下し始めていた。アルジェリアとモロッコのアメリカ軍から編成されたフリーデンドール少将のアメリカ第2軍団である。彼らの任務は、内陸の山岳地帯を抜けて海岸線に至り、ロンメルとフォン・アルニムの合流を阻止することであった。



チュニスに向けて前進するアメリカ軍のM10対戦車自走砲。同車は1943年初めの北アフリカ戦線で初めて実戦に投入された。枢軸側がチュニジア橋頭堡を形成した後になって、連合軍の兵力は急速に拡大されていった。

同時期、ロンメルのアフリカ装甲軍はエジプトからの二〇〇〇キロを走破し、ついにチュニジア国境を越えて南部のマレトに集結し始めていた。彼らを追撃していたモントゴメリーの第8軍は、延びきった補給線と天候不順に悩まされ、ついにアフリカ装甲軍を捕捉できなかったのだ。

マレトの防御線に入ったロンメルは、イタリア軍総司令官ウーゴ・カヴァレロ元帥の要請を受けて、南下するアメリカ軍に対処するために配下の第21装甲師団の、第5装甲軍への編入を認めた。第21装甲師団はただちに、ファイド峠への北上を開始した。

山がちな内陸部から比較的平らかな海岸部へと至るには、南北に延びる「イースタン・ドーサル」と呼ばれる山脈を越えねばならず、その出入り口となる各峠は戦略上の要所となっていた。そのひとつであるファイド峠は、すでにアメリカ軍に支援されたフランス軍よって占拠されていた。

一月三十日、第21装甲師団はイタリア第30軍団とともにファイド峠を攻撃し、数日にわたって敵の反撃を退け、峠の奪取に成功した。しかしアメリカ第2軍団は海岸部への突破を諦めず、

北アフリカのティーガー

ティーガーⅠが初めて戦場に登場したのは、1942年8月の東部戦線におけるレニングラード近郊だった。北アフリカには、ティーガーⅠが配備された第501重戦車大隊が42年11月に、43年3月には第504重戦車大隊がそれぞれ送られた。米英軍はすでに情報でティーガーの存在を把握していたが、圧倒的な火力と装甲防御力を有するティーガーⅠに対抗できる戦車は米英側に皆無だったため、初期には少数のティーガーⅠが敵の大部隊を押しとどめることも可能だった。写真はチュニジアにおけるティーガーⅠ重戦車。





アフリカ装甲軍司令官エルヴィン・ロンメル元帥（左）と、第５装甲軍司令官フォン・アルニム上級大将。同じ装甲軍司令官でありながら、一方は元帥、もう一方はチュニジア防衛を任務とする上級大将であり、これがドイツ軍の指揮・統率に問題を生じさせた。

ファイド峠西方に続々と戦力を集中させ始めた。
　フォン・アルニムはファイド峠西部のアメリカ第2軍団を奇襲攻撃し、そののち北方へ進撃してチュニス前面の敵戦線後方を遮断する作戦を立案した。しかしここで、チュニジアに存在するもうひとつの「装甲軍」司令官であるロンメルが、フォン・アルニムの作戦について難色を示した。
　一月三十一日に担当区域の境界線について協議がもたれるまで、両装甲軍司令部間にはなんらの接触もなかった。階級としてはロンメルが上級だが、しかし、チュニジア防衛の任を帯びているのは第5装甲軍であり、その司令官はフォン・アルニムであった。
　この頃のロンメルは胃と肝臓、鼻腔内に病を抱えており、体調は思わしくなかった。陸軍上層部はロンメルが自らアフリカを去ることを望んでいたが、ロンメルは「戦況が思わしくないときに去っていった」と思われることが我慢ならず、戦場にとどまり続けた。
　またロンメルが北アフリカに執着した理由のひとつに、彼とフォン・アルニムの確執があると指摘する声もある。シュレージェン出身の貴族であるフォン・アルニムに対する対抗意識がロンメルの中にあり、苦楽を共にした配下の将兵をその彼の手に委ねることを拒んだというのである。もしそうだとするなら、それは高潔な軍神として語られることの多いロンメルの、実に人間じみた一面ではあるが、フォン・アルニムや陸軍上層部にしてみれば指揮統制上の混乱を招くやっかい事でしかなかった。
　ロンメルはチュニジア入りしてからしばらくは、補給物資の欠乏を理由に攻勢意欲を失っていたが、フォン・アルニムの攻勢作戦を聞きつけると、俄然、覇気を取りもどしたようだった。ロンメルの作戦案は、チュニジアとアルジェリアの国境をまたぐ山脈「ウエスタン・ドーサル」を越え、連合軍の物資集結地となっているテベサを衝き、そこから北へと攻めあがってチュニジアの連合軍全体の後方連絡線を遮断しようという、ロンメルらしい大規模な片翼包囲作戦であった。
　しかしフォン・アルニムは、山がちなチュニジアの内陸部では機動戦が難しいことと、補給線の脆弱性を理由に大胆なロンメル案に賛成しなかった。南方軍総司令官のケッセルリンクが仲介に乗りだしたが合意には至らず、結果、両装甲軍は各々の指揮系統を維持したままそれぞれの作戦計画に着手することとなり、まずはフォン・アルニム案「春の風」作戦が実行に移されることとなった。
　同時期の二月十三日、アイゼンハワーはファイド峠西方のシディ・ブ・ジド戦区の視察を行っていたのだが、そこで彼は愕然となってしまった。実戦経験が乏しいアメリカ兵は気もゆるみがちで、陣地の構築作業にも遅れをきたしていた。さらに第2軍団司令官のフリーデンドールは配下の部隊を細かく分散して前線の広い範囲に配置し、そのうえ後方に機動予備を残置することを怠っていた。しかもフリーデンドールは自らの司令部を前線から一三〇キロも後方に置いていたのである。
　独善的なフリーデンドールは部下から信頼されておらず、相性の悪い第1機甲師団長のオーランド・ウォード少将を半ば無視していた。視察を終えたアイゼンハワーは強い危機感を覚え、諸々の状況改善を命じるため、フリーデンドールの司令部へと急行した。
　だが、アイゼンハワーは間に合わなかった。彼が前線を視察した翌日の二月十四日早朝、集結中のアメリカ第2

軍団を叩くべく、ドイツ第10および第21装甲師団、第501重戦車大隊からなる部隊が進撃を開始したのである。
　ファイド峠からシディ・ブ・ジドを目指した第10装甲師団を主力とする部隊は、たちまちアメリカ第1機甲師団所属のG中隊を蹴散らした。この攻撃に対し、シディ・ブ・ジドにいた第1機甲師団A戦闘団が反撃に出た。この部隊は到着したばかりのM4シャーマンを二個大隊分受け取っていたが、経験豊富なドイツ軍の敵ではなかった。
　わずか六両のティーガーが立ちはだかり、シャーマンを撃ち据える。そこへ南側のマクナシー峠から迂回してきた第21装甲師団が駆けつけ、A戦闘団の側面を突き、これを包囲した。この戦闘では四四両のシャーマンを含む六八両のアメリカ戦車が破壊された。
　ファイド峠を見下ろす南北の高地にはアメリカ第34歩兵師団が陣を構えていたが、両高地と平地の部隊との距離が離れすぎていたため、高地の歩兵師団はシディ・ブ・ジドの部隊が逃げまどう様を文字通り高みの見物をするより他はなかった。ある大佐は、その様子を後方の上官に野戦電話で報告した。「何を言っているんだ？ 彼らは陣地を換えているだけだ」と応じた上官に、その大佐は怒鳴り返した。
「私が見ているのはパニックそのものですよ！」
　翌日、ウォード少将は第1機甲師団C戦闘団にシディ・ブ・ジド救援を命じた。だが、C戦闘団指揮官アルジャー中佐は偵察部隊を放つこともせず、観兵式さながらに整然と隊列を組んで戦場に姿を現した。ドイツ軍戦車はこれを充分に引きつけ、一斉砲撃で出迎えた。さらに急降下爆撃機が追い討ちをかけ、混乱したところに側面から迂回した別の戦車隊が突入した。Ⅳ号戦車一九両と引き替えに四〇両以上のシャーマンが破壊され、アルジャー中佐は捕虜となり、C戦闘団は壊滅した。
　このファイド峠の戦闘でアメリカ軍は一〇〇両以上の戦車を失い、二〇〇〇名を超える兵士が捕虜となった。ホワイトハウスで戦闘の報告を聞いたルーズベルトは、こう洩らしたという。
「我々のボーイたちは戦争ができるのか？」

ロンメルの介入

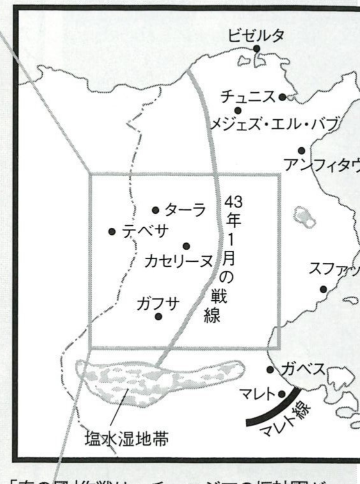
　シディ・ブ・ジドを陥したドイツ軍は、フォン・アルニムの計画に従って北へとその進路を変えた。だがそこで、「春の風」は思わぬ障害に遭遇する。それは敵ではなく、ロンメルであった。
　アメリカ第2軍団主力がシディ・ブ・ジド方面に引きつけられていることを知ったロンメルは、薄くなったアメリカ軍戦線の右翼を衝き、テベサを陥すというかねてからの自分の作戦を実行に移したのだ。歴戦のアフリカ軍団はエル・ゲタール方面から進出して交通の要衝ガフサを占領し、そこからテベサを目指してさらに北上を開始した。
　これに対し連合軍は、アメリカ第2軍団と、在アルジェリアの投降兵で編成したフランス第19軍団の一部に対し、ウエスタン・ドーサルまで後退するよう命じ、イギリス第6機甲師団、同第1近衛歩兵旅団、アメリカ第1機甲師団B戦闘団を援軍としてさし向けた。
　二月十八日、テベサを衝くというロンメルの作戦に成功の可能性を嗅ぎとったローマのケッセルリンクは、この作戦を認可し、フォン・アルニムの手



ファイド峠におけるティーガー。満を持して開始された「春の風」作戦は当初順調であったが、ロンメルとアルニムの確執もあって、失敗に終わってしまった。



春の風作戦—カセリーヌ峠の戦い(1943年2月14日〜22日)



「春の風」作戦は、チュニジアの枢軸軍が行った大規模な攻勢作戦だった。アルニムの部隊が2月14日の段階で順調な進撃を行っていると見たロンメルは、アフリカ装甲軍部隊をエル・ゲタール方面に向かわせ、テベサを目指して進撃を開始した。しかし、ドイツ軍の攻勢はカセリーヌで頓挫、やがてイギリス第6機甲師団やアメリカB戦闘団の反撃に遭い、その攻撃は停止してしまった。

にあった第10および第21装甲師団をロンメルの指揮下に編入した。

だが、ロンメルに負けず劣らず頑固であったフォン・アルニムは配下部隊を出し渋り、第10装甲師団の一部を手元に置いたままとした。当然ロンメルは激怒したが、いまは速度こそが肝心と判断し、アメリカ軍の追撃を再開した。

後退したアメリカ第2軍団が防御線を敷くウエスタン・ドーサルを越えれば、そこはもうアルジェリアであり、連合軍が拠点としたテベサやターラが存在した。ロンメルはターラへと続く峠道、カセリーヌ峠を奪取すべく定数の揃わぬ第10装甲師団を派遣した。

海抜一〇〇〇メートル以上の山にはさまれたカセリーヌ峠に対し、フォン・ブルーフ少将の第10装甲師団が攻撃を開始したのは二月十九日のことだった。アメリカ軍は峠道の奥深くまでドイツ軍を誘い込み、しぶとく抵抗してその侵攻を阻んだ。

翌二十日、ロケット砲「ネーベルヴェルファー」による弾幕射撃に支援されたドイツ軍は総攻撃を開始、夕刻までに峠を奪取し、麓に集結していた敵戦車を排除した。翌二十一日、ロンメルはターラ、テベサ、スビバの奪取を企図してそれぞれに部隊を派遣したが、そこで英米軍の反撃に出くわすこととなった。すでにイギリス第6機甲師団やアメリカ第1機甲師団B戦闘団が到着していたのである。

敵側の対応の早さと、捕獲した補給品の豊富さとを目の当たりにしたロンメルは、作戦の先行きに不安を覚えた。敵には充分な部隊と補給がある。だがロンメル配下の部隊はこの時、一日分以下の弾薬とわずか六日分の食料、二〇〇キロ走行すれば底をつくだけの燃料しか持っていなかった。ドイツ軍はすでに、攻勢限界点を迎えていたのだ。フォン・アルニムが危惧したとおり、ロンメル得意の機動戦はチュニジアの地形では通用せず、また補給線も延びきり、ちぎれる寸前となっていた。

さらに南部戦域では、二月二十日にアイゼンハワーからの電報を受け取ったモントゴメリーの第8軍が、ロンメルを牽制すべく行動を開始していた。

事ここにいたり、ロンメルは作戦の中止を決定した。「ヤツが部隊を出し渋りせねば……」とロンメルはフォン・アルニムを恨んだが、フォン・アルニムの方も「ロンメルがちょっかいを出さなければ」と嘆いていたことだろう。ともあれ、チュニジアにおけるロンメルの攻勢は、目的を果たせぬままに終結した。

さらばアフリカ

一九四三年二月二十三日、指揮系統が別々——しかも司令官同士が反目し合ったまま——だった二つの装甲軍の上級司令部として、「アフリカ軍集団」司令部が新設された。司令官にはフォン・アルニムが予定されたが、司令部組織の編成が完了するまではロンメルが一時的に指揮を執ることが定められた。とはいえ、二人の反目が解消されたわけではなく、この後もしばらく、彼らは別々の思惑を持って行動を続けるのである。

アメリカ軍の物量を目の当たりにしたロンメルはこの頃、すでにチュニジアの確保について悲観的な考えを持つようになっていた。イタリア軍上層部はといえば、イタリア領リビアを放棄したロンメルの決断を裏切りと捉えており、彼の更迭を求めていた。ドイツ軍上層部にしても、ロンメルが病気療養に専念することを願っていた(いつ軍務を離れるかは、ロンメル本人の裁量に任されていた)。

そんな中、フォン・アルニムは、連合軍の攻勢に備えてチュニス——ビゼルタ間の防衛ラインを確かなものとすべく、北部方面のイギリス軍に対する攻勢作戦「牡牛の頭」を立案し、ロンメルの裁可を得て実行に移した。

とはいえ、ロンメルは非協力的で、南部のアメリカ軍前面に置かれた第21装甲師団と第10装甲師団の主力をフォン・アルニムの手に委ねることを拒んだため、攻勢に投入できる戦力は限られていた。新しい戦力としては空軍のヘルマン・ゲーリング師団が到着していたものの、ヒトラーによって約束されたそれ以外の兵力は到着せず、その代わりに、軍法会議で有罪判決を受けた者ばかりで編成された第999師団が届けられる始末だった。

二月二十六日にフォン・アルニムの攻勢は開始されたが、二月のチュニジアは第二雨期に入り、道路はぬかるみ、涸れ谷は急流と化し、低地は水浸しになっていた。部隊の進撃は妨げられ、特に重量のあるティーガーは道路から外れて行動することができず、対戦車砲の格好の的になった。ぬかるみと地雷原で立ち往生する枢軸軍に対し、イギリス軍の反撃が開始された。この戦いでは、悪路の踏破性に優れるチャーチル戦車が活躍した。

ドイツ降下猟兵が陣取った「蒸気ローラー農場」と呼ばれた高地をめぐる戦闘では、第51近衛戦車連隊のホランズ大尉とレントン中尉の二両のチャーチルが峻険な斜面を踏破してドイツ軍を蹴散らし、「一生分の弾を放った」と連隊史に記されるほどの活躍を見せた。

各所でイギリス軍は粘り強く戦い、「牡牛の頭」はすぐに行き詰まった。地雷原に踏み込んだまま身動きが取れなくなったティーガーは破壊して破棄しなければならず、重戦車大隊からは稼働可能なティーガーが姿を消した。

こうして「牡牛の頭」はほとんど成果のないままに終結した。この作戦以後、チュニス方面の枢軸軍は攻勢作戦を行う体力を失い、守勢に回ることになる。

一方、「牡牛の頭」を傍観していたロンメルは、チュニジア南部においてモントゴメリーの第8軍に対する攻勢を計画していた。リビアからの撤退以来、南部戦区のドイツ軍はマレトの防御線に拠っていた。マレトは西のマトマタ山脈と深い涸れ谷



カセリーヌ峠近辺で残骸を晒すドイツ軍戦車。大規模攻勢であった「春の風」作戦は失敗に終わった。以後もドイツ軍は攻勢を行うも、ロンメルの「カプリ」作戦が最後の攻撃的作戦となった。

に守られ、さらにフランス軍の築いたトーチカ類も残っていたため、守るに適した地点だった。しかしロンメルは、英第8軍が西のマトマタ山脈を大きく迂回し、峠道を越えてマレトの後背に出る可能性に気づき、敵が動き出す前にこちらから攻勢をかけようと決断した。

三月六日早朝、ロンメルはモントゴメリーの第8軍に対する攻勢作戦「カプリ」を発動。新司令官にイタリア軍のジョバンニ・メッセ大将を迎えてイタリア第一軍と改称したアフリカ装甲軍を主力とした部隊が動き始めた。

だが、そこで彼らを待ち受けていたのは五〇〇門以上の対戦車砲だった。イギリス軍砲兵はドイツ戦車をぎりぎりまで引きつけ、一斉砲撃を開始した。さらにイギリス空軍が飛来して爆弾の雨を降らせ始めると、ドイツ装甲師団の進撃は早くも行き詰まった。イギリス軍の戦線は攻勢を予期していたかのように強固で、ただでさえ残り少ない戦車は、正午までに五五両が撃破されてしまった。

モントゴメリーはその回想録の中で、「予想通りロンメルは（中略）攻撃を開始してきた」と記している。実はこの時、エニグマ暗号を解読したウルトラ情報によって、モントゴメリーはロンメルの行動を事前に察知していたのである。先手を打たれ、機動戦を封じられたロンメルに次の一手は残されていなかった。麾下部隊司令官との協議の結果、ロンメルは「カプリ」の中止を決定するに至る。

この戦いは、砂漠の狐ロンメルが指揮した、北アフリカでの最後の戦いとなった。彼はついにチュニジアを離れる決意を固めたのである。部下からの別れの言葉に涙を見せたロンメルは、三月九日、機上の人となって慌ただしく北アフリカを後にした。

アフリカ軍集団司令官には当初の予定通りフォン・アルニムが就任した。彼の手もとには一五万の戦闘要員があったが、それは南北八〇〇キロにおよぶ戦線を支えるにはあまりに小規模すぎた。ヒトラーが約束した兵力の多くは、ついに送られてはこなかった。そのうえ、地中海上の補給線はイギリス海軍とマルタ島のイギリス空軍によって常に脅かされていた。そのため兵站はすでに破綻しており、弾薬も食糧も燃料も、すべてが不足していた。

ローマを経由して総統司令部へ赴いたロンメルはヒトラーに対し、現地の部隊が全滅しないうちにシチリアへと撤退させることを進言した。だがヒトラーは語気鋭く、

「アフリカは手放さぬ！」

と言い放ち、ロンメルが再び北アフリカに戻ることを禁じて、病気療養に専念するよう命じた。

約二年間にわたってイギリス軍を苦しめ、神か悪魔のように畏怖されたロンメルは、こうしてひっそりと北アフリカの戦場から退場したのだった。

北アフリカ戦線の崩壊

パットン、第2軍団長に就任

チュニジアを去ったロンメルと入れ替わるように、強烈な個性を持った将軍が表舞台に姿を現した。彼の名はジョージ・S・パットン、新しくアメリカ第2軍団司令官に就任した男である。

前任のフリーデンドールはファイドおよびカセリーヌ峠での敗北の責を問われて更迭されていた。大きな損害を受けた第2軍団の将兵もまた、疲れ果てて意気消沈していた。第18軍集団司令官アレクサンダー大将からは「青二才」と陰口をたたかれ、イギリス兵からは「我々の側のイタリア軍」と罵られた第2軍団を立てなおすことが、パットンに課せられた早急にして絶対の使命であった。

第2軍団司令部に着任した彼がまず始めたのは、服装の乱れを正すことだった。軍団区域内でのヘルメット、ネクタイ、ゲートルの着用を徹底させ、違反した者には将校五〇ドル、兵士二五ドルの罰金を科した。それでも従わぬ者には

「罰金か軍法会議を選べ！」

と怒鳴りつけた。

その厳しさと徹底ぶりは、従軍記者が「非民主的かつ反アメリカ的」と記すほどで、パットンの副官などは「将兵たちは気が狂ったほどに戦闘的になったが、それはドイツ軍に対してではなく、パットンに対してだった」と書き残している。



部隊の視察に回るパットン少将（車上右の人物）。度重なる敗北によって戦意を喪失していたアメリカ第２軍団は、パットンを軍団長に迎えたことで生まれ変わることとなった。

しかしパットンのショック療法が、負け戦で士気を喪失し、気のゆるみを見せていた将兵たちを奮い立たせたことは確かだった。またこの同時期、第2軍団はモロッコの第2装甲師団から戦車や車両の補充を受け、大損害を受けた戦力をも回復させていた。

パットンは一日も早い出撃を望んでいたが、それが叶えられる日がやってきた。三月十七日、ウエスタン・ドーサルのラインから押し出たアメリカ第2軍団は、中部チュニジアを南下し始めた。目標は二月の戦闘で敵に奪われたガフサである。

第2軍団は守備についていたイタリア軍歩兵師団を難なく討ち破り、ガフサ、さらにはエル・ゲタールを奪取した。パットンは第1および第9歩兵師団をエル・ゲタール周辺の守備につかせ、第1装甲師団をもって東側のマクナシー峠を衝かせた。

これに対しマレトのメッセ将軍は、ドイツ第10装甲師団主力を機動予備から引き抜いてさし向け、北からの圧力を排除しようと試みた。さらにフォン・アルニムもマクナシー峠の防衛に、チュニジアに到着したばかりの第504重戦車大隊第1中隊を含むラング大佐の戦闘団を送り込んだ。

一方のパットンは、マクナシー峠を一気に突破して海岸線にいたり、枢軸軍の戦線を崩壊させる計画を立てたが、それはアイゼンハワーによって却下された。なぜなら、アメリカ第2軍団のこの攻撃自体が、マレト線の枢軸軍に対する陽動作戦であったからだ。

三月二十日、マレト線正面に陣取るモントゴメリーの第8軍が攻勢を開始した。大量の火砲による大規模な準備射撃に続き、英第50ノーザンブリア師団、第51ハイランド師団を先頭に第30軍団がマレト線へ取りついた。

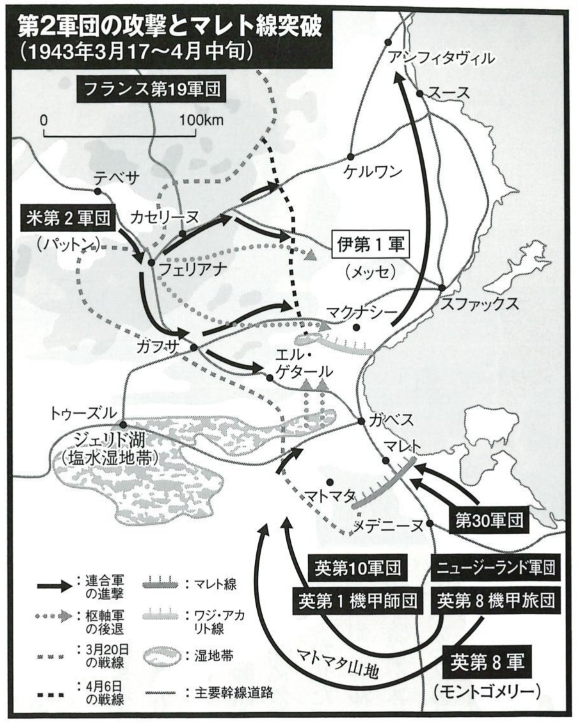
このマレト線正面への攻撃はドイツ第15装甲師団の反撃にあって撃退されたが、モントゴメリーはすでに別の手を打っていた。この時、バーナード・フレイバーグ中将のニュージーランド軍団ならびに第8機甲旅団が、西のマトマタ山地を迂回してマレト線の後背に進出していたのである。モントゴメリーはこの迂回部隊を主攻部隊に変更し、機動予備としていた第10軍団から第1機甲師団を引き抜いて支援のために派遣した。

いまやメッセのイタリア第1軍は、前面と側面をモントゴメリーの第8軍に、後方をパットンのアメリカ第2軍団に脅かされていた。メッセはマレト線の死守は不可能と判断し、さらに後方のワジ・アカリト線への後退を決断するに至った。三月二十六日、第21および第15装甲師団がわずか五三両となった戦車で必死にフレイバーグ部隊を食い止めている間に、脱出した歩兵部隊は無事にワジ・アカリトへと後退することに成功する。

モントゴメリーはまたしても宿敵のアフリカ軍団を取り逃がすことになったが、彼は分進していた部隊をまとめると、四月六日、ワジ・アカリト線に対する攻撃を開始した。

ワジ・アカリト線は、部隊の移動が困難な塩湖地帯に西側を守られ、東側は海岸線に接するという天然の要害ではあったが、モントゴメリーは「この世の終わりを思わせるような」弾幕射撃を行わせ、歩兵師団による攻撃を開始。メッセは第15装甲師団を前線に送って反撃を試みたが、勇猛果敢なグルカ兵を含む第4インド師団が高地を奪

取したことで、イタリア軍の戦線がまず崩れ始めた。
　状況を把握したメッセはワジ・アカリト線の保持は不可能と判断し、さらに北方のアンフィタヴィルへの撤退を命じた。イタリア第1軍は四月十二日までにアンフィタヴィル周辺の防御線へ至り、困難な撤退戦を成功させた。しかしそれは、むなしいほどに小さな成功だった。
　イタリア第1軍が後退したことで、モントゴメリーの第8軍とパットンの第2軍団はついに合流を果たし、包囲の環が閉じられた。いまやチュニジアの枢軸軍は、アンフィタヴィルと北部のセラト岬とを結ぶラインの内側に閉じこめられたのだった。
　アイゼンハワーの手にはイギリス軍一五個師団、アメリカ軍五個師団、フランス軍一個軍団があり、それらは優勢な空軍に支援されていた。それに比べフォン・アルニムの手もとには、定数の五分の二にまで兵力をすり減らした九個師団と、雑多な小部隊があるにすぎず、補給もほとんど途絶えた状態だった。



パットンの第2軍団がガフサおよびカセリーヌを突破、エル・ゲタールを陥し、海岸線に達しようとしたが、この案は却下された。そしてその後、イギリス第8軍のニュージーランド軍団等の部隊にマレト線と塩水湿地帯の間隙を突かれ、アメリカ第2軍団によって後方も脅かされた枢軸の第1軍はワジ・アカリト線に後退するが、これも突破された。

フォン・アルニムは、立場をかえて「ダンケルク」を再現するか、全滅するまで戦うかの、二者択一を迫られていた。

最終戦への準備

　チュニジアの維持について悲観的な見通しを立てたフォン・アルニムはイタリアへの撤退を進言したが、ヒトラーはこれを認めず、北アフリカを失ってはならないと主張した。
　北アフリカ失陥の次にくるものは、チュニジアを足がかりにした連合軍の南ヨーロッパへの攻撃であり、ムッソリーニ政権の崩壊であると、ヒトラーは予見していた。そういった事態を防ぐためにも、チュニジア戦線は絶対に維持しなくてはならなかった。
　しかし、その使命を課せられたフォン・アルニムの軍集団はチュニジアの一角に押し込められ、疲弊しきっていた。一日一五万トンが必要と見込まれた補給物資は、三月の段階で五万トン強が輸送されているにすぎなかった。しかも弾薬の輸送が優先されたため、四月の末頃になると兵士たちは一日二切れのパンで空腹をしのがねばならなくなった。
　一方の英米軍には、新たにイギリス第9軍団を編成するほどの兵力の余裕があり、チュニスへの最後の一手を第1軍と第8軍のどちらが担当するかが、最大の関心事だった。
　だがこの時、かつてのロンメルとフォン・アルニムのような主導権争いは起こらなかった。第8軍正面の地形は山地が多く、迅速な進撃が不可能と判断したモントゴメリーは、第1軍が攻勢の主攻を担当すべきであるとの判断を明らかにしたのだ。これに同意したアレクサンダーは、第8軍の麾下戦力から第1機甲師団を第1軍へ回すよう要請し、モントゴメリーもこれを受け入れたのだった。
　しかし、この決定に不平の声を上げた者がいた。パットンである。アレクサンダーの作戦計画によれば、各部隊は北からイギリス第1軍、アメリカ第2軍団、フランス第19軍団、イギリス第8軍と配置されることになっていたが、これでは第2軍団は進撃を続けるうちに第1軍と第8軍の戦区に挟まれ、思うように前進ができなくなるとパットンは判断した。
　厳格な人物であったアレクサンダーは、アメリカ軍を「無教養で、ろくに訓練も受けていない」「精神も肉体も軟

弱な青二才」だと見なして信頼せず、彼らに重要な戦区を任せることには否定的だった。これに対しパットンは、アレクサンダーに命令を下せる人物、すなわちアイゼンハワー最高司令官のもとへ副司令のオマー・ブラッドレー少将を派遣した。「我々は下請けではない。我々独自の目標を持って行動すべきだ」というのがパットンの主張で、彼は配置換えを要請したのだった。
　この主張に理解を示したアイゼンハワーは、アレクサンダーを極めて穏やかに説得し、第2軍団の配置換えを認めさせた。パットンが育て上げたアメリカ軍は、港湾都市ビゼルタの攻略が任務として与えられ、攻勢作戦を前にチュニジア北部へと移動した。そしてこれが、パットンの第2軍団での最後の仕事となった。来るべきシチリア上陸作戦「ハスキー」の準備に専念するためにパットンは部隊を離れ、その後任にはブラッドレー少将が任命されたのだった。

チュニジアの失陥

　こうして、連合軍第18軍集団の攻勢作戦の準備が整った。作戦名「ヴァルカン」は四月十九日の夜、主攻部隊に先んじて第8軍のイタリア第1軍への攻撃で幕を開けた。
　フォン・アルニムは第8軍の動きが牽制であると読み、チュニス西方のメジェズ・エル・バブ周辺に集結中のイギリス第1軍を叩き、攻勢の出鼻を挫こうとした。だが、第10装甲師団と第504重戦車大隊を主力としたこの四月二十日の攻撃は、イギリス第21戦車旅団の反撃によって頓挫してしまう。
　四月二十二日、ついにチュニスおよびビゼルタへの攻勢が開始された。クロッカー将軍のイギリス第9軍団とオルフレイ将軍の第5軍団がチュニスへと迫り、ブラッドレーのアメリカ第2軍団はビゼルタへの街道を突き進む。枢軸軍は高地帯に構築した陣地に拠って激しく抵抗し、進撃する英米軍に出血を強いたが、兵力の差はいかんともしがたかった。四月の終わりにかけて枢軸軍は各所で抵抗を続けながらも、一つまた一つと陣地を明け渡し、東へと追いこまれていった。
　アレクサンダーは勝敗を決すべく、枢軸軍の戦線を突破してチュニスを占領する最後の作戦「ストライク」を準備していた。第8軍からさらに歴戦の第7機甲師団、第4インド師団などがチュニス方面に引き抜かれ、地上支援用の約三〇〇〇の空軍機が戦線後方に展開した。そして五月六日午前三時三十分、アレクサンダーは作戦の発動を命じた。
　チュニスに通じる街道の両側三キロの範囲で、凄まじい規模の準備射撃が開始された。そして第4インド師団、第4歩兵師団が敵戦線に突破口を開き、そこから第6および第7機甲師団が雪崩れ込んだ。
　この攻勢に対しフォン・アルニムは、残余の戦車戦力——Ⅲ号戦車三五両、短砲身七・五センチ砲搭載Ⅲ号N型一三両、Ⅳ号戦車長砲身型一七両、ティーガー四両、イタリア軍の突撃砲一両および戦車六両を、敵機甲師団に対しさし向けた。チュニス前面で激しい戦車戦が展開され、ドイツ軍は九〇両の敵戦車を撃破したと主張したが、自身の被害も甚大で、稼働戦車は一〇両にまで減少した。
　この時、イギリス第1軍司令官アンダーソンは戦車部隊を旋回させて敵前線部隊を包囲しようとしたが、「剣は心臓に刺さねばならない」と考えていたアレクサンダーは同意せず、チュニス占領を優先するよう命じた。
　もはや奔流と化したイギリス軍を押しとどめる術はなく、翌五月七日午後三時三〇分、第6機甲師団麾下の二個戦車連隊がチュニスへの入城を果たし

チュニスを目指して前進を開始するイギリス軍部隊。この攻勢によって、北アフリカ戦線のドイツ・イタリア両軍にとって、最後の時が訪れようとしていた。


チュニス攻略戦時の連合軍

第18軍集団（司令官:アレクサンダー大将）

イギリス第1軍（司令官:アンダーソン中将）

イギリス第5軍団（司令官:オルフレイ少将）
第6機甲師団、第1歩兵師団、第4歩兵師団、第87歩兵師団

イギリス第9軍団（司令官:クロッカー少将）
第1機甲師団、第46歩兵師団

アメリカ第2軍団（司令官:ブラッドレー少将）
第1機甲師団（米）、第1歩兵師団（米）、第9歩兵師団、第34歩兵師団

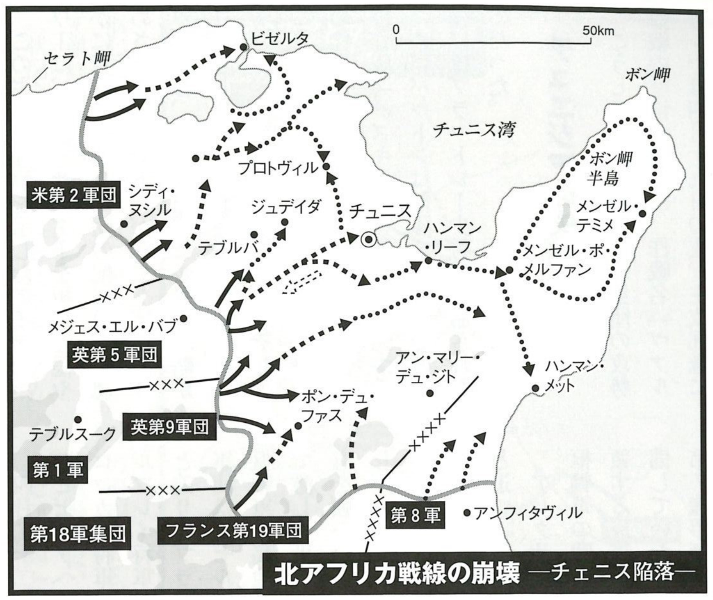
フランス第19軍団（司令官:ケルツ将軍）
オラン師団、モロッコ師団、アルジェリア師団

イギリス第8軍（司令官:モントゴメリー中将）
第7機甲師団、第4インド師団、第2ニュージーランド師団、第51歩兵師団、第50歩兵師団

※イギリス第8軍の第7機甲、第4インド両師団は、4月末に第9軍団に移動。

チュニス攻略戦時のアフリカ軍集団の部隊

第10装甲師団	第999師団
第15装甲師団	スペルガ師団
第21装甲師団	スペッツィア師団
HG降下猟兵師団	トリエステ師団
第334歩兵師団	ピストイア師団
マントイフェル師団	チェンタウロ戦車師団
第164軽師団	青年ファシスト師団
第90軽師団	



(左)チュニス攻略前に十分な戦力を整えた連合軍は、新たに第9軍団を編成するほどになっていた。これに対する枢軸軍部隊は十分な補給・補充を受けることなく、残存部隊を再編成せざるを得なかった。(上)チュニス攻略は連合軍の圧倒的な戦力をもって行われた。ボン岬半島に枢軸軍が逃げ込むことをおそれた連合軍は半島を分断することに成功。この段階でチュニス攻略は実質的に終わったといえる。

た。その進撃はあまりに急速であったためチュニス市内に残っていたドイツ兵も対処できず、中にはカフェでお茶を飲んでいたドイツ兵もいたという。また同日午後四時一五分には、アメリカ軍第9歩兵師団もビゼルタへの突入に成功していた。

チュニスを占領した第6機甲師団は進路を南東に変え、さらに突き進んだ。枢軸軍がボン岬半島へ逃げ込むのを阻止するためである。ボン岬半島の付け根には丘陵地が連なり、守るに適した土地であった。ここに枢軸軍が逃げ込むのを阻止するには、半島への入口に当たる北のハンマン・リーフと、南のハンマン・メットを押さえねばならない。

ドイツの西方電撃戦ばりの速度で進撃した第6機甲師団は、九日にはハンマン・リーフを、翌十日にはハンマン・メットを奪取し、半島への出入り口を押さえることに成功する。このため、すでに半島へ達していた一部の枢軸軍は、他の戦区と分断されてしまった。

すでに枢軸軍の戦線は崩壊し、各部隊は散り散りのまま各所で個別の抵抗を続けるだけとなった。五月十一日、ヒトラーから「最後の一発まで戦うことを期待する」との命令が届けられたが、フォン・アルニムらは「近代戦における〝最後の一発〟とは、敵戦車を撃破しうる最後の砲弾」と解釈し、その〝一発〟を使い果たした部隊は装備を破壊したのち、敵に降伏せよ——と全軍に布告した。

五月十二日から十三日にかけて、「最後の一発」を使い果たした枢軸軍は、各所で白旗を揚げた。アフリカ戦の初期から戦い続けてきた第90軽師団の将兵は、長年のライバルであった第2ニュージーランド師団に投降した。

フォン・アルニムと、ドイツ・アフリカ軍団最後の司令官となったクラマー大将は、歴戦の第4インド師団にその身を預けた。投降に際しクラマーは、次のようなアフリカ軍団最後の通信を発した。

「ドイツ・アフリカ軍団の伝統が受け継がれてゆくことを信ずる。アフリカ万歳！」

五月十三日、イタリア第1軍のメッセが、宿敵だった第8軍に投降した。エル・アラメイン以来、ロンメルのもとで戦ってきたリーベンシュタイン少将の第164軽師団がその銃を置いた時、アフリカ軍集団最後の抵抗が終わり、チュニジアにおけるすべての戦闘も終結したのだった。

この北アフリカをめぐる戦いにおいて、一万八五九四名のドイツ兵と一万三七四八名のイタリア兵が戦場に散り、両軍合わせ約二七万五〇〇〇名が捕虜となった。枢軸軍は貴重な戦力——とりわけ経験豊富なアフリカ装甲軍の将兵を、この副次的な戦線においてむざむざと失う羽目になったのである。

それぞれの北アフリカ

この戦線の真の主役であったイギリスは、三万五九四〇名の犠牲者を出しながらも、大英帝国の生命線である地中海とスエズ運河の防衛に成功した。

一方、青二才とまで呼ばれたアメリカ軍は、一万三九八四名分の命と引き替えに貴重な経験を積みかさね、さらにパットンという強い個性に指導された結果、一端の戦える軍隊へと成長した。

ただし彼らは、戦車戦における損害の多さの原因を経験不足のみに求め、戦場で相まみえたティーガー重戦車の脅威を軽く見積もってしまった。そのためアメリカ機甲部隊はドイツ重戦車への対応については後手に回り、続くシチリアおよびイタリア戦、そしてノルマンディー上陸後の地上戦においては、ティーガーおよびパンターに対し、攻撃力も防御力も劣るM4シャーマンで対処せざるを得ない状況に追いこまれることになる。

とはいえ、英米両軍にとってトーチ作戦が貴重な経験の場となったことは確かだった。両軍合同による初の上陸作戦ということで、兵站面をはじめ幾つかの混乱はあったが、それもまた来るべき大反攻に備えての、よい予行演習となった。連合軍は続くシチリアならびにイタリア本土への上陸作戦でさらに経験と試行錯誤を重ね、それはノルマンディー上陸作戦へとつながってゆくことになる。

他方、ドイツにとって北アフリカ戦線とは、ほとんどムッソリーニ政権の崩壊を阻止するためだけの「尻ぬぐい」の戦いでしかなかった。ヒトラー、そしてドイツ軍最高司令部も、北アフリカの失陥がイタリアの崩壊につながり、それが欧州全体の戦況を覆しかねないと予見しながらも、あくまでも副次的な戦線という認識をあらためることはなかった。ドイツにとって北アフリカ戦線は、敗れるべくして敗れた戦いであったと言える。

それでも北アフリカの部隊は、最後の瞬間まで戦い続けた。北アフリカ戦線が現在でも人々の関心を引きつけてやまないのは、ロンメルやモントゴメリー、あるいはパットンといった個性の衝突もさることながら、兵力と補給の不足、最高司令部の無理解に苦悩しながらも、最後まで戦い抜いた枢軸軍将兵の姿に、胸を打たれるからではないだろうか。



北アフリカの戦いはついに終わった。写真は捕虜となった枢軸軍の兵士たち。ドイツは単なる支戦線であるはずの北アフリカに物資と戦力を投入したが、結局この地を失うことになった。その後、連合軍は大部隊でもってイタリアにやってくることになる。

北アフリカ戦線略史

1940年	
9月13日	イタリア軍、エジプト侵攻。
12月9日	イギリス軍によるコンパス作戦。イタリア軍を撃退。
1941年	
2月19日	アフリカ軍団編成。司令官にロンメル中将就任。
4月	トブルクへの攻撃開始。
5月15日	イギリス軍、トブルク救援作戦「プレビティー」作戦発動するも、失敗。
6月15日	イギリス軍による「バトルアクス」作戦。失敗に終わる。
8月15日	ドイツ、イタリア両軍からなるアフリカ装甲集団編成。ロンメル、大将に昇進。
11月18日	「クルセイダー」作戦。イギリス軍、トブルクを解放。
1942年	
1月23日	アフリカ装甲軍に昇格。ロンメル、上級大将に昇進。
5月26日	アフリカ装甲軍、「ベネチア」作戦発動（ガザラ・ボックスの戦い）。
5月27日	ナイツ・ブリッジの戦い。
6月21日	アフリカ装甲軍、トブルクを占領。のちにロンメル、元帥となる。
7月	アフリカ装甲軍、エジプトに侵攻。エル・アラメインへの攻撃を行うが、失敗に終わる（第1次エル・アラメイン戦）。
7月10日	イギリス軍、反撃に出るが失敗に終わる。
8月	イギリス中東方面軍総司令官にアレクサンダー大将、第8軍司令官にモントゴメリー中将が就任
8月30日	アフリカ装甲軍、再度エル・アラメインに攻勢をかけるも失敗に終わる（第2次エル・アラメイン戦）。
10月30日	イギリス軍、大反攻作戦「スーパーチャージ」を発動。
11月5日	アフリカ装甲軍、撤退を開始。
11月8日	連合軍、「トーチ」作戦を発動。北西アフリカに上陸。
11月14日	枢軸軍、チュニジア防衛の第90軍団編成。
12月	第5装甲軍が編成され、司令官にフォン・アルニム上級大将が就任。
1943年	
2月14日	枢軸軍、「春の風」作戦を発動するも失敗。
3月	マレト線、突破される。ロンメル、北アフリカを去る。
5月13日	枢軸軍、降伏。

〈参考文献〉パウル・カレル　松谷健二訳『砂漠の狐』中央公論社／リチャード・コリアー　浦野進訳『ロンメル対モントゴメリー』タイムライフブックス編集部／デイヴィッド・アーヴィング　小城正訳『狐の足跡上・下』早川書房／デズモンド・ヤング　清水政二訳『ロンメル将軍』ハヤカワ文庫／B・L・モントゴメリー　高橋光夫・船坂弘訳『モントゴメリー回想録』読売新聞社／アラン・ムーアヘッド　平井イサク訳『砂漠の戦争』ハヤカワ文庫／チャールズ・ホワイティング　田辺一雄訳『猛将パットン』サンケイ新聞社出版局／ケネス・マクセイ　菊池晟訳『米英機甲部隊』サンケイ新聞社出版局／リデル・ハート　森沢亀鶴訳『戦略論・下』原書房／北村裕司『チュニジアの戦い1942〜43上・下』デルタ出版／『欧州戦史シリーズ・北アフリカ戦線』学研／『欧州戦史シリーズ・アメリカ陸軍全史』学研／『戦略戦術兵器事典4・ヨーロッパWWII陸空軍編』学研／ブライアン・ペレット　三貴雅智訳『チャーチル歩兵戦車1941—1951』大日本絵画／スティーブン・ザロガ　三貴雅智訳『シャーマン中戦車1942—1945』大日本絵画



敵中突破三〇〇里

関ヶ原 島津退き口

SEKIGAHARA SHIMAZU NOKIGUCHI

文＝桐野作人
タイトル・イラストレーション＝谷井建三

**全軍敗走のなか
遙かなる故国をめざして
剽悍決死の薩摩兵児は敵中を走る
世に言う「島津の退き口」である
だが、島津家はなぜ
かくも少数の兵のみで関ヶ原を戦ったのか
戦場を脱した彼らはその後
どのような運命を辿ったのか
日本戦史上の快挙の全貌を描く**

中馬大蔵の涙

中馬大蔵という戦国の遺風を残す薩摩武士がいた。戦史上有名な〝島津の退き口〟で生き残った一人である。彼は帰国後、薩摩国出水郡西目に居住した。禄高八四石余。そのうち五〇石は島津義弘を守って帰国した功により加増されたものである。

関ヶ原合戦から三〇年ほどたった頃、鹿児島城下の若い二才衆（青年たち）が数少ない生き残りとなった中馬に当時の体験談を聞こうと、二十数里の道を歩いて訪ねてきた。中馬は麻の裃を着し、威儀を正して二才衆の前に対座した。そのときの様子を『薩藩士風沿革』は次のように記している。

「『お話を申し上げましょう』と言って、麻の上下で床を背にして坐り、『関ヶ原と申すは……』と言い出したきり絶句し、なかなか感涙が止まらず、それより先には進まなかった。二才衆もしばらく手持ちぶさたになって何も言えなかった。みなは帰路の道すがら、『中馬殿の話はこれまで幾度も承ったものよりも優れていた』と語って帰宅したという。さぞや言葉にも言われぬほどのご難儀を思いやるべし」

関ヶ原への道

複雑な島津本宗家の内情

関ヶ原合戦で敗北した西軍方でひときわ異彩を放っていたのは、惟新こと島津義弘率いる島津勢の敵中突破である。

世に「島津の退き口」として知られるが、じつは意外とわからないことが多いし、不確かな通説や明らかに誤っている俗説が流通しているのが実情である。

たとえば、西軍の事実上の総大将である石田三成と軍議の席上、意見が対立して不仲になったという説。そしてそのために、東西両軍の戦闘が始まったにもかかわらず、島津勢は静観したまま不戦だったという説などがそうである。また退却戦においても、そのルートを島津越えから近江高宮経由とすること、帰国した人数が八〇人程度しかいなかったとすることなどには疑問がある。

これらの疑問点について再検討を加えつつ、島津勢の参戦から退却戦によって帰国するまでを辿ってみたい。

島津氏と豊臣政権との関係は複雑だが、関ヶ原合戦への参陣という意思決定の過程を明らかにするためにも、少し詳しく触れておきたい。

島津家では義久が十六代当主で、薩隅日の三か国守護を兼ねて「太守」と呼ばれていた。しかし、義久は五十歳を過ぎても男子がなかった。そのためか、天正十三年（一五八五）六月頃、義久はいったん次弟の義弘に家督を譲ることを表明した形跡がある。だが、この一件は時期は不明だが、何らかの理由で沙汰止みになった。

同十五年七月、大軍で攻め寄せた豊臣秀吉に対し、義久は剃髪して降伏し、以後、龍伯と名乗った。そのため、豊臣政権は義久を隠居として遇したのか、島津氏への秀吉朱印状と知行目録の宛所を義弘にした。これにより、豊臣政権に対する島津氏の代表は義弘になったのである。また官位においても、義弘は殿上の資格を有する公家成を遂げて羽柴名字を与えられ、羽柴薩摩侍従と呼ばれた（義久は出家のため、とくに任官していない）。これは伊達政宗や長宗我部元親などの外様大名と同等であり、堂々たる国持大名としての処遇である。知行関係においても、義弘は義久とともに一〇万石の蔵入地を有して並び立った。こうした両者の地位と関係を評して、「両殿体制」と呼ぶ説もある。つまり、島津家には大名が二人いるというわけである。

こうした豊臣政権の引き立てで義弘の地位が上昇したことは、現在においても義弘を島津家十七代当主とみる主たる根拠になっている。しかし、島津家中の身分原理に基づくかぎり、義弘を当主と認定するのは困難である。義弘が本宗家当主でなかったことは、義久が義弘の子である嫡男久保、次いで二男忠恒を三女亀寿の婿に迎えて家督継承者にしたことでも明らかである（久保は朝鮮在陣中に陣没）。

島津家中の身分秩序ではあくまで義久が本宗家の当主だが、豊臣政権との関係（とくに武家官位制）に限れば、義弘が豊臣大名だともいえるのである。もっとも、義弘は長幼の序と嫡庶のけじめを守り、常に兄義久を立てていた。

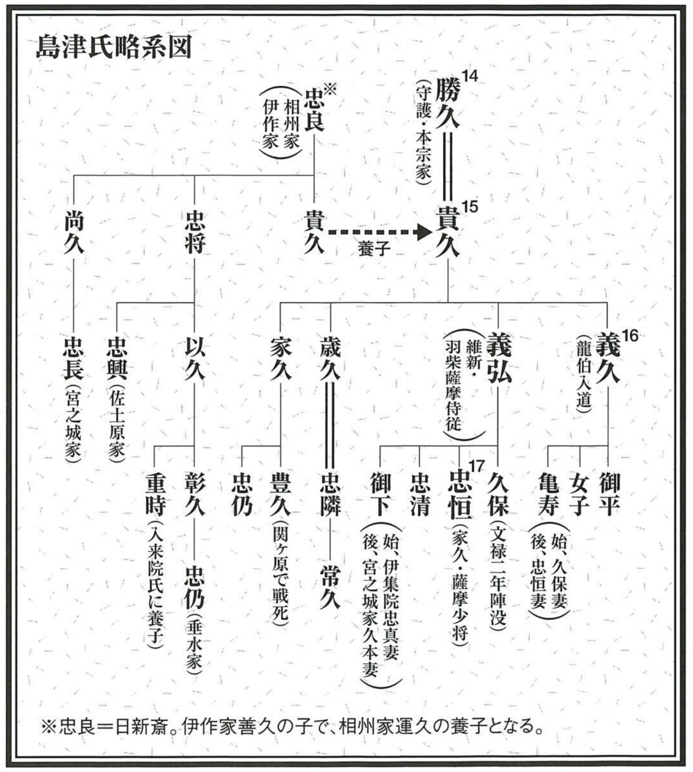
伊集院幸侃殺害と庄内の乱

慶長四年（一五九九）二月、義久が女婿の忠恒（義弘二男）に家督を譲ったことにより、島津本宗家は「両殿」から「三殿」となった。義久が大隅国富隈、義弘が同国帖佐、そして忠恒が薩摩国鹿児島にそれぞれ居城を築いたのである。これに伴い、家臣団も「三殿」ごとに別々に編成されることになった。当然、島津家中の意思決定のあり方は、義久に一元化されていた時代よりもずっと複雑になる。

家督交替の直後、一大異変が勃発した。三月九日、薩摩少将忠恒は伏見屋敷で筆頭老中の伊集院幸侃を手討ちにし、そののち、洛北高雄の神護寺に入って蟄居したのである。なぜ忠恒は島津家の大黒柱である筆頭老中をこんな荒っぽい形で処断したのだろうか。

もともと豊臣政権に対する島津家中のスタンスは複雑かつ分裂的で、義弘—幸侃ラインが石田三成を通じて豊臣政権への求心力を高める傾向があるのに対して、義久と家中の多くが旧戦国大名らしく中央への遠心力を働かせて自立を志向しようとしていた。

忠恒は家督継承を推薦してくれた三成に恩義があり、どちらかといえば前者の立場で実父義弘に従うかにみえたが、舅義久からの家督譲渡という恩義に拘束されていたともいえる。その後、関ヶ原合戦直後まで忠恒は一貫して義久の統制下にある。そして、義久が忠恒を含めて国許の家中を掌握したことが、関ヶ原合戦への参陣が消極的になる要因でもあった。義久の関心は中央政局の動向よりも、自身の太守権回復に向けられており、幸侃殺害がその好



島津家は鎌倉以来の名家だったが、本宗家は室町時代に衰退し、庶家が対立していた。この内訌をおさめたのが日新斎忠良であり、最終的には子の貴久が本宗家の家督を奪取して、その後を義久が継ぐ。

機となったのである。

主人を殺された伊集院氏も黙っていなかった。嫡男忠真は義久の開城命令を拒絶した。伊集院氏は隅日の国境をまたいで八万石の禄高を誇る家中随一の大身である。そして「庄内十二外城」と呼ばれる、都城を中心とした支城群を有して防備を固めたのである。いわゆる庄内の乱の勃発だった。

ともあれ、太閤秀吉健在なら、忠恒はただちに切腹を命じられ、島津家の危急存亡に関わる大事件になったに違いない。五奉行の石田三成もさっそく忠恒に高野山への追放処分を命じようとしたほどだ。

しかし、これに徳川家康が横やりを入れてきた。家康は五大老筆頭であり、太閤秀吉と前田利家亡きあと、豊臣公儀の執政として専権を振るっていた。家康は三成の意向を覆し、逆に忠恒の蟄居を解いて伏見屋敷に帰らせた。家康は幸侃殺害の一件を事実上不問にし、忠恒に帰国して伊集院忠真の叛逆を討つよう命じたのである。

家康はあらゆる手段を使って豊臣政権の弱体化を図りつつ、諸大名を自陣営に引きつけようと策していた。幸侃殺害事件も島津氏に恩を売りつける好機だったのである。

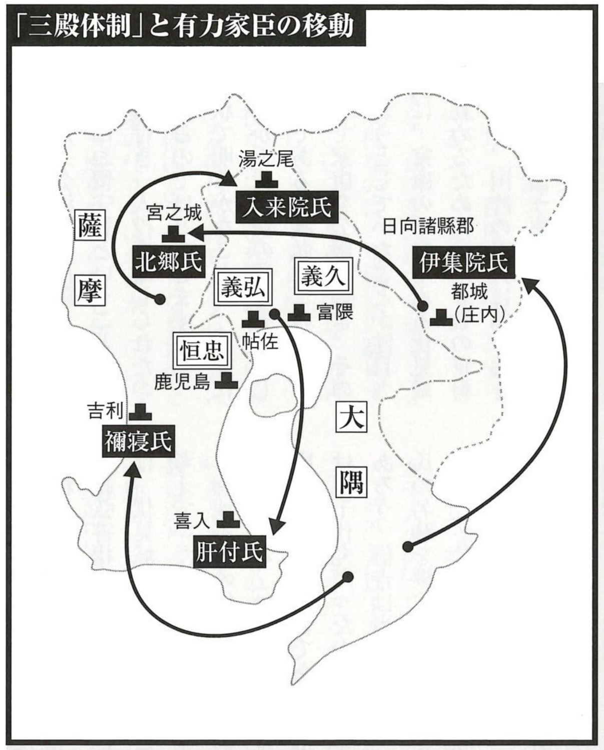
帰国した忠恒は同年六月、総力をあげて伊集院忠真を攻め立てたが、庄内十二外城の守りは堅く、苦戦に陥った。ようやく休戦が実現し、忠真主従が開城に応じたのは翌慶長五年（一六〇〇）三月である。じつに九か月近い泥沼の内戦だった。また開城交渉でも、家康が山口直友を派遣して和睦を成立させた。義久—忠恒ラインは自力で伊集院氏を成敗できず、家康の援助を受けることになった。

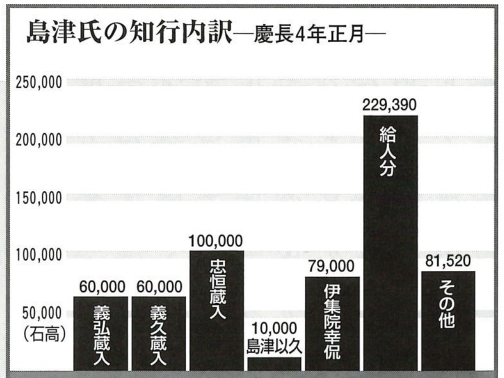
庄内の乱の終息は関ヶ原合戦のわずか半年前である。義久—忠恒ラインは幸侃が体現していた豊臣体制（＝太守権の制約）を払拭することには成功したものの、今度は家康に数々の恩義を受けたため、敵対しにくい状況にあったことは容易に理解されよう。

義弘と伏見城留守番

四月二十七日、義弘は庄内の乱平定の御礼言上のために伏見から大坂に下り、家康と対面する。対面した場所はおそらく大坂城西ノ丸御殿であろう。

家康は、上杉景勝の上洛が延引しており、その返事次第では家康自身が出馬することになるだろうから、そのと





島津家は主君の権力が低い、いわば国人領主連合ともいえる「一揆体制」の古い権力形態を保つ戦国大名であった。このため、統治権強化のため、「三殿体制」の発足にともない、有力国人領主は本貫の地から移動させられた。さらに豊臣秀吉にお目見え資格を持つ伊集院氏は、その高い知行高から一種の独立国を形成していた。複雑な統治体系を保ち、改革の途上故に家臣団が政治的緊張状態にある島津家は、決して一枚岩の大名家ではなかった。



島津義弘画像。兄の代わりに、豊臣大名となった義弘ではあったが、島津家での地位はNo.2。政治的には、中央指向が強い改革派であった。また、極めて優秀な指揮官で、野戦で兵を率いるセンスに優れていた。（尚古集成館像）

きは義弘に伏見城の留守番をしてほしいと命じた。

関ヶ原合戦における島津方の根本史料といってよいのが『旧記雑録後編三』である。そのなかで、義弘は家康との会談ののち、国許の兄義久に宛てて書状を送っている（一〇九八号、以下、同書は史料番号のみ示す）。

「伏見城のお留守番に決まりますれば、人数（軍勢）を揃えられないと御家のためにもよろしくありませんし、そのうえ、天下の取り沙汰もいかがかと存じます。人数の件はきっと上京するようにお命じ下さい。伏見城を請け取ることになれば、諸口（諸門）も多くありますので、人数も過分に必要です。（中略）庄内に在陣した諸侍には（再度の出陣は）迷惑かもしれません。しかし、こちらでは一〇〇石に三人役が命じられて奥州（会津）に出陣するとのこと。当方はお留守番ということで、一〇〇石に付き一人役を命じられたので調えられるのではと存じます」

この書状で明らかなことは、第一に義弘は家康から伏見城の留守番を命じられたことである。義弘はこの時点では、あくまで家康を公儀と仰ぎ、その下知に従おうとしていたことが注目される。次に、家康の下知である伏見城留守番を勤めるためには、多数の軍勢が必要なので、国許の義久に急ぎ兵を上らせてくれるよう依頼していることである。

第三に、会津出陣における軍役の一端がうかがわれることである。すなわち、会津に出陣する大名は一〇〇石に付き三人役（一万石に付き三〇〇人）、上方の留守を守る大名は同じく一人役（一万石に付き一〇〇人）という具合である。

島津氏の領知高は六二万石余だが、そのうち「三殿」の無役分（軍役を負担しなくてよい禄高）が義久・義弘の各六万石、忠恒の七万石の計一九万石あることから、無役分を差し引けば四三万石となり、軍役数は四三〇〇人となる。義弘が想定していた上方駐屯の島津勢は最低でこれくらいだったと思われる。

義弘書状でもうひとつ注目すべき点は、伏見城の守備を家康がどのように考えていたかである。その主将は「伏ミ（見）御城本丸の儀は、御満様御在番なさる」とある。「御満様」というのは、家康五男の武田信吉である。信吉の幼名は万千代丸だったから、その当て字であろう。信吉は当年十八歳。名門武田氏の名跡を継ぐことを期待され、文禄元年（一五九二）に下総佐倉一〇万石を与えられていた。

この時点で、家康は一子信吉を名代として残すものの、伏見城の守備をそれほど重視しているとは思えない。家康が伏見城に鳥居元忠・松平家忠・内藤家長ら譜代衆を入れる決断をするのは、二か月後の六月十七日、会津出陣のため、大坂城を発して伏見城に立ち寄ったときである。

西軍の挙兵に対する義弘の対応

会津の上杉景勝が上洛命令に応じなかったので、六月十六日、家康は会津攻めのために大坂を発した。

家康が豊家恩顧の諸大名を率いて関東に下ったために、上方には大きな権力の空白が生まれた。その間隙を衝いたのが、近江佐和山に隠居していた元奉行の石田三成である。三成は大谷吉継や毛利家の使僧安国寺恵瓊らと語らい、毛利輝元を西軍の総帥に戴いて挙兵することを申し合わせた。これに長束正家・増田長盛・前田玄以の三奉行も同意した。七月十二日のことである。

三奉行の呼びかけに応じて輝元が大坂に上ってきたのが十六日夜である。輝元は翌十七日に家康の御座所だった大坂城西ノ丸に入った。そして同日、三奉行連署による「内府ちかひ（違）の条々」という有名な家康弾劾状が発せられた。ここに西軍が大坂を制して挙兵したことが明らかになったのである。

大坂が西軍によって制圧された頃、伏見の義弘主従はどうしていたのか。義弘も西軍挙兵をすぐ察知し、手遅れにならないうちに伏見城に入城しようとした形跡がある。七月十二日かその前日に認められたと思われる「覚」がある（一一三三号）。

その第一条に「伏見御城本丸・西丸の間に御番仕るべきの由、両度に及び理りを申すといえども、ご納得無く候事」とある。義弘が伏見城の本丸か西ノ丸を守備したいと城側に二度にわたり申し出たが、納得してもらえなかったというわけである。

なぜ鳥居元忠らが義弘主従を城内に入れなかったのか。それは家康が義弘に伏見城在番を命じたという確証がとれなかったからだろう。だから、義弘の申し出を疑ったのも無理はない。城内に譜代衆以外の異分子を抱え込むのは籠城に危険だからである。

そして、第六条に「右の如くご城内へ在番致さず候はば、大坂へ罷り下り、秀頼様御側へ堪忍致すべくと存じ候事」とある。伏見城在番ができなくなったら、大坂に下って秀頼のそば近くにいることがご奉公だというのである。はっきり書いていないが、大坂の秀頼に仕えることは、西軍に属することを意味する。また、第二条、三条には安国寺恵瓊と連絡をとっている旨書かれており、七月十二日の時点で、義弘は早くも西軍に加わる決断を下していたのである。やはり、三成との結びつきが強かったといわざるをえない。

義弘勢の人数はどれくらいか

島津家は六二万石の大身ながら、上方に詰めている人数は極端に少なかった。なぜかといえば、義弘は朝鮮から帰ると、そのまま上方に滞在したが、引き連れていた軍勢はほとんどが庄内の乱鎮定のため忠恒とともに帰国したからである。

義弘の軍勢がどれくらいの人数であったかは、関ヶ原合戦への関与のありかた、ひいてはその退き口の実態解明のためにも重要である。義弘が西軍への加担を決めた七月中旬頃、その兵数は「旗下士卒二百余人に過ぎず」とあり、二〇〇人にも満たなかったようである（一一四九号）。それから、伏見落城ののち、濃州垂井の陣所まで進出したとき、国許の家老、本田正親に宛てた書状（八月二十日付）では次のように書いている（一一五九号）。

「さてまた、長宗我部殿は全軍で二〇〇〇人の軍役なのに、秀頼様に馳走するために五〇〇〇人も召し列ね、近日伊勢へ着陣したとか。立花殿は一三〇〇人の軍役なのに、これも馳走のために四〇〇〇人召し列ねて、今日上方に着到した。他国がこのような有様のところ、薩摩の仕立てはわずか一〇〇〇人ほどで、当地をやりくりすることは幾度申しても面目ない次第で、筆舌に尽くしがたい」

義弘は長宗我部盛親や立花統虎の軍勢と比較して、上方駐屯の島津勢の少なさを嘆いている。盛親は土佐二二万石の大名だから、二〇〇〇人の軍役ということは、ほぼ一人役（二万石が無役分か）である。統虎は筑後柳川一三万余石だから、これも一人役である。両者とも義弘同様に、家康から会津出陣ではなく上方在番を命じられていたものとみえる。ところが、両者とも規定軍役の三倍前後の軍勢を率いて上京してきたのである。上京したのがすでに西軍が上方を制圧した八月になってからであることから、両者とも最初から西軍に加担するつもりであり、戦意旺盛だった。

一方、義弘はこの時点で麾下に「僅か千人の内」しかいないと書いている。一〇〇〇人以下という意味だろう。二〇〇人足らずだったものからだいぶ増えているのは、甥の島津豊久（日向佐土原城主）の兵も含まれていると見るべきだろう。豊久は二万八六〇〇石の領知高だった。一人役だと三〇〇人弱が加わった勘定になる。

義弘は西軍に加担することを決めた直後の七月十四日から決戦直前の九月七日まで、じつに一一通の軍勢催促状

決戦場にて

を国許に送っている。義久・忠恒は義弘の懇請をことごとく黙殺したが、国許の家老に宛てた書状は家中だけに文面が異なっている。

「重ね重ね申し下し候やうに、帖佐よりの続衆、分限・少分限を謂わず、心有るべき人数は罷り上ることこの時に候」

帖佐は義弘の居城である。そこの家来衆で高禄・少禄にかかわらず、心ある有志は上京してほしいと、懇願に近い要請をしている。主君の下知に応じて、家老の長寿院盛淳・伊勢貞成をはじめ、相良長泰・大田吉兵衛・後醍院喜兵衛など譜代衆が郎党を引き連れて上京の途についた。その後も、義弘を慕う者や戦陣で武功を望む者が三々五々、上方にはせ参じた。『旧記雑録後編三』所収の史料で上京した人数の具体的な数字がわかるものが三点ある。日付は関ヶ原への着到日である。

●九月五日（一一六七号）
富隈から四五人、鹿児島から二二人、ほか合わせて二八七人
●九月十一日（一三〇四号）
浜之市衆（大隅国）三〇人
●九月十三日（一四〇七号）
帖佐衆（義弘家臣団）七〇人ほど

これらの国許から上京した人数は計三九〇人近くになる。この数字はすべてを網羅したものではなく、実際はもう少し多いはずである。たとえば、北薩出水郷から押っ取り刀ではせ参じた中馬大蔵などは含まれていない。それらを加味したうえで、島津勢の総数を推定すれば、ほぼ通説どおりの一五〇〇人程度だったと思われる。

三成との確執はあったのか

伏見落城ののち、西軍は伊勢・美濃・北国の三方面に進出することになった。島津勢は石田三成の手に属して美濃に向かい、八月十七日、関ヶ原の東の垂井宿に滞陣した。そして二十日頃、大垣城に入った。ここには三成ほか、小西行長ら九州勢が詰めていた。二十二日頃、三成の命により、島津勢は墨俣の渡しの守備についた。秀吉の一夜城の逸話で有名だが、長良川の渡し場で、尾張清洲から大垣に通じる美濃街道の要所である。

二十三日、西軍の前線拠点である岐阜落城により、東軍が堰を切ったように長良川西岸に押し寄せてきた。墨俣の上流に合渡という渡し場があり、舞兵庫・森九兵衛・杉江勘兵衛など三成の手勢一〇〇〇人ほどが番衆として詰めていたが、黒田長政・藤堂高虎・田中吉政ら一万近い軍勢により撃破された。東軍はそのまま大垣城に迫る勢いを示した。

その頃、義弘は三成・行長らと大垣と墨俣の中間である呂久川（揖斐川の別名で、藪田川との合流点よりやや下流を示す）にある佐渡で軍議を開いていた。そこには二〇〇〇人ほどの兵しかいなかった。そのため、三成は大垣城に撤収することにし、義弘にも同行を求めた。

義弘は入来院重時・喜入忠政・川上久智・新納忠増ら重臣のほか十数人の供廻だけで墨俣から来ていた。ここで三成に同行すれば、多くの家来衆は墨俣に置き去りになる。三成としては、家来衆は別に退却すればよいというくらいの軽い気持ちで告げたのだろうが、義弘の取り巻きがこれに反発した。新納忠増の父忠元の伝記『新納忠元勲功記』には次のように書かれている。

「そのとき、島津方の人数はいずれも墨俣に置かれていたので、みなが残らず繰り曳き（交互に整然と退くこと）がすまないうちは立ち退くことはできないと（義弘は）返答された。それでも、三成は聞き入れず、馬に打ち乗って駆け出そうとしたので、忠増と久智が見咎めて、その馬の口を引き止め、『兵庫入道（義弘）はこの場に踏み留まります。（家来を置き去りにするという）未熟なことはできませぬ』と諫言したが、三成はそのまま駆け出し、大垣の方に走られた」

この一件は三成の合理主義と義弘の家来思いという好対照な考え方の衝突を示しており、これがのちの遺恨につながったという解釈もできるかもしれないが、それほど重要な局面だとは思えない。というのは、その後、三成のほうが考え直したのか、義弘との和解を試みる行動に出るのである。

島津方は義弘主従と主力家来衆の合流に手間取った。敵が遮ろうとしたからである。そのとき、家来衆の一人、木脇久作という豪の者が馬上に長刀を横たえて「薩摩の今弁慶なり」と名乗

って敵を蹴散らしながら呂久川に駆け入り、対岸の義弘の前にはせ参じた。これには義弘も感嘆し、「千騎の競いかな」と称賛した。

そのうち、日没となって敵の姿も見えなくなり、ようやく合流を遂げた島津勢が大垣城めざして行軍していると き、前方から黒い騎馬武者が一騎駆けしてくるのが見えた。この騎馬武者について『神戸久五郎覚書』には印象深い記述がある（一三二三号）。

「中途にて黒具足、甲の立物には水牛の角立物仕り候武者、早道にて此方へ駆け向き候を御覧なられ候へば、石田治部殿ただ一人、伴衆乗馬壱人も付け申さず候、治部殿仰せられ候は、佐渡において惟新様ご辛労遊ばされ候由相聞こえ候間、お見廻のため参り候由申され候」

前方から駆けてくる騎馬武者は、何と三成その人だったのである。しかも、供廻も連れずに単騎で。三成が黒具足に水牛の立物の甲といういでたちだったというのは、ほかの史料に表れない貴重な情報である。三成は義弘主従に「佐渡では苦戦された由聞きましたので、お見舞いに参りました」と告げて、主従の労をねぎらった。

またこの夜、佐渡で敵を討ち取った押川強兵衛は遅れて大垣に戻った。翌朝、三成が島津勢の陣所にやってきて、「兵庫殿（義弘）の衆が大垣の太刀始めをしたと聞き、喜んで参った次第」と伝え、さっそく首実検が行われた。三成が「この敵を討ち取った者を召し出してほしい」と頼んだので、強兵衛が呼び出された。三成は強兵衛を嘉賞し、大判一枚（一〇両）を与えた。そのため、兵たちが大いに強兵衛を羨ましがったという。

こうしてみると、三成は佐渡での一件で後味が悪かったのか、島津方に大変気を遣い、関係修復につとめていることがわかる。

義弘の夜討ち案の真偽は？

九月十四日、長く江戸に留まっていた徳川家康がとうとう美濃赤坂に着陣した。東軍の士気はいやがうえにも上がった。

一方、動揺と焦慮を深めた大垣城の西軍方では、同夜、軍議の末、主力を関ヶ原に陣替えすることに決した。東軍の西進を阻止するためである。

その軍議では、赤坂の家康本陣への夜討ち論が持ち上がったとされる。『落穂集』によれば、提唱者は島津義弘・豊久だった。大垣から関ヶ原に転陣することが決したのち、豊久が三成の陣所を訪れて対面し、義弘の意向を次のように伝えた。

「転陣がよいとは思えない。兵庫入道が考えるに、大垣城に有り合わせの人数で今夜半、内府（家康）の旗本へ夜軍を仕掛けることがよい。（三成が）ご同心いただければ、義弘が先手を仕る。また宇喜多秀家か貴殿（三成）のご両人のうち一人が関ヶ原に赴かれ、彼の地の諸軍勢をもって内府の先手へ取りかかり不慮に切り崩すように申し合わせるのがよいのではないか」。

これに対して、困惑している三成の



岐阜城の陥落と長良川・木曽川戦線の崩壊 ―8月16日～23日―

・凡例
西軍　部隊　城　陣地　退却
東軍　部隊　城　前進／攻撃

東軍の強襲と岐阜城主織田秀信の拙劣な戦いで、岐阜城が陥落。長良川・木曽川戦線は崩壊した。西軍諸将は、その対処に追われたが、これが石田三成と島津義弘の対立を呼んだと思われた。

代わりに家老の島左近が「古来から夜討ちや夜軍は小勢の方が大軍の方に仕掛けて勝ったためしがない。明日、平場での一戦で味方の大勝利は疑いない。久々に内府の押付（鎧の後ろの板）を見られるであろう（家康の敗走する後ろ姿を見るという意）」と豪語した。

豊久は左近の過言は不届き千万と思いながらも、「そなたが内府の押付を見られたのはいつ、どこでのことか」と尋ねた。すると、左近は「先年故あって武田信玄の家来のもとに寄寓していたことがあり、山県（昌景）の一手で出陣し、内府を掛川城の近くの袋井畷まで追いかけたとき、内府の押付を見ましたぞ」と答えた。

豊久は憤然として「それは下劣のたとえであり、杓子定規と申すもの。その頃の内府と只今の内府とを同じものと思っていては、大いに間違うことになり申す。明日にも一戦したとき、内府の押付をご自分で見られることがあったら重畳でござるが、とても合点がいきませぬな」と言い捨てて退座したという。

従来、義弘のこの夜討ち案を三成と左近が斥けたことで、島津方が遺恨を覚えたことが翌日の決戦で傍観した理由のひとつとされてきた。しかしこれは、軍議ですでに陣替えが決したのちの、三成の陣所でのやりとりであり、僚将たちの面前で島津方の面目を潰したわけではない。また左近が山県昌景の与力だったというのはにわかに信じられない。左近は三成に仕える前は、筒井氏のれっきとした譜代重臣だったからである。

また、数万の東軍兵士が守りを固める家康本陣に夜討ちをかけるなど至難の業であり、歴戦の武将で戦術眼に優れた義弘がそうした現実離れした提案をするはずがなく、この逸話は史実とはいえないとされてきた。

出典が『落穂集』という徳川寄りの編纂物という史料的性格を考えると、十分吟味することが必要だと思う。また島津方の史料に夜討ちに関する記事がまったく見えないことから、この逸話を史実だと断じるわけにはいかない。

ただ、それほど不合理な話かといえば、そうでもないと筆者は考えている。ふつう、この逸話は家康本陣への夜討ち案だけが取り上げられるが、よく読むと、三成か秀家が関ヶ原に転陣して、毛利勢や大谷吉継らと合流したうえで、東軍先手衆と開戦し、それを引きつけている間に、大垣城の義弘らが家康本陣を奇襲するという作戦である。赤坂の陣所がある程度手薄になったのを見計らっての策であることに注意を払うべきだろう。

仮にこの逸話が史実に近く、義弘・豊久が三成・左近から侮辱されたと感じたのかどうか、またそれゆえに翌日の決戦で日和見したかどうかというのは別問題である。島津方の史料を見れば、島津勢が日和見していたとは思えないからである。

小早川秀秋の裏切りと西軍の敗退

九月十五日未明、折から深い霧が立ちこめるなか、関ヶ原に東西両軍が布陣し終え、巳の刻（午前十時頃）、霧が晴れかかる頃、ついに決戦の火ぶたが切られた。

東西両軍の諸将がお互いに誰の軍勢と相対して開戦の火ぶたを切ったのか、『日本戦史　関原役』第五篇からその対応関係を見てみよう。

東軍		西軍
福島	↕	宇喜多
藤堂・京極・寺沢	↕	大谷
織田有楽斎・古田・猪子・佐久間兄弟・船越景直	↕	小西
田中・細川・加藤・金森・黒田・竹中	↕	石田

西軍の陣備えのなかに、なぜか島津勢が見当たらない。こうしたことも、島津勢の不戦・傍観説の根拠になっている。

しかし、島津勢は傍観・日和見していたわけではない。その理由が三つほどある。第一に、以前、拙著（『真説関ヶ原合戦』学研M文庫）で指摘したように、島津勢は石田勢の右手後方に陣し、二の備えないしは後陣となるような位置に布陣していたことである。島津勢は宇喜多・石田・小西の僚勢とくらべて少数だったこともあり、予備兵力に位置づけられていたと思われる。

その証左として、まず島津勢の鉄炮衆が亀井茲矩へ差し向けられたことが挙げられる。『山田晏斎覚書』によれば、「敵合前」に亀井勢から来援要請があったので、鉄炮衆を加勢に出すことになり、「浜之市衆遣わすべきの由御意」という豊久の決断で、山田有栄（晏斎）率いる同衆が派遣されることになった。

しかし「其の衆彼方の備えに参着され候わんと存じ候時分、早味方勢崩れ候」という事態になった。鉄炮衆が亀井勢に着く前に西軍が崩れ出したというのである。なお、同覚書は「以後、承り候えば、亀井殿野心の由」ともあり、茲矩が西軍の総崩れを知って東軍に寝返ったとも記している（一三一一号）。

亀井茲矩は因幡鹿野一万三八〇〇石を領する小大名で、宮部長熙（因幡鳥取二〇万石）の与力だったと思われる。長熙ははじめ東軍に属しながら、途中で西軍に投じている。戦後、長熙は改易されたが、茲矩は逆に二万四〇〇〇石加増されているのを見ると、再び東軍に寝返ったものらしい。

二点目は合戦たけなわの中、義弘と三成の間に交渉があったことである。『惟新公関原御合戦記』によれば、義弘は家老の長寿院盛淳と毛利覚右衛門を三成の陣に遣わしている。その目的は「先ず軍務を労ひ、戦場の行を達せしむる事再往の間」云々というものだった。三成の戦いをねぎらうとともに、「行」つまり作戦・戦術の打ち合わせをして何度か往復したというのである。これは義弘が参戦する時機を見定めようとし、三成との連絡を密にしていたことを示している。

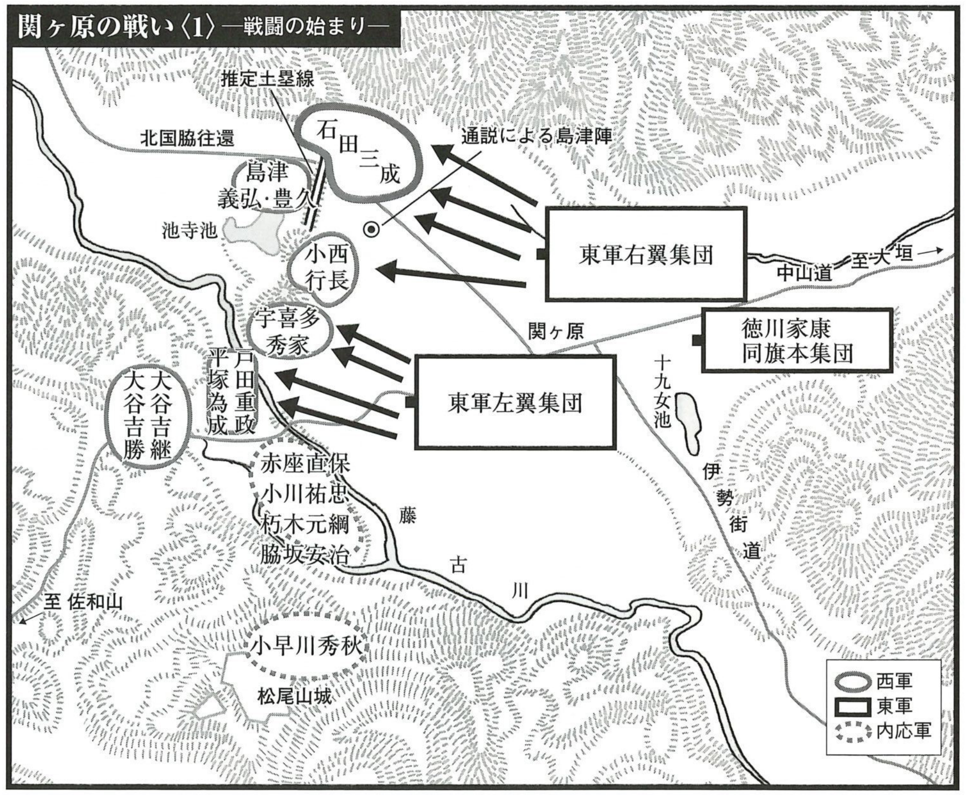
それでも、義弘が打って出て戦ったわけではないこともたしかである。それは戦意がなかったからだろうか。否である。小早川秀秋の裏切りで戦況が西軍に不利になったとき、義弘が次のようにつぶやいたという（一三四〇号）。

「薩州勢五千召し列ね候わば、今日の合戦には勝つものを、両三度に及び御意遊ばされ候」

五〇〇〇人の兵がおれば、勝ってみせたというわけだが、現実には兵はその三分の一もいなかった。となると、寡勢のため通常とは異なる戦い方を義弘が考えていたと思われる。その手がかりは先の『山田晏斎覚書』にある（一三一四号）。

「敵勢寄せ来たり候前に、此方お下知には、いかにも間近に寄せ付け候てご一戦なさるべしと、鉄炮前積もりにおう（射）たせなく候」

これは豊久が麾下に命じた下知だが、先手を預かる豊久はあえて押し出さずに、あくまで敵を引きつけるだけ引きつけてから、一挙に打って出る心づもりだったと思われる。これは少ない兵力を有効に活用するとともに、鉄炮の集中的使用と集団突撃を組み合わせた戦法である。すでに島津勢は、この戦法を実戦で経験済みだった。朝鮮陣（慶長の役）における泗川の戦いで明軍を破ったのと同じ戦法なのである。このとき、島津勢はわずか数千の兵で一〇万ともいう明・朝鮮連合軍を撃破し

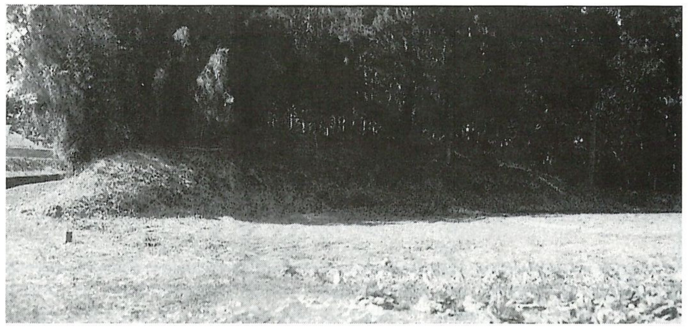


関ヶ原の戦い〈1〉―戦闘の始まり―

関ヶ原の戦いは、戦術的には、東軍が東山道ないしは北国脇往還を突破して、西軍を包囲できるか否かにかかっていた。精強だが人数が少ない島津勢は、北国脇往還守備の予備隊として後方に控置されており、戦術的に整合性があった。

ている。
　この戦法は戦況の決定的局面で乾坤一擲の決戦に出るものだった。だから、島津勢はその戦機をじっと待ちつづけ、兵力の小出しをせず、いたずらに損害が増えることを避けたのである。三成と何度も作戦を打ち合わせたというのは、そのことを意味し、三成もまた納得していたのではないだろうか。これに関連して、義弘は退き口のときまでずっと甲冑を着けず、小具足姿のままだったことも注目される。それは義弘が六十六歳という老齢のために体力を温存したかったのと、まだ戦機が熟さない（自分の出番ではない）と判断していたことを示している。
　しかし、案に相違して、その決定的局面はついに訪れなかった。西軍が予想外に早く総崩れになったのである。義弘付きの小者が書いた『大重平六覚書』には「石田殿一時もこたへず（堪えず）候て、中書（豊久）様陣場え崩れ掛かり候」とある。「一時」はおよそ二時間である。開戦したのが午前十時なら、正午前後にはすでに石田勢は崩れていたことになる。通説では、この時間帯の戦況は一進一退で、むしろ西軍側が押していたとされるが、島津方の史料はそれと食い違う。
　石田勢が崩れだす前後と思われるが、三成家臣の八十島助左衛門が進軍を命じようとして島津勢先手の豊久の陣所にやってきた。『惟新公関原御合戦記』によれば、二度訪れたという。一度目は「三成が先陣に進み、敵軍に対し勝つための一戦を遂げる。後陣の軍衆も速やかに進み、進んで合戦致されんことを待ち申す」と口上を述べた。豊久は形だけこれを承諾したが、一人も兵を進めなかった。二度目も同様のやりとりになり、八十島は空しく戻っていったという。
　八十島の来陣については、『山田晏斎覚書』の記述が興味深い。山田有栄は豊久の一手に属していたから、間近で見ていたことになる。八十島が陣中にやってきたとき、島津方の兵士たちが罵声を浴びせた。
「馬上より口上尾龍（籠）のことに候、討ち取り候へなどと口々に悪口申し候へば、則ちかけ戻り候」
　「尾籠」とは不届きという意味である。馬上から口上を伝えるのは軍法に背く行為だった。しかし、勝つか負けるかの非常時のため、焦っていた八十島はそうした軍法を守る余裕がなかったのだろう。
　この一件も、島津方の避戦志向の根拠にされることが多い。しかし、先に述べたように、義弘・豊久は、決戦の戦機は自分たちで判断する、それに限っては他人の指図は受けないという牢固な信念をもっていたと思われる。
　八十島では埒が明かなかったため、今度は三成自身がやってきた。三成は豊久に「道の宜しからざる事」を告げた。島津方のやり方がよくないという意か、それとも西軍の作戦がよくないという意か、判断しかねるが、これに対して、豊久は次のように答えた。
「今日の儀は面々切りに手柄次第に働くべきである。御方（三成）もそのようにお心得あるべし」
　これに対して、三成は「近頃よく御座あるべし」と答えたという。「近頃」には「はなはだ」とか「非常に」という意味があるから、ここは非常によいことだと答えたのだろうか。しかし、自ら加勢を求めたにもかかわらず、お互いがお互いの判断で戦うという回答に為す術なく帰っては、何のために出かけたかわからない。
　前日まで親しく交流していたのに、島津方の掌を返したような仕打ちにみえるかもしれないが、島津方にも言い分があったのではないか。それは三成が豊久の陣中を訪れたのは、小早川勢の裏切りのあとだったのではないかと思われる節があるからである。
『惟新公関原御合戦記』はほぼ時系列に沿って、出来事を一つ書形式（一、何々という箇条書き）で記してあるが、小早川勢の裏切りは八十島と三成が豊久の陣中を訪れた箇所の前に書かれている。これは先の『大重平六覚書』にあった、石田勢が一時も持ちこたえられなかったという記述と符合するように思われる。
　つまり、三成は小早川勢の裏切りを知って、それが全線に波及しないうちに、予備兵力の島津勢を前線に投入して局面打開を図ろうとしたのだろう。しかし、島津方では小早川勢の裏切りの時点で勝機は去ったと判断し、さらにいえば、豊家家門の秀秋を統制できなかった三成の指図に、いまさら外様の我々が従う義理はないと突き放したのではないかと考えられるのである。





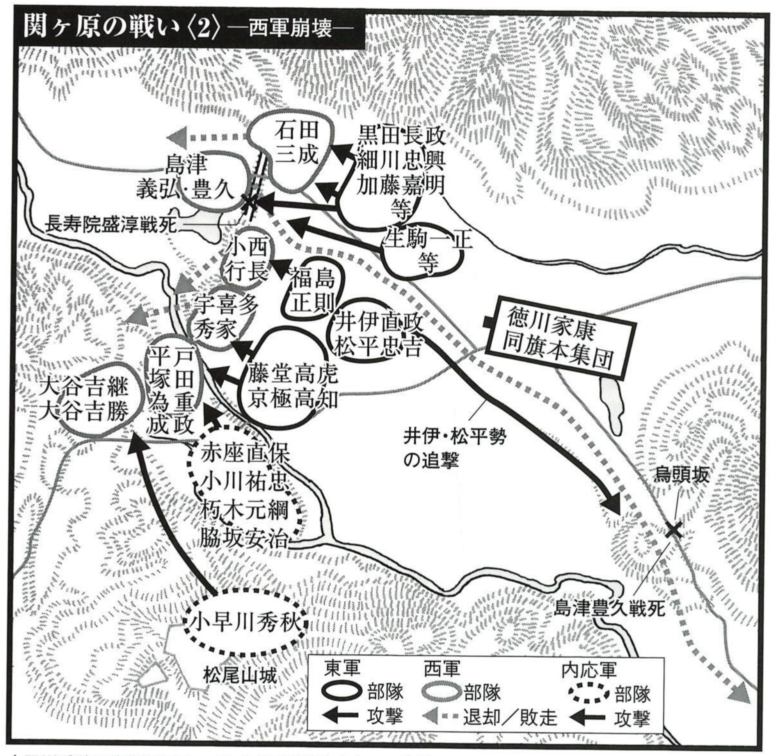
関ヶ原にある島津陣跡の石碑（写真上）。後方は小西勢が陣を張った北天満山である。こうして見ると、現在の島津陣跡は、前方に突出しすぎている。下は、石田三成の拠った笹尾山と天満山間にある土塁の残欠。島津勢は、この後方に位置したと推定される。

遥かなる故郷へ

島津勢、前進退却を決断す

　かくして、石田・宇喜多の両勢は崩れて敗走し、島津勢だけが戦場に孤立した。東軍は両勢を追い崩した勢いで島津の陣中に矛先を向けてきた。
　豊久率いる先手衆では、すでにいつでも突進する支度ができていた。これまで溜めに溜めた反発力を決戦ではなく、戦場離脱に用いらねばならなくなったが、薩摩兵児にとっては、そうした思いは些末なことである。
　敵が間近に攻め寄せてきた。豊久は「時分よきかな」と言って馬上の人となり、弓を手に持った。そして「膝に敵が懸け上がるほど寄せつけよ」と命じた。
　島津の軍法は武者鉄炮といい、足軽ではなく武者がみな鉄炮を放つ仕組みである。折り伏しているところへ、敵が乗り上げるように間近に近づいたと見るや、筒先を揃えて一斉射した。
　敵がバタバタと倒れる。しかし、その屍を乗り越えて敵が湧くように押し寄せてきたため、次弾を放つ暇がない。その戦いの渦中にあった黒木左近兵衛の手記によれば、敵味方入り乱れてしまったので、鉄炮が役に立たなくなり、鉄炮を腰に差す者、また細引で琵琶を懸けるように首にかける者、また捨てる者もいたりという有様ながら、みな刀を抜いて前方に打って出た（一三二九号）。
　まっ先に駆け出したのは、豊久の備えに付属された山田有栄の一手だった。有栄の『山田晏斎覚書』によれば、敵味方とも識別のための合い言葉を使っていたが、敵方の合い言葉が「ざい」で、島津方のそれも「ざい」だったため、乱戦のなかでよく敵味方を間違えたという。同士討ちがあったり、味方と思って安心したところを斬られたりするという場面もあったのだろう。
　有栄は常に豊久の馬標を見てその位置を確かめながら戦っていたが、そのうち、義弘の本陣と出会った。義弘の馬標である熊の皮の一本杉が揺れているのを見つけたのである。義弘はわずかな供廻しかいなかったので、有栄がこれを守りながら進んだ。
　義弘主従の本陣は先手衆から離れて苦戦の末、ようやく有栄の一手と出会ったのである。押し出すにあたって、義弘は泰然と「敵は何方が猛勢か」と尋ねた。馬廻が「東よりの敵が以ての外の猛勢でござる」と答えると、「では、その猛勢の中へ掛かり入れよ」と命じたのである。雲霞の如き大軍の中を切り抜けたとき、主従は五〇人ほどに減っていた。
　どう見ても形勢は島津方にとってはかばかしくなく、切り抜けられるかわからない。ところが、敵は功名に逸っていたのか、島津勢の脇を通り抜けて、石田・宇喜多の両勢を追いかけていったのは不幸中の幸いだった。
　義弘主従は刀の蛭巻や馬標を捨てさせて、東の方に向かって進んだ。家来たちが「前方に見えるのはみな敵ばかりです。いかがしましょうか」と尋ねると、義弘は「敵ならば切り通るのみ。切り通ることができぬなら、兵庫入道

は切腹するだけよ」と答えたので、家来たちは「いずれも承りました」と畏まったという。
　そうするうちに、前方に敵勢が見えた。福島正則の軍勢だった。東軍きっての猛将である。義弘主従は敵前に四、五間（八メートル前後）まで素知らぬ風をして近づき、距離が三間ほどになったところで、みなが一斉に刀を抜き、「エイトウ、エイトウ」というかけ声をあげて通り抜けた。福島勢もあっけにとられたのか、あとを追って来なかったという。
　ようやく本道の北国脇往還に出たところで、次にぶつかったのは、何と家康の本陣だった。家康は合戦たけなわの頃、最初の本陣だった桃配山から本多忠勝の陣所まで前進していたが、勝ちを確信すると、中山道を不破関方面に進んで、関ヶ原盆地の中央に出ようとしていたのである。義弘主従はそれにぶつかってしまった。有栄は家康本陣との遭遇を次のように記している（一三一五号）。
「然るところに、内府様の備えがこちらが通ろうとする道筋に向かおうとして出てこられた。一大事に見えたけれども、どうやら沢山（佐和山）街道のほうにお通りなされたので、別条なかった」
　つまり、北国脇往還を南下する義弘主従と、中山道を佐和山方面に西進する家康本陣とが十字路で直角に遭遇したのである。しかし、家康本陣が通るのをやりすごしたので事なきを得たのだろう。
　義弘も一度は大垣城に入ろうと考えたらしい。同城には心安い九州勢が詰めていたからである。しかし、大垣城とおぼしき東方から煙が立ち上っているのを見て、その落城を知り、伊勢街道を南下して戦場を離脱することにしたのである。
　しかし、家康もそばをすり抜けた正体不明の一団を訝ったのだろう、松平忠吉・井伊直政・本多忠勝に命じて追尾させた。騎馬主体の七〇〇騎の精鋭である。
　追撃される者と、する者との間で断続的に激戦が展開された。義弘に従っていた帖佐彦左衛門の覚書によれば、島津勢がわずか五、六〇人のところに井伊勢が追いついてきた。直政は「黒馬に大総掛けさせ、白糸威の鎧に小銀杏の盾物指したる甲を着」していたという。直政は義弘のすぐ近くまで馬を乗り入れて、「何をぐずぐずしている。早く兵庫を討て」と大音声をあげた。
　そこへ、義弘の腹心である川上四郎兵衛忠兄の被官、柏木源藤が進み出て、直政の胸板めがけて鉄炮を放った。その一弾は直政の腕を射抜いたという。その衝撃と激痛のため、直政はドッと落馬してしまった。また直政の女婿で家康四男の松平忠吉も負傷して落馬したという。二人の大将が負傷したので、追手の動揺は激しく追撃が止まった。
　義弘はそれをみて、「時分は今ぞ。早く切り崩して通れ」と命じた。島津勢は敵の真ん中を切り通して窮地を脱したのであった。



小早川秀秋の裏切りによって、西軍は戦線南部より崩壊した。島津勢は前進退却による敵中突破を敢行する。それは東軍の陣形が追撃によって混乱する機を掴んで行われたため、東軍諸部隊の間隙をすり抜けることが可能であった。また敵に後ろを見せるわけではないので、部隊の士気を高く保ち、統制を維持することができた。敵中突破は、決して無謀ではなかったのである。

　直政の負傷は、その二年後の若すぎ

る死の遠因になったといわれている。

長寿院盛淳の死に場所

　義弘主従が東軍の大軍のまっただ中を抜け出して伊勢街道までたどり着いたのには、家老の長寿院盛淳が身代わりで討死したことも大きい。
　盛淳の討死場所だが、これまではっきりせず、退き口に移ってから、烏頭坂周辺で中書豊久と相前後して殿をした末に討死したとされてきた。筆者も過去に、そうした見方に従って述べたことがある。しかし、今回改めて『旧記雑録後編三』所収の「井上主膳覚書」を検討してみて、それが不正確だということがわかった（一四〇七号）。主膳は盛淳の家来で、深手を負いながら生き残ったため、記録を残すことができたのである。
　それによれば、盛淳が玉林坊という大力の家来を呼び寄せて義弘の御供をするよう命じるとともに、「我は御跡に残り打死致すべきと思い定め候」と告げている。つまり、盛淳はわずかの手勢と共に義弘の本陣に留まり、その周辺で討死したと思われるのだ。
　十五日未明、大垣から関ヶ原に陣替えしたとき、盛淳は義弘の具足・羽織・甲を拝領している。羽織は太閤秀吉から拝領したもので、非常に大きな白い鳳凰の縫い取りがあった。盛淳がこれらを拝領したのは、盛淳が義弘の名も授けられ、名代に立つことを許されたためだった。このときから盛淳は万が一の場合、義弘の身代わりになることを決めていたと思われる。また盛淳は大垣に着到したとき、三成から金磨の軍配団扇も拝領しており、これも掲げた。
　盛淳は退き口の直前、先手の豊久の陣所を訪れて、馬上のまま会話を交わしている。豊久が「今日は味方が弱いので、今日の鑓はつけずじまいであろう」と言ったので、お互いに笑ったという。
　小早川秀秋の裏切りがはっきりし、島津方の陣所の左右にも敵が攻めてきたとき、陣大将たちが義弘の本陣に集まった。義弘が何も言わないので、盛淳が「もはや相談は要らない。恐縮ながら、合戦なさるべき衆はそれがしにお付きなされよ」と呼ばわると、新納忠増・島津下野（喜入忠政か）・毛利元房らも馬を戻してその場に残った。
　いよいよ前方突破することになった。敵は七〇〇人ほどが二度にわたって押し寄せてきた。一度目は撃退したが、二度目は乱戦になった。島津の軍兵も怖じ気づいた者が多く、反射的に後退して後ろの堀（池寺池）に逃げ込んだ。剽悍無比の精鋭とされる島津勢だが、やはり人間である。雲霞のような敵を前に怯懦な振る舞いをした者が少なくなかったのである。
　盛淳は馬を乗り回しながら、「薩摩ははるか五〇〇里の彼方にある。逃れようとしても遠すぎる。逃げた者は見知っているぞ」と歯がみしながら怒鳴ると、長崎隼人という武者が鑓をもって出てきて盛淳の馬の側に付き、「少しも未練は申しませぬ」と決意を語った。
　すでに義弘も馬廻に守られて押し出していた。盛淳が「殿様はどこまで退かれたか」と尋ねると、みなが「敵陣を押し分けてお退きなされ、最早遠くまで行かれております」と答えると、盛淳も満足げに「めでたし。あとは我が名代として討死仕るのみ」と言ったという。
　その後、記主の井上主膳は深手を負って盛淳の側を離れたため、主人の最期の様子を見ていないが、あとで生き残りの蒲生衆から聞いた話では、三度目の乱戦になったとき、盛淳は「島津兵庫頭、死に狂い也」と名乗ったところを大勢に鑓を突き立てられたという。
　また別の伝聞もある。盛淳は群がり寄せる敵に向かって「島津兵庫頭義弘、運尽きてこれより腹を切る。日本の諸侍はこの首を我が手にかけたと、あとで広言すべからず」と大音声をあげた。そして腹十文字に掻き切って、北枕にドッと斃れたという（一三二八号）。
　盛淳、五十三歳。一度は真言宗の僧侶となりながら、義久の勧めで還俗し、義弘の家老となった人物である。そして、義弘の身代わりとなって壮絶な討死を遂げたのである。

中書豊久の最期

　義弘主従はわずか三〇〇人ほどになっていた。長寿院盛淳が義弘の身代わりとなって敵を引きつけている間に、伊勢街道を十九女池のそばを抜けて烏頭坂の下りに差しかかった。それでも、敵はまだ追ってくる。
　乱戦のなかで、中書豊久はようやく義弘主従と巡り会った。義弘は退却戦に疲れ果て、戦死の覚悟を決めており、まわりが退くように進めてもそれに従う様子がなかった。そこで豊久が「惟新様はまことに御家の安危に関わる大

切なる御身であられるので、できるかぎり落ち延びていただきたい」と幾度も諫言した。そのため、義弘もようやく心を動かして、また退き口に移った。

豊久は義弘に心変わりをさせた手前、一緒に行くわけにはいかず、盛淳に続いて殿を引き受けた。そしてわずかな供廻とともに、敵の中に駆け入って、これまた壮烈な討死を遂げた。一説によれば、豊久は敵の鑓ぶすまにより六度、七度と身体を突き上げられ、その猩々緋の陣羽織はずたずたに引き裂かれたという。

豊久、享年三十一歳。島原沖田畷や戸次川の合戦で勇名を馳せた父家久に勝るとも劣らぬ驍将は烏頭坂の露と消えたのである。島津氏は西軍に属したにもかかわらず、所領を安堵されたとされているが、それは本宗家だけであって、豊久の日向佐土原の所領は没収されている（のち本宗家に返還され、島津以久が入部）。

飢えに苦しんだ苦難の逃避行

東軍は島津方の相次ぐ殿戦のために追撃する気力を失った。伊勢街道を一里ほど行った牧田のあたりで敵をようやく振り切った義弘主従は、伊勢街道をひたすら南下しようとしたが、事はそううまくいかなかった。南宮山や栗原山に布陣していた長宗我部盛親・長束正家らの軍勢も引き揚げようとして前途を塞いでいたのである。

義弘は両勢の去就を疑って、家老の伊勢貞成を遣わし真意を確かめさせた。両勢とも退却に精一杯で敵対どころではなかった。とくに、正家は島津勢は地理不案内だろうと、親切にも嚮導一騎を付けてくれた。

義弘主従が養老山地の東麓の駒野坂（岐阜県南濃町駒野）に達したのは夜六つ半（午後七時頃）だった。ここから、義弘主従は進路を変更し、平坦な伊勢街道ではなく、養老山地を横切る駒野越えを選んだ。すでに敵の追撃を振り切っているから進路を秘匿する必要もない。進路変更の理由はおそらく駒野の先に東軍方の高須・長島などの諸城があり、その勢力圏に入るのを避けたのだと思われる。

義弘主従が駒野峠に達したのはその日の亥の刻（午後十時頃）だった。付き従うのはわずか一〇〇人ほど。ようやく一息ついたが、義弘はこれからの長い道中を考え、不要になった甲冑を捨てようとした。道具衆（足軽）の横山休内が野原に打ち捨てるのはもったいないと拝領を申し出て許された。

折からまた雨が降り出したのか、身軽になった義弘は木綿合羽を着け、同色の木綿の手拭いで髪を包んだという（一三五二号）。入道になったはずだが、義弘は髪があったらしい。ともあれ、義弘主従にとって長い長い一日が終わった。

それからの義弘主従の進路だが、江戸期の編纂物である『西藩野史』などでは、翌十六日、牧田から多良・時山を経由して五僧峠を越え、近江高宮に出たとされる。五僧峠は別名、島津越えとも呼ばれているから、いかにもそれらしい。だからこのルートが退き口の通説になった感がある。つまり、駒野峠を越えていないのだ。

しかし、『西藩野史』の記事はでたらめが多くて信ずるに足りない。これまで何度も引用した『旧記雑録後編三』所収の退き口で生き残った者たちの手記や覚書によると、義弘主従が駒野峠を越えたのは動かしようのない事実である。

翌十六日朝、義弘主従は近江路ではなく、伊勢路をたどった。そして関地蔵から鈴鹿峠を越えて、いったん近江に入り、長束正家の城下である水口を通り、その夜は甲賀郡の信楽で宿泊している。

そうした逃避行では、主従は兵粮が尽きて飢えかけた。そこで軍馬を殺してその肉を喰らった。



伝島津豊久着用「紺糸威腹巻」。後退戦では優秀な指揮官が多く戦死する。その代表が島津義弘の甥、中書豊久であった。写真の鎧は合戦時に豊久が着用したとされるもので、鑓で突かれた跡が残る。（個人蔵・尚古集成館寄託）

義弘の駕籠の後ろ棒を担いでいたのが冒頭に述べた中馬大蔵である。中馬は国許で畑作業をしているとき、義弘出陣の触れを聞いて、それに押っ取り刀で応じ、途中で朋輩の甲冑を奪って上京したという強者である。

家来の一人が義弘に肉を勧めた。すると、中馬が次のように言い放った。

「殿は駕籠に乗っておられるだけだから、そう腹も減られまい。担いでいる我々が倒れたら、殿はどうなる。だから、その肉は我らが頂戴して元気を出したほうがよい」

中馬のあけすけな言葉に義弘も苦笑いして、肉を中馬らに譲ったという。

義弘主従は三日三晩、山中をさまよった。そのため、義弘も雑穀の麁飯を食べたり、まったく無食のときもあった。追われる身なので、義弘も変装した。古い木綿の道服に上から帯を結び、破れて凹凸のある菅笠を被り、下人の恰好をしたという（一三七三号）。

翌十七日、伊賀上野を通り抜けることになった。ここは東軍の筒井定次の領内である。案の定、落武者を狙う里人が数百人、弓・鉄炮を射ちかけてきたが、五十余人が一団となって駆け入ってこれを蹴散らし、さらに討ち取った首級五つを城の大手に晒し、生け捕った二人を柵に縛り付けて通り抜けたという。

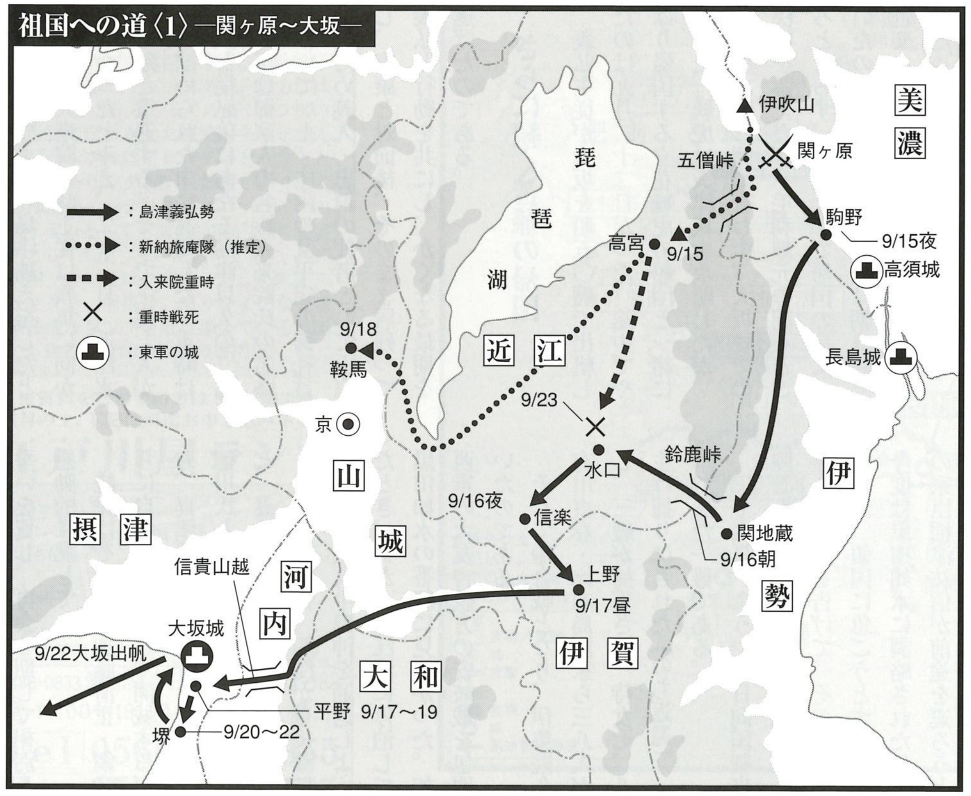
かくして、十七日夜には摂津平野に達し、十九日夜には住吉に潜行して、かねて懇意の田辺屋道与に匿ってもらい、さらに二十日夜には堺商人の塩屋孫右衛門宅に潜んだ。

大坂城中の様子をうかがってから、二十二日、堺から大坂に向かった。大坂の屋敷には義弘夫人（広瀬氏）と忠恒夫人亀寿（義久三女）がいたが、人質の形で屋敷を離れることが許されなかった。そこで一計を案じて、使僧を城中に送り、「義弘は関ヶ原で秀頼様にご奉公の末、討死を遂げた。女房衆が悲嘆にくれているので暇を取らせてほしい」と言上して、うまく二人を引き取った。大坂屋敷を退去するとき、義弘夫人は名物の平野肩衝を、忠恒夫人は先祖伝来の系図を持ち出してきた。再会した義弘も二人の機転にことのほか喜んだという。

義弘本隊からはぐれた者たち

さて、義弘主従の退き口ルートについて、通説は誤りであると述べた。それでも、島津越えと名付けられた峠が残り、また近江高宮の在所に義弘のものとおぼしき感状が残っているという。なぜだろうか。

まず、島津越えという名称だが、これは義弘本隊からはぐれた者たちが通過したことにちなむと思われる。退き



関ヶ原を脱した島津勢は、部隊として纏まったまま、伊勢、近江、伊賀等の山間部を抜けて大坂を目指す。しかし、脱出の混乱から別行動をとった人数も少なからずいて、それが後世、退き口のルートの複数説となったようである。

口になったとき、敵味方入り乱れた乱戦になったので、義弘の本隊からはぐれた者が相当数存在した。義弘の家老新納旅庵もその一人だが、その書上によれば、旅庵のほか、喜入忠政・入来院重時・本田親貞・同親明・押川郷兵衛・同喜左衛門・五代舎人など「士卒ほとんど三百ばかり」が伊吹山の麓にたむろして、斬り死にするか、切腹するか話し合っていたところ、長宗我部盛親の使番がやってきて、義弘主従が伊勢路をすでに退去したと知らせてくれたので、急ぎ「指南」（道案内）を求めて「北近江路を経て、同十八日鞍馬に到る」という行動をとった（一二六〇号）。

この「北近江路」こそ、時山から五僧峠を越えて高宮に出るルートである。つまり、三〇〇人前後という少なくない人数が、北近江路を越えて洛北鞍馬に潜んだことになる。彼らこそ「島津越え」という名称を生んだ者たちだったと思われる。

義弘の感状なるものも「島津越え」と関連する。同峠を下りたところが高宮である。高宮を領していたのは小林新六郎正祐といい、織田秀信に仕える家臣だったという。

その子孫宅に感状が伝来している。差出人は「薩摩　忠平」で、日付が九月十五日夕となっている（『小林家史伝』）。

しかし、いかにもおかしい。同日夕刻に義弘らは駒野にいたから、高宮にいるはずもない。また差出人の「忠平」は義弘の若い頃の初名だが、慶長五年に使用するはずがない。また官位名も入っていない。偽文書ではないだろうが、おそらく新納旅庵らがここにたどり着き、お礼のために書き残したものであろう。いかにも島津家当主を装いつつ、島津という名字も残さず、義弘に迷惑がかからないようになっている。

これにより、退き口の高宮経由説は根拠がないことが明らかである。

ところで、旅庵らはその後、鞍馬に潜んでいるところを、家康家臣の山口直友に捕縛された。直友は家康側近で島津家の取次をつとめた人物である。おそらく旅庵らがもはや逃げられないと知って、どうせならと旧知の直友に降参したのではないだろうか。旅庵はこののち、島津と徳川の和睦交渉の仲介をして、三年後に帰国することになる。

それでも、帰国できればまだ幸運だったといってよい。島津越えをしたと思われる入来院重時主従は鞍馬に向かわなかったとみえ、二十三日、近江水口で敵と遭遇する。そこで主従七人が追い詰められた末に討死した。重時は義弘と従兄弟にあたる島津以久の二男で、鎌倉御家人の名族入来院氏の名跡を継いでいた。庄内の乱平定の御礼言上のため義久・忠恒の使者として上京し、家康と対面後、そのまま居残って、義弘と行動を共にし、かくなる最期を遂げたのである。

さらに続く苦難の帰国

義弘主従が大坂を船五〇艘で出帆したのは九月二十二日だった。途中でやはり帰国する立花統虎の船団と一緒になった。統虎は大津城を攻略したが、関ヶ原本戦に間に合わず、大坂城での決戦を訴えたが、毛利輝元の聞くところとならず、憤然として帰国の途についたのである。義弘と統虎は朝鮮陣で苦楽を共にしたことで、心を許しあう仲だった。

二十六日、両将は安芸の日向泊で会合し、旧交を温めて再会を誓った。『惟新公関原合戦記』には両雄の再会を、「喜悦の余り落涙数行、死を逃る丶の幸いを賀し、再会を期して相別る」と感動的に記している。

統虎はその後、加藤清正・鍋島直茂らに自領を攻められて開城するが、のち、島津氏が領内の守りを固めると、徳川氏との和睦の仲介を買って出るなど、義弘との友情を守った。

翌二十七日夜、船団が豊後灘に差しかかり、国東半島沖を通過しようとしたとき、折から森江湊に停泊していた黒田如水の番船に見つかった。如水は西軍の大友吉統方の安岐城を包囲していたのである。

そして船合戦となり、伊集院久朝・有川貞春・比志島国家ら三八人が討死し、三艘が捕獲され、侍女七、八人が生け捕りにされた（のち返還）。一難去ってまた一難である。

二十九日、ようやく日向国細島に上陸した。それから、佐土原に立ち寄り、豊久の討死を告げて、その母と夫人を慰めた。領国に急ごうとするところを、今度は黒田如水に調略された伊東祐兵の家臣稲津祐信が前途を遮ろうとした。伊東方は、島津氏に奪われた旧領をこの機に回復しようとしたのである。

義弘主従はそのために迂回して霧島越えで、兄義久の富隈城に入った。十

〈参考文献〉鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料　旧記雑録後編三』鹿児島（鹿児島県）／「惟新公関原御合戦記」『島津史料集』（人物往来社）／「落穂集」『改訂史籍集覧』第十冊（近藤活版所）／「西藩野史」『新薩藩叢書』二（歴史図書社）／参謀本部編『日本戦史　関原役』（村田書店）／桐野作人『真説関ヶ原合戦』（学研M文庫　2000年）

月三日のことである。関ヶ原敗戦からじつに一八日目のことだった。

義弘は義久と一年半ぶりに対面した。義久は忠恒夫人や義弘夫人も同道したことを一応喜んだものの、その舌鋒は激しかった（一一八七号）。

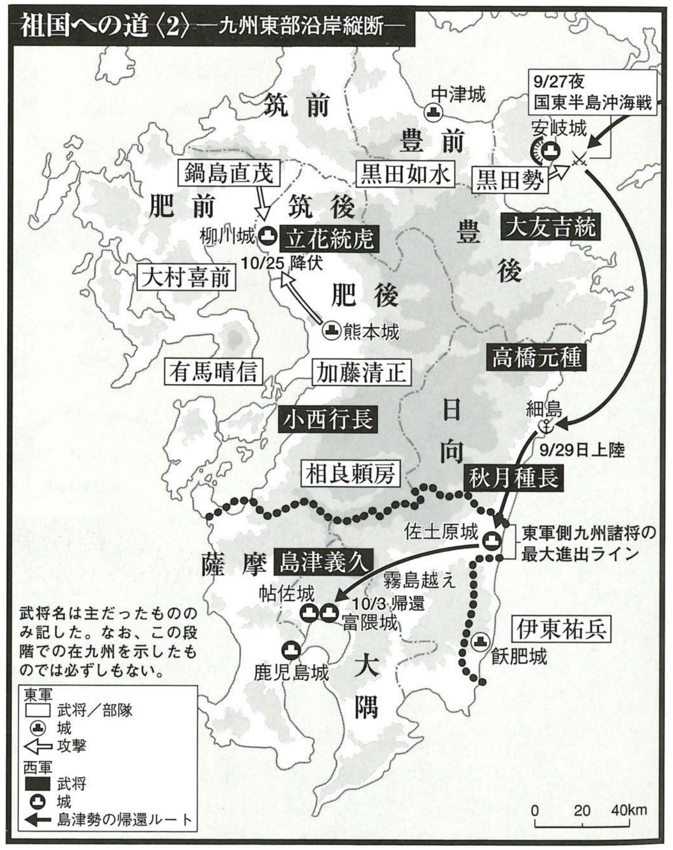
「義久は慶賀に達せず、むっとして悦ばずに言うには、私は義弘が家康と互いに誓紙を取り交わし堅く約定したと聞いている。それなのに、今度石田三成の暴挙に従ったのは、じつに一口両舌の戒めというべきである。その所以は士たる者の恥である」

義久は義弘が家康との約を違えたことを激しくなじったのである。そして、義弘に桜島に蟄居することを命じた。

しかし、これは義久一流の芝居だったかもしれない。家中を結束させるには、とりあえず義弘を譴責するしかなかったのである。その証拠にほどなく義久は蟄居を解かれて、領内防備に奔走している。

義弘に付き従い、生き残って帰国した人数は正確にはわからない。判明しているのは、大坂にたどり着いた人数が七十数人だったことである。しかし、先ほど述べたように、義弘とはぐれて帰国した者は三桁に上ると思われる。

いずれにしろ、島津の退き口はわが国戦史上に燦然と名を残す壮挙であることは間違いない。



無事、大坂を出帆した島津勢であったが、その後も苦難は続く。九州は黒田如水率いる東軍によって制圧されていたからだ。だが、彼らは最後の力を振り絞り、霧島山塊を越え、郷里へと帰りついた。

満州電撃戦

関東軍　北方快進撃の秘策

昭和六年（一九三一）九月十八日夜
静寂を破り、奉天郊外柳条湖に爆音が轟いた。
以後半年を経ずに、満州全土を制圧した関東軍。
それは果たして、真の成功であったのか……

文＝瀬戸利春



右端の人物は、満州事変の首謀者、石原莞爾（1889〜1949）。旧庄内藩士の子。陸士・陸大卒。満州を、日本にとってのソ連に対する緩衝地帯とし、またその資源を得ようと謀略を用い、関東軍により一挙に占領することを目論んだ。上は昭和6年9月2日、奉天から長春に進出する迷彩を施した日本軍装甲列車。事変では既存の鉄道線路が進撃に活用された。下は黒龍江省の省都チチハルを巡り、大興高原で馬占山軍と対峙する関東軍将兵。

昭和六年（一九三一）九月十八日夜、当時満州と呼ばれていた現中国東北地方の奉天（現在の瀋陽）郊外の柳条湖（当時、日本では柳条溝と誤って伝えられた）で突如、何者かが満鉄の線路を爆破した。

この柳条湖事件こそ、満州事変の始まりを告げる号砲となったのである。

直ちに戦闘状態に突入した日本軍は、五か月あまりで広大な満州を席巻する。満州の地積はフランスの二倍近く、相手とした張学良の中国軍は日本軍の一〇倍に達する戦力を有していた。

こうした状況下で、日本軍は電撃戦を彷彿とさせる素早い軍事的成功を収めたのであった。その成功はいかにして成し遂げられたのだろうか。そしてそれは、真の意味で成功と呼ぶに相応しいものであったのだろうか。

満鉄と関東軍

明治三十八年（一九〇五）の日露戦争の勝利は、日本の大陸進出を確固たるものとした。

ポーツマス講和条約によって、日本はロシアが所有する東清鉄道の長春以南を獲得した。さらに遼東半島南端部分で、旅順、大連の両港湾都市を含む関東州をも租借する。そして翌年、日本政府は鉄道の運行管理のため、南満州鉄道株式会社を設立した。いわゆる満鉄である。

良く知られるように植民地経営会社である満鉄は、在来線運行のほか、新たな鉄道の敷設を開始した。さらには鉱山採掘権、森林伐採権、銀行券の発券と流通権、農事経営権、土地商租権、旅行居住権、営業権など様々な利権を獲得し、その多くが満鉄の所有あるいは管理下に置かれた。鉄道関連の用地も、付属地として満鉄が管理していた。日本が持つこうした利権は、満蒙の特殊権益と呼ばれていた。

要するに満鉄は鉄道運行のほか、鉱山経営や商業活動、宿泊施設営業など多角的な経営を行っていたわけであるが、このため満鉄に関連した様々な職業に従事する日本人が満州に居住し、

その数は二〇万人強に及んだのである。

ここで簡単に地理的説明を行っておきたい。当時、中国東北地方を日本は満州と呼称していたが、満州は吉林省、黒龍江省、奉天（遼寧）省の三省に分かれており、この三省を東三省と呼んでいた。

満州に隣接するモンゴルは明治四十四年（一九一一）に清国から独立したが、この独立によってモンゴル人居住地は二つに割れ、独立国は外蒙、残りの地域（現在の中国領内蒙古自治区）は内蒙と呼ばれるようになった。この内蒙と満州を併せて日本は満蒙と呼び、自らの勢力範囲として自認していた。

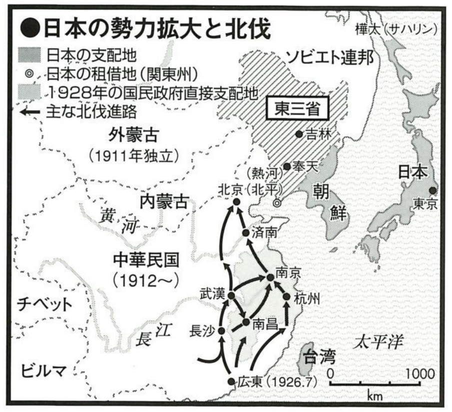
日本は鉄道と関東州守備のため軍隊を常駐させていた。これが関東軍である。その名は関東州に由来するが、軍とはいえ兵力は独立守備隊六個大隊と駐箚師団一個の合計一万四〇〇〇名に過ぎない。

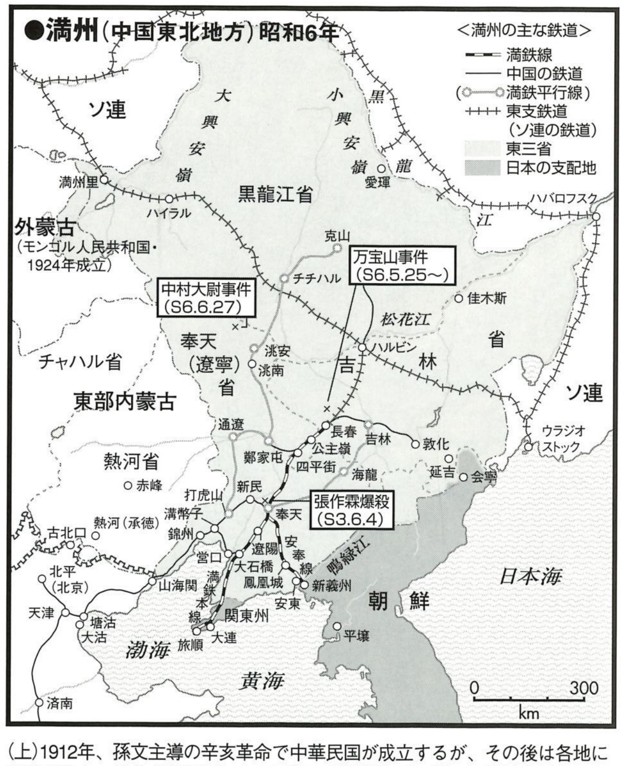
日本は関東都督府を置き関東州の統治を行っていたが、大正八年（一九一九）、関東都督府は行政部門と軍事部門に二分され、関東庁と関東軍司令部へ衣替えを行った。この結果、関東軍司令部以下の関東軍は天皇直隷の軍として独立した。

この処置後、関東軍は日本領土外の天皇直隷軍という、別格の立場にあると強く意識するようになる。

また、関東軍は関東庁長官の要請を受けた場合に出動するとされていたが、危急の場合には自軍兵力で適宜処置できることとされていた。ここに後の関東軍独走の芽があった。

とはいえ関東軍の行動範囲は満鉄付属地と関東州に限定され、その範囲外へ越境する場合は天皇の直接命令——奉勅命令を必要とした。実際には奉勅命令といっても参謀本部が起案し、天皇は形式的に命令を下し伝える（これを奉勅命令の伝宣という）だけだが、それでもこれが守られている限り、満州事変のような事態は勃発し得ないはずだった。





（上）1912年、孫文主導の辛亥革命で中華民国が成立するが、その後は各地に軍閥が乱立、抗争を繰り返した。日清・日露戦争でアジアに権益を拡大した日本は、対華21か条要求（1915）で中国への干渉を強め、東北軍閥・張作霖と通じ大陸進出を狙った。孫文を継ぐ蔣介石の国民党軍が北伐で北京に攻め上ると、河本大佐らは奉天に撤退する張作霖を爆殺し出兵の機会を伺うが失敗。（下）は事変直前の満州。作霖の子・学良は満鉄平行線などで日本に対抗した。

事変への構想と張作霖爆殺

一九一四年に始まった第一次世界大戦は空前の消耗戦となり、国家の総力を投入する総力戦となった。欧州の戦争をつぶさに観察した日本陸軍は、総力戦の様相に震撼した。

日本陸軍の想定では数百万発の砲弾、億単位の銃弾を消耗し、戦車や航空機の大量生産を必要とする戦争を日本が戦い抜くのは不可能と思われた。のちの太平洋戦争を振り返るまでもなく、この推測は当たっていた。

おりからの世界大恐慌に始まった英国のブロック経済構想と、昭和恐慌に始まる日本の不況、そしてその数年後の不作による東北農村の疲弊は、陸軍の危機感をいやがうえにも高める結果となった。

欧米に比べ資源も市場も少ない日本は、現状のままでは将来立ち行かなくなる、と彼らは考えた。日本陸軍内に

は来るべき総力戦に対応できる高度国防国家建設の思想が芽生えた。経済体制を変革して軍事生産力を高める、そのためには大陸の資源、市場を確保し独自のブロック経済圏を確立しなければならない。陸軍の内部、特に陸軍省軍事課長（後の軍務局長）永田鉄山をリーダーとした統制派と呼ばれるグループは、こうした意識を強く持っていた。

日本陸軍の構想は財界の支持を得るものでもあった。利益拡大を目指す財界と、軍備増大のため経済力拡大を図る陸軍の目的は、異なるものであったが、互いに補完し合う関係だったのだ。

また大川周明、北一輝などの一部思想家は、近い将来予想される国際危機に備え、国力充実のため国家革新を必要とすると説いていたが、彼らの主張は国防国家建設の理想とマッチするかに見え、陸軍若手士官に影響を及ぼした。

ここにおいて、陸軍は明治以来の対ロシア——対ソ戦争のため先手を取って軍隊を満州に配置しておくという軍事優先の考えから、国防国家建設のために満州をコントロール下に収め、総力戦体制を固める考えへとシフトしたのであった。

一方、辛亥革命以後中国の民族主義は高まりを見せ、その勢いは激烈なものとなった。革命を機に中国が半植民地状態を脱し利権を回収しようと努めたのは当然の事であったが、これに対し日本は強い警戒感を抱いていた。


張学良（1898～2001）。父作霖の死後、中国東北部の実権を継承し、抗日の道を歩む。最大の功績は昭和11年（1936）の西安事変で、第2次国共合作を成し遂げたことだろう。100歳を越える天寿を全うした。

辛亥革命による清朝の瓦解は軍事力を背景とした軍閥が各地に割拠する内戦状態をもたらした。日本政府は一部の有力軍閥の懐柔を試みたが、その一人が中国東北部の雄、東北軍閥として満州一帯を取り仕切る張作霖であった。

その頃、大きく勢力を延ばした蔣介石の国民党は各地の軍閥を吸収し、中国の大半を勢力範囲に治めつつあった。昭和の初めには、国民党軍は北伐によって次第に勢力を北上させてきた。

これに対し、日本の田中義一内閣は昭和二年七月東方会議を開催し「対支政策綱領」を訓示した。その基本は対中国積極策であり、満蒙の日本人の生命、権利、財産の不法侵害に対して断固自衛の処置に出るとされた。つまり満蒙で日本人が巻き込まれた重大事件が発生した場合には、日本軍の出動も辞さないと決定したのである。

昭和三年（一九二八）六月、国民党の中国軍は北京に入城し張作霖の勢力は大きく後退した。北伐軍が山東省に入ると、日本は居留民保護のため内地の部隊を済南に出兵させた。関東軍も出動の機会をうかがったが、奉勅命令は出されなかった（一部の部隊で投入されたものはあった）。

機会を得られなかったことに対する不満は、関東軍の一部将校を自ら機会を作為する方向へ暴走させた。昭和三年六月四日、華北から引き上げる張作霖は奉天近くで列車移動中に爆殺されたが、これこそ関東軍高級参謀、河本大作大佐が仕組んだ謀略であった。河本大佐はこの混乱に乗じて関東軍を出動させ、満州の武力占領を狙ったのである。

しかし張作霖の後を継いだ張学良も、また日本政府も慎重に対処したため、関東軍の出動はまたしても不発に終わった。河本大佐は罷免され、後任として板垣征四郎大佐が、また関東軍作戦主任参謀として石原莞爾中佐が関東軍司令部に迎えられることになった。これは、自分の意志を継がせるため河本大佐自身が板垣・石原両名を後任として手配したともいう。真偽は不明にせよ、この二人が河本の意志を継ぐ人物であるのに違いはなかった。

そもそもこうした人事を行い得たのは、陸軍上層部に満州での武力発動支持者がいたからにほかならない。

石原・板垣の満州占領計画

張作霖爆殺後の昭和四年（一九二九）、日本国内では対中積極策の田中内閣に代わり、浜口雄幸内閣が成立した。外相の幣原喜重郎は幣原外交と呼ばれる協調外交路線をその基本とした。

満州では張作霖の息子である張学良

が後継者となり、利権回収運動を試みた。張学良は親の代から進めていた満鉄に対抗する新たな鉄道路線、満鉄平行線建設を計画し、ついで国旗を国民党の青天白日旗に一斉に変える易幟（えきし）を断行した。この行為は張学良自らが国民党の支配下に治まることを意味しており、ここに中国統一は一応果たされたのだった。

こうした張学良の行動は特殊権益に対する脅威として、日本国内や在満日本人を刺激した。その上、世界恐慌の影響で満鉄の経営が悪化し、日本人の危機感はますます増大した。民間団体の満蒙青年連盟は自主独立を目指す満蒙問題解決を掲げ、宣伝活動を行った。中には関東軍に対して、関東軍は竹光かと詰め寄る民間人もいたという。関東軍を竹製の刀を持った腰抜けと批判したのである。



板垣征四郎（1885～1948）。旧南部藩士の子。陸士・陸大卒。関東軍高級参謀、奉天特務機関長に就任し、作戦参謀の石原莞爾と共に事変を引き起こす。後に満州国軍政最高顧問や第1次近衛内閣陸相などを務めるが、戦後A級戦犯として処刑。

昭和六年（一九三一）、満州の朝鮮系住民と中国人の衝突に端を発した万宝山事件で多数の死傷者が出ると、朝鮮系住民の被害は日本臣民の被害だとして日本を刺激した。当時の朝鮮は日本の植民地下にあったからだ。一方、中国側はこれを日本の陰謀として疑い、両国の関係は更なる悪化を見せた。

時を同じくして、蒙古の兵要地誌*調査のため出発した、日本陸軍の中村震太郎大尉一行が行方不明となる中村大尉事件が発生した（実は張学良の軍隊に殺害されていた）。

中村大尉らは張学良側の了解を得て行動していたことから、日本陸軍は強硬に謝罪を要求し、陸軍の中にはこれを武力発動の好機と見る者もいた。石原莞爾もその一人で、彼は満鉄の装甲列車を借用して行方不明の中村大尉捜索を強行することを上申したが、これは却下された。永田軍事課長宛の書簡を見ると、陸軍中央が石原の行動に懸念を抱いていたことが解る。

これら二つの事件に対して幣原外相は穏健な態度を取ったが、協調外交路線を国内世論は軟弱外交と非難した。こうした政治状況の下、満蒙問題解決の機運が醸成されていったのである。

石原莞爾が関東軍司令部に着任したのは昭和三年十月で、翌年には板垣征四郎も着任した。二人は大正九年に中国の漢口で勤務して以来、意気投合した仲である。今日、満州事変といえば石原の存在が強調されるが、実行に当たっては中国勤務の長い板垣の影響が大きい。

石原は一種のカリスマを帯びた人物で、『世界最終戦論』という妄想とも戦略構想ともつかない独特の考えを有していたことで知られる。石原の考えでは、世界は最終的に日米の覇権争いとなり、戦争は持久戦争ついで決戦戦争となる。そこで数十年後の日米戦争に備えて国防資源を確保し、工業を育成して国力を充実しておく必要がある。そのために戦争によって戦争を養うという危うい構想を抱いており、その第一歩が満州領有に他ならなかった。

また石原は領有した満州において産業を育成し、王道楽土（おうどうらくど）とすることを夢見ていた。彼にとっては高度国防国家と王道楽土は、矛盾をはらむ物ではなかったようだ。

石原の観たところでは、当時の国際情勢は計画実現の絶好のチャンスであった。ソ連は五か年計画の途中にあり、米英仏は恐慌直後の立て直し中、国際連盟は非力と石原は考えていた。

石原、板垣の二人は関東軍参謀部の中核となり、花谷正（はなやただし）少佐、片倉衷（かたくらただし）大尉など関東軍の少壮将校の一部を指導し、密かに満州武力占領計画を推進した。

そればかりか二人は、朝鮮守備に任じる（日本軍の）朝鮮軍参謀部や満鉄にも手を延ばし、同調者を募った。当時の満蒙問題解決の機運醸成を背景に、

＊兵要地誌＝地形図に軍事行動や軍政に必要な情報を記入したもの。

また陸軍部内に高まる高度国防国家建設の意識から、板垣、石原に賛同する者は多かった。満鉄の調査課長などは「沿線の不祥事をとらえて在満邦人は一致結束して満鉄を占有し、母国に謀反して軍隊による所要地域を託し治安維持を図る」と陸軍以上に過激な考えを抱いたほどだ。

そして昭和六年、関東軍は、張学良政府を転覆させ満蒙を占領するという「満蒙問題処理案」を策定するに至った。

両軍の状況と作戦構想

石原は昭和四年の関東軍による参謀旅行演習を皮切りに計画を進めた。問題は、いかに事変を起こすかということと、兵力劣勢の関東軍がいかにして満州を占領するかにあった。

石原は、軍事行動を起こすきっかけとして事件を作為することにした。これが鉄道爆破である。爆破と同時に張学良の軍隊――東北辺防軍が攻撃を加えて来たとして、なし崩し的に戦闘になだれ込む心積もりであった。

それでは実際に戦火を交える両軍の戦力はどの程度であったのだろうか。

当時の関東軍の兵力はやや増加して一万一〇〇〇名となっていた。内訳は駐箚師団一個と独立守備隊で、鉄道警備という任務上各所に分散していた。当時の駐箚師団は東北の精鋭第2師団だったが、師団の半分近くは国内に残置しており、特に後方支援関係の諸部隊は多くが国内にあった。

対する張学良の東北辺防軍は正規軍一八万、民兵など不正規兵を合すると四五万に達すると見られた。総司令官は張学良だが、彼は正規軍の内一一万五〇〇〇を直率して北京付近に駐在していた。

黒龍江省長兼副指令の万福麟（まんぷくりん）も二旅（「旅」は中国の編成単位で、日本軍の旅団に相当）と共に北京にあった。東北辺防軍は、中小軍閥を編入した名残で政治的な安定を欠いており、その上、軍の最高幹部二名が北京に出向いていたため統帥面に問題があった。

近代軍隊としての完成度もあまり高くはなく、士気は旺盛でも将校の素質が劣り、教育、訓練も不十分で団結力にも問題があった。昭和四年に起きたソ連軍との紛争では痛撃を受けている。この時のソ連軍はノモンハン事件のような火力、戦車戦力の充実した軍隊ではなかったが、それでも張学良軍は近代戦術を駆使する軍隊の前には抗し得なかったのだ。

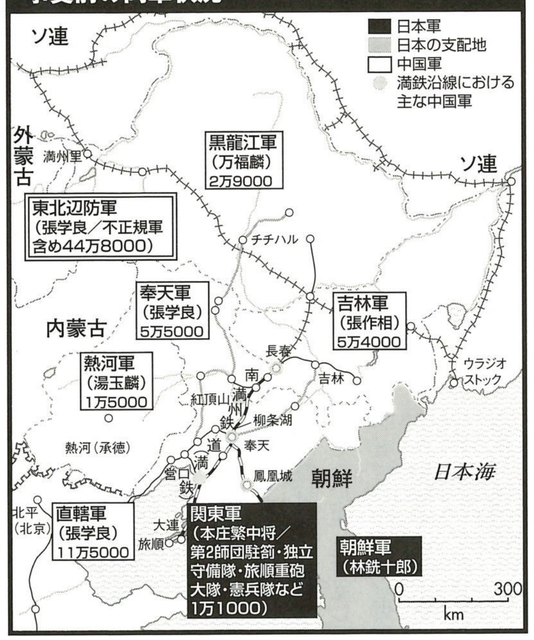
この紛争を観察した日本陸軍は「ソ連軍恐るべし、張学良軍弱し」との結論を引き出し、特に砲爆撃に対する脆さを感じていた。

結局、関東軍が初動において実際に相手にする実戦力は一〇万程度で、その内容を考慮すれば、戦力格差は関東軍の四倍程度だった。それでもなお関東軍は劣勢ではあるが、二〇倍もの戦力を相手とすることに比べれば、関東軍にも戦いようがあった。

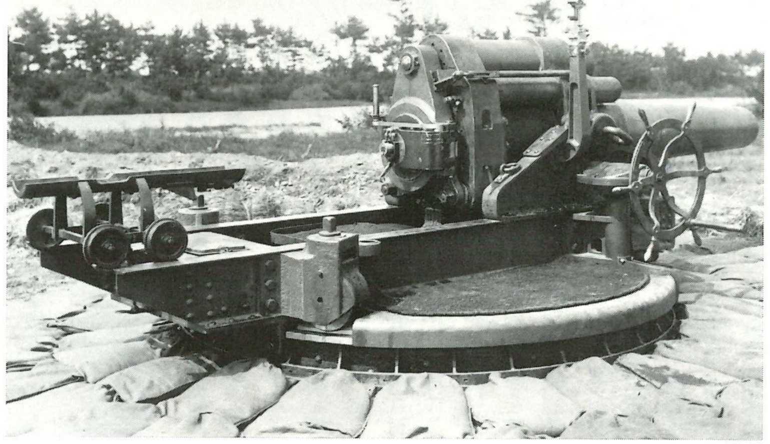
関東軍にとって、張学良と主力部隊が満州に存在しないことは狙い目だった。そのうえ張学良軍は分散していた。これに対し関東軍は、より集中しやすいポジションにいた。鉄道守備隊という任務上、関東軍は鉄道沿線にいる。言い換えれば関東軍は素早く集中して、分散する敵軍を相手に各個撃破を望み得る。それゆえ張学良軍との間で戦闘が生じた場合には、駐箚師団となっていた第2師団を主力とした兵力は奉天に集中することとされた。

都合のよいことに鉄道の多くは満鉄の管理所有下にある。その上、数はわずかだが満鉄は装甲列車など独自の戦力も持っている。石原が満鉄を味方に

事変前の両軍状況



事変直前の関東軍は、関東州と満鉄本線沿線に集中していた。一方の東北辺防軍は、圧倒的な兵力をもちながら、各省に分散していた。特に指令官たる張学良が、副指令万福麟と共に蒋介石軍の進出を牽制し、大軍と共に北平にいたことは大きな弱点であった。



密かに奉天に持ち込まれた45式24cm榴弾砲。日露戦争における旅順攻略の戦訓から、要塞攻撃用の重砲の必要性に迫られて開発されたもので、大正元年（1912）12月に制式採用された。日本独自の水圧空気式駐退復座機（圧縮空気により発射時の砲の反動を抑え、砲身を元の位置に戻す装置）を初めて採用。太平洋戦争ではバターン、コレヒドール攻略に使用され、昭和20年（1945）8月、満州に押し寄せるソ連の大軍に対し、牡丹江の重砲連隊の本砲が一矢を報いている。

引き入れていたのは、これらの点を考慮したためであったことは疑う余地はなかろう。

さらに重要なことだが、鉄道上を移動するかぎり、関東軍は満鉄付属地から出ることなく自由に行動でき、その限りではやっかいな奉勅命令は必要無い。満州事変は最初から敵地に自軍の鉄道が走るという、一種異常なシチュエーションで戦われた戦闘行動だったのである。

さしあたり、鉄道沿線の張学良軍を一掃し、鉄路と要所を押さえ、朝鮮半島からの通行ルートである鉄道——安奉線を確保することが関東軍すなわち作戦主任参謀たる石原の作戦だった。

さらに石原莞爾は陸軍省軍事課長の永田鉄山に話を通して、二四センチ榴弾砲（二四榴）二門を譲り受けた。二四榴は旅順攻撃で有名な二八センチ榴弾砲の後継火砲で、攻城重砲と呼ばれる要塞攻撃兵器だ。どのように考えても鉄道守備隊の必要とする装備ではない。これは初動で大火力を発揚するための準備であった。

永田鉄山は一〇年後をメドに武力による満蒙問題解決を考慮しており、陸軍省を始め陸軍上層部も「満州問題解決方策大綱」を策定して、一年をかけて用兵上の準備を行う方針を固めていた。奉天攻撃に二四榴を必要とするというのは、そうした陸軍上層部の研究によるものであり、そのため関東軍は容易に攻城重砲を入手できたのだ。二四榴は分解され、棺桶などに偽装されて秘密裏に奉天郊外に運び込まれ、据え付け工事もプール建設作業などと偽って行われた。

この他、戦力的に足りない分は満州に隣接する朝鮮軍の出兵により補うことを期待した。かねてから関東軍危急の際には朝鮮軍が支援することになっており、二個師団と航空隊を保持する朝鮮軍の戦力は侮りがたいものがあった。こうした準備を整えた上で、先制奇襲を敢行することになっていたのである。

しかし石原の抱いていた作戦構想はここまでで、それ以後のことは深く考えていなかったようだ。石原の戦略は日本軍を武力行動に引きずり込むことにあり、少数の関東軍で満州を占領しようとは考えていなかった。初動で鉄道と要地を押さえた後は、朝鮮軍と内地から送り込まれるであろう増援部隊に任せるつもりだったと思われる。

あまり先のことは細かく計画せず、柔軟に対処するというのは、モルトケ以来のドイツ兵学の考えだ。そして石原や板垣も、ドイツ流の兵学思想を受け継いでいるのである。

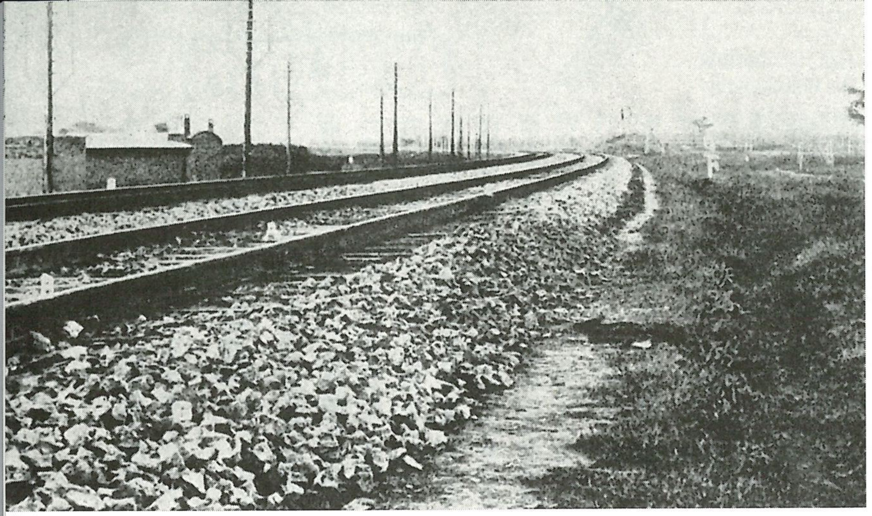
柳条湖に轟く爆音

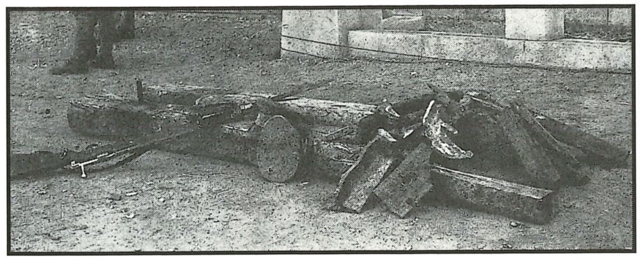
昭和六年九月十八日午後一〇時半、柳条湖付近において突如、満鉄の線路が爆破された。現場近くで演習中であった独立守備第2大隊第3中隊は、張学良軍の攻撃と断定して戦闘を開始した。

ところが鉄道を爆破したのは、この第3中隊の河本末守（こうもとすえもり）中尉以下少数の実行部隊だったのである。また和田勁（わだけい）予備役中尉指揮の大陸浪人隊もゲリラ的に行動し、日中両軍の戦闘を作為していた。

良く知られるように、これこそ石原がプランニングした戦闘を起こすための謀略だった。自作自演の鉄道爆破は、関東軍の中でも実行に当たる少数名が知るのみである。関東軍が敵襲を受けるや、ただちに行動を開始することは石原や板垣には承知の事実であった。計画漏洩を防ぐ点からも、関東軍に広く謀略の計画を伝達する必要性は無かった。

にもかかわらず陸軍中央や外務省は、事前に石原たちが何事かを画策しつつあることをキャッチしていた。そして





(上)事変の発端となった柳条湖付近の満鉄本線爆破地点。周囲は平原で、河川はあるがその地名から想像されるような湖はない。爆破は9月18日、午後10時40分奉天着の急行列車の通過時に行われたが、レールの一部を欠損させたものの、列車は無事通過した。（下）この爆破が張学良軍によるものであることの証明として展示された「証拠品」の数々。枕木、レールの破片、中国兵の軍帽や小銃など。

陸軍中央は建川美次（たてかわよしつぐ）参謀本部第一部長を止め男として派遣した。ところが、謀略に同調する橋本欣五郎（きんごろう）ロシア班長が、このことを事前に関東軍に伝達していた。事が露見したと考えた石原と板垣は、予定を早め十八日に爆破を決行したのである。

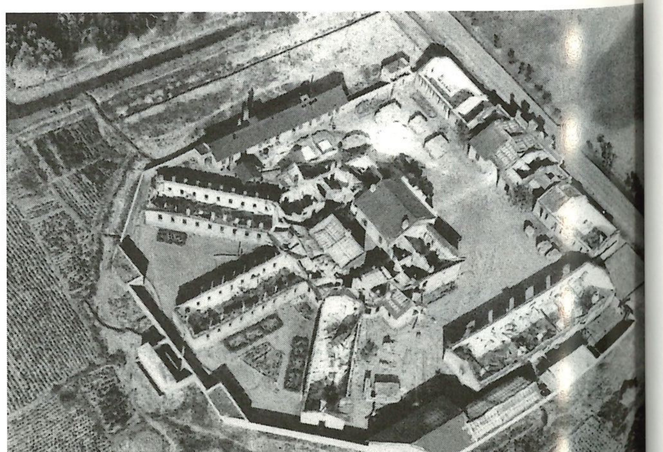
同日、建川は奉天に到着していたが、なぜか宿舎から一歩も出ようとしなかった。建川には最初から止める気などなかったともいわれている。陸軍内部に広く同調者がいる状況では、武力行使を止めることなど、もとより不可能だったのだ。「攻撃」を受けた独立守備第2大隊長はためらうことなく北大営（ほくだいえい）攻撃を決心した。北大営は爆破地点から六〇〇メートル程離れた張学良軍の駐屯地だ。当時、奉天付近にはこの北大営と一〇キロ程離れた東大営の二つの張学良軍の兵営があり、どちらにも張学良軍の精鋭旅団が所在し、その合計戦力は二万と見積もられていた。特に北大営にはルノーFT軽戦車を装備する戦車隊までいた。

鉄道爆破地点を北大営の近く柳条湖に選定したのは、北大営攻撃を視野に入れたものであろう。爆破地点の近くに抗日意識の高い精鋭部隊がいれば、その攻撃と断定しやすい。しかも北大営は満鉄路線のすぐ横にあり、関東軍にすれば真っ先に排除すべき位置にあった。爆破から間を置かず、北大営を奇襲する必要があったのだ。ここに石原の作戦参謀らしい着眼点を見ることができる。

わずか一個大隊（約九〇〇名）の奇襲を受けて、北大営の第7旅六〇〇〇名（日本側は八〇〇〇と見積もっていた）の部隊は早朝までに潰走した。第7旅の将兵は、予期せぬ攻撃を受けて満足な応戦もできなかったのである。

それにしても寝込みを襲ったにせよ、何故わずか六分の一の兵力で敵を敗走させ得たのだろうか。しかも北大営の建物は石造で、全体に小規模とはいえ城壁の様に石壁が巡らされているのだ。実は、密かに配置していた二四センチ榴弾砲二門（旅順重砲兵大隊と呼ばれた）がこの攻撃に参加していた。いや、正確に言えばこのために二四榴を用意してあったのだ。そして後述するように張学良の誤判断も手伝って、北大営は簡単に陥落したのである。

こうしたことが判明したのは戦後のことで、当時は多くの日本軍将兵が、



事変勃発の翌日、9月19日に空撮された占領直後の北大営。日本軍との戦闘で建物の屋根が落ちている。18日夜の満鉄線爆破の謀略により、関東軍の独立守備第2大隊は直ちに北大営攻撃を開始した。石造の兵舎・兵器庫・弾薬庫などの建物を石壁で囲んだ北大営は、王鉄漢大佐指揮の第7旅第620団が守備。内部に侵入した日本軍と翌朝まで交戦を続けたが、遂に敗走した。

抗日意識の高いはずの敵部隊の敗走を意外に受け取めていたという。

関東軍の電撃戦

事件当時、第2師団の歩兵第29連隊は奉天にいた。平田幸弘連隊長も謀略に関して何も知らされていなかったが、独立守備大隊から敵襲の報を受けると、直ちに在奉天の張学良軍二万に対する自衛処置として奉天城攻撃を決心した。第29連隊は奉天所在の板垣の承認を得て攻撃を開始する。

石原の思惑どおり「軍は拙速を尊ぶ」をモットーとする日本陸軍の各部隊は、事変に応じて迅速果敢に行動を開始した。

旅順の関東軍司令部への事件の第一報は、どうしたものか現地部隊からではなく、奉天特務機関からもたらされた。実は特務には関東軍参謀の板垣がいて、独断で命令を発していた。通常、参謀が戦闘部隊を独断で動かすことはできないのだが、すべては緊急時の処置として正当化されたのである。

報告を受けた関東軍司令部では幕僚らが「板垣、石原を第二の河本にするな」として、機先を制して張学良軍を撃破するよう進言していた。

着任間もない本庄繁関東軍司令官は謀略については知らず、しばらく逡巡した後、午前○時を過ぎ「本職の責任でやろう」と決心する。この時、鉄道爆破事件は事実上の戦争に突入した。

関東軍は奉天に兵力を集中するという、平素の作戦計画を若干修正して各部隊に命令を発した。これにより遼陽の第2師団主力は奉天付近の張学良軍を攻撃することになった（既述のように一部の部隊は既に行動している）。

各地の独立守備隊は以下のような行動を命ぜられた。

◆公主嶺の独立守備隊司令官は独立守備歩兵第1、第5大隊をもって奉天に集中。

◆大石橋の独立守備歩兵第3大隊は営口を攻撃。

◆独立守備歩兵第4大隊は鳳凰城と安東の張学良軍を掃蕩。

◆独立守備第6大隊は奉天に向かい第2師団の指揮下に入る。

駐箚師団である第2師団も各地に分散していたが、既述のように主力が奉天で攻撃に加入するほか、長春の歩兵第3旅団は騎兵第2連隊と共にそのまま長春警備を行うこととなった。同じく旅順の歩兵第30連隊と旅順重砲兵大隊にも奉天に向かうよう下令した。

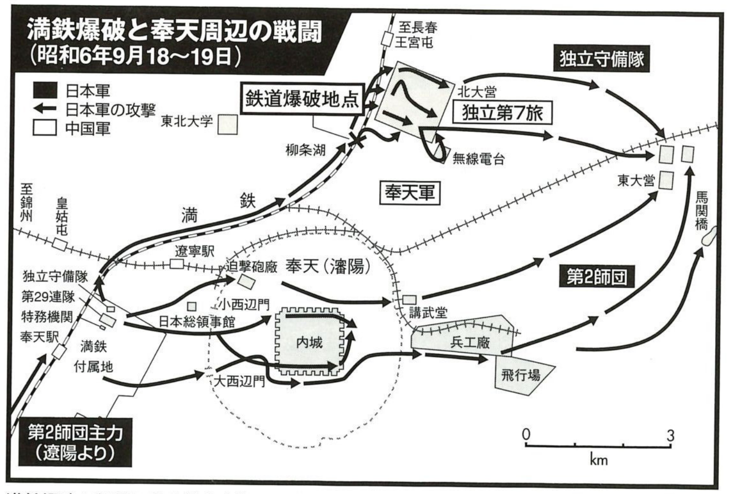
奉天から張学良軍を駆逐して満州の中枢を確保し、一部兵力で北の長春（当時は日本側勢力圏の北端だった）を押さえてソ連軍の動きに備え、南部では朝鮮からの増援部隊輸送ルートを確保することが関東軍の狙いであった。関東軍司令部も、朝鮮軍司令官に増援を要請し終えるや、早々に旅順から奉天へと鉄道で前進を開始した。

命令を受けて一斉に動き出した各部隊は、十九日までに次々と戦闘に加入した。

既に行動を開始していた歩兵第29連隊は、十九日朝までに難なく奉天城の城壁の一角を占領した。当時の中国の都市は周囲を城壁が取り巻いていたから、市内に突入するにはまず城壁を確保する必要があったのだ。

そこへ遼陽から列車で移動してきた第2師団主力（歩兵第15旅団を中心とする）が到着した。第2師団主力は十九日正午には奉天を占領し、併せて東大営も攻撃してこれも占領した。

奉天は無線電台が攻略されたことで外部との連絡が絶たれ、その結果、張学良も蒋介石も満足な状況把握ができなくなった。もう一つの大きな戦果は、奉天城大東門外の飛行場を確保して、張学良軍の航空機七〇機を鹵獲したことであった。



満鉄爆破を契機に北大営を占領した独立守備隊は、敗走する敵を追って東進。主力の来援を得た第2師団は、奉天を占領して兵工廠（武器弾薬工場）や飛行場、東大営も占領した。

満州電撃戦

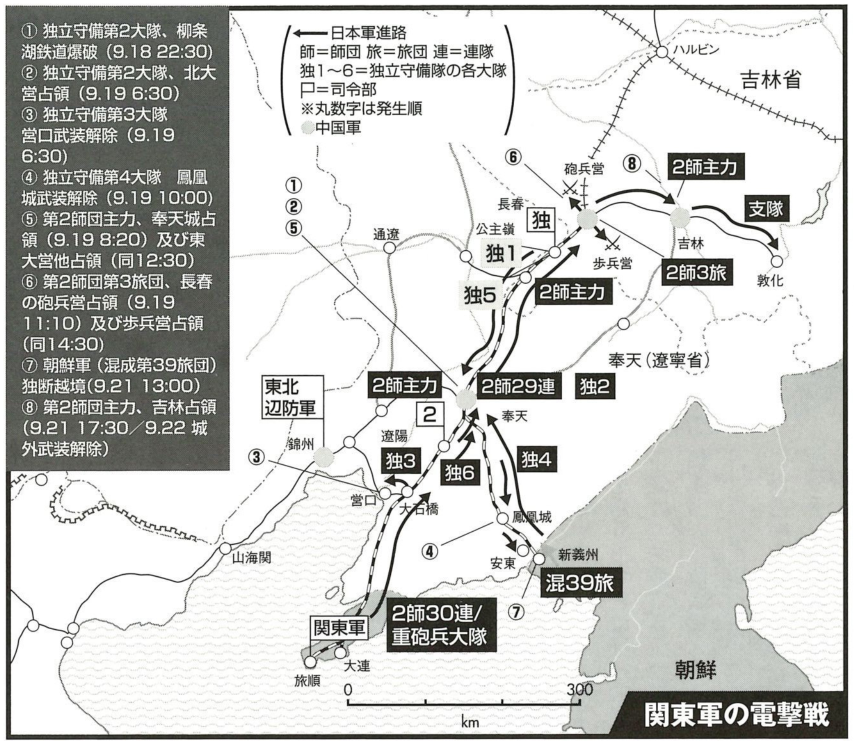

軍用列車にすし詰めになって前線に移動する関東軍将兵。事変では既設の鉄道線を利用して、まず沿線を確保する戦いが続いた。

これで張学良軍は航空戦力に壊滅的打撃を受けることになった。困難な航空撃滅戦を関東軍は地上からの奇襲によって成功させたのである。その直後、朝鮮軍から航空隊が飛来し、事変翌日には関東軍は満州の制空権を掌握していた。

鹵獲航空機のうち使用に耐える四〇機を関東軍は利用した。当時の日本陸軍航空隊は総力を挙げても一六〇機しかなく、その価値の大きさは計り知れないものがあった。

長春で事変を知った歩兵第3旅団は十九日○時過ぎ、すなわち本庄軍司令官が決心を下す前、早くも中国軍の兵営に対する攻撃を開始していた。

第3旅団は当初、奉天に移動することを予定しており、移動中に邪魔となる背後の敵を撃破しようとしたのだ。第3旅団はまず敵火力を破砕するため砲兵営を攻撃した。ここでも張学良軍は日本軍の行動を察知しておらず、奇襲は完全に成功した。次いで歩兵営を攻撃したが、もはや奇襲は期待できない。激戦を繰り広げた末に歩兵営が陥落したのは十九日の午後であった。



事変勃発後、関東軍は奉天に兵力を集中すると共に、鳳凰城や営口などを占領して、朝鮮方面からの増援部隊の輸送路と、錦州方面の中国軍に対する側背の安全を確保した。奉天周辺の制圧が終わると、激しい抵抗を排除して満鉄北端の長春を占領。さらに居留民保護の名目で吉林へも出兵するが、これは出兵で満鉄沿線の守備が手薄になるだろうということで、朝鮮軍の独断越境をし易くさせる意図だったともいう。

各独立守備隊の攻撃において、張学良軍はほとんど抵抗を示さず、日本側は武装解除を行って簡単に目標を占領した。こうして関東軍は事件開始後一日経たない間に、満州南部の電撃的制圧を成功させたのであった。

これを中国側から観れば、蒋介石の言う通り「たった一晩で東北南部（満州南部）の主要地は、事情もよく分からないまま日本、関東軍の武力支配するところとなった」と表現できるだろう。

各地で作戦が順調に進行していた十九日午後五時四〇分、関東軍は内地に次のような電報を発した。

「事態ここに至れる以上、この絶好の機会において先ず軍が積極的に全満州の治安維持に任ずるは最も緊要なりと信ず。これがため平時三個師団の増援を必要と認む」

緒戦に成功を治めた関東軍は、日本国内の出方を待つばかりとなった。

不拡大方針vs独断専行

柳条湖事件の第一報は参謀本部にも十八日夜間にもたらされた。ところが緊急呼集もなく、翌朝ようやく陸軍省と参謀本部の上層メンバーが会して協議が行われた。

既に関東軍は本庄司令官の決心で動き出している。止めることはもはや不可能だが、どのみち協議の結論は小磯軍務局長の「関東軍今回の行動は全部至当なり」という発言に沿うものであった。関東軍の独走としばしば表現されるが、実態は必ずしもそうではない。陸軍中央も関東軍の増援要請に応えるつもりでいた。

ところが、閣議の席上、外務省から今回の事件が陸軍の計画上のことではないかと追求され、南陸軍大臣はやむなく増援案を引っ込めた。最初から関東軍の謀略は疑われていたのだ。こうして外務省の牽制で日本政府はとりあえず不拡大方針を取ることにしたが、この方針はすぐに足元から崩れていく。

奉天でも領事館員が交渉による和平を訴えたが、関東軍は統帥権を楯にこれを退けた。統帥権を無視して軍事行動を専断する組織が統帥権を楯にするのは矛盾としかいいようがない。それどころか花谷少佐などは、軍刀で領事館員を脅して退去させたのであった。

一方、関東軍の不意の攻撃を受けた張学良は事態を局地的な事件と誤判断し、関東軍の独自行動と解釈していた。これは間違いではなかったが、日本政府が関東軍を制御できるだろうと考えたことは失敗であった。一九九〇年、九十歳を越える高齢に達してなおハワイで健在であった張学良は、ＮＨＫのインタビューでその過ちを認めている。

判断を誤った結果、張学良は自分の東北辺防軍に対して「不抵抗主義」を取らせた。北大営の部隊に対してさえ（日本軍の）好きなようにさせろと指示を出した程である。十九日になっても張学良は国際裁定に解決を求める方針を取って不抵抗主義を続行した。この行為は関東軍の行動を大いに助けることになった。

蔣介石を首班とする国民党の国民政府も、昭和四年に起きた李宗仁、馮玉祥などの反乱に悩まされており、また対共産軍戦にも忙殺されている状態で国民党軍の戦力を東北部まで割く余裕などはなかった。国民党政府は国際連盟を頼みに問題解決を計る外交的解決の道を選択する他になかった。

関東軍の電撃的成功の背景には、こうした相手側の事情も手伝っていたのである。

一方、朝鮮軍に柳条湖事件の一報と関東軍からの増援要請が届いた時、偶然にも軍参謀長は視察に出かけて留守、高級参謀は高熱で伏せていた。残るは林銑十郎軍司令官と、かねてから石原と通じていた神田正種参謀のみである。

関東軍同様、朝鮮軍もまた守備範囲外に兵を出すには奉勅命令を必要とする。つまり許可なく朝鮮半島から越境することはできず、もし独断で越境すれば、場合によっては死罪にもなりかねない軍律違反のはずであった。

ところが、満蒙領有に賛同していた林銑十郎軍司令官は、増援派遣を具申するまでもなくあっさり越境を決心して神田参謀を驚かせた。林朝鮮軍司令官の決心は、まだ飛行場確保のメドも立たない内から手持ちの航空隊二個中隊を送り出す程に積極的だった。

続けて朝鮮軍は第20師団から混成一個旅団の派遣準備を進めた。憲兵の報告で事態を知った陸軍中央は、急ぎこの派遣中止を指示した。神田大尉は戦後の手記で「憲兵はけしからん」としているが、けしからんのは朝鮮軍の方だろう。以後止めようとする陸軍中央と越境を画策する朝鮮軍との間で電文のやり取りが続く。関東軍の素早い成功は、逆に越境のタイミングを逃すのではないかと神田大尉を焦らせていた。政府も朝鮮軍出動に関し意見がまとまらず、時だけが過ぎていった。

そして九月二十一日、朝鮮軍はついに国境の町、新義州に待機する歩兵第39旅団を越境させた。朝鮮軍司令官から大命（奉勅命令の事）を待たず独断待機部隊を出発させたと報告され、陸相、参謀総長は首相を説得した。四月に浜口内閣の後を継いだ若槻礼次郎首相も「出たものは仕方なし」として越境に同意し、午後には事態を追認する形で奉勅命令が出されたのである。悪名高い事後承諾の独断専行の始まりであった。ところが当時の国内世論は朝鮮軍の越境を支持し、林軍司令官は越境将軍として持て囃されたのである。

翌二十二日、昭和天皇は不拡大方針を徹底するよう若槻首相に述べたといわれる。

しかし、陸軍の独断を認めたことで、日本政府が不拡大方針を維持することは困難となりつつあった。こうして柳条湖に始まった武力行動は、宣戦布告のないまま、「満州事変」として済し崩し的に拡大していくのであった。

小康状態

ここまでの関東軍の行動は一応は満鉄付属地で行われていた。しかし作戦

が一段落した今、戦闘地域拡大の問題に直面することになった。満州事変の勃発以来、吉林方面で抗日運動が激しさを増し、居留民の安否も懸念された。関東軍はこれをチャンスに出兵を望むが、政府も陸軍中央も不拡大方針を堅持していた。

吉林は鉄道沿線の町だが、鉄道は満鉄の物ではなく出兵は満鉄付属地からの越境を意味する。しかし二十一日、関東軍は政府の意向を無視して居留民保護を名目に再度の独断専行に踏み切った。長春にいた第2師団主力が出撃して吉林を攻撃したのだ。吉林軍は戦闘を避けて退却、町は無血占領された。

同じ日、日本からは抑え役として参謀本部から派遣された橋本虎之助少将が到着していたが、橋本少将は事実上の軟禁状態に置かれ、軍中央の関東軍抑制はまたも失敗したのであった。

ところで、関東軍の方針は既に全満州の占領にあり、吉林占領はその序章に過ぎなかった。

将来の対ソ戦争を考慮するなら、大興安嶺山脈を含む北部満州までをも日本の勢力範囲として確保しておかなければならないと、石原はじめ関東軍の首脳部は考えていた。そのためには、まず鉄道上の主要都市ハルビン、チチハルを占領する必要がある。

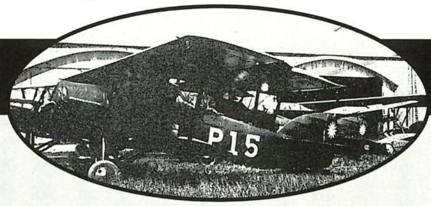
ハルビンでは抗日運動が盛り上がり、そこへ大杉栄事件*で有名な甘粕正彦大尉（正確には予備役大尉）らが暗躍し抗日を扇動していたため、領事から出兵要請が出るほど状況は悪化していた。

同じ頃、張学良は熱河省の錦州に遼寧省政府行署、東北辺防軍総司令官公署を移した。ここには吉林から脱出してきた吉林政府首脳がいたが、張学良は彼らを東北辺防軍総司令官や行政責

満州事変の兵器

文＝編集部

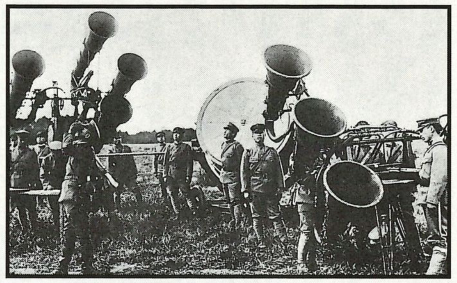
満州事変（ハルビン攻略まで）では、曲がりなりにも近代化に努めてきた日本陸軍の最新兵器が、小数ながら投入され実験的に使用された。また戦術的にも、従来騎兵が担ってきた捜索任務を偵察機が代行したり、小規模だが、歩・騎兵、戦車、装甲車の攻撃を、航空機が支援する共同作戦も行われている（チチハル攻略戦）。装甲車両としてはフランス製ルノーFT、NC軽戦車や若干の装甲車が投入されたが、大きな活躍の場は無かった。火砲では前述の24cm榴弾砲の威力が絶大であった。軍用機では88式偵察／軽爆撃機が活用され、錦州爆撃も敢行している。特筆すべきは装甲列車で、鉄道沿いに点と線を確保する戦いの中で、輸送列車の警備などに奮戦し、日中の装甲列車同士で砲撃戦も発生した。なお、張学良軍もルノーFTや、フランス製軍用機を持っていたが、初期の段階で鹵獲されている。

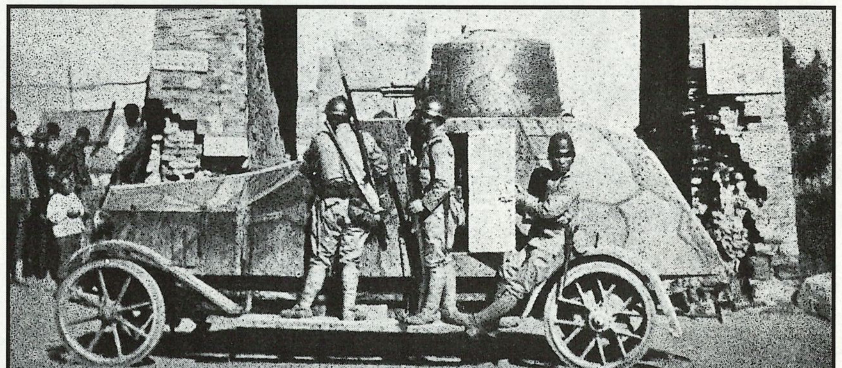


関東軍に地上で鹵獲された中国軍機。垂直尾翼に青天白日のマークが見える。



事変勃発後、奉天飛行場に空輸到着した朝鮮軍の88式偵察／軽爆撃機。昭和３年（1928）採用の新鋭機。


レーダー未装備の当時、高高度並びに暗夜の敵機襲来に際し、その爆音を聴取して位置を測定した「防空聴音機」。


奉天郊外に出動するウーズレー装甲車。5トン積みトラックの車台を利用、旋回銃塔に３年式重機を搭載。

＊大杉栄事件＝関東大震災後の1923年９月16日、憲兵分隊長だった甘粕が、不逞行為を働く恐れがあるとして、無政府主義者の大杉栄夫婦らを殺害したとされる事件。

任者に任命して東北行政を担当させた。いわば錦州が満州方面の仮首都となったことになる。張学良軍は錦州から満州内部でのゲリラ戦を指揮し、治安の攪乱を工作しようと試みていた。

石原はこの事態を重視して錦州攻撃を主張し、かたや板垣はハルビン攻略を優先していたが、いずれにせよ不拡大方針を取る日本政府は、関東軍の行動を許可しなかった。国際連盟理事会は中国の提訴で、日本軍の撤兵と原状回復を決議しており、十月十三日には調査委員会の満州派遣の審議が予定されていたので、日本政府としてはうかつな対応は差し控える必要があった。

陸軍中央もハルビン進攻に反対していた。「ソ連軍恐るべし」とする彼らはソ連の行動を警戒していた。当時ハルビンはソ連の勢力圏と見なされていたから、安易に踏み込むことはリスクが大きく、自衛行動と主張することにも無理があると考えられた。

さしもの関東軍もしばらくは武力行動を控え、張学良軍の切り崩しへと方向を転換した。こうして戦闘は一時休止となった。

その最中の十月八日、日本の航空機一二機が突如錦州に飛来し、爆撃を行った。この爆撃行は石原の独断で関東軍司令官さえ知らない内に敢行された。石原は後で「ちょっと錦州に見に行って来た。爆弾が自爆する恐れがあったから落とした」と釈明しているが、本心はソ連や中国を刺激して出方をうかがう、一種の威力偵察だったようだ。この行為は日本の外交的立場を一層悪化させた。

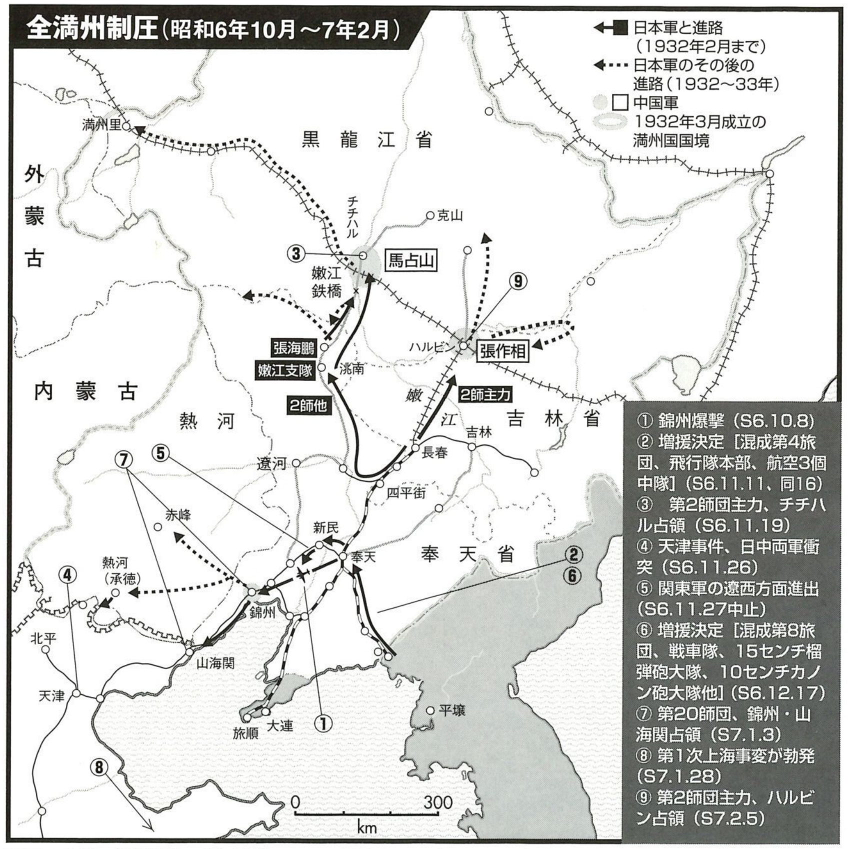
一方、日本国内にも問題が発生していた。十月事件と呼ばれるクーデター未遂事件が発覚し、政府内部を揺るがせていた。

このクーデターは、橋本欣五郎（建川美次派遣を関東軍に内通した）を中心とする陸軍将校らの計画であった。橋本らは満州事変に呼応して国家改造（国防国家建設）の推進を計ったとされているが、十月事件の真相はいまだに不明のままだ。

十月事件が発覚すると関東軍は「帝国の伝統を破り、天皇から独立分離せざるを得ず」という脅迫ともとれる電文を陸軍中央に打電した。クーデターに呼応したのは間違いなかろう。

陸軍中央も関東軍司令部、第2師団、独立守備隊のそれぞれに対して「関東軍の独立はこれを許さず」と打電し、変わらぬ不拡大方針に石原が激怒するという緊迫した一幕も見られた。

関東軍に独立計画はなく、十月事件ともども全てがうやむやにされた。満州事変に隠れて忘れられがちだが、日本国内も危機にあったのである。



石原は突然の錦州爆撃で世界を驚かせた。関東軍は、寝返った張海鵬軍を利用する形で馬占山の黒龍江軍に戦端を開かせ、チチハルを占領。将来の傀儡国家建設を構想し、天津事件を起こして溥儀を脱出させる。さらに匪賊討伐の名目で張学良最後の拠点錦州を占領し、最後に北満の要衝ハルビンを陥落させた。

〈主要図版参考〉中山隆志『関東軍』（講談社選書メチエ）／臼井勝美『満州事変』（中公新書）／児玉幸多編『日本史年表・地図』（吉川弘文館）／武月星主編『中国現代史地図集1919〜1949』（中国地図出版社）

全満州制圧へ

日本国内がクーデター騒ぎに揺れる間、関東軍の軍閥切り崩し工作が成功し、騎兵32師長の張海鵬が関東軍に寝返った。これを機に満州事変は次のステップへ移行する。

張は十月始めチチハルを目指し北上を開始したが、チチハル南方七〇キロの嫩江鉄橋を爆破した直後、黒竜江省主席の馬占山軍に撃退された。この鉄橋爆破は、関東軍の謀略ではなく偶発事件であった。

爆破された鉄橋は満州北部から農産物を輸送するルートに有る。農産物が入手できないと困る関東軍は、一週間という短い期限付きで馬占山に鉄橋修理の要求を出した。

結局、馬占山側は修理を行わなかったので、関東軍が修理部隊を派遣することになった。短期間で修理を行うことはもとより不可能であり、関東軍はそれを承知で出兵の口実を作るため無理な要求を出したとの説もあるが、真相は不明なままだ。ただ、この事件を機に関東軍の満州北部進攻が開始されたことだけは確かである。

十一月四日、関東軍の歩兵第16連隊を基幹とする嫩江支隊に支援された修理部隊が鉄橋に接近すると、突然、馬占山軍がこれを射撃した。それまでと異なり張学良軍の戦意は旺盛で、支隊は一時十字砲火を浴びる程に苦戦した。支隊は二個大隊の救援で危機を脱し、六日に態勢を立て直すと、ようやく敵を撃退した。

十一月七日、石原は馬占山軍の殲滅準備に取り掛かった。同日、馬占山は「対日宣戦」を布告し、戦闘は再開された。政府と陸軍中央はもう一度関東軍を抑えようとして、関東軍司令官を拘束する允裁を天皇から取り付けたが、拡大した戦火をとどめることは、もはや不可能であった。

十一日には政府も妥協し増援として混成第4旅団、飛行隊本部、航空三個中隊を次々と送り出していった。十六日、政府は作戦上の必要があれば一時的にチチハルを占領することも許可した。関東軍は十八日には馬占山軍二万を第2師団主力六〇〇〇で攻撃、これを撃破してチチハルを占領した。

チチハルを占領した関東軍は、十一月末から今度は遼西方面、つまり遼河を越えた南西部の制圧に着手する。鉄道を押さえている関東軍は速やかに部隊を移動させることができたのだ。

十一月二十六日、今度は天津で日本軍と中国軍が衝突する事件が発生した。これも偶発事件だが、またしても事件をきっかけに関東軍は動きだす。関東軍が新民を占領したところで、陸軍中央は四回も命令を発してようやく行動を停止させることができた。

十二月十一日、若槻内閣が倒れ、後任の犬飼内閣は、満蒙問題は軍部と協力して解決するという方針を打ち出した。日本の不拡大方針は吹き飛び、錦州攻略作戦は正式に許可されたのであった。

抑制のなくなった参謀本部は増援として混成第8旅団の他、戦車隊、一五センチ榴弾砲大隊、一〇センチカノン砲大隊など重装備まで送り出した。対する張学良軍は三万五〇〇〇の兵力で遼河を楯に防御線を敷いていたが、火砲は六〇門しかなかった。

十二月二十八日、凍結した河川を二万近い日本軍が渡河すると、張学良軍は戦線を支えられず後退した。制空権を握り、重装備を持つ日本軍は一月三日までに錦州を占領し、山海関まで進出して遼西一帯を制圧した。

昭和七年一月二十七日、ハルビンで関東軍が懐柔した吉林軍と張学良系の張作相軍が衝突し、日本人が巻き込まれる事件が発生した。またしても関東軍は事件をきっかけに行動したが、ソ*連の妨害で鉄道移動が滞り、その間、吉林軍は形成不利となった。

二月三日、からくも到着した第2師団の攻撃で張作相軍を撃破、ハルビン



昭和7年2月8日、ハルビンの入城観兵式に臨む第2師団。錦州とハルビンの占領で一応全満州を制圧した日本だが、翌年には熱河全省も占領。華北にも影響力を行使した。

＊ソ連の妨害＝長春〜ハルビン間の鉄道はソ連の利権であり、中立・不干渉を建前に日本軍の使用を拒否した。



1915年2月20日、
舞鶴工廠で進水する
二等駆逐艦「楓」。

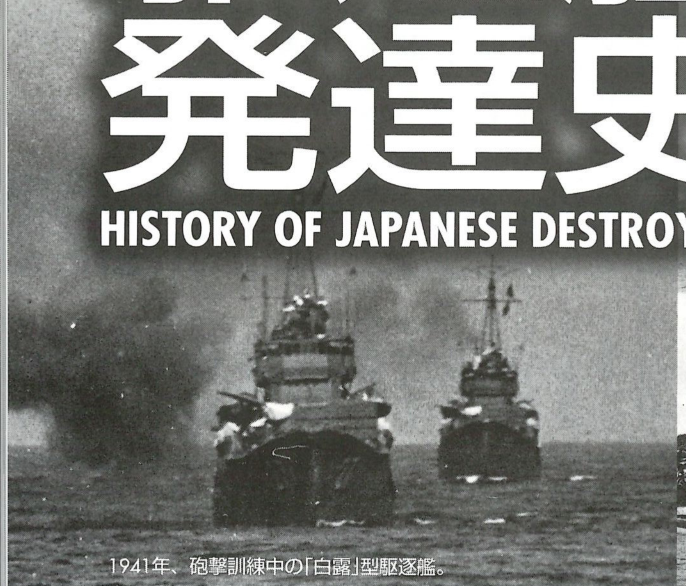
多様な艦種に秘められた開発の苦悩

日本駆逐艦発達史

HISTORY OF JAPANESE DESTROYERS



1899年、
英ソーニクロフト社で
完成直後の「不知火」。



1941年、砲撃訓練中の「白露」型駆逐艦。



1899年、
英ソーニクロフト社で
完成直後の「東雲」。

日本海軍の作戦海面が近海から外洋へと拡大するのに伴い、
駆逐艦はより強力な兵装、より高度な外洋航行能力を求められた。
しかし、大きさの限られた駆逐艦の高性能化は、
さまざまな部分に無理と犠牲を強いることとなった。



1939年、艦隊運動中の
第1水雷戦隊。

文＝田村尚也

を占領した。ついで関東軍は吉林軍と共同し、四月四日までには一応満州北部の要地制圧に成功していた。

錦州とハルビンの占領で関東軍は全満州制圧の体裁を整えることができたのである。

「王道楽土にあらず」

三月一日、日本は清朝最後の皇帝であった溥儀(ふぎ)を擁立して満州国を建国した。石原はもともと総督を置いた満州領有構想を抱いていたが、国際世論を考慮して、日本は満州国独立という体裁を繕(つくろ)うことにしたのである。

満州国という疑似的な政権の立ち上げが疑惑の目で見られることを妨げようと、日本軍は上海事変を引き起こした。これは上海特務機関の田中隆吉少佐が画策した、日本人僧侶殺害事件がきっかけともいわれている。いずれにせよ謀略によって始まった事変は、謀略によって幕を降ろすことになった。

石原は満州に王道楽土を建設することを夢見ていたが、実際に建国された満州国は関東軍と満鉄の支配する植民地に過ぎなかった。

満州国建国祝賀会に招待された陸軍の荒木貞夫大将は「満州国は王道楽土にあらず」として欠席した。だが、こうした批判は一般的なものでなく、事実を知らない日本国民は満州国建国を支持したのであった。

満州国建国後も各地で戦闘は続いた。日本軍は満州全域の制圧に成功はしたが、それは要地を確保したに過ぎない。関東軍は各所で張学良軍に勝利を収めたものの、それは敵を追い散らしたに過ぎなかったのだ。そのため各地でゲリラ化した敵に悩まされ、一〇年近くも掃討作戦を繰り返すことになった。

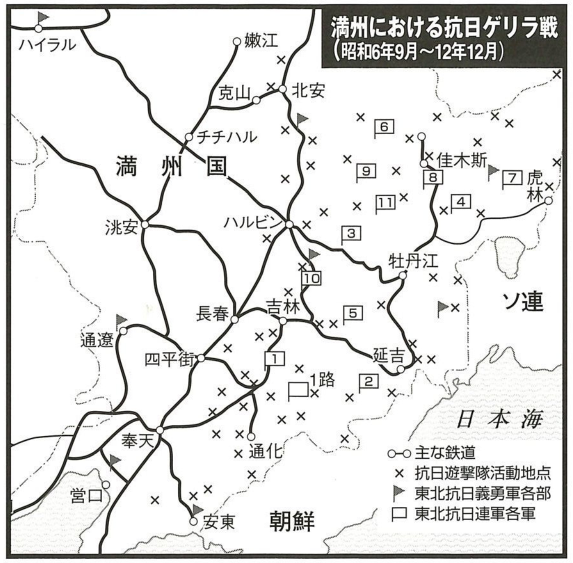
関東軍の成功は、奇襲で鉄道路線を確保し、相手が立ち上がらないうちに精鋭部隊を撃破し得たことにあるだろう。

この点では、軽装備の空挺師団と山岳師団のみで、動員以前のノルウェー軍を撃破して成功した、ドイツ軍のノルウェー攻略作戦に類似している。

速やかに鉄道を確保したことで第2師団のように迅速に移動し、敵を各個撃破できた。また緒戦の奇襲は制空権確保に結び付き、張学良の誤判断をも誘ったのである。

だがドイツの電撃戦や、今日のイラク戦争と同様、速やかに勝利は得たものの、ゲリラ的抵抗を招くことになった。これは軍事の限界なのかもしれない。

また、張学良軍が近代戦術に不慣れなことも勝敗を分けた要因であった。まがりなりにも第一次大戦の教訓から群戦法や浸透戦術といった新戦術を学び演練していた日本軍にとって、張学良軍の野戦築城は攻略しやすいものであった。また日本軍が迂回の態勢を取るだけで、張軍が陣地を放棄する例も多かった。



事変後、中国軍の一部や「匪賊」、宗教結社や民族主義者らの義勇軍約30万の自発的抵抗に直面した日本は、昭和８年（1933）頃までにこれをほぼ制圧。しかしその抵抗は中国共産党主導による抗日ゲリラ戦に再編され、10年にわたり「東北抗日連軍」約２万が組織的抵抗を継続した。

このため事変の終盤になると、火力で制圧しつつ正面から攻略する正攻法は弾丸の無駄という、近代戦を見据えた時には誤った戦訓を引き出してしまったのである。加えて、戦闘の成功の背景にあった二四センチ榴弾砲や錦州攻略時のような火力の発揚は忘れられた。特に二四榴の加入は秘密にせざるを得なかったからなおさらであった。

火力や、相手の不抵抗主義という政治の問題は忘却され、多くの将兵には、戦うとすぐに逃げるという中国兵の印象だけが残されることになった。

今日、満州事変に対する批判は様々になされている。電撃的成功を収めたことが、日本軍を戦術的誤判断に誘導したといえるだろう。そして度重なる独断を許したことが、さらなる独断を招くことになる。

満州事変に勝利することで、日本は戦争という無限地獄に落ち込むこととなったのである。

〈主要参考文献〉角田順編『石原莞爾資料』（原書房）／『現代史資料7』（みすず書房）／『現代史資料11』（みすず書房）／中山隆志『関東軍』（講談社選書メチエ）／『近代日本戦争史3』（同台経済懇談会）／陸戦史普及会『満州事変1第2師団のチチハル攻略』（原書房）／参謀本部『満州事変史1』「満州事変の体験談と教訓及び所見」『偕行社記事第708号』

黎明期の駆逐艦

そもそも駆逐艦という艦種は、明治二十五年（一八九二）にイギリスのヤーロー社で起工された水雷艇駆逐艦（Torpedo Boat Destroyer）「ハヴォック」を起源としている。水雷艇（Torpedo Boat）よりも大型で、これを凌駕する性能を持つ水雷艇駆逐艦はやがて水雷艇にとって代わり、単に駆逐艦（Destroyer）と呼ばれるようになった。

日本海軍では当初、この艦種を水雷艇の一種と捉えており、軍港等の防御用として分散配備することが考えられていたという。しかし、遠くイギリスから日本まで自力で回航されて来たことなどから水雷艇を超える凌波性が認識され、日本海や黄海等での洋上襲撃に使うことが考えられるようになった。[*1]

日本海軍に最初に導入された駆逐艦は、明治二十九～三十年度計画で建造された「雷」型と「東雲」型で、前者はイギリスのヤーロー社に、後者はソーニクロフト社に、各六隻が発注された。

次いで、明治三十三年度計画で「暁」型（初代）がヤーロー社に、「白雲」型がソーニクロフト社に二隻ずつ発注されたが、同年度計画では国産駆逐艦「春雨」型の建造にも着手しており、明治三十六年度計画を含めて計七隻が建造された。

続いて、日露戦争開戦直後の明治三十七年度計画で「春雨」型に小改良を加えた「神風」型（初代）の大量建造に着手し、明治三十八～三十九年度計画を合わせて計三二隻が国内で建造された。

これらの駆逐艦は、同時期の英駆逐艦を模して設計され、いずれも常備排水量[*2]三百数十トンで、レシプロ式蒸気機関を搭載し速力は二九ノット、主砲は八センチ単装砲（口径三インチ、一二ポンド砲とも呼ばれた）二門、雷装は四五センチ魚雷発射管単装二基というものであった。

日本海軍は、英海軍での運用実績も定かでない時期に「駆逐艦」という新艦種の導入をいち早く決定し、わずか数年で国内での大量建造に移行した。

二本立ての駆逐艦建造

日露戦争後の明治四十年（一九〇七）、日本は、国防戦略の大方針を定めた『日本帝国ノ国防方針』、整備すべき兵力量を定めた『国防ニ要スル兵力』、作戦立案の基本となる『帝国軍ノ用兵綱領』の三部からなる『帝国国防方針』を決定した。

このうち『日本帝国ノ国防方針』では、日本海軍の兵備は「想定敵国中我海軍ノ作戦上最モ重要視スヘキ米国ノ海軍ニ対シ　東洋ニ於テ攻勢ヲ取ルヲ度トス」とされた。これ以降、日本海軍は米海軍との戦闘を念頭において各種艦艇の整備を進めていくことになる。

ただし、『帝国軍ノ用兵綱領』の多くは対露戦について書かれており、対米戦は対独戦や対仏戦とともに「先ツ敵ノ海上勢力ヲ撃滅スルヲ主眼トシ爾後ノ作戦ハ臨機之ヲ策定ス」とあるだけで、具体的な作戦内容は何も示されていなかった。

もっとも、当時の日本海軍の軍備では、太平洋上で米海軍の進攻艦隊を迎え撃つ作戦計画に具体性を与えることができなかったといえる。例えば、常備排水量四〇〇トン足らずの「神風」型（初代）では、太平洋上遠く外洋作戦を展開するには凌波性や航続力が不足していた。

そこで、凌波性や航続力の向上等を目指して、明治四十年度計画で英海軍の新鋭駆逐艦「トライバル」級（F型）を参考に基準排水量[*3]一〇三〇トンの「海風」型二隻が建造された。航続力は一五ノットで二七〇〇浬と「神風」型の一一ノットで八五〇浬から大幅に伸びた。また、船体が大きくなった分、凌波性も格段に向上した。

しかし、「海風」型のような大型駆逐艦を多数建造するには多額の予算を必要とする。また、航洋性の向上とは矛盾するが、砲弾よりも速度の遅い魚雷は敵艦に隠密裏に接近してできるだけ近距離から発射するのが望ましいから、艦型はとくに夜戦時に敵に発見されにくいよう、なるべく小さいほうがよい。

こうした理由から、明治四十年度計画では大型で高価な「海風」型とともに、小型で安価な「櫻」型二隻が建造された。基準排水量は「海風」型の約半分で、レシプロ機関を搭載しており、直結タービン搭載の「海風」型より低速だが急速建造に適していた。

事実、大正三年（一九一四）八月に第一次世界大戦が勃発した際、「櫻」型に小改良を加えた「樺」型が翌年四月までの短期間に一〇隻が急造され、うち八隻が地中海に進出して連合国輸送船団の護衛等に活躍している。

そして、これ以降、日本海軍の駆逐艦は、大型の一等駆逐艦と中型の二等駆逐艦の二本立てで整備が進められていくことになる。[*4]

一等、二等駆逐艦の発達

さて、初の一等駆逐艦となった「海風」型は、主機の直結タービンの低速時の効率が悪く、航続力上のネックになっていた。その解決策として、ヤーロー社から燃費の良いディーゼル機関を巡航用に搭載することが提案され、明治四十四年計画で試験的に二隻が発注された。これが「浦風」型だ。

ところが、建造途中に第一次世界大戦が勃発し、ディーゼル機関の減速用の流体継手[*5]がドイツのフルカン社から入手できなくなってしまった。このため「浦風」には国内で巡航用タービンが追加され、二番艦の「江風」（初代）は竣工前にイタリアに譲渡された。

これとは別に、当時進められていた戦艦八隻、巡洋戦艦四隻を主力とし、それに見合った補助艦艇を整備する「八四艦隊計画」の一部として大正四年度計画で「磯風」型四隻が建造された。備砲はそれまでの一二／八センチ砲の混載から一二センチ砲に一本化され、四五センチ連装魚雷発射管は従来の二基四射線から三基六射線に強化された。

続いて、大正五年度計画で「谷風」が建造され、翌六年度計画で同型艦「江風」（二代・以下同）が建造された（竣工は「江風」が先になったため「江風」型と呼ばれることが多い）。この「江風」型では、米主力艦の水中防御の強化等に対応して、国産駆逐艦としては初めて五三センチ魚雷発射管が搭載された。また、缶（ボイラー）はそれまでの石炭と重油の混焼から重油専焼となり、黒煙が抑えられて敵に発見されにくくなるとともに、すべてのタービンに減速歯車装置が付いた効率の良いオール・ギアード・タービンが採用されたが、信頼性等の問題で全力発揮はむずかしかったようだ。

そして、この大正六年度計画では、艦



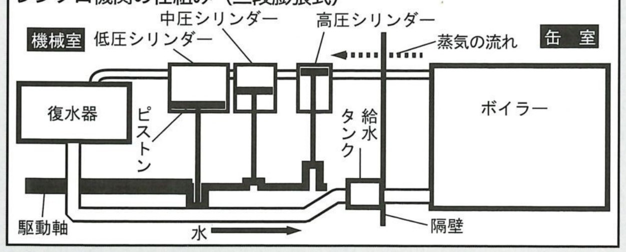
英駆逐艦「ボクサー」（1895）。１番艦の「ハヴォック」がヤーロー社で建造されたのに対し、6番艦の本艦はソーニクロフト社で建造されている。艦首部に7.6cm単装砲のプラットフォームをもち、さらに5.7cm砲5門、45cm単装魚雷発射管2基を装備。機関は3気筒3段膨張式レシプロ蒸気機関で約4500馬力、29ノットを発揮した。

駆逐艦の機関の発達

【レシプロ式蒸気機関】

ボイラーで発生させた蒸気の圧力でシリンダー内のピストンを動かすもので、クランク軸を利用して直線運動を回転運動に変換している。タービンに比べると機構が簡単なため製造や保守が容易で故障も少ないが、エネルギー効率は低い。また、最初のシリンダーから排出された蒸気はまだエネルギーを持っているため、高圧から中圧、低圧の各シリンダーに導き、最終的に復水器で水に戻してボイラーに循環させる。

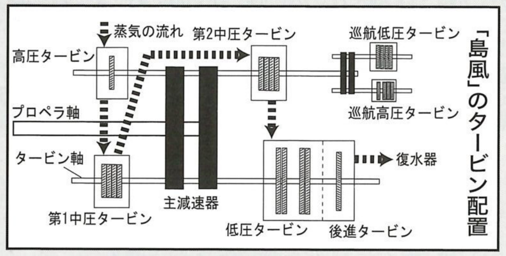
レシプロ機関の仕組み（三段膨張式）



【蒸気タービン機関】

レシプロ機関がピストンを動かして動力を得ているのに対し、蒸気の圧力を風車のようなものに吹き付けて回転させて動力を得ているのがタービンの原理である。1897年に実用化され、以後、軍艦を中心に高速船用の高出力機関として採用されることとなった。

初期のタービン機関はプロペラ軸と直結していたために、低速航行時には蒸気の量を少なくしたり、低速専用の巡航タービンを別に搭載したが、タービンは高速になるほどエネルギー効率が向上するため、減速機を介してタービンの回転を高速に保ったままプロペラ軸の回転を制御できるようにされた。



「島風」のタービン配置

*1＝明治31年制定の軍艦、水雷艇類別等級では、駆逐艦は水雷艇の一種である「駆逐艇」に類別され、明治33年には水雷艇から分離されて「駆逐艦」に類別が変更されて軍艦に含められたが、明治38年に軍艦から除外されて独立した艦種となった。
*2＝戦闘時を想定した排水量で、大正末期までは燃料1/4、弾薬3/4、ボイラー用の真水1/2、を搭載した状態とされていた。
*3＝満載状態から燃料、缶水等を差し引いたもの。

*4＝日本海軍では、大正元年に計画排水量1000トン以上を一等駆逐艦、1000トン未満を二等駆逐艦、600トン未満を三等駆逐艦とする分類を定めたが、三等駆逐艦は旧式艦が退役した昭和六年に廃止された。
*5＝水や油などの流動体によって動力を伝達する継ぎ手。「フルード・カップリング」ともいわれる。

橋の位置を下げるなど、艦型を大幅に変更して耐波性を向上させた「峰風」型の建造に着手し、大正七年度計画の三隻と合わせて計一五隻が建造された。このうち最後の三隻は兵装の配置が若干変更されたため「野風」型として区別されることもある。

さらに「野風」型の船体等に小改良を加えた「峰風」型系列の決定版ともいえる「神風」型（二代・以下同）が、大正七年度計画で五隻、大正九年度計画で二二隻建造されることが決まった。

この大正九年度計画は、いわゆる「八八艦隊完成計画」であり、計画の終了する大正十六年度末には、艦齢八年以下の新型艦だけで、戦艦八隻、巡洋戦艦八隻、巡洋艦二二隻、駆逐艦約七五隻、潜水艦約八〇隻の大艦隊が完成するはずであった。

しかし、大正十一年（一九二二）に「海軍軍備制限に関する条約」、いわゆる「ワシントン条約」が調印され「八八艦隊」は幻となった。これとともに「神風」型の建造計画も大幅に変更され、大正十二年度の改訂計画による四隻を含めて計九隻の建造にとどまった。

この時期の一等駆逐艦は、兵装の強化や機関の近代化を進めるとともに「峰風」型で一応満足しうる凌波性を実現することができたといえる。

一方、二等駆逐艦は、大正四年度計画で二等駆逐艦として初めてタービン機関を採用した「桃」型四隻が建造された。次いで大正六年度計画では、第一次大戦で新鋭の「桃」型が地中海に派遣された穴を埋めるため、ほぼ同型の「楢」型六隻が建造された。

そして、これら「楢」型系列とは別に、一等駆逐艦の「峰風」型と同じく艦橋位置を下げるなど艦型を大きく変更して凌波性を向上させた二等駆逐艦「樅」型が、大正六年度計画で一八隻、大正七年度計画で三隻、あわせて二一隻が建造された。「樅」型の機関には、二等駆逐艦として初めての重油専焼缶とオール・ギアード・タービンが採用され、速力は「楢」型よりも五ノット近く向上して三六ノットに達している。

そして、この「樅」型の船体等に小改良を加えた「若竹」型が、大正七年度計画で一三隻、大正九年度計画で一〇隻建造されることが決定された。二等駆逐艦では「若竹」型を含む「樅」型系列が、一等駆逐艦の「峰風」型系列に相当する決定版であったといえよう。

だが、ここで「ワシントン条約」が締結されて建造計画が大幅に変更されたため、「若竹」型の建造数は大正七年度計画の八隻に終わった。

この時期の二等駆逐艦は、駆逐艦兵力の整備において重要な要素の一つである「数」を確保しつつ着実に性能を向上させていったといえる。

特型駆逐艦の登場

日本海軍は「ワシントン条約」によって主力艦の保有比率を米英の六割[*6]に抑えられた。このため、これ以降は主力艦以外の補助艦艇の建造に力が入れられることになり、なかでも駆逐艦は、劣勢に立つ主力艦同士の決戦に先立って夜戦等で敵主力艦を漸減する「漸減邀撃作戦」の主要兵力として、その充実に力が注がれるようになった。

まず「ワシントン条約」後の大正十二年度計画では、前述の「神風」型に加えて「峰風」系列の最終型である「睦月」型一二隻が建造された。「睦月」型には、日本駆逐艦初の六一センチ魚雷発射管が搭載され、雷撃威力が一段と強化された。これだけの大口径魚雷を駆逐艦に搭載したのは世界的に見てもあまり例がない。[*7]

これは、水中防御力を強化した米主力艦に対する威力の増大と、将来の戦闘で遠距離から雷撃を行う場合に雷速の増大やそれによる命中精度の向上を目指すには、五三センチ魚雷では不十分と考えられたことなどによる。

また、従来は「磯風」型と「桃」型、「峰風」型と「樅」型といった具合に、一等駆逐艦とその縮小版の二等駆逐艦が同時に計画されていたが、これ以降は二等駆逐艦が建造されなくなった。

その理由として、駆逐艦が漸減邀撃作戦に欠かせない兵力となり、たとえ悪天候でも米艦隊との戦闘海面まで確実に駆けつけられる能力が求められるようになったこと。第一次大戦後に南洋諸島がドイツ領から日本の委任統治領となり、米艦隊の迎撃帯が小笠原近海から東へ東へと推進されるようになったこと。その結果、すべての艦隊用駆逐艦に、従来の巡洋艦に匹敵するほどの高い凌波性や航続力が求められるようになったこと、などが挙げられる。

その点、小型の二等駆逐艦は一等駆逐艦に比べると凌波性が低く、悪天候だと波浪に翻弄されて高速を発揮できなくなるため、漸減作戦において常にあてにできる戦力にはならないと考えられたのである。

本来は消耗品であるはずの駆逐艦が、日本海軍では高性能だが高価で量産のきかない大型駆逐艦ばかりになった背景には、こうした戦略上の必要性があった。

そして、大正十二年度計画では、革新的な性能で世界を驚かせた基準排水量一六八〇トンの「吹雪」型、別名「特型」駆逐艦の建造がスタートしている。「特型」の魚雷発射管は「睦月」型の六射線から九射線に、主砲は「睦月」型の四五口径一二センチ砲四門から五〇口径一二・七センチ連装砲六門に、それぞれ強化された。

航続力は、新造時の「吹雪」が一四ノットで約四五〇〇浬と、主力軽巡である五五〇〇トン型の一四ノットで五〇〇〇浬の約九割にまで達し、缶の効率を向上させる空気予熱器を採用するなどの改良を加えた「特型」駆逐艦の最終型《「暁」型（二代）と呼ばれる》では一四ノットで五〇〇〇浬となり、ついに五五〇〇トン型と同等の性能を実現した。さらに波浪のある海上での行動能力は五五〇〇トン型より優れていると評価されている。

ついに日本海軍は、強力な兵装と巡洋艦に匹敵するほどの航洋性を兼ね備えた大型駆逐艦を実現したのである。

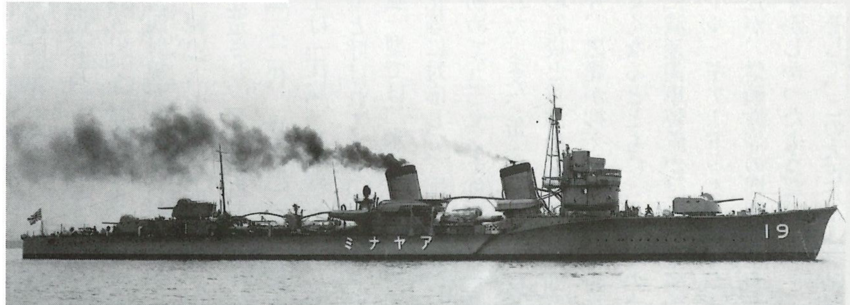
その原動力となったのが、藤本喜久雄造船少佐（大正十二年末に造船中佐に昇進）であった。藤本造船少佐は、大正十二年に艦政本部第4部（以下、艦本4部と略す）の基本計画主任を退いた平賀譲造船少将に代わり、実質的に艦艇の基本計画を主宰するようにな

特型駆逐艦の計画重量と完成重量の比較

	計画	実際	差分
船体	720.70	717.98	−2.72
機関部	685.00	805.59	+120.59
兵装	222.12	287.80	+65.68
調理用石炭	2.00	3.00	+1.00
その他	50.90	56.05	+5.15
合計	1680.72	1870.42	+189.70

数値はすべてトン

数値は10番艦「浦波」のもの。合計の数値が基準排水量を示す。その他には人員、糧食、真水、需品が含まれ、公試ではさらに243トンの燃料重油、25トンの予備缶水を搭載したところ、実測の公試排水量は2421.10トンとなり、原因不明の重量がなお2.68トン生じていた。（写真は同型の「綾波」）

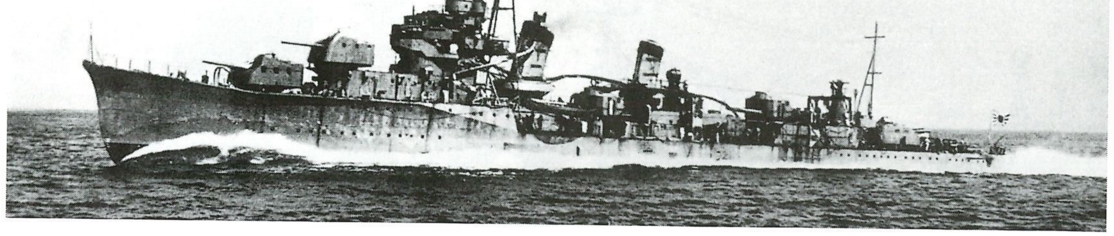




駆逐艦「綾波」。「吹雪」型は駆逐艦で初めて主砲に砲塔形式（実は砲室で、砲塔の特徴である弾火薬庫からの給弾、給薬装置はない）を採用し、ミニ巡洋艦ともいうべき外観となった。しかし、そのために兵装重量は過大となり、そのしわ寄せは船体構造に及んでいた。

＊6＝基準排水量が1万トン、主砲口径が8インチ（203mm）を超えるもの。

＊7＝米英独伊海軍は21インチ（533mm）魚雷、仏海軍は55cm魚雷を主用。



新造時の「初春」型駆逐艦「子日(ねのひ)」(1933)。背負い式に配置された前部砲塔、巨大な艦橋構造とその上の大型の測距筒など、外観からだけでもアンバランスな状態であることが見てとれる。しかし、当時の人々には船体構造の進歩により達成された結果だと単純に信じられていた。

った。そして、昭和二年十二月には基本計画主任に任じられて造船大佐に昇進し、昭和八年十一月まで同職を務めることになる。

ここで一つのデータを挙げておこう。別表(八四ページ参照)は、海軍の佐世保工廠で建造された「特型」駆逐艦「浦風」の計画重量と実際の重量を比較したもので、兵装関係や機関関係で計画重量を大幅に超過しており、計画より軽かったのは船体関係だけだったことがわかる。要するに砲塔や機関等を実際に造ってみると、事前の計算通りの重量に収まらなかったのである。

海軍の造船官だった堀元美技術中佐の戦後の著書[*8]には「何のことはない、結局は、強力な性能の割には小さくて軽快な新型艦が、船殻構造だけの犠牲において実現していたことが、これではっきりするのである」とある。

これが画期的な高性能をうたわれた特型の実態であった。

幸いなことに(?)艦底に近い機関部の重量が大幅に増えたため、復元性[*9]能に大きな問題は見られなかったものの、計画重量を一割以上もオーバーしたことは、船体の強度に重大な悪影響を及ぼした。そして、後にこの点に起因する大事故が発生することになる。

ロンドン条約への対応

昭和五年に「一九三〇年ロンドン海軍条約」、いわゆる「ロンドン条約」が締結され、これまで条約の制限外だった補助艦艇(基準排水量六〇〇トン以上)にも制限が加えられることになった。具体的には、駆逐艦の保有量が米英の一五万トンに対して約七割の一〇万五五〇〇トンに抑えられたのである。また、駆逐艦の個艦の基準排水量は一八五〇トンが上限とされ、基準排水量一五〇〇トン以上の大型駆逐艦は割当てトン数の一六パーセント以下とされた(起工済みのものは認める)。

こうした厳しい制約の中で、昭和六年度計画(第一次補充計画、略称㈠計画)では、「特型」駆逐艦の主砲を一門減らしただけの重兵装を備えながら基準排水量を一四〇〇トンに抑えた「初春」型一二隻の建造が計画された。魚雷発射管には予備魚雷を迅速に装填できる次発装填装置が装備されるなど、排水量全体に占める兵装重量の割合は「特型」を上回った。また、小さな船体に重兵装を詰め込むため、三〜四番発射管や一〜二番砲塔を背負い式にするなど重心位置の高い設計となり、しかも各種装備は計画重量を超過した。

こうした無理がたたって、「初春」型は当初から復元性能の不足した不安定な艦になってしまった。実際、一番艦の「初春」は公試で一〇度ほど舵を切っただけで三八度も傾斜するほどで、とりあえず復元性の応急改善策として舷側にバルジ(張り出し)を装着して引き渡された。

また、㈠計画では、条約制限外となる基準排水量六〇〇トン未満の水雷艇「千鳥」型四隻の建造も計画された。基本計画段階では、かつての二等駆逐艦を近代化した案も検討されたが、前述したような戦略上の要求もあって中途半端と判断され、近海作戦では補助駆逐艦としても使用できる強力な兵装を備えた警備艦兼用として建造されることになった。

しかも、基準排水量八二〇トンの二等駆逐艦「若竹」型を凌駕する重兵装を持ちながら、予算の制約等から基準排水量は五三五トンまで切り詰められ、排水量全体にしめる兵装重量の割合は「初春」型を上回った。そのうえ、例によって完成時には公試状態で設計重量を約一五パーセントも超過し、さらに

＊8＝『駆逐艦 その技術的回顧』
＊9＝艦が傾いた時に元に戻ろうとする能力。これが不足すると艦が傾きやすく、転覆しやすくなる。

復元性の改善策としてバルジを装着したため当初予定の公試重量を二割もオーバーした。

これについて、前述の堀元美氏は戦後の著書で「それにしても、初春も千鳥も、新造ののっけから舷側両面に不体裁なバルジを貼り付けて海に浮かんだとは、何事であろうか。(中略)そればかりか、この醜態をさらしながら、日本の造艦技術は世界最優秀だと称して国民をあざむいていた海軍当局は、今にして思えば、許すべからざる存在だったというほかはない」と厳しい口調で断じている。

友鶴事件と復元能力不足の判明

昭和九年三月十二日、竣工間もない「千鳥」型水雷艇の三番艦「友鶴」が佐世保沖での荒天下の訓練中に転覆した。いわゆる「友鶴事件」の発生である。

海軍は、直ちに査問会を設置して調査を開始し、四月二日には主な事故原因として復元性能の不足を指摘する報告書が提出された。

実は、この事件に先立つ昭和七年末に二等駆逐艦「若竹」型の「早蕨」が悪天候下で転覆するという事故が起きていた。にもかかわらず、事故原因は甲板上に補給物資等を積み込んでいたことや斜め後方からの大波に連続して見舞われた不運などに帰され、艦艇の復元性能が限界に近付いていたことは見過ごされてしまった。その結果、「初春」型や「千鳥」型のような重兵装で復元性能の不足した艦艇が次々と就役していったのである。

査問会の報告書が提出された三日後、海軍は「臨時艦艇性能調査委員会」を設置して各艦艇の復元性能の徹底的な調査を開始した。この委員会には、すでに予備役に入り東大教授として学生の指導にあたっていた平賀造船中将が海軍の嘱託として参加し、対策を主導した。

この調査によって、「千鳥」型や「初春」型はもちろん、「最上」型巡洋艦や空母「龍驤」、潜水母艦「大鯨」など各種の艦艇で復元性能の不足が判明し、すぐに大規模な改善工事が実施されることになった。

例えば、「千鳥」型では、主砲が砲塔式の五〇口径一二・七センチ砲から簡易な防盾式の四五口径一二センチに換装され、五三センチ連装魚雷発射管も二基から一基に半減されて、艦橋も縮小された上に、固定バラスト(錘)が搭載されるなど大幅な改造が加えられた。

「初春」型では、一〜四番艦は魚雷発射管一基が次発装填装置とともに撤去され、背負い式の砲塔配置も改められて艦橋や甲板室が縮小され、固定バラストが搭載されるなどの改造が施された。また、五〜六番艦は事故発生時すでに建造中で、各種の改善措置を加えた上で竣工したため、「有明」型として区別されることが多い。これらの対策によって「初春」型の速度や航続力は船体形状の変化などで大幅に低下した。

さらに七番艦以降の六隻は、復元性能の向上とともに六一センチ四連装魚雷発射管を搭載、航続力延伸のために高温高圧缶を採用するなど各部の設計が大幅に改められ、「白露」型となった。

この「友鶴」事件に関して、海軍の造船官であった福井静夫技術少佐は、戦後の雑誌記事[*10]で「藤本喜久雄造船少佐は当時、海軍部内の信望あつく、神様のような存在であったが、ここにいたっていっきょに信望を失った。しかし、このようなことは一個人の責任と

友鶴事件による「初春」型の改造

友鶴事件の発生により、基本的に同じ設計コンセプトで造られた駆逐艦「初春」型も同様にトップヘビーで転覆する可能性が指摘された。この欠陥を解消するために行われた改造工事は以下のとおり非常に多岐にわたった。

①船体側部の水防区画を撤去。
②前部シェルター甲板上の12.7cm単装砲を後部上甲板上に移装し、同シェルター甲板を撤去。
③後部シェルター甲板上の3番魚雷発射管と予備魚雷格納装置(次発装填装置付き)を撤去。
④羅針艦橋を艦橋甲板に低下させ、形状を一部改装し、かつ艦橋甲板には防盾甲鈑を装備せず、また、方位盤の覆塔を軽合金製のものに換装。
⑤前部煙突を約1m、後部煙突を約1.5mずつ頂部を切り欠き、缶室通風筒(吸気口)を頂部で約1.5m低下。
⑥1番魚雷発射管の位置を約1.5m低下。
⑦機銃台を1.5m低下させ、90cm探照灯台を約2m低下。
⑧前部2番弾薬庫を撤去し、重油タンクに改造。
⑨前後部のマストを約1.5m短縮。
⑩錨鎖庫を一段降下。
⑪バラスト約70トンを艦底に搭載。
⑫艦底外板を補強(重量約15トン増加)。
⑬重油タンクの一部に海水補填装置を設ける(容量約130トン)。

さらに、第4艦隊事件の発生により、船体強度を上げる工事が実施され、その結果、新造時に公試状態で1802トンだった排水量は、最終的に2098トンと300トン近く増加している。



改装された「初春」。右の写真と比較されたい。

＊10＝『丸』1977年3〜5月号 潮書房



昭和10年（1935）9月26日の第4艦隊事件で艦首を失った「夕霧」。船体の破壊はちょうど艦橋構造の直前で起こっており、もう1隻の遭難艦「初雪」も同じ状態で艦首を失っている。「吹雪」型は航洋性を向上させるために艦首フレアーを大きく広げたため、艦首部に受ける波の圧力が高くなっていた。

はいいきれぬ。

おなじ造船設計の部内には、多くの優秀の士がおり、みなが協力してフネをつくる。その下には老練の技師、技手級が多数いる。指導者や主任格一人で軍艦の設計ができるものではない」と述べている。

しかし、事件直後の昭和九年四月、基本計画主任には福田啓二造船大佐が任命され、昭和八年十一月から艦本4部出仕となっていた藤本造船少将は、兼海軍技術研究所出仕となって自ら設計した艦艇の性能調査に尽力したが、翌年一月に脳溢血で急逝した。

第4艦隊事件と強度不足の判明

だが、悲劇はこれで終わらなかった。

昭和十年九月、荒天下で演習中の第4艦隊で「特型」駆逐艦「初雪」「夕霧」の船体前部が切断するなど艦艇の損傷が続出したのである。この事故は「第4艦隊事件」と呼ばれ、海軍は再び「臨時艦艇性能調査委員会」を設置して調査に乗り出した。その結果、「特型」駆逐艦をはじめとする多くの艦艇で船体強度の不足が判明し、今度も平賀教授の強力な指導のもとで対策が練られた。

ところで、前述の「友鶴」事件や第4艦隊事件の根本的な原因は、用兵側である軍令部の無理な兵装強化の要求と、それを拒否できずに易々と受け入れてしまった艦政本部あるいは藤本造船少将らのいわゆる「藤本派」、という図式で捉えられることが少なくないように筆者には感じられる。

ところが、事故当時に艦本4部出仕だった牧野茂造船少佐（終戦時には同部設計主任で技術大佐）[*11]は、戦後の雑誌記事で、対策会議の席上でのやりとりをこう記している。

「一応、兵装減少を前提とした各種の対策案の説明を終わったところで、平賀さんから爆弾的発言があった。それは、兵装減少には絶対反対である。兵装をそのままとしても対策は可能であるというものである。問題は速力であるが、若干の低下を忍んでも特型の最大の特徴である強力な兵装の変更は不可である。特型の兵装低下は、第4艦隊事件の海軍全般の士気に及ぼす悪影響にさらに拍車をかけるもので、造船技術に計り知れない不信を招くものであるから絶対に反対であるとの考え方であった」

また、艦艇の基本計画について総合的な判断で調整的な役割を果たすことになっていた艦本総務部第2課の部員が「相当執拗に食い下がって、不本意ながらもあらかじめ覚悟を決めていた兵装減少案を支持するかのような反論を繰り返した。このため平賀さんが不快を顔面に表わし、『君たち兵科将校は砲塔のような集中荷重をたくさん積ませて平気でいるじゃないか、松本君（松本喜太郎造船少佐、後技術大佐）よく説明してやりたまえ』と吐き捨てて席を立つという一幕もあった」という。つまり、ここでは兵装減少を主張する兵科将校と兵装維持を強硬に主張する設計側という、前述とは逆の構図になっているのだ。

これを見る限り、軍令部側の無理な要求とそれを拒否できなかった艦政本部

＊11＝『世界の艦船』1981年10月号 海人社

部という単純な図式には収まりきらない事情があるように感じられるのだが、いかがであろうか。

さて、話を艦艇の強度不足に戻すと、各艦艇では徹底的な補強工事が行われ、特型では下部外板が二重張りとされ、復元性能の向上のため固定バラストが搭載されるなどの工事が行われた。

また、昭和九年度計画（第二次補充計画、略称㊁計画）で予定されていた「白露」型一四隻の建造は四隻で打ち切られ、残りの一〇隻は軍縮条約の失効する昭和十二年以降の竣工を見越して、無理のない設計を念頭に基準排水量を二〇〇〇トンとし、六一センチ四連装魚雷発射管二基を搭載する「朝潮」型が建造された。

次いで、昭和十二年度海軍補充計画（第三次補充計画、略称㊂計画）では、「朝潮」型と同じ基準排水量でさらに高温高圧の缶を搭載するなどして航続力を伸ばした「陽炎」型一五隻（計画上は「大和」型戦艦の規模を秘匿するためのダミー三隻も含めて一八隻）が建造された。

続く、昭和十四年度海軍軍備充実計画（第四次充実計画、略称㊃計画）では、「陽炎」型が四隻建造されるとともに、主砲の最大仰角を従来の五五度から七五度に引き上げて対空射撃を可能とするなど「陽炎」型に小改良を加えた「夕雲」型一一隻が計画され、一隻が完成したところで対米戦の開戦を迎えた。

また、開戦直前の昭和十六年度戦時追加建造艦船（略称(急)計画）中にも「夕雲」型一六隻の建造が計画され、このうち八隻が大戦中に竣工し、㊃計画中の一一隻を含めて計一九隻が建造された。

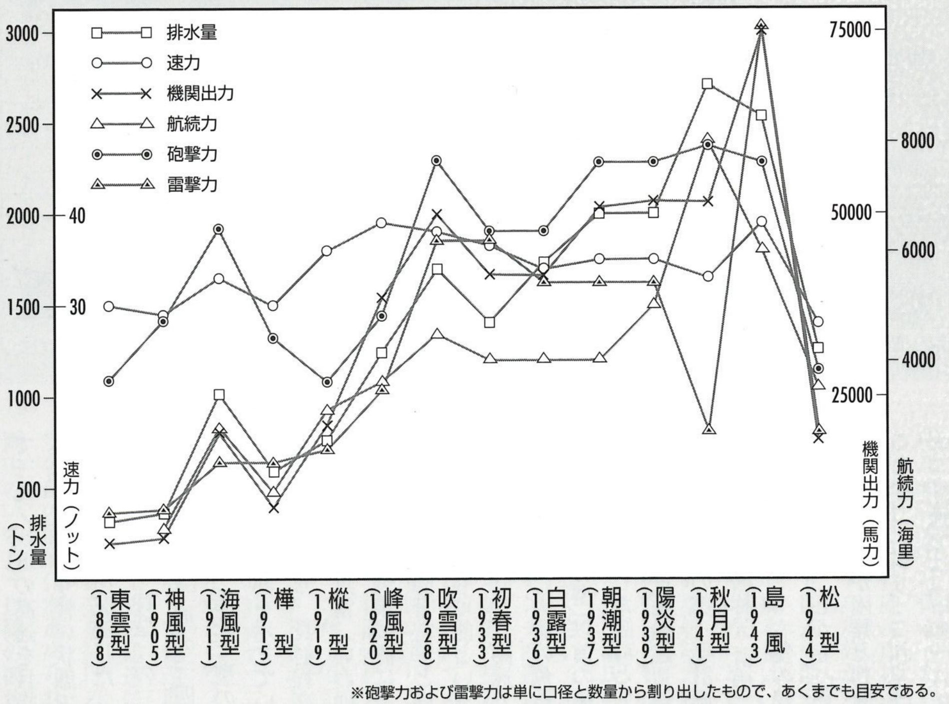
この時期の駆逐艦（近海作戦で二等駆逐艦の代用となる水雷艇を含む）は、軍縮条約に対応するために無理に無理を重ねて、ついに重大事故を引き起こしたといえる。そして、「甲型」と呼ばれた「夕雲」型を含む「陽炎」型系列で、過去の大事故で露呈した欠点をようやく克服するところまで来たといえよう。それから程なくして対米戦開戦を迎えたのであった。

新しい駆逐艦の模索

また、昭和十四年度の㊃計画では、前述の「陽炎」型や「夕雲」型駆逐艦に加えて、新型の駆逐艦「島風」型一隻と「秋月」型六隻が建造された。

「丙型」とも呼ばれる「島風」型は、基準排水量は二五六七トンに達し、六一センチ五連装魚雷発射管三基一五射線（次発装填装置無し）という驚異的な重雷装を備えていた。また、「夕雲」型よりもさらに高温高圧の缶を搭載し

駆逐艦の大きさと性能の変化



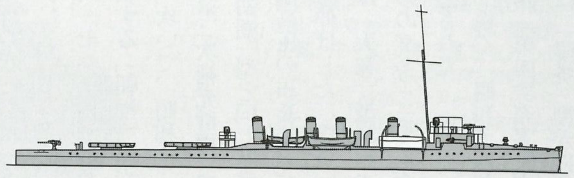
※砲撃力および雷撃力は単に口径と数量から割り出したもので、あくまでも目安である。

日本の駆逐艦の性能は、全般的に右肩上がりで上昇してきたが、最後の「松」型に至っては、全般的な性能の低下を忍んでも生産性を最優先させることとなった。表では示すことができなかったが、各型の平均的な工数の比較も興味深い。

開戦期までの主な駆逐艦

春雨型（1903）

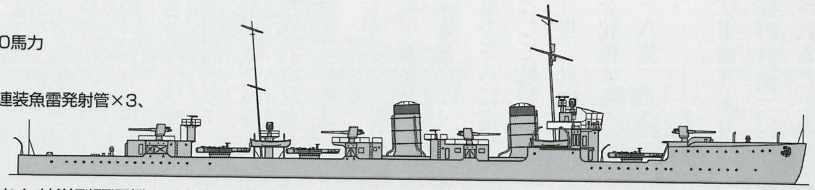
常備排水量：375トン
主　　機：蒸気レシプロ機関6000馬力
速　　力：29ノット
航 続 力：1200海里／10ノット
兵　　装：8cm単装砲×2、57mm単装砲×4、
45cm単装魚雷発射管×2
乗　　員：62名



英ヤーロー、ソーニクロフト両社の駆逐艦を手本にした国産艦だが、高圧缶の製造が難しく、性能は個艦ごとに異なっていた。

峰風型（1920）

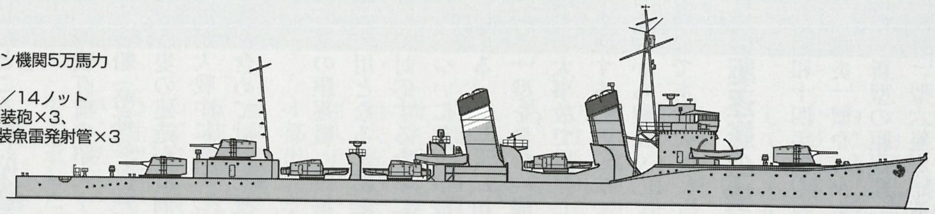
基準排水量：1215トン
主　　機：蒸気タービン機関3万8500馬力
速　　力：39ノット
航 続 力：3600海里／14ノット
兵　　装：12cm単装砲×4、53cm連装魚雷発射管×3、
機雷×16
乗　　員：148名



八八艦隊計画の実現に向けて整備された航洋型駆逐艦で、艦橋の直前のウェルデッキに魚雷発射管を配置しているのが特徴。

吹雪型（1928）

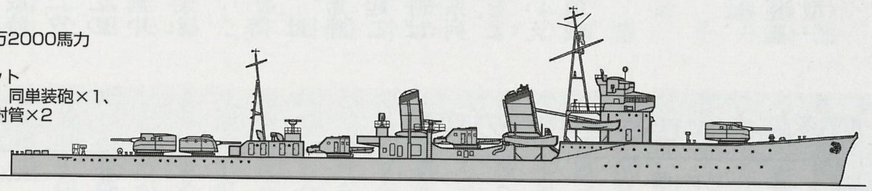
基準排水量：1680トン
主　　機：蒸気タービン機関5万馬力
速　　力：38ノット
航 続 力：4500海里／14ノット
兵　　装：12.7cm連装砲×3、
61cm3連装魚雷発射管×3
乗　　員：219名



艦橋前部に配置された発射管を後方に移し、主砲も砲室化して航洋性を大幅に向上させている。

白露型（1936）

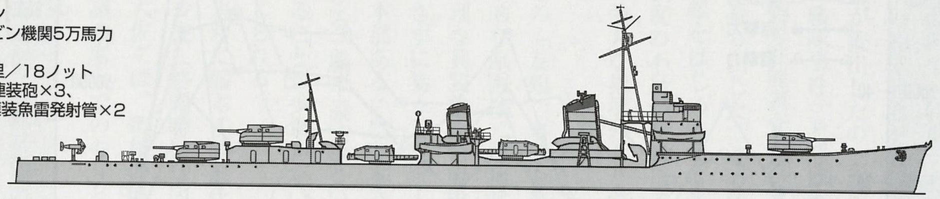
基準排水量：1685トン
主　　機：蒸気タービン機関4万2000馬力
速　　力：34ノット
航 続 力：4000海里／18ノット
兵　　装：12.7cm連装砲×2、同単装砲×1、
61cm4連装魚雷発射管×2
乗　　員：226名



「初春」型の改型で、発射管が2基になった代わりに新たに4連装発射管が開発されている。また、酸素魚雷は本型から搭載された。

朝潮型（1937）

基準排水量：2000トン
主　　機：蒸気タービン機関5万馬力
速　　力：35ノット
航 続 力：4000海里／18ノット
兵　　装：12.7cm連装砲×3、
61cm4連装魚雷発射管×2
乗　　員：229名



軍縮条約の失効を見越して最初から2000トンの大型駆逐艦として計画され、復元性や船体の強度向上などの対策が取り入れられた。

て三九ノットの高速を目指し、公試では通常より軽い状態で四〇・六九八ノットを記録した。

「丙型」は、「特型」の三八ノットから「白露」型の三四ノット、「朝潮」型や「陽炎」型の三五ノットと低下傾向を示していた速力を再び向上させ、長射程高雷速無雷跡の九三式魚雷（いわゆる酸素魚雷）と次発装填装置により、昼間時の遠距離隠密雷撃と肉薄雷撃の二段階発射も可能という従来の水雷兵装を見直し、高速で敵艦に肉薄して一挙に大量の魚雷を発射するという「特型」以前の駆逐艦本来の姿に回帰した設計といえよう。

昭和十七年度艦船建造補充航空兵力増勢計画の第一期計画（第五次充実計画、略称㊄計画）では主力駆逐艦として一六隻の建造が計画されていた。しかし、超高温高圧機関の量産が困難と判断されたことなどにより、これを改訂した改㊄計画では「甲型」八隻の建造に差し替えられた。

もう一つの「秋月」型は「乙型（おつ）」とも呼ばれ、空母機動部隊の随伴用として強力な対空火力と長大な

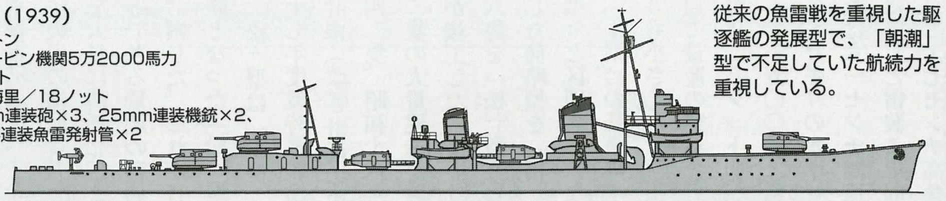
イラスト＝胃袋豊彦

大平洋戦争以降 4種に分かれた駆逐艦

陽炎型〈甲型〉（1939）

基準排水量：2000トン
主　　機：蒸気タービン機関5万2000馬力
速　　力：35ノット
航 続 力：5000海里／18ノット
兵　　装：12.7cm連装砲×3、25mm連装機銃×2、
61cm4連装魚雷発射管×2
乗　　員：239名

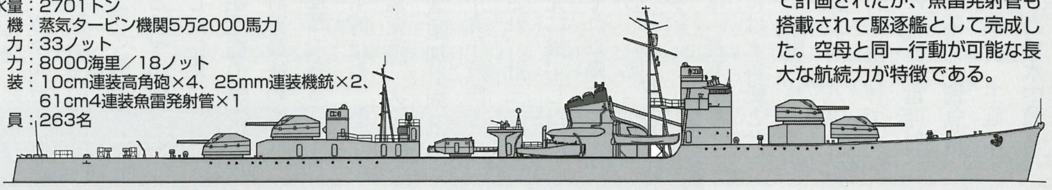
従来の魚雷戦を重視した駆逐艦の発展型で、「朝潮」型で不足していた航続力を重視している。



秋月型〈乙型〉（1941）

基準排水量：2701トン
主　　機：蒸気タービン機関5万2000馬力
速　　力：33ノット
航 続 力：8000海里／18ノット
兵　　装：10cm連装高角砲×4、25mm連装機銃×2、
61cm4連装魚雷発射管×1
乗　　員：263名

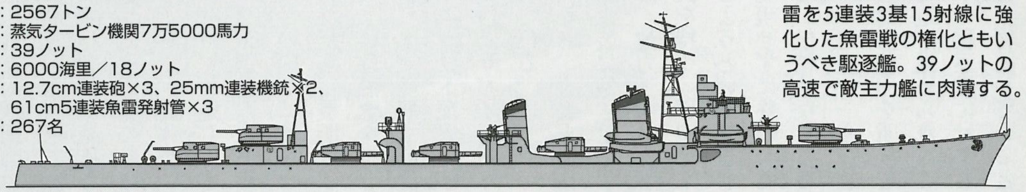
空母を直衛する対空護衛艦として計画されたが、魚雷発射管も搭載されて駆逐艦として完成した。空母と同一行動が可能な長大な航続力が特徴である。



島　風〈丙型〉（1943）

基準排水量：2567トン
主　　機：蒸気タービン機関7万5000馬力
速　　力：39ノット
航 続 力：6000海里／18ノット
兵　　装：12.7cm連装砲×3、25mm連装機銃×2、
61cm5連装魚雷発射管×3
乗　　員：267名

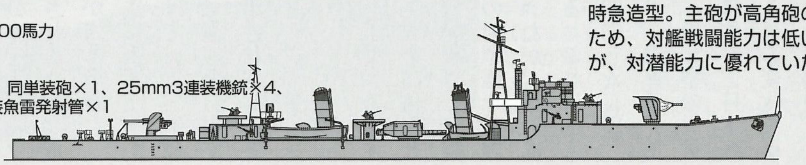
4連装2基で8射線だった魚雷を5連装3基15射線に強化した魚雷戦の権化ともいうべき駆逐艦。39ノットの高速で敵主力艦に肉薄する。



松　型〈丁型〉（1944）

基準排水量：1262トン
主　　機：蒸気タービン機関1万9000馬力
速　　力：27.8ノット
航 続 力：3500海里／18ノット
兵　　装：12.7cm連装高角砲×1、同単装砲×1、25mm3連装機銃×4、
同単装×8、61cm4連装魚雷発射管×1
乗　　員：211名

性能を大幅に切りつめた戦時急造型。主砲が高角砲のため、対艦戦闘能力は低いが、対潜能力に優れていた。



日本海軍の駆逐艦・艦型一覧

艦種の記号：F＝一等駆逐艦、S＝二等駆逐艦、T＝三等駆逐艦、TB＝水雷艇

艦種	艦型名	就役年	同型艦	特　徴
T	雷	1899～1900	6	英ヤーロー社製
T	東　雲	1898～1900	6	英ソーニクロフト社製
T	暁	1901～02	2	英ヤーロー社製
T	白　雲	1902	2	英ソーニクロフト社製
T	春　雨	1903～05	7	初の国産駆逐艦
T	神　風	1905～09	32	国産量産型駆逐艦
T	山　彦	1900～03	2	ロシアからの鹵獲艦
T	皐　月	1903	1	ロシアからの鹵獲艦
T	敷　波	1894	2	ロシアからの鹵獲艦
F	海　風	1911	2	初の航洋型駆逐艦
S	櫻	1912	2	沿岸型の中型駆逐艦
S	樺	1915	10	中型駆逐艦の量産型
F	浦　風	1915	1	巡航ディーゼル搭載計画艦
F	磯　風	1917	4	タービン搭載試験艦
S	桃	1916～17	4	磯風型に対応する中型艦
F	江　風	1918～19	2	53cm魚雷搭載艦
S	楢	1918	6	欧州派遣艦の代艦
S	樅	1919～23	21	峯風型縮小の中型艦
S	若　竹	1922～24	8	改樅型
F	峰　風	1920～1922	15	八八艦隊計画対応航洋性重視
F	神　風	1922～25	9	改峰風型
F	睦　月	1925～27	12	61cm魚雷搭載艦
F	吹　雪	1928～1933	24	特型駆逐艦
F	初　春	1933～35	6	ロンドン条約対応
TB	千　鳥	1933～34	4	ロンドン条約対応中型駆逐艦
TB	鴻	1936～37	8	改千鳥型
F	白　露	1936～37	10	改初春型酸素魚雷搭載
F	朝　潮	1937～39	10	脱条約型大型駆逐艦
F	陽　炎	1939～41	19	量産型大型駆逐艦
F	夕　雲	1941～44	19	改陽炎型
F	秋　月	1941～45	12	空母直衛防空艦
F	島　風	1943	1	高速魚雷戦型
F	松	1944～45	18	戦時急造型
F	橘	1945	14	改松型

航続力を備えた新艦種の「直衛艦」として計画された。「夕雲」型では主砲仰角が引き上げられたが、本質的には水上射撃用のもので実質的な対空火力は低かった。そこで「秋月」型では長砲身高初速の六五口径一〇センチ高角砲が八門搭載され、新型の九四式高射装置が搭載された。基準排水量は二七〇〇トンを超え、一八ノットで八〇〇〇浬という長大な航続力が与えられた。魚雷発射管は当初は搭載しない計画だったが、堀氏の言葉を借りれば「貧乏くさいくせが現れてきて」六一センチ四連装魚雷発射管と次発装填装置が搭載され、駆逐艦として建造されて水雷長以下水雷関係の乗員が乗りこんだ。

「秋月」型は、㊃計画の六隻に加えて㊝計画で一〇隻、㊄計画で一六隻、これをミッドウェー海戦後に改訂した改㊄計画で二三隻の建造が計画されたが、このうち㊝計画中の六隻を残して建造取り止めとなり、計一二隻の建造にとどまった。なお、建造を続ける中で逐次各部の簡易化が進められ、㊝計画中の「冬月（ふゆづき）」以降の四隻を「冬

月」型、「花月」以降を「満月」型として区別することもある。

開戦後、日本海軍は、ガダルカナル島などソロモン方面の輸送船団の護衛や物資の輸送、上陸作戦の援護等で、決戦用の補助兵力であるはずの駆逐艦を大量に消耗し、こうした任務にも対応できる量産の容易な駆逐艦の建造を計画した。これが日本海軍最後の駆逐艦となった「松」型駆逐艦である。

「松」型は「丁型」とも呼ばれ、昭和十七年度戦時艦船建造補充第二次追加計画（改⑤計画の第二次追加計画）で四二隻、昭和十八年、十九年計画で三二隻の大量建造が計画され、計三二隻が竣工した。このうち先に竣工した一八隻を「松」型とし、それ以降に竣工した簡略型を「橘」型あるいは「改丁型」と区別することが多い。

「丁型」の基準排水量は「初春」型よりも小さくなり、機関には水雷艇と共通で量産の容易なものが採用され、速力は二八ノット弱、航続力は一八ノットで三五〇〇浬と艦隊行動に随伴できるギリギリの水準で忍んだ。魚雷発射管は六一センチ四連装一基で予備魚雷は無しと雷装こそ弱かったが、主砲は一二・七センチ高角砲三門で水中聴音機（パッシヴ・ソナー）か水中探信儀（アクティブ・ソナー）を搭載するなど、対空対潜能力は高かった。

構造は船体各部が直線化されるなど簡略化され、高級な鋼材の使用も限定されて後期艦の船殻は軟鋼のみとされた。また、船体をいくつかのブロックに分けて建造し、建造効率を上げるブロック建造方式が導入されるなど、量産性の向上に大きな力が入れられた。

ただし、機関は、建造に手間がかかるという懸念を押しのけて、缶、主機、缶、主機の順で配置して被害を局限する「シフト配置」が採用され、高い生残性（サバイバビリティー）が追求されている。

なお、大戦末期には「丁型」の低速弱雷装に飽き足らず、主砲を高角砲とし、速力三三ノットで八射線以上の雷装を持つ「甲型」系列の新型艦を計画しようという動きもあったが、結局は実現せずに終わっている。これに加えて、伝統的な魚雷戦に回帰した「島風」型の建造が一隻に終わり、量産性や対空対潜能力を重視した「松」型の大量建造が進められたこと自体が、日本海軍の駆逐艦に対するニーズの変化を雄弁に物語っているといえるだろう。

実際、大戦中に何度か生起した魚雷戦は、輸送や船団護衛、上陸援護の途中に敵艦艇と遭遇したときのものがほとんどであり、戦前に想定されていたような敵主力艦隊との決戦での魚雷戦の機会はなかったし、大戦の中頃にはレーダーの実用化によって夜戦での雷撃そのものが現実性を失っていった。

その意味では、「島風」型に代わって伝統的な魚雷戦を想定した「夕雲」型の建造を昭和十九年半ばまで続けてしまったことは大きな問題といえるのではないだろうか。

戦後の護衛艦に受け継がれたもの

ところで、第二次大戦後の昭和二十八年度には、戦後初の国産大型護衛艦として「はるかぜ」型が二隻建造されている。

この「はるかぜ」型は、「夕雲」型ではなく「白露」型をベースにアメリカ海軍の「アレン・M・サムナー」級を参考にして設計され、基準排水量一七〇〇トンで全長は一〇六メートルと「夕雲」型より一三メートルも短い。

日本造船学会がまとめた「昭和造船史」によると「船長が短かめに選ばれたのは、船殻重量、旋回性能、復元性能上の利点を重視し、公試速力よりも巡航航海性能が重視されたため」だという。さらに「旋回性能は回避および格闘性能上特に重要なので、舵面積を大とし、旋回公試も旧海軍の八／一〇全力に対して、一〇／一〇として行うこととなった」とある。

これを裏返せば、海軍では実用上の航海性能よりも公試時のカタログスペックを重視しており、旋回性能のテストも八〇パーセントの出力で行うなど、敵機の投下する爆弾や敵潜水艦の発射する魚雷等の回避性能が低く、実戦で求められる格闘性能が低かった、ということになるのではないか。

また、「はるかぜ」型では「水線上の外板はＨＴ（高張力鋼）を用いかつ増厚して、弾片による穿孔浸水の機会を減じ被害に対する抵抗力を増すことがはかられた」とある。これに対して、例えば「特型」の船体前後部喫水線付近の外板の厚みは四・五〜六ミリ程度であり、場所によっては厚さ二・九ミリといった薄板も使用された。

このため、旧海軍の駆逐艦はたとえ敵の爆弾が直撃しなくても、至近弾が船体のそばで炸裂しただけで、外板が凹んで高速発揮に支障が出る、あるいは弾片で穴だらけになって浸水する、といったことが少なくなかった。その点「はるかぜ」型では、前述のような改善が加えられた上、さらに「戦訓にかんがみ、戦闘被害に強靭であるように、排水装置を完備」し、ダメコン要員も増員したのである。

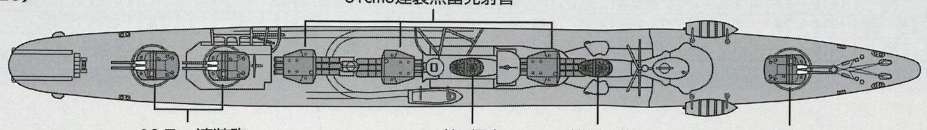
要するに日本海軍の駆逐艦は、「陽炎」型系列で一応克服された復元性能や船体強度の不足以外にも数々の欠点を抱えており、苛烈な実戦を経てそれが明らかになった。戦後の護衛艦は、そうした欠点を充分に踏まえた上で、米駆逐艦も参考にして設計されたのである。

その意味では、日本海軍の求めていた理想の駆逐艦が完成したのは、実は戦後だったといえるのかもしれない。

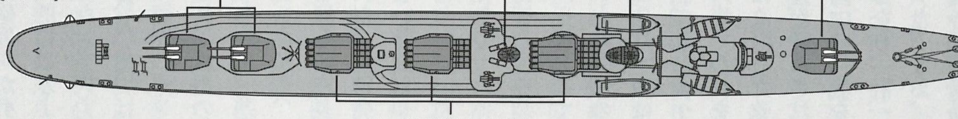
島風と吹雪型の兵装比較

イラスト＝胃袋豊彦

吹雪型（1928）



島　風（1943）



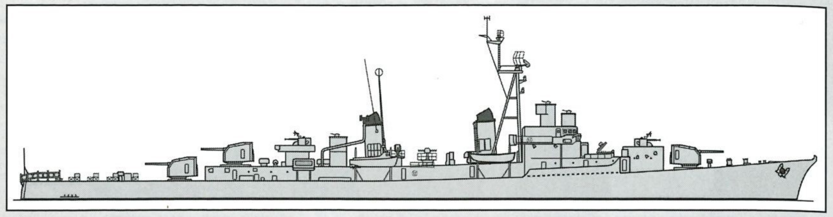
特型駆逐艦は「吹雪」型、「初春」型、「白露」型、「朝潮」型、「陽炎」型、「夕雲」型へと発達し、最終的に「島風」となった。この最初の「吹雪」と「島風」の兵装配置を比べると、艦の大きさこそ違いが見られ、魚雷発射管も3連装から5連装へと強化されているが、それ以外は艦内の機関も含めてほぼ同じ配置である。しかし、「初春」型から「夕雲」型までは4連装発射管（「初春」型は3連装）2基で魚雷の次発装填装置もあった関係で兵装配置は大きく異なる。

「島風」型で兵装配置が回帰した背景には、米艦隊の重巡洋艦戦力の優越と、新造される米戦艦の速力が最大22ノットから27ノット程度に引き上げられることが予想され、酸素魚雷による遠距離からの雷撃では命中がおぼつかなくなったことが挙げられる。「島風」の40ノット近い優速で重巡洋艦の輪形陣を突破し、15射線という強力な攻撃力で米戦艦に打撃を与えようという新たな戦術である。この戦術の変化が奇しくも酸素魚雷採用前に建造された「吹雪」型と一致したのである。

戦後に結実した日本式駆逐艦

イラスト＝胃袋豊彦

はるかぜ型（1956）
基準排水量：1700トン
主　　　機：蒸気タービン機関3万馬力
速　　　力：30ノット
兵　　　装：12.7cm単装砲×3、40mm4連装機銃×2、ヘッジホッグ投射機×2
乗　　　員：240名



戦後初めて建造された国産の大型護衛艦で、昭和31年に2隻が竣工した。船型は、日本海軍の駆逐艦のように艦首部が一段高い「船首楼型」ではなく、米海軍の戦中から戦後の駆逐艦に多用された上甲板に段差の無い「平甲板型」が採用されている。この船型は上甲板が連続しているために「船首楼型」のように船楼端の構造を強化する必要が無いなど、強度上有利な点が多い。



あやなみ型（1958）
基準排水量：1700トン
主　　　機：蒸気タービン機関3万5000馬力
速　　　力：32ノット
兵　　　装：76mm連装速射砲×3、533mm4連装魚雷発射管×1、短魚雷落射機×2、ヘッジホッグ投射機×2
乗　　　員：230名

昭和30年度計画で建造が始められた護衛艦で、昭和33〜35年に計7隻が竣工した。船型はそれまでの「平甲板型」ではなく、船首楼が後部まで延びた「長船首楼型」が採用されている。強度上の弱点の船楼端は、船楼甲板と上甲板が「オランダ坂」と呼ばれる斜めの甲板で結ばれており、応力が集中するのを避ける構造になっている。強度問題に悩まされた日本駆逐艦の弱点を克服した船型である。写真は4番艦「しきなみ」。

〈参考文献〉福井静夫『日本駆逐艦物語』光人社／社団法人日本造船学会編『昭和造船史・第1巻』原書房／牧野茂『牧野茂 艦船ノート』出版協同社／堀元美『駆逐艦 その技術的回顧』原書房

地上最大の動物兵器

戦象の世界史

Elephants at War

古代より近代まで、人類の戦いの場に投入され
今日なお伝説のベールの向こうから輝きを放つ、戦象……
その巨体の裏に隠された真の実力は、いかなるものだったのか

文＝松代守弘



版画に描かれた戦象の戦いぶり。特定の会戦を描いたものかどうかは不明だが、古代の戦場における敵騎兵との戦いの一場面を想像したもの。角の付いた鎧で弱点の鼻と顔を覆い、象使いを首の上に、櫓を背中の上に載せている。櫓の中には弓兵や投槍兵が搭乗して、群がる敵騎兵と渡り合い、象自身も騎兵の一人を足で踏み潰している。史実そのものとはいえないが、我々が一般的に抱く戦象のイメージが一通り描き込まれている。

象は陸上で最大最強の哺乳類であり、また有史以前より人類にとって身近な存在だった。

原始世界において、象は最大かつ最高の獲物であったが、やがて文明の曙が訪れるとともに、牛馬をはじめとするほかの家畜と同様、象もまた人間によって飼いならされ、戦いにも使われるようになっていった……。

象の進化と人類

現在生息している象の直接的な祖先に当たる長鼻類は、約五〇〇〜二〇〇万年程前（鮮新世（せんしんせい））にアフリカで出現したプリムエレファスと考えられており、同時期には人類のはるか遠い祖先にあたるラマピテクスも存在していたようだ。

また、鮮新世の間にプリムエレファスはアジア象の先祖であるエレファス、アフリカ象の先祖であるロクソドンタ、マンモスへ進化したマムサス、そしてパレオロクソドンの四種に分化し[1]、アフリカからヨーロッパやアジアへと広がっていった。

これら四種の中でも、マムサスから進化したマンモスは、いわゆる原始人類や氷河期のイメージと極めて深く結びついた動物で、かつては人気アニメのサブキャラとして登場していたほか、最近でも劇場用アニメ映画の主人公として活躍している。

フィクションの世界では、いわゆる原始人の狩りにおける最大最強の獲物として登場することが多いのだが、実際に先史人類の生活跡などから化石が発見されることも多く、またマンモスは狩猟によって絶滅したと考える専門家も多い。

その他、パレオロクソドン[2]の化石もまた、先史人類の生活跡から発見されることがあり、マンモスと同様に狩猟の対象となっていたようだ。

もちろん、アジア象およびその祖先であるエレファスや、アフリカ象およびその祖先であるロクソドンタもまた、先史人類は狩猟の獲物にしていたため、亜種の多くは狩猟によって絶滅したと[3]も考えられている。

このように、象は太古の昔より人類と深い関わりを持つ動物で、神話や伝説にも数多く登場するほか、南アジア地域では神獣として信仰の対象にもなっている。

現在、地球上にはアフリカ象属[4]（アフリカ象とやや小柄なマルミミ象が存在）とアジア象属の二種が生息しているとみなされているが、この二種は分化してから一〇〇万年以上経っているため、両者の特徴や性質にはいくつか大きな相違点がある（下表参照）。

また、戦象を考える上で特に重要なのは、身体的特徴よりも性質や家畜としての適応性だが、現在家畜として飼いならされているのは全てアジア象である（大半はインド象）。そもそも、現在では国際条約による保護下に置かれているため、アフリカ象を家畜として飼育すること自体が禁止されているのだが、たとえ条約による規制を度外視しても、アフリカ象を家畜として飼いならした実証例は皆無に等しい。

象は非常に優れた知能を持ち、群れを作って生活しているため、社会性も高度に発達している。そのため、基本的には家畜化しやすい生き物といえるのだが、アフリカ象は非常に性質が荒く、動物園などでの飼育経験からも「人を襲わないように馴らすことはできるが、家畜のように扱うことは到底不可能」との結論が出ている。その他、同じアフリカに生息するマルミミ象は、そもそも警戒心が強くて人に近寄ろうともしないうえ、飼育自体が極めて難[5]しいとされている。

対して、アジア象は基本的に温和な性質で人にもよく馴れ（な）、かつては野生の象を捕獲して家畜化することさえ行われていた（現在は条約で禁止されている）。

象の家畜化が始まった時期や地域については、現在もなお諸説紛々としており、定説はないといっても過言ではない。アフリカの遺跡からは象を描いた狩猟壁画などが発見されているし、インドの古代遺跡からも家畜としての象を描いた壁画やレリーフが発見されており、遅くとも紀元前九世紀までには象を家畜として飼いならしていたものと推測されている。

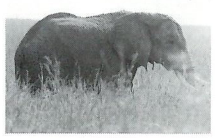
紀元前九世紀といえば、フェニキア人がカルタゴを建設し、メソポタミアではアッシリアが周辺諸国や民族を征服し始め、インドではアーリア人がガンジス川流域へ移動し始めた時期でもある。そして、ここで問題となるのはアフリカで家畜となった象、特にフェニキア人が飼いならしていた象の種類である。

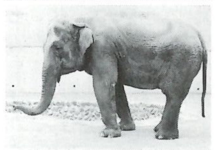
残念ながら、古代の人々は象を生物学的な視点から分類せず、まとめて単に「象」と呼んでいたうえ、細部の特徴について記した資料などもほとんど発見されていないため、わずかに伝わる同時代の図像などから推測するほかない。

まず、アフリカで発見された壁画などには、やはりアフリカ象が数多く描

■アフリカ象属とアジア象

	アフリカ象	マルミミ象	アジア象
体長	6〜7.5m	5.3〜6.0m（データは推定値）	5.5〜6.4m
肩高	2.5〜3.4m	2.1〜2.8m	2.3〜3.0m
耳	大きく三角形	やや小さくそれほど角張っていない	やや小さく四角形
鼻先の指上突起（物を掴む所）	上下2つ	上下2つ	上方1つ
蹄の数	前4・後3	前5・後4	前5・後4
その他の特徴	肩と腰が盛り上がり、背中が少しへこんでいる	背中がやや丸い	背中が丸い



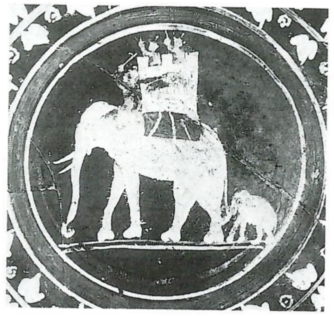


上が耳が大きく背中がへこんでいるアフリカ象、下が耳が小さく背中の丸いアジア（インド）象。

1）四種に分化し＝ステゴドン象も鮮新世に繁栄していたが、現代に子孫を残すことなく絶滅した。
2）パレオロクソドン＝パレオロクソドンから進化した種類としては、日本のナウマン象がよく知られているが、そのほかにも地中海沿岸地域の地中海小人象が直系だとする資料もある。約8000年ほど前に、狩猟によって絶滅したとされるが、確かなことはわかっていない。
3）絶滅したとも考えられている＝現在までに発見されている各種化石から、これまでに確認されている象は162種に上り、南極とオーストラリア、グリーンランドを除く諸大陸で繁栄していたとみられているが、それらの多くは狩猟によって絶滅へ追い込まれたとみなされている。また、ナウマン象をはじめとして、かつての日本列島にも12種類の象が生息していた。

かれているものの、中にはアジア象のような象を描いたものもある。これらの壁画は、北アフリカが砂漠化する以前に生息していたサヘル象[6]を描いたものとされ、フェニキア人が飼いならしていた象だと考える専門家もいる。サヘル象は既に絶滅しているが、全体的に丸みを帯びて耳も小ぶりなど、どちらかといえばアジア象かマルミミ象に近い特徴を有していたようだ。

いささか時代は下るものの、ハンニバルが象を連れてアルプスを越える少し前の紀元前二二〇年頃に、カルタゴで鋳造された貨幣に戦象の浮き彫りがあり、全体の特徴からアフリカ象ではないかと推測されている。ただし、同時期に鋳造された別の貨幣には象使いを乗せた象の姿があり、両者の体格比からマルミミ象ではないかと推測する研究者も少なくない。



イタリアのカンパニア出土の皿に描かれた戦象。古代ローマ軍が初めて遭遇した戦象であるピュロス王のものと思われるインド象で、象使いと兵士を載せた櫓を背負っている。小象を連れたユーモラスな図柄だが、象使いが持つ突き棒は、象が戦闘中にパニックを起こし暴れ狂った時、味方の軍に被害を及ぼさぬように一撃で昏倒させるか、殺すためのものである。

とはいえ、紀元前二一七年頃に鋳造されたとみられるエトルリア[7]の貨幣には、アジア象と見られる象の浮き彫りがある。そのため、ハンニバルから奪ったと推定されるこの象はアジア象であり、フェニキア人はアジア象を輸入して飼いならしていたと考える研究者もいる。

いずれにしても間接的な史料であり、どれも仮説の域を出ない。将来、骨などの直接的な証拠が新たに発見されない限り、最終的な結論は出ないものと思われる。ただ、これまでは主に史料的な側面からのみ検討が加えられており、今後生物学や動物行動学的な側面からのアプローチがなされると、これまでとは異なる新たな知見が得られるかもしれない。例えば、サヘル象は単なるアフリカ象の亜種にすぎなかったのか、あるいはアジア象の近縁種なのかといった、生物学的な見地から問題をより深く研究する必要もあるだろう。

その他、たとえ凶暴なアフリカ象であっても、子ども時代から長期間飼育すれば、家畜として飼いならすことも可能なのか、あるいは去勢すればおとなしくなるのかといった疑問もあり、今後の研究が必要なテーマであるのは間違いないといえる。

象の能力と維持管理

現在、象を軍事目的に利用することはあり得ないだろう。しかし、象使いの技術は太古の昔から受け継がれたものであり、かつての戦象を操った象使いも、現代の象使いも、ほぼ同様のやり方で象を操っているものと推測される。

もちろん、現在では動物愛護と希少生物保護の観点から、象の飼育と使役についても様々な国際条約やそれに基づく規制が加えられており、科学的見地から象が「比較的快適に生活するだけの環境」と、また「無理なくこなせるだけの作業量」が算定されている。

次に紹介するのは、インドのケララ州で定められた象の飼育と使役に関する取り決めの一部だが、これらのデータからも象の卓越した能力と、そして高い維持コストの一端がうかがえるだろう。

- 一頭の成象に、最低九メートル×五メートルの飼育スペースを用意。
- 餌は、成象で一日最低二五〇キロ（または体重の五パーセント）。
- 平均的な大きさの成象で三〇〇キロ（象使いの体重を含む）、特に大きなサイズの成象でも四〇〇キロを超える荷物を負わせてはならない（地形によっては、荷重上限を半分にする）。
- 材木を牽引させる場合も、平均的な大きさの成象で七五〇キロ、特に大きなサイズの成象でも一〇〇〇キロを超えてはならない（地形によっては、牽引上限を半分に）。
- 毎日、必ず水浴びさせる。
- 飼育の際には皮膚病、特に寄生虫に注意する。

その他、象は基本的に警戒心の強い生き物なので、夜間に休息させる際の注意事項、特に「他の訓練されていない動物」との遭遇防止策を講じなければならないなど、[8]興味深い内容となっている。

また、ケララ州の取り決めには飲料水の基準値が具体的に示されていないが、一般的には餌の六割にあたる飲料水を用意しなければならないとされているため、成象の場合は一頭につき、一日あたり一五〇～一八〇リットルもの飲料水を与えなければならないわけである。

もちろん、ケララ州の基準は「象を快適に生活させる」ために設けられたものであり、戦象がおかれていたであろう苛酷な環境とは同列に比較できない。とはいえ、たとえ半分の餌と水で倍の荷重だったとしてもなお、部隊として戦象を集団で扱うとなれば、極めて深刻な補給の問題に直面したであろうことは間違いない。

また、戦象を考える際においては加重上限と餌の最低量と同様に、兵器としての能力や信頼性に当たる、敵に対する闘争心と主人に対する従順さ、そしてその両者を見分ける知能もまた、非常に重要な要素であった。

象が非常に優れた知能を備えていることはよく知られており、よく訓練された象は実に様々な芸や作業をこなすほか、許されるまで糞や尿をしないという忍耐力も備えている。また、一般に流布されている「鈍くて鈍重」とのイメージとは裏腹に、象は感覚器官や運動神経も極めて高度に発達しており、走り出すと時速四〇キロ近いスピードになり、人間の顔や言語の違いをかなり細かく識別する。

その他、最近では人間の聴覚では感じ取れない低周波域を使って、これまで考えられていた以上に高度な内容の会話をしていることや、足の裏でも音を感じ取ることが可能で、地震や雷雨、洪水などの自然災害を[9]察知する能力もあると考える研究者もいる。

これらの特性は、運搬動物として優れた資質に繋がるものであったが、残念ながら象は運搬動物には向いていなかった。最大の理由は訓練された象があまりにも希少なうえ、飼育コストも非常に高かったことから、運搬動物としての数を確保できなかったことだ。

また、象は長時間歩くことはさほど苦にしなかったが、砂地や岩場を歩くのは苦手だったし、沼地に入り込むと身動きが取れなくなることもあった。特に問題だったのは川を渡る時で、多くの場合は巨体を活かして浅瀬を渡渉したが、深くて広い大河川を渡る場合には、筏（いかだ）を組むなどするほかなかった（象はその気になれば泳げるが、象使いを乗せたまま泳ぐことはできない）。ましてや、海を渡るために船に乗せるとなれば、非常に苦心して舷側を越えさせなければならなかった。

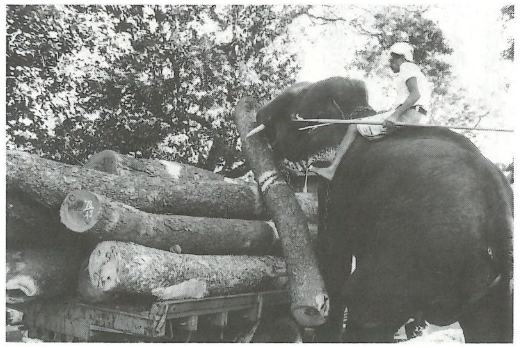
もともと象は草食動物である上に、縄張りなどをめぐって互いに殺しあうような習性もなく、どちらかといえば攻撃性はあまり高くない。ただし、何分にも体の大きさが大きさなので、単に象が突進してくるだけでも相当な破壊力を有するし、場合によっては体をこすり付けたり押し当てたりするだけでも、器物を破壊したり人間を殺傷してしまうことがある。

基本的に、象が最も激しい攻撃性を発揮するのは、自身や群れの仲間を守る場合か、あるいは何らかの原因で「パニックを引き起こした」場合で、特に後者の場合は周囲のものを見境なく踏みつけたり、あるいは闇雲に突進したりするため、ほとんどの場合は味方に大きな被害を出すこととなったのだ。

「戦象」人類の戦いに出撃

人類は動物を家畜化していった過程で、それらの中には牛や馬、駱駝（らくだ）などのような単なる使役動物ではなく、戦闘にも役立つ動物がいることを発見していたが、高度な知能と巨大な体躯を兼ね備えた象もまた、古くから戦闘に役立つことが判明していた。

むしろ、象の場合は牛馬などと異なり、犬と同様に最初から戦闘用、あるいは儀式用に家畜化していったのではないかとさえ思われるが、本当のところはわかっていない。また、戦象が初めて登場した時期も不明だが、紀元前四～五世紀より以前にインドで登場し、その後ペルシャ帝国にも伝わっていったという説が最も有力である。特に重要なのは、紀元前四世紀以前の段階で、インドでは既に象を戦闘単位として運用するノウハウが確立されていたとされることだ。



スリランカで材木運びに使われているインド象。現在でもインドや東南アジアなどでは、象は貴重な労働力として利用されている。

4）アフリカ象族＝DNA鑑定の結果、アフリカ象とマルミミ象は別種であるとの結論が出ているが、本稿では通説に従った。
5）飼育自体が極めて困難＝旭山動物園の「ナナ」が今年4月に死亡したため、日本で飼育されているマルミミ象は徳山動物園の1頭のみとなった。

6）サヘル象＝現在、希少動物保護プログラムなどにおいて、サヘル地域に生息しているアフリカ象を「サヘル象」と称することもあるが、本稿で扱うサヘル象は近縁種だった可能性もある。 7）エトルリア＝紀元前8世紀～紀元前4世紀ごろにイタリア半島中部にあった都市国家集団で、ハンニバル戦役当時はローマに併合されていたが、エトルリアという名称は残っていた。

そして、アレクサンドロス大王の東征と、その後の後継者戦争を通じて地中海世界にも戦象がもたらされたが、紀元前三世紀から二世紀にかけての大活躍を最後に、地中海世界からは急速に姿を消していった。

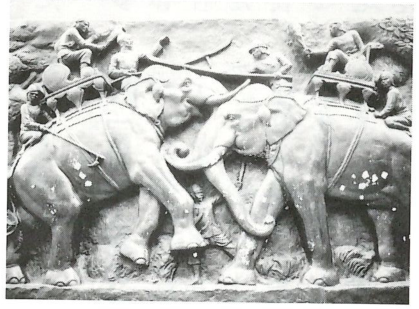
しかし、その後もペルシャでは七世紀にイスラム勢力が台頭するまで戦象が使われており、インドから南アジアにかけての地域ではさらに長く、十八世紀にムガル帝国が崩壊する前後まで、幾つもの戦場に戦象が姿を現していた。また、インドシナ半島においても、十六世紀後半から十七世紀に至るまで戦象が実戦に参加していたようで、実際にタイ王国は十九世紀になっても戦象隊を保有していた。

古代から中世に至るまで、戦象の基本的なスタイル（戦闘装備や基本戦術）は、アジアでも地中海世界でも大差なかったようだ。ほとんどの場合、戦象は首の部分に象使いを乗せ、多くの場合はさらに大きな駕籠か輿のような台を背負って、そこに弓や投げ槍などを装備した二〜四人の兵士、あるいは上級指揮官を単独で乗せていた。

ただ、場合によっては鞍状の絨毯や厚布を被せただけの背中に、兵士や指揮官が直接跨る場合もあったが、当然ながらその場合は安定性に問題があり、飛び道具の使用にも困難が生じた可能性が高い。その他、ほとんどの戦象は数人の歩兵を従えており、騎兵や古代戦車（チャリオット）と組み合わせされる場合もあった。

ご存知の通り、象は長く伸びた鼻と大きな牙をもっているため、牙に尖った金属キャップを被せたり、鼻に槍や大槌を持たせたこともあるようだ。しかし、あまり効果を発揮したことはなかったとされ、単なる装飾だった可能性もある（逆に牙の先端を平らに切った戦象の絵も存在する）。

ただ、鼻から額を覆う鎧はかなり効果があったらしく、インドでは戦象のほぼ全身をすっぽり覆う鎧も造られている。変わった例としては、攻城塔を背中に乗せたこともある。もちろん、象の大きさにあわせた小型の塔だが、それでも城壁の上を攻撃するには十分だった。その他、味方の士気を鼓舞するために派手な戦象衣装や鈴が用意されることもあり、特に高級指揮官が乗る戦象には、金銀宝石などを織り込んだ、極彩色のきらびやかな戦装束が用意されていた。



ペルシャやインドと並んでインドシナ半島の諸国でも戦象は長く使用された。写真はシャム（タイ）王朝の中興の祖・ナレースワン大王の石碑に彫られた戦象。17世紀前半に、この地で日本人傭兵を率いて活躍した山田長政もまた、ビルマとの戦いなどで戦象の上から指揮を執ったことであろう。

多くの物語や年代記において、戦象は「敵を踏み潰す」ように描かれているが、史実においてはゆっくりと前進しながら、背中の兵士が飛び道具で攻撃するというのが基本的な戦術だったようだ。そもそも、象はあまり足を高く上げられないので、直立している人間を踏み潰すことは困難なのだが、戦象部隊としての衝撃力となると非常に恐るべきものがあった。

つまり、戦象の個体による物理的な衝撃力ではなく、敵の戦列を打ち砕く組織破壊力が極めて強烈だったのだ。実際、戦象に遭遇した経験のない部隊は、接近しただけで潰走することさえあった。その上、象は倒[10]れた人間を踏む習性があるとされ、兵士は伏せたり屈んだりせずに走って逃げようとしたため、経験を積んだ重装歩兵の戦列でさえ、戦象を押しとどめるのは至難のことだったとされる。

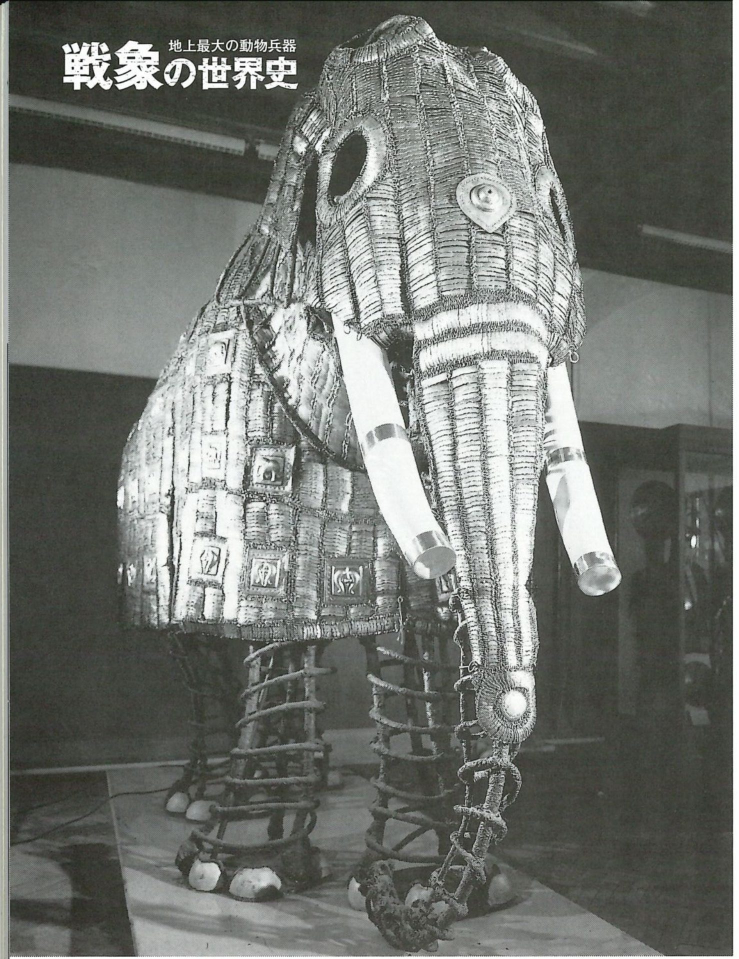
また、先述のように背中の輿や駕籠が城や都市の防壁とほぼ同じ高さに達していたため、攻城戦においても戦象は恐るべき存在だったが、特に攻城塔を背中に乗せた戦象は厄介で、まさに動く要塞と化したばかりか、薄い土壁や木壁、弱い城門などは象の体当たりで崩壊した。

幾つかの年代記には二〜四頭の戦象を並べ、その背中に兵士が鈴なりになった巨大な塔櫓を載せた図が収められているが、さすがに実在したかどうかは疑問である。もし実在したとしても儀式用の飾りに近いもので、いかほどの実用価値があったかどうか疑問で、象戦車とでもいうべきこれらの図版は、戦象に対する人々の思いを表現したものだといえるろう。

戦象の弱点とその対策

ともあれ、象は基本的におとなしい動物なので、訓練された戦象といえど

8)興味深い内容＝サーカスや映画でのパフォーマンスに関する注意事項、ちょっとうんざりするほど煩雑な行政手続きに関する手引きなど、象が大切に保護されていることがわかる一方で、飼育するのは非常に面倒なこともわかる。　9)察知する能力＝2004年末のスマトラ島沖地震によってインド洋沿岸地域に大規模な津波が発生した際に、スリランカの野生象が早期に察知して高台へ逃げたという事例がある。



十八世紀のものと推定される、インド・ムガル帝国（一五二六〜一八五八）の戦象用の鎧。板金と鎖で造られている。戦象は、ムガル軍の象徴的存在であり、雌は物資運搬と大砲牽引に、雄は戦闘用に訓練され、指揮官の搭乗を始め様々な用途に使用された（Erich Lessing/PPS）。

も、積極的に敵へ突進するようなことはなかった。

そのため、多くの場合は戦闘前に酒や麻薬を与えて興奮させていたし、頭皮の一部を傷つけて象を怒らせるという残酷な方法もあった。しかし、興奮した上に酩酊状態にもある象を操るのは、当然ながら練達の象使いにとっても極めて困難であり、戦象隊はひとたび前進を開始したら最後、方向転換はおろか停まることさえままならず、前進速度さえも容易にはコントロールできなかったという。そのため、味方を蹂躙しないように、総大将などの乗る戦象はともかく、戦象隊は常に最前列の中央に配置された。

もちろん、部隊としての機動がほとんど不可能なことは大きな欠点であり、例えば紀元前二〇二年に大スキピオ率いるローマ軍が、ハンニバル率いるカルタゴ軍と対戦した「ザマの戦い」では、ローマ軍が隊列の間隔を故意に広く取ってカルタゴ軍戦象隊の前進をやり過ごしている。

ただ、非常によく訓練された少数の戦象が、互いにある程度の間隔を保ちながら戦う場合は、多少の戦術機動も可能だったようだ。紀元前二一八年にハンニバル率いるカルタゴ軍がセンプロニウス率いるローマ軍と対戦した「トレビアの戦い」では、戦列から突出した三頭〜八頭のカルタゴ軍戦象が後退に成功し、再び攻撃に参加したとされている。

しかし、戦象隊が抱えていた最大の問題点は象の凶暴化であり、象が暴走し始めたら誰にも止められなかった。特に象使いが負傷したり死亡した場合は、味方にとっても破滅的な結果をもたらすことが多く、背中の兵士を振り落としたり（鼻で叩き落した事もあるという）、周囲のものを見境なく蹴り飛ばすなどの大惨事を引き起こしたという。

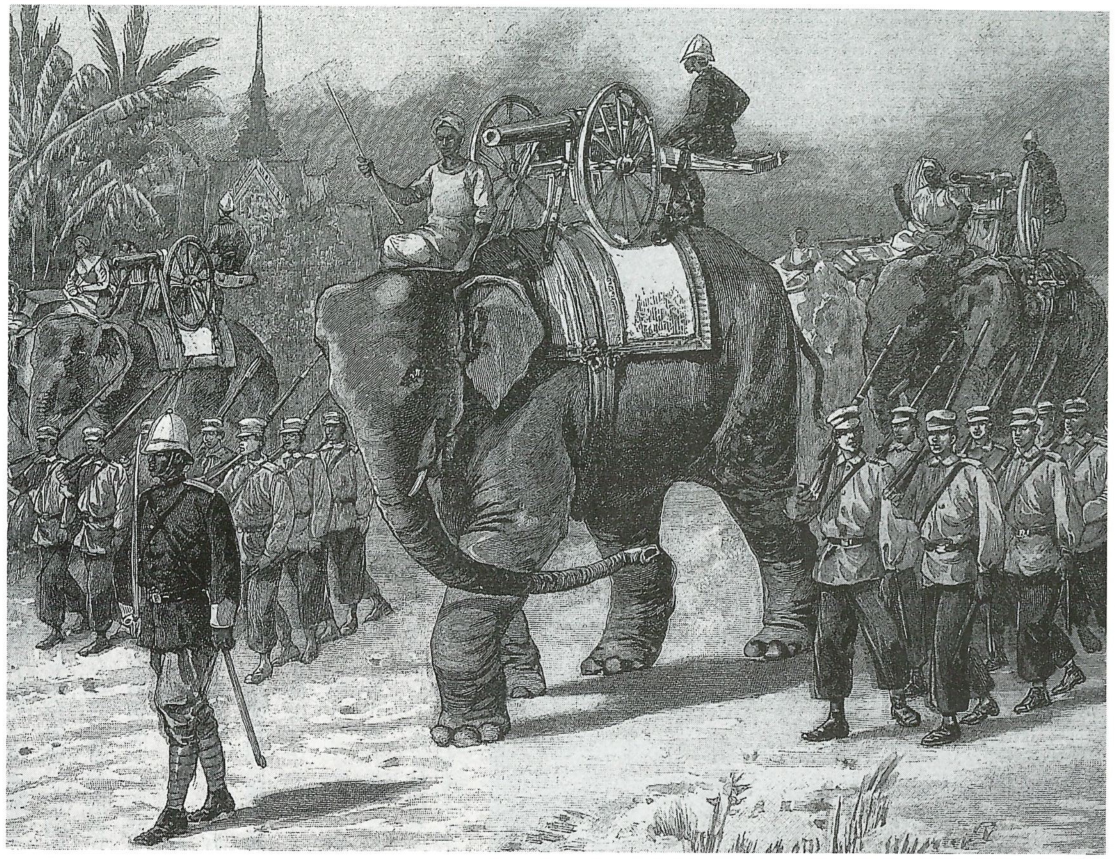
そこで、象使いは大きな木槌とノミまたは大釘を持ち、象が暴れ始めたら首と背骨の継ぎ目に一撃を加え、象を即死あるいは昏倒させていた。ローマの歴史家ティトス・リウィウスによると、いわば「自爆装置」とでもいうべき象使いの最終手段は、前述のハンニバルが編み出したものとされており、地中海世界には広く知られた方法であるが、その真偽については議論の余地もあるだろう。

もちろん、戦象と相対した側もただ一方的に蹂躙されたり、あるいは単にやり過ごすのみといった消極策に甘んじていたわけではなく、様々な策を講じて必死に対抗しようと試みていた。

まず、最も基本的な対抗手段は特別に重装、あるいは逆に軽装の兵士が数人で接近し、象の背中に輿や駕籠をとめている腹帯や、足の筋を切るというものだった。また軽装兵の場合は（腰巻一枚や全裸の場合さえあった）、象の腹下にもぐりこむことも可能だったが、うかつに象の腹を割いてしまった場合は、自らが倒した象の下敷きとなって死ぬ運命が待ち構えていた。

とはいえ、多くの場合はできるだけ象そのものには傷を負わせず、可能な

10)倒れた人間を踏む習性＝これは古来からある俗説で、動物学的な裏づけはないのだが、各国で広く信じられている。



1893年7月29日付け、フランスの『Le Petit Journal』誌に紹介された、シャム（タイ）の砲兵象。19世紀半ばのシャムは極東最高の戦象所有国で、800頭の部隊の半数が戦闘象、残りが輸送用であった。このうち約100頭が砲兵象で、背中を砲台として射撃に耐えたと報じられた(AKG/PPS)。

限り象使いごと生け捕りにして、自らの陣営に加えることを好んだ。

　また、城壁や戦車に据え付けた大型の弩砲（バリスタ）などで戦象を撃つこともあったが、これらの強力な兵器でも戦象を一撃で葬ることは困難で、むしろ急所を外して象を暴れさせる事の方が多かったようだ。その他、戦象部隊には必ずリーダーとなる象がいるため、その象を倒して部隊の崩壊を狙った事例もあるが、当然ながらリーダー象は最も賢く、かつ良く訓練されており、しかも多くの場合は部隊で最強だったため、なかなかうまくいかなかった。

　このように、戦象を倒すことは非常に困難だったため、倒すよりは追い払うことを選ぶ指揮官も少なくなかった。結局、最も効果的な対抗策は戦象との戦いを避け、それ以外の部隊を崩壊させて戦象を孤立させるというものであった。

　そして、戦象部隊の基本的な特質は地中海世界でもインドでも南アジアでも、ほとんど変わることはなかった。つまり、強大な突進力で敵を圧倒するものの、戦術的な融通性は皆無に等しく、部隊が崩壊の危機に瀕した場合は、味方にとっても危険な存在となる。さらに、象使いを含めて部隊を編成・維持するためには莫大な資金が必要であるという特質は、洋の東西を問わなかったのだ。

　中でも戦術的な融通性が無いことは厄介で、基本的に戦象部隊は歩兵をも含めた他兵科と共同して戦うことができず、ほぼ常に単独で突撃するしかなかった。

　つまり、もし戦象部隊を使いたいのであれば、すべからく戦象を中心として戦うべしということで、戦術的な自由度を極端に狭める結果に繋がったともいえよう。

　もちろん古代から中世に至るまで、うまく象を手なずけて、かつ部隊として使いこなすことができれば、戦象は最強の存在となっただろう。

　その後、十五～十六世紀にかけて火器が広く使用され始め、戦象の威力は大きく減じていったが、それでもなおインドなどでは銃を携えた兵士や、時には小型の大砲を背に乗せて、移動砲座として戦場に君臨していた。戦象の背に乗った兵士はかなり遠くまで見渡すことができ、上からの射撃は敵に対して大きな効果を発揮したのだ。

　だが、火器がさらに進歩していくと、象の巨体は格好の目標となって前線からは姿を消し、戦象は軍の伝統と格式をあらわす象徴的な存在となっていった。

　そして、二十世紀にはほとんど全ての象が戦闘目的ではなく、単なる使役動物として使われるようになり、インドシナ半島のジャングル地帯でパトロールに使われたごく一部の象を除いて、戦象という存在は地球上から消滅したのである。

戦場の「生ける神」

　象は家畜として非常に有益な特質を備えていたが、それを大きく上回る欠点も数多くあった。兵器としての能力となれば、さらに長所より短所の方が目立つわけだ。

　しかし、比較的おとなしい生き物であったがゆえに、非常に希少で外見が特徴的である点に注目した王族や将軍たちが、敵を威嚇し味方を鼓舞する移動司令塔として使うこともあった。実際、戦象は極めて印象的な軍用動物であり、敵に回したものは戦象のわずかな動きにさえもひどくおびえ、共に戦ったものは戦象が勝利をもたらしてくれるものと信じ、勇気づけられた。

　戦象とはいわば戦場に出来した生ける神であり、戦象を擁した側は文字通りの意味で「運命を共にする覚悟」が必要だった。戦象を単なる「お飾り」としてではなく、うまく使いこなした軍が勝利し、戦象を使いこなせずに倒されたり、壊走させられたときは、軍もまた崩壊していると言えよう。

　戦象のもっとも厄介な特質とは、高い維持コストや凶暴化のリスクではなく、実は「軍が象と運命を共にしなければならない」という点にあったのではないだろうか。

■戦象が名を残した主な戦闘

年代	場所	戦いの概要	戦象の勝敗
前326年	ヒュダスペス河畔(インド)	アレクサンドロス大王軍が、インドの君主ポロス率いる200頭の戦象に遭遇。突進する戦象にマケドニアのファランクス（槍歩兵密集陣）の戦列も突破されて混乱に陥った。しかし軽装歩兵がその鼻や足に斬り付け、象使いに対して飛び道具を集中すると、逆上した戦象は自軍の戦列へ逆戻りし、これを踏み潰した。	×
前280年	ヘラクレア(南イタリア)	イタリアに侵入したエペイロス（ギリシア）のピュロス王が、20頭の戦象を前列に配して攻撃。迎え撃つローマ軍は初めて見る象に驚き、騎兵の馬は怯えて自軍の歩兵の隊列に飛び込み、大混乱となる。さらにピュロスの騎兵の攻撃でローマ軍は遂に敗走（しかしローマはこれを教訓に戦象対策を考案。火をつけた槍や矢で象を威嚇する戦法などで、二戦目で引き分け、三戦目では勝利を得る）。	○
前218年	トレビア(北イタリア)	第2次ポエニ戦争でカルタゴ軍を率いてローマを目指すハンニバルは、有名なアルプス越えで引き連れた戦象の大半を失い、8頭を残すのみだった。それでもカルタゴの戦象の攻撃は、ローマ騎兵を圧倒したが、ピュロスとの戦いや第1次ポエニ戦争の経験から象対策を心得ているローマ歩兵は、戦象の足裏を斬り、投槍で突こうとした。ハンニバルは象を呼び戻し、今度は象に慣れていないローマの同盟軍ケノマニ族を攻撃しこれを撃退。孤立したローマ軍は退却のやむなきに至った。	○
前217年	ラフィア(パレスチナ)	アレクサンドロス大王の後継者戦争で、シリア王アンティオコス3世の102頭のインド象と、エジプト王プトレマイオス4世の73頭のアフリカ象が、戦象同士の戦いを展開。牙で相手を押さえ込み、鼻で相手の体勢を変え、相手が横腹を見せるや牙で突いた。勝利はエジプト軍のアフリカ象のものとなった。	△
前202年	ザマ(北アフリカ)	ハンニバルのカルタゴ軍とスキピオのローマ軍の決戦。ハンニバルは80頭の戦象を突進させるが、スキピオはローマ軍の戦列に通路を開いて戦象を通過させ、直ちに戦列を閉じて象に追走するカルタゴ軍を食い止めた。通過した戦象はローマ軍の後方で軽装歩兵の飛び道具によって仕留められた。	×
554年	エデッサ要塞(メソポタミア)	ビザンツ軍の護るエデッサ要塞攻略に際し、ササン朝ペルシャのホスロー1世が、約100頭の戦象を投入。背中に載せた塔の中の兵士が高さを生かして、城壁を守るビザンツの守備兵を射撃し悩ませた。戦象が接近していよいよ兵士が城壁に取りつこうとした時、ビザンツ側は一計を案じて、豚を紐に繋いで壁からぶら下げると、その金切り声に驚いた戦象は怯えて退却した。	×
1277年	ニャサウンギャン(雲南)	フビライ・ハーンの軍が、元への服属を拒否したビルマ・パガン朝ナラティハパテ王の戦象隊と相対した。象になれていないモンゴルの馬は戦象に立ち向かえず、モンゴル騎兵はやむなく下馬。得意の弓で射撃を集中して、戦象を追い立てて再び騎乗して攻撃。戦象は恐慌状態となって暴れまわり、周囲のあらゆるものを破壊した。	×
1398年	デリー近郊（インド）	中央アジアの征服者ティムールが、デリー・トゥグルク朝軍の120頭の戦象と遭遇。ティムール軍騎兵は、戦象に乗った敵兵が放つ矢や爆薬に苦しむが、ティムールは自陣の前に設けた柵と壕、繋いで並べた野牛で戦象を阻止、鉄びしを撒き散らして撃退した。燃える藁束を背負わせた駱駝をけしかけたともいう。	×

戦象（戦闘用の象）は、紀元前5～4世紀にインドで誕生したと思われ、古代の戦場で活躍し黄金時代を迎えた。16世紀以降、火器の普及に伴って急速にその活躍の場を失い、その後は大砲や物資の輸送に使われるようになったが、インドやインドシナでは19世紀まで維持されていた。第２次大戦後、インドシナの密林でのパトロール等に使用されたのを最後に闘象は姿を消した。

〈参考文献〉ヴィッド・ニコル著、アンガス・マックブライド画、桂令夫訳『インドのムガル帝国軍　1504-1761 火器と戦象の王朝史』(新紀元社)／ジャック・キャシン―スコット著・画、柊史織訳『古代ギリシアとペルシア戦争　500BC-323BC 東地中海の攻防』(新紀元社)／マルタン・モネスティエ著　吉田春美・花輪照子訳『図説　動物兵士全書』(原書房)



(上)編隊で攻撃行動に出ようとするIℓ-2。ドイツ軍の地上部隊にとって、同機は「黒死病」と呼ばれ恐れられた。(下) 襲撃機の攻撃を受け、炎上中のドイツ軍の縦列。



赤軍の縦深戦略が生んだ「空飛ぶ戦車」

シュトルモヴィク大研究

Il-2 Stormovik

文＝樋口隆晴

ルール違反の飛行機

読者諸兄が、自衛隊の駐屯地祭や博物館で戦車などの装甲車両に触れる機会があれば、試みに装甲板を手で叩いてみてほしい。叩いても音さえしないその感触は、分厚い鋼鉄の持つ質量と、装甲車両というものの本質を実感させてくれるはずだ。

筆者が中国は北京にある航空関係の教育施設のバックヤードで、スクラップとなった「シュトルモヴィク」と通称される軍用機の操縦席周辺を叩いてみたのは、同機がよく知られているようにエンジンと操縦席周辺を装甲板で構成しているからだったのだが、一見して普通の「ヒコーキ」とは違う違和感があったからでもある。

コクピット周りの装甲板の厚さは四ミリから七ミリと大戦初期の装甲車並みで、音が出ないほど厚くはなかったが、使い捨てのアルミ皿のようなジュラルミンと違い、叩けば手が痛く、その質感はまさに装甲車両と同じだった。なるほど、「空飛ぶ戦車」の異名は伊達ではなかった。

実際、ドイツ軍の戦記には、撃ち込んだ機銃弾が装甲板の上で跳ね散る様子や、その反面、機体が重いせいで急激な回避機動を行って失速し、勝手に墜落してしまう様子などが描かれている。たしかにそうした描写が納得できるのに充分な装甲ではある。

それにしても、飛行性能が落ちるほどの装甲車並みの装甲を持つなど、飛行機として何かルール違反な気がする。そのうえこの飛行機、胴体と垂直尾翼は木製モノコック構造なのだ。

このイリューシンIℓ-2シュトルモヴィクは、ドイツ軍から「黒死病＝ペスト」と恐れられる一方、スターリンには「黒パンの如く欠かせないもの」と評価され、一九四一年の制式採用以来、三万六一六三機が生産された。これは第二次大戦中に生産されたソ連機の約三六パーセントに相当し、単一機種では軍用機史上最高の生産数である。さらに一九五五年まで生産された後継機のIℓ-10（筆者が叩いたのはこの機種）と、チェコでライセンス生産された分を合わせれば、その数は約四万二〇〇〇機にもなる。

本来、「シュトルモヴィク」とは、独語のシュトルム、英語のストームと同じで「嵐」または「突撃」を意味する言葉である。直訳すれば「突撃機」、日本では「襲撃機」（この訳は日本陸軍による）と呼ばれる機種のことであり、固有名や愛称ではない。しかしシュトルモヴィクといえば、ふつうIℓ-2（とIℓ-10）を示す。

つまりIℓ-2は、襲撃機という機種の代名詞となるほどの顕著な働きを見せた機体であったのだ。ちょうどドイツのJu87が、急降下爆撃機を意味する「シュトゥーカ」と呼ばれたのと同じである。

では何故、この特異な飛行機は誕生したのか、そして襲撃機の代名詞となるほどの活躍を見せたのか。以下にその歴史と運用に視点を当てて述べてみたい。さらにそうして論を進めていけば、シュトルモヴィクの「空飛ぶ戦車」の渾名は、装甲されているという表面的なことではなく、この類い希な航空機の本質に根ざしていることを理解して頂けると思う。

襲撃機とソ連軍

襲撃機（Stormovik／Assaulter）、一般には対地攻撃機(Ground Attacker)とされる軍用機は、戦場上空とそこからやや敵の勢力圏内に入った場所で、地上攻撃を行う航空機のことである。

同じような空域を活動範囲とする機体に近距離爆撃機（おおむね軽爆撃機と同一の存在）があるが、両者の違いは、襲撃機の方が軽快かつ頑強という機体特性を持つ点である。

対地攻撃機はすでに第一次大戦から登場しているが、これらの機種のうち興味深いのが、ドイツのユンカースJ1（J4）とイギリスのソッピース・サラマンダーである。

ユンカースJ1（J4）は、全金属製で、エンジン部分を厚さ五ミリの鋼板で覆い、運動性は悪いが無類の頑丈さから、後にシュトルモヴィクに冠されたのと同じ「空飛ぶ戦車」の渾名を持つ。一方のサラマンダーは、ソッピース・スナイプ戦闘機が原型であり、エンジン下面に装甲板を取り付けていながらも、高馬力エンジンがもたらした――攻撃機としては――軽快な運動性を持っていた。

この二つの機種は、襲撃機という機種を考える上で示唆的である。つまり襲撃機とは、強靱な機体構造と軽快性という二律背反した要素を持たなければならないということである。

では、大陸国家であり、その空軍の少なからぬ兵力を陸軍に協力させなければならないソ連空軍は戦間期にどのような襲撃機を使用していたのであろうか。

ソ連空軍にとっての最初の襲撃機は、一九二八年に採用された一種の汎用機である、ポリカルポフR-5偵察／爆撃機のバリエーション、R-5sh（shは襲撃機＝ロシア語つづりShturmovikの略記号）であった。

三三年には、世界最初の実用低翼単葉引込脚戦闘機、ポリカルポフI-16が制式化される。同機は、戦場制空権を奪取するための対戦闘機戦闘よりも、防空戦闘のための速度性能と大型機に対抗する火力を重視しており、二〇ミリ機関砲を最初に装備した機体として知られているが、RS82空対空（対地攻撃兼用）ロケット弾も搭載する（制空戦闘機としては同時に開発・配備されたI-15が存在した）。

そしてこの防空戦闘機が持つ大火力は対地攻撃機としても必要な条件を満たしているとされ、I-16の29型では、襲撃機として二〇〇キロ爆弾と六発のロケット弾またはガン・パックが装備できるように改造された。

ただしI-16は、高性能の戦闘機に

しばしば見られるように安定性が悪く、攻撃時に一定の速度と高度で飛ばなくてはならない爆撃機や攻撃機としての使用には本質的には向いていない。このため、ポリカルポフR-5の発展型であるR-Z*とLRが（軽）襲撃機として配備された。

当時、こうした対地攻撃機を重視していたのはソ連軍空軍以外には、ドイツ空軍があった*。両者に共通しているのは、陸軍のドクトリンが機動戦にあることだ。

むろんそれぞれ特徴があり、ドイツ空軍は戦線突破時とその直後に、自軍の行動を妨害するトーチカ等を撲滅するための「空飛ぶ重砲兵」である急降下爆撃機と高速の軽爆撃機を重視した。彼らは、速度こそが機動戦で最も重要と判断し、それを妨害するものを排除することと、戦場に駆けつける敵の予備隊や指揮・統制の速度を空襲によって低下させることを重視したのである。

ソ連軍は、空軍を、①戦略任務を担当する総司令部直轄長距離爆撃隊*、②国土防衛のための防空飛行隊、③方面軍／軍飛行隊に区分していたが、襲撃機が配備されるのは、戦闘行動を行う際に陸軍の指揮下に入る方面軍／軍飛行隊である。後に前線空軍（FA）となるこれらの方面軍／軍飛行隊は、その名のとおり陸軍の方面軍や軍に直接協力する〝直協空軍〟である。

方面軍／軍飛行隊は、ドイツ空軍と同じでいわゆる戦術空軍であるが、ソ連軍が襲撃機を重視したのは、敵の前線部隊のみならず、その背後に存在する予備部隊をも壊滅させたいという目的が存在したからである。

急降下爆撃機をふくむ戦術爆撃機と襲撃機の違いは、一部の任務が重複するものの、基本的には、前者が施設への攻撃、後者が行動中の部隊への攻撃と考えれば良いであろう。

このようにソ連軍が襲撃機を重視した背景には、第一次大戦、内戦、そしてポーランドとの戦争の教訓から導き出された「連続作戦理論」と「機動戦理論」を積み上げた結果、『一九三六年臨時労農赤軍野外教令』で具体化する「縦深作戦理論」が存在していた。

同書は、ソ連軍の作戦の根本をこう記す。

「赤軍の戦闘行動は殲滅戦の遂行をもって原則となす」

「現代戦に於ける資材の進歩は敵戦闘部署の全縦深に亙り同時に之を破砕することを可能ならしむるに至れり——略——敵を攻撃するに当たりては完全にこれを捕捉殲滅せざるべからず」

戦車と急降下爆撃機を主な兵器としたドイツ軍の機動戦が、敵の間隙を縫う浸透戦術から発達し、敵部隊そのものを目標とするのではなく、迅速な機動により敵の指揮機構に打撃を与えて、軍隊という組織をシステムダウンさせることを目指した*のに対し、ソ連軍では機動を敵部隊殲滅の手段に置く。

ソ連軍は、戦争を早期に終結させるには、「連続作戦」が必要であり、連続作戦を行うためには「機動戦」で敵軍を包囲殲滅しなければならず、その機動は「全縦深に亙」って発揮される火力によって敵軍を拘束することで初めて可能となる、と考えたのである。

とくに重要なのは作戦初動で、予備隊も含め、どれだけの敵部隊を潰せるかに爾後の連続した機動作戦の成否がかかっている。というのも、戦線を浸透したり狭正面で突破するだけでは駄目で、敵の戦線を予備隊もろとも消し飛ばし、連続作戦に必要な機動のための地積を稼ぐ必要があるからだ。


ソ連国内の工場で生産されるIℓ-2襲撃機。膨大な数が生産されたことが理解できる。3万6000機以上も生産されたIℓ-2は、その生産数の多さという点だけで見ても、間違いなく第2次大戦を代表する軍用機といえる。

さらにいえば圧倒的な戦力を投入する攻勢であっても、いずれその戦力は減衰する。だが、縦深にわたって敵の戦力を常に叩き続けていれば、自軍の戦力は相対的に優位となるのである。


車輪留めを外され、今まさに出撃しようとするシュトルモヴィク。ソ連軍は、空軍を地上軍の支援として位置づけていたことから、航空機における短距離離着陸性能に一定の要求を課していた。

以上の目的から、敵戦線背後に待機する、または後方から戦闘に参加するために駆けつける予備隊を「破砕」できる兵器は襲撃機以外に存在しない。なぜなら、繰り返しになるが、爆撃機の目標が施設なのに対し、襲撃機のそれは敵の部隊そのものだからだ。

ドイツの電撃戦にシュトゥーカが不可欠だったように、シュトルモヴィクはソ連の縦深戦略に必要な機種だったのだ。

だが襲撃機は、先に述べたように頑強さと軽快さという航空機としては矛盾する要素を併せ持たなければならない機種であった。ソ連空軍は、襲撃機を重視してはいたが、この時期、技術的制約から戦闘機改造の機体と汎用機改造の機体で我慢していたといえる。実際、一九三一年から三五年までにソ連空軍は六機種の襲撃機を開発したが、どれ一つモノになっていない。

新型襲撃機開発の苦闘

ここで、襲撃機の開発が困難な理由を考えるために、その戦術を述べてみたい。ソ連軍の襲撃機戦術の基本は、三〇年代初頭には、ほぼ確立されており、その任務は以下の通りであった。

一、攻撃時には地上部隊に先行し、進路の啓開と清掃を行う。とくに歩兵部隊との協同の際には、歩兵部隊が任務を達成するまで常時在空し、自軍歩兵の行動を妨害する敵を攻撃する。

二、遭遇戦の際には、急襲により敵部隊に対空戦闘を強要して、進撃速度を低下させる。

三、追撃戦では、退却する部隊に壊滅的な打撃を与えるとともに、増援部隊を遮断する。

四、攻防ともに交通網と行軍中の部隊を攻撃する（航空阻止作戦）。

攻撃の基本は、少数機編隊を用いた奇襲または急襲であった。これは航空攻撃が、防空のための分散を行っていない部隊にこそ最大の威力を発揮するからである。

このような攻撃のために、接敵機動には、二五メートルという超低空を、地形を利用して飛行することも求められた。現在ならば、さしずめ対戦車ヘリコプターが行う「匍匐飛行」と称されるものだ。この高度になると小火器の銃弾でも致命傷となるから、相応の防弾能力が必要となる。一九三〇年代半ばを過ぎると攻撃力には戦車に対するものが付加され、重量のかさむ大型火器の搭載も必要とされた。

襲撃機（対地攻撃機）が、その誕生時から防弾装備を持っていたこと、多くの機体で運動性の良い戦闘機が、その原型とされた理由がこれらのことから理解できよう。これに加えてソ連軍は、物量の優越を期するから、あらゆる兵器に高い生産性と資材の節用が望まれた。

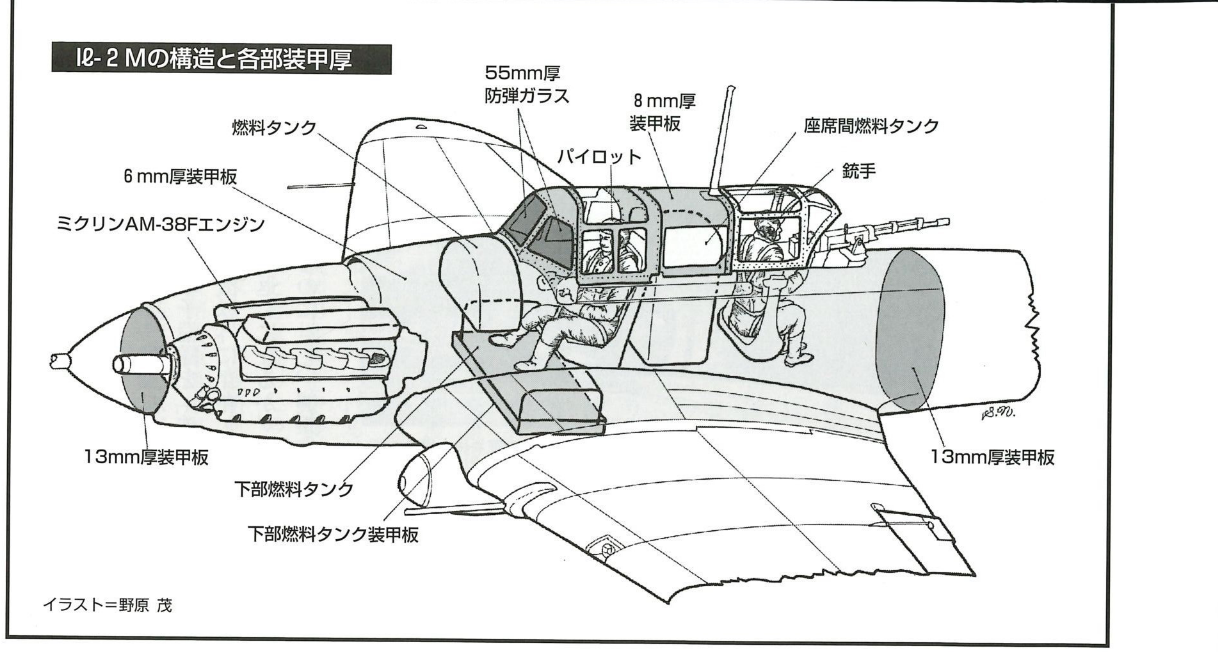
新型襲撃機の開発計画は、一九三五年に党中央委員会が、装甲車両と充分に防備された拠点を攻撃できる機体の開発を、ポリカルポフ指揮の中央設計局（TsKB）に命じたことから始まる。

VIT（Vozdushnyi Istrebitel Tankv＝空中戦車戦闘機）-1と名付けられたこの機体は、装甲を持ち、三七ミリ機関砲四門、二〇ミリ機関砲一門を搭載した重武装・重装甲の機体であったが、さすがに単発機ではこの重武装の搭載は無理で、双発の大型機となった。このため離着陸距離が長くなり、結局不採用となっている。

ソ連空軍の戦術機に対する離着陸性能への要求が厳しいのは、機動戦を行う地上部隊を支援するための空軍だからだ。地上軍の戦況に合わせて多数の飛行場（一個飛行連隊につき飛行場三か所が基準）を急速に建設しなければならないため、前線で使用する機種には、建設に時間のかかる長い滑走路を与えることが困難なのである。

一九三八年一月、中央設計局の設計者の一人が、単発装甲襲撃機のアイデ

＊R-ZとLR＝R-Zはロケット弾だけでなく爆弾500kg、または7.62mm機銃4挺を装備したガン・パックを装備することが可能。LRも機銃を4〜6挺装備しており、両機とも対地掃射能力の高い機体となっている。＊ドイツ空軍があった。＝日本陸軍も機動戦をドクトリンとしたが、当初は敵航空機による空襲を防ぐため、航空撃滅戦による戦場制空権の確保をめざして戦闘機と爆撃機の整備に力を入れた。38年になってから襲撃機（九九式襲撃機）と襲撃任務に使用できる軽爆撃機（九九式双発軽爆撃機）を採用。＊総司令部直轄長距離爆撃隊＝42年初頭の改編で遠距離空軍（ADD）へ、また防空飛行隊は防空軍（PVO）となる。なおこの改編で、前線空軍（FA）を含め、航空隊の最大編制単位は航空軍（VA）となった。＊システムダウンさせることを目的＝具体的な部隊の動きは多くの場合、敵軍の包囲となる。

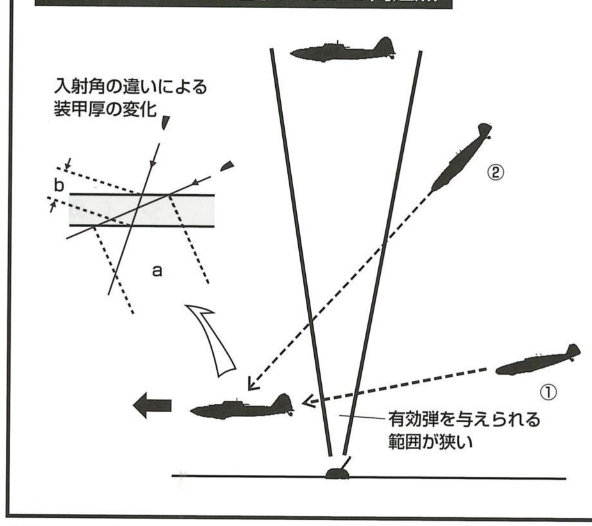


アを、スターリンをはじめ関係各部局へ提示した。

設計者の名はセルゲイ・ウラヂミロヴィッチ・イリユーシン。長距離双発爆撃機DB-3の主任設計者である。

一八九四年生まれの彼は、帝政陸軍航空隊でパイロットを務め、一九二六年空軍技術委員会に入会。後、同会の代表を務める。中央設計局では当初、航空機開発の手法を研究する部署のチーフであった。三七年には航空工業人民委員部の委員（航空工業省の大臣）への就任をスターリンから要請される（辞退）。

こうした経歴からわかるようにイリユーシンは、一設計者にとどまらず航空行政全体を見通せる能力があった。ソ連の航空工業は軍事と一体のものだったから、彼は当然、ソ連軍のドクトリンに対する理解も高かったと思われる。だからこそ新型の襲撃機は、前線での使い勝手も生産効率も良い「単発」の「装甲襲撃機＝Bronirovannii Shturmovik〈Bsh〉」でなければならないと考えたのである。



（上）Il-2の装甲は、乗員ばかりでなくエンジン部も防護しており、まさに「バスタブ」といっても過言ではない。ただし、後部機銃手の上半身は防護されていないのがわかる。（下）戦闘機が低空の敵機を撃墜する場合、①では敵機装甲に対し機銃弾が浅い角度で当たるため、実質的な装甲厚は左図のaのように厚くなり、貫通しにくくなる。②の角度ならbの厚みとなるが、急降下での接近となり地面に激突する危険がある。一方対空砲も、図のように砲身を取り回す範囲が狭いため、低空接近する敵機への射撃時間は少なくなる。

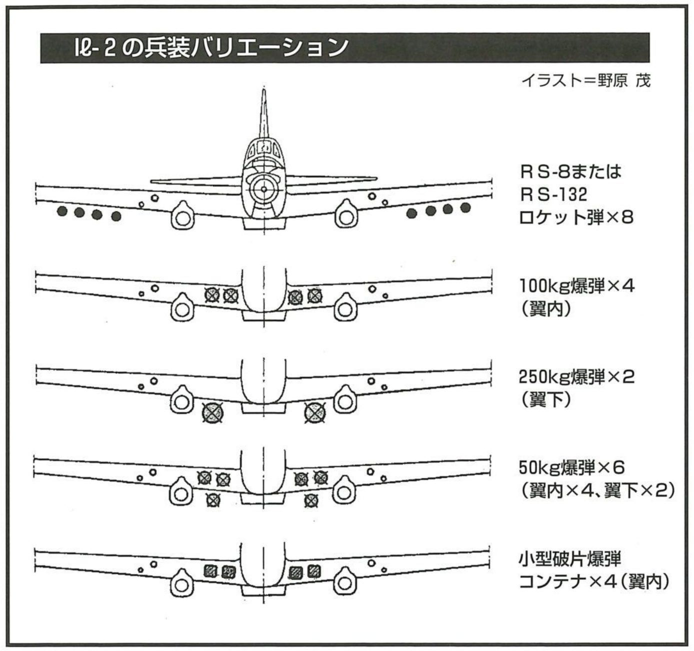
イリユーシンの提言で始まった装甲襲撃機計画は、まずコチェリギンBsh-1*（軽装甲襲撃機）による実証試験を経て、三八年十一月までに試験飛行という厳しい条件のなか、スホーイ設計局とのトライアルとなった。

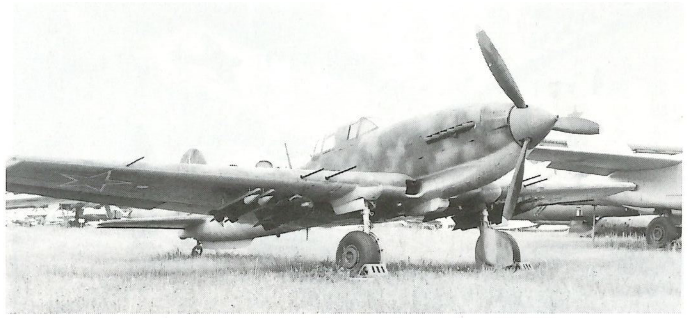
イリユーシンは設計開始後に事故で仕事ができなくなったが、一方のスホーイSu-2襲撃機も、開発期間を短くするためにトゥポレフANT-51軽爆撃機／襲撃機を再設計したもので、機体が脆弱なため採用されなかった（のちに近距離爆撃機として制式化）。

待望のイリユーシンによる装甲襲撃機TsKB-55が試験飛行に臨んだのは、予定を一年も超過した一九三九年十二月のことであった。そしてその機体設計はまったく逆転の発想に基づいたものであった。

従来の航空機装甲が骨組みの上に張り付けられていたのに対し、イリユーシンのそれは、装甲を構造材として使用し、あたかもバスタブのような形状でエンジンとコックピットを守っていた。戦車のような、ではなくこの部分の構造は戦車そのものなのである。これによりTsKB-55は、必要な部分を装甲板で覆いながらも、その重量を機体重量の一五パーセントに押さえることに成功した。

＊コチェリギンBsh-1＝アメリカのバルティーV11軽爆撃機を改造した機体で36機が製造された。





（上）Il-2の開発の段階でエンジン出力が向上したことから、重武装かつ多彩な兵装の選択が可能となった。爆弾などは翼下だけでなく、翼内にも収めることが可能であり、爆弾やロケット弾を組み合わせることで、ピンポイント攻撃から面制圧まで、さまざまな任務をこなせる機体となった。（下）博物館に現存するシュトルモヴィク。写真はIl-10。翼下にロケット弾と爆弾のダミーを取り付けている。

TsKB-55のもう一つの特徴が、機体後半部と垂直尾翼が木製モノコックだということだ。これは戦時に入手が困難となるジュラルミン等を節約するための措置である。また低空域での飛行性能を高めるため、エンジンの高空性能はあえて捨てている。量産型の実用上昇限度はわずか四〇〇〇メートルでしかない。複葉のポリカルポフR-Zのそれが八七〇〇メートルだから、その値の低さが理解できるであろう。

こうした工夫と発想により、大量生産可能な、装甲された新型襲撃機をソ連空軍はようやく手に入れたといえる。

もっとも、これらの工夫は、自軍の軍備に適合したソ連航空工業の技術基盤があったからこそ可能となったものだ。

ソ連空軍は数多くの木製または木金混合機を製造しているが、これはイギリス以外の国では失敗したように、平時からの積み重ねが無ければ不可能な技術だ。TsKB-55の開発中には、これまで以上に強度がある、特殊合板が実用化されていた。さらに装甲板もVIAM（航空機材料研究所）が開発した航空機用クローム・モリブデン装甲が入手できた。

三九年十二月から翌年前半までの各種試験飛行の結果は、しかし軍が満足できるレベルにはなかった。一三五〇馬力のAM-35エンジンでは馬力が低すぎ、海*面高度での速度は時速三六二キロしか出ず（Su-2は時速四五五キロ）、航続距離も六二〇キロと短く、戦場での滞空時間が足りなかった。

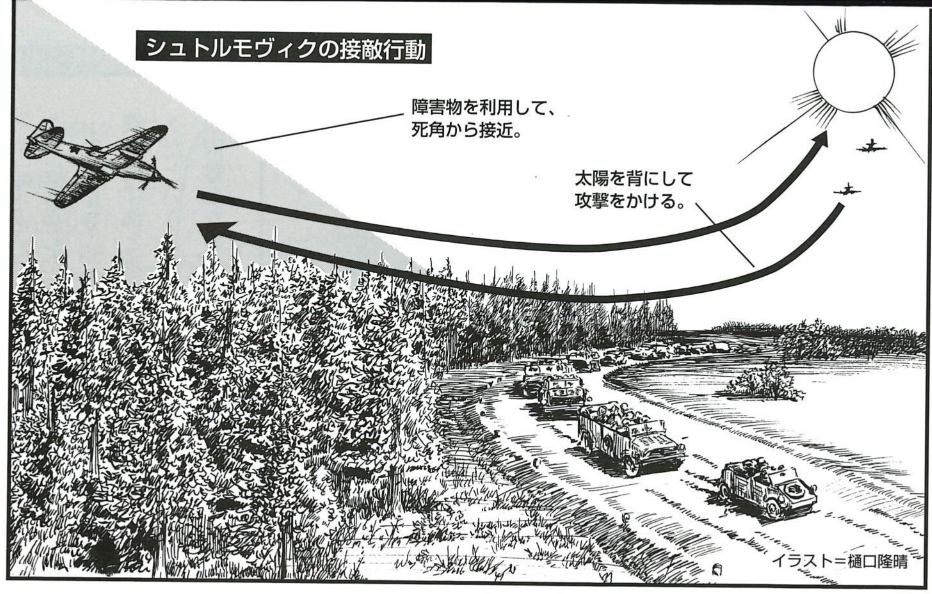
とはいえ、TsKB-55は基本的には正しい機体であり、すでに第二次大戦が始まっていたことから、空軍当局には他の選択肢がなかったといえよう。

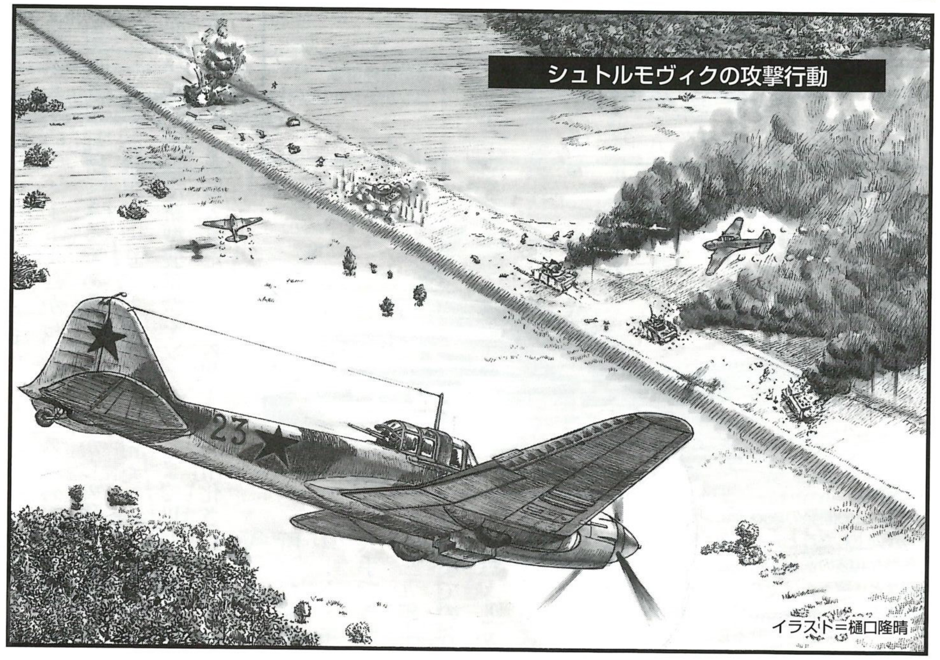
試験を行った空軍科学試験研究所が示した性能改善策は、単純なものであった。それは機銃手兼無線手が乗る後席を外して軽量化し（装甲板を減らすことができる）、その部分に燃料タンクを増設することであった。さらに開発期間が延びたことが幸いして、出力一六〇〇馬力の新型エンジン（AM-38）が使用できた。この結果、速度は時速四二二キロに向上し、航続距離は七四〇キロに延びた。舵は重かったが、操縦性は素直で、その運動性も襲撃機としては納得のゆくものだった。

エンジン出力が向上したことから、操縦席後部の装甲板も一三ミリへと増厚された。一方、武装も二〇ミリ機関砲二門を搭載できるようになり、爆弾搭載量も増え、目標に合わせ多種類の対地兵器を選択できた。

TsKB-57（CCB-57）と名付け

＊海面高度＝海抜0メートルのこと。航空機は、同一馬力でも高度による大気密度＝空気抵抗が違うと速度が変わる（実際にはエンジン馬力も空気密度によって変化する）。このため航空機の速度諸元は「高度○○において」と幾つかの高度で表示される。Il-2の場合は低空域で活動する航空機なので、海面高度での速度が比較的重要になる。なお試験では気圧高度計を海面高度気圧で補正する。





（上）シュトルモヴィクは、丘や森林といった遮蔽物を利用して低空で接近するか、目眩ましのため太陽を背に攻撃を仕掛けることが一般的であった。（下）襲撃機部隊の本来の任務である、移動中の部隊を攻撃する場合は、イラストのように縦列の後方から、単機あるいは２機編隊で、左右に蛇行しながら行われた。蛇の動きに似たその飛行形態から、一般に「スネーク・フォーメーション」と呼ばれ、ドイツ軍に恐れられた。

られたこの機体は一九四〇年十月に試作一号機が試験飛行に成功。翌年三月には制式採用され、量産に入る。この年からソ連空軍は総ての軍用機の名称を、これまでの機種を表すものから、開発サイドの士気高揚を目的に設計局の略号を付けることとした。
すなわち、「イリユーシンIℓ-2シュトルモヴィク」の誕生である。

天翔ける戦車の伝説

一九四一年六月の独ソ戦開始時にIℓ-2を装備していた飛行隊は、ウクライナの第4襲撃飛行連隊のみであった。だがその後、Iℓ-2の数は増え、モスクワ攻防戦の頃には六個連隊にまで増加している。八月以降の月産三〇〇機という生産数がものをいったのである。そしてこの年の総生産数は工場疎開がありながらも一一三四機に達した。

各飛行隊の練度は、三〇年代後半の粛清と、受領したばかりの新型機のため、極めて低いものだったが、それでも一例を挙げれば第74襲撃飛行連隊の十月の出撃は約七〇〇回、戦車五五両を撃破したとされる。

だが、Iℓ-2は出撃のたびに大損害を出した。敵制空権下での出撃は、後部機銃が無いことから、簡単に敵戦闘機の至近距離からの攻撃を許してしまったのだ。このため、実戦部隊からはIℓ-2無用論まで出る始末であった。

しかし、かつてIℓ-2のライバルであったSu-2軽爆撃機や、ポリカルポフR-Zの後継であるニェーマンR-10軽襲撃機は、ドイツ軍に損害を与えることすらできなかった。

また、縦深戦略のために必要とされたディープ・アタック能力は、ドイツ軍の進撃を遅らせる数少ない手段であった。例えば、装甲部隊そのものでなくても、その後方の補給隊を撃破すれば、それだけで装甲部隊の足を止めることができる。Iℓ-2はまさに「黒パンの如く」必要とされたのである。

一方イリユーシンは、お蔵入りになった複座タイプの改良に取り組んでいた。改良のために前線指揮官も招致され、戦訓の聞き取りも行われている。この複座型が成功するかどうかは、結局――あらゆる乗り物がそうであるように――エンジンの問題であった。だが、そのエンジンに目途がついたのだ。

低空域での出力向上を目指したIℓ-2用ともいうべき新型のAM-38Fエンジン（一七二〇馬力）が実用化され、これによって後席が復活。防御用の一二・七ミリ機銃を備えることができた。出力向上により操縦席後方の防弾板の厚みもさらに増加した。もっとも後席は上半身が防弾板の外に露出していて、兵士たちに「懲罰配置」と評された。

Iℓ-2Mと呼ばれるこの複座型の採用とこれまでの実績により、Iℓ-2無用論は無くなった。さらに一九四二年冬には、決定版ともいえるM-3*が登場する。同機は、飛行性能を向上させるため主翼の外側三分二に後退角が付けられ、二〇ミリ機関砲がNS-37三七ミリ機関砲に換装された。

NS-37機関砲は初速九〇〇メートル／秒、弾丸重量七三五グラム。これは、四〇度前後の緩降下を行い、距離約五〇〇メートルで射撃すれば、ドイツ軍のティーガーI重戦車（四二年部隊配備）やパンター戦車（四三年のクルスク戦で登場）の上面装甲を貫通可能な数値である。

Iℓ-2M-3は四三年初頭、反撃に転じたスターリングラード戦線から実質的なデビューを果たし、続くクルスク戦でタンク・バスターとして活躍する。もっともクルスク戦でドイツ第3装甲師団の戦車を二時間で二*七〇両撃破したというのは多分に伝説ではある。しかし名機の条件である「時を得る」という意味からいえば、スターリングラードとクルスクという独ソ戦の転換点に、その決定版のM-3が間に合ったというのは運命的なものであった。

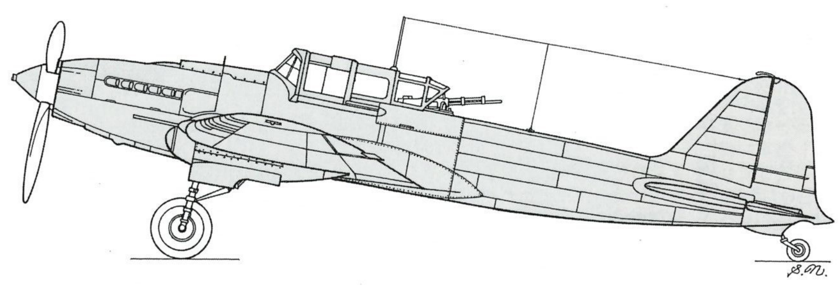
このクルスク戦ではIℓ-2のライバルが二機種、ドイツ空軍に登場する。Ju87急降下爆撃機に三七ミリ機関砲を搭載したタンク・バスターのG型と、三〇ミリ機関砲または五七ミリ機関砲を搭載したヘンシェルHs129襲撃機だ。

だが、この二者は総合的な性能でIℓ-2に抗すべくもなかった。

急降下爆撃機に高射機関砲を改造した機関砲を無理矢理取り付けたJu87Gの飛行性能は劣悪で、機関砲の装弾数も少なく信頼性も低かった。熟練パイロットのみが使いこなせる機体だったのだ。一方のヘンシェルHs129は対戦車用に開発された機体だったが、装甲重量がありすぎて操縦性が悪く、おまけに適当なエンジンがなかったために急遽フランス製エンジンが採用されたが、信頼性が低かった。

Ju87Gは、「空飛ぶ重砲」という、本来は遠戦兵器だったものを、無理矢理「対戦車砲」という近接戦闘兵器に仕立てたものであった。その意味からすると、対戦車任務に特化したヘンシェルHs129も、「対戦車砲」に過ぎなかったといえるであろう。しかし、Iℓ-2はドイツ軍のこれらライバルとは一線を画す兵器だった。独ソ戦の開始後、襲撃機には砲兵陣地と対空陣地への攻撃任務も付加されている。敵の部隊、とくに装甲部隊に対する攻撃を主に、襲撃機にはあらゆる任務が負わされたのである。それは地上戦における戦車の役割と同じであった。

Il-2 Mシュトルモヴィク 図＝野原 茂



全幅：14.6m
全長：11.6m
全高：4.11m
自重：4525kg
全備重量：6060kg
エンジン：1720馬力
ミクリンAM-38F
液冷エンジン
固定武装：23mm機銃×2、
12.7mm後部機銃×1、
7.62mm機銃×2
実用上昇限度：6000m
最大速度：370km／h
航続距離：685km

*M-3＝ソ連軍では単に「後退翼型」と呼ばれている。
*二七〇両撃破＝第３装甲師団の戦車数はクルスク戦開始時で90両。

Iℓ-2シュトルモヴィクは、装甲があるから「空飛ぶ戦車」なのではない。その任務ゆえに「空飛ぶ戦車」なのだ。

終焉と復活

とはいえIℓ-2は、以前ほどではなくても大きな損害を出し続けていた。たしかにその装甲は生残性を高めたが、どだい鈍足の対地攻撃機である。戦闘機にかなう術はない。第二次大戦中のIℓ-2の喪失数は約五〇〇〇機という。彼らが最大に能力を発揮するには制空権の確保が必要不可欠であった。

その機会は、一九四四年六月にやってきた。大攻勢「バグラチオン」作戦である。

この作戦でソ連軍が前線に集中した航空機は約五三〇〇機。このうち一〇〇〇機前後がIℓ-2だったと思われる。これを食い止めるドイツ軍戦闘機は、本土防空のために戦力を抽出されて、一六〇機以下でしかなかった。

味方戦闘機の制空権下、Iℓ-2は前線からその後背地まで、あらゆる攻撃を行った。こうしてドイツ軍は防御の骨幹であった砲兵を潰され、装甲部隊も空からの脅威の前に拘束されて、ドイツ軍最大の武器である機動力を失った。戦闘機によるコルドン・サニーテル（防疫線）が敷けなければ、黒死病の猖獗（しょうけつ）は防げない。

全縦深への火力発揮による拘束と機動による殲滅。縦深戦略に忠実に行われたソ連軍の攻勢が終了したとき、かつてモスクワ門前にまで迫ったドイツ中央軍集団は地上から姿を消していた。

この年、Iℓ-2は生産を終わり、より航空機として洗練されたIℓ-10へとバトンを渡す。だが、一九四四年は襲撃機が兵器として終わりを迎える転換点でもあった。大馬力エンジンを搭載し、大きな武装と大量の爆弾を搭載できるようになった戦闘機が、襲撃機の任務を肩代わりできるようになったからだ。

西部戦線ではアメリカのP-47サンダーボルトやイギリスのタイフーンが、東部戦線ではYak-9戦闘機が、ヤーボ（ドイツ語で戦闘爆撃機の略称）として恐れられた。スターリングラード戦でデヴューした主力戦闘機yak-9には、対戦車用として三七ミリ機関砲を搭載した型と、四七ミリ機関砲を搭載した型が存在する。

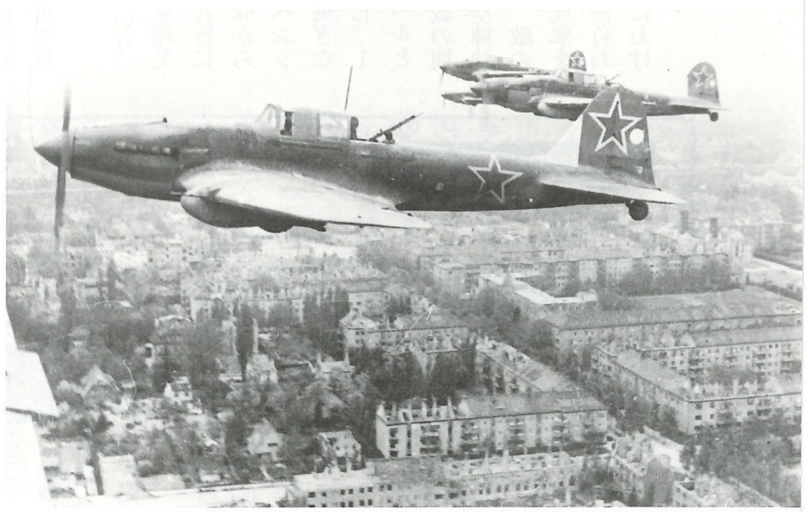
Iℓ-2シュトルモヴィクは、航空技術史の分野で位置づけるならば、発展途上のレシプロ機の限界ゆえに生まれ、レシプロ機の完成とともに消えた異形の機体といえるであろう。そしてそれを生み育てたのがソ連軍の縦深戦略であった。

ソ連軍は一九八〇年代に入って再びSu-25という襲撃機を制式化するが、それはIℓ-2のような装甲重襲撃機ではなく、ポリカルポフR-5の系譜に連なる、より汎用性が高い軽襲撃機であった。

同じ縦深戦略であっても、大量の戦車と戦闘爆撃機、戦術核兵器を持つソ連軍には重装甲襲撃機はとくに必要ではなくなったのだ。

もしIℓ-2の後継を捜すとすれば、それはアメリカ軍のA-10サンダーボルトII攻撃機であろう。NATO軍の戦車戦力の劣勢を補うために開発されたこの機は、コックピットをチタン製のバスタブ型装甲で覆い、三〇ミリバルカン砲と七トン強の爆弾やミサイルを搭載する。

そして八〇年代に入り、アメリカ軍が空地統合の縦深攻撃と機動戦を主眼とする、あたかもソ連軍の縦深戦略を思わせる「エア・ランド・バトル・ドクトリン」を生み出すに至って、同機は欠くべからざる兵器となった。そう、かつてのIℓ-2シュトルモヴィクのように、である。



都市部上空を飛行中のIℓ-2編隊。第2次世界大戦においてソ連の勝利に貢献した「シュトルモヴィク（襲撃機）」という機種は、分類としては戦後なくなった。しかしその性格は、アメリカ空軍のA-10攻撃機や、攻撃ヘリコプターなどに受け継がれている。

〈参考文献〉Bill Gunston『THE OSPREY ENCYCLOPEDIA OF RUSSIAN AIRCRAFT 1875-1995』(OSPREY AEROSPACE)／Hans-Heirl Stapfer『Il-2Stormovik in action』(Squadron／Signal)／教育総監部編『赤軍戦法研究ノ参考』(昭和７年)／日本陸軍偕行社編『ソ軍戦闘法図解続編１、同終編』(昭和18年)／八巻芳弘「"赤い星が生まれた"ソ連空軍概史」『航空ファン1990年２月号、５月号』(文林堂)

Event Calendar

2006年全国イベントカレンダー ◆

だんだんと暑さも和らぎ、秋の行楽シーズン到来!
夏とはひと味違うイベント巡りを！

9月 September

◆特別展「日本のビールー横浜発 国民飲料へー」（神奈川県）
開催中～9月10日（神奈川県立歴史博物館）
明治維新直後から横浜・山手の外国人居留地で本格的な国内生産が始まった日本ビール産業のあゆみを、当時の日本経済の動きと共に見ることができる。ミュージアムでは各種ビールも販売されている。近隣の飲食店では、ビール１杯無料等のサービスが受けられるイベントを開催中。
問い／神奈川県立歴史博物館
TEL 045-201-0926

◆政宗公まつり（宮城県）
9月9日～10日（大崎市）
仙台青葉城跡にあった「政宗平和像」が昭和39年に伊達政宗ゆかりの地、岩出山に移されたことを契機に始まった岩出山の歴史を偲ぶ祭り。戦国時代の武者姿を再現した勇壮な武者行列がほら貝の音とともに行進する様は壮観の一言。
問い／大崎市岩出山総合支所産業振興課
TEL 0229-72-1215

◆三沢基地航空祭（青森県）
9月10日（航空自衛隊三沢基地）
ブルーインパルスによる展示飛行を始め、三沢基地所属機や日米の各種航空機によるデモフライト、地上での各種訓練や主要装備品展示などが行われる。展示機数も国内の航空祭の中ではダントツに多いので、航空ファンなら見逃せない。
問い／航空自衛隊第3航空団渉外室報道班　TEL 0176-53-4121（内線4256）

◆鶴岡八幡宮例大祭（神奈川県）
9月14日～16日（鶴岡八幡宮）
この祭りは文治3年の8月15日、放生会と流鏑馬が始行されたことが起源とされ、以来、絶えることなく800年の歴史と伝統が今に伝えられている。3日目に行われる鎌倉時代さながらの流鏑馬は必見だ。
問い／鶴岡八幡宮
TEL 0467-22-0315

◆2006航空祭in KOMATSU（石川県）
9月17日（航空自衛隊小松基地）
小松基地の航空祭は、日本海側で唯一の戦闘航空団である第6航空団所属機によるオープニング・フライトで幕を開ける。地上展示では各種自衛隊機や米軍機が並び、午後からはブルーインパルスの展示飛行も行われる。小松救難隊のU-125Aによる捜索救難デモといった、珍しい展示飛行もファンには嬉しい。
問い／航空自衛隊小松基地広報班
TEL 0761-22-2101（内線510）

◆晴明祭（京都府）
9月22日～23日（晴明神社）
晴明神社は平安時代の陰陽師、安倍晴明が祭神。22日の宵宮祭では古式豊かな御湯立神楽の奉納が行われ、23日の神幸祭では神輿の渡御が繰り広げられる。祭列には勇壮な少年鼓笛隊を先頭に獅子、四神稚児などが装いも美々しく供奉する。
問い／晴明神社
TEL 075-441-6460

10月 October

◆ペルシャ文明展ー煌く7000年の至宝ー
開催中～10月1日（東京都美術館企画展示室）
古くは先史時代の彩文土器から、7世紀に滅びたササン朝ペルシャの美術・工芸品まで、約200点の逸品でペルシャ文明を一望することができる。史上初の世界帝国として知られるアケメネス朝ペルシャの金銀製品などスケール大きな作品は、この展覧会最大の見どころだ。
問い／ハローダイヤル
TEL 03-5777-8600

◆ヘリコプターフェスティバル in ＴＡＴＥＹＡＭＡ（千葉県）
10月1日（海上自衛隊館山航空基地）
海上自衛隊のヘリコプターを中心に、陸上自衛隊や海上保安庁のヘリも参加して飛行展示が行われる。抽選で選ばれた参加者は体験搭乗ができるという特別イベントも開催される。また、館山湾に停泊する護衛艦も公開予定なので要チェック。
問い／海上自衛隊館山航空基地広報室
TEL 0470-22-3191（内線208）

◆歴史のなかの鉄炮伝来ー種子島から戊辰戦争まで―（千葉県）
10月3日～11月26日（国立歴史民俗博物館）
最近の研究で明らかになった鉄炮伝来の真相を始め、鍛冶職人の技術と社会や、幕末維新の動乱期における鉄炮の大きな変革を柱に、日本の3大鉄砲コレクションの展示など、開館以来研究と鉄砲資料充実に努めてきた集大成を見ることができる。11月4日には火縄銃の演武なども行われる。
問い／ハローダイヤル
TEL 03-5777-8600

◆弁慶祭（和歌山県）
10月6日～7日（田辺市）
弁慶ゆかりの闘鶏神社で行われる、弁慶に基づく時代祭り。源平合戦の際、熊野水軍を率いて出陣した様子を再現した演劇弁慶伝説は圧巻である。7日には紀州弁慶よさこい踊りや弁慶ゲタ踊り、花火大会なども盛大に催される。
問い／田辺商工会議所
TEL 0739-22-5064

◆ぎふ信長まつり（岐阜県）
10月7日～8日（岐阜市）
天下統一を目指した名将、織田信長の偉業を偲ぶ祭り。歴史が蘇える騎馬武者行列を始め、火縄銃三段撃ち、少年少女時代行列など華やかなイベントが催され、毎年多くの人々で賑わう。
問い／ぎふ信長まつり実行委員会
TEL 058-265-4141

◆マリア・テレジアとシェーンブルン宮殿展～名門ハプスブルク家の栄華～（京都府）
開催中～10月9日（京都文化博物館）
女性として初めてオーストリア・ハプスブルク家を継承したマリア・テレジアと、その家族の優雅な宮廷生活を、絵画や調度品類、衣装や宝飾品の数々を通して見ることが出来る。
問い／京都文化博物館
TEL 075-222-0888

◆名古屋まつり（愛知県）
10月14日～15日（名古屋市一円）
この祭りのメインイベント「郷土英傑行列」では、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三英傑のほか、今年は「功名が辻」の主人公である山内一豊とその妻千代も加わった総勢700人がパレードする。
問い／名古屋まつり協進会事務局
TEL 052-972-7611

◆戦国武者行列「若獅子蘭丸2006」（岐阜県）
10月15日（兼山町）
全国の公募の中から選ばれた参加者が扮する森蘭丸を始め、森一族の武将や姫、槍隊や弓隊など総勢60人の武者行列が町を練り歩く。
問い／兼山町商工会青年部
TEL 0574-59-2117

◆南総里見まつり（千葉県）
10月15日（館山市）
南総里見八犬伝の舞台となった館山市の祭り。里見義実一行を始め、各地から選ばれた八犬士や、祭りに華を添える山車・神輿が、メイン会場の北条海岸まで行列する。海岸では「戦国合戦絵巻」が繰り広げられ、祭りをより一層盛り上げる。
問い／館山市観光立市推進課
TEL 0470-22-3346

11月 November

◆入間基地航空際（埼玉県）
11月3日（航空自衛隊入間基地）
国産輸送機C-1による機動飛行は航空祭名物となっている。地上展示では航空自衛隊のほぼ全機が揃い、ブルーインパルスの飛行展示なども開催される。都心に近く交通のアクセスもよいので、家族連れにもおすすめ。
問い／航空自衛隊入間基地広報班
TEL 04-2953-6131（内線2317）

◆小江戸彦根の城まつり（滋賀県）
11月3日（彦根市）
天守閣や櫓、庭園が往時のまま残る彦根の城下町を舞台に、彦根藩13代藩主・井伊直弼の生誕日にあわせて行われる彦根市最大の祭り。メインイベントである「城祭りパレード」は“赤備え”と讃えられた彦根藩の家臣団や鉄砲隊、子供大名行列が城下を華やかに行進する。
問い／彦根観光協会
TEL 0749-23-0001

◆特別講座「お城の魅力を探る～日本100名城～」（東京都）
11月10日～1月19日・隔週金曜日（江東区カメリアプラザ５階）
今年選定された日本100名城を中心に、城郭の成り立ちや機能、魅力等をわかりやすく学べる講座が開催される。メイン講師は本誌「戦国の城」のイラストレーションでおなじみ香川元太郎氏。募集期間は9月10日～9月26日。受講料5000円。お申し込み・お問い合わせは下記まで。
問い／江東区地域振興会・亀戸文化センター　TEL 03-5626-2121

●日程・行事などは変更される場合もございます。お出かけの前に電話・ホームページなどでご確認ください。

Rekishi Gunzou

歴史群像 Back Number

買い逃がしたあの号、読みたくなった特集を手に入れるチャンス!

歴史群像バックナンバーのご案内

購入を希望される方は、希望する号を明記の上、代金+送料を現金書留にて下記の住所までお送りください。送料は1～2冊340円、3～4冊450円、5冊以上590円となります。数に限りがございますので、品切れの際はご容赦ください(No.55以前の号とNo.57、No.61、No.63、No.73は品切れです)。

お申し込み先 〒141-0022 東京都品川区東五反田1-22-1
五反田ANビル2F 学研「歴史群像バックナンバー係」
お問い合わせ 電話03-5447-2314「歴史群像バックナンバー係」



No.78 06年8月号 970円(税込)
〈カラー〉小石原城/イギリスコマンド部隊/敷設艦厳島/第四次十字軍/軍用拳銃の世界/アメリカ縦断軍艦紀行/WAVES
〈特 集〉マレー沖海戦/長宗我部戦記/太平天国の乱/潜水艦解体新書/九鬼水軍興亡記/クレメンス・メッケル/栄光のレジスタンス/地雷/スイス傭兵500年史/軍用ヘルメットほか
〈付録〉伊号潜水艦CG断面図解

No.56 02年12月号 930円(税込)
〈カラー〉五稜郭/近江鎌刃城/電纜敷設艦初島/巨大攻城砲/蘭英戦争/ドゥーリトル襲撃隊/国際観艦式
〈特 集〉エル・アラメイン/黒田如水の関ヶ原/日本海大海戦/エニグマへの挑戦/秋月vs.アトランタ/日本刀かく変化せり/ベトナム戦争Ⅱほか

No.58 03年4月号 930円(税込)
〈カラー〉海軍日吉台地下壕/伊那大島城/ポケット戦艦/ヘースティングスの戦い
〈特 集〉スターリングラード攻防戦/足利義昭の陰謀/スペイン継承戦争/人工港湾マルベリー/激闘熊本城/城破り/三別抄の乱/ハワイ併合/レッドバロンほか

No.59 03年6月号 930円(税込)
〈カラー〉大津島回天基地/遠州二俣城/駆潜特務艇第一号型/NBC偵察車/スーダン戦役/21世紀のアメリカ軍
〈特 集〉太平洋通商破壊戦/太田道灌合戦録/ナポレオン第一次イタリア戦役/参謀本部/スパイ・ゾルゲ/戦場弓術/義和団事件ほか

No.60 03年8月号 930円(税込)
〈カラー〉大阪砲兵工廠/近江宇佐山城/哨戒艇第一号型/氷山空母/カデッシュ戦車戦/靖國神社遊就館
〈特 集〉バトル オブ ブリテン/応仁大乱/北朝鮮建国史/鹵獲兵器物語/小牧長久手合戦/オルレアン攻防戦/イラク戦争への道ほか

No.62 03年12月号 930円(税込)
〈カラー〉本土決戦陣地/筑前立花山城/防空巡洋艦五十鈴/魚雷発射メカニズム/テュロス攻城戦/修武台記念館
〈特 集〉本土最終決戦/戦国本願寺/ペロポネソス戦争/戦車誕生/彰義隊/ドーバー海峡砲撃戦/イラク原子炉を破壊せよ/震洋㊅激闘録ほか

No.64 04年4月号 930円(税込)
〈カラー〉笠寺高射砲陣地/遠州高根城/軽巡大淀/カタパルト/バラクラヴァの戦い
〈特 集〉真・電撃戦/失われた奥州大決戦/フリードリヒ大王の七年戦争/海鷲たちの軌跡/航空偵察/検証・二二六事件/カポレットの戦い/アルジェリア戦争ほか

No.65 04年6月号 930円(税込)
〈カラー〉海軍鹿屋航空基地/下総本佐倉城/神川丸/戦車自動装填装置/ガウガメラの戦い/大坂城の防御施設
〈特 集〉沖縄航空決戦/王都百年戦争/大北方戦争/米ソ宇宙開発競争/軍用自転車発達史/ヒトラー専用車の謎/シベリア出兵ほか

No.66 04年8月号 970円(税込)
〈カラー〉広島原爆遺跡/強襲山中城/陸軍装甲艇/VTOL/マレンゴの戦い/死闘ツラギ/自衛隊50年史
〈特 集〉モスクワ攻防戦/大友帝国の落日/チンギス・ハーンのアジア遠征/幕末最強「佐賀藩兵」ほか
〈付 録〉飛龍全デッキCG復元

No.67 04年10月号 930円(税込)
〈カラー〉土浦海軍航空隊/上野名胡桃城/水雷艇千鳥/機関銃/ギリシャ独立戦争/ミズーリ就役/始皇帝軍団
〈特 集〉インパール作戦/宇喜多盛衰記/アメリカ独立戦争/M4シャーマン/決戦!倶利伽羅峠/戦国火薬考/北号作戦/チェチェン紛争ほか

No.68 04年12月号 930円(税込)
〈カラー〉上陸作戦/上杉軍道を行く/航空機用掩体/鳥羽伏見の戦い/海軍カレー物語
〈特 集〉パットン戦車軍団/遼陽会戦/アレクサンドロスを継ぐ者は誰か/空母戦術大研究/火縄銃のつくり方/グデーリアンもうひとつの素顔/サマール沖海戦ほか

No.69 05年2月号 1000円(税込)
〈カラー〉大和主砲塔/会津久川城/翼の進化論/リッサ沖海戦/戦国最強要塞名古屋城
〈特 集〉ソロモン1942/上杉謙信関東電撃戦/シュトゥーカ大研究/第四次中東戦争/中国通貨を偽造せよ/福島安正伝/酒保開け! ほか
〈別冊付録〉戦争遺跡ガイドⅡ

No.70 05年4月号 930円(税込)
〈カラー〉東京大空襲/越後荒砥城/砲艦橋立/ロビダの未来兵器/ブルゴーニュ戦争/硫黄島陥落/世界の戦争博物館
〈特 集〉ベルリン攻防戦/史伝明智光秀/春秋呉楚激突/帆走軍艦/八木アンテナと日本レーダー開発史/M1vs.レオパルト2/日本掃海隊ほか

No.71 05年6月号 930円(税込)
〈カラー〉大和ミュージアム/ドイツ空軍シークレットウエポン/上野根小屋城/志摩半島に遺された戦争遺跡/給油艦足摺
〈特 集〉「瑞鶴」出撃/中台紛争史/毛利・大友十五年戦争/戦国の大砲/F14vs.F15/サブマリナー24H/陸軍鉄道部隊/ケルベロス作戦ほか

No.72 05年8月号 1000円(税込)
〈カラー〉陸軍伊良湖試験場/仮装巡洋艦信濃丸/近江苅安城/バノックバーンの戦い/ナバホ暗号部隊/Warbirds誕生/日本銅像見聞録
〈特 集〉地中海補給戦/濃尾争乱記/アラビアのロレンス/日本の終戦工作ほか
〈付録〉昭和15年呉軍港

No.74 05年12月号 930円(税込)
〈カラー〉古墳城郭/下関要塞/ポワティエの戦い/実物大「大和」を体感せよ/バズーカvs.パンツァーファウスト
〈特 集〉第1次ソロモン海戦/村上水軍興亡史/ナポレオン帝国の崩壊/二〇三高地の真実/ソフィン戦争/装甲巡洋艦「筑波」への道ほか

No.75 06年2月号 1000円(税込)
〈カラー〉万喜城/空挺部隊/重雷装艦大井/ハーフトラック/インド大反乱/館山海軍航空基地/満鉄の車窓から
〈特 集〉マリアナ航空決戦/文祿大乱/ティムール/国産発動機開発史/ガトリング・ガン/八王子千人同心ほか
〈別冊付録〉海軍艦艇ガイド

No.76 06年4月号 930円(税込)
〈カラー〉エア・アパッチ/駿河丸子城/防護巡洋艦吉野/支援車両Now & Then/ケーニヒグレーツ/鋼鉄の虎/反射炉
〈特 集〉レニングラード攻防戦/越前朝倉興亡記/フレンチ・インディアン戦争/酸素魚雷は決戦兵器たりえたか/エセックス大研究/海軍軍縮条約ほか

No.77 06年6月号 930円(税込)
〈カラー〉パック・フロント/水口城/ICBM発射基地/丁型潜水艦/ブル・ラン1861/豪州本土を砲撃/戦国高野山
〈特 集〉日中航空戦/後北条氏の本土決戦/カイザーシュラハト/エアランド・バトル/ウルシー環礁/列車砲/神雷部隊出撃/アイヒマンを追え! ほか

※小誌は、定期刊行物ですので書店では最新号のみの販売となります。既刊の号は、お手数ですが学研「歴史群像バックナンバー係」まで直接お申し込みください。

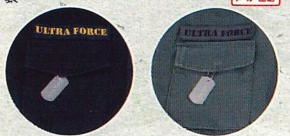
普段使いのグッズにも、信頼のスペックに裏打ちされた機能性と安心を!



❶ロスコ M65フィールドジャケット

価格	商品番号	
13,440円(税込)	6585751	(ブラックS)
	6685751	(ブラックM)
	6785751	(オリーブS)
	6885751	(オリーブM)
	6985751	(ウッドランドカモS)
	7085751	(ウッドランドカモM)

●サイズ(約):(S)バスト109×身丈87×裄丈87×袖丈60×肩幅55cm/(M)バスト119×身丈88×裄丈88×袖丈61×肩幅56cm●商品構成:本体●主な素材:(本体)綿100%<ヴィンテージ加工>●中国製 メーカー直送



ブラック　オリーブ

※モデルが着用しているのはウッドランドカモの例です。

過酷な条件での使用を前提としたミルスペック(軍用規格)に準拠した米国軍供給メーカー「米・ロスコ」社製のM-65フィールドジャケット。このM-65はミルスペック基準をクリアした仕様をそのままに、質感を出すためにヴィンテージ加工を施したモデルです。M-65は全天候型、オールシーズン対応の究極のフィールドジャケットとして1965年に登場して以来、40年以上もの間、世界130カ国に及ぶ各国軍隊が採用。機能性とスタイリッシュなデザインからタウンユースとしても圧倒的な人気を誇り、カジュアルなシーンでのアウターとしても最適です。

❷ロスコ トラベルポートフォーリオ

価格	商品番号	
3,990 円(税込)	7185751	(ブラック)
	7285751	(グリーン)

●本体サイズ(約):W14.5×D5×H21cm●仕様:開閉/フラップ型<フック留>内側/(前面)オープンポケット×1、(中面)オープンポケット×9、クリアーポケット×1、ファスナーポケット×1、ペンホルダー×1外側/ファスナーポケット×2、ベルトループ×1、着脱可能ショルダーベルト:(約)78-144cm●主な素材:(本体)綿100%●インド・中国製 メーカー直送

※モデルが着用しているのはブラックの例です。

タフな素材と優れた機能性を兼ねそろえたトラベルポートフォリオ。携帯電話から免許証・カード、ペンやライターなどの小物はもちろん、パスポートなどの貴重品も収納できるので海外旅行時などのアクティブな散策をしたい場合に便利な多機能性バッグ。ループにベルトを通せば、ヒップバッグにも!



アーミー調のグリーンもご用意しました。

中身が一目瞭然のクリアポケットなど機能性も抜群。

❸ダルース社 ミリタリーレプリカ・レザーボストンバッグ

カード決済のみ

価格	商品番号
59,850 円(税込)	2685782

●本体サイズ(約):W43×D26.5×H33cm●重さ(約):2200g●商品構成:本体、保存用袋●主な材質:(本体)オイルド加工フルグレインレザー・真ちゅう、ほか●アメリカ製 メーカー直送

第二次世界大戦当事、米国陸軍に入隊した兵士たちに支給され、抜群の使いやすさで多大な人気を誇ったボストンバッグをダルース社が完全復刻。最高級フルグレインレザーにオイルド加工を施し、見た目も肌触りも最高の一生モノのレザーボストンです。

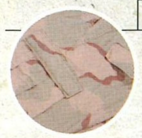


ガバッと大きく開き、あらゆるものを一度に詰め込むことが可能。

❹ロスコ パラトゥールーパー・カーゴパンツ

価格	商品番号	
7,140 円(税込)	5985751	(ウッドランドカモS)
	6085751	(ウッドランドカモM)
	6185751	(ウッドランドカモL)
	6285751	(デザートカモS)
	6385751	(デザートカモM)
	6485751	(デザートカモL)

●サイズ(約):(S)W68~81×H100×股下82cm/(M)W80~93×H114×股下82cm/(L)W92~105×H126×股下82cm●商品構成:本体●主な素材:(本体)綿55%・ポリエステル45%●中国製 メーカー直送



デザートカモ

※モデルが着用しているのはウッドランドカモの例です。

アメリカ軍パラシュート部隊が使用している8ポケットタイプのカーゴパンツを、形・デザインはそのままに、素材のみを変更してカジュアル用にリメイクしたレアアイテム!「米・ロスコ」社が手掛けた本格派です。ウエストサイズは調節可能で、裾もヒモで絞れるタイプなので、レングスを気にすることなく着用できます。

歴史群像SHOP

史実のロマンに浸りながら、休日のひと時を満喫できる遊びのカタログ。

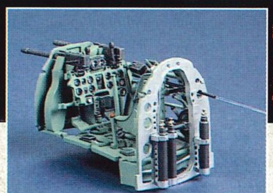
サウンド&アクションが楽しめる超リアルモデル登場!



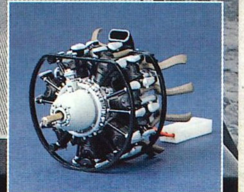
完成イメージ



9か所の灯火類も超高輝度発光ダイオードと光ファイバーにより点灯。



計器盤、シート、操縦桿およびフットバー、7.7mm機銃、そして無線管制器や酸素びんに至るまで、コックピット内部の再現性は感涙ものです。



プロペラの回転用には超小型モーターを使用。精密な再現を損なうことなく栄21型エンジンパーツの内部に組み込むことができます。

太平洋戦争の全期間を通して日本海軍の主力戦闘機として飛び続けた零戦。中でも大戦後半に登場した52型のサウンドとアクションを楽しめるプラスチックモデル組立キットがついに登場。最新のデジタル技術を駆使して実物の栄21型エンジン音を収録。展示台内部に収まる専門制御回路とスピーカーボックスにより、始動から停止まで各段階のエンジン音を再現、それと同期したプロペラ回転と翼端灯などの点灯を楽しめます。プロペラの回転にはエンジンパーツ内部に組み込む超小型モーターを使用し、各段階に合わせて回転数がリアルに変化します。翼端灯や室内灯など、合計9か所の灯火類は超高輝度発光ダイオードと光ファイバーにより点灯します。

TAMIYA

1/32海軍零式艦上戦闘機52型 リアルサウンドアクションセット

価格	商品番号
28,140 円(税込)	1785459

●本体サイズ(約):W344×D285×H140mm<台座含まず>●パッケージサイズ(約):W610×D410×H100mm●本体重さ(約):960g●商品構成:組立用キット、説明書(日本語)●主な材質:(本体)プラスチック・真ちゅう、ほか●日本製/田宮模型※単2アルカリ電池4本使用(別売)※別途、工具・接着剤・塗料(任意)が必要となります。

暑かった「あの日」を胸にきざむ 軍歌、戦時歌謡の大全集!



豪華解説書付きで戦中の詩歌の資料としても活用できる。

代表的な軍歌、戦時歌謡全185曲を収録。今回は軍歌、歌謡に加え乃木将軍の肉声や東郷元帥の朗読による「軍人勅諭奉載五十周年記念」、東條陸軍大臣の朗読による「戦陣訓」、火野葦平の朗読による「麦と兵隊」「土と兵隊」なども収録。また、陸軍軍楽隊指揮者・辻順治の解説による「兵営の一日」も。充実した豪華解説書および全歌詞と全明読、原稿掲載・解説付き(A4判・100頁)。楽曲の充実はもちろん、歴史的資料としても満足のいく大全集です。

軍歌 戦時歌謡大全集

価格	商品番号
20,388 円(税込)	1185469

●パッケージサイズ(約):W22.4×D48×H31cm●重さ(約):1340g●商品構成:CD×8枚<全185曲入り>、豪華解説書、収納BOX●主な材質:(パッケージ)紙、ほか●日本製 メーカー直送

1947年に創業し、最初のアイピースを製造して以来、59年以上にわたり光学製品を製造する「Bushnell」社。同社が米国警察関係者より「警察任務の遂行を妨げない充実した装備と携帯・操作が容易なフラッシュライト」の開発協力依頼を受け、誕生したライトが5つのモードと、最新のバッテリーインジケーターを搭載したこの「ブライター」。全長15.3cmの小型且つ軽量を図るためアルミボディーを採用。重さはわずか152g。放たれる光は、最新のLEDである「LUXEON」※注1を搭載。3ワット100ルーメンの強烈な光線は最長到達距離約4.8km。連続照射時間は約240分と耐照射時間性にも富んでいます。日常の生活シーンからアウトドア、災害時など活躍シーンは豊富です。

Bushnell
スーパーフラッシュライト ブライター

価格	商品番号
14,700円(税込)	7385751(ブラック)
	7485751(グレー)
	7585751(グリーン)

●本体サイズ(約):W3×D3×H15.3cm●重さ(約):152g●商品構成:本体・ストラップ・電池×2●主な材質:(本体)アルミ、ほか●中国製
※連続照射時間:約240分 メーカー直送

※注1:「LUXEON」とは? 集積化されたLEDチップに放熱器を組み込み、超高輝度ドライブを可能にしたLEDのこと。



通電時はプッシュ式の底部スイッチの「B」文字が点灯。

底部のスイッチを押すことでハイパワーライト→ミディアム→ローライト→SOS点灯→セーフティストロボ→待機を繰り返す。



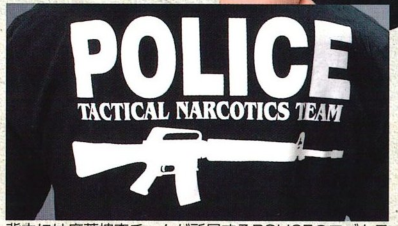
麻薬捜査チームのオフィシャルTシャツ、日本上陸!

映画などで男らしさとかっこよさに憧れる人も多いアメリカのTACTICAL NARCOTICS TEAM(麻薬捜査チーム)のメンバーが実際に着用しているオフィシャルTシャツが日本上陸とともに初登場!麻薬の情報をつかんだら、徹底的に捜査した上で検挙し自供に至るまで命をかけ取り組むメンバーが着用している本物です。真の漢のマストアイテムを、今すぐGET!

タクティカル ナーコティクス Tシャツ

価格	商品番号
3,990円(税込)	5785751(M)
	5885751(L)

●本体サイズ(約):(M)バスト97×身丈71×袖丈20.5cm/(L)バスト106×身丈72×袖丈21cm●商品構成:本体●主な素材:綿100%●企画:アメリカ/製造:ホンジュラス製 メーカー直送
※アメリカの規格のため若干大きめです。ご注意ください。



背中には麻薬捜査チームが所属するPOLICEのロゴとライフルを大きく背負う。

フロントの胸部にダイナマイトをデザインしたロゴマーク。

※実際に麻薬捜査チームのメンバーが身につけてるTシャツなので、アメリカ国内では絶対に着用しないでください。

ご注文方法 カタログコード 60902

カタログ有効期限 2006年10月31日(火)まで

PC/携帯共通 **http://shop.gakken.co.jp/** (24時間受付・無休)
携帯電話の場合、右のバーコードを対応機種で読み取るだけで簡単にアクセスできます。
※読み取り方法は各機種の取扱い説明書でご覧ください。損傷、汚れ破損、光の反射などによっては、読み取れない場合があります。

フリーコール **0120-92-5555**
※一部のIP電話回線からは繋がらない場合がございますので、ご了承下さい。
(携帯電話・PHS通話可能) 受付時間:平日9:00~21:00(土 18:00まで)日・祝日・年末年始を除く

送料について
1回のご注文総額が3,000円(税込)以上の場合、送料は弊社負担となります。
3,000円未満の場合は、1回当たり350円(税込)の送料が必要となります。配送は日本国内のみとなります。

保証書付きの商品について
配送の都合上、保証書への社印およびお買い上げ日の記入を省略させていただいております。万一、保証期間内に修理の必要が生じた場合は弊社までご連絡ください。

その他お願いとお知らせ
●商品の在庫切れの場合はご容赦ください。●本カタログ掲載商品の仕様、価格は予告なく変更される場合があります。●若干、実物と印刷の差が生じる場合があります。ご了承ください。●サイズには誤差があります。組立時間は大人が作ったときのおおよその目安です。●お客様のお申し込み内容や当社とのお取引きの状態等により、ご注文受付後にお支払い方法の変更のお願い、またはご注文をお断りさせていただく場合があります。

お届けについて
通常ご注文から7日程度でお届けします。 メーカー直送 商品は、10日程度かかる場合があります。 メーカー直送 商品と在庫商品を同時にご注文いただいた場合、後から配送される在庫商品が到着するまで13日程度かかる場合があります。●在庫商品に限り、お届け日・時間帯の指定が可能です。携帯サイトからご注文いただいた場合、及び メーカー直送 商品を含むご注文の場合はお届け日の指定は承っておりません。●離島等、代金引換がご利用いただけない地域があります。

お支払い方法・手数料について
●振込 商品に同梱する振込用紙で郵便局・コンビニエンスストアからお支払いください。メーカー直送品の場合は、商品と別に振込用紙のみ郵送します。メーカー直送品と在庫商品を同時にご注文いただいた場合、メーカー直送品を先に配送し、後から配送される在庫商品に振込用紙を同梱いたします。お支払いの際の手数料は、お客様のご負担となります。ご注文総額が5万円以上になる場合には、クレジットカード等でお支払いをお願いすることがあります。
●代金引換 宅配便のドライバーに商品と引き換えで、現金にてお支払いください。代金引換手数料として210円(税込)が別途必要です。メーカー直送商品をご注文いただいた場合と離島からのご注文の場合はご利用いただけません。
●クレジットカード VISA、Master、JCB、AMEX、ダイナースがご利用いただけます。
※携帯サイトからご注文の場合はご利用いただけません。
※カード決済のみマークがある商品はお支払い方法がクレジットカードのみとなります。

交換・返品について
商品の到着後10日以内に当社指定の方法でご連絡いただければ、交換・返品をお受けいたします。ただし、次の商品は交換・返品をお受けできません。
1.お届け後11日を経過した商品 2.お客様が汚損・破損された商品 3.一度ご使用になられた商品(CD・DVD・コンピュータソフトは開封した時点で、組立キットは組立を開始した時点で使用したものとみなします) 4.食品 5.その他注記付きの一部商品
なお、在庫の都合により、交換できない場合もあります。お客様都合による交換・返品送料は、お客様のご負担となります。弊社理由による交換・返品送料は弊社負担といたします。

お客様の個人情報について
当社は、お申し込みいただいたお客様の個人情報(氏名、住所、電話番号など)を以下に記した範囲内で利用させていただきます。 A.商品をお届けする目的で、その業務の委託先である配送会社に通知します。 B.商品代金をお支払いいただく目的で、その業務の委託先である代金回収代行会社に通知します。 C.当社商品・サービスのご案内、企画開発などへの利用をさせていただく場合があります。ご希望されない場合はお手数ですがご注文の際にその旨をお申し付けください。当社は責任をもってお客様の個人情報を管理いたします。
■当社のプライバシーポリシーはホームページをご覧ください。http://www.gakken.co.jp/privacypolicy/
■お預かりした個人情報の利用停止につきましては、下記通販事業部までご連絡ください。

販売元:株式会社学習研究社 通販事業部 (社)日本通信販売協会会員 JADMA 社団法人日本通信販売協会会員
〒141-0031 東京都品川区西五反田8-1-5 五反田光和ビル7F TEL:03-5719-1466 電話受付:10:00~17:00(土・日・祝日・年末年始を除く)



龍を従えた「商売の神様」としても有名な関羽像。龍が運気の高い気の流れを作りだし、その上に乗った関公が富と繁栄をもたらします。財をもたらしてくれるだけでなく、入ってくる邪気を手に持った「青龍堰月刀」で斬りつけ、退けてくれます。ビジネス運、財運上昇?!

龍上関公

価格	商品番号
23,520円(税込)	1685467

●本体サイズ(約):W15×D10×H23.5cm●重さ(約):2900g●商品構成:本体、付属刀(青龍堰月刀)●主な材質:(本体)真ちゅう、ほか●中国製

風水力を高める龍をあしらい あなたの運気を高めます!

龍脈を上下する龍が、水晶の球をつかもうとしている姿を見事に表現した、風水最高の龍の一つ。この像を置くことにより、「皇帝に仕える最高の品格を持つ龍」があなたの部屋に住み着き、幸運をもたらしてくれると言われています。運気上昇、開運招福、貴人招来間違い無し!? といわれる強い霊力の象徴である聖獣のモニュメントです。



金龍上山(人工水晶付)

価格	商品番号
12,600円(税込)	1485467

●本体サイズ(約):W10×D8.5×H13cm●重さ(約):1120g●商品構成:本体●主な材質:(本体)真ちゅう・人工水晶<セミクリスタル>、ほか●中国製

金龍上山特大(人工水晶付) カード決済のみ

価格	商品番号
71,400円(税込)	1585467

●本体サイズ(約):W21×D19×H31cm●重さ(約):8200g●商品構成:本体●主な材質:(本体)真ちゅう・人工水晶<セミクリスタル>、ほか●中国製

2006年9月現在

ますます充実のラインアップ

歴史群像

（株）学習研究社

Gakken

Magazine & Series & Books & Comics

Index

▶太平洋戦史シリーズ——118,119

▶欧州戦史シリーズ——120,121

▶歴史群像新書——122,123

▶歴史群像コミックス——124

▶学研M文庫——125

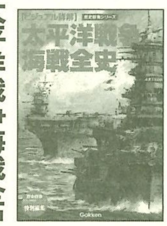
▶歴史群像シリーズ——126〜129

▶歴史群像シリーズDX（デラックス）——130

▶【決定版】図説シリーズ——131

●最新刊●　絶賛発売中!!

太平洋戦史特別編集
太平洋戦争海戦全史



歴史群像シリーズDX
よみがえる真説安土城



歴史群像コミックス
太平洋の武人



鉄十字の虎



超空の決戦③



新・現代戦史
メカニズム&射撃編
【図説】世界の銃パーフェクトバイブル③



【決定版】図説シリーズ
幕末 戊辰 西南戦争



歴史群像シリーズ
世界の戦争博物館



覇権大戦1945



戦国の勇者1



太平洋戦史シリーズ
日米空母決戦 ミッドウェー



新・歴史群像シリーズ
維新創世 坂本龍馬



信長・秀吉・家康



歴史群像新書
天破 三国志1



覇戦1



■店頭にない場合は、最寄りの書店にご注文下さい。〒145-8502 東京都大田区上池台4-40-5

書店にて絶賛発売中!!

定価1631～2100円(5%税込)

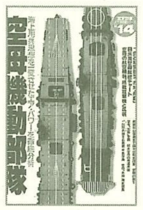
第11巻 大和型戦艦
巨大戦艦『大和』『武蔵』の実像に迫る!!



第13巻 翔鶴型空母
帝国海軍初の艦隊型大型航空母艦『翔鶴』『瑞鶴』のすべて



第14巻 空母機動部隊
海上用兵思想を一変させたエア・パワーを徹底分析



第17巻 伊号潜水艦
比類なき発展を遂げた艦隊随伴用大型潜水艦の全容



第20巻 大和型戦艦2
最新の模型・考証・資料で今甦る超超弩級艦の実相



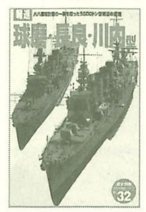
第28巻 日VS.米 徹底分析 陸海軍基地
太平洋をめぐる拠点争奪戦と戦略・戦術のすべて



第31巻 陸海軍試作戦闘機
烈風、震電、キ八三、キ九四……幻のつばさ①



第32巻 軽巡 球磨・長良・川内型
八八艦隊計画の一翼を担った5500トン型軽巡の変遷



第33巻 零式艦上戦闘機2
最新の考証とCGで現出する不朽の名機の雄姿



第34巻 帝国陸軍 戦車と砲戦車
欧米に比肩する日本の対戦車戦闘車両の全容



第35巻 甲標的と蛟龍
知られざる帝国海軍特殊潜航艇秘史①



第36巻 海龍と回天
知られざる帝国海軍特殊潜航艇秘史②



第37巻 帝国陸海軍 補助艦艇
総力戦に必要とされた支援艦艇群の全貌



第38巻 最上型重巡
軽巡から重巡へと変遷を遂げた傑作艦の足跡



【歴史群像】太平洋戦史シリーズ

第39巻 帝国陸軍 戦場の衣食住
糧食を軸に解き明かす〝知られざる陸軍〟の全貌



第40巻 烈風と烈風改
新資料を基に今明かされる『烈風伝説』の実像



第42巻 帝国海軍 一式陸攻
双発機の概念を凌駕した中型陸上攻撃機の真実



第44巻 重巡 古鷹・青葉型
斬新な設計と重兵装で列強海軍を驚嘆させた優秀艦の軌跡



第45巻 帝国海軍 真実の艦艇史
未発表写真と綿密な考証で明かされる秘められた新事実の数々



第46巻 四式戦闘機 疾風
大戦末期にベールを脱いだ陸軍航空隊の最終兵器



第47巻 利根型重巡
帝国海軍重巡の掉尾を飾った画期的設計の航空巡洋艦



第48巻 日本軍艦発達史
海戦術と兵装の進化に寄与した帝国海軍栄光の足跡



第49巻 沖縄決戦
太平洋戦争最後の激戦と沖縄県民の戦い



第50巻 戦艦「大和」
空前のクオリティーで再現！精密3DCG「大和」大特集



第51巻 帝国海軍 真実の艦艇史2
史料の精査と傍証の積み重ねで解き明かす定説の真偽と知られざる逸話の実相



第52巻 一式戦闘機「隼」
航続力と格闘戦性能に秀でた対戦闘機戦のスペシャリスト



第53巻 アメリカの空母
対日戦を勝利に導いた艦隊航空兵力のプラットフォーム



第54巻 戦艦「大和・武蔵」
ディテールを徹底検証！今明かされる巨艦の全貌



欠番の号は品切れです。

【歴史群像】W.W.II 欧州戦史シリーズ

WWII GREAT BATTLES OF EUROPE

待望の［第2次世界大戦］ヨーロッパ戦線の新シリーズ続々刊行!!

絶賛発売中!!

●B5判／174～190ページ／定価：各1680～1890円(税込)

Vol.1 ポーランド電撃戦
「中欧の大国」わずか四週間で消滅！「電撃戦」と「Z国防計画」を徹底分析！

Vol.2 西方電撃戦
英仏連合軍を壊滅させた本格的「電撃戦」の精髄を抽出分析!!

Vol.3 英独航空決戦
英本土上陸作戦の実相と史上最大の航空戦を徹底詳解！

Vol.4 バルバロッサ作戦
ヒトラー vs. スターリン 2500kmにわたる戦線で独ソ両軍大激突!!

Vol.5 北アフリカ戦線
英軍物量作戦を翻弄したロンメルの一翼包囲・迂回戦術を徹底図解！

Vol.6 大西洋戦争
ヴォルフ・パック vs. ハンター・キラー 連合軍シーレーンを巡る兵器システムの激突

Vol.7 クルスク機甲戦
東部戦線に咆哮する鋼鉄の猛獣たち!! 赤軍大反攻とマンシュタインの機動防御

Vol.8 ノルマンディー上陸作戦
「大西洋の壁」を打ち砕いた史上最大の統連合上陸作戦

Vol.9 アルデンヌ攻勢
ヒトラー最後の大攻勢「ラインの護り」作戦の実相に迫る！

Vol.10 ベルリン攻防戦
独軍最後の電撃戦「春の目覚め」作戦と帝都ベルリンを巡る死闘を徹底図解！

Vol.11 ドイツ装甲部隊全史Ⅰ
黎明編（1917～39）
A7V突撃装甲車両からチェコ製35(t)、38(t)戦車まで



Vol.12 ドイツ装甲部隊全史Ⅱ
攻勢編（1939～43）
Ⅲ、Ⅳ号戦車からティーガーⅠ重戦車まで



Vol.13 ドイツ装甲部隊全史Ⅲ
衰亡編（1943～45）
Ⅴ号戦車パンターからヤークトティーガー、マウスまで



Vol.16 ソヴィエト赤軍興亡史Ⅲ
「大祖国戦争」後編（1943～45）
ジューコフの大反攻作戦と戦後「ソ連軍」の実相に迫る!!



Vol.17 武装SS全史Ⅰ
萌芽・台頭編（1933～42）
武装親衛隊のルーツと「政治的兵士」たちの実像



Vol.18 武装SS全史Ⅱ
膨張・壊滅編（1942～45）
最大八〇万の将兵を擁したナチス親衛隊最強の組織の全貌



Vol.19 ドイツ本土防空戦
英米爆撃機集団 vs. 独防空システム
「第三帝国」上空で繰り広げられた史上空前の航空戦の実像



Vol.20 ドイツ陸軍全史
カイザーの軍隊、共和国の軍隊からヒトラーの軍隊へ
「最強の軍隊」八〇年の歴史とその機構・実力・多様性



Vol.21 アメリカ陸軍全史
誕生からWWⅡまで!! 「星条旗の陸軍」一七〇年の軌跡を詳解
参戦数年で枢軸国軍を凌駕した「世界最強の軍隊」の全貌



Vol.22 ヨーロッパ空挺作戦
「空飛ぶ歩兵」の八〇年の軌跡とその作戦・戦術・装備
「緑の悪魔」「赤い悪魔」「バッタの戦士」……主要国の空挺部隊の素顔に迫る!!



Vol.23 ［図説］Uボート戦全史
「灰色狼」の先進的メカニズムとその作戦・戦術を徹底詳解!!
一九世紀半ばの「燃料潜航艇」からⅦ型、XXI型、そして現代のUボートまで!!



Vol.24 ［図説］スターリングラード攻防戦
「青」作戦の発動から独第六軍の壊滅まで!! 独ソ両軍の戦略・戦術を大図解
ヴォルガ河畔の一大工業都市をめぐる「史上最大の市街戦」を徹底詳解!!



［歴史群像］WWⅡ欧州戦史シリーズ　特別編集
オールカラー保存版!!　戦史ファン必携の1冊!!
●B5判／定価：2100円

【決定版】［図説］ヨーロッパ地上戦大全
欧州戦線の帰趨を決した55の戦いを完全網羅!!



【決定版】［図説］ヨーロッパ航空戦大全
38の航空戦と13か国の主力機を完全網羅!!



Modern Warfare MW　歴史群像シリーズ 新・現代戦史!　定価：各1995円



［図説］中東戦争全史

The Arab-Israeli Wars 1948～

パレスチナの地を巡るアラブ＝ユダヤ激闘の軌跡

［図説］湾岸戦争

The Persian Gulf War 1990-91



多国籍軍 vs. イラク軍!!
ペルシャ湾岸（クウェート）の砦を巡る210日間の攻防

［図説］最新 世界の特殊部隊

SPECIAL OPERATIONS FORCES OF THE WORLD



非正規戦、対テロ任務、破壊工作、情報収集……。
軍・警察エリートたちの任務、装備、そして現在を徹底詳解!!

Modern Warfare MW

［図説］世界の銃 パーフェクトバイブル

The Perfect Bible of World's Guns



銃の歴史・分類・メカニズムを徹底詳解!!

B5判／182頁／定価2100円(税込)

［図説］世界の銃 パーフェクトバイブル②

The Perfect Bible of World's Guns-2



［中級編］
銃のすべてをさらに詳しく徹底図解!!

B5判／190頁／定価2100円(税込)

Modern Warfare MW　学研［歴史群像］シリーズ　《絶賛発売中!!》　B5判／定価：各2100円(税込)

［図説］ドイツ戦車パーフェクトバイブルⅠ



第一次大戦型からチェコ製戦車、Ⅰ～Ⅳ号戦車までを大図解!!

●カラー特大企画　**第二次大戦型［現存］ドイツ戦車探訪記**　ムンスター、コブレンツ、ソミュール、ボーヴィントン……今も生きるドイツ戦車を徹底詳解!!／**［図説］ドイツ戦車の基本の「き」**　ドイツ軍の戦闘車両の種類と役割、ネーミングの法則、塗装とマーキングの変遷をわかりやすく解説!!　●3大徹底図説　**ドイツ戦車のテクノロジー**　人員・機器の車内配置から駆動系、操向系まで!!　その技術の詳細に迫る!!／**ドイツ戦車の内部はどうなっているのか**　超詳細イラストで見るⅣ号戦車G型の砲塔と戦闘室の内部／**ドイツ戦車はこうして造られる**　開発要求から設計、モックアップ製作、部品生産から組み立て、納品まで!!　●特大付録　**ドイツ戦車［詳細］発達チャート**　●【系列別徹底ガイド】第一次大戦型、両大戦間期型からⅠ～Ⅳ号戦車までの発達史　●【軍装】ドイツ戦車兵の軍装　WWⅠ～現代　●【検証】ドイツの工業技術力と戦車生産現場の実像／戦車の側から見たドイツ軍の機甲戦術　**ほか充実企画満載!!**

［図説］ドイツ戦車パーフェクトバイブルⅡ



Ⅴ号戦車パンター、Ⅵ号戦車ティーガーからレオパルト1、2までを大図解!!

●カラー特大企画　知られざるドイツ装甲部隊指揮官の教育機関　**ムンスター機甲学校徹底取材**
●カラー特別企画　**史上最強の主力戦車［徹底解剖］レオパルト2A6**　●徹底検証　**ドイツ戦車系列別徹底ガイド**　Ⅴ号戦車パンター系列／Ⅵ号戦車E型ティーガーⅠ系列／Ⅵ号戦車B型ティーガーⅡ系列／その他の戦車／レオパルト1、2系列　●2色図説　ティーガーⅠの運用マニュアル「ティーガーフィーベル」を読む／シミュレーションで理解する［イラスト図解］ドイツ装甲部隊の戦術／米英ソ連軍はドイツ装甲部隊といかに戦ったか［図説］連合軍の戦車運用理論と対戦車戦術　●技術解説　ドイツ戦車のテクノロジー(Part2)戦車砲／砲塔／装甲／サスペンションほか　●検証　①汎用主力戦車はいかに生まれたか／②グデーリアンの知られざる素顔　●特別付録　**ドイツ戦車［詳細］発達チャート**
ほか充実企画満載!!

歴史群像新書の最新刊

戦国の勇者①

真田軍団強襲す！ 新シリーズ！



津野田幸作

信長、三河に死す！

真田昌幸の鬼謀、ついに開く！「織田信長を倒すは、我にあり!!」新・小牧長久手の戦い勃発す！　果たして天下の趨勢は如何に!?

覇権大戦1945

B29ソ連極東制圧作戦　新作!!



高貫布士

大和の主砲、ソ連極東攻勢の火蓋を切る!!

1945年、連合国軍がベルリンを占領。だが、英米占領軍にソ連が攻撃を仕掛け事態は一変。英米両国は日本に対し驚愕の提案を…！

覇　戦①

信長の遺産　新シリーズ！



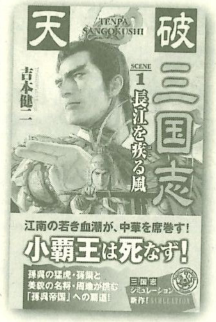
仲路さとる

家康の息の根を止めろ！

長久手において、羽柴秀吉に大敗北を喫する徳川家康……。だが予想外の罠が、秀吉の行く手に待ち受けていた！　果たして、信長の遺産は誰が獲るのか!?

天破 三国志①

長江を疾る風　新・中国史シミュレーション！



吉本健二

小覇王は死なず！

江南の若き血潮が、中華を席巻す！　孫呉の猛虎・孫策と美貌の名将・周瑜が挑む「孫呉帝国」への覇道！　若さに溢れる軍団が、乱世の梟雄相手に繰り広げる熱き戦い！

荒鷲の艦隊　新シリーズ

原 俊雄　トラック諸島沖　大海戦!!

超弩級レーダー搭載艦「大和」始動!!

不沈要塞 播磨　新シリーズ

子竜 螢　出撃！ ガダルカナル①

大艦巨砲主義、ここに究まる!!　空前絶後の巨大戦艦が日本を救う！

真・大日本帝国軍 陸海統合の嵐④　完結

羅門祐人　大和、サンフランシスコ湾突入

強攻奇襲！　大和の主砲、サンフランシスコ湾に轟く!!

慶長疾風録③　完結

伊藤浩士　かぶき者、天下人をつくる！

家康との最終決着で慶次郎がみせた、驚天動地の大かぶき!!

覆 関ヶ原④　完結

小泉俊一郎　江戸城、大炎上！

禁断の策を弄じた家康、万全の陣を配す秀康、最終決着はいかに!?

続 関ヶ原④　完結

村田昌士　佐和山遥かなり

三成vs.家康、最後の戦い！　全兵力を結集した徳川軍を迎え撃つ！

新 真田大戦記③

竹中 亮　打倒！ 黒田如水

幸村vs.如水、天才軍師対決！　久留米城の死闘開始さる!!

天上の覇者②

神尾 秀　信長、動く！

信長、山崎の合戦で秀吉・光秀を撃破！　二人の命運は!?

絶賛発売中!!

定価 924～966円 (5%税込)

Rekishi Gunzo Books Gakken

歴史群像新書 既刊のご案内

定価：798～966円 (5%税込)

Rekishi Gunzo Books Gakken

分類	書名	巻	著者
本格近未来シミュレーション	200X年 日本中東戦争	全3巻	森 詠
本格近未来シミュレーション	日本世界大戦	全4巻	森 詠
大戦シミュレーション&アクション	覇権大戦1945		高貫布士
大戦シミュレーション&アクション	不沈要塞 播磨		子竜 螢
大戦シミュレーション&アクション	旭日 影の艦隊 転生空母 飛龍		胡桃 哲
大戦シミュレーション&アクション	日本中国開戦		喜安幸夫
大戦シミュレーション&アクション	烈穹のサムライ		中村ケイジ
大戦シミュレーション&アクション	暁の旭日旗 青島潜水艦基地潰滅作戦		安芸一穂
大戦シミュレーション&アクション	暁の旭日旗		安芸一穂
大戦シミュレーション&アクション	蒼空の盾 帝都防空戦1945		内田弘樹
大戦シミュレーション&アクション	鉄獅子の咆哮		内田弘樹
大戦シミュレーション&アクション	旭日の傭兵団 欧州動乱1947		陰山琢磨
大戦シミュレーション&アクション	欧州動乱1947		陰山琢磨
大戦シミュレーション&アクション	旭日の鉄騎兵 満蒙に吼ゆ！		陰山琢磨
大戦シミュレーション&アクション	旭日の鉄騎兵西へ		陰山琢磨
大戦シミュレーション&アクション	旭日の鉄騎兵		陰山琢磨
大戦シミュレーション&アクション	興国の楯 ニューギニア密林死闘編		林 譲治
大戦シミュレーション&アクション	興国の楯 ウエワク奪還作戦		林 譲治
大戦シミュレーション&アクション	興国の楯 必中！「愛国」超兵器作戦		林 譲治
大戦シミュレーション&アクション	興国の楯 ソロモン機動作戦		林 譲治
大戦シミュレーション&アクション	興国の楯 南海死闘編		林 譲治
大戦シミュレーション&アクション	興国の楯 通商護衛機動戦隊		林 譲治
大戦シミュレーション&アクション	蒼穹の烈風空戦録		中岡潤一郎
大戦シミュレーション&アクション	灼熱の翼	1	富永浩史
大戦シミュレーション&アクション	蒼穹の牙 独立飛行八八中隊		富永浩史
大戦シミュレーション&アクション	真・大日本帝国軍 陸海統合の嵐	全4巻	羅門祐人
大戦シミュレーション&アクション	帝国の決断 死闘篇	1～2	秋月達郎
大戦シミュレーション&アクション	荒鷲の艦隊		原 俊雄
大戦シミュレーション&アクション	史上最強の艦隊 死闘！カリフォルニア沖海戦		原 俊雄
大戦シミュレーション&アクション	史上最強の艦隊		原 俊雄
大戦シミュレーション&アクション	鋼鉄の雷鳴		奈良谷 隆
大戦シミュレーション&アクション	空母大戦		鋭電 力
大戦シミュレーション&アクション	鶴翼の楯	1～4	橋本 純
大戦シミュレーション&アクション	天空の富嶽	1～3	田中光二
大戦シミュレーション&アクション	天空の要塞	全3巻	田中光二
戦国シミュレーション	覇 戦	1	仲路さとる
戦国シミュレーション	新 戦国志	全3巻	仲路さとる
戦国シミュレーション	織豊禅譲誌		宇佐美浩然
戦国シミュレーション	天下三兵法		宇佐美浩然
戦国シミュレーション	覇戦 関ヶ原	上	桐野作人
戦国シミュレーション	信長帝王伝	1～2	桐野作人
戦国シミュレーション	戦国龍虎伝	1～2	中里融司
戦国シミュレーション	異戦 関ヶ原	全7巻	中里融司
戦国シミュレーション	覆 関ヶ原	全4巻	小泉俊一郎
戦国シミュレーション	覇 関ヶ原大戦記	1～2	青木基行
戦国シミュレーション	戦国維新 島津東征伝	1～3	荒川佳夫
戦国シミュレーション	戦国将星伝	全3巻	吉本健二
戦国シミュレーション	眩 関ヶ原	全5巻	吉本健二
戦国シミュレーション	反 大坂の陣	全4巻	吉本健二
戦国シミュレーション	燎原の覇者	全3巻	尾山晴紀
戦国シミュレーション	戦国の勇者	1	津野田幸作
戦国シミュレーション	戦国大乱	全17巻	津野田幸作
戦国シミュレーション	戦国武勇伝	1	百目鬼涼一郎
戦国シミュレーション	天上の覇者	1～2	神尾 秀
戦国シミュレーション	異説 太閤記	1～2	久住隈苅
戦国シミュレーション	関ヶ原燃ゆ！	全6巻	久住隈苅
戦国シミュレーション	続 関ヶ原	全4巻	村田昌士
戦国シミュレーション	真田異戦記	全5巻	村田昌士
戦国シミュレーション	覇 真田戦記	全4巻	神宮寺 元
戦国シミュレーション	新・真田大戦記	1～3	竹中 亮
戦国シミュレーション	織田大戦記	全10巻	竹中 亮
戦国シミュレーション	秘 独眼龍軍記	1～4	工藤章興
戦国シミュレーション	新 真田軍記	全7巻	工藤章興
戦国シミュレーション	信長 覇海～猛き波濤	1	橋本 純
戦国シミュレーション	慶長疾風録	全3巻	伊藤浩士
中国史シミュレーション	天破 三国志	1	吉本健二
中国史シミュレーション	叛 三国志	全4巻	仲路さとる

RGC 歴史群像コミックス 最新刊絶賛発売中!!

各A5判・定価1000円（5%税込）

好評発売中!!

鉄十字の虎　W.W.Ⅱドイツ軍重戦車大隊戦記

作／小林源文　畠山弘康　吉原昌宏 他

1942年8月のロシアでの初陣から1945年5月のベルリン陥落まで、ティーガーを擁するドイツ軍重戦車大隊は、常に戦闘の焦点に投入された！　戦野を蹂躙する〝鋼鉄の虎〟の咆哮に、すべての連合軍将兵が恐怖する！　待望のドイツ軍戦車アンソロジー！



太平洋の武人（サムライ）　帝国陸海軍実録戦記

作／もりやてつみ

1945年8月、日本敗戦。威容を誇った帝国陸海軍は消滅した。まさに太平洋戦争は、生命と財産の果てしない蕩尽であった！　だが、この国のために戦い、散った漢たちがいたことを、我々は忘れてはならない……。感動の太平洋実録戦記集!!



超空の決戦③　完結　満州侵攻ソ連軍を撃滅せよ！

原作／田中光二　作画／渡辺あきら

全3巻発売中!!

昭和20年9月、もう一つの日本では太平洋戦争は終結していなかった。平成の日本から派遣された自衛隊はレスキュー作戦を発動。米国の九州上陸作戦を撃退するが、米はついに原爆の開発に成功。帝都に最大の危機が迫る！

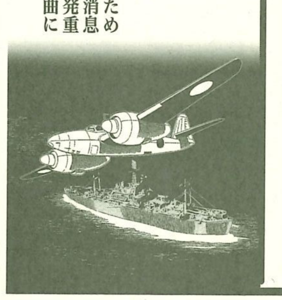


9月28日発売予定

天空の要塞①　奇跡の反攻！　超巨大重爆撃機出現!!

原作／田中光二　作画／細井雄二

1944年6月、日本軍を圧倒する米軍は、日本本土戦略爆撃のためマリアナ諸島に迫っていた。そんな折、米海軍の潜水艦が続々と消息を絶ち、サイパン・マリアナ沖の米部隊は日本軍の新型艦戦や四発重爆撃機の急襲を受けた。これは、日本側からの恐るべき反撃の序曲にすぎなかった…!!



- アフリカ軍団　作／小林源文
- 狼の砲声 限定版　作／小林源文
- カンプグルッペZbv 完全版　作／小林源文
- タイフーン作戦　作／小林源文
- ブラウ作戦　作／小林源文
- ツィタデル作戦　作／小林源文
- 興国の楯 1　原作／林 譲治　作画／木村 孝
- 超空の連合艦隊 1　原作／田中光二　作画／やいた克政
- 超空の艦隊 全4巻　原作／田中光二　作画／木村 孝
- 不沈戦艦紀伊 1~8　原作／子竜 螢　作画／神矢みのる
- 新・黎明の艦隊 全12巻　原作／檀 良彦　作画／細井雄二
- 黎明の艦隊 全10巻　原作／檀 良彦　作画／細井雄二
- 戦艦大和の挽歌　作／上田 信
- 灼撃のレイテ　作／上田 信
- 怒濤 戦艦大和　作／居村眞二
- 波濤 戦艦武蔵　作／居村眞二
- ベルリンの豹 ―W.W.Ⅱドイツ装甲部隊戦記―　作／たがみよしひさ
- 突撃砲シュトゥルムティーガー ―W.W.Ⅱドイツ軍対戦車自走砲戦記―　作／畠山弘康
- 真説 大坂冬の陣　原作／吉本健二　作画／田仲哲雄

学研M文庫［戦史シリーズ］Gakken　絶賛発売中

- **急降下爆撃**　ハンス・ルデル　高木真太郎 訳　「ソ連人民最大の敵」と呼ばれた独将校の戦闘記録
- **U・ボート977**　ハインツ・シェッファー　横川文雄 訳　ヒトラー生存説を生んだ独潜水艦南米入港の全貌
- **ドイツ参謀本部興亡史**（上）（下）　ヴァルター・ゲルリッツ　守谷 純・訳　参謀本部の成立から支配の時代を描き出した真実のドキュメント。
- **擲弾兵** パンツァーマイヤー戦記　クルト・マイヤー　松谷健二 訳　吉本隆昭 監修　武装SS野戦指揮官が綴る激闘の記録！
- **独ソ戦史 バルバロッサ作戦**（上）（中）（下）　パウル・カレル　松谷健二 訳　世界各国で大ベストセラーを記録した最高傑作！
- **独ソ戦史 焦土作戦**（上）（中）（下）　パウル・カレル　松谷健二 訳　世界各国で大ベストセラーを記録した『バルバロッサ作戦』続編！
- **中東戦争全史**　山崎雅弘　中東戦争の歴史と背景をわかりやすく解説する！
- **現代紛争史**　山崎雅弘　紛争の経緯と背景を分かりやすく読み解く一冊
- **海上護衛戦**　大井 篤　太平洋戦争時、シーレーン確保のために様々な研究と実践を体験した著者が、実例をもとにして綴る海上護衛戦の記録。
- **世界戦史②** 英雄かく戦えり　編集部 編　8つの戦いを描く、好評シリーズ第二弾！
- **日本戦史** 戦国編　河合秀郎　図版史料とともに怒濤の戦場を再現！
- **日本戦史** 戦国編② 激闘！大包囲戦　編集部 編　好評シリーズの戦国編、第二弾！
- **日本海海戦**　岡本好古　皇国の興廃この一戦にあり。日本はなぜに戦い、いかに戦ったのか！
- **信長の家臣団**　樋口晴彦　戦国下剋上の覇者・織田信長。彼に臣従した家臣団に焦点をあてた戦国ファン必携の書！
- **潜水艦隊**　井浦祥二郎　潜水艦作戦の名著が蘇った！　日本の潜水艦作戦の全貌が見えた！
- **戦艦で綴る太平洋戦史 十二戦艦物語**　川又千秋　日本海軍が世界に誇った巨大戦艦の栄光と戦闘の軌跡
- **最後の零戦**　白浜芳次郎　第二次大戦の大空の覇者・零戦。最後まで生き残った名パイロットの真実の戦闘記録
- **伊58潜帰投せり**　橋本以行　潜水艦の作戦行動は秘中の秘！知られざる真実の戦闘記録
- **［詳解］独ソ戦全史**　デビット・M・グランツ　ジョナサン・M・ハウス　守屋 純 訳　独ソ攻防戦の実相を資料をもとに克明に描く、衝撃の戦史！
- **日本の戦歴 パールハーバー** 真珠湾奇襲攻撃　平塚柾緒　我、奇襲ニ成功セリ！　パールハーバーの真実！
- **真説 大坂の陣**　吉本健二　果たして「大坂の陣」とは何であったのか？その真相を武将らの姿を通して、誰にでも判り易く解明する！
- **伊6潜サラトガ雷撃す**　稲葉通宗　伊六潜、伊三六潜の艦長が綴る壮絶なる潜水艦戦の記録
- **日本の秘密兵器** 陸軍編　海軍編　小橋良夫　兵器史上まれな秘密兵器の数々
- **湾岸戦記**　村松 剛　いま、世界が注視する中東戦域の現代史



◆歴史群像シリーズ84

満洲帝国

北辺に消えた"王道楽土"の全貌

日本が中国東北部の曠野に移民五〇〇万構想を
もって造った「満洲帝国」。清朝の廃帝・溥儀を担ぎ、
"五族協和の王道楽土"を標榜しながら建国から
十三年半たらずで消滅したこの国家はなぜ築かれたのか。
その実像はどのようなものだったのか。
"傀儡国家"とも"実験国家"とも評される巨大国家の全貌に迫る!

●主な内容

【特別折り込み】夢の超特急　満鉄「あじあ号」(満鉄路線図付き)／復刻　満洲帝国地図
【巻頭カラー】満洲写真帖／満洲国ポスター／愛新覚羅溥儀／現場再現　①張作霖爆殺事件　②満洲帝国郊祭式典　③国都新京／満洲国の切手
【第1部　日本の大陸進出】ドキュメント・満洲建国前史／満洲と馬賊／張作霖／満蒙独立運動／川島芳子／関東軍／国策会社"満鉄"の誕生／満洲帝国と日本の軍閥／満洲建国とメディア／
【第2部　満洲帝国の盛衰】ドキュメント・満洲帝国の誕生／石原莞爾／リットン調査団／満洲国の統治機構／満洲帝国と溥儀／前衛都市[新京]の黄昏／満鉄の再編／鮎川義介／「五族協和」の実像／満洲とアヘン／反満抗日運動／満映の真実／李香蘭／幻の満洲ユダヤ国家
【第3部　満洲帝国崩壊と戦後】ドキュメント・満洲帝国崩壊と戦後／張鼓峰事件とノモンハン事件／満鉄調査部／尾崎秀実／満蒙開拓団／帝国崩壊後の満洲／満洲人脈と戦後日本
【巻末データ】満洲関連人物事典

絶賛発売中!!

B5判・172ページ／定価：1575円(5%税込)

◆歴史群像シリーズ83

演義 三国志

智略冴え猛将奔る群雄絵巻

三英雄が義兄弟の契りを結ぶ桃園の誓い。
暴君董卓と猛将呂布の仲を裂く美女貂蝉。
赤壁を勝利に導いた周瑜・孔明・龐統らの計略…
お馴染みの三国志の名場面は
「正史」ではなく「演義」に描かれている。
演義を問い直すことで改めて三国志の魅力に迫る一冊!!

●主な内容

【巻頭カラー】絵巻三国志【ダイジェスト演義三国志　Ⅰ・Ⅱ】
【史劇三国合戦】黄巾の叛乱／虎牢関の戦い／下邳の戦い／官渡の戦い／長坂の戦い／赤壁の戦い／潼関の戦い／落鳳坡の戦い／合肥の戦い／定軍山の戦い／襄樊の戦い／夷陵の戦い／南蛮征伐戦／街亭の戦い／五丈原の戦い／蜀平定戦
【図解・演義計略】美女連環の計／駆虎呑狼の計・二虎競食の計／十面埋伏の計／八門金鎖の陣／草船借箭の計／連環の計／苦肉の策／氷城の計／八陣の図／空城の計
【図解・演義アイテム】青龍偃月刀／方天画戟／蛇矛／大斧／三尖刀／槊／飛刀／流星鎚／飛叉／鉄蒺藜骨朶／鉄鞭／青釭の剣／発石車／元戒／雲梯・塔天車／衝車
【三国志演義人物伝】劉備／関羽／張飛／諸葛亮／曹操／夏侯惇／張遼／司馬懿／孫権／周瑜／陸遜／甘寧／董卓／呂布／袁紹／貂蝉／二喬／孟獲／左慈／華佗ほか総勢62名
【演義が紡ぐ新境地】『三国志演義』の成立／中国四大奇書／日本人が創る新たな演義



絶賛発売中!!

B5判・180ページ／定価：1575円(5%税込)

新・歴史群像シリーズ　絶賛発売中!!

◆新・歴史群像シリーズ1

関ヶ原の戦い

日本史上最大の大会戦

太閤秀吉亡きあと、天下の覇権をめぐり対立する家康と三成。
全国の大名、武将を巻き込んだ天下分け目の大決戦は
混迷する日本の趨勢を決する!!

B5判・148ページ
1575円(5%税込)



◆新・歴史群像シリーズ2

真田幸村と大坂の陣

家康を震撼させた猛将の戦い

天下の趨勢は関ヶ原の戦いで決した。
徳川政権を樹立した家康はいよいよ豊臣の牙城に迫る。
が、その前に戦国最強の漢が立ちはだかる!!

B5判・148ページ
1575円(5%税込)



◆新・歴史群像シリーズ3

信長・秀吉・家康

天下統一と戦国の三英傑

席捲する信長、調略する秀吉、懐柔する家康——
剛毅と智謀で頭角を現し
戦国の騒乱を平定する!!

B5判・164ページ
1575円(5%税込)



◆新・歴史群像シリーズ4

維新創世　坂本龍馬

"日本の夜明け"を疾駆した快男児

政局の表舞台にはその姿を見せないものの
世情の数歩先を見据えるその眼差しは近代日本の青写真を描く——
日本国中を洗濯しようとした快男児の魅力に迫る!!

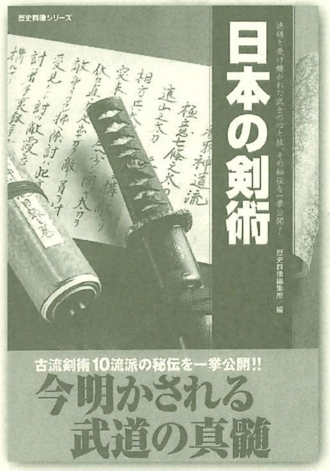
B5判・172ページ
1575円(5%税込)



定価:各巻1890円(税込)

今に伝わる武士の技と心、その真髄に迫る 歴史群像シリーズ『日本の剣術』

古来より連綿と伝わる剣術諸流派。長く秘伝とされ、門外不出であった技と理合を豊富なカラー写真で解説した画期的ムックのシリーズ。歴史群像取材班が各地に伝わる個性豊かな剣術諸流派に密着、その秘伝に迫った。歴史、時代劇、時代小説をより深く理解するのにも役立つシリーズだ。剣術経験者は納得、未経験者は目から鱗の解説に活目されたい。



B5判／172ページ

日本の剣術

【カラー解説掲載流派】　天真正伝香取神道流／鹿島新當流剣術／柳生新陰流兵法剣術／小野派一刀流剣術／兵法二天一流剣術／示現流兵法剣術／薬丸自顕流剣術／神道無念流剣術／天然理心流剣術／北辰一刀流剣術

【その他の特集】　再現検証、戦国実戦格闘術／斬れる！これが日本刀だ／日本刀刀装講座　これが薩摩拵だ／主要剣術流派系図／日本刀かく変化せり／剣道範士、森島健男インタビュー 他

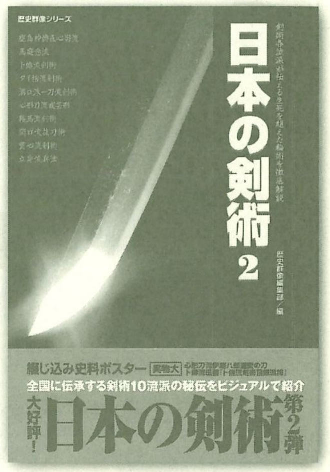
全国書店にて大好評発売中!!

日本の剣術 2

【カラー解説掲載流派】　鹿島神傳直心影流／馬庭念流／卜傳流剣術／タイ捨流剣術／溝口派一刀流剣術／心形刀流武芸形／鞍馬流剣術／関口流抜刀術／貫心流剣術／立身流剣術

【その他の特集】　全日本居合道大会レポート／全日本剣道選手権大会レポート／剣術はどのようにして剣道となったか／愛刀を拵えてみよう／北辰一刀流玄武館物語 他

【綴じ込み特別付録】　実物大『伊庭八郎遺愛の刀』『卜傳流目録追加』史料ポスター



B5判／176ページ

I

築城から読み解く戦略と戦術



歴史群像で好評連載中の戦国の城が一冊に！

戦国の堅城

定価:各巻1900円(税別)

遠江 諏訪原城／近江 宇佐山城／越後 荒砥城／上野 名胡桃城／会津 久川城／安芸 亀居城／会津 馬入峠の塁／下総 本佐倉城／近江 小谷城／上野 岩櫃城／陸奥 南部根城／富田城攻防戦／韮山城包囲戦／山中城攻城戦／上田城防衛戦／戦国最強 名古屋城

山科 本願寺／近江 観音寺城／武蔵 杉山城／武蔵 松山城／近江 鎌刃城／遠江 二俣城／相模 三崎城／遠江 田中城／信濃 大島城／武蔵 滝山城／三河 長篠城／豊前 長野城／順天城／伏見城／豊前 鷹取城／丹波 篠山城

絶賛発売中!!

II

戦略・戦術に応じた多彩な城郭群



店頭にない場合は書店にご注文ください。

◆歴史群像シリーズ特別編集

【決定版】図説 日本刀大全

決定版・図説シリーズに待望の日本刀が登場！日本刀に興味はあってもなかなか手が出せなかった方に最適の入門書。刀剣の歴史や部分名称解説といった基本だけでなく、刀の買い方・製作過程なども大紹介！もちろん国宝級の名品もオールカラーで見せるファン必携の1冊!!



●主な内容

【巻頭折込】イラスト図解・刀の名称と構造／実物大刀剣
【名刀鑑賞】国宝級の名刀を観る
【刀剣変遷の歴史】刀剣の誕生／直刀から彎刀へ／刀工流派の発生／武家の太刀／公家の太刀／打刀の登場／大小の刀
【刀剣製作の実際】匠の仕事と道具／日本刀ができるまで
【刀装具の美】拵解剖／鐔と三所物／柄巻・下緒・柄糸／太刀を佩く・刀を差す・刀を掛ける
【名刀・名工列伝】名工伝／もののふと刀／妖刀伝
【刀剣鑑賞の手引き】刀の鑑賞法と手入れ法／刀の買い方／今買える名品／刀剣用語辞典　ほか

絶賛発売中!!　四六変型判・144ページ　定価:2205円(税込)

◆歴史群像シリーズ特別編集

【決定版】図説 日本武器集成

刀槍・銃砲から手裏剣までオールカラーで徹底網羅!!

図説シリーズに待望の武器集が登場!!
刀・槍をはじめ弓、火縄銃、手裏剣などの
変わり武器まで一挙掲載！
「歴史群像シリーズ」で好評を得た実験・検証も
ふんだんに取り入れたファン必携の1冊!!

●主な内容

【掲載武器】刀剣／槍・薙刀／弓矢／鉄炮／忍具(手裏剣・忍び刀ほか)／変わり武器(鎖鎌・十手ほか)
【構成】イラスト図解・武器の基本構造／種類と変遷／効果的な使い方／実験・検証
【関連記事】櫓と防御施設／馬と馬具／武器の差異と勝敗の関連／新解釈・武器と軍装の変遷史
【特別折込】主要武器寸法比較表／武具・武装変遷年表



絶賛発売中!!　オールカラーB5判・168ページ　■2100円(税込)

◆歴史群像シリーズ特別編集

【決定版】図説・江戸三百藩「城と陣屋」総覧 東国編 西国編

絶賛発売中!!



東国編・西国編　各巻ともオールカラー／160ページ／定価：1890円（税込）

わが村・わが町のお城がわかる! 総計335箇所の近世城郭・陣屋を網羅した決定版ガイド

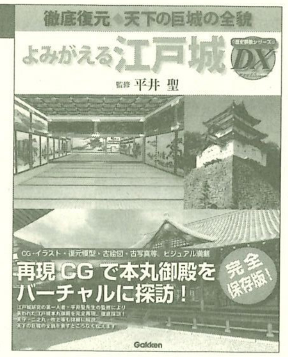
江戸幕藩体制下に存在した近世城郭・陣屋を徹底的に網羅した画期的お城ガイド。将軍家や大藩の城のみならず、知られざる城・陣屋も含め、総計335箇所をオールカラーで徹底紹介。いわゆる「名城集」的な集め方とはまったく異なる、これまでにない近世城郭集です。

現状写真とアクセス・マップに加え、領主の石高・家格・家紋や入封時期、支藩・支城関係等のデータも充実。お城ファンのみならず、江戸大名や幕末史に興味のある方、あるいは「わが町のわが城」が知りたいという郷土史ファンにも、資料集としてお勧めです。

歴史群像シリーズ・デラックス第1弾　徹底復元・天下の巨城の全貌

よみがえる江戸城

監修＝平井　聖
定価：2310円（税込）
菊倍判・オールカラー・144ページ



CGでよみがえる江戸城本丸御殿!

江戸城研究の第一人者・平井聖先生の監修により失われた江戸城本丸御殿を完全再現!
将軍の政務の場であり、日常の生活の場でもあった本丸大御殿を、玄関・大広間から白書院・松之廊下・黒書院から大奥に至るまでCG再現でバーチャルに探訪。また、本丸御殿のみならず、天守・二の丸・吹上等も詳細に解説、徳川将軍が君臨した天下の巨城の全貌を余すところなく伝えます。

歴史群像シリーズ・デラックス第2弾　徹底復元・覇王信長の幻の城

よみがえる真説安土城

監修＝三浦正幸
定価：2310円（税込）
菊倍判・オールカラー・144ページ



通説を揺るがす安土城研究の最前線!

わずか数年間でこの世から姿を消した安土城は、空前絶後の迷宮だった。
城郭建築研究と文献史料の徹底研究による最新の安土復元案を、天主をはじめ御殿・黒金門から安土山全景まで、CGでリアルに再現。さらに最新の発掘成果や、これまでの研究史に現れた様々な天主復元案も併せて掲載。覇王信長の幻の城の全貌がこの一冊でわかる!

歴史群像シリーズ特別編集

歴史群像シリーズがオールカラーでおくる図説の決定版!　既刊10冊、大好評発売中!!

戦国武将がすぐ見られるビジュアル事典 【決定版】図説 戦国武将118

全国の戦国武将全118人の肖像・家紋・印章・花押・言葉・軍旗を完全網羅! 戦国を駆け抜けた武将たちのデータ大集合!



B5判・192ページ
定価：1995円（5%税込）

有名武将の名品から足軽胴まで戦国甲冑一挙掲載! 【決定版】図説 戦国甲冑集

有名武将の当世具足から変わり兜、足軽胴までを網羅した一冊。甲冑変遷史や各部の構造などの解説も充実した戦国甲冑本の決定版!



B5判・184ページ
定価：2205円（5%税込）

変わり兜から隠れた名品まで甲冑ファン必携の決定版! 【決定版】図説 戦国甲冑集Ⅱ

オールカラー戦国甲冑本第二弾! 今度は兜を極める! 兜の変遷史から各部の構造・立物の種類を図解を交えて解説するほか、技術の粋を尽くした江戸甲冑も登場!



B5判・178ページ
定価：2205円（5%税込）

「倭は国のまほろば」から「堪へ難キヲ堪へ」までウンチク満載!! 【決定版】図説 名言で読む日本史人物伝

日本の歴史を彩った249の名言・名句を取り上げ、その言葉を残した人物や背景を紹介! ヴィジュアル情報を満載した歴史ファン必携の人物・名言事典!!



B5判・208ページ
定価：1995円（5%税込）

干戈の響きが蘇るビジュアル戦国史 【決定版】図説 戦国合戦集

数々の戦場を復元して大好評を得てきた「歴史群像シリーズ」の復元イラストを一挙に集大成! 戦国合戦が見て楽しめる!



B5判・192ページ
定価：1995円（5%税込）

川中島から島原の乱まで徹底網羅の大パノラマ集 【決定版】図説 戦国合戦図屏風

開いて納得! 折り込み・観音開きを駆使した手法でかつてないワイド画面を実現。あの武将の名勝負が、歴史的な一戦が色鮮やかに甦る!!



B5判・192ページ
定価：2100円（5%税込）

幕末維新オールカラー人物データファイル! 【決定版】図説 幕末志士199

幕末ファン必携! 尊攘浪士・討幕志士から天皇・公家・新選組・文化人・女性など幕末人物199人を網羅したデータブック!!



B5判・208ページ
定価：1995円（5%税込）

これぞ決定版! 新選組史跡パーフェクトガイド!! 【決定版】図説 新選組史跡紀行

早春の多摩から厳寒の北海道まで、新選組の足跡を丹念に辿ったガイドブックがついに登場! 239カ所もの史跡が撮り下ろしオールカラー写真で色鮮やかに甦る!!



B5判・200ページ
定価：2100円（5%税込）

源平合戦オールカラー人物データファイル! 【決定版】図説 源平合戦人物伝

平氏、源氏の一族郎党から、それを取り巻く貴族、天皇、法皇、女性などを一挙に紹介! 貴族の世から武士の世へ、大転換を織りなす人物模様が浮き彫りになる一冊!!



B5判・192ページ
定価：1995円（5%税込）

刀槍・銃砲から手裏剣までオールカラーで徹底網羅!! 【決定版】図説 日本武器集成

刀・槍をはじめ弓、火縄銃、手裏剣などの変わり武器まで一挙掲載!「歴史群像シリーズ」で好評を得た実験・検証もふんだんに取り入れたファン必携の1冊!!



B5判・168ページ
定価：2100円（5%税込）

現代人の「知」がさわぐ。

学研M文庫

9月の新刊
9月14日(木)発売
[定価は5%税込です]

時代小説

書き下ろし
本所竪川河岸瓦版 ビードロ風鈴の女
旗本侍と瓦版屋の女主人が江戸の闇を明かす！
千野隆司



650円

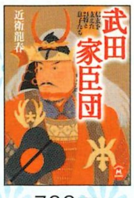
書き下ろし
屋根葺き同心闇御用 谷中ころび坂
技あり町人集団・闇町奉行所、痛快闇裁き!!
永井義男



600円

ヒストリー

書き下ろし
武田家臣団 信玄を支えた24将と息子たち
膨大な資料から蘇る、信玄を補佐した24将の魅力！
近衛龍春



798円

書き下ろし
真田幸隆
真田智謀の血脈はこの男から始まった!!
江宮隆之



725円

実録 首相列伝 国を担った男達の本懐と蹉跌
日本を担った歴代56人の首相の人物像と業績！
編集部 編



750円

シミュレーション

巨艦伝説 3 託された運命
時空を超えた日米決戦、ついに完結！
羅門祐人



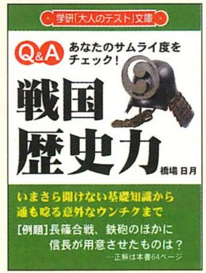
798円

大人のテスト文庫
※定価はすべて5%税込

戦国歴史力
橋場日月・著

好評発売中

戦場での兵糧米は1人1日何合？本能寺の変で信長が謀反人と思った意外な人物は？など、北条早雲の登場から大坂の陣まで、戦国にまつわる素朴な疑問・意外な質問をQ&A形式で出題。初歩的知識の方も戦国通を自認する方も自分の戦国度がチェックできる！



420円

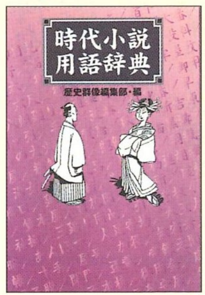
時代小説用語辞典
歴史群像編集部・編

好評発売中

時代小説好きのあなた、このことばの意味、わかります？イメージできます？

◆鯉口を切る ◆振袖新造 ◆慶庵 ◆引手茶屋
◆富突 ◆相対死 ◆浅葱裏 ◆三度飛脚
◆柘榴口 ◆惣籬 ◆落差

――解答はすべて本書に！



1,680円

小笠原 戦跡を行く

文・写真＝石本 馨
レイアウト＝神崎夢現
監修＝原 剛

無数の遺構が残る、南洋の要衝の今



写真は、母島の南部にある評議平の東側、見廻山に置かれた海軍の十年式十二センチ高角砲。6門設置の予定であったが、現在残っているのは3門で、写真の1門のみが仰角をかけた状態になっている。小笠原諸島の父島、母島には要塞跡とともに数多くの火砲がある。

**自然保護と観光が融和する南洋の楽園、小笠原諸島
かつてそこは日本陸海軍によって軍事施設が築かれ
4万を超える将兵が駐留する要塞地帯であった
日本軍2万1000、米軍7万の将兵が死闘を演じた硫黄島も
小笠原諸島に属する島のひとつである
戦後60年を経た今もなお、小笠原諸島には数多くの戦跡が残されている**

朽ちかけた大砲が敵の来ぬ海を睨み続ける

**まるで戦争映画のセットのような光景が続く
陣地がまるごと残る夜明山にいると、そんな錯覚を覚えてしまう
物音がすると思わず緊張して振り返るが、そこには誰もいない**



父島の夜明山地下洞窟陣地に据えられた陸軍の八八式七センチ野戦高射砲。当初、陸軍高射砲部隊は夜明山山頂に対空監視哨を設置し、高射砲4門と探照灯、聴音機を設置した防空陣地を構築していたが、戦争末期に地上戦闘重視の方針転換を受け、高射砲は洞窟陣地に移された。

戦跡の"宝庫"・小笠原

観光地として人気を集める楽園の島、小笠原諸島。しかしジャングルに一歩入ると、戦争当時の施設が生々しく残る。

島のあちこちでよく見かける不自然に開いた穴も、米軍の空襲によるものだ。

小笠原諸島は、東京とサイパンを結んだ線の中間点にあたる。沖縄とほぼ同緯度にあり、現在の小笠原は南海の楽園という言葉以外思いあたるものがない、風光明媚を絵に描いたような島々である。しかし、この位置にあることで大東亜戦争時には戦略上の重要拠点とならざるを得なかった。

戦争末期、小笠原諸島には、推定四万二〇〇〇人という兵力があった。

昭和二十年二月十九日から米軍の硫黄島上陸作戦が開始され、一か月あまりの激戦に告ぐ激戦で硫黄島は遂に攻略された。同時に父島、母島は戦略上の意味を失い、米軍の海上封鎖を受けつつ終戦を迎えた。

戦後、小笠原諸島は米軍の統治下に入り、日本に返還されたのは昭和四十三年のことだった。開発の遅れから戦跡が多く当時の姿を生々しく残している。父島、母島の戦跡を巡っていると、戦場に迷い込んだかのような錯覚を何度も覚えたものだ。

兵士の息遣いまで聞こえてきそうな夜明山陣地

ジャングルの中を、獣道としか思えないような道が続く。下草がないのが唯一の救いだ。道は頼りなく時々見失いそうになる。それでも進んでいくと、あたりの様子に変化がおきた。一升瓶やビール瓶が転がっているのが目に入るようになったのだ。

小笠原で覚えたのは、基地などのあった場所には、瓶や陶器の欠片が散乱しているということ。生活痕とでもいうのか、ただのジャングルではなかった証拠が残っているのである。注意深くあたりを観察すると、自然のものではない溝が走っているのに気付いた。塹壕の跡だ。それを辿って進むと、山肌に隠れるようにして壕の入り口があるのが見えた。

父島の夜明山陣地には、数か所に砲台が残っているが、最初に見つけたのは夜明山南方にある平射砲台の一つで、十年式十二センチ高角砲が設置されている。小笠原では『小笠原戦跡一覧』（待島亮著・創英社／三省堂書店）を大いに活用させて頂いたが、同書に掲載されている写真で見たこの砲は、保存状態が素晴らしく絶対に見たいと思っていた。

壕の内部は急角度に下っていて、階段が切ってあった。その先に高角砲がうずくまっているのが壕の入り口からも見えた。期待した通り砲の状態は良く、手入れをすればまだ使えるのではないかとさえ思える。砲台は山の向こう側の崖に向かって開き、眼下はるかに大海原が広が

小笠原諸島の歴史と概要

小笠原諸島は、聟島列島・父島列島・母島列島・火山列島の4列島と大小の孤島で構成される。現在は、東京都小笠原支庁小笠原村として父島、母島に住民がいるが、その他の島は、気象庁や海上保安庁などの施設の要員を除いては無人である。

距離的には、東京から南南東に約1000キロ（父島列島までの距離）離れており、サイパン島、グアム島のあるマリアナ諸島と日本のほぼ中間に位置する。父島は、戦前には日本領だったトラック島やサイパン島など南洋の島々に向かう定期船の寄港地でもあった。

日本が諸外国に対し、小笠原諸島の領有を通告したのは明治9年（1876）のことで、その後も各島の日本領土編入が進められた。

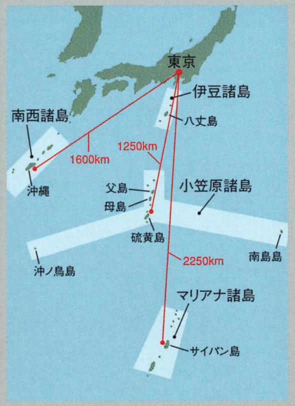
軍事的な注目が高まったのは日露戦争後で、海軍が南太平洋方面への前進基地として小笠原諸島に着目し、第1次大戦勃発後の大正3年（1914）には、当時ドイツ領だった南洋諸島の占領に伴って父島に初めて海軍の施設が設けられた。大正8年には、父島要塞の設置が決定。2年後には砲台と通信、兵力常駐に必要な設備の建設を中心とした要塞化が始まった。

太平洋戦争勃発時には、父島に要塞司令部が置かれており、陸海軍の施設が父島列島、母島列島と硫黄島を中心に整備されている。

昭和19年に入ると、米軍の侵攻に備え、防衛力の強化が進められる。同年7月には小笠原兵団が編成され、大本営直轄となった。駐留兵力は、硫黄島守備に約2万1000名、父島、母島とその周辺の島々にも合計で硫黄島守備隊とほぼ同数の兵力があったといわれる。この頃には、父島、母島で陸海軍の対空砲を上陸戦に備えて地下洞窟陣地に移設する工事が始められており、島民の疎開も開始されていた。

小笠原諸島の中で、比較的平坦地の多い硫黄島は飛行場建設に適し、日本海軍も航空基地を置いた。この地形的な条件が、硫黄島と他の島の運命を分けることになった。

同7月に米軍がサイパン島を占領すると、B-29による日本本土爆撃が開始され、硫黄島への軍事圧力は格段に高くなる。というのも硫黄島は、B29に随伴する護衛戦闘機の基地として不可欠だった（護衛戦闘機は、最も航続距離の長いP-51Dでも約3600キロ程度で、サイパン島からの往復はできなかった）からだ。



昭和20年3月には上陸してきた米軍の攻撃により島は陥落、現地の守備隊は玉砕した。

やがて父島、母島も空襲を受けるようになり、また艦砲射撃などによって被害を受けたものの、米軍の作戦は火砲や電探、通信設備の破壊が中心だった。

戦後、小笠原諸島は米軍の占領下に置かれ、軍関係者と欧米系住民のための学校も建設されていた。のちに米軍側の情報公開により核兵器の貯蔵施設まで建設されていたことが判明している。

日本への返還は昭和43年。終戦から23年目のことであった。

父島

要塞司令部が置かれた"砲台"の島

**密林の中に、突然現れる遺構
コンクリートの要塞砲台の中では
置き去りにされた火砲が
静かに朽ちている**



←夜明山周辺には、陸軍の高射砲陣地のほかにも、多数の陸海軍施設が残っている。写真は県道の近くにある洞窟内に残された陸軍の四一式山砲（地図①）。洞窟は、陣地ではなく砲の格納に使われていたようだ。



夜明山の南方付近に設置された海軍の洞窟砲台（地図②）。亜熱帯系植物が繁茂する地面がトンネル状に掘られ、その奥に八センチと十二センチの高角砲がある。

父島要塞の建設が開始されたのは大正10年（1921）6月のことで、軍縮条約による工事中断などを経て、昭和15年（1940）には父島列島が要塞地帯となった。

その前年には、海軍の父島航空隊が新設（洲崎に施設と滑走路跡がある）されている。

敵艦船や上陸に対抗するための海面砲台は、陸海軍双方とも島の北部にあたる二見港を望むコの字型の地域に集中しており、また海軍の第1、2震洋隊の基地が、北の兄島を望む兄島瀬戸（海峡）に面した地域にある。

※地図中のマーク、■＝陸軍施設、▲＝海軍施設



っていた。

次に八八式七センチ野戦高射砲の壕へと向かう。その途中の道には、コンクリートの施設や放置されたトロッコのレール、車輪、瓶や陸軍のマークの入った陶器片、またコンクリートの土台などが続々と現れた。驚いたことに夜明山には、終戦時の状態のまま基地がまるごと残っているのである。洞窟の奥深く残された八八式七センチ野戦高射砲も保存状態が良く、兵器の持つ機能的な構造にはメカとしての美しささえ感じられた。

他にも夜明山には明治時代に開発された四一式山砲が残された壕もある。見た目にも旧式な砲だが、分解・移動が簡単なため長く活用された。砲の種類もいろいろと揃い、基地とはどういうものであったのかを理解するのに最適の場所だ。

母島・沖港周辺の防衛陣地

母島の沖港からほど近い西岸の台地には、いくつかの戦跡が集中している。公園化されているため見学は容易で、地図と解説文の掲示もある。母島でまず訪ねてみたい戦跡地帯である。

母島には段階的にいくつかの軍事施設が構築されたが、昭和十六年（一九四一）六月から、静沢の高台に母島で最初の本格的砲台として構築が始められたのが母島海面砲台である。遊歩道沿いに進んでいけば、門柱、弾薬庫、機関砲などを見て回ることができる。ガジュマルの木に埋もれた弾薬庫の中には、まだ弾薬箱数個が残っている。

母島海面砲台からさらに登った林の中には、静沢防空砲台があり、窪地に据えられた十年式十二センチ高角砲三門がある。ちゃんと立った状態なのは一門だけだが、長く伸びた砲身はさすがに迫力がある。

十年式十二センチ高角砲は小笠原ではよく見かけるもので、すぐに見分けられるようになったが、もともとは重巡洋艦の対空火器だったものを陸上用に転用したものである。口径十二センチ、砲身長五・四メートル、重量は八トン近い。三六〇度をカバーでき、最大射程は垂直に一万三〇〇〇メートル、水平では二万五〇〇メートルある。この高角砲が洞窟砲台にも設置されているが、これは平射砲として使用したものだ。

同じ静沢の沖港寄りには、昭和十七年四月から構築された沖港防備衛所がある。潜水艦探知用の基地で、兵舎跡や炊事場、貯水槽、井戸などの設備を見ることができる。当時の軍隊生活を偲ばせる設備が点在しているところが興味深い。

沖港防備衛所はかなり広い敷地に展開しているが、最奥部の海岸の崖っぷちに、母島海面砲台がある。砲台は昭和十九年末から建設が始められ、翌年四月に完成した。砲台は二か所あるが、内部はトンネルで繋がっている。



夜明山付近の海軍平射砲台（地図②）。十年式十二センチ高角砲の砲身にはライフリング（螺旋条の溝）もしっかり残っている。洞窟内部は一部崩れており、砲台開口部もコンクリートが剥離して錆びた鉄筋が見えている。



夜明山の海軍平射砲台（地図②）を内側から撮影したもの。砲は十年式十二センチ高角砲で、北方の乳頭山海軍防空砲台からの移設。



夜明山の陸軍施設跡周辺（地図③）には、かつてそこで営まれていた生活の跡が残る。写真は、陸軍の星印が入った食器である。

母島

海軍砲台と震洋基地が眠る

母島には、おもに海軍の施設が多く建設されている。第3、4震洋隊の基地もあるが、対空陣地、海面砲台は南部の沖港周辺に多く見られる。母島の海岸線は険しい地形が多いが、それでも南部のほうは陸地が比較的なだらかで、上陸地点に選ばれる可能性が高いという判断があったのだろう。
なお、父島、母島ともに地図上に示した陸海軍の施設は平成14年の「小笠原戦跡調査」において調査対象になったもののみを記してあり、築かれた施設のすべてを表したものではない。
※地図中のマーク、■＝陸軍施設、▲＝海軍施設





沖港を南東に望む静沢101高地防空砲台（地図①）に設置された、海軍の十年式十二センチ高角砲。一見すると陣地に見えないが、地面を一段低く掘り込んである。



母島北部の東港に設置された東港平射砲台近くにある2メートル探照灯格納庫（地図②）。東港平射砲台は洞窟陣地ではなく、対空戦闘も考慮した露天陣地であった。

砲台に行くにはロープをつたって崖を下りていかなければならないので、くれぐれも注意が必要だ。砲台の入り口は土砂に埋もれており、潮風に晒された二門のアームストロング一五センチ砲（母島海面砲台から移設）は錆ついている。特に南側の砲台にあるものは、錆ついたというより錆の塊のような状態にまで劣化していた。砲台内部の地面はぬかるみ、トンネルを移動していると張りついた泥で靴が重くなる。湿気が多く、カメラのレンズは曇ったままだった。

海面に突き出した砲身が残る母島・万年青浜海面砲台

小笠原では、辿り着けなかった戦跡がいくつかあった。訪れる前に戦跡を地図で示した資料を探し出せなかったためで、島の人にも何度か戦跡ガイドを頼むことを薦められた。ただ著者は、戦跡探しで地図のついた戦跡ガイド本を利用することも当然あるが、地図の縮尺次第ではアテにならないことも多く、戦跡探しは五感をフルに活用した知的ゲームだと認識している。

事前に情報をかき集め、現地でも人に尋ね、最後はカンを頼りに目当ての場所に辿り着くまでの楽しさは、言葉では言い表せない。効率を重視してこの楽しみを失うのは惜しいとさえ思ってしまう。

この個人的嗜好の結果、戦跡に辿り着けないケースもあるが、やるだけやって辿り着けないのなら諦めもつく。万年青浜は幸いにして「行けた」ケースだが、本当に苦労した。どこにあるかも定かでない場所を求めて崖を這い回って探したが駄目で、これ以上は危険すぎると諦めて帰りかけた時、別ルートが取れるのではないかと閃いたのである。簡単に言えば崖の突端部分を左からアプローチしていたのを、逆に右から攻めてみたらどうかと思いついたのだ。それで成功した。

万年青浜の海面砲台は「自己責任」の取れる人にしか勧められない。無駄な苦労や、特に危険はゴメンだと言うムキには、ガイドの同行をお勧めする。それでもどうしても、という著者と同類の方には「駐車場から海岸へ下るのではなく、海岸に向かって右手の林を進め」とだけ言っておこう。

万年青浜には二つの砲台がある。十二センチ砲二門が残っており、どちらの砲も倒れてしまっている。それでも一つの砲は、海へと砲身が勇ましく突き出されたままになっている。砲台内部には、砲弾を収めていたケースも残されていた。壊れかけのケースの中には、木製の枠が散乱しており、それがほとんど劣化していない事には驚かされた。

砲台下の崖には、一部台状に突き出した場所があり、岩を人工的にえぐり貫いた形跡があった。監視台のように見え、小型の砲でも据えられていたような印象

小笠原戦跡を行く



沖港南東の万年青浜に建設された海軍海面砲台（地図③）。岸壁を掘削して2か所の洞窟砲台が築かれ、十年式十二センチ高角砲が設置された。洞窟は岩盤が脆く、現在は崩落の危険がある。

辿り着くこともままならない
崖の切り立った斜面に
口を開けた砲台からは
エメラルドブルーの海に向かって
まっすぐに砲身が突き出す
廃墟の中でなお
その砲身は勇ましく見えた



静沢の鮫ヶ崎海軍海面砲台（地図⑤）に設置された安式（アームストロング式）十五センチ加農。陸軍の四五式加農砲に似た防盾が付いている。



静沢にある洞窟陣地を結ぶトンネル内部（地図④）。砲台がある部分はコンクリートが打たれているが、通路は掘削されたままである。

小笠原戦跡を行く

母島震洋隊基地

両脇を断崖で塞がれた狭い入江の奥に隠れるようにして存在した震洋隊基地 数本の深い壕と上陸用舟艇一隻を含む遺物が今もそこに残る





第3震洋隊の西浦の基地（地図⑥）の倉庫。中には大発の残骸（上）と物資搬送用のレールがある。第4震洋隊基地は東港（地図⑦）にあった。

水上特攻兵器「震洋艇」

船体前部に250キログラムの爆薬を搭載し、敵艦に体当たりする海上特攻兵器が「震洋」である。敵上陸用艦船を集結地点で夜襲することを目的とした。船体は木製合板製で、1人乗りの一型と2人乗りの五型があり、五型は速力約23ノット。終戦までに各型合計で約6200隻生産された。写真は沖縄で米軍に捕獲されたもの。



だ。エメラルドブルーの海と、白い岩肌に残る遺構のコントラストが美しかった。

上陸用舟艇も現存する震洋隊西浦基地

母島の中心部、沖港から北へ向かう一本道をレンタルバイクで北上する途中、「←西浦」と書かれた看板を見つけた。そこから海岸へと下っていく山道があった。最初のうちは良かったが、途中から道なのか、ただの地面なのか分からないような状態になった。とにかく下りさえすれば海岸に出られるはずだと思い、藪の中を強引に進んだ。

いったいあの看板は何だったのだろうと何度も考え込んでしまったが、その先にまた道が現れ、現れたかと思えばまた消えを繰り返しつつ、何とか海岸まで辿り着いた。小笠原の道を侮ると危険だ。覚悟と準備をしておくことをお勧めする。

西浦は断崖に囲まれた小さな浜のある入江で、海岸の手前に3本の壕が並んでいた。海軍の第3震洋隊の倉庫である。壕の奥行は30メートルほどあり、中にレールや車輪の残るものもあった。ちなみにごみ以外の残存物のある戦跡は、小笠原以外で見ることは稀だ。

壕の近くにはシャフトのついたエンジンもあった。さらに海岸に面した壕の最奥部には、赤茶けた船の残骸があった。これは上陸用舟艇（大発）である。触れれば崩れてしまいそうなほど錆びていたが、まだかろうじて原形を保っていた。壕の内部に、海岸にあったものらしい丸石が大量に入り込んでいたのが気になる。

西浦には第3震洋隊が進出していた。部隊番号でも分かるように初期の震洋隊の一つで、第1～第5の震洋隊が父島と母島に配置されていた。第3震洋隊の進出日は昭和十九年（一九四四）十月である。母島は昭和十九年後半から度重なる空襲に襲われた。空からくる敵に震洋はなす術もない。昭和二十年一月五日の夜には、一時間にわたる艦砲射撃を受けた。この時も、はるか洋上の敵に対して震洋隊出撃のチャンスは無かった。隊員達は、ほぞを噛むような思いで基地生活を送っていたのではないだろうか。

昭和五十九年（一九八四）、東京都の依頼により、陸海の自衛隊が母島に残存する震洋艇の爆破処分を行った。戦後四〇年近くも経過した時期であったことには驚くほかない。第3震洋隊の死者は全部で一三人。爆発事故によるものらしいが、終戦翌日、八月十六日の出来事だった。

※小笠原の戦跡を巡る場合には、現在、整備が進みつつある父島の三日月山周辺（陸軍の観測所跡や海軍の防空砲台跡などがある）、あるいは二見港の海軍燃料貯蔵所などの倉庫群などが見学しやすい。その他の戦跡は大半が未整備で、崩落や落石、または滑落の危険がある場所が多数あり、個人が無断で立ち入るのは非常に危険です。（編集部・注）

激似戦国武将論 信長の独断 フルスロットル!

NOBUNAGA'S NEW ORDER II

戦国武将と近現代のヒーローを対比し、新たな価値観を模索する鬼子コラム

●文・イラスト――大野信長【歴史研究家。本当に信長】

Lap.3 武田勝頼とホリエモン



武田勝頼　たけだかつより

1546～82

甲斐の名門武田氏の、そして名将と讃えられた信玄の後継者。母は諏訪氏。四男であったためか器量が足りないと判断されたからか、後継者とはいえその行動は厳しく制限されていた模様。重臣達とソリがあわなかったとか独断専行が多かったとか言われるのはそのせいだったのかもしれない。家督継承後、後継者として華々しい戦果を挙げているにもかかわらず、オヤジ以下というステレオタイプな評価に終始してしまうのが常々疑問だったりする。



ホリエモン　ほりえもん

1972～

（株）ライブドア前代表取締役社長CEO。「日本式の経営には心情的にそぐわない」企業買収を重ねることで現支配者層を刺激し続けたばかりか、その現支配者層を名指しでコキおろすなど挑発的な言動でマスコミを賑わせた。この段階まではたぶん「好き嫌いで評価が分れる若者」。個人的には恨みも何もないのだが、彼とその周囲で「現代の信長」みたいなことを言っていたので、あくまで社長としてのそのキャラに一言申し上げるべくここに取り上げる。

名門武田家を潰してしまった勝頼は…まぁ勝ち組か負け組かっつったら負け組として位置付けられてますよね？「老臣をないがしろにして小賢しい若者ばかり重用した」とか、「偉大な父信玄の遺志に逆らった挙げ句、超えるどころか家を潰した」とかいいようにダメ出しされて、恣意的に「調子こいた若僧の末路ってのはこうなんだよ」的な教訓話へと誘導されているように感じるんです。例え好意的にとりあげられた場合でも「まぁ運が悪かったね」みたいに片付けられてて、微妙に哀れ。だって親とその政権基盤を踏んづけるのはある種武田の伝統だし、武田の版図を最大にしたのは誰あろう勝頼。少しも不遜ではなかったし、数字の上ではキッチリ親父を超えていた。勝ちまくってる時は結構評価高かったんじゃないの？

さて信長さん（＝筆者）は生粋のパンクロッカーですから、世間の評価はとりあえず疑います。好き嫌いとその人の能力評価を混同しません。ついでに言うと世論の尻馬に乗ってヒトを叩くのはキライでございます。てなワケでホリエモンが法を犯したかどうかは司直の手に委ねるとして、どうも彼へのバッシングを見るにつけ、勝頼とダブってしまうんですよ。「それ見たことか若僧が（嬉）!」みたいな声が聞こえてきそうな雰囲気も含めて。

勝ち下手

彼らに共通してるのは、ケンカ下手のところ。勝ち過ぎたし、勝ちを喧伝し過ぎたし、余計なところで火種を作り過ぎた。もっとこう小狡く立ち回ってだね？ 雌雄を決する瞬間を優位に迎えられるよう、コントロール出来なかったもんでしょうか？

ネクタイくらい、四の五の言わずに絞めりゃあいいじゃない？ いやぁ織田殿の威勢には逆らえませんよ、えへへへへ（笑）。…とか言ってのらりくらり決戦を引き延ばしてりゃ良かったじゃない？…そんな駆け引きも使い分けていれば結果は違ったんだろうに、とか思っちゃう。おかげで一発殴られるくらいで済むトコ、寄ってたかってフクロ叩きにされたじゃんか。

「勝ち負けよりも生きざまだ!」ってキャラでもあるまいし。年上の人間なんて大抵自分よか先にいなくなるんだからさ、そうなりゃ勝頼なんて、信玄の実子にして信長の娘婿だよ？ もったいないよなぁ。

栄華の頂点で敵からの反撃に遭い、不可解なほど無防備に打ち負かされた二人。一気に株を下げる結果となり、金の切れ目が縁の切れ目（甲斐の金脈は底をついていたらしい）とばかりに離反者が相次ぎ、重用した腹心にすら見放された…トコまで似ちゃいましたね。

さてこれで、このコラムの中で武田家はコンプリート。信玄がフセイン元大統領で勝頼がホリエモンで二十四将がモー娘。………ば、馬鹿になんかしてませんよぅ（と、摩擦は避けとく）。

NEXT LAP／井伊直政と？ にフルスロットル!

著者インタビュー

人間の息づかいを感じる迫力の戦争遺跡写真集



石本 馨
Kaoru Ishimoto

一九五七年、広島県生まれ。早稲田大学卒業後、自動車会社に勤務。一九八八年からフリーカメラマンとして独立。以後、書籍、雑誌を中心に活動。雑誌は『エスクァイア』『ブルータス』『リラックス』『GQ』など多数。二〇〇四年に、日本全国の性神を纏めたポストカードブック『出でよ、神様！』（光人社）を刊行。

文・取材／編集部

近年、戦争遺跡を紹介・解説した書籍などが多数、出版されている。小誌でも幾度となく採り上げてきたが、このたび出版された『戦争廃墟』は、日本各地に残されている戦争遺跡を多数収めた〝写真集〟だ。

「全一九二ページのうち、一六〇ページはカラーです。収めた戦争遺跡は二〇か所以上で、約一年半かけて各地を回りました。最後の二か月はほとんど家に帰らず、出かけっぱなしでしたね」

本書を上梓した写真家の石本氏は語る。今は無き立川基地のように、約二〇年前に撮影された、歴史的に興味深い写真もあるが、それ以外は最近撮影されたものばかりだ。

毒ガス工場があった大久野島や長崎の黒崎砲台など、数多く網羅されており圧巻だが、それにしても、二〇か所以上もの戦争遺跡を収めようとしたきっかけとは何だったのだろう。

「私はもともと廃墟の撮影をしていたのですが、そうなると軍事施設跡も対象となるわけです。そして資料にも目を通した上で訪問してみたら、意外とこれが興味深いものでした。

例えば普通の廃墟というのは、それほど深い意味がない。ところが戦争遺跡の場合、調べてみると歴史的に色々な話がある。そして実際に見に行くと『ここで、こんなことをやっていたんだ』という驚きがあったのです。最初は単なる『廃墟』だった戦争遺跡に息づかいのようなものを感じだしてから、これはただの廃墟じゃないな、と」

もともと石本氏は、第二次大戦などの、いわゆる戦争物が大嫌いだったという。それは氏が広島出身ということもあり、一種の拒絶反応と言うべきものだったようだ。その石本氏が戦争遺跡に息づかいを感じ、背景に人々の存在を認識したのには、あるインタビューが契機となった。

「今回の写真集の企画を進めるにあたり、戦争遺跡ゆかりの元軍人を捜す途上で、桜花隊の生き残りの方を紹介していただき、お話を伺いました。非常に冷静かつ客観的に、当時の気持ちを語られたのですが、その時、もし特攻という状況になり『お前ならどうする？』と言われれば、やっぱり行くだろうとしか思えなかった。私の中で特攻が非合理的・非人間的な行動と、単純に言いきれなくなってしまったのです」

それまでは単に『廃墟』だった戦争遺跡が、そこに『人間』を見いだしたことで、認識が大きく変わったというわけだ。

「今回の写真集では、その方も含め、撮影場所で実際に軍務に赴かれていた回天、震洋、伏龍の特攻隊員の生き残りの方々のインタビューもあわせて掲載しています」

ただの写真集でなく、こうしたインタビューも掲載しているのは、戦争遺跡の背後にある歴史（＝人間）も感じ取ってもらいたいという石本氏のメッセージでもあるのだろう。

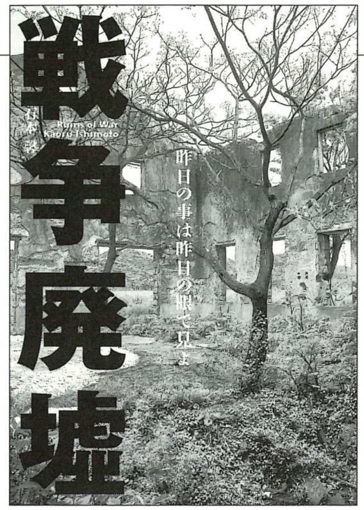
そして本書に収められている数ある戦争遺跡の中でも圧倒的なのが、小笠原の戦跡である。

「その他の地の戦争遺跡はトンネルのように空間だけなのですが、小笠原では残骸などが依然として残っており、被写体として中身が濃い。また、例えば港を中心としてそこに塹壕、こちらに平射砲陣地、後ろに砲台というように、遺跡が単体ではなく『エリア』として残っている。まさに戦場に来たという感覚に襲われます。戦争遺跡の撮影は、写真家としてひとまずやり遂げたと感じていますが、小笠原にはまた撮影に行きたいですね」

石本氏のお話を伺って感じたのは、歴史を理解するとはどういうことか、ということだ。その遺跡の来歴に詳しければよいのか――もちろんそれは何にもまして重要だが、歴史が人の織りなすものならば、それに携わった「人間」という存在も常にどこかで意識すべきだということだろう。

「撮影で注意したのは、そこにいた兵士の目線です。今までは、例えば建物ならば外から眺めたりしていた。でも、それって結局『他人ごと』ですよね。そうじゃなくて、逆に塹壕などの出口に立って外を見て、その時の思いを想像したり、そういうことは意識しました」

迫力ある写真が多数掲載されている本書が、単なる戦跡ガイドブックではないのには、こうした石本氏のこだわりがあるからだろう。



Present 1 戦争廃墟（9月下旬発売予定）

石本　馨＝写真・著
ミリオン出版／1995円

BOOKプレゼント応募方法 ● Present 1～7

このページで紹介した新刊本①『戦争廃墟』②『第三帝国の要塞』③『陸軍潜水艦隊』④『戦場の名言』⑤『歴代天皇のカルテ』⑥『日露戦争　もう一つの戦い』⑦『戦争映画でわかる戦略と戦術』をそれぞれ3名様にプレゼントいたします（⑦のみ、同時刊行の『戦争映画でわかるメカとウエポン』も同封いたします）。ご希望の方は、本誌巻末葉書の所定の欄に①～⑦のうち欲しい本の番号と必要事項を記入の上、ご応募ください。締め切りは平成18年10月6日（消印有効）。当選者は12月号誌上で発表します。なお本の価格は税込みです。

Present 2 第三帝国の要塞――第二次世界大戦におけるドイツの防御施設および防衛体制



J・E・カウフマン、H・W・カウフマン＝著　平田光夫＝訳
大日本絵画／4515円

第２次大戦のドイツ軍といえば、機甲部隊を中心とした電撃戦を思い浮かべるが、本書はドイツ軍の防御施設や防衛体制を詳細に解説している。第２次大戦開戦前から敗戦までを時系列で紹介しており、テクニカルイラスト120点、記録写真130点を用いた内容は圧倒的な情報量だ。ドイツの防御システムを扱ったものとしては決定版といえる。

Present 3 陸軍潜水艦隊――極秘プロジェクト！深海に挑んだ男たち



中島篤己＝著　新人物往来社／1890円

太平洋戦争後半、米軍に制海権を奪われつつある中、日本陸軍は自軍への補給物資輸送のために輸送潜水艇の開発を開始した。本書は「ゆ」と名付けられたその「陸軍の潜水艦」の開発そして実績を余すところなく記している。特に複雑な潜水艦の建造という、陸軍にとって初めての技術に挑む人々の苦闘を、珍しい当時の写真も掲載して紹介。

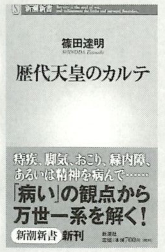
Present 4 戦場の名言――指揮官たちの決断



田中恒夫、葛原和三、熊代将起、藤井久＝編著
草思社／1470円

「たとえ軍備に制限は加えられても、訓練に制限はないのでしょ」（東郷平八郎元帥）。この一言で、日本海軍の「月月火水木金金」は始まった――ナポレオンやフォッシュ、山口多聞、そして湾岸戦争のシュワルツコフ大将…。古今東西の指揮官たちの名言を集め、戦いの背景や人物像をまとめた本書は、戦史を理解する上で興味深い示唆に富んでいる。

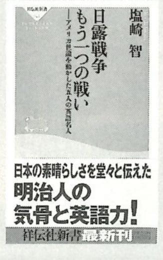
Present 5 歴代天皇のカルテ



篠田達明＝著　新潮社／735円

歴史上の人物が罹った病気が、その後の歴史に影響を与えることはよくあるが、本書は歴代天皇の病気や健康状態を分析し、それがどのような影響を与えたかにも言及している。いわば、普通とは異なった切り口で日本史にアプローチしているわけだが、奈良・飛鳥時代から昭和天皇まで網羅されており、医師でもある著者の鋭い視点が興味深い。

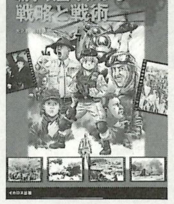
Present 6 日露戦争　もう一つの戦い



塩崎　智＝著　祥伝社／777円

日露戦争時、国際的な孤立を防ぎ、外債募集先として有望なアメリカの世論を味方につけるため、英文詩人の野口米次郎、歴史学者の朝河貫一など、英語力に優れた5人の日本人がアメリカで精力的に活動していた…。一読すると、国際世論を動かすとはどういうことか、そして真の国際人とは何かを考えさせられる。現代の日本人に必読の書。

Present 7 戦争映画でわかる戦略と戦術



大久保義信＝著　イカロス出版／1700円

本書は各々の戦争映画のストーリーだけでなく、その映画が採り上げている戦いや歴史的背景にも重点を置いて解説している。潜水艦のコメディ映画の紹介とともに、太平洋戦争におけるアメリカ海軍の通商破壊戦についても解説するなど、「一粒で二度おいしい」内容だ。同じ筆者による『戦争映画でわかるメカとウエポン』も同時に刊行されている。

歴史通ならこの定番本を読め！

Ever Green Book



戦争案内――ぼくは二十歳だった

戸井昌造＝著
平凡社／1155円

20歳の若者が見た帝国陸軍の内側

本書は20歳で学徒出陣した筆者の内務班での生活、迫撃砲の訓練、そして小隊長として中国大陸での従軍と終戦による帰郷などが詳細に述べられているが、その文体にはユーモアがあり、同時に客観的視点に満ちている。冒頭では、当時の学生気質を「愛国主義者」「まじめ派」「デカダン派」などにわけているが、この分析がなかなか面白く、嫌みのないユーモア溢れた文体も相まって、納得できてしまう。軍隊や戦争への矛盾に対する憤りもあるが、それも感情的に書かれているのではないため、逆にその不条理さが読者に伝わってくる。軍隊の階級を説明するのに、例えとして会社組織を参考として用いるなど、現代の人々の視点からも理解しやすい工夫がされており、また、画家である筆者の手による、多数のとぼけた感じのイラストも印象的だ。「客観性とユーモア」に満ちた本書からは、「戦時下の若者」の気持ちが伝わってくる。

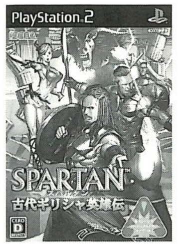
ローマの侵略に立ち向かえ！ 戦士スパルタンの爽快アクション!!

Present 8 3名

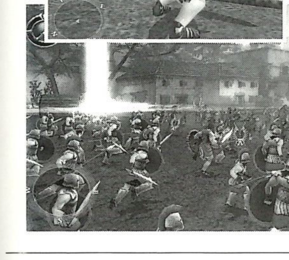
スパルタン ～古代ギリシャ英雄伝～

7140円（税込）
プレイステーション2
好評発売中









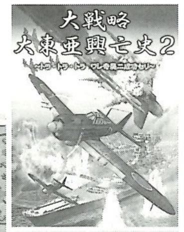
舞台は紀元前300年のギリシャ。プレイヤーは主人公のスパルタ人兵士スパルタンとなり、ローマの侵略に立ち向かう。行く手に立ちはだかる敵はローマ軍兵士をはじめ、歴史上の偉人、さらには神話上の怪物たちも登場。これら無数の敵を前に果たしてスパルタンは勝利を収められるか……。主人公が神から授かった武器から繰り出す、必殺技がド派手でスゴイ。圧倒的多数のローマ兵を突き崩し、また吹き飛ばして「一撃粉砕」する快感に、思わず日頃の鬱憤も吹っ飛ぶこと請け合い。全14ステージからなる「ストーリーモード」に加え、100人の兵士を相手にたったひとりで戦いを挑む「アリーナモード」も収録。古代ギリシャのロマンあふれる壮大な英雄叙事詩を堪能してほしい。**〈発売元＝セガ〉**

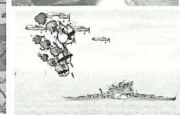
大東亜戦争の「もしも」の期待に応える！ 超大型戦記シミュレーションが登場！

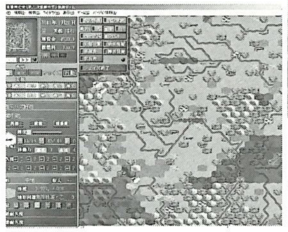
Present 9 3名

大戦略 大東亜興亡史2

10290円（税込）
Win2000／Me／XP／98
好評発売中







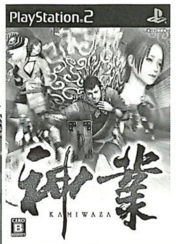
『大戦略』シリーズの最新作。張鼓峰事件から始まるキャンペーンシナリオは、満州国建国、ノモンハン事件、太平洋での開戦、そして日本の敗北、さらには歴史のｉｆまでも収録しており、ヤリ応え満点。もしミッドウェー島の攻略に成功していたら？　もしＭＩ作戦を発動しなかったら…？
また今作ではアメリカ軍のキャンペーンシナリオも収録。ひと味違った楽しみが増えた。**〈発売元＝システムソフト・アルファー〉**

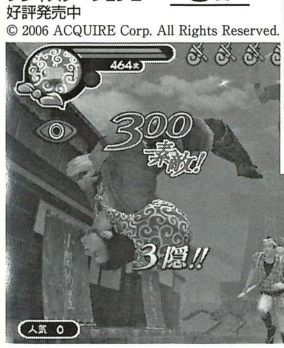
悪人から盗む！ 華麗な義賊の盗人稼業!! 斬新な着眼点が秀逸！ 痛快泥棒アクション！

Present 10 3名

神業

7140円（税込）
プレイステーション2
好評発売中





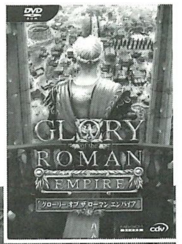
驚いた。泥棒である。プレイヤーは義賊・海老三となり、弱者を助けるために悪人から盗みを働く。盗んだものを風呂敷に包み込み、大きくなった風呂敷をサッカーボールのように蹴って周囲の目をそらし、また新たな盗みを働く。連続して盗む背徳的な快感が何ともいえない。だが天敵もいる。火付盗賊改方である。捕縛されれば入牢するが、そこは義賊。脱獄を目指すのだ。多彩なアクションがいい。痛快作。**〈発売元＝アクワイア〉**

ローマに繁栄と栄光をもたらすべく、壮大な都市を建設する王道シミュレーション！

Present 11 3名

グローリー オブ ザ ローマン エンパイア 日本語版

8190円（税込）
Win2000／XP 好評発売中





古代ローマを舞台にしたゲームをもう1本。こちらは都市建設シミュレーション。質素な家から始めて、市民のニーズに合わせて居酒屋、大衆浴場などを建て、さらには凱旋門やコロセウムも建設する。カエサルが選んだ4つのミッションに挑む「チャレンジモード」と自由に都市を建設する「フリー建設モード」がある。建設だけでなく、襲来する蛮族から町を守るため兵士を派遣したりするのがシブイ。**〈発売元＝ズー〉**

二度と戻ってこれないと知りながらの出撃！ 最後の秘密兵器「回天」に乗った若者の青春！

Cinema

出口のない海

9月16日より丸の内ピカデリー2ほか全国ロードショー







映画『半落ち』の原作（横山秀夫）と監督（佐々部清）のコンビが「あの戦争」を生きた青年たちを描く。太平洋戦争末期、日本の敗戦が日増しに濃厚になっていく中、人間魚雷「回天」に乗り組み、敵艦へ体当たりするために出撃する若者たちがいた。厳しい訓練で得た操艦技術は、確実な死へとつながっていく。希望を、未来を戦争によって強制的に断ち切られた壮絶な青春。若者は暗い海の中で何を感じ、何を見たのか。**〈配給＝松竹〉**

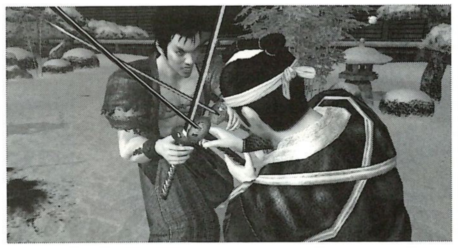
華麗で力強い剣技はより実戦に近づいた!! 大人気シリーズがXbox 360で登場！

Present 12 3名

剣豪ZERO

7140円（税込）
Xbox 360　9月7日発売





『剣豪』シリーズ最新作。伊東一刀斎、宮本武蔵、柳生十兵衛、佐々木小次郎、堀部安兵衛、沖田総司、坂本龍馬、岡田以蔵、千葉佐那子ら（異論はあるかもしれないが）各時代を代表する剣豪たちが、巌流島、京の町、吉良邸などを舞台に剣技を競う。時代を超えて激突する剣豪たちの息詰まる決闘を体感できるのがたまらない。果たして最強の剣士は誰か!?**〈発売元＝元気〉**

5年目を迎えたいまテロの恐怖を検証！

DVD

9.11 ～N.Y.同時多発テロ衝撃の真実～

2625円（税込）
好評発売中



2001年9月11日、世界を震撼させた同時多発テロ。あの瞬間に何が起きていたのか。あれから5年目を迎え、膨大な記録映像と証言から衝撃の真実に迫る。**〈発売元＝パラマウント ホーム エンタテインメント〉**

幕末の混乱と変革、歴史の裏を描く！

Broadband Program

幕末機関説 いろはにほへと

10月6日よりGyaOにて放送開始
ご視聴は下記アドレスにて
所定の手続き後、無料で行えます。
http://www.gyao.jp/



世に混乱を呼ぶ「覇者の首」を封印すべく、捜し求める主人公。その行動を追いつつ、幕末の日本を描くアニメ。全26回。坂本龍馬や土方歳三らも登場。**〈企画・制作＝サンライズ／バンダイビジュアル〉**

新着情報プレゼント応募方法

144～145ページで紹介したプレゼント8～12は、巻末のとじこみハガキに住所・氏名・年齢などの必要事項とアンケートの回答、並びにご希望のプレゼント番号をお書きの上、ご応募下さい。
なお、雑誌公正競争規約により、この懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合があります。あしからずご了承下さい。
また142～143ページ「新刊紹介」、146～147ページの「プレゼント」にもプレゼント商品が掲載されています。そちらもあわせてご覧下さい。いずれの商品も締め切りは平成18年10月6日（消印有効）とさせていただきます。発表は12月号誌上にて。

Present!

プレゼント!



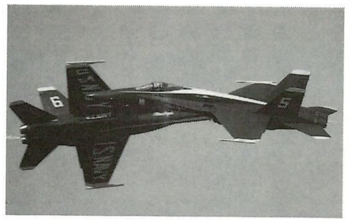
Present 13 3名
ラジコン「スカイホークⅡ」

⬆大人気のエアプレーン・ラジコン「スカイホーク」の複葉機タイプが新登場。手軽にラジコン飛行機が操作できるのはもちろん、送信機が充電器兼用なので簡単充電が可能。初心者でもフライトを楽しめるのがうれしい(4179円・税込)。

Present 15 3名
DVD『新撮！ブルーエンジェルス』

➡パイロットですら憧れるというブルーエンジェルスの貴重映像を満載したDVD。ゴールデン・ゲート・ブリッジで行われた演技は圧巻。本編47分(2940円・税込)。

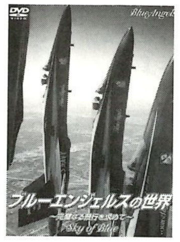




Present 14 3名
DVD『ブルーエンジェルスの世界～SKY OF BLUE～』

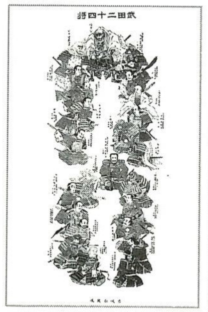
➡アメリカ海軍の誇る航空機のエアロバティック・チーム、ブルーエンジェルス。世界最高レベルの飛行実技のほか、訓練風景や空撮映像を収録。本編56分(3990円・税込)。

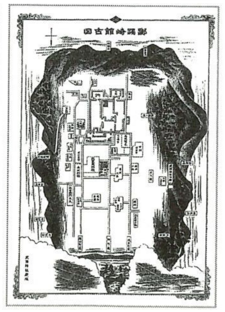




Present 17 3名
武田神社3種図

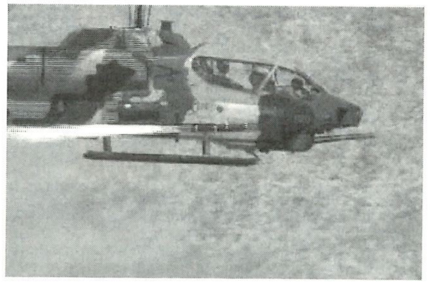
⬇武田神社取材の折、買い求めた「武田二十四将像」「躑躅崎館古図」「甲斐国武者鑑」の3種類の貴重絵図を模写印刷したもの。白黒なのが残念だが、貴重な史料の模写を手元に置けることがうれしい。





Present 16 3名
DVD『世界最強兵器開発！チャイナレイク & VX-9の全て』

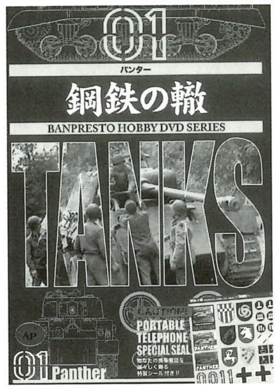
➡アメリカ海軍航空兵器開発基地「チャイナレイク」と、最新兵器の実戦運用を試す運用試験評価部隊、通称「VX-9バンパイア」に密着取材。最強兵器開発の全貌が収められている。本編56分(3990円・税込)。





Present 18 2名
DVD『鋼鉄の轍01～04』

⬇第二次大戦時の貴重映像を収めた『鋼鉄の轍』シリーズのうち『01パンター』『02ティーガーⅠ型』『03九五式軽戦車』『04エル・アラメインの戦い』の4作品をまとめてプレゼント。迫力ある実写はいうに及ばず、各巻に付けられた携帯にも貼れる特製シールがマニア心をくすぐる。各巻本編10分55秒(各巻998円・税込)。

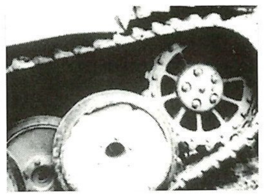








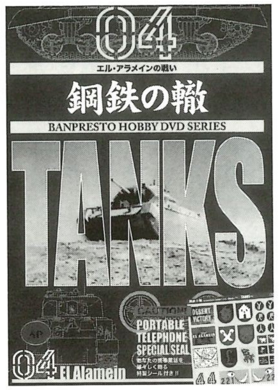


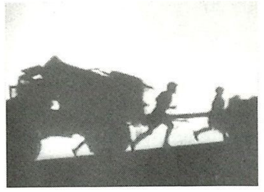














Present 20 3名
プラモデル「回天一型」

⬇搭乗員が操縦して敵艦への体当たりを敢行する人間魚雷「回天」。映画『出口のない海』の公開を記念して、映画仕様パッケージのプラモデル「回天一型」をプレゼント(1/72。1680円・税込)。





Present 19 3名
BOOK『MILITARY COLLECTION 6 日本陸軍戦闘機』

➡ミリタリー解説本の第6弾。第二次大戦に活躍した日本陸軍の戦闘機、九七戦、隼、鍾馗、屠龍、飛燕、疾風、五式戦の7機種を掲載。側面図のほか、撃墜マーク、部隊所属マークなども解説されている。機体・生産数・戦歴などの紹介記事も充実(2310円・税込)。



応募方法

146～147ページに掲載されているプレゼント(13～20)をご希望の方は、巻末とじこみハガキにアンケートの回答と本誌へのご意見・ご感想、並びに住所・氏名・年齢・職業などの必要事項を記入の上、ご応募下さい。また今号のプレゼントは、142～143ページ「新刊紹介」にて新刊のプレゼントを、144～145ページ「新着情報」ではゲームのプレゼントを掲載しています。そちらもご覧下さい。

本号に掲載されているいずれのプレゼントも、締め切りは平成18年10月6日（消印有効）とさせていただきます。当選発表は、12月号（平成18年11月6日発売）の誌面にて行います。

なお、雑誌公正競争規約により、この懸賞に当選された方は、この号のほかの懸賞に当選できない場合があります。あしからずご了承下さい。

(※事務処理上のお願い:ご住所は、できれば都道府県名からお書き下さい)

13提供／大陽工業（www.taiyo-toy.co.jp/） 14～16提供／ワック（www.web-wac.co.jp/）
18提供／バンプレスト（www.banpresto.co.jp） 19提供／コーエー（www.gamecity.ne.jp/） 20提供／ファインモールド

読者の声

一枚の写真から復元された校舎

東京・神楽坂の外堀通り沿いを歩くと、坂の上に白亜の洋館があります。

この建物は、東京理科大学の前身である東京物理学校が、明治三十九年（一九〇六）に現在の大学六号館の場所へ校舎を新築した際に撮影された、ただ一枚の写真から復元されたものです。敷地面積と建築法規の関係で、当時とは規模と窓の構造が若干異なりますが、内部は「近代科学資料館」になっています（入場無料）。



理科大の創立110周年を記念して平成3年に建設された科学資料館は、建物自体が展示品となっている。

展示内容は、主に古代から現代の各種計算器具が中心で、算木柄古銭、真珠玉、石や紙製の算盤、盲人用算盤から計算尺、手動および電動計算機などが並び、実演を楽しむこともできます。関係資料には、近代科学導入に取り組んだ先人たちや、旧校舎の屋上に置かれ「落第神社」の別名で学生に親しまれた（？）旧奉安殿の写真もあり、その逸話も面白いものでした。

隣には江戸和風の公園もありますので、興味のある方は訪ねてみてはいかがでしょうか。

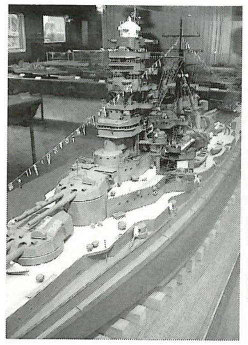
千葉県　彦坂　徹

◆

まさに神技！究極の艦艇模型

去る八月六日から九日まで、「船の科学館」で開催されていた「艦艇模型とその時代」展を見学してきました。会場となった「羊蹄丸ホール」には、全長二メートルを超える作品を含む大小さまざまな艦艇模型が展示され、併せて航空機模型もテーブルいっぱいに並んでいました。

いずれも溜息が出るほどの完成度で、実物をそのまま小さくしたのではないかと錯覚してしまうほどの出来栄えでした。



1/100という大スケールのため、全長2メートルを超える戦艦『比叡』の模型。

空中線などのケーブル類も完全再現され、よく見れば、甲板には実際に小さな板を敷き詰めてあるではありませんか。

特筆すべきは、これらの精密模型が、ほとんどボール紙と木材から出来ているという事実でしょう。設計図面を元に、一つ一つ手作りでパーツを製作しているので、なかには製作年数三〇年（！）という、途方もない年月をかけた作品もありました。

模型の世界の奥深さに、すっかり魅せられた一日でした。

東京都　秋中友宏



同一縮尺なので、それぞれの航空機の大きさを比較できて楽しい。

■78号の「マレー沖海戦」は読みごたえ充分で、興味ぶかいものでした。特に、掲載されていた英国タイムズ紙の写真には驚きました。日付を見ると十二月十一日、つまり海戦の翌日に、こんなに詳細な写真とともに事実（しかも大敗北）を国民に報告するなんて、同時期の日本では考えられないことです。政府がいかに国民を信頼しているか、日英の差を痛感しました。

佐賀県　渡辺健太郎

■旧制中学在学中、「マレー沖海戦」に参加した先輩が戦闘の報告をしに学校に来られ、話を聞かせてもらったことを懐かしく思い出した。雷撃コースに入った時、クルー全員が落ち着いていたこと。友軍機が被弾炎上し、墜落していったこと。雷撃後にレパルスの艦上を飛行し、水兵の顔が見えた直後、燃料タンクに被弾したなど、生々しい話を語ってくれた。

長野県　櫻井　晋

■ペタン元帥は卑劣な変節漢で、ド＝ゴールはフランスを解放に導いたカリスマ的ヒーローという認識が、78号の「栄光のレジスタンス」を読んで変わりました。両人とも祖国のためを思っての行動なのに片や終身刑、片や大統領とは……。仕方がない気もしますが、哀れなものです。

東京都　谷口達也

■カラー特集「アメリカ軍艦紀行」を見て、未だに多くの戦艦が保存・一般公開されている事実に驚きました。日本には横須賀の『三笠』しか保存艦がないだけに、将来是非アメリカを訪れたいと思います。『世界の戦争博物館』の発売が楽しみです。

東京都　山崎恭司

――おかげ様で、現在全国の書店にて発売中です。（編集部）

■「小石原城」の記事を執筆された木島氏の説は、大変面白かった。黒田家と細川家の支城配置の必然性がよく理解できた。現況縄張り図もわかりやすく、訪れてみたい城の一つとなった。

石川県　藤井俊隆

■以前から潜水艦の構造について興味があり、貴誌の「潜水艦解体新書」と特別付録「伊号潜水艦の断面図解」は、企画としてとてもよかったと思います。今後も記事と付録が連動するような仕掛けを期待します。

福岡県　大山将孝

■「スイス傭兵五〇〇年史」を読んで、同国の今日に至るまでの歴史背景を明確に知ることができた。スイスの永世中立は決して建前ではない、と感じた。

青森県　大里　大

歴史群像ホームページ → http://www.gakken.co.jp/rekigun/

戦争遺跡NEWS

帝国陸軍が築いた巨大工場群
東京陸軍造兵廠跡
〈東京都北区・板橋区〉

東京都北区、JR埼京線十条駅の周辺一帯には、かつて陸軍造兵廠がありました。

現在でもいくつか遺構が残っていると知り、夏休みを利用して現地を訪れてきましたので、ご報告させていただきます。

――八月某日、JR十条駅に到着。まず目指したのは、線路沿いに続く高い壁です。線路側からはコンクリート塀に見えますが、裏側から見るとレンガ造りであることが確認できました。



文化センターとして今も使われている第一陸軍造兵廠本館。外壁は茶色だったが、米軍の手で白く塗り替えられたという。

ガイドブックによれば、これは造兵廠の塀の名残だそうです。

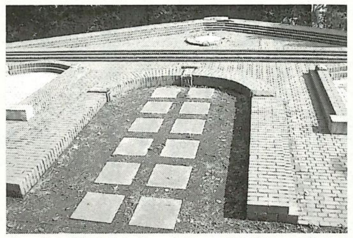
明治四年（一八七一）、小石川の水戸藩邸跡地（現・文京区）に造兵司が設置され、後に砲兵工廠と改称されます。この砲兵工廠が、日露戦争を契機に明治三十八年から逐次この一帯に移転し、昭和十五年（一九四〇）に東京陸軍造兵廠となりました。

現在、敷地跡には陸上自衛隊十条駐屯地、北区中央公園、養護学校などの施設があり、なかでも第一陸軍造兵廠本館の建物は、北区中央公園の文化センターとして今も使われております。

地元の人に聞いたところ、この建物は終戦後、米軍が接収して東京兵器補給廠の保安司令部として使用、ベトナム戦争の激化に伴い、一九六八年には野戦病院となったとのことでした。

周辺の住民が、戦場から傷病兵を送ってくるヘリコプターの騒音や、マラリア患者などの収容による防疫上の不安を訴えて反対運動を起こし、大きな社会問題になったそうです。

中央公園から西へ一キロほどの、東板橋図書館がある一帯には、かつて陸軍の火薬製造所（東京第二陸軍造兵廠板橋製造所）がありました。



第二陸軍造兵廠にあったレンガ建造物の壁面の一部。現在はモニュメントとして地面に設置されている。

製造所は、旧加賀藩下屋敷の広大な敷地を利用して造られており、内部には火薬の事故に備えて土塁で囲まれたレンガ造りの建物などが建ち並んでいたそうです。一部は戦後も学校や工場、研究所として利用されていましたが、現在は残念ながら、建物の一部がモニュメントとして残るのみでした。

山梨県　小幡一仁



JR埼京線十条駅より徒歩。

世界五大図書館のひとつ、ロシア国立図書館の秘蔵コレクションが日本初公開！

日露修好150周年記念
「ロマノフ王朝と近代日本」展

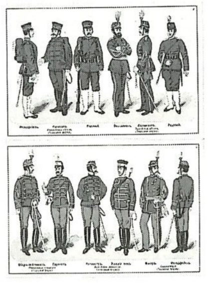
日露交流の歴史に新たな光を当てるべく、ロシア国立図書館の貴重な収蔵品から厳選した資料を紹介する展覧会が開催！

古くはピョートル大帝時代のものから、ロシア革命前の帝政末期のものまで、版画、地図、写真など多種多様な資料が300点以上公開される。日露交流関連の資料展としては過去最高の質と規模を備えており、これまでロシア国内でも非公開とされてきた、従軍写真家による日露戦争の戦場写真も多数含まれている。本誌読者にとっては見逃せない展覧会といえる。

会　　場：新潟県立万代島美術館
開催期間：2006年9月9日(土)～11月5日(日)
開館時間：10:00～18:00 (毎週金曜日は20:00まで開館)
休 館 日：月曜日 (9月18日、10月16日は特別開館。10月9日は開館し翌日休館)
観 覧 料：一般800円、大・高生500円、中・小生300円 (20名以上の団体割引あり。土・日・祝日は中・小学生の入場は無料)
主　　催：新潟県立万代島美術館、読売新聞東京本社、美術館連絡協議会
問い合わせ：新潟県立万代島美術館 (TEL.025-290-6655)
企画協力：株式会社アートインプレッション
お知らせ：静岡アートギャラリー (2007年2月6日～3月18日)、北海道立函館美術館 (3月22日～4月5日) へも巡回決定。



ルボーク「ポルト・アルトゥル（旅順）の防衛」
I.スィティン工房／1904年 モスクワ



『日本軍』(全16頁)より
1904年 モスクワ刊

Present
会場にて販売されている図録（2000円税込）を5名様にプレゼント！
※応募方法は、下記をご覧ください。



●「ロマノフ王朝と近代日本」展の図録（アートインプレッション発行）をご希望の方は、
〒141-0022　東京都品川区東五反田1-22-1　五反田ANビル2F「歴群フォーラム図録係」まで。
発表は発送をもってかえさせていただきます。

投稿大募集!!

「歴群フォーラム」では読者の皆様からの投稿を募集しています。身近な歴史情報や史跡探訪記、独自の歴史解釈など歴史群像編集部「フォーラム係」までお寄せください。投稿は返却しませんので、写真など必要な場合は複写をおとりください。戦争遺跡情報も引き続き募集中です!!

新素材導入と形状の進化 軍用ヘルメット ②

文／イラスト＝坂本 明

ケブラー繊維の導入

一九七〇年代に新素材が出現したことで、ヘルメットも大きく変化することになった。特にボディアーマーやヘルメットなどの個人装備を大きく変化させた素材が複合材、いわゆるポリアミド系樹脂の一つであるアラミド繊維である。一般に「ケブラー繊維」と言われるが、「ケブラー」というのは商品名である。

ケブラーは一九六四年にデュポン社が開発した高耐性、高弾性、高強度の高分子材料である。石灰や石油から造られ、その分子の大きさや分子同士の結合力、形状、結晶構造などをあらかじめ設計しておくことで、様々な機能を持たせることができる。

ケブラー製品はこうしてできた高分子素材を紡糸し、さらに、その繊維を平織りまたはバスケット織りして布を織り、それを重ねて作るのである。その強度は、ケブラー糸一本で約二トンの乗用車を2台、持ち上げることができるほどだ。

ケブラー繊維の出現により、ボディアーマーやヘルメットは、跳弾や砲弾の破片だけでなく、銃弾の直撃にも耐えられる、より直接的な防御装備へと変化した。

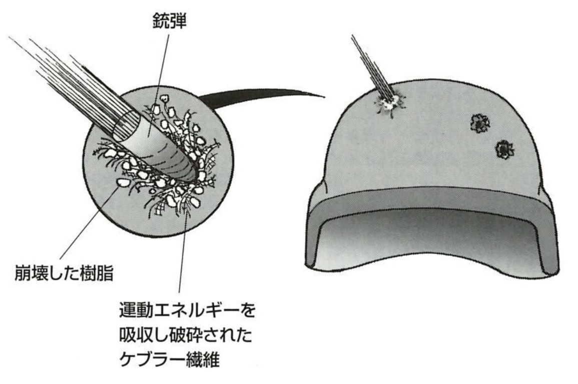
その防弾の原理は、たとえばケブラー製ボディアーマーの場合、命中した弾丸の運動エネルギーをケブラー繊維が吸収し、同時に繊維が波打って繊維全体に伝播させることで和らげる仕組みとなっている。これはサッカーでネットにボールがぶつかった時、それを受けとめてボールの持つ運動エネルギーを吸収し、直後にネットが波打つことで衝突の衝撃を全体に広げていくことと同じである。

一方ケブラー製ヘルメットの場合も基本的には同じだが、異なっている点がある。ケブラー繊維により高い抗弾力を持たせる方法として、何枚も重ねた繊維を樹脂でコーティングする方法があり、装甲車両などの防弾素材として使用されるバリスティック・パネルがこの方法で造られているが、アメリカ軍のPASGT（Personal Armor System Ground Troops:地上部隊用個人防護システム）などのケブラー製ヘルメットにもこの方法が用いられている。PASGTの場合、フェノールPVBという樹脂でコーティングされており、このため非常に固く、フレキシブルさはない。

この方法では、弾丸が命中すると衝撃を受けた部分が崩壊し、これによって弾の持つエネルギーを吸収・伝搬させる仕組みとなっている。つまり硬質の樹脂という脆(ぜい)性破壊する物質と、ケブラーという靭(じん)性（衝撃に対する耐久性）の高い物質を併用することで弾丸の運動エネルギーを吸収、緩衝させるのである。

こうしたケブラー製ヘルメットもボディアーマー同様、ライフル弾などの直撃には耐えられないが、PASGTの場合、拳銃弾ならば357マグナム弾程度までは直撃に耐えられる抗弾力を持つという。

ケブラー製ヘルメットの抗弾効果



現在のヘルメットは、弾丸の運動エネルギーを硬質で壊れやすい樹脂によって減殺し、同時にケブラー繊維によって吸収する。材質の違う物質を用いるという点では、戦車の増加装甲や複合装甲の概念に通じるものがある。また貫通されなくても衝撃が直接、頭部に伝わってしまうと、脳震盪や場合によっては外傷が生じるので、衝撃の吸収・緩和は、何より重要な要素である。

新素材を使用した様々な戦闘用ヘルメット

PASGTヘルメットは、一九八〇年代初頭にアメリカ軍に採用されたものだ。これまでは、M1ヘルメットのように金属製が一般的だったから、ケブラー繊維製のPASGTは当時、画期的なヘルメットであった。保守的な陸軍がこのヘルメットを受け入れる際には上層部に多少の反対もあったようだが、M1のような金属ヘルメットよりもはるかに防御力に優れ、着用感の良いPASGTはすぐに第一線に立つ兵士たちに受け入れられた。

PASGTは、形状もM1とは大きく異なっていた。耳および首後部を防護するように切り返しが付いており、一見すると第二次大戦中のドイツ軍のヘルメットに似ている。このことから「フリッツ・ヘルメット（フリッツは、ドイツ兵の俗称）」とも呼ばれているほどだ。

PASGTヘルメットは現在ではRBR社、ジェンティックス社などで生産され、アメリカ陸軍はもとより、SWATや海外の軍隊でも採用されている。この他、その形状は、日本の自衛隊で使用されているヘルメットにも影響を与えている。

同じくケブラー製ヘルメットとして有名なものに、PASGTとほぼ同時期に登場したイギリス軍のGS Mk.6がある。このヘルメットは、無線機のヘッドセットを装着したまま被ることができるように、耳の上の部分に張り出しが設けられているが、PASGTのように耳や首後部の覆いがないのが特徴である。

また同じGS Mk.6ヘルメットでも、空挺部隊などで使用される強度や耐久性がより高い「スーパー・ケブラー・ヘルメット」と呼ばれるものも生産されている。ちなみにイギリス軍では素材や製法に関しての情報制限が厳しく、具体的なデータは不明だ。

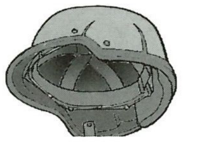
このGS Mk.6も先のPASGTも、重量はともに約一・五キロ（サイズにより、若干異なる）であり、スチール製のM1とさほど変わらない。だが、抗弾力が圧倒的に優れている上に、人間工学に基づいて設計されているため被ったときの安定感がよく、頭部を傾けてもその方向にヘルメットがずれない工夫がされている。先に述べたように、PASGT導入に際して、上層部の反対を打ち消すほど、兵士たちがこのケブラー製ヘルメットを評価したのは、こうした理由による。

二〇〇〇年代に入ると、アメリカ軍では分隊内・間の交信用の個人装備として兵士のレベルまで小型無線機が普及したため、ヘッドセットを着用した状態でもヘルメットを被れるように、PASGTの耳部分などをさらに大きくカットし、軽量化を図ったMICHヘルメット（カットの仕方により異なるタイプがある）が開発されて、特殊部隊やレンジャー部隊で使用され始めた。このヘルメットはアメリカ陸軍が最近ACH(Army Combat Helmet)として制式採用し、一般歩兵部隊でも使用している。

ACHヘルメットの内部は、ライナーだけでなくパットなども用いて頭部にフィットさせ、さらに衝撃の吸収力も向上している。近年の傾向として、内装に関しては、ある程度のオーダーが可能で、もちろん限界はあるものの個人に適した注文ができるようになっている。

戦闘で着用するヘルメットの抗弾性と軽量化を図ることを目的として、素材にザイロンを使ったもの（軽量ザイロン・ヘルメット）も開発されており、将来アメリカ

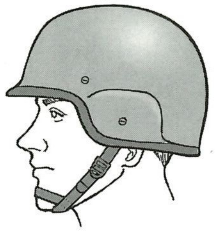
スチール以外の素材を用いたヘルメット





GS Mk.6ヘルメット

イギリス軍のケブラー製ヘルメットであるMk.6も、PASGT同様、耳の部分に無線機のヘッドセットのための張り出しが付けられている。ただし耳部を完全に覆う構造ではない。



PASGTヘルメット

PASGTヘルメットは1970年代に陸軍のナティック・リサーチ・センターによって研究・開発されたものである。イラストは迷彩のヘルメット・カバーを外した状態で、ニュースなどで見かけるものと雰囲気は違うが、耳や後頭部を覆う特徴的な形状がわかる。



AC95ヘルメットを装着したGSG9隊員

ドイツの特殊部隊GSG9はチタン製AC95を使用している。チタンは防護性に優れているが、精錬するのに高コストとなる。したがって、一般の兵士よりも、特殊部隊といった少数の危険度の高い任務に従事する隊員向けヘルメットの材質に適している。



MICHより発展させたACHヘルメット

PASGTの耳部分などを改良して開発された特殊部隊用のMICH。それをベースとして一般の兵士用としてアメリカ陸軍が導入したのがACHヘルメットである。また、PASGTの素材を改良して重量を約20%軽量化したLWHというヘルメットが開発され、2003年よりアメリカ海兵隊が使用している。

軍に採用される可能性がある。ザイロンは日本が開発した新素材で、スチールの一〇倍、アラミド系繊維の約二倍の引っ張り強度を持ち、耐熱、耐炎性も高いという。

この他にも、より新しい防弾材としてボディアーマーで使用されているスペクトラ繊維がヘルメットにも使われ始めている。これは高い抗弾性と、水より比重が軽いほどの軽量さが特徴だが、熱に弱く、一三五度程度の加熱で溶解してしまうという欠点がある。このため、ボディアーマーやヘルメットで使用するには特殊な加工が必要となる。

一方、対テロ作戦や人質救出作戦などで敵と近接した距離で撃ち合い、被弾する可能性が高い特殊部隊、例えばドイツのGSG9やロシアのαグループなどではAC95やKIVERなどの、より抗弾力の高いチタン製ヘルメットを使用している。これらのヘルメットはケブラー繊維を素材としたPASGTよりも遥かに抗弾力があるが、重いのが欠点だ。そのため、被弾率は高いが着用時間が短時間ですむような対テロ・人質救出作戦での突入時に使用される。

ヘルメットはいくら高い抗弾力を持っていたとしても、あまり重量があっては長時間の着用ができない。加えて、首に負担がかかるということは、大きな運動エネルギーを持つ弾丸が命中した場合、当たった衝撃とヘルメットの重量によって首が折れてしまうことも考えられ、一概に高い抗弾力を持っていれば良い、というわけでもない。

また特殊部隊のように、危険度が高い任務に従事する部隊ではより強度や耐久性が高く、抗弾力に優れたヘルメットを使用するのは当然としても、一般部隊の兵士が使用する場合はそれほどの高性能は必要ない。ヘルメットの性能が高くなれば、同時に生産コストも上昇するので、コストと性能のバランスをどう取るかということも重要となる。

将来の戦闘用ヘルメット

二十一世紀に入り、戦争の形態が変化したことを受けて、西側先進国を中心に新たな歩兵装備システムの開発が進められている。これは歩兵戦闘をデジタル情報化して、戦闘効率を向上させようとするものであり、その結果、各国はそれまで研究段階であった先進歩兵装備システムの開発を推進させている。主なものを挙げてみると、アメリカのランド・ウォリアー、イギリスのFIST、フランスのFELIN、ドイツのIDZなどがある。

たとえばランド・ウォリアーは①ヘルメットおよびヘルメット・マウント・ディスプレイ装置（HMD）②コンピュータ③デジタル・ボイス通信機④位置・航法用GPS⑤ボディアーマー⑥個人装備キャリング・システム⑦ウエポン・サブシステムなどの装置でシステムが構成されている。

画像を始めとする様々な情報はヘルメットに装着したHMDに表示され、兵士の眼前に投影される。現在開発が進められ、一部で使用され始めているHMDはヘルメットに装着する外装式の装置だが、将来的にはヘルメットに内蔵され一体化される予定だ。

このほかランド・ウォリアーよりもさらに発展したものとして、フーチャー・フォース・ウォリアーと呼ばれているものや、ソルジャー2025などがある。特に後者で用いられるヘルメットは形状もフルフェイス型となり、情報のディスプレイ装置、各種センサー、NBC防護システムが盛り込まれたものとなっている。

つまり、将来の戦闘用ヘルメットは、単に頭部を防護するというだけでなく、「歩兵」という戦闘システムを構成する一つの情報サブシステムとして発展していると言っても過言ではないのである。

将来の戦闘用ヘルメット



ランド・ウォリアー

右のイラストのように、MICHには耳部分に張り出しがあるので、ヘッドセットを装着した上からヘルメットを被ることができる。このように、近年のヘルメットは物理的な防護だけでなく、通信機器にも配慮した形状となっているが、ランド・ウォリアーでは、より詳細な情報をHMDで兵士に提示する。右端のイラストの、眼前にある機器がHMDだが、これはヘルメットに取り付ける形式である。

ソルジャー2025



ランド・ウォリアーよりもさらに発展した歩兵装備として研究が進められているソルジャー2025。フルフェイス型のヘルメットの前面には様々な情報が提示される。この段階では、ヘルメットというよりも情報システムの一つ、といっても良いだろう。

戦場のミステリー

第11回 落城に纏わる奇怪な伝承

文＝工藤智明



東京都下の八王子城跡は、現在整備・復元が進み、落城の際の凄惨な戦いを偲ぶよすがとてない。写真は御主殿（城主の館）入り口の復元された石段部分。幅約5m、高低差9mの堂々たるもので、道路の両側も2m前後の石積みとなっている。

城は伝説の宝庫である。築城における人柱、開かずの間などの七不思議、埋蔵金……。中でも流血の末の落城には、奇怪な噂が付き纏う。今回はそんな話を二つ、三つ……。

まずは猛将・柴田勝家の居城、北ノ庄城（福井県）に纏わる話。勝家は織田家中随一の実力者でありながら、信長死後の後継争いで、成り上がりの羽柴秀吉に大敗。立て籠もった北ノ庄城も秀吉の大軍に攻め込まれ、天正十一年（一五八三）四月二十四日、天守に火を放ち、愛妻お市の方共々自刃を遂げた。その後、落城の日の夜になると、城跡から城下九十九橋の間を往復する、首なし武者行列が現れるようになる。一行は鎧も太刀も白一色で、白馬に跨り白い霧のように現れ消えた。これぞ無念の死を遂げた勝家と家臣の一行といわれ、遭遇した者は年内に必ず死んだとも、頭を垂れて「勝家公家来」と名乗れば助かったともいう。

次は秀吉の小田原攻めのおり、前田利家らの猛攻を受けた八王子城（東京都）。後北条氏の関東の拠点であったこの山城は、濃い朝霧に隠れて奇襲した寄せ手の大軍との終日の激闘の末、天正十八年（一五九〇）六月二十三日陥落した。以来、この地は忌み地として土地の人も近づかなかったが、その禁を犯した者が恐ろしい体験をした。城山を一望する要衝の地「月夜の峰」に足を踏み入れた者は、霧の中に旗や幟が棚引くのを見、沸き上がる人馬の怒号・喚声に包まれた。また、寄せ手の兵が、恩賞目当てに打ち取った首を下げて利家の本陣へ向かった「下げ坂」という峠道では、ここを通った仲のよい夫婦がたちまち離縁したり、夕暮れ時には、幾つもの武者の首が飛んで追って来たりしたそうだ。以来四〇〇年以上を経た今日でも、この城跡で「何か」を見聞きする人は後を絶たないという。

最後は、三万七〇〇〇もの老若男女がほとんど全滅した「島原の乱」の原城（長崎県）の伝説。領主有馬氏の信仰の影響でキリシタン信徒の多かったこの土地に、新領主松倉氏が入府、島原城を拠点に信徒の摘発を始めた。特に二代目松倉勝家の信徒弾圧、凶作も無視した領民への年貢取立ては過酷を極め、圧制に耐えかねた島原、天草の信徒・領民は遂に決起。彼らは原城に立て籠もり、幕府の大軍相手に数十日間ここを死守したが、寛永十五年（一六三八）二月二十八日遂に落城し、生き残った婦女子も改宗を拒んだためことごとく首を跳ねられ晒された。戦後、城跡には幽鬼が出没するといわれ、雨の降る夜などには、空堀や蓮池の辺りからうめき声が聞こえたという。また松倉勝家は乱の責任を問われ死を命じられたが、その後の島原城主にも変死、夭折が相次ぎ、祟りと噂された。

こうした伝承は、非業に死んだ者達に対する、庶民の哀惜の念と想像力が編み出したものなのか。それとも、戦場に充満したであろう怒りや悲しみ、恐怖などの強烈な感情が、何らかの現象を引き起こしたものなのか、わからない。

しかし原城の例で、戦後死骸を集めて焼却する際、群がる蝿で地面が見えなかったなどという酸鼻な話を聞き、一方でそうした無惨な領民皆殺しのあと、無人となった土地に人を呼ぶため、年貢免除の「作り取り」を許したところ、他領の農民はおろか、浪人・旅芸人まで殺到したという話を聞けば、真に物凄いのは死者の恨みより、生者の営みだと感じるのは筆者だけではあるまい。

南太平洋の苛烈な戦場を生き抜いた執念の男

◎二号連続インタビュー《前編》

元海軍陸戦隊 小隊長

福山孝之

Interview FUKUYAMA Takashi

文＝小畑雄二 写真＝勝倉崚太



館山海軍砲術学校の正門風景。学生たちは日夜を分かたぬ猛訓練を受け、高度な陸戦技術を体得した。



昭和17年11月、海軍兵科予備学生時代の福山氏。

見捨てられた戦場

絶対国防圏――。

それは昭和十八年（一九四三）九月に大本営が策定した〝帝国戦争目的達成上、絶対確保を要する圏域〟のことである。

簡単に言ってしまえば、少し戦闘地域を拡大しすぎたので、ここらで手堅い戦線だけでもしっかりと確保しておこう、ということだ。

海軍、陸軍それぞれに思惑があり、手仕舞いする地域については微妙な駆け引きを生むが、結局は九月三十日の御前会議において、この策定をもとにした新しい戦争指導方針が決定された。

絶対国防圏、といえば聞こえはいい。だが、確保する部分を縮小するということは、その外側は諦めるということである。死守すべき線の外側で戦っていた兵士たちは、文字どおり見捨てられた存在となる。

置き去りにされた兵士たち――。元海軍陸戦隊、福山孝之（ふくやまたかし）もその一人であった。

「ひどい話だな、と思います。もう食料は送れないから自分たちで勝手に食べていきなさい、弾薬も送れないが、なんとかして死ぬまで戦いなさい、ということですよね。

およそ三〇万人の兵士が、見捨てられたことになります。たとえば東部ニューギニアには約一二万人の兵士がいましたが、終戦時に生きていたのはわずか八〇〇〇人です。一一万人は置き去りにされたまま死んでいったのです。

私のいたブーゲンビル島の場合でも、六万七五〇〇人いた兵士のうち、終戦時まで生存していたのは二万四五〇〇人。つまり四万三〇〇〇人が死んだわけです。しかし、その中で敵と戦って戦死したのは、およそ九〇〇〇人くらいです。あとの三万四〇〇〇人は非常に残念なことに餓死、もしくは病死でした……」

砲術学校で学んだことと実戦体験との間にギャップはほとんど感じませんでした

死者の八割近くが餓死か病死。

これが、絶対国防圏の外側に置き去りにされた兵士たちの真実である。

あと少しの食料さえあれば生き延びるはずの命が、次々と失われていった。わずかな薬さえあれば助かる命が、はかなく消えていった。

これはもう、上層部の判断ミスや作戦の失敗とは呼べない。端的に言って大量殺人そのものである。

しかし、飢餓と悪疫が跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）する南方の島で、福山孝之とその部下たちは忍び寄る死の影と果敢に戦い、しぶとく生き抜いていった。はたしていかなる勇気が、そして叡知が、無慈悲な死神の魔手から彼らを救ってくれたのであろうか。

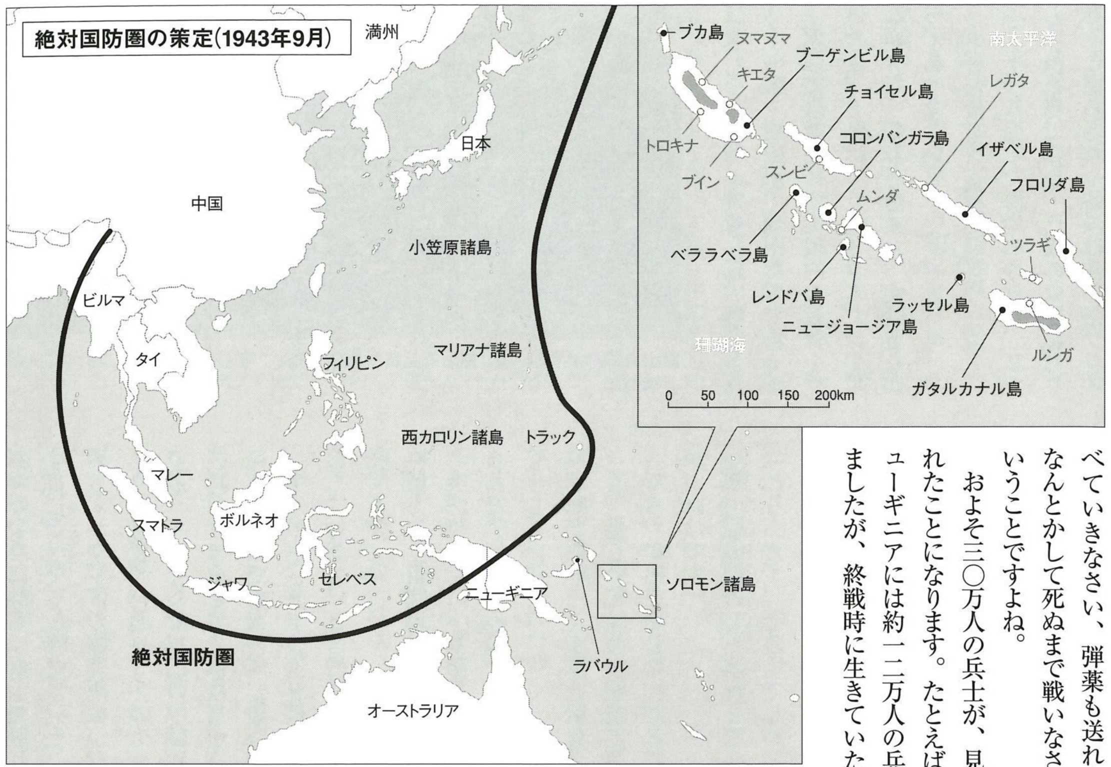
その真実の一片を垣間見るためには、まず福山孝之という類まれなる男の、人となりを知ることから始めなければならない。

館山海軍砲術学校

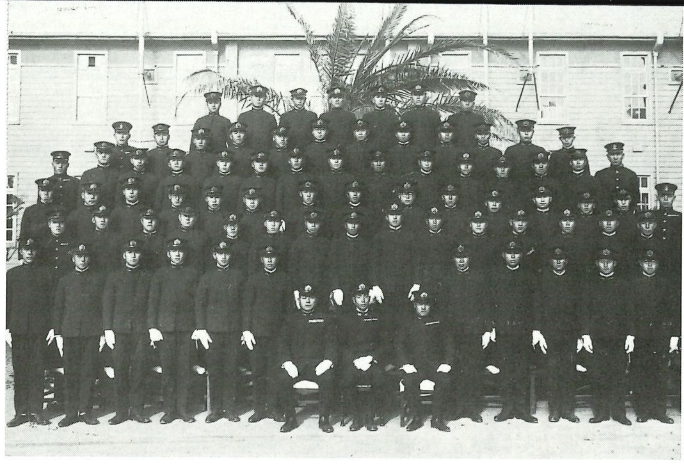
昭和十六年末に東大法学部を繰り上げ卒業した福山は、翌十七年一月二十日、第一期海軍兵科予備学生を志願して横須賀海兵団に入団。

横須賀では半年間、基礎訓練を受けた。この半年は体力づくりとともに、海軍精神の何たるかを叩き込まれる期間である。そして基礎教育を終えると専門の術科、すなわち陸戦、対空、通信、機雷の各コースに進むこととなる。福山は陸戦を選び、同年七月に千葉県の館山（たてやま）海軍砲術学校、通称『館砲（たてほう）』に移った。

同校は、陸戦と陸上防空専門の実施学校として昭和十六年春に新設されたばかり。日本海軍では、従来より陸戦隊を組織していたが、広大な太平洋海域で島嶼作戦が展開されたため膨大な兵力を必要とし、なかでも陸戦のあらゆる局面を指揮できる、有能な海軍士官の養成が急務とされていた。同校に



守勢に立たされた日本は戦線の縮小を余儀なくされ、戦争継続のために必要不可欠である地点を定めて絶対国防圏を策定した。だが、それは圏外にある戦域の将兵を見殺しにするということでもあった。右上は、福山氏が転戦した中部ソロモン地域の拡大地図。



館山海軍砲術学校の第1期海軍兵科予備学生たち。写真前から3列目、右から3人目が福山氏。

は大いなる期待が寄せられ、嘱望されるその第一期生が、福山たちであった。

館砲では徹底して実戦的な教育を受けたが、それはカリキュラムだけではなかった。厳しさもまた、実戦さながらであったという。

人呼んで——地獄の館砲。

「太平洋に面した海岸の砂浜が、私たちの演習場でした。真夏の太陽にじりじりと照らされた砂浜は熱したフライパンのように熱く、素手で触れるとやけどしそうなくらいです。そこで何時間もぶっつづけの陸戦訓練が行われました。砂浜を何百メートルも匍匐（ほふく）前進で這っていくので、口の中は砂利だらけになりますし、身体は気が遠くなるほどの熱さでうだってしまいます」

半死半生状態で砂浜を這いずる福山たちに対して、ときおり教官が大声を発する。

「前方より敵戦車出現！」

突然の指示に、小隊長の役を割り振られた生徒がどうしようかと考えをめぐらしていると、

「判断が遅い！　小隊長戦死！」

と、厳しい叱咤の声が飛ぶ。

「でも、戦死を命じられた者はまだ運がいいのです」

と、福山は厳しい演習を回顧する。

「とりあえず、その場でじっとしていればいいのですから。私たちはそんな〝戦死者〟を羨ましそうに横目でにらみながら、疲労困憊した身体にムチ打って前進を続けなければなりません。

いよいよ敵陣間近になると、新小隊長役の者が突撃を命じます。みんな一斉に立ち上がって駆け出しますが、もうまともに突撃する体力は残っていません。右にふらふら左にふらふら、なかには石につまずいて転倒する者も出る始末です。最後に教官の『演習終了！』の声と同時に、半ば気を失うように倒れ込む者が続出しました」

演習終了地点には救護班が待機しており、意識を失った者はトラックで病室へ直送されたという。

誤解のないよう書き添えておくと、このとき実地訓練を受けていた予備学生は、福山を始めとして皆、学生時代にスポーツで鍛えられた屈強な若者ばかりである。剣道、柔道の有段者はゴロゴロいるし、野球部やラグビー部の花形選手も少なくなかった。

その彼らをしてこの有様だ。

〝地獄の館砲〟の呼称は、伊達（だて）ではなかったのである。

猛訓練の日々

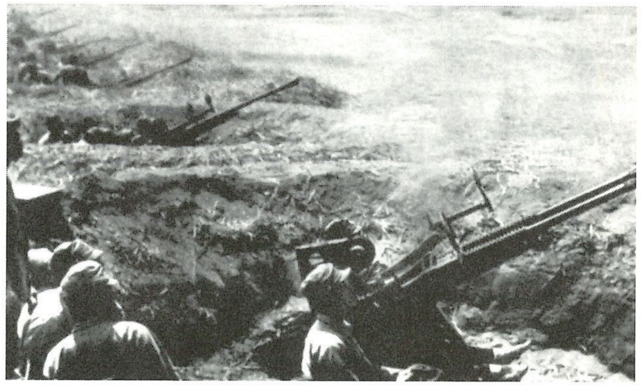
厳しいのは演習だけではない。

学ぶべきことの多さも、また福山たちを圧倒した。

「陸上戦闘の実際に始まり、戦場での指揮、それから山砲、歩兵砲、速射砲の操法、さらに対空射撃……と、習うべきことは膨大な量となりました」

さらには、戦車の操縦から実弾射撃まで訓練したというから驚きだ。

「まさか海軍に入って戦車を操縦するとは思いませんでした（笑）。戦車というのは操縦していると激しく上下に揺れますから、射撃で狙いをつけるのがたいへん難しいのです。しかも銃眼が小さいので、私のように眼鏡をかけている者には難しさが倍加します。三〇〇メートル先の目標を撃てとか命じられるのですが、私の場合これがほとんど当たりません（笑）。



房総半島南端ちかくにある平砂浦海岸の演習場で、実地訓練に励む館山海軍砲術学校の訓練生たち。

それでもひと月くらい、みっちりと鍛えられました」

館山海軍砲術学校は陸上のことなら何でもこなせる軍人の養成を目指して開設された学校である。学ぶべきことの多さに、福山たちが目を丸くして驚いたのも無理はない。

しかもそれを、半年間というごく短い期間に詰め込まれる。福山たちに課せられたプレッシャーは、半端なものではなかった。

「わずか半年の授業だというのに、教科書と参考書を積み上げると六〇センチほどの高さに達しました。本当に膨大な量です。とてもじゃないが正規の授業だけでは時間が足りません。空いた時間を使って、自習室で参考書を読まなくては追いつきませんでした」

しかし、いずれの授業も非常に興味深いものばかりであった。また実戦に役立つものばかりであったという。

「館山で学んだことと、戦地での実戦体験との間に、ギャップはほとんど感じませんでしたね」

のちに福山は、生死が隣り合わせの激戦地へと送り込まれ、そこで想像を絶するほど凄惨な体験を強いられる。

地獄のような戦場で、彼とその部隊はなぜ生き延びることができたのか。理由はいくつかあるだろう。しかしそのひとつに、砲術学校での厳しくも実戦的な訓練があったことは間違いない。

地獄の館砲——。

それは同時に、地獄を生き延びるための館砲、であったのかもしれない。

海軍陸戦隊

ところで、なぜ海軍への入隊を希望しながら、わざわざ陸戦隊を選んだのか。そう訪ねると、福山は苦笑しながらこう答えてくれた。

「せっかく海軍に行ったなら、艦に乗りたいというのが普通ですよね。私も通信士として軍艦に乗ってみたかったのですが、通信科はかなり狭き門でした。五〇名くらいの枠のところにその三倍ぐらいの希望者が殺到します。選ばれるのは成績も重要な要素ですが、同時に外見も重視される……みたいなんです。スラリと背の伸びた、いかにも若き海軍将校といった容姿の者が選ばれていきます。で、私みたいに柔道をやっていてガニ股の男は、陸戦隊へとまわされるわけです（笑）。海軍将校らしからぬ格好の悪いやつは、陸戦隊にでも放り込んでおけ、というわけでしょう。実際、陸戦隊に選ばれた仲間を振り返って見ると、みんな揃ってガニ股でした（笑）」

と、福山は笑いながら話す。

が、実際のところはどうなのだろう。身体頑健で屈強な若者を優先して陸戦隊に選んだという気がしないでもない。

いずれにせよ、福山は陸戦隊に選ばれたことを後悔していない。それどころか誇りに思っている。

なぜか——。

それは、彼らが海軍の中において非常に希少価値の高い、ある意味でのエリートだからである。

「陸戦を専門に学んだ海軍士官というのは、数えるほどしかおりません。私たちは厳しい訓練のおかげで、陸戦のすべてを身につけました。たとえばあらゆる種類の大砲の撃ち方を知っています。さまざまな陸上戦闘の指揮をとれます。陣地構築の計画も立てられますし、報告書もちゃんと書けます。こういう人材というのは、海軍の将校にほとんどいないんですよ。

ですから、実際に戦地へ赴きますと、私たちはたいへん大事にされるわけです。こいつはとても役に立つと。上層部からも非常に可愛がられました」

局地防衛のため、占領地区の島々に配する陸戦隊編成において、初級士官不足は切実な問題であった。福山たちが、即戦力として重用されたのも当然であろう。

こうして大いなる期待のもとに育てられ、旅立っていく彼らだが、その前途に少なからぬ暗雲が漂っていたことは、福山自身も充分に承知していた。

いよいよ戦地へと赴く日、彼は日記の冒頭にこう記した。

この辺で遺書を書いておくのも無駄ではあるまい——、と。

ソロモン諸島へ

昭和十八年一月、予備少尉に任官した福山は、横須賀鎮守府第七特別陸戦隊（横七特）に配属され、南太平洋の激戦地・ソロモン諸島方面に出征。同年二月十七日、ラバウルへ到着する。

同地で銃隊の第三小隊長に任命された福山は、そこで部下である五〇名の隊員たちと引き合わされた。

と、そのとき。

福山は我が目を疑った。



日本軍の南太平洋方面における戦略拠点・ラバウルから前線へ出発する海軍陸戦隊。彼らの大半は二度と祖国の土を踏むことなく戦場に散った。

「あのときのことは、今でも忘れられません。新任の小隊長を迎えて、みんな私に敬礼しているのですが、彼らの足はだらっと曲がったままで、背も丸まっている。銃の持ち方もバラバラ。そして覇気のない目で、ぼんやりと遠くを見つめているだけ。これで第一線の役に立つのだろうかと、暗澹たる気分に襲われました」

これには事情がある。彼らはほとんどが十七歳以下の若い志願兵だが、なかには何度も戦地を転々とさせられてきた古参の応召兵もいる。

「ガダルカナルの生き残りや、ミッドウェーで乗艦を失った兵士もいました。彼らは防諜上の理由で、内地勤務はさせられないのです。運が悪ければ、何度でも南洋の激戦地へ飛ばされるでしょう。己の運命を、半ばあきらめているように見えました。彼らはいわば、軍の方針の犠牲者でもあったのです」

しかし、落ち込んでばかりもいられない。福山は気を取り直して、部下たちの訓練に取りかかった。館山での日々を思い出しながら、陸戦のイロハを根気よく教え込んでいった。訓練を繰り返すうちに、第三小隊は少しずつだが陸戦隊として機能するようになっていった。また片腕として信頼できる部下とも出逢うことができた。

そして四月一日、福山率いる第三小隊はコロンバンガラ島へ上陸する。すでに周辺の制空権は米軍へと移っていた。当然、夜の闇の中、敵機の襲撃を避けての上陸である。

「荷物と一緒に大発(上陸用舟艇)に乗せられ、静かに波間を進んでいきました。ふと横を向いているうちに、私たちを運んできてくれた駆逐艦の姿は、いつのまにか闇の中へと消えてしまいました。突然、寂寥感が胸をこみあげてきます。これまでの人生が走馬灯のように脳裏に浮かんでは消えていきました」

漆黒の闇の中を大発は進む。

やがて福山の感傷を振り払うようなガツンというショックとともに、大発は砂浜へと乗り上げた。

コロンバンガラ島での苦闘の日々が、この瞬間から始まったのである。

艦砲射撃の恐怖

「コロンバンガラでは、何から何まで自分たちでやらねばなりませんでした。海岸に降ろされた荷物運びから、兵舎づくり、陣地の構築、トンネル掘り、全部やるのは自分たちです。専門の工作兵や設営隊がやってくれるわけではありません」

しかし、これはある意味、福山の腕を存分に発揮するところでもあった。館砲での厳しい訓練のおかげで、やるべきことのほとんどは頭の中にあった。

とはいえ、予想外のこともある。

「コロンバンガラ島は、周囲をサンゴ礁で囲まれていて、海岸近くにはあまり泥がないんですね。ツルハシで掘ろうとしても、カチーンという音がして白いサンゴの欠片が飛び散るだけで、穴が掘れません。そこでまずノミと槌で小さな穴を開け、そこにダイナマイトを仕掛けます。爆破しないと穴が掘れないんですよ」

しかし大胆なものである。今でいう爆発物取り扱いの資格など、誰一人持っているわけはない。よくぞ本人も部下たちも無事で済み、怪我人や死人が出なかったと感心せざるを得ない。

さて、島に上陸して一か月ほどたったある日の夜、すさまじい衝撃音で福山はベッドから飛び起きた。あわてて防空壕へと飛び込む。米駆逐艦や巡洋艦による艦砲射撃である。

「とてつもない轟音です。何百もの雷がいっぺんに落ちてきたような感じでした。恥ずかしい話ですが、震え上がりましたね。歯の根が合わないというのはこういうことなのかと、初めて知りました」

この後も、敵の艦砲射撃は一か月に一度の割合で繰り返されることになる。また空襲は三日に一度と、さらに頻度が高かった。端的に言ってしまえば、この島はすでに敵に包囲されていたのだ。当然、後方からの補給も徐々に途絶え始め、必要な食料、弾薬、医薬品なども不足するようになってくる。

孤立した島に、取り残された兵士たち。それが福山たちの偽らざる姿であった。そして状況は、日を追うごとに悪化していったのである。



福山氏が送り込まれたコロンバンガラ島。直径20キロ余りのほぼ円形の島で、マラリアやアメーバ赤痢などが蔓延する悪疫の地であった。

絶体絶命の脱出劇

昭和十八年九月二十四日、ついに『コロンバンガラ島から撤退せよ』との命令が本部から届く。

撤退作戦は大がかりなものであった。約一〇〇隻の大発を主力とし、駆逐艦十数隻と、ショートランドの水上機隊が応援に回る。

「もしかしたら生き延びることができるかもしれない――、そんなかすかな希望が胸のうちに湧いてきました。これまで制空権、制海権ともに米軍に取られ、正直なところいずれは全滅しかないだろうと覚悟していたのです」

とはいえ、島からの脱出は容易ではない。獰猛な捕食者のように、敵の魚雷艇が島の周囲を我が物顔で駆け巡っている。その先には米駆逐艦が二隊に分かれて目を光らせている。もちろん航空機の襲来もあるだろう。この二重三重の包囲網を突破して、本当に脱出できるのだろうか。

十月二日、ついにその審判が下されるときがやってきた。

他の部隊とともに海岸まで辿り着いた福山たちを待っていたのは、十数名の士官たちの言い争いと怒号、そして混乱であった。この地区に来るはずの大発の数が、予定よりだいぶ足りないのだという。

結局、定員七〇名の大発に一一〇名が乗り込むということで話がついた。

当然、舟は大きく沈み込む。このままではとても湾外まで走れるとは思えない。荷物はできるだけ捨ててくれ、と艇長が叫んでいる。

「私も手もとに五挺だけ小銃を残し、あとの軽機関銃や小銃は海へ投げ捨てるように命じました。もったいないですが、仕方ありません」

やっと舟が動き出した。

乗員たちの歓喜の声もつかの間、一〇分もしないうちに、魚雷艇が襲いかかってきた。後方から激しい機銃掃射の音が鳴り響く。大発はそれぞれが思い思いの方向へ必死になって逃げ出す。このままでは、敵の餌食になるのも時間の問題かと思ったとき、天の助けか、急に霧が深くなってきた。横殴りの雨も激しく降り注ぐ。

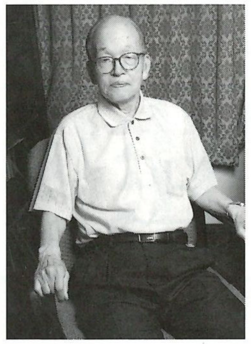
「突然やってきたスコールのおかげで、魚雷艇の追跡をなんとか撒くことができました。と、そのうちに雨が上がります。すると夜の闇をついて、赤や青の曳光弾が彼方で軌跡を描いているのが見えました。遠く砲声も聞こえます。どうやら駆逐艦同士の戦いが行われているようでした」

まるで不思議な幻想絵画のように、赤や青の光線で怪しく彩られた空を遠く眺めながら、福山たちを乗せた大発は、夜の闇の中をゆっくりと北へ向かった。どうやらコロンバンガラ島からの撤退は、奇跡的に成功しつつあった。

この後、彼らを乗せた大発はチョイセル島を経て、ブーゲンビル島のブインへと向かう。

この先に、救いのない飢餓と悪疫が待ち受けていることなど、このときの彼らは知る由もなかった。

福山たちの苦難の日々は、まだまだ続くことになる……。《次号に続く》



Profile
福山孝之(ふくやま・たかし)大正7年島根県生まれ。昭和16年12月、東京大学法学部を繰り上げ卒業。海軍兵科予備学生を志願し、翌年1月に第1期生として横須賀海兵団へ入団。半年間の基礎教育の後、館山海軍砲術学校で術科教育を受ける。昭和18年1月、予備少尉任官とともに南太平洋のラバウルにある横須賀鎮守府第7特別陸戦隊に着任。同年4月、コロンバンガラ島に進出し、以後終戦まで中部ソロモン諸島を転戦する。捕虜収容所での生活を経た後、昭和21年2月復員。最終階級は大尉。戦後はソロモン方面戦没者の慰霊活動に力を注いでいる。

再考 幻の秀次政権

豊臣ネクスト・キャビネットの明暗

豊臣秀吉が築いた政権には、明確な後継者が不在であった。そこで秀吉は、甥である秀次に譜代の武将を附属させ、次期政権の準備を進めた。しかしその政権は、秀吉直系の新官僚団の台頭、秀吉の嫡子誕生により大きく揺れ動き、ついに瓦解する。

文＝橋場日月

豊臣秀次とその宿老たち

天正十三年（一五八五）閏八月二十二日、関白豊臣秀吉はひとりの若者に文書を発行した。

「江州所々において、自分弐拾万石、并其方相付け候宿老共当知行弐拾三万石相加え、目録別紙に之在り。都合四拾三万石宛行畢。この旨を相守り、国々政道以下堅く申し付くべき者也。

閏八月廿二日　（花押）

羽柴孫七郎殿」

文書の宛先である羽柴孫七郎は、このとき数えで十八歳にすぎない。そんな若僧になぜ「宿老」の分も合わせ四三万石という大封が与えられたのか。それはこの若者が秀吉の甥、秀次だったからである。

この年の紀伊・四国攻めにおいて秀次が副司令官を務め、雑賀衆の圧伏や四国の雄・長宗我部元親降伏の功績を挙げたことに対する褒賞として宛行がなされたわけだが、この時四三万石の内の二三万石に封じられた「宿老」たちというのは、田中吉政・中村一氏・堀尾吉晴・山内一豊らであった。

彼らは秀吉の部将としてそれぞれに活躍してきた男たちで、このとき初めて秀次付きとなっている。

これは、どんな政治的意味を持つものなのか、そしてこれからのち、彼らがどのような政治的動きをしていくのかを考えてみたい。

秀吉の天下統一と近江

ここで直前までの近江の状況を記しておこう。

天正十年（一五八二）、本能寺の変で織田信長が明智光秀に討たれると、秀吉は中国から急転回して光秀を討ち、その後の織田家内での発言権を増大させた。この後開催された清洲会議で、近江のうち安土は信長の嫡孫の織田三法師（のちの秀信）、長浜は柴田勝家の養子・勝豊、滋賀・高島は丹羽長秀、佐和山は堀秀政と、分配がなされた。

無論、その配分については秀吉の主導権下で取り決められており、表面的にはあくまでも織田家領国としての近江に、正式に織田家の相続者となった



「豊臣秀次像」（京都・瑞泉寺蔵）

豊臣政権の継承者として、重責を背負っていた秀次。関白位を秀吉から受け継ぎ、その養子となった時が、秀次の最盛期であった。

三法師が入ってその本拠を安土と定め、堀秀政が補佐役として領地管理に任じる。

その周囲を織田家宿老の柴田勝家・丹羽長秀、それに秀吉が固めるという体裁をとっている。

秀吉にとっては、自分のシンパになってくれて清洲会議においても彼の意に沿って談合を取りまとめてくれた丹羽長秀は、複雑な政局を睨んで近くに置いておきたい。

「織田家宿老」の肩書きを持つ長秀を前面に出すことにより、秀吉みずからの天下取りに向けての政略をカムフラージュすることもでき、秀吉にとってはこの時期手放すわけにはいかない人物であった。

近江での領地配分のこの微妙なバランスは当然長続きせず、秀吉の覇権推進を認めずにあくまで織田政権の存続を第一とする柴田勝家は、翌天正十一年（一五八三）の賤ヶ岳の戦いで秀吉に敗北し、秀吉は戦後の論功行賞として丹羽長秀に勝家の旧領・越前一国と加賀二郡を与えた。一二三万石という大封は、たしかに望外ではあったが、反面、政治の中枢からは遠ざけられてしまったというのが本当のところである。

同様に摂津の池田恒興も美濃大垣一三万石に移され、摂津は秀吉の本拠地となって大坂城の築城が開始された。

長秀が去ったあとの近江でも、杉原家次が坂本に、浅野長政が瀬田に入り、秀吉近臣によって固められている。長政は秀吉の正室お禰の義兄、家次は同じく叔父という間柄であり、これは大坂を中心に、秀吉政権の周囲に気心の知れた者たちを配置するという大原則に従ったものであろう。

清洲会議で取り決められた近江の所領割り当ては、明智光秀の坂本が空白地となり、柴田勝豊に長浜が与えられるという新旧領主の顔ぶれの変更はあったが、それ以外は丹羽・堀といった連中がところてん式に領地を移っているだけと言っても良い状態だったのだが、今回の異動では佐和山の堀秀政は三法師補佐という職掌柄残留したものの、それ以外は初めて秀吉の恣意的な人事が実現したのである。

三法師を名目上の主君として担ぎ、丹羽長秀を幻想の「織田三法師政権」の代表者として、傀儡師のように彼らを裏から操っていた秀吉が、これ以降は全くその必要を失って、自らが天下の主宰者として近江の直接統治に臨む。

近江は第一に近畿の穀倉地帯であり、京に近く、北陸の上杉景勝や丹羽長秀といった大大名と大坂との間の緩衝地帯となる重要な地である。その近江を、秀吉は今や自分の庭として手中に収めたのであった。

豊臣政権の弱点と秀次の立場

秀吉の覇権が確立すると、不満を抱いたのは信長の次男、信雄であった。

弟・信孝と織田家家督を争った信雄は、信孝の傅役が柴田勝家であったために必然的に秀吉を頼り、見事に籠絡されて清洲会議では三法師の後見役として尾張・伊勢を支配することとなったものの、その後は賤ヶ岳の戦い以前から漠然とした不安を秀吉に感じるようになっていたのであろう。天正十一年の初めには秘かに徳川家康のもとを訪れて何事かを密談している。

直後の賤ヶ岳の戦い後には、弟の信孝に自ら詰め腹を切らせたものの、天下の権が秀吉に握られたことを悟った信雄は、俄然断交して家康に助けを求め、天正十二年の小牧・長久手の戦いへと繋がっていく。

この戦いは局地戦で家康が勝利を収めたが、秀吉が信雄と単独講和したために家康もそれ以上戦いを続ける大義名分を失い、撤兵していった。ここに一応の近畿情勢の安定を見た秀吉は、



「山内一豊画像」（土佐山内家宝物資料館蔵）

秀次宿老として一豊に期待されたのは、武辺として秀次を盛り立てる役割だった。秀次の死の前後には、若手官僚の台頭によって政権内での居場所を失いつつあった。一豊や中村一氏ら、初期の秀次宿老たちが徳川家に近づいたのも必然であったろう。

翌天正十三年七月に朝廷の最高職、関白に任官し、天皇を奉戴した公武合体政権を樹立するのである。

こうして成立した秀吉政権は、ひとつ致命的な欠陥を内包していた。それは、秀吉に跡継ぎがいなかった事である。この欠陥はこののちも秀吉政権にとってアキレス腱となり、様々な問題を派生させる要因となるのだが、この段階で跡継ぎ不在という事実が惹起する不安要素は、政権の永続性に対する疑問という一点に尽きる。

そもそも秀吉の関白任官は、内大臣近衛信輔と関白二条昭実の間で関白位の取り合い（「関白相論」）が起こったことに目をつけた秀吉が、調停と称して争いに介入したことから始まる。自分が信輔の父・近衛前久の猶子となり、先に関白に就任してそのあとで信輔に位を譲ろうという秀吉の提案に、前久は「当家再興たらば、いかやうにも秀吉お計い次第」（『三藐院記』）と、恩賞につられて話を呑んでしまったのである。

五摂家（近衛・鷹司・九条・二条・一条）以外の人間、しかも平民出身の秀吉が関白になることについては、誰もが「先代未聞の事也」（『多聞院日記』）と驚き呆れており、ただでさえ秀吉関白に対して懐疑の目で見る者が多い。そのうえ後継者もいないとあっては、果たしてこの関白様についていっていいものかどうか、迷うのが人情というものであろう。

そこで秀吉は、翌月に紀伊・四国攻めに参加してそれなりの功績を挙げた秀次を近江に封じ、同時に（閏八月十九日）紀伊・四国攻めの総大将であった弟の豊臣秀長を大和・紀伊一〇〇万石に封じて「豊臣家に人材あり」という大花火を打ち上げるとともに、大坂を南北から支える体制を作り上げたのである。「後継者候補」をアピールすることによって人心の安定を図った秀吉は、その後継者候補がボロを出さないよう、宿老の人事には気を使ったであろう。

宿老人事と秀吉の意図

こうして秀吉により人選された宿老たちの領地配分は次の通りである。

【中村一氏】水口城主、伊賀と合わせ六万石

【山内一豊】長浜城主、二万石＋代官領一万石

【堀尾吉晴】佐和山城主、四万石

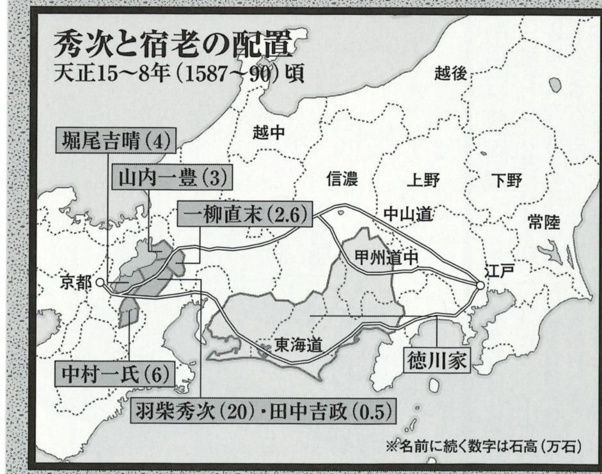
【一柳直末】美濃大垣城主、二万五〇〇〇石＋近江八幡で一〇〇〇石

【田中吉政】五〇〇〇石

彼らのうち田中吉政のみが城を持たないが、彼は「一老」（『石川正西見聞集』）と呼ばれる筆頭家老であり、京都に多く滞在して留守がちな秀次に代わり、その居城・近江八幡山城に常駐して近江の政治を管掌していたもので、官僚的な立場と役割である点で、少々毛色が異なる。

一柳直末は、すでに前年の小牧・長久手の戦いの時には秀次の麾下となっており、これも以下の三人とは多少事情が違っている。

中村一氏は、山崎の戦いで先手鉄炮大将を務め、秀吉にその手腕を称賛されている。賤ヶ岳の戦いに先立つ伊勢亀山城攻めには秀次の先鋒となり、続く賤ヶ岳の戦いにも秀次麾下の部将として参加している。



秀次と家臣団の領地は、近江周辺を通る中山道、東海道を押さえている。これら街道は、常時は物流の大動脈として、また戦時には兵站路として重要であり、これらを制する近江は関西圏の要衝であった。

堀尾吉晴は、山崎の戦いで天王山を先取、賤ヶ岳の戦いの時は、大垣に残留したのち氏家直通を説得して秀吉軍に加わらせ、ともに賤ヶ岳の秀吉のもとに急行した。

山内一豊は、伊勢亀山城攻めで亀山城櫓崩しに殊功を挙げ、一番乗りにも成功して武名を轟かせた。賤ヶ岳の戦いでは柳ヶ瀬あたりで柴田勢を追撃して戦功を挙げている。

小牧・長久手の戦いの際には、中村一氏が岸和田城主として紀伊勢を押さ

え、堀尾吉晴は竜泉寺城に在番している。山内一豊は、柏井の森川屋敷砦に在番したあと、羽黒の砦の修築工事に携わってそのまま在番した。

堀尾吉晴がのちに奥州九戸の乱で活躍し、秀吉に「日本無双の剛の者」と称賛されたように、彼らはいずれも武将としての側面が強い者たちであり、その点で官僚的な田中吉政とは一線を画する。

小牧・長久手の戦いの開始後、堀尾吉晴は若狭高浜城主一万一〇〇〇石から近江坂本二万石に移封されており、これが翌年の秀次とその宿老連の近江転封の先駆けとなった。

では、秀吉が堀尾・中村・山内・田中らを秀次に附属させた理由は何だったのであろうか。

彼ら「宿老」たちは、のち江戸時代に徳川家康が九男の義直や十男の頼宣に、それぞれ付家老を張り付けたのと同じ役割を与えられていたものと思われる。付家老の成瀬正成らは、家康から特に言い含められ、義直らに対する強い発言力を持ち、監視と育成を行う任務を与えられたのである。

これと同様に、秀次の宿老たちも若い秀次を補佐し、指導することを期待されたのだが、もうひとつ、いまだ天下統一の完成がなされていない状況下において、秀次に四三万石分の軍役を落ち度なく務めさせることが条件づけられていたであろうことは想像に難くない。

秀次の軍事的才能については、前年の小牧・長久手の戦いで大きな疑問符がつけられてしまったばかりであった。池田恒興らの提唱した「三河中入」*を承認した秀吉が、その別働隊総大将に恒興の娘婿である秀次を任命するが、別働隊が家康の奇襲を受けて粉砕されたとき、秀次は命からがら逃げ延びて秀吉のもとに戻った。そんな秀次に向かって、秀吉は折檻状を送っている。

「その方を他国させ候へば、恥の恥にて候間、人手にはかけまじき事」

おまえを他国へなどやれば、恥の上塗りになるだけだから、人手には頼らず自分でおまえを成敗する、とその中で秀吉は秀次を威嚇しているのだが、同時にこうも述べている。

「器用又は小賢しく物をも申し付け、武者をも致すべしと見及び候へば、（中略）秀吉代をも致し為すべきかとも存じ候」

器量をあげて賢明な指示を出せるようになり、合戦でも一人前になったと見極められるようになれば、秀吉の名代にもしてやろうかとも思っている、というのである（以上『武家事紀』）。

この段階ですでに秀吉は、秀次後継者構想を端なくも吐露している。この叱責を受けて秀次は翌年の紀伊・四国攻めに必死に取り組んだわけだが、総大将に秀長を戴いた軍勢は順調に勝ち進み、秀次も無難に副将の役割を果たすことができた。これによってますます「秀吉代」が現実味の高い話となったのである。

その秀次に附属された宿老たちにすれば、大過なく秀次に政治・軍事をこなさせれば、あるいは秀吉の後継政権（秀次政権）の権力中枢を独占できるかもしれない。

この人事は、彼らにとっても「ネクスト・キャビネット」としての評価テストのスタートラインだったのである。

この時点での秀吉政権はいまだ一大名の統治機構の域を出ず、浅野長政や杉原家次らが家政を取り仕切り、黒田孝高・蜂須賀正勝といった重臣たちが外交・軍事を見るだけのものであった。秀吉政権はこれからさらに拡大していく事が確実であり、政権運営の人員についてもこれからの新陳代謝が大いに考えられるところである。

特に、秀吉の旧領長浜を与えられた山内一豊などは、将来への期待に大きく胸をはずませたことであろう。

近江から東海道への移封

しかし、彼らの近江在任期間は短かった。

五年後の天正十八年、秀吉は関東の北条攻めを発令する。世に言う小田原の役であるが、この戦いは秀次にとっても長久手における大失態の汚名を返上する機会であった。

この戦いで秀次は山中城攻めを担当する。山中城は小田原の西を守る北条方の最重要拠点であり、わずか四〇〇〇の兵ながら七万の秀次勢を引き受けて必死に戦った。秀次も失敗が許されない状況の中、彼の宿老たちも強攻策を採り、中村一氏が先鋒として活躍した他、一柳直末に至っては壮烈な討ち死にを遂げるほどの激戦の末、半日で城を陥落させている。

この力攻めは秀次の名誉挽回のためでもあったが、ひとつには三年前の九州攻めで秀吉が難攻不落の天険と言わ

＊1584年の「小牧・長久手の戦い」で行われた、羽柴勢による三河侵攻作戦を指す。小牧山周辺での羽柴・徳川両軍の対陣が膠着したため、それを打開すべく羽柴方の池田恒興が発案。羽柴秀次を大将に2万の軍勢が進発したが、長久手周辺で徳川勢に捕捉された。

れた巌石城を一日で攻め落として島津勢の戦意を挫いた前例にならい、秀吉後継者としての存在感を印象づける狙いもあったであろう。

そしてこの戦いの終了と同時に、秀次は尾張清洲へ転封となったのである。同様にその宿老たちも、東海道の各所に移された。

【山内一豊】遠江掛川五万石
【堀尾吉晴】遠江浜松一二万石
【中村一氏】駿河駿府一七万五〇〇〇石
【田中吉政】三河岡崎五万七四〇〇石
【渡瀬繁詮】遠江横須賀三万石
【一柳直盛】（直末戦死の跡を継ぐ）尾張黒田三万石

一様に所領が増やされた訳であるが、この移封は何を意味するのであろうか。無論、軍事的観点から言えばこの人事は関東に移封となった豊臣政権下最大の外様大名、徳川家康の監視を目的としていることはいうまでもない。

秀次の尾張清洲を本営とし、三河岡崎―遠江浜松―遠江横須賀―遠江掛川―駿河駿府と縦深陣地のように宿老を各城郭に連鎖配置したのは、徳川氏を仮想敵国として軍事的には臨戦態勢を採ったものである。

『武家事紀』がこのとき秀次が「関東管領を承」ったとしているのは、この事情を指している。その証拠に、最前線の駿府城に入った中村一氏などは「それがし、かくて候はんには、関東の事は何の御心にかからせ給ふ事もあるまじきにて候」と豪語し（『藩翰譜』）、家康も相模で鷹狩りをする際には隣の駿河との国境近くには近づかなかったという。

同時に、秀吉は甲斐に浅野長政を、会津には蒲生氏郷を入れて家康を強力に包囲監視する政策を採ったのである。

次に、経済的観点からいえば、東海道を押さえることによって経済支配を容易なものとする目的もある。秀吉政権は商鉱業から上がる利益で成り立っていたとも言える政権であり、秀吉は経済支配には相当に意を用いてその発展を図っている。

秀次を尾張に移すにあたり、宿老に加えて元黄母衣衆の一人、服部一忠を三万五〇〇〇石の南伊勢松坂城主として秀次に新たに附属させ、伊勢から尾張、三河、遠江、駿河と続く長大な海岸線を支配させたのは、伊勢海運が沿岸に物資を輸送し、沿岸からはその物資と、それに合わせて沿岸で産した塩などが内陸へ流れていく、その経済の動きを全部管掌させるためであった。

さらに、これが一番重要なことであるが、秀次の宿老たちを「ネクスト・キャビネット」の座から外す人事目的があったのではないだろうか。

秀次と宿老たちが東海道に去ったあとの近江を見てみると、

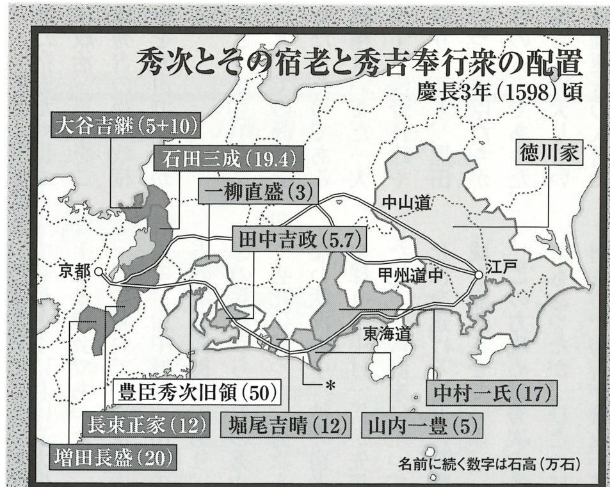
【水口城】中村一氏→増田長盛→長束正家
【長浜城】山内一豊→放置
【佐和山城】堀尾吉晴→石田三成
【美濃大垣城】一柳直末→羽柴秀勝

となり、大垣城の羽柴秀勝を除いて他はすべて秀吉の下でのちに「五奉行」となる気鋭の官僚たちが入封しているのである。これをどう捉えるべきであろうか。

実はこの前年の天正十七年（一五八九）五月二十九日、秀吉に待望の男子、鶴松が誕生している。母は茶々（淀殿）で、秀吉はすでに五十三歳となっていた。

単純な見方をすれば、鶴松の誕生によって秀吉が秀次の後継者候補を取り消し、鶴松を支えるスタッフの育成にかかったという構図での説明がつく。

また少しうがった見方であれば、次代の政権運営を武骨な秀次宿老たちでまかなえると考えたものの、急激に膨脹する天下政権の中でとてもそれでは立ちゆかないであろうことが徐々に明確になってきた。



徳川家の関東移封にともなって、秀次と家臣団も東海の各地に移された。東海道の押さえとして秀次らの役割は大きなものであったが、秀次旧領の近江に秀吉の新官僚団が配置されている様子を見ると、近江という堤防を徳川の侵攻から守る波消しブロックのようにも見える。なお、配置図は秀次死後の1598年頃の配置を示しており、尾張には秀次に替わって福島正則が配置された。＊印は秀次に連座し自刃した渡瀬繁詮の旧領。

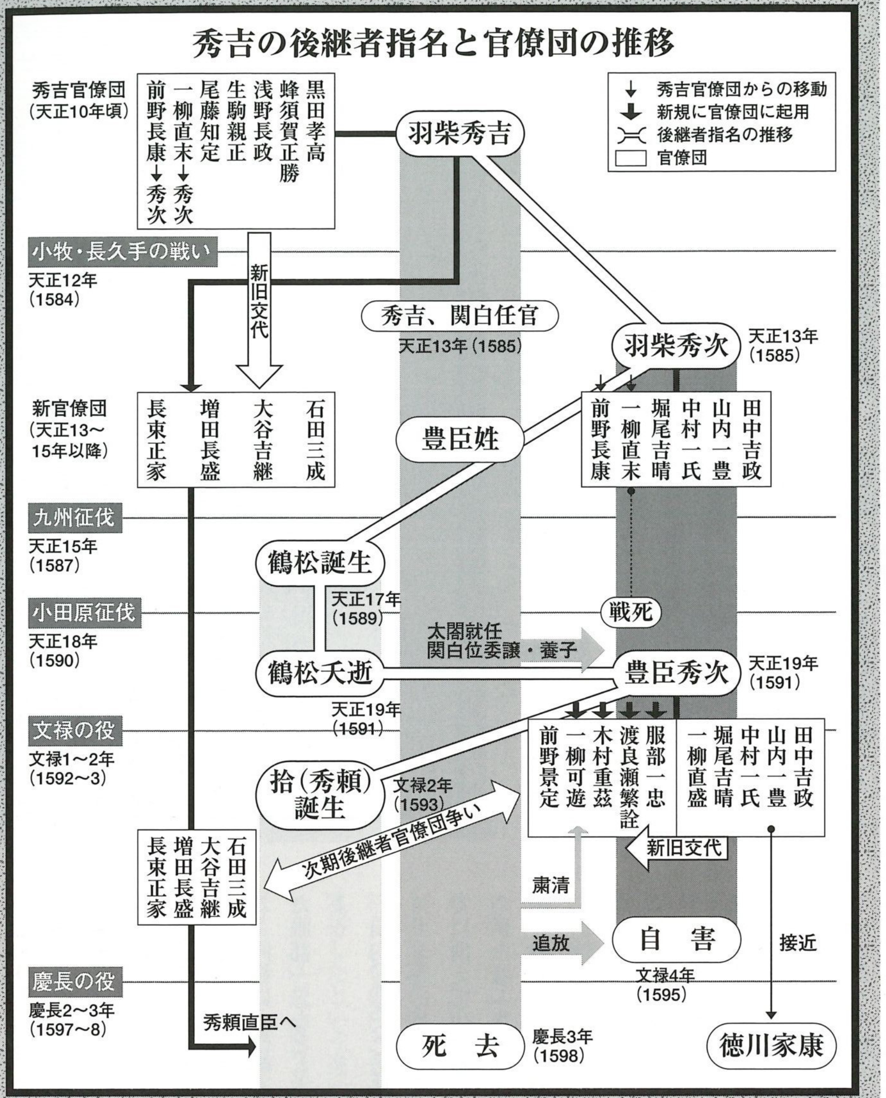
鶴松誕生直後から始まった「五ヶ国総検地」監督作業や、翌年の小田原の役での膨大な物資の集積業務など、エリート事務官僚でなければ処理できない国家的事業が立て続けに行われ、長束正家や石田三成らは存分にその才を発揮し始めていた。

このあたりを秀吉の書状から見てみると面白い。

秀吉政権の当初は黒田孝高、蜂須賀正勝、浅野長政、生駒親正、一柳直末、尾藤知定、前野長康がキャビネットメンバーで、添え状にも署名している。この段階では、石田・大谷吉継・増田らは音信への礼状などに添え状を書く程度の秘書的な軽い役でしかない。

これが天正十五年以降あたりから石田・増田・大谷による添え状が急増し、毛利に対する外交窓口も従来の蜂須賀・黒田から、石田・大谷へと担当官が交代している。石田らは得意の政務処理を通じて完全に高級官僚としての地位を確保しつつあった。これに対し秀次宿老たちは、近江出身で石田三成の人脈に属する田中吉政以外は特に内政にすぐれた手腕を発揮した形跡は見られない。

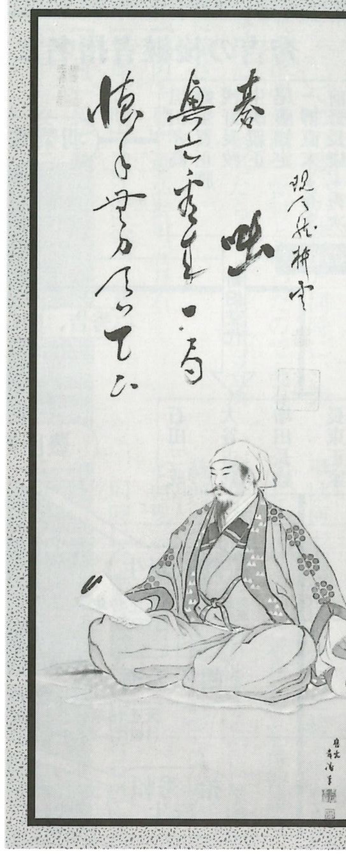
こうした実務上の必要から、京に近い近江に彼ら事務官僚のエキスパートたちを置いて政務の便を図ったのである。そしてそれは同時に、鶴松政権下の「キャビネット」候補に彼らを指名したということでもあった。秀次宿老たちは、かつての丹羽長秀のように近江から外縁部に「とばされた」と言ってもよい。



嫡子のいなかった秀吉にとって、甥の秀次は政権の永続性を天下に示すための貴重な存在であった。秀次がネクスト・キャビネット（次期政権）の期待を担っていた時期に、秀吉は2度の嫡子誕生を迎えているが、こうなると秀次の立場は、後継者争いの元凶になりかねない諸刃の剣となる。秀頼誕生の段階で、秀吉の政権は、人材的には分厚い陣容ながら、秀吉と秀次という系統の違う官僚団が存在する二極化の様相を呈していた。結局、官僚団の両立ではなく、せっかく育てた有能な官僚団の一方を粛清、整理せざるを得なかったことが、本来の目的だった豊臣政権の磐石化とは相反する結果を招いたのである。

政権後継者を巡るねじれ現象

しかし、話はそこで簡単には収まらなかった。天正十九年（一五九一）八月五日、肝心の鶴松が死去してしまったのである。こうなると再び秀次が後継者候補に返り咲くのは火を見るより



「石田三成画像」（滋賀・龍潭寺蔵）
秀吉直轄の若手官僚団の筆頭が、この石田三成であった。秀吉の三成に寄せる期待の大きさは、秀吉後継者として指名されていた秀次が領していた近江を与えられたことでもわかる。その三成ら若手官僚団も、やがて大野治長などの秀頼側近の台頭という変化の波に呑み込まれていく。

も明らかであった。年末には早くも秀次を関白の位につけ、秀吉は軍事権を握ったままで太閤となる。

秀次への関白譲位を急いだのは、一説にはフリーな立場になって朝鮮の陣を直接指揮したいという思いもあったからだと言われるが、真相はよくわからない。

「天下御与奪なされ、関白の御位をすすめられ、副将軍をあづかり申され」（『太閤さま軍記のうち』）とあるように、ともかくも秀次は後継候補者として復活し、そして秀吉の制限下という条件つきながら、まぎれもない後継者に昇格したのである。これが微妙なねじれ現象を豊臣家の内部に発生させた。

翌文禄元年（一五九二）二月から始まった朝鮮の陣においても、事務処理に当たるのは石田三成ら秀吉膝下の官僚たちであり、秀次が管掌するものは何もない。山内一豊や堀尾吉晴、中村一氏ら秀次宿老陣も聚楽第普請役や京都警備役などに日を送るばかりである。

反面、秀次の側には新たなスタッフが台頭していた。父の代からの秀吉譜代の家臣だった木村常陸介重茲、尾張出身で元秀吉の黄母衣衆だった服部采女正一忠、天正十九年に秀次後見役になったという一柳可遊、秀吉の重臣・前野長康の子・景定らである。

このうち木村は秀吉による奥州征伐のあと、出羽の検地を行うなど政務に手腕を発揮している。同時期に同じ東北で検地の指揮をしたのが石田三成・大谷吉継・浅野長政だったことを見ても、常陸介の事務の才能がうかがわれる。同様に、伊勢の検地を取り仕切った服部一忠なども吏才を示したといえよう。

山内、堀尾など従来の宿老陣が「ネクスト・キャビネット」に復帰する目はすでに消えていたが、常陸介に代表される新たな「キャビネット」候補者が活躍を始めていたのである。

秀次宿老陣という元「ネクスト・キャビネット」、石田三成ら現「キャビネット」、木村常陸介ら新「ネクスト・キャビネット」というねじれた三つ巴の関係が生まれ、互いを牽制するようになっていく。

しかし、ねじれたものは激しく動いてねじれを解消しようとする。石田三成らにとって、秀吉の死後、秀次が名実ともに跡を継げば、その「キャビネット」に参画できるのは木村常陸介らであって自分たちではない、というのは耐えられることではなかった。

検地や小田原陣、朝鮮陣の裏方として激越な政務処理をこなしてきた彼らには、秀吉の天下政権は自分たちが作り上げてきたという自負がある。それをあっさりと第三者に譲り渡して政権から遠ざかるなど考えることもできなかった。

文禄二年（一五九三）八月二十九日、秀吉にまた息子の秀頼が誕生した。これによって三成らは一気に秀次とその「ネクスト・キャビネット」の排除を進め始める。一方、秀次は秀頼の誕生によって後継者の地位確保に不安を覚え、徐々に精神的に不安定となり、自爆的に様々なトラブルを起こし始めた。

山内一豊はこの年閏九月、気の病によって温泉治療に熱海へ赴いていた秀次を帰路に出迎えもてなしているが、その五日後に秀吉も一豊のもとを訪れている。秀次の様子に関する情報を確認したものであろうか。

この頃になると誰の目にも秀吉と秀次の関係が危ういものになっている事がわかっており、世間は固唾を飲んで成り行きを見守っていた。

秀次の死と粛清人事の結末

文禄三年（一五九四）二月十七日、

〈参考文献〉『山内家史料　第一代　一豊公紀』／『豊臣秀吉文書目録』（三鬼清一郎編）／『稿本豊臣秀吉文書（1）』（三鬼清一郎編）／『増補駒井日記』（文献出版）／『寛政重修諸家譜』（続群書類従完成会）／『新編藩翰譜』（新人物往来社）



「豊臣秀頼画像」（京都・養源院）
豊臣秀吉の嫡子、秀頼。その誕生により、次期政権は新たな内政官僚によって固められつつあり、秀次政権の天下継承の芽は摘み取られてしまった。その後間もない秀吉の死により、秀頼の政権も未成熟なまま天下の経営を行わざるを得なくなり、五大老五奉行による合議制という不安定さを内包することになる。

山内一豊は何事か秀吉の忌諱に触れて朝鮮渡海の命令を受けた。実は彼は二週間前に秀吉の茶の湯の饗応を受けており、その場で話し合われた何事かに一豊が反対したか、または協力しなかったものであろう。

その朝鮮渡海言い渡しの使者に立ったのが、石田三成・増田長盛らであった。直後に有馬則頼が来て命令取り消しを告げたので助かったが、一豊にとっては三成らが「虎の威を借る狐」に見えたかも知れない。

文禄四年（一五九五）、ついに秀次は謀反の容疑で高野山に追放されて詰め腹を切らされるが、事務官僚派の木村常陸介や服部一忠ら新「ネクスト・キャビネット」メンバーは粛清され、「宿老」筆頭の田中吉政、山内、堀尾、中村らは助かった。実は既にこの時点で一豊らは秀次から距離を置いており、高野山追放の使者を務めるほどであったためである。

秀次が追放された直後の七月十五日に一豊が八〇〇〇石もの加増を得ているのはその傍証ではないだろうか。

秀次の死に一役買った旧宿老陣は、もはや秀次への期待を完全に失ってしまっていたのである。

同様に、一豊などは自分を検断しようとした三成ら奉行職の連中には心を許すこともできなかったであろう。

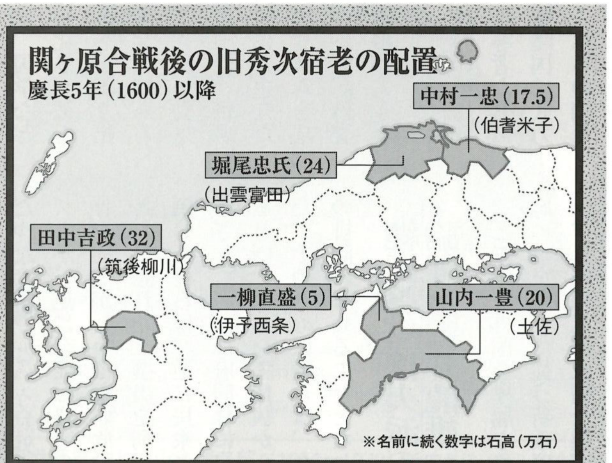
秀吉亡きあと、幼い秀頼が遺されたときの不安と混乱を見越して、一豊は早くも慶長二年（一五九七）四月に領内を通過する家康を歓待して誼を通じている。

中村一氏もまた慶長三年（一五九八）に三成らが家康暗殺を計画すると、「年頃無礼を顕はしぬ、敢て君に向かひて怨を結び参らせんにはあらず」（『藩翰譜』）と言い訳をしながら暗殺計画を家康に報せている。

さらに、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いでは、堀尾吉晴の子、忠氏が発案した家康への城の一括委託を山内一豊が実行したという逸話もあるほど、彼ら「元宿老」たちは家康に全てを捧げるまでになっていた。

このあと、決戦場の関ヶ原では堀尾忠氏と一柳直盛は大垣城方面の押さえとなり、山内一豊は家康の信頼を得て家康本隊の後備として南宮山の毛利諸隊を押さえる役割を担って家康の勝利に貢献している。

以上のように見ていくと、彼らにとっては「ネクスト・キャビネット」から外された段階で、豊臣政権に殉じる義理は消滅していたとも言えそうである。彼ら元「ネクスト・キャビネット」たちをその位置から外した時に、豊臣政権の滅亡は決まっていたのかもしれない。



秀次に付けられた武将たち（およびその嫡子）は、関ヶ原の合戦で徳川方に味方したことにより、領地の加増・転封を受けた。しかしその領国は、政治の中枢である関東や近畿圏からは離れている。また減封や廃絶などに至った戦国大名らの旧領が含まれ、領国経営についても容易とはいえない地域であった。

幻の明治新政府転覆計画

『明四事件』始末記

**佐賀の変から西南の役まで明治政府を震撼させた幾多の士族の叛乱
しかし、それに先駆けること三年前
全国規模の一大蹶起が計画されていた……**

文＝田中健之

維新を裏切った倒幕派新政府

嘉永六年（一八五三）、ペリー艦隊をはじめとする相次ぐ外国軍艦の来航は日本に開国を迫り、それ以来わが国は、佐幕か勤皇か、開国か攘夷かと国論は大きく揺れて分裂し、太平は打ち破られた。

隣国の清国やアジア諸国が、欧米列強諸国の東漸によって侵食され、植民併呑の桎梏に喘いでいるという事実は、下級武士達であっても、長崎などから入る情報でほぼ正確に知っていた。祖国への危機意識を高めていた彼らは、幕府が外国の圧力に屈して、いとも簡単に屈辱的な不平等条約を締結したことに対して危機感を募らせ、国民的な怒りを露にした。

名も無き下級武士や豪農の間で激しく燃えた攘夷という感情は、国学などによって理論化され、先鋭化し、彼らを討幕という政治の表舞台へと踊り出させた。すなわち〝草莽崛起〟である。

攘夷思想で武装された草莽は、勤皇を旗印に倒幕へと立ち上がった。倒幕運動の指導者たちは、民衆に芽生えた攘夷という素朴なナショナリズムを巧みに利用しつつ、幕府による軟弱外交を責めることによって、倒幕の大きな原動力とすることができた。

倒幕によって新政府の権力の座に就いた薩長主流派の一部の指導者たちは、

「排外的な外交姿勢は列強諸国に武力攻撃の口実を与え、もしこれらの国と戦火を交えることになれば、国力や技術力の差から到底勝利することは困難であり、そうなれば日本は列強諸国の植民地となる危険性がある」

と杞憂した。討幕派諸侯の島津忠義や細川護久ら諸侯六人も、和親開港以外には途がないと述べ、「外国人を攘い斥ける訳にはいかない」と結論付けた建言を連署して朝廷に提出した。このような考えは、やがて鹿鳴館外交に象徴される欧米追従の外交姿勢となる。

薩摩・長州の主流派で占められる新政府は、維新の起爆剤として頗る有効だった〝攘夷〟という対外硬ナショナリズムが、逆に今度は自らの権力の屋台骨を揺るがしかねない危険思想であるとして恐れた。攘夷を利用して幕府を倒した彼らは、逆に民衆がそれを振りかざした時、幕府同様に自らも倒されるということを実体験から熟知していた。そのために彼らは、今度は攘夷派の排除に努めることとなった。

純正尊皇攘夷派の論理と雲井龍雄

ところで外国を卑屈なまでに恐れ、尾っぽを振って従う新政府の外交姿勢は、幕府以上に軟弱な態度であった。

かつては幕府でさえ外国人を天皇に謁見させなかったにもかかわらず、新政府は慶応四年（一八六八）三月二十三日、仏公使ロッシュと蘭代理公使ポルスブルックの朝廷参内、続いて二十六日には英公使の参内を許し、それぞれ天皇に謁見させている。

このような新政府の外国に媚び諂う態度は、倒幕運動を底辺から支えてきた全国各地の下級武士や庶民にとって、裏切り以外の何ものでもなかった。彼らは、まさに新政府こそは、外国に国を売った変節漢であり、国賊だと感じた。その実態は、単に徳川から薩長へと首を挿げ替えたのみで、真に維新を達成するためには、新たな幕府である薩長主流派を倒す必要があると攘夷派の草莽は考えた。

その急先鋒の一人が米沢藩出身の雲井龍雄こと小島龍三郎である。彼は、

「倒幕は薩長の野望によるもので、特に薩摩の政略的行動は、維新の大義を歪め、攘夷の精神を失った」

と非難した。彼の眼には薩長藩閥以外の藩を朝敵と決め付け攻撃を仕掛ける官軍は、自分の藩を優位に立たせようと徒に術策を使う醜い姿に映ったのだ。

雲井は、官軍の幕府軍に対する執拗な攻撃によって激化する戊辰戦争はわが国に著しい内乱を招き、ひいては日本の植民地化を狙う列強諸国の干渉を招く恐れがあるとして、三回にわたって朝廷に意見書を上奏し、全国から有為の人物を集めて公正な政治が行われるようにと願い出たが、その意見は薩長によって握りつぶされ、討幕軍は江戸から東北へと進軍を開始する。

彼はこの時、薩長によって組織された官軍への抵抗を決意して帰藩、奥羽越列藩同盟など東北諸藩の団結に努める一方、薩摩藩の罪を訴えた『討薩檄』を著して、同憂の志を募った。

この『討薩檄』の中で彼は、

「薩摩は最初、幕府が一方的に外国と和親条約を締結して開国したことを非難して、尊皇攘夷を唱えて朝廷を巻き込み国論を分裂させ、兵乱を相次がせた。しかし、朝廷を背景に自ら権力を掌握すると、その態度を判然と変節させ、外国勢力に卑屈に跪き、遂には英仏公使を朝廷に参内させるに至った。かつては各国公使が幕府と接触したことを大罪としておきながら、今では公使らが朝廷に参内することを盛典だとして喜んでいる。これはかつて攘夷を唱えて幕府を批判したものの行動なのか」

と憤っている。

さらに彼は、

「薩摩が十余年以上にわたって主張する〝尊皇攘夷〟の本心は、ただ、幕府を倒すための〝邪謀〟であることは明白だ」

と断言し、〝薩賊〟の長年にわたる詐術は、

「上は天幕を暴蔑し、下は列侯を欺罔し、内は百姓の怨嗟を致し、外は万国の笑侮を取る。その罪、何ぞ問はざるを得んや」

と厳しく批判した。

雲井龍雄は弘化元年（一八四四）の生まれで、二十二歳の時に江戸勤務となり、土佐藩や長州藩の勤皇党の志士たちと広く交流する一方、安井息軒が主宰する私塾「三計塾」で学んでいる。その学風は、規律は厳しかったものの、個性を尊重する独特のものであった。息軒は、江戸に開塾以来、三七年間に二〇〇〇人の塾生を育てた。塾生には谷干城、品川弥二郎、陸奥宗光、三好退蔵などを排出している。江戸に遊学する諸藩の学徒で、他の塾に物足りなくなった者は、三計塾に入ったと伝えられる。雲井龍雄もその一人であった。

雲井龍雄が学んだ頃の三計塾には、*高山彦九郎と関係が深く、会輔堂に学んだ樋口剛太郎、真木和泉と共に禁門の変に蹶起して天王山で自刃した池尻茂四郎および松浦八郎ら久留米勤皇党の人々がいた。また、同じく久留米勤皇党の重鎮・古松簡二や肥後勤皇党の指導者の中村六蔵などがおり、まさに



雲井龍雄こと、小島龍三郎（1844～1870） 明四事件に至る尊攘派急先鋒の一人。米沢藩士中村惣右衛門の子。少年時代は天才詩人として名高かった。20歳で家督を継ぎ結婚。戊辰戦争では、薩長軍の東北進撃を阻止するため関東に潜入し、反薩長の同志を募り奥羽越列藩同盟を背後から支援した。1869年、集議院の寄宿生となるが間もなく退院。その後脱藩浪士や旧幕臣の救済を名目に、密かに同志を糾合し反政府の密議をこらす。

＊高山彦九郎＝江戸後期の勤皇家（1747～93）。上野国新田郡の旧家出身。13歳のころ『太平記』を読んで勤皇の志を立てたという。18歳で京都に出て学問を修め、多くの有志の知遇を得た。江戸、奥州、九州などを遍歴するが、筑後久留米で謎の割腹自殺をとげる。

尊皇攘夷の巣窟であった。

特に雲井龍雄は、古松簡二や中村六蔵と親しかった。この時の人間関係こそが、後に全国的反政府協議を行う連絡網を構築することとなり、明治四年（一八七一）に発覚した、新政府転覆計画、即ち〝明四事件〟へと発展する。

大村暗殺と長州諸隊脱隊兵事件

その事件の序曲は、明治二年（一八六九）九月四日、兵部大輔大村益次郎襲撃事件に始まった。

戊辰の役に際し、戦略的指導者としてその名を馳せていた大村が、尊攘派の志士たちによって襲撃された根本原因は対韓問題にある。

王政復古によって新体制となった日本は、慶応四年（一八六八）一月十五日、英・米・仏・蘭・伊・普などの各国公使に国書を交付し、新政府樹立と共に、外交は国際法に則って行う旨を布告した。これに合わせて朝鮮に対しても、王政復古による新政府樹立を報じると同時に修好を求める文書を提出したが、朝鮮側は、宗主国である清国以外の国が〝皇上〟および〝奉勅〟などの文字を使用するのは認められないとの頑迷な態度をとった。

これに対して、独立国として列強諸国と外交関係を維持する上から、朝鮮が日本の王政復古を認めないとする態度に屈すれば、日本の独立が危ぶまれるものだとして、対韓強硬論が湧き上がった。新政府部内でも、沢宣嘉や丸山作楽らが対韓強硬論を主張したが、大村は「朝鮮と戦って勝利の見込みなし」として対韓強硬派と対立していた。それを尊攘派は軟弱外交論だと解釈し、国賊だと決めつけた。

それに加えて、彼が主唱した兵制近代化は、武士の時代から農民を中心とした国民皆兵の時代への移行を意味していた。それは戊辰戦争で各地を転戦し続け、論功行賞が行き届かなかった各隊の大勢の将兵が、逆に扶持や職を失い棄民となるということであった。

その一方、一部の者のみは論功行賞によって大官となっており、その扱いの立場には雲泥の差があった。それらの事情から大村益次郎は、尊攘派志士のみならず弾正台*の海江田信義以下の人々からも敵視されたのである。

大村を襲った刺客は一三人で、長州、秋田、越後、三州、奥州白河、信州、土州など広範囲の出身者によるグループであった。大村は襲撃を受けた時の傷が元で敗血症となり、十一月五日に死亡した。実行犯のうち数名は萩藩の大楽源太郎が主宰する西山書屋（敬神堂）の出身者であった。

大楽源太郎は、天保五年（一八三四）、萩藩家老児玉若狭臣山県信七郎の長男として誕生した。十二歳で大楽家の養子となった彼は、吉松淳蔵の漢学塾に学んだ。同門には、高杉晋作、久坂玄瑞などがおり、中でも久坂とは一番の親友となった。高杉、久坂らと共に大楽は討幕運動に身を挺した。

安政四年（一八五七）頃、上洛した彼は大勢の尊攘志士と知己を得て、雲井龍雄・古松簡二らと交わった。この頃の大楽は、足利尊氏の木像梟首事件を起こしたり、天誅組が暗殺に失敗した冷泉為恭を暗殺したりするなどの事件を起こしている。

大村益次郎が死んだ直後、長州では兵制改革に着手した。それによって常備軍として第1大隊から第4大隊が存置する以外は、奇兵隊をはじめとする諸隊は解隊されることとなった。それに反対する隊士たちは、脱隊して蜂起することに決した。脱隊兵の多くが大楽の門下生であった。奇兵隊の隊士はこれに先立ち、肥後に河上彦斎と中村六蔵を訪ね、蹶起への支援と協力を依頼している。

明治二年（一八六九）十二月三日、長州諸隊脱隊兵約一〇〇〇人は、農民一揆と合流して蹶起し、翌年一月二十六日には、山口藩庁を包囲した。

幻の東京襲撃計画

「脱隊兵起つ」との報せに、雲井龍雄は活発に動いた。反政府の尊攘の志士たちを集めて政府大官に天誅を下し、一挙に新政府を樹立しようという計画であった。

雲井の計画を聞いた尊攘の志士たちは、遠く奥羽諸藩の中からも続々と集まり、短期間で五〇人程となった。実際には雲井が起てば、八〇〇〇から一万以上の同志が集まると言われていただけに、彼の行動を警戒した政府は、明治三年（一八七〇）五月十三日、米沢藩に対して、「雲井の身柄を拘束して藩地に引き上げさせ、厳重に取り締まれ」と命令した。翌日、米沢藩の一一人の護衛兵に囲まれて雲井龍雄は米沢に移送される。

一方、河上彦斎や中村六蔵、古松簡二、それに大村益次郎襲撃事件の関係者である岡崎恭輔らはそれに呼応し、挙兵する計画を立てた。河上彦斎も新政府に対して、

「攘夷のことを忘れ、往年の血盟同志を顧みることなく、幕府同様、外国に接し、彼のなすがままに国土を汚し、上は天皇、下は同志に対して済むと思うのか」

と日頃から憂国の至情を露にしていた。

しかし脱隊兵の反乱は、常備軍を率いた木戸孝允によって二月十日に鎮圧された。この事件によって斬首された者は七〇余名、投獄や流罪に処された者は一二〇余名にも及んだ。



大村益次郎（1824〜1869）
村医師の子に生まれ蘭学を学び、後に長州藩兵学雇となって、次第に軍政の中枢を担ってゆく。対幕府戦、彰義隊討伐、北越〜東北鎮撫戦を指揮して勝利を重ね、新政府初代兵部大輔に就任。国民皆兵思想に基づく徴兵制を構想し、旧士族層と対立を深める。また対韓強攻策の否定は、攘夷派の決定的な怒りを買った。

政府は大楽源太郎門下の多くが、大村益次郎襲撃事件および脱隊兵反乱事件に深く関わっていたことから、大楽源太郎をそれら事件の首謀者だと決めつけた。大楽は捕縛を逃れるべく鶴崎、中津、臼杵、佐伯、岡、久留米などの各地に入り、同志を募り再起を図った。

一方、中村六蔵は、反政府蹶起を実行すべく五月初旬、東京に向かった。この際、河上彦斎は彼に対して、

「早晩必ずロシアと交渉しなければならない時が来るから、潜行中に何とかロシア語を学んでおくとよい」

と諭した。

今日では攘夷一辺倒のごとく誤解されている河上彦斎だが、実はロシアとの交易を考えて商館を造る計画を立て、同志を朝鮮に派遣して貨物の輸出を図り、英国人の船長を雇い入れて上海と貿易することなどを考えていた。すなわち攘夷とは決して極端な鎖国主義を言うのではなく、日本が独立国として屈辱外交を排し、対等に列強諸国と交流できる外交のあり方を示そうとしたということがわかる。

七月、中村は米沢に幽閉されている雲井を見舞って脱走を勧めたが、肺を病んでいる雲井には、もはや脱走して再起を期す体力はなかった。八月十四日、政府によって雲井は再び東京に差し戻され、小伝馬町の獄に収監された。

一方その頃、中村と岡崎は秋田にいた。秋田藩権大参事初岡敬治に会うためである。

「秋田藩の軍艦を借り受け、それを東京湾に廻航した後、朝鮮遠征を理由に義勇隊同志を募って船内に集めてから東京を襲撃し、混乱に乗じて政府要人を暗殺する」

という計画を打ち明けられた初岡はそれに賛同し、さっそく『弥栄丸』という艦が用意された。

秋田藩東京定府の貨物を輸送するという虚偽の申請をして、『弥栄丸』は出航した。が、途中直江津で突如台風に襲われ、艦は大破して使用不可能となり、東京襲撃計画は水泡と消えた。

密偵恐るべし

東京の獄舎に雲井龍雄が入獄した頃、大楽源太郎への追及は厳しさを増していた。彼は古松簡二を頼って久留米に潜入した。

そもそも久留米藩は、明治維新直前まで佐幕派によって牛耳られていたが、慶応四年（一八六八）一月、佐幕派の参政、不破美作が暗殺されて以降、勤皇党の天下となった。彼らはこの年、長州の奇兵隊に倣って応変隊という隊を結成している。維新に出遅れ、活動時機を逸した勤皇党が支配する久留米の城下に、もう一度維新をやろうとして兵を挙げた大楽源太郎が亡命してきたのである。応変隊は大楽とともに政府を倒そうと大いに気勢を上げた。

その頃、古松は丸山作楽を担いで征韓の軍を起こそうと動き回っていた。当時久留米藩は、政府の命で朝鮮に使節を派遣しているが、朝鮮は以前と同様に日本の維新政府を認めなかった。これにより久留米藩知事有馬頼咸も、

「自らの家臣が朝廷に徴され、使節として外国に赴くも、その重任は全う出

*弾正台＝律令制時代の警察機関。明治2年（1869）に刑法官察司に代わり設置され復活したが、新政府の改革政策に反対する立場をとったため、後に刑部省と統合されて司法省となった。

来ずして、国辱を招いて帰国した事実は、国家の恥辱のみならず、久留米藩の不面目、自らの恥である。従って藩の実を上げて朝廷に迫り、是非とも埒があくようにしなければならない」

と述べ、久留米藩の征韓論を一層煽った。

しかし、古松・丸山の動きは密偵に筒抜けであった。新政府による密偵の元締めは、岩倉具視である。当時、江戸時代の目明しによる密偵警察を踏襲して使用する一方、藩政改革で禄を失った下級武士を目明しとして雇い入れていた。

彼らが岩倉に提出した報告書には、丸山が「草莽を集めて、その上政府に迫り改めんを乞う」と記されている。また、丸山が横井小楠や大村益次郎を暗殺した者の助命を願い出たことも述べられており、「そもそも元来は攘夷家の徒なり」と言っている。さらにその報告書には「政府を改め革むる等の事件論議あり起こり候ては深く恐れ入り存じ奉り候」とあり、丸山らの動きを警戒している。密偵の報告によって丸山作楽、古松簡二をはじめ、中村六蔵、岡崎恭輔らの行動を政府は知っていた。

岩倉は密偵を大勢潜入させ、九州各地に潜伏した脱隊兵の足取りを徹底的に追及している。十月二十六日、木戸孝允が長州の柏村数馬に宛てた書簡には「大楽（源太郎）富永（有隣）は久留米辺に潜伏仕りおり候に相違これなきかと存じ奉り候」

と記しており、密偵から収集した情報によって、木戸はすでに大楽らの潜伏先を掴んでいた。

皇族を奉じた維新のやり直し

十一月に入ると豊後日田では、奇兵隊の脱隊士が取り立て中の租税米を狙って日田を襲撃するという噂で持ちきりだった。十一日には六〇余人の浪人が豊前宇佐郡の金持ちの家に押し入ったとの報せが日田県庁に入った。その時に捕らえられた浪人の供述により、河上彦斎らとも呼応した大楽源太郎の蹶起計画の詳細が暴露された。

十一月十四日、まず河上彦斎をはじめ木村弦雄ら八人が一斉に逮捕され、藩獄にぶち込まれた。容疑は長州脱人と関係ありということであった。一方、久留米でも同じ容疑で小河真文に謹慎が命じられた。

それでも十一月二十九日、日田県で長州脱隊兵と農民とが連合して決起し、暴動は瞬く間に豊後一帯に拡大した。ちょうど豊後が大変な時、古松簡二と岡崎恭輔らは豊後の動乱に乗じて、征韓挙兵の計画を立てていた。

政府は十一月三十日、広沢真臣を東京府御用掛に任命し、浮浪取り締まりを命じた。広沢は熱心に攘夷派の浪人志士を取り締まったことから、一か月程後に暗殺されることになる。

十二月二十四日夜、岡藩の赤座弥太郎が、大楽源太郎を匿った容疑で捕縛された。刻々と大楽は追い詰められ、包囲されつつあった。

一方、弾正台は、「山口藩脱走人隠匿問題取り調べのため、古松簡二を出頭させよ」と久留米藩に対して再三再四要請した。古松は、山口藩脱走人隠匿その他の容疑で政府から呼び出された最初の久留米人だった。彼は久留米に帰藩するべく決意した。東京で召喚に応じてそのまま収監されるよりは、一度久留米に帰って、同志たちに再度「征韓」についての決意を促す方が賢明だと考えたからである。

度重なる反政府の動きに、雲井龍雄の影響力を恐れた政府は、彼を政府顛覆の陰謀を企てたという理由で、十二月二十六日、梟首刑に処した。雲井龍雄事件では、斬首二一名、遠流一一名、徒三年二四名、杖七〇回、禁獄七〇日など三名の計六〇人が処分された。雲井が刑場の露と消えた翌日、古松簡二と中村六蔵は久留米に帰り着いた。

明治四年（一八七一）一月二十八日、木戸孝允の筆による建白書が太政官に届けられた。それには、

「長州諸隊の者が叛乱し、やむを得ず武力鎮圧したが、尚残党が潜行して朝政を横議し、民心を誑惑している」

と述べられ、大楽源太郎を匿い続ける久留米藩を厳しく批判した。また、一月九日に起きた広沢真臣暗殺にも「必ず彼等不逞の徒の策謀に出候」と断言している。

木戸は、長州より朝廷に召し出された官員・兵隊を一時帰藩させ、長州藩の責任において一気に朝敵の巣窟である久留米藩を攻撃したいとしている。もし大楽源太郎ら攘夷派の反政府行動が数万の農民一揆と結びつき、九州全体が蜂起に加担して叛乱の舞台となった場合、それは即座に山口にも飛び火して農民一揆を引き起こすことになる。そうなれば、攘夷派による政府打倒、失権回復となる可能性が十分想定された。

『明四事件』関連略年表

年	月日	薩摩・長州（明治新政府）の動き	区分	月日	反薩摩・長州（攘夷派）の動き
慶応三（一八六七）	10.14	薩摩・長州に倒幕の密勅			
	12	王政復古の大号令			
慶応四／明治元（一八六八）	1	新政府軍、鳥羽伏見で勝利	戊辰戦争		
		新政府、王政復古を外国公使に通告			
	3	赤報隊・相楽総三らを偽官軍として処刑／五箇条の誓文			
	4	新政府軍、江戸城入城		5.3	奥羽越列藩同盟成立
	閏4	太政官ほか7官置く		6	米沢藩士雲井龍雄、『討薩檄』を著し以後反乱を画策
	7	江戸を東京と改称			
	8	明治天皇即位		7	長岡落城
	9	明治と改元（一世一元制）		9.22	会津藩降伏
				12.15	榎本武揚ら蝦夷地占領
明治二（一八六九）				1.5	参与横井小楠暗殺
	3	東京遷都			
	5.11	新政府軍、箱館総攻撃開始		5.18	榎本武揚ら降伏
	6.17	版籍奉還、各藩主知藩事に任命	明四事件（明治新政府転覆計画事件）	9.4	兵部太輔大村益次郎襲撃（11.5大村死亡）
	7.8	官制改革（2官6省）			
	11	長州兵制改革		12.3	長州諸隊脱退兵蹶起、農民一揆と合流
		奇兵隊ほか諸隊解隊			
明治三（一八七〇）				1.26	長州脱退兵山口藩庁包囲
	2.10	木戸孝允、長州脱退兵の反乱鎮圧			この頃、萩藩大楽源太郎、九州へ潜伏し同志募る
				3	久留米藩佐田素一郎「征韓の建白書」提出
	5.13	米沢藩、雲井龍雄を拘束			
	8.14	雲井龍雄を東京小伝馬町の獄に収監		8	肥後勤皇党中村六蔵ら、秋田藩軍艦による東京襲撃計画（失敗）
	10.3	長州脱退兵事件に関する密偵探索書、長州藩に提出			大楽源太郎、久留米藩に亡命、同地勤皇党と合す
	11.30	広沢真臣に浮浪取り締まり命ず		11.29	長州脱退兵と農民、豊後日田県で暴動
	12.26	雲井龍雄梟首刑に処す			久留米藩古松簡二ら「征韓挙兵」計画
明治四（一八七一）	1	久留米藩を熊本・鹿児島・山口3藩の軍で包囲		1.9	参議広沢真臣（東京御用掛）暗殺
	3	久留米藩士の大量逮捕始まる		3	大楽源太郎、久留米藩士により殺害
	7	廃藩置県			
明治六（一八七三）	1	徴兵令公布			
	7	地租改正条例			
	10.15	国交要求のため、参議西郷隆盛の朝鮮派遣決定			
	10.24	岩倉具視により、朝鮮遣使無期限延期、西郷参議等辞職			
	10.25	板垣退助、江藤新平ら参議辞職			
明治七（一八七四）			自由民権運動	1.17	板垣退助ら「民撰議員設立建白書」提出（自由民権運動始まる）
	4.13	佐賀の変首領・江藤新平処刑	士族の反乱	2.1	佐賀の変（江藤新平）起こる
明治九（一八七六）	3.28	廃刀令布告			
				10.24	神風連の変
				10.27	秋月の変
	12.3	萩の変首領・前原一誠処刑		10.28	萩の変
明治十（一八七七）				2.15	西郷隆盛鹿児島を出撃（西南の役始まる）
	3.20	政府軍、田原坂で西郷軍破る		9.1	西郷隆盛鹿児島で自決（西南の役終わる）

最終的には、明治4年の久留米藩士の大量摘発と大楽源太郎の死に至る『明四事件』は、幕末以来の尊皇攘夷派の、新政府の外交姿勢や薩長藩閥の横暴に対する怒りの現れあり、やがては後の士族の反乱や自由民権運動へと繋がるものであった。

それを恐れた木戸は大規模な叛乱が生じる前に、一刻も早く大楽一派とそれを匿う久留米藩を鎮圧する必要があった。木戸から建白書を受け取った太政官は、即刻、熊本、鹿児島、山口の三藩に浮浪取り締まりのため、日田への出兵を命じている。

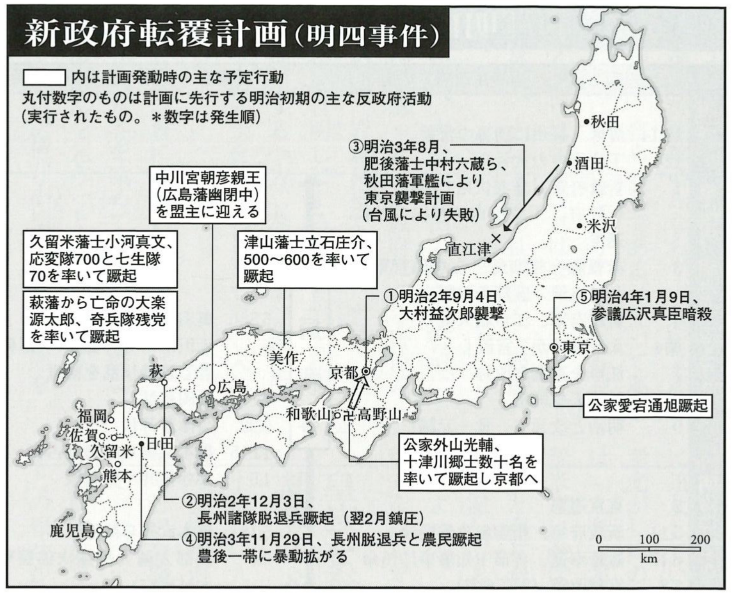
一方、小河真文をはじめとする攘夷派の志士たちと大楽源太郎らは、約一か月後を期し、政府に対して一気に逆襲しようと衆議は一致した。その維新やり直しの計画とは、皇族の中川宮朝彦親王を奉じて同志である公家の愛宕通旭と外山光輔が義兵を挙げ、君側の奸を掃蕩して攘夷の目的を達するというものであった。

すなわちそれは、愛宕通旭が東京で立ち上がるのと同時に、小河真文が七〇〇の応変隊と七〇の七生隊を率いて蹶起し、合わせて大楽源太郎が奇兵隊の残党を集めて蜂起するとともに、作州津山藩士の立石庄介が美作で五、六〇〇の同志を募って立ち上がる。その一方、外山光輔が高野山を拠点として十津川郷士数十名を率いて兵を挙げて都に迫り、鳳輦を京都に奉迎して、弊風を除き政体を一変しようという計画であった。その計画の盟主に中川宮朝

彦親王を戴こうというのである。

中川宮朝彦親王は、幕末から長州主流派と対立しており、文久三年（一八六三）八月十八日の政変では、会津藩・薩摩藩と結託して長州派を一掃した。だが孝明天皇の没後は、岩倉具視や長州主流派勢力によって、参朝停止処分にされたという過去があった。

慶応四年（一八六八）には、皇位擁立計画によって親王は独自の反乱を計画したが、事前に密偵によって計画が露見し、親王の身分・位記は剥奪となり広島藩に幽閉されており、新政府に対して頗る不信感を抱いていた。



尊攘派の最期

これらの蹶起計画が立案される中、古松簡二は日田県巡察使出張所に出頭した。この頃になると、政府の追及は古松のみならず、藩知事を含む藩全体に及んでいた。二月二十一日、古松簡二は東京に移送された。いよいよ政府による攘夷派に対する鎮圧の前触れである。古松は着京後、元南部藩邸跡に設けられた未決檻に拘留された。それは奇しくも前年末に雲井龍雄が収監されていたのと同じ獄舎であった。

岩倉具視は、さらに久留米藩士の逮捕に向かわせた。三月十日、弾正台は久留米藩知事有馬頼咸および権大参事吉田博文、家扶持二人を召喚した。東京赤羽にある久留米藩邸は、兵士数百名に包囲され、出入りを監視された。取り調べで厳しく糺弾された有馬頼咸は、大楽源太郎が久留米で匿われていたこと、それに関係した藩士の名前をすべて告白してしまった。

三月七日、久留米藩士の大量逮捕が始まった。弾正台の役人たちは、久留米藩邸の藩士を手当たり次第に参考人として連行し、拷問にかけた。藩士の自供により、愛宕通旭らの関係者も続々と捕縛された。

大楽源太郎と久留米藩は追い詰められた。古松簡二、小河真文、水野正名らの指導者が囚われてしまった久留米藩としては、もはや大楽源太郎は厄介者という存在でしかなかった。彼が政府の手に落ちた場合、藩と藩主に難儀が降り懸かることは明白だと思われた。

ここに及んでも大楽は再起を図るべく潜伏を決意している。藩と藩主を護るためには、大楽源太郎を消してしまう他に道はないかと思われた。

三月十六日、大楽源太郎は藩から「いよいよ久留米藩の同志は立ち上がることにした。その準備のために肥前の田代領で待機していて欲しい」と誘い出された。肥前領境にある筑後川豆津の浜の渡し場に差し掛かった時、久留米藩一二人の同志は抜刀して大楽の首を刎ねた。

大楽源太郎、享年三十七歳。同志によって惨殺された悲劇的な最期であった。

三月二十二日には征韓挙兵の陰謀の罪で丸山作楽らが逮捕され、時を同じくして初岡敬治が捕まった。司法省は、これらの事件は、全国的な連絡を持った大陰謀事件であるとし、久留米事件、愛宕事件、外山事件、征韓挙兵事件の関係者を一括して審理すべく、東京に臨時裁判所を設けた。

この事件は、正式には「辛未国事犯事件」と称されている。久留米では「久留米藩難事件」もしくは「明四事件」と言われているが、筆者は、二〇〇人以上の検挙者を出した安政の大獄以来の重大事件の性質が、明治維新のやり直し、もしくは第二維新への蹶起という目的から、『明治新政府顛覆計画事件』と呼びたい。

この事件は、国民的ナショナリズムを背景に中川宮朝彦親王を頂点に戴くという、近代日本最初のクーデター計画であった。それは、秩父宮を担ぎだそうとした昭和のクーデター、二・二六事件を彷彿させるものがある。

体制基盤が固まっていた二・二六事件に比べて、明四事件当時は、明治維新直後のため、中央集権国家としての政府成立の基盤が脆弱であったため、クーデターが成功して明治政府が崩壊する可能性も極めて高かった。

当時、政府軍が武装解除した久留米藩が所有していた火器類は、小銃・拳銃二七〇〇丁、大砲四一門、小銃弾七〇万発、砲弾四〇〇〇発であり、兵員は正規軍一大隊（大隊は六小隊三七二名）、銃隊五大隊（一大隊は三四七名）、砲隊三座（一座は四八名、砲六門）、農兵八大隊、市民兵二大隊であった。用意された武器、兵員ともに内乱を引き起こすのには十分であったのだ。

ところで明治十年（一八七七）、西南の役の時代になると、すでに近代的中央集権国家としての体制基盤が出来上がっていたため、クーデターの成功は難しくなっていた。そのような意味合いからも、明治政府が倒れる可能性があったこの事件は、日本が岐路に立った大事件だと言える。ただ、皇族が事件の中心に関与していたため、長年にわたってタブー視され、歴史の彼方に忘れ去られたのだ。

事件の起こした波紋

明治四年（一八七一年）司法省は、切腹を愛宕通旭、外山光輔に、斬首を小河真文、河上彦斎、比喜田源二、古賀十郎、吉田藤太、鹿毛松次に言い渡した。

一方、大楽源太郎を暗殺した川島澄之助らの刑は七年禁獄で、大楽を匿った側の判決が死罪になっていることに対して、彼を殺した側は誰一人も死罪の判決を受けることはなかった。つまり大楽源太郎を匿った者よりも殺した者の方の罪が軽かったのである。

ちなみに古松簡二は、広沢真臣暗殺事件の嫌疑がかけられており、その実行犯の一人と目されていた中村六蔵が逃亡中のため、六年間未決監に入れられていた。

古松に判決が出たのは、明治十年（一八七七）十二月三日のことであった。この時、広沢真臣暗殺事件についての嫌疑は晴れたものの、死一等を免じられて終身禁獄の刑が言い渡された。明治十五年（一八八二）六月十日、東京石川島の獄で病没する。享年四十八歳。

また大楽斬殺で禁獄七年に処せられていた森尾茂助、太田茂、村松雄之助らは、明治十一年（一八七八）春、士族授産の一環で政府が強力に押し進める士族移住開墾政策に沿って、久留米開墾社を組織して福島県下岩代国安積郡の原野に入植する。今日の福島県郡山市久留米がその入植地だ。

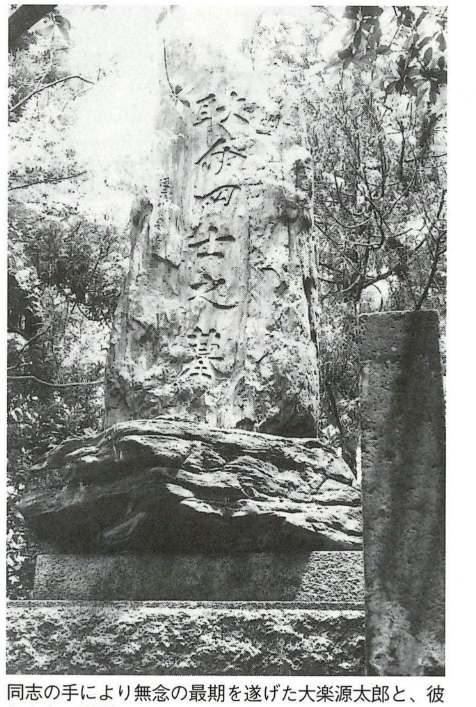
開拓事業は困難をきわめた。

「木羽屋根の修理ができず、雨の漏るにまかせ、妻は、傘を差してご飯を炊き、夫は戸棚の中で紋付羽織で縄をなう」

という悲惨な状態だった。多くの社員が脱落して、明治二十年代には台湾、朝鮮、米国などに移住したり、久留米に帰郷したりした。帰郷した者の中には、対韓、対露問題に従事する民間団体、黒龍会に加盟して反政府活動を行う者もいた。

明四事件が攘夷派の残党に与えた影響は大きく、神風連の変、佐賀の変、萩の変、秋月の変、福岡の変、西南の役など攘夷派の蹶起へと続く。ちなみにこれらの変には多くの明四事件関係者が賊として関わっている。いずれの事件も征韓問題と対欧米追従外交、それに藩閥に対する反発であった。

明四事件はまさに士族の反乱の序曲、またそれに連なる自由民権運動の原点なのだ。


同志の手により無念の最期を遂げた大楽源太郎と、彼とともに遭難しあるいは後を追って自害した、実弟や門弟ら４人を祀った「耿介（こうがい）四士之墓」（福岡県久留米市寺町遍照院）。藩のため心ならずも大楽らを斬った、川島澄之助ら旧久留米藩士四人の墓石も、遺言によりこの墓に並んでたてられている（写真提供＝久留米市）。

〈参考文献〉『西南記伝』全六巻（黒龍会）／高橋義夫『幻の明治維新』（創世記出版）／内田伸『大楽源太郎』（マツノ書店）／荒木精之『定本　河上彦斎』（新人物往来社）／『古松簡二小伝』（古松簡二顕彰会）／安藤英男『雲井龍雄研究伝記編』（明治書院）／安東英男『雲井龍雄詩伝』（明治書院）／滝沢誠『評伝 内田良平』（大和書房）／滝沢誠『武田範之とその時代』（三嶺書房）／滝沢誠『権藤成卿』（ぺりかん社）／川島澄之助『明治四年久留米藩難記』（金文堂書店）／松本茂『久留米藩難から新撰組まで』（海鳥社）／『先人の面影』（久留米市）／谷川健一『最後の尊攘党』（三一書房）／森尾良一『久留米開墾誌』（久留米開墾報徳会）／高橋哲夫『安積開拓史』（理論社）

TIDAL WAVE

津波作戦

プロエスティ油田を襲った空前の超低空爆撃

文＝白石　光



第93爆撃航空群 "トラベリング・サーカス"
第376爆撃航空群 "リベランズ"
第98爆撃航空群 "ピラミッダーズ"
第44爆撃航空群 "エイトボールズ"
第389爆撃航空群 "スカイ・スコーピオンズ"

目標暗号名"ホワイトⅣ"ことアストロ・ロマーナとオリオンの複合精油所を爆撃後、超低空で飛行を続ける第98爆撃航空群に所属するロバート・ニコルソン機長（中尉）の「リル・ジュガイド」号（手前）とその僚機たち。背景の爆煙と炎はラルフ・ヒンチ機長（中尉）の「タガロング」号の墜落地点から立ち昇っているようだ。

第2次大戦の中盤、アメリカ第9航空軍はドイツの継戦能力を根本から断つため、東欧有数のプロエスティ油田の爆撃を計画した。ルーマニアの内陸にある油田の長駆爆撃に選ばれたのは、「解放者（リベレーター）」の愛称を持つB-24爆撃機であった。戦闘機の迎撃、対空砲火の洗礼を満身に浴びつつ前代未聞の超低空で目標に向かう5つの爆撃航空群。その前途には、予想だにしなかったトラブルと苦難が待ち受けていた。

■前哨戦

ドイツは石油資源に乏しい。それを危惧していたヒトラーは、かねてからルーマニアに目を付けていた。ヨーロッパ最古最大のプロエスティ油田があるからだ。そこでヒトラーはルーマニア軍の親独派、イオン・アントネスク元帥とその配下の鉄衛隊をバックアップしてクーデターを起こさせ、一九四〇年九月、まんまと彼をルーマニアの新首相に就任させた。

翌四一年一月、アントネスク元帥はドイツへの石油の供給を約束し、油田を防衛するドイツ軍部隊のルーマニアへの進駐を認めた。こうして、年間産油量約四三〇〇万バレルのプロエスティ油田は、ドイツの石油需要の三分の一と、イタリアの全需要を賄（まかな）うことになったのである。

この油田の重要性はイギリスにもわかっていた。しかし一九四一年当時、戦局はまだ予断を許さず、イギリスはそこまで手が回らなかった。ところがアメリカの参戦で状況が変わる。

アメリカは、ドゥーリトル襲撃隊とは別の日本空襲計画「ハルプロ」作戦を策定していた。正式名称を「ハルヴ

ァーソン・プロジェクト№63」と呼ばれるこの作戦は、ハリー・ハルヴァーソン大佐が指揮するB24を装備した部隊を、中国の飛行場に進出させて東京を爆撃するというものだった。

一九四二年五月、ハルプロ部隊の二三機のB24は、極東への中継地スーダンのハルツームへと飛んだ。ところが肝心の中国の飛行場が日本軍の攻勢によって占領されてしまい、同地で待機しているところに、陸軍航空軍総司令官ヘンリー〝ハップ〟アーノルド大将からの緊急命令が舞い込んだ。それはプロエスティ油田を爆撃せよというものだった。

隊員たちはプロエスティの名前すら聞いたことがなかったが、長距離飛行に長けた技量優秀な志願乗員で編成されたハルプロ部隊には、決して難しい任務ではなかった。一九四二年六月十一日夜、一三機のB24がプロエスティを爆撃し、一機の損害もなく帰還したものの、精油所にもほとんど被害を与えられなかった。

一方、この空襲はドイツ側に対する警鐘となってしまった。

第一次大戦のエース・パイロットで、在ルーマニアドイツ大使館付き上級空軍武官からルーマニア駐留ドイツ軍総司令官へと転出したアルフレート・ゲルステンベルク中将は、この空襲を機にレーダー早期警戒網の整備、戦闘機隊と防空部隊の増派をヒトラーに要請し、戦闘機約二五〇機と各種防空部隊約七万五〇〇〇名でプロエスティの空の防備を固めることとなった。

■四発重爆B24の超低空爆撃

プロエスティ油田に対する初空襲から約半年後の一九四三年一月、モロッコのカサブランカで、アメリカ大統領フランクリン・ローズヴェルトとイギリス戦時内閣首相ウィンストン・チャーチルが会談した。アメリカとイギリスを中心とする連合国の戦略方針を策定し調整するこの会談の席上、枢軸国の石油供給源を破壊することが、最優先の検討事項の一つとされたのは当然といえよう。

こうして、プロエスティ油田に対する爆撃計画が再び検討されることになった。そこでアーノルド大将は、数多い直属幕僚のなかでも最優秀の一人であるヤコブ・スマート大佐を、この爆撃計画を策定するための責任者に任命した。ウエストポイント士官学校を一九三一年に卒業したスマート大佐は、かつて砲兵科から航空軍団に転科したという特異な経歴を持っていた。

「スマート大佐、われわれはプロエスティ油田を徹底的に叩かねばならん。ついては、そのための計画の立案を君に一任したい。思いっきりやってみたまえ」

ハッピーの略称〝ハップ〟の渾名で知られるアーノルド大将は、いかにもパイロット上がりらしい、明るく陽気でユーモアのセンスに溢れた将官で、常に部下を信頼しており、部下たちも彼をよく慕っていた。

「承知しました、閣下。速やかに最良の爆撃計画を立案いたします」

三月の柔らかな夕日が差し込むアーノルド大将の執務室でこう答えたスマート大佐は、早速、フロリダ州のエグリン飛行場へと向かった。広大な敷地内にジャングル、湿地、草原などの自然地形を擁する同飛行場では、航空機を用いたさまざまな新戦術がテストされていたが、そのなかに、プロエスティ油田を爆撃するのに最適と思われるものがあったのである。

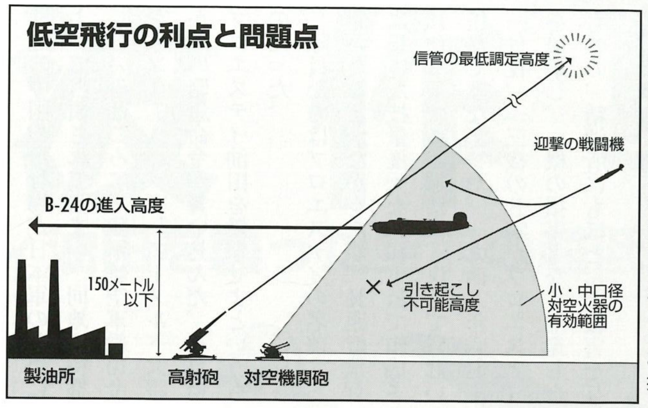
それは、ダグラスA20ボストン双発攻撃機がV字三機編隊を組んだまま超低空を突進して目標を爆撃するという戦術で、一般的な中～高高度での爆撃に比べていくつかの利点があったが、それとは裏腹の欠点もまたあった。

一つめの利点は、高度が低ければ低いほど敵のレーダーに探知されにくい点だが、欠点は、超低空飛行を可能とするには乗員にそれなりの訓練を施さねばならない点である。

二つめの利点は、元来、一定の高度以上を飛ぶ航空機を弾幕射撃で撃墜するための兵器である高射砲だと、低空を飛ぶ航空機は追尾することも捕捉することもできず、しかも、そんな低空で作動する信管もないので脅威とはならない点だが、欠点は、軽機関銃から二〇～四〇ミリ級の高射機関砲までの低高度用小～中口径自動対空火器にとって、超低空を飛ぶ大型機は単発の戦闘爆撃機とは異なり標的として大きいうえ速度が遅いため、恰好の標的とされる点である。

唯一の救いは、超低空飛行ならごく短時間で敵の射界を飛び抜けられることに加えて、アメリカ軍の大型機は弾道の低伸性*に優れた大威力の五〇口径重機関銃を架装した旋回銃座を各部に備えているので、それを用いて、これ

＊低伸性＝発射された弾丸が直進（または直進に近い）弾道を維持する性能。俗に「キャリバー.50」と呼ばれる12.7ミリ（50口径）のM2系重機関銃は、非常に弾丸の低伸性に優れていた。



ドイツの高射砲弾幕と迎撃戦闘機の組み合わせは、連合軍爆撃機にとって大きな脅威だったが、低空飛行はそれを減殺できるメリットがあった。しかし逆に、低空の防空を担当する小・中口径火器（機関銃・機関砲）が最も威力を発揮する高度を長時間飛行しなければならないというデメリットも生み、結果的に大きな損害につながった。

らの対空火器と交戦できることだ。
　三つめの利点は、目標を間近に目視しながら投弾できるので、爆弾の命中精度が向上する点だが、欠点は、複数機が連続投弾する場合などは爆撃突進経路や信管の作動時間を綿密に調整しないと、先行機が投下した爆弾の炸裂に巻き込まれた後続機が、破損したり墜落する恐れがある点である。
　四つめの利点は、飛行高度が低いので、上方からダイブで攻撃を仕掛けて下方にすり抜けるという戦闘機の典型的な対大型機戦法を封じられる点だが、欠点は、襲われる大型機側も、降下をともなう回避機動ができなくなってしまう点である。
　これらの利点と欠点を詳細に検討したスマート大佐は、航続距離と一機当たりの爆弾搭載量を含み込んだうえで、プロエスティ油田を爆撃するには足の長いB24を使った超低空爆撃が最適だという結論に達した。彼は、エグリン飛行場で実物のB24を用いて超低空飛行が可能かどうかも検証したが、大気密度が高い超低空でのB24の運動性は予想以上に優れており、プラット&ホイットニーR1830〝ツインワスプ〟エンジンも、低空域で快調に作動することが確認された。
　次にスマート大佐が向かった先はイギリスであった。ここで彼は、戦前にプロエスティ油田で働いた経験がある人間をできるだけ集めると、彼らの証言を元にして油井（ゆせい）や精油所の精密な図面を描かせ、その図面から立体模型を作らせた。また、個人や石油会社が保有していた写真やムービーフィルムも、資料とするため徹底的に収集した。
　こうしてプロエスティ油田爆撃計画を編み上げたスマート大佐は、〝ソープサッズ（石鹸の泡）〟作戦と命名してアーノルド大将へと提出した。
「スマート大佐、これは妙案だよ。まさか敵も、四発のB24が超低空で爆撃しに来るとは思うまい」
　だが、その見解に異論を唱える者もいた。アーノルド大将は、空に関わる軍人には絶対不可欠な三次元的思考と時間の概念に優れ、奇抜であっても、優れているならすぐに受け入れることができる典型的な航空将校であったが、航空軍内の上級将校たちのなかには、陸軍の二次元的思考の枠組みから離れられないガチガチの教条主義に凝り固まった〝ソープサッズ〟作戦に批判的な一派が存在したのである。彼らも主張する。
「たしかに超低空なら敵のレーダーに発見されにくいだろうし、爆弾の命中精度も向上するはずだ。だが、あの図体の大きなB24が小〜中口径対空火器の弾幕に晒されるのだから、相応の犠牲を覚悟しなければならない。はたしてそれに見合った戦果が見込める作戦なのだろうか」と。
　しかし、五月にワシントンで開催されたローズヴェルト大統領とチャーチル首相の会談でこの作戦の概要が示されると、チャーチル首相は大いに喜んだ。そしてイギリス空軍爆撃兵団からも、技量優秀なパスファインダー（先導）爆撃中隊をいくつか参加させてもよいとまで言い出した。
　だが、イギリスのランカスターやハリファックスは、アメリカのB24とは飛行特性も性能も違ううえ、エンジンの部品から機関銃弾に至るまでB24とはまったく別であり、整備や補給の面を考慮すると、アメリカ軍がB24だけで作戦を実施したほうが得策だということになった。

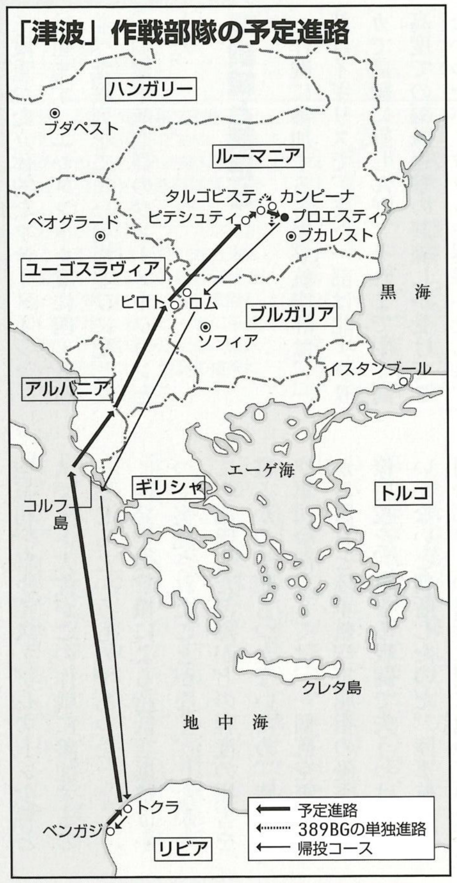
作戦名〝タイダルウェーブ〟

　作戦にゴーサインが出されると、早速、思い入れの強いチャーチル首相が意見を寄せてきた。これほど大胆で意義深い作戦に、〝ソープサッズ〟という作戦名はいかにも不似合いだという不満の表明である。そして、ご大層にもイギリス課報部まで動員して考えさせた〝パグナシティ（闘争本能）〟〝メン・



ベンガジの基地近隣で超低空編隊飛行を訓練中の作戦参加部隊。写真で見ると約30メートルという高度の低さが実感できる。だが、この訓練にアドバイザーとして参加していたイギリス軍の対空部隊の関係者は、北アフリカ戦の戦訓から「こんなでかい飛行機がこんなに低く飛んでくれるなら全部落とせるぜ」と言ったという。

イーター（人食い獣）〟〝ファイア・クラッカー（かんしゃく玉）〟などといった作戦名の案を伝えてきたが、それから二週間後の六月三十日、最終的に〝タイダルウェーブ（津波）〟という作戦名が選ばれた。
　また、これと平行するようにして作戦に参加する部隊の選定も始まった。
　まず、北アフリカに展開した第9航空軍の第9爆撃航空本部からは、B24を装備した第98爆撃航空群〝ピラミッダーズ〟と第376爆撃航空群〝リベランズ〟の二個爆撃航空群が選ばれた。しかしこれだけでは機数が足りないとの判断により、イギリス本土に展開する第8航空軍に応援を要請し、第8爆撃航空本部からは、やはりB24を装備した第44爆撃航空群〝エイトボールズ〟、第93爆撃航空群〝トラベリング・サーカス〟、第389爆撃航空群〝スカイ・スコーピオンズ〟の三個爆撃航空群の参加が決まった。
　このうち、作戦に参加するためにヨーロッパからアフリカへと移動しなければならない第8航空軍に所属する三個爆撃航空群は、六月下旬に相次いでベンガジ（リビア東部）入りしている。
　爆撃目標は、それぞれの航空群ごとに割り振られ、飛行経路は、往復ともに一経路ずつのごく単純なものであった。
　ベンガジ一帯に散在する飛行場群を離陸した各爆撃航空群は、まずリビアの海岸線を眼下に見ながら北東へと飛行し、トクラ上空でほぼ真北に変針する。その後、地中海上を高度六〇〇〜九〇〇メートルを維持しつつ時速約三一〇キロで飛行して縦断、ギリシャ領コルフ島の北西端を右手に見ながら北東に変針し、ギリシャ北部からユーゴスラヴィア南部にかけて連なるピンドス山脈を、高度三〇〇〇メートルまで上昇して横切る。
　さらに北東へと進み、高度九〇〇〜一五〇〇メートルでやや高地のユーゴスラヴィアのピロト上空を通過してロムでドナウ川を越えるとワラキア平原に出るが、そのまま北東に進み続けてピテシュティに達したところで、いよいよ高度三〇メートルの超低空飛行に移行して、南東へ変針しプロエスティとカンピーナへの爆撃を敢行する。
　なお復路は、往路を右手に見ながらほぼ逆に飛行するだけである。
　このように経路が一つであるため、飛行序列もまた、各爆撃航空群が縦に連なる単純なものだった。最先頭を進むのは第376爆撃航空群で、以下、第93、第98、第44の順に続き、殿（しんがり）を務めるの



予定された飛行コースを示したもの。地中海を縦断し、ルーマニア内陸部で折り返す行程は往復で2500キロメートルに達する。なお各爆撃飛行群の目標は、以下のように定められていた（進行状況はP182の図参照）。最先頭より、第376爆撃航空群＝目標暗号名"ホワイトⅠ"を付されたロマーナ・アメリカーナ精油所を爆撃（指揮官は、キース・コンプトン大佐）。第93爆撃航空群＝目標暗号名"ホワイトⅡ"を付されたコンコルディア・ベガ精油所と"ホワイトⅢ"を付されたユニリア・スペランツァ、スタンダード・ペトロールの複合精油所（指揮官は、アディソン・ベーカー中佐）。第98爆撃航空群＝目標暗号名"ホワイトⅣ"を付されたアストロ・ロマーナとオリオンの複合精油所（指揮官は、ジョン・ケイン大佐）。第44爆撃航空群＝目標暗号名"ホワイトⅤ"を付されたコロンビア・アキラ精油所と"ブルー"を付されたクレディトル・ミニアー精油所（指揮官は、レオン・ジョンソン大佐）。第389爆撃航空群（図中389BG）＝単独でカンピーナにある目標暗号名"レッド"のステアウア・ロマーナ精油所を爆撃（指揮官は、ジャック・ウッド大佐）。


第44爆撃航空群の隊員を前にブリーフィング中の指揮官たち。壇上に着席した3名は、左から出撃部隊総指揮官ウザル・エント准将、第98爆撃航空群司令ジョン"キラー"ケイン大佐、第44爆撃航空群司令レオン・ジョンソン大佐。一部の隊員たちは、北アフリカ戦域への展開に際して供与された防暑帽（ソラトピー）を被っている。

が第389爆撃航空群である。それぞれの爆撃航空群は、先行する爆撃航空群を目視できる距離内で追随することになっていた。

編隊の最小単位は、一般的な爆撃機編隊と同じく三機で一組のエレメント（班）とされたが、いくつかの爆撃航空群の一部のエレメントは四機で一組とされていた。行程のほとんどが低空から超低空を飛行するため、例えばコンバット・ボックスのような編隊を二～三段重ねた立体的なフォーメーションは組まず、エレメントを縦に四～五組並べた縦列を二～三列横並びに配して、一個爆撃航空群のフォーメーションとした。

訓練と禁足と

作戦に参加する各爆撃航空群は、一部はイギリスで、また一部は北アフリカで訓練に勤しんだ。それまで中～高高度での編隊爆撃の訓練しか受けてこなかったパイロットや爆撃手たちは、まずB24を超低空で飛ばすことからはじめて、次に超低空で編隊を組むテクニックを会得し、最後に超低空で爆弾を投下して目標に命中させるという順でカリキュラムをこなしていった。

また、戦闘機のような動標的に対する射撃訓練しか受けてこなかった銃手たちには、飛行中のB24から地上の静止標的に機銃掃射を加える訓練が課せられた。飛行中に地上の対空火器と交戦し、それを制圧できるようにするためである。

こうして着々と作戦の準備が進むなか、アメリカ本土の陸軍航空軍司令部からカイロの第9航空軍司令部宛てに緊急命令が届いた。その内容は、同航空軍司令官ルイス・ブレアトン少将とスマート大佐がこの作戦に参加するのを禁じるというものであった。

四発重爆撃機による超低空爆撃はかつて実施されたことがなく、したがって、出撃した部隊がどの程度の損害を被るかの予想もつかないため、陸軍航空軍司令部としては、一個航空軍を預かる将官と陸軍航空軍屈指の優秀な幕僚将校を、単なる戦闘で失うわけにはいかないと判断したのだ。陸軍航空軍司令部のこの判断は理に適っていたが、作戦を主導する立場にある第9航空軍司令官ブレアトン少将も、作戦を立案したスマート大佐も、ともに地団太を踏んで悔しがったと伝えられる。

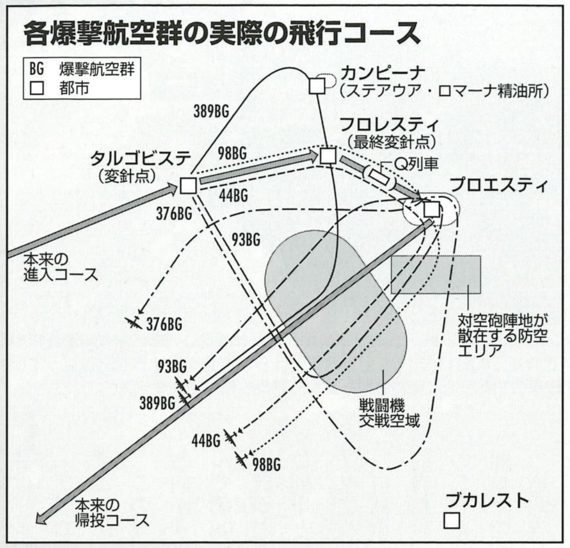
禁足された二人に代わって出撃部隊総指揮官となったのは、第9航空軍幕僚長で第9爆撃航空本部長を兼務するウザル・エント准将であった。彼はきわめてオーソドックスな思考に支配された「爆撃機乗り」であり、しかも上司のブレアトン少将が革新的なものを好む性格でこの作戦に入れ揚げていたため、半分は自らの意志で、また半分は幕僚長として上司の手綱を締める意味で、最初からこの作戦に否定的な立場をとっていた。なにしろ彼は、最大約八〇機ものB24を失うのではないかという悲観的な予想を立てていたほどである。

もちろん、この点に関してはブレアトン少将も決して楽観視していたわけではなかった。隊員たちの気持ちを引き締めると同時に腹を括らせる意味も込めて、作戦発動前日の航空軍司令官演説では、最低で五割、最大で全滅という損害を被る可能性もあり得ると述べたのだった。

一九四三年八月一日

まだ砂漠が夜の帷に包まれている〇二〇〇時、ベンガジ周辺に散在するアメリカ軍の飛行場群に、起床を告げるアナウンスやサイレンがけたたましく鳴り響いた。バラック、テント、格納庫、管制塔など、すべての建物のすべての灯火が慌ただしく点灯される。一九四三年八月一日、日曜日のことであった。

早々に洗面を済ませて髭を青々と剃り上げてはいるものの、まだ眠い目をした男たちが三々五々、メスルーム（食堂）に集まって早すぎる朝食を機械的に詰め込んでいた。被っている帽子こそサービスキャップにギャリソンキャップ、ボウルキャップとさまざまだったが、彼らは皆が皆、A2やB3（ともにフライト・ジャケット）を羽織り、その上から目立つ黄色のメイ・ウエスト（救命胴衣）を着用していた。真夏とはいえ、与圧室を持たないB24での飛行には、皮製のフライト・ジャケットが不可欠なのだ。



図は、5つの爆撃航空群がたどったコースを示したもの。変針点のタルゴビステで第376爆撃航空群（BG）が進路誤認を起こしたことにより、当初の予定に狂いが生じ、シンプルな進路をとって整然と超低空から進入し爆撃するという計画は破綻する。389BGが大きく北に変針しているのは、カンピーナに単独で向かう予定だったため。進入コースの乱れは、爆撃の成果に大きな影響を与えた。

すでに前日のうちに作戦の詳細が伝えられているため、食後に行われたブリーフィングでは、重要事項の再確認と最新の気象状況の説明、それに全員での時計合わせぐらいしかするべきことはなかった。そして、〇三〇〇時を過ぎると出撃する各機に乗員たちが搭乗しはじめ、〇三三〇時頃には、フライトラインのあちこちでエンジンの始動音が聞こえ出した。やがてB24一機当たり四基、今日出撃する一七九機では、合計実に七一六基にもなる〝ツインワスプ〟がすべて生命を吹き込まれ、それらが発する重低音が、夜明けを迎えつつある砂漠の大気全体を震えさせた。

〇四〇〇時、薄明の空に向けて、管制塔から離陸を許可する吊光弾が高々と撃ち上げられた。それを合図に、ランウェイ上に数珠つなぎになってスタンバイしていたB24が次々と離陸して行く。「タイダルウェーブ」作戦の開始である。ベンガジ周辺の各飛行場から飛び立ったB24は、さながら雨水が集まって大河を成すように、飛行を続けながら次々と合流してゆく。

かねてからの予定通り、この巨大な「空の大河」の最先頭を進むのは第376爆撃航空群で、その先頭を飛ぶ航空群司令のコンプトン大佐機「テギー・アン」号に、出撃部隊総指揮官エント准将も同乗していた。地中海を渡り、ピンドス山脈を越え、ワラキア平原に出るまでの飛行は、天候にも恵まれて順調そのものであった。ところが、全爆撃航空群の水先案内役であるべき肝心のコンプトン大佐機が、変針点で針路を誤った。プロエスティに向かうべきところを、東南に旋回しすぎてブカレスト方面に向かってしまったのだ。

後続の第93爆撃航空群もいったんは第376爆撃航空群に従ったものの、司令のベーカー中佐がすぐにこのミスに気づき、北東のプロエスティに向かうため、第93爆撃航空群の全機を改めて左に九〇度旋回させた。

プロエスティを防衛する高射砲陣地帯は、主に南のブカレストとの間に設けられていた。そのため、当初の予定通り北西からアプローチをかければ、少なくとも爆撃を終えてプロエスティ上空を離脱するまでは、さほど激しい対空砲火を受けずに済むはずだった。ところが、誤って南下したこの二つの爆撃航空群は、熾烈な対空砲火のなかに頭から飛び込むはめになったのである。

漏れた燃料に引火して翼面から細い炎の尾を曳きながら飛び続けていたB24が大爆発する。おそらくコックピットに直撃弾を受けてパイロットたちがやられてしまったのだろう、外見からはどこも損傷したようには見えないB24が、突然錐揉みに入って地上に衝突する。やられたエンジン一基を止めたまま、なお編隊を組んで飛び続けているB24など当たり前だ。こうして、両爆撃航空群のB24は次々に被弾し墜落して行った。

そんな地獄の業火のなかを折り返した第93爆撃航空群の先頭を飛んでいたベーカー中佐機「ヘルズ・ウェンチ」号もついに被弾した。少しでも機体を軽くし、さらに安定性を確保するため爆弾を投棄した「ヘルズ・ウェンチ」号はそのままプロエスティに向けて先頭を飛び続けたが、やがて紅蓮の炎を吹き出すと同時に空中爆発してしまった。乗員全員が戦死した壮烈な最期で



射撃陣地線に引き込まれ、停止戦闘の態勢をとった状態のQ列車。無蓋貨車を原型として開発された、8.8センチ高射砲が据え付けられた砲車がずらりと連なっている。手前の砲車の左右の端に整然と積み重ねられた木箱は砲弾ケース。

ある。

「くそっ、中佐がやられた!!」

ベーカー中佐が率いていた三機のエレメントのなかで、のちにたった一機だけ帰還することができたウォルター・スチュワート中尉は、愛機「ジョイシー・バウンス」号の機長席で叫んだ。

Q列車との対決

一方、変針点で第93爆撃航空群に追随しなかった第98と第44の両爆撃航空群は、予定通りプロエスティの北西からアプローチするコースを進んだが、そこに思わぬ伏兵が潜んでいた。

このコースに沿ってプロエスティへと向かう線路が走っており、線路を挟んで第98爆撃航空群が左、第44爆撃航空群が右を飛んでいたところ、なんとQ列車と併走するハメになってしまったのだ。

Q列車とは、無蓋貨車に高射砲、高射機関砲、対空機銃などをハリネズミのごとく装備した、いわば移動式対空陣地とでもいうべき列車である。

超低空を飛ぶB24の大編隊から、五〇口径重機関銃弾がQ列車に向けて雨（あめ）霰（あられ）と注がれる。Q列車も負けじと、手近なB24に向けて七・九二ミリ機銃や二〇ミリ、三七ミリの高射機関砲を矢継ぎ早に撃ち上げる。

しばらく激しい銃撃戦が続いたが、軍配はB24に上がった。Q列車の機関車が、無数の五〇口径重機関銃弾を被弾して走行不能に陥ったのである。

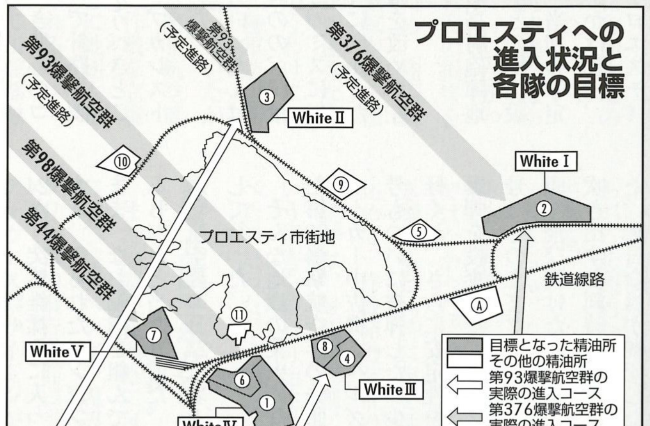
さて、思いきった方向転換により北上した第93爆撃航空群と、予定通りの針路を突進してプロエスティの北西方向から南下してきた第98と第44の両爆撃航空群は、図らずも相対する二方向から、ほぼ同時にプロエスティ上空に到達して爆撃を開始することになった。

空中衝突の危険も顧みずに超低空から投下された爆弾は、それぞれの爆撃目標に確実に命中してゆくが、B24もまた、ドイツ軍の対空砲火によって次々と撃墜されてゆく。

その頃、第376爆撃航空群はようやく航法ミスを犯していることに気づいた。前方遥かに大都市のシルエットが黒々と見えてきたのだ。ブカレストである。エント准将は航空群を真北に変針させてプロエスティに向かったが、対空砲火は激烈であった。たじろいだエント准将は、エレメントの維持すら困難だと判断した。

「各機ごとに目標を捕捉して爆撃せよ!!」

第93爆撃航空群と同じく多数のB24を失いながらも、やっとプロエスティ上空に到達して投弾することができた第376爆撃航空群だったが、この命令が、かえって目標の誤認や早期の投弾を誘発することになってしまった。



図は、プロエスティ上空での進入状況。図中の数字は各精油施設（①=アストロ・ロマーナ、②=ロマーナ・アメリカーナ、③=コンコルディア・ベガ、④=ユニリア・スペランツァ、⑤=ダキア・ロマーナ、⑥=フェニックス、オリオン、⑦=コロンビア・アキラ、⑧=スタンダード・ペトロール、⑨=レデヴェンツァ、⑩=キセニア、⑪=コンスタンツァ・パイプラインのポンプ施設

プロエスティ上空では、新たな危機的状況が生じつつあった。すでに三個爆撃航空群のB24が縦横に交錯しているなかに、第376爆撃航空群まで飛び込んできたのである。このような状況にありながら、一組の空中衝突も起こらなかったのは、まさに奇跡といえよう。

ところで、殿（しんがり）を飛行していた第389爆



目標暗号名"レッド"ことステアウア・ロマーナ精油所を爆撃したあと、カンピーナの市街地上空を超低空でフライパスする第389爆撃航空群のB-24（画面左端）。遠方には命中弾を受けて黒煙と炎を噴き上げる精油所と、後続のB-24が何機か写っている。

撃航空群はどうなったのだろうか。実は、殿だったこともあって同爆撃航空群は予定通りカンピーナ上空に到達し、これまた予定通り投弾することに成功していた。

熾烈な対空砲火を縫って投弾を終えた各爆撃航空群は、プロエスティ上空から南西方向へと離脱したが、その先にはドイツとルーマニアの戦闘機隊が待ち構えていた。プロエスティ油田防衛飛行隊の通称で知られた、ドイツ空軍とルーマニア空軍混成の第4戦闘航空団に所属するBf109や双発のBf110、ルーマニア製のIAR80などが次々と襲ってきたのだ。

爆弾を投下したため機体が軽くなったとはいっても、しょせん四発重爆撃機の機動性では戦闘機を振り切れるわけもない。それに防御効果が高いコンバット・ボックスを組もうにも、すでに失われた機数が多いうえ、事前の打ち合わせもせずに超低空飛行向きのフォーメーションからコンバット・ボックスへの移行など絶対に不可能であった。

「スリー・オー・クロック・レベル!! メッサー二機が突っ込んでくる!!」

「まだ脱出できる!! 早く飛び出せ!!」

「短く撃て!! 先は長いぞ!!」

「セブン・オー・クロック・ロー!! B24一機、後落して行く!!」

緊迫した声の無線交信で大気は溢れた。そして、ここでもB24はバタバタと撃墜されて行った。

「ブラック・サンデー」

薄暮を過ぎて宵闇に近い暗さとなったベンガジ上空に、〝ツインワスプ〟のエンジン音が聞こえ始めた。最初のうちはか細く、そして徐々に力強く。生き残ったB24たちが帰ってきたのだ。

エンジンが一基止まっている機体、煙の尾を曳いている機体、脚が出ない機体、重傷者を乗せている機体、戦死者が生じた機体などが次々に着陸する。胴体着陸も続出した。救急車と消防車は大活躍だ。ほとんどの機体の帰還時刻は二〇三〇時から二一三〇時の間であった。

アメリカ軍はこの作戦に、第376爆撃航空群二八機、第93爆撃航空群三七機、第98爆撃航空群四八機、第44爆撃航空群三七機、第389爆撃航空群二九機、合計一七九機のB24を動員した。

このうち一四機が任務を中止して帰還、四三機が墜落、八機がトルコ領に不時着、そのほか補助飛行場などに一五機が不時着し、出撃した基地にまともに帰還したのは九九機にすぎなかったが、そのなかで翌日の任務に出撃可能なのは、わずかに三三機だけだったという。

また、作戦に参加した全乗員数は約一七八〇名で、うち三一〇名が戦死し、一三〇名が捕虜となった。

これだけの大損害に対して、投下した爆弾は約三一〇トン、プロエスティ油田の生産能力の約四五パーセントを破壊することに成功している。たしかに犠牲は大きかったが、それなりの戦果もあった作戦といえよう。

なお、この作戦では五名がアメリカ最高の勲章である議会名誉勲章を授与されており、そのなかには最後まで先導を続けて戦死したベーカー中佐、苛烈な対空砲火をかいくぐって部隊を目標へと導いたケイン、ジョンソンの両大佐も含まれている。

一九四三年八月一日。成功というにはあまりに多くの損害を出してしまったこの日は「ブラック・サンデー」として、作戦の参加者のみならず、多くの人々の記憶に長く残ることとなったのである。

〈参考文献〉Bataille Aeriennes No.25『Operation "Tidal Wave"』／U.S.ARMY『Tidal Wave』／Alfred Price『Luftwaffe Hand Book』／Alfred Price『The Luftwaffe』／Larry Davis『B24 LIBERATOR in Action』／Frederick Johnsen『B24 LIBERATOR』／Martin Stanley『LIBERATOR』／U.S.ARMY『Men of the Eighth』他、多数

蜜月を反故にした憎悪の連鎖

IRAN VS. AMERICA イランVS.アメリカ

友好から敵対へ――かつて緊密であった両国関係は完全に断絶した。
核開発疑惑で激震する今日の米・イラン、その原点を振り返る。

文＝山崎雅弘



1979年11月9日、首都テヘランのアメリカ大使館占拠に際して、星条旗を焼くイランの神学生たち。占拠は400日以上にもわたり、その間、外交官は人質として囚われの身となっていた。

同盟国だったアメリカとイラン

米同時多発テロ事件（9・11）から四か月後の二〇〇二年一月二十九日、ブッシュ大統領は一般教書演説の中でイラン、イラク、北朝鮮の三国を「悪の枢軸国」と断定した上で、この三国は「世界の平和を脅かすテロリストの仲間」であるとして、厳しい口調で非難する姿勢を内外に示した。

それから一年後の二〇〇三年三月二十日、アメリカはイラクへの軍事侵攻を開始し、反米的なイラクのサダム・フセイン体制は米軍の強大な軍事力によって打倒された。だが、イラクにおける反米武装組織は、開戦から三年が経過した現在もなお、根強く米軍への抵抗活動を続けており、ブッシュ大統領は「イスラム教シーア派の反米テロリストを支援しているのは隣国のイランだ」として、攻撃の矛先をイランに転じる構えを見せている。

そして、イランが秘密裡に核技術の開発を進めてきた事実が徐々に明らかになると、米政府は以前にも増して同国への敵意を露にし、彼らが「世界の平和を脅かす悪の枢軸国」と呼ぶイランとの全面的な対決姿勢を崩そうとしていない。

この四半世紀の間、アメリカとイランは互いに相容れることのない「水と油」のような存在であり、それぞれ相手国の政府を最大限に辛辣な言葉で非難する姿勢を貫いてきた。だが、敵対の時代に入る以前のアメリカとイランは、現在の日米関係に勝るとも劣らないほど緊密な同盟関係を結んでおり、国家元首の「シャー（国王）・パーレビ」を戴く当時のイランは、アメリカ合衆国にとってアジアで最も重要な友好国の一つだったのである。

かつて、イラン（ペルシャ）における重要な権益の大部分を握っていたのは、七つの海を支配した大英帝国だった。だが、世界を揺るがす第二次世界大戦が終結した時、イラン国内の実質的な支配権は、斜陽の帝国イギリスから新興勢力アメリカの手に移譲されていた。

アメリカとイランの同盟関係は、いつ、どのようにして形成されたのか。そして、両国の友好はいかなる理由で破壊され、現在に至る相互不信と敵対の時代へと突入したのか。

その経過を知るために、まずは第二次世界大戦当時のイラン情勢に光を当ててみたい。

シャー・パーレビとの蜜月関係

運命の第二次世界大戦

二十世紀後半におけるイランの命運を大きく変えることになる大事件が、ヨーロッパ東部で発生したのは、第二次世界大戦の勃発から二年が経過した一九四一年六月二十二日のことだった。この日、アドルフ・ヒトラー率いるドイツ軍が、東の大国ソ連邦への侵攻作戦を開始したのである。

当時のイラン国王レザー・ハーンは、枢軸国と連合国が激突する第二次世界大戦において、イランは局外中立の立場を貫くべきだと考えていた。一九二五年のクーデターで新たな王朝「パーレビ」を興し、三五年には国名を古めかしい「ペルシャ」から「イラン（「アーリア人の国」を意味するペルシャ語）」に改号した近代主義者のレザー・ハーンは、かつてペルシャ軍の騎兵大佐だった頃にロシアやイギリスが同国内で働いた横暴を目の当たりにしており、これらの大国との間で軍事同盟を結ぶ義理はないと判断していた。

だが、ソ連の独裁者スターリンと、イギリスの首相チャーチルにとって、ペルシャ湾の北岸一帯の広大な領域を占めるイランの動静は、ドイツとの戦争を遂行する上で、文字通りの「死活問題」に他ならなかった。なぜなら、ドイツ軍の侵攻を受けたソ連に対し、イギリス（およびその背後に控えるアメリカ）が援助物資を送ることのできる数少ないルートの一つが、ペルシャ湾経由でイラン領内を通過するものだったからである。

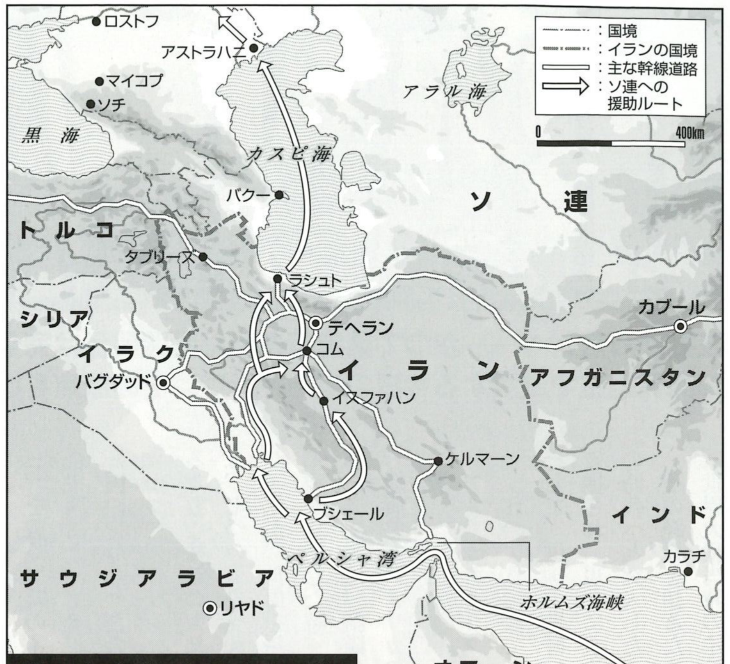
また、イラン国内で鉄道建設などの事業に従事している数千人規模のドイツ軍技師の存在も、英ソ両国の疑心暗鬼を煽り立てていた。もし万が一、イランが枢軸陣営に加わることになれば、イギリスは最も重要な石油供給源である同国を失い、さらにソ連にとっても自国内で最大規模のバクー油田がイランを基地とするドイツ軍爆撃機の脅威に晒されることになる。

独ソ開戦から四日後の六月二十六日、イランに駐在するソ連大使スミルノフと英国大使ブラードは、連名で次のような要求をレザー・ハーンに突きつけた。「イランにおけるドイツの権益を剥奪し、イランを縦貫する鉄道を連合軍

に開放していただきたい」

レザー・ハーンがこれを拒絶すると、英ソ両国は新聞とラジオを通じて猛烈なイラン非難の宣伝を開始するのと同時に、英ソ両軍でイランを分割占領する計画を進めていった。七月十九日以降、ロンドンとモスクワで協同軍事作戦の秘密会議が幾度も重ねられ、英ソ両軍部隊がソ連南部とイラク東部の国境に配備された。そして、先の高飛車な通告から二か月後の八月二十五日、ソ連軍とイギリス軍は南北からイラン領内へと雪崩れ込んだ。

イラン領内での戦闘は、実質的にわずか四日で終了した。九月十六日、ソ連大使スミルノフと英国大使ブラードは、脅迫的な言辞でレザー・ハーン国王に退位を迫った。「とにかく王座を皇太子にお譲りください。それができなければ、我々は実力で貴方を王座から引きずり降ろし、英ソ連合政府を樹立するだけです」



第2次大戦時のイランと対ソ援助ルート

第2次世界大戦時、連合軍、特にソ連は、対ドイツ戦を続けるための援助物資の輸送ルートであったことから、イランを重視していた。陸揚げされた援助物資は、内陸を北上し、カスピ海を縦断してソ連国内に輸送された。また、豊富な油田地帯であるバクーの位置からも、イランが枢軸側につくことを阻止しなければならなかったことが理解できる。

憔悴し、落胆したレザー・ハーンは、翌九月十七日に退位を受け入れる声明を発表し、パーレビ王朝は二十一歳の若き皇太子、モハマド・レザーに継承された。

パーレビ国王とアメリカの接近

一九一九年十月二十六日、当時まだ軍人だったレザー・ハーンの息子として誕生したモハマド・レザー・パーレビは、三一年に十二歳でイランの陸軍幼年学校を卒業後、スイスの寄宿学校で五年間学び、それから再びイランの陸軍士官学校に入学した。一九三八年、モハマド・レザーは少尉に任官されたが、イラン軍の部隊ないし司令部には配属されず、父レザー・ハーンの側近として重要な会議や外遊に同伴する日々を送っていた。

一九四一年十月二十七日、ソ連大使スミルノフと英国大使ブラードはモハマド・レザー・パーレビ（以下、パーレビ国王と表記）に恭しく面会すると、柔らかな口調で言った。「陛下はおとなしく一国の君主であることに甘んじて下されば結構です。あとのことは、全て我々が引き受けますから」

父に対する無慈悲な仕打ちに加え、新国王である自分に対して英ソ両国政府が投げつけた傲慢な態度にショックを受けた彼は、耐え難いほどの屈辱を感じて二週間もの間自室に引きこもり、今後の対処法を熟考した。そして、イランの独立を保持するためには、イギリスやソ連と同等の力を持つ第三国の援助が不可欠だと考えた彼は、両国にも強い影響力を保持する国・アメリカに救いの手を求めることにした。

彼はまず、英ソ両国が要求した連合国との軍事同盟の締結（一九四二年一月二十九日）と引き換えに「英ソ連合軍はドイツおよびその同盟国が戦争行為を終了してから六か月以内にイラン領内から撤退する」という内容の協定文書を用意し、英ソ両国首相の批准（同年二月一日）に加えて、アメリカ大統領ローズヴェルトからも「イランの立場を支持する」という言質（二月六日）を取ることに成功した。

日本軍の真珠湾攻撃（一九四一年十二月）と、それに続くヒトラーの対米宣戦布告によって、正式に連合国陣営の一員となったアメリカは、産油国がひしめく中近東における自国の進出基盤を開拓し始めていたところだった。そのため、ローズヴェルトはパーレビ国王との関係樹立を大きなチャンスと捉え、ドナルド・コネリー准将を長とする二万八〇〇〇人規模の「ペルシャ湾方面隊」を、イラン領内に展開させることをパーレビ国王に約束した。

米軍のペルシャ湾方面隊は、建築技師や機械技師などの非戦闘員が多数を占める支援組織で、イラン縦貫鉄道の近代化や軍用飛行場の建設などを主任務としていたが、パーレビ国王はこの米軍組織を「英ソ両国によるイラン分割を阻止するための保険」と見なしていた。ローズヴェルトにイラン国内の「権益」をちらつかせ、米軍を国内に駐留させておけば、英ソ両国のイランに対する宗主国的な態度は抑制されるだろうと考えたのである。

こうして、イラン国内では米英ソ三国とパーレビ国王による政治的な駆け引きが開始されたが、英ソ両国に対するパーレビ国王の不信感を見抜いたアメリカは、国王を説得して六〇人の経済専門家を「顧問」の肩書でイラン政府機関に送り込み、パーレビ国王治下のイラン経済を実質的に支配することに成功した。イラン軍や治安警察にもアメリカ人の顧問が配属され、イランとアメリカの関係は日を追うごとに緊密化していった。

一九四三年九月九日、パーレビ国王はイランが正式にドイツに対して宣戦布告したことを発表し、翌十日にはローズヴェルト大統領に宛てて「連合軍の協力の下、イラン王室の存続とドイツの打倒を目指して最後まで戦い抜く」との決意を記した親書を打電させた。

これにより、イランは正式にアメリカの「同盟国」となり、以後ホメイニのイスラム革命まで続く、アメリカとイランの蜜月時代が始まったのである。

アメリカとソ連のイラン争奪戦

一九四三年十一月二十八日、米大統領ローズヴェルトと英首相チャーチル、そしてソ連首相スターリンが、イランの首都テヘランで首脳会議を開いた。この重大会議に場所を提供したパーレビ国王には、ソ連の対日参戦についての秘密協定をはじめ、三巨頭の間で話し合われた連合国の戦争政策と主要な戦後処理問題についてはほとんど何も知らされなかったが、それでも連合国に対するイランの存在感を強めるには充分な出来事だった。

イランとアメリカが急速に接近しているのを察知したスターリンは、テヘラン滞在中の十一月三十日にモロトフ外相らを伴ってパーレビ国王を訪問し、T－34戦車一個連隊と爆撃機の編隊をイラン軍に提供しようと申し出た。しかし、二十四歳の若き国王パーレビは慎重だった。ソ連側が、軍事援助の条件としてソ連軍の長期駐留と軍事顧問の派遣を口にすると、パーレビ国王はすぐに相手の真意を悟り、スターリンの申し出を丁重に断った。

この一件を境に、ソ連とイランの関係は急激に悪化し、一九四四年の夏以降、イラン北部ではソ連共産党の支援を受けた左派のツデー党が、反パーレビのデモや暴動を扇動するようになった。また第二次大戦終結後の一九四五年十一月には、ソ連と国境を接するイラン北部地帯で「アゼルバイジャン共和国（コーカサスのソ連邦アゼルバイジャン社会主義人民共和国とは無関係）」と称する親ソ派の独立政府が樹立された。

イラン北部に対するソ連の影響力増大に対し、強い警戒感を抱いた米英両国は、親ソ派勢力の反乱がイラン中部および南部に波及するのを食い止める



1943年のテヘラン会談における3巨頭。左からスターリン、ローズヴェルト、チャーチルである。イランのパーレビ国王は蚊帳の外に置かれたが、会談場所を提供することで自国の重要性を強調することに成功した。

ため、先にパーレビ国王と取り交わした軍隊の撤兵協定を破棄して、テヘランに軍隊を再駐留させた。パーレビ国王は、改めて己の無力さを痛感したが、彼が助けを乞うことのできる相手は、ローズヴェルトの後継者であるトルーマン米大統領だけだった。

一九四六年三月、ワシントンD.C.のトルーマンとモスクワのスターリンとの間で緊迫した極秘電報が交錯し、イランをめぐる情勢は米ソ両国による一進一退の政治的攻防戦となった。しかし、パーレビ国王がソ連に対して一定の石油利権の提供を申し出たことと、トルーマンによるスターリンへの強硬な態度（一説には原爆の使用をほのめかしたとも言われる）により、暗闘に一応の終止符が打たれた。二か月後の五月二十五日、イランに駐留していた最後のソ連軍部隊が撤兵を完了し、ソ連の支援を受けていた北部地域の反乱も十二月中旬には全て鎮圧された。

国家存亡の危機をアメリカに救われたパーレビ国王は、将来的なソ連の再来に備えてアメリカとの軍事的同盟関係の強化を選択し、米政府からの二六〇〇万ドルの軍事費援助と引き換えに、シュワルツコフ准将（湾岸戦争における多国籍軍総司令官シュワルツコフの同姓同名の父）らをリーダーとする大規模な米軍事顧問団をテヘランへ招聘した。四九年に入ると、一一の米企業を中心とする経済発展計画がイラン国内で推進されたが、その財源は米政府が新たに制定した「イラン援助七か年計画」によって賄（まかな）われていた。

アメリカの庇護下で発展するイラン

アメリカがイランへの肩入れをこれほど拡大した背景には、ソ連と国境を接する同盟国という軍事的見地からの判断に加えて、イラン国内で生み出される「重要戦略物資」、すなわち石油という動機が潜んでいた。英国人ノックス・ダーシーによって本格的な採掘が開始された一九〇八年以来、イラン（ペルシャ）は前途有望な石油産出地として注目されてきたが、その権益の半分は長らく、イギリス政府の所有する「アングロ・イラニアン社（後のBP＝ブリティッシュ・ペトロリアム社）」に握られていた。

実質的な兄弟国イギリスとの同盟関係を重視するアメリカは、ソ連が試みたような荒っぽい方法でイランの石油権益をイギリスから奪い取るつもりはなかった。だが、一九五一年四月二十九日、アメリカとイランの関係を新たな局面へと移行させる契機となる大事件が発生する。右派の民族主義者でありながら、裏ではソ連との関係を取り沙汰される老獪な政治家モハマド・モサデグが、イランの新首相に就任したのである。

西側諸国に強い敵愾心（てきがいしん）を抱くモサデグは、翌四月三十日、パーレビ国王の了承を全く取りつけることなく、独断でアングロ・イラニアン社の国有化を宣言。さらに五二年に入ると、王室の予算を削減するなどの反パーレビ政策を次々と実行していった。

この事実上のクーデターに衝撃を受けたパーレビ国王は、生命の危険を感じて、五三年八月十六日に飛行機でイラクのバグダッド（次いでイタリアのローマ）へと脱出した。だが、ここでパーレビ国王に救いの手を差し伸べたのは、またしてもアメリカだった。

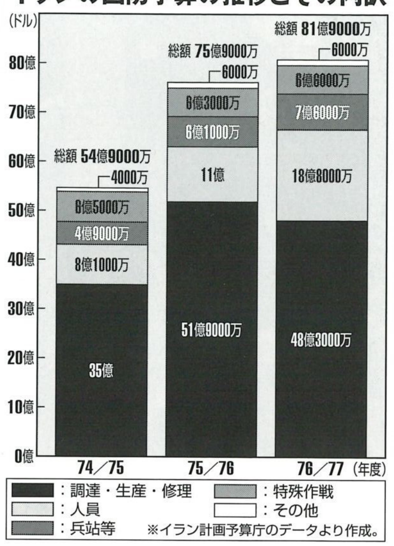


親ソ派のモサデグが首相に就任したため、イランが自国の影響下から離脱することを懸念したアメリカは、クーデターによるモサデグ政権転覆を画策した。写真は1953年８月、クーデターでテヘランの街中に出動したイラン陸軍のアメリカ製シャーマン戦車。

米政府の秘密情報機関CIA（中央情報局）はすでに、五三年六月二十五日の段階でモサデグ体制の転覆工作計画「エイジャックス」を用意しており、CIAの中東担当責任者カーミット・ローズヴェルト（セオドア・ローズヴェルト大統領の孫で、第二次大戦時のフランクリン・ローズヴェルト大統領の甥）を中心とする秘密工作が開始された。この作戦の主要な目的は、イランがソ連を頂点とする東側陣営に鞍替えするのを阻止することであったが、もし政権転覆工作が成功すれば、イランの石油利権を「当然の分け前」としてアメリカがイギリスに要求することも可能になると思われた。



イランの国防予算の推移とその内訳



パーレビ国王（左）は、アメリカとの関係をより強めていった。グラフは70年代半ばから後半にかけてのイランの国防予算の推移を表しているが、その多くを兵器の調達に当てているのがわかる。特に75／76年度の調達費は、74／75年度の国防予算全額に匹敵するほどとなっている。この時期、アメリカの最新鋭戦闘機F－14の導入などが行われていることも影響しているだろう。当時F－14は、アメリカ海軍以外には配備されていない、高価な機体であった。

一九五三年八月十八日、親米派のファジオラ・ザヘディ将軍によるクーデター*が成功し、モサデグ首相が失脚すると、イラン国内の石油利権は、米英両国の巨大石油企業（メジャー）六社と米系の独立系石油企業（インディペンデント）九社によって再配分された。こうした石油利権の割り当ての代償として、これ以後の三年間に五億ドル近い石油収入が、各石油会社からパーレビ国王へと支払われた。

第二次大戦開戦時の一九三九年におけるイランの年間産油量は八〇〇万トンだったが、一九五〇年にはその四倍近い三二〇〇万トン（世界第四位）にまで増大していた。こうして、アメリカはイランの石油利権を首尾よく獲得し、イランとアメリカの関係はそれまで以上に緊密さの度合いを深めていったのである。

ホメイニ師の登場と敵対時代の始まり

イスラム原理主義の炎

石油利権の割り当て増大によって、アメリカとイランの結びつきが年を追うごとに緊密化するにつれて、軍事面でも両国の関係は深まっていった。銃火器や戦車などのイラン軍の装備も、その大半がアメリカ製やイギリス製で占められるようになり、イランはイスラエルに次ぐ、中東におけるアメリカの同盟国としての地位を着々と固めていった。アメリカで開発されたばかりの新鋭戦闘機F－14トムキャットが、他国に先駆けてイランに売却されることが決まると、パーレビ国王は製造元のグラマン社への大規模な投資を申し出た（ただし軍需産業への他国資本の流入を禁じる米国の法律により実現はしなかった）。

こうしたアメリカとイランの蜜月関係は、一九七〇年までの間は、おおむね安定した状態で続いてきた。だが、七三年末頃に始まった石油価格の急騰*（オイルショック）でイラン国内に開発ブームが沸き起こると、イラン国内の政情に暗雲が垂れ込め始め、やがてはイランの国内世論とアメリカとの関係にも大きな亀裂が生じるようになる。

急激な経済発展によって、国民の収入格差が一挙に増大し、「バブル経済」の恩恵を受けたごく少数の特権階級を除く大部分の人々は、逆に物価高と低収入という二重のハンディを背負わされる生活環境へと追いやられてしまったのである。

そんな時、苦境に苦しむイランの人人を精神的に勇気づける役割を果たしたのが、イスラム教シーア派の指導者ルホッラー・ムサウィ・ホメイニだった。ホメイニは、六三年に民衆の反国王デモを扇動した罪で逮捕されて国外追放の憂き目を見ていた。だが、彼は亡命先のパリからイランに向けて説法

*クーデターが成功＝国外に脱出していたパーレビ国王も、クーデター成功の4日後の1953年8月22日に帰国している。
*石油価格の急騰＝1973年10月6日に勃発した第4次中東戦争の際、石油輸出国機構（OPEC）加盟6か国が原油の生産量の削減や、イスラエルの支援国への原油輸出の停止などを決定した（第1次オイルショック）。

を吹き込んだカセットテープなどを送り、腐敗した国王一族と、イランの石油利権目当てにパーレビ王朝を陰で支えるアメリカの影響力を、イランから一掃するよう繰り返し訴えかけた。ホメイニの説法に刺激を受けたイラン国民の間では、国王とその後見人であるアメリカへの強い憎悪が次第に燃え広がっていった。

一九七八年一月七日、イスラム教シーア派の聖地コムで発生した、神学生による大規模な反政府デモをきっかけに、イラン全土では反国王の集会が次々と催され、石油施設で働く国王反対派の労働者はストライキを決行してイラン政府の立場を窮地に陥れた。アメリカ政府は、石油利権の確保を目指して新たな政治工作を模索したが、宗教的な熱狂を背景とする反パーレビ感情のうねりは、小手先の秘密工作で解消できるものではなかった。

もはやパーレビ王朝の存続は不可能と判断したアメリカのカーター大統領は、国王に亡命の道を選ぶよう助言し、



パーレビ政権打倒後、亡命先のパリから帰国し民衆の歓声に応えるホメイニ師（写真中央）。イスラム教の教義に基づく国家建設と、反米色を明確にしたホメイニ師の思想は、到底アメリカが受け入れられるものではなかった。

これを受けたパーレビ国王は翌七九年一月十六日にイランを離れて、エジプト経由でアメリカへと渡った。

二月一日、亡命先のパリからテヘランに帰還したホメイニ師は、数百万人に及ぶ熱狂的なイラン国民によって、凱旋将軍のように手厚く迎えられた。

二月十一日、シーア派の「アヤトラ・オズマ（最高位の高僧を表す称号）」ホメイニは、イスラム教の預言者ムハンマドの治世を現代に復活させるべく、イスラムの教えを国政の中心に据えた「イスラム原理主義」政権の樹立を内外に宣言。続いて三月末に実施された国民投票では、正式な王制の廃止とイスラム共和制の導入が決定された。

これにより、アメリカとイランの蜜月関係にはくっきりと終止符が打たれた。だが、物語はまだ終わっていなかった。貧しい民衆を意に介さず、浪費と贅沢に明け暮れるパーレビ王朝時代が長く続いたことで、王朝を陰で支えたアメリカに対するイラン民衆の不信感は、米政府の想像をはるかに上回るほどに鬱積（うっせき）していたのである。

米大使館人質救出作戦

一九七九年十一月四日、狂信的なシーア派の神学生たちがテヘランのアメリカ大使館に乱入し、大使館員など六六人を人質として立て籠もり、米国で病気療養中だったパーレビの身柄をイラン側に引き渡すよう要求するという大事件が発生した（このうち女性を含む一三人は二週間後に解放）。

腐敗したパーレビ王朝の手先である秘密警察ＳＡＶＡＫ（国家公安情報機関）の弾圧に苦しめられてきた人々は、王制の廃止だけでは納得せず、国の富を食い物にしたパーレビ自身をイスラムの法で裁くべきだとする強硬派の意見に賛同した。そしてイランの新政権「イスラム革命評議会」は、国際間の外交特権に関するウィーン条約を無視し、イランの「民衆」に捕らえられた米外交官を救出しようというそぶりを全く見せなかった。

テヘランの米大使館がシーア派勢力に占拠され、イラン政府がそれを黙認していることを知ったカーター米大統領は、ただちに人質救出作戦を実行するよう、軍に命令した。テロ対策のために新設されたばかりの「デルタ・フォース」をはじめ、陸海空三軍と海兵隊から選抜された総員二〇八人の救出部隊が急遽編成され、アラビア海へと

派遣された。

一九八〇年四月二十五日の午後、アラビア半島東端のオマーン沖合に位置するアル・マシラ島から、米軍の救出部隊と味方のヘリに給油する燃料を乗せた六機の輸送機が出発し、イラン領内のテヘラン南東約四九〇キロに設定された合流地点「デザート・ワン」に着陸した。救出部隊は、周囲に人影のない砂漠に設けられたその地点で、三〇分後に海軍のヘリコプター八機と合流し、ヘリでテヘラン近郊まで運ばれた後、現地の協力者が用意したトラックに乗り換えて、テヘラン市内の大使館へと向かう段取りとなっていた。

ところが、イラン沖合に停泊中の空母『ニミッツ』を飛び立った海軍ヘリ八機のうち、二機が飛行中に故障し、合流場所には六機しか到着できなかった。しかも、合流場所で燃料を給油中、さらに一機の故障が判明して、救出作戦の実行はもはや絶望的となった。

無線で作戦中止の命令を受けた現地部隊は、残ったヘリが再び『ニミッツ』へと引き返すのに必要な燃料を給油するため、すでに燃料補給を終えたヘリを先に飛び立たせようとした。だが、このヘリは離陸と同時にバランスを崩して急降下し、燃料を満載したC－130輸送機に激突・炎上してしまう。

この事故で、空軍の乗組員五人と海兵隊員三人が死亡し、輸送機一機とヘリ一機がさらに失われ、救出部隊は途方に暮れてしまった。結局、残りのヘリ四機も現地で破壊することが決定され、生き残った兵士は全員輸送機に搭乗して、何の成果も挙げられないままアル・マシラ島の基地へと引き揚げることとなった。

こうして、アメリカの国鳥ハクトウワシが大空から舞い降りて人質を掴み上げ、再び飛び去る姿になぞらえて「イーグル・クロウ（鷲の爪）作戦」と名付けられたこの人質救出作戦は、無惨な失敗に終わった。カーターは最後まで、シーア派勢力の要求する「パーレビ国王の身柄引き渡し」を拒絶したが、その代償はきわめて高くついた。救出作戦の失敗で、アメリカの面子は丸つぶれとなり、イランに対するアメリカ国民の感情に、決して消えることのない深い傷を刻むこととなったのである。

人質と武器の交換――イランゲート事件

人質救出作戦の失敗で国民的な人気を失ったカーターに代わり、ホワイトハウスの新たな主人となったのは、共和党の超タカ派として知られるロナルド・レーガンだった。大統領選挙で圧勝したレーガンは、イランを「野蛮人の国」と決めつけ、もし人質をこのまま拘束するつもりなら、イランは暗黒の事態を迎えることになろうと警告した。

アメリカ軍による本格的な軍事攻撃を示唆したこのレーガンの発言から数日後の一九八一年一月二十日、長い交渉の努力もあってテヘランの大使館で監禁されていた米人全員が解放され、四四四日間にわたった人質事件は一応の解決を見た。だが、この事件により、アメリカとイランの両国政府は完全な断交状態に陥り、イランはアメリカにとってソ連に次ぐ敵対国となった。

一九八〇年に勃発したイラン・イラク戦争では、アメリカは公然とイラクを支援する姿勢を見せ、八三年十二月には大統領特使のドナルド・ラムズフェルド（現国防長官）がイラクの首都バグダッドを訪れて、サダム・フセイン大統領



「イーグル・クロウ」作戦が失敗に終わり、砂漠で残骸を晒すアメリカ軍ヘリコプター。占拠されたアメリカ大使館の人質を救出するために行われた同作戦には陸・海・空・海兵隊が参加したが、各軍の協調がうまくいかず、結局失敗に終わった。

と固い握手を交わした。だが、それからわずか二年後、レーガン政権は「宿敵」イランとの間で、不本意な裏取引きの実行を余儀なくされることになる。

そのきっかけとなったのは、中東のレバノンで活動するイスラム教シーア派の過激派組織が、通信社支局長や牧師、そしてCIAの中東責任者など影響力の大きな四人のアメリカ人を誘拐したことだった。レーガン政権の国家安全保障会議（NSC）スタッフは、レバノンの過激派組織との裏交渉を試みたが、全て不首尾に終わった。

問題解決の糸口を見い出せずに途方に暮れたレーガンは、秘密の連絡ルートを通じて、レバノンのシーア派組織を背後で支援するスポンサーと目されていたイラン政府との接触を図り、人質救出交渉の仲介を依頼するという苦渋の決断を下した。この申し出は、イラン側にとっても大きなチャンスだった。パーレビ時代にイラン軍がアメリカから購入した、F－14戦闘機などの近代兵器の多くは、交換部品の不足からイラン・イラク戦争の実戦に投入できず、宝の持ち腐れとなっていたからである。

結局、アメリカはイスラエルの仲介で、一九八五年から八六年にかけて国交が断絶しているはずの「宿敵」イランに対し、二〇〇〇発ものTOW対戦車ミサイルや、アメリカ製兵器の交換部品などを秘密裡に供給した。そして、表に出すことのできないその売却益を、中米ニカラグアの反政府右派組織「コントラ」への資金援助に秘かに流用したのである。

一九八六年十一月初めにこの事実が暴露されると、アメリカ国内では「イランゲート」あるいは「イラン・コントラ事件」と呼ばれる大きなスキャンダルとなった。武器を受け取ったイラン政府の働きかけにより、レバノンで誘拐されていた二人のアメリカ人が釈放されたが、レーガンは残りの人質解放を待たずに、作戦の中止を余儀なくされた。

そして、三年後の一九八八年七月三日、ペルシャ湾に展開中だった米海軍のイージス巡洋艦『ヴィンセンス』が、イランからアラブ首長国連邦のドバイに向かうイラン航空の民間機を誤って撃墜し、乗員乗客合わせて二九〇人を死亡させると、アメリカとイランの関係は再び氷のように冷却化した。

ちなみに、米海軍がイラン航空のエアバス機をイラン空軍のF－14戦闘機と誤認した事実をアメリカ政府が認め、賠償金として六二〇〇万ドルをイラン政府に支払うことを決定したのは、事件から八年が経過した一九九六年二月二十二日のことだった。


イラン・コントラ事件について議会で証言するオリバー・ノース中佐。彼は、ニカラグアの左派政権打倒を掲げていた反政府組織コントラへの武器売却を推し進めたキー・パーソンだった。この事件は、アメリカ政界を揺るがす大事件に発展した。

イランの核開発とアメリカの敵意

イランの核開発疑惑

一九八九年六月三日に反米最強硬派のホメイニ師が死去すると、イランの対米姿勢は多少軟化の兆しを見せ、アメリカとイランの対立は小康状態に入った。ホメイニの後継者として「ラフバル（国家最高指導者：大統領や首相よりも上位に位置する終身の国家元首）」の地位を引き継いだアリー・ハメネイ師は、前任者とは異なり、アメリカに対する挑発的な言辞をみだりに弄することのない比較的穏健な人物だったからである。

だが二十一世紀に入ると、アメリカとイランの敵対関係に新たな要素が介在することになる。イラン政府が秘密裡に核兵器の開発を進めているのではないかという疑惑が、国際社会で公然と囁かれるようになったのである。

イランが原子力エネルギーの導入に着手したのは、パーレビ国王時代の一九六七年のことだった。この年、テヘランの原子力研究センターで、アメリカが提供した研究炉の運転がスタートしたのである。その後、一九七四年にパーレビ国王の指示でイラン原子力庁が設立され、ドイツとの間で商業用原子炉建設の契約が締結された。

この時点ではまだ、イランの核開発が国際的な問題になることはなかった。同国は、一九七〇年に核拡散防止条約（NPT）に加盟しており、またアメリカとの同盟関係にあったことから、独自に核兵器保有へと突き進む可能性はきわめて低かったからである。

しかし、イスラム革命によってパーレビ王朝が打倒されると、イランの新政府は一九八四年、イスファハンに新たな原子力研究センターを設立し、IAEA（国際原子力機関）に何ら連絡することなく、数年後には遠心分離器によるウラン濃縮などの秘密研究施設をイラン国内に建設した。この秘密研究施設の存在は、二〇〇二年八月にイランの反体制派が写真を暴露するまで、国際社会の目から隠され続けており、イランが密かに原爆製造に必要な技術を手に入れつつあることを知った欧米諸国は、ただちに国連とIAEAを通じた圧力をイラン政府にかけ始めた。

二〇〇三年十二月、イランはいったん態度を軟化させ、IAEAとの間で追加議定書を調印し、秘かに核兵器を開発しているという批判をかわそうとした。しかし、翌二〇〇四年に入ると、パキスタンからの遠心分離器の「密輸」など、追加議定書の規約違反が明らかとなり、イランは厳しい立場に追い込まれていった。

実際には、イランはこの高性能遠心分離器の輸入を口頭でIAEAに報告しており、単にIAEAの査察団が見落としていただけだったが、現ブッシュ大統領は八月十日に開かれた市民との対話集会の席上、イランの態度を厳しく批判する言葉を口にした。

「イランは核の野望を放棄しなくてはならない。違法な兵器開発を全世界が非難するよう、他国を支援してイラン政府に圧力を加え続けなくてはならない。そして、自由を望むイラン国民を支援し、体制変更（現政府の転覆）を促していかなくてはならない」

アメリカのイラン核攻撃計画

現ブッシュ大統領の挑発的な言葉を知ったイラン政府は、翌八月十一日に中距離弾道ミサイル「シャハブ3」改良型の発射実験を実施。さらに八月二十日にはシャムハニ国防相がカタールの衛星テレビ「アルジャジーラ」のインタビューに答え、「先制攻撃戦略が米国の専売特許ではないと確信している軍事指導者はイランにもいる」と言明して、アメリカに対するイラン政府の敵意が決して衰えていないことを内外に知らしめた。

アメリカ政府は、二〇〇三年のイラク戦争時の反省から英仏独三国と緊密な協同歩調を取りつつ、イランに対して外交ルートを通じた政治的・経済的圧力を強める一方、軍事的手段でイランの核開発を阻止するための情報収集を本格的に進めていった。二〇〇五年一月以降、イランの核開発施設上空には偵察衛星と無人偵察機が頻繁に姿を現すようになり、イラン国内の反体制組織にも詳細な情報提供を要請した。

そして、二〇〇五年八月三日に強硬保守派のマフムード・アーマディネジャド元テヘラン市長がイランの第六代

Column 密接なイランと日本の関係

サッカーの国際試合における強豪イラン代表チームの活躍や、アッバス・キアロスタミ監督作品をはじめとするイラン映画の公開により、日本におけるイランのイメージも徐々に変わりつつある。だが、日本とイランの二国間関係で最も大きな比重を占めているのは、今も昔も戦略物資「石油」である。経済産業省の統計によると、2005年における日本の原油輸入先の第3位がイランで、総輸入量の13.8%に当たる原油が、イランの原油積み出し港からホルムズ海峡を通って日本へ運ばれている。

しかし、石油をめぐる日本とイランの歴史には、消し去ることのできない傷跡がいくつか存在する。その代表的な例が、1973年4月に三井物産ら日本企業の出資する投資会社「イラン化学開発（ICDC）」とイラン国営石油化学（NPC）の合同出資で設立された合弁企業「イラン・ジャパン石油化学（IJPC）」の不運な顛末である。

建設開始から半年後に発生した第4次中東戦争の影響で工事費が当初計画の5倍に膨れ上がり、完成間近の1980年にはイラン・イラク戦争の勃発により、建設中の施設がイラク軍の爆撃によって破壊された。もはや工事の再開は絶望的だと考えた日本側は、IJPCの事業継続を断念し、1989年に精算金として1300億円（うち約800億円は投資保険から充当）をイラン政府に支払い、何一つ得ることなくイランの石油権益から撤退した。

それから17年後の2006年2月、イラン政府は再び、日本の企業連合「国際石油開発」との間で、アザデガン油田の合弁事業契約を締結した。だが、イランを敵視するアメリカの政治的圧力は強まっており、核開発に伴う国連の制裁内容次第では、日本は再びイランの石油で貧乏くじを引くことになるかもしれない。
（文＝山崎雅弘）

大統領に就任すると、アメリカとイランの関係断絶は決定的なものとなった。一九七九年に発生した米大使館人質事件の際、アーマディネジャドがシーア派勢力の一人として事件に加わっていたとの噂（イラン政府は否定）がアメリカ国内で広がると、米国民の世論はアーマディネジャドを敵視する方向へと一挙に傾いていった。

これ以降、アメリカとイランの両国はメディアを通じて激しい恫喝の応酬を繰り広げた。二〇〇六年四月四日、アメリカのニューヨーカー誌が米政府関係者の証言として「ブッシュ政権がイランに対する空爆の策定作業に入っており、核兵器の使用も選択肢に含まれている」と報道すると、イラン革命防衛隊（武装親衛隊的な性格のエリート軍事組織）のサファビ司令官は四月十六日、次のような談話を発表した。

「米国によるイランへの攻撃は、戦略的な失策となろう。もし相手がそのような攻撃を実行すれば、イランは脆弱なイラク駐留米軍に対して反撃するだけだ」

その三日後の四月十九日、ブッシュ大統領は「外交的努力でイランの核開発の阻止に失敗すれば、核攻撃の可能性も否定することはできない」と明言したが、イランはこの「核の恫喝」にも怯むことはなかった。六月五日、ハメネイ師は「米国がイランに対して少しでも過ちを犯せば、世界のエネルギー供給は深刻な危機に直面することになる」と穏やかに警告、有事の際には石油供給の大動脈であるホルムズ海峡を封鎖する用意があることをほのめかした。

国際社会の批判を承知の上で、世界有数の産油国イランが原子力エネルギー研究を強行する背景には、核兵器ないしその製造能力の保有を目指す軍事的な意図が隠されているとする見方が、現在の国際社会では一般的である。実際に核兵器を保有しなくても、製造技術を確立して「核兵器保有可能国」の地位を確保しておけば、他国からの先制攻撃を受けにくくなるはずだという「抑止的核保有」の発想は、皮肉なことにアメリカが「悪の枢軸国」と名指しするイランと北朝鮮に共通する思考形態であり、今やアメリカが彼らに恫喝を加えれば加えるほど、両国はさらに核保有への欲求を強めるという悪循環に陥っている。

二〇〇六年四月十一日、イラン原子力庁のアガザデ長官はテレビ演説で、原爆の材料であるウラン235を抽出する前工程の六フッ化ウラン（ガス）を一一〇トン（専門家の試算では原爆一二個分に相当）保有していることを明らかにし、イランの核保有に対する欧米諸国の懸念が裏付けられることとなった。

果たしてアメリカは、イランの核兵器保有を実力で阻止する道を選ぶのか。そして、もし米軍がイランの核開発を粉砕するため核兵器を使用する事態が発生した時、ブッシュ大統領は「核をもって他国の核を潰す」という行為をどのような論理で正当化するのか。

東西冷戦の終焉を経て二十一世紀を迎えた今、原爆のキノコ雲が再び都市の上空に姿を現すという悪夢の幻影が、アジアの東と西で亡霊のように徘徊しているのである。



2005年10月、演説を行うイランのアーマディネジャド大統領。核開発疑惑に対する強固な姿勢や反米的な発言が先行し、「非理性的な独裁者」のイメージが定着しているが、実際はバランス感覚を持った現実主義的な政治家としての顔も持つ。21世紀のアメリカとイランの関係は、彼の登場で新しい段階に入ったといえよう。

〈参考文献〉ジェラール・ド・ビリエ　黒木壽時訳『国王の罠　イラン・パーレビ国王』（勁文社）／ロバート・グレアム　宝利尚一・丸山勝・鈴木康雄・舟生素一共訳『イラン　石油王国の崩壊』（柘植書房）／カーミット・ルーズベルト　小西昭之訳『CIAの逆襲　ドキュメント・パーレビ復権』（毎日新聞社）／スティーブン・エマーソン　落合信彦訳『秘密工作者たち』（集英社）／D.P.ボルガー　井上寿郎訳『アメリカン奇襲作戦』（朝日ソノラマ）／鳥居順『イラン・イラク戦争』（第三書館）／Joseph Miranda『Ayatollah Khomeini』（Strategy & Tactics #160）／新聞記事多数

歴史群像 12月号は 11月6日(月)発売です

定価930円（税込）

※編集の都合により、
一部記事が変更になる場合がございます。



●米軍日本進攻の総仕上げとして、
その焦点となったのが硫黄島であった。
米軍は当初、攻略戦は5日で終わると想定していたが、
降伏も玉砕も許されない日本軍の必死の抵抗によって
予想外の損害を出す。
それでも敢闘精神に富む海兵隊の奮闘により
攻防1か月の末、
ついに硫黄島は陥落した。
太平洋戦争終盤における未曾有の
激戦となった硫黄島攻防戦を
攻略に挑む米軍サイドから照射し、
その戦略・戦術を再考する。

米兵たちの硫黄島

関ヶ原・幻の東西主力決戦

●関ヶ原主戦場の東西決戦は、実は両軍ともに主力不在の対決であった。東軍主力の秀忠軍は未だ行軍の途中、西軍総大将である毛利輝元は大坂に陣したまま、美濃・関ヶ原において1日にして勝敗が決し、主力決戦は幻に終わった。しかし本来、両軍とも敵主力との激突を想定して、作戦を進行させていたはずである。主力決戦へ向けて準備を進めた両軍の時々刻々を丹念に追い、真の天下分け目の合戦の、両者の作戦計画を見直す。

真実のアルマダ海戦

●女王陛下の艦隊が大帝国スペインの無敵艦隊を破り、英国は海上覇権を確立する…。両国艦隊の対決は「アルマダ海戦」の名で知られ、一般にはこう評価されてきたが、実際の戦いは、そうした認識とかなり様相を異にしていた。英国側もスペイン側も、それぞれに問題を抱え、戦術も戦略も不完全なまま、両者とも決定的な勝利を収めることなく、決着は持ち越されたのである。史上名高い海戦で繰り広げられたシーソーゲームの顛末を描く。

大戦を通して活躍した“鋼鉄の軍馬”の実力 **IV号戦車大研究**

転換した赤軍の戦略 **独ソ開戦、極秘の図上演習**

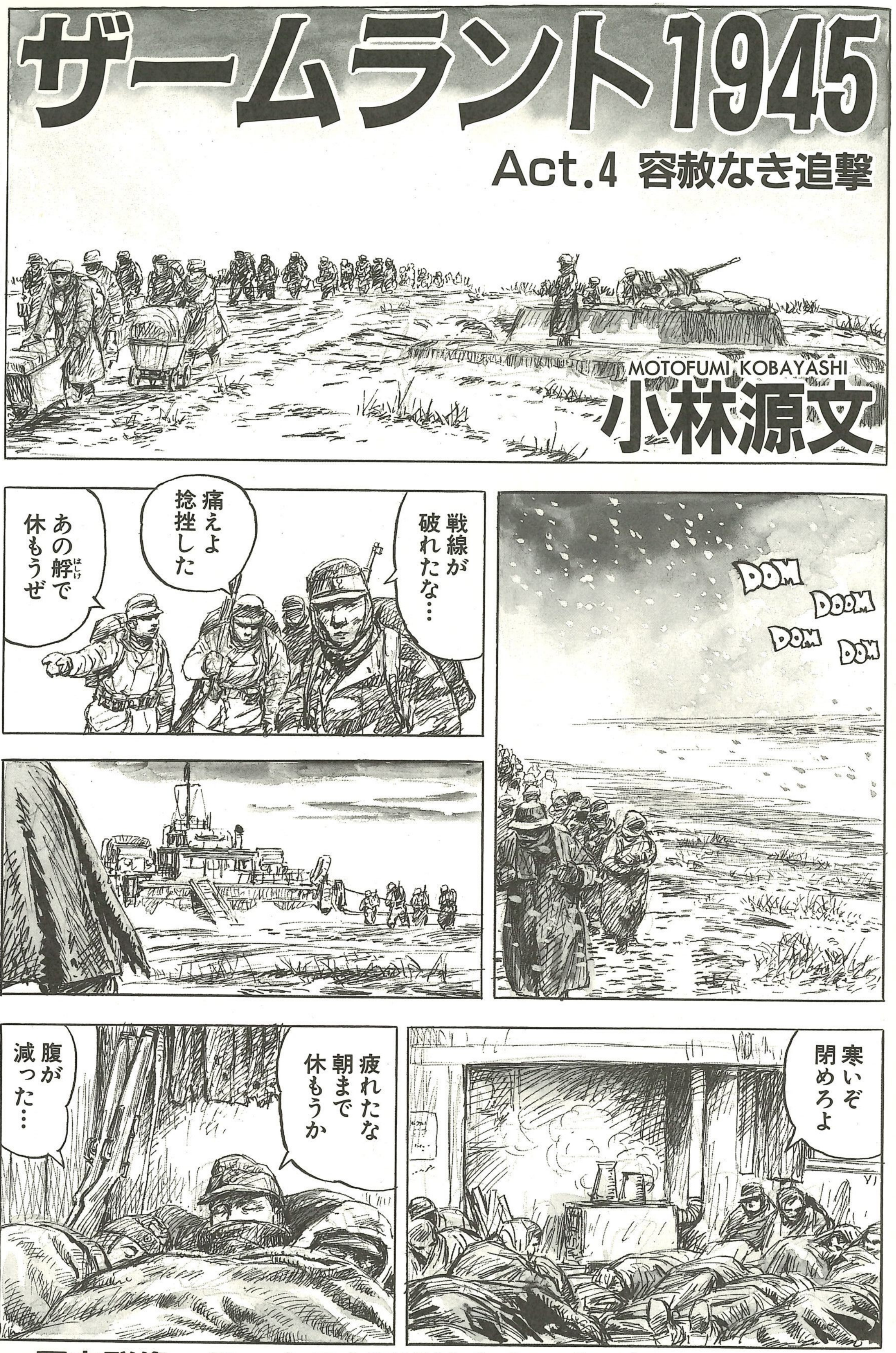
波乱万丈センゴク生き残り人生 **仙石秀久一代記**

沿岸を守備する動く水上砲台 **モニター艦**

狂気の暴動はなぜ起きたのか **ルワンダ内戦**

小林源文
Motofumi Kobayashi
ザームラント1945
Act.5

いまや戦線は崩壊し、敗勢のドイツ軍にソ連軍の猛追が迫っていた！



歴史群像コミックス新刊『鉄十字の虎』大好評発売中！

歴史群像 10月号 No.79

2006年10月1日発行　定価930円（消費税5%込み）
第15巻5号
発行所　株式会社　学習研究社
〒145-8502　東京都大田区上池台4-40-5

〈発行人〉
大沢広彰

〈編集人〉
新井邦弘

〈編　集〉
福岡直良　池内宏昭

〈編集協力〉
河村啓之　菊地のぶお　小林直樹　時實雅信　治田武士　樋口隆晴
細田浩（スタジオ・とき）　松木時彦（VANGUARD）　芦田隆介
河島めぐみ　明昌堂　ムックハウスJr.

〈写真協力〉
呉市歴史海事科学館　海人社　毎日新聞社　久留米市　NPO法人南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム　文殊社　瑞泉寺　土佐山内家宝物資料館　龍潭寺
養源院　桐野作人　三野正洋　野原茂　白石光　廣田厚司　佐山二郎
U.S.A.F　AP/WWP　ITAR-TASS　C.P.C.　Erich Lessing/PPS　AKG/PPS
プロフェッショナルイメージ

〈協力〉　ミリオン出版　石本馨　神崎夢現

〈アートディレクション〉
土田省三

〈デザイン〉
Little Elephant Co.　高山静美　篠 宏行
株式会社ファントムグラフィックス　神崎夢現

〈印刷所〉
凸版印刷㈱

〈お問い合わせ〉
この本に関するお問い合わせは、次の所へお願いします。
●編集内容について:03-5447-2314（編集部直通）
●不良品（落丁・乱丁）:03-5496-0637（雑誌販売室）
●それ以外のこの本に関することは……学研お客様センターへ
文書は　〒146-8502　東京都大田区仲池上1-17-15
お客様センター『歴史群像』係
電話は　03-3726-8124
●ご購入・ご注文:お近くの書店様にお願いします。
●広告のお問い合わせ
03-5447-2314（編集部直通）または03-5434-1072（広告部）

〈お詫びと訂正〉
78号P50の『ザ・タイムズ』の写真の説明に「9月11日付け」とありますが、「12月11日付け」の誤りです。また、P39に「一八インチ（正確には六〇七ミリ）」とありますが（正確には四六〇ミリ）（換算では457ミリ）の誤りです。ここに訂正しお詫びを申し上げます。

歴史群像8月号・No78 プレゼント当選者発表

●ブックレビュー
①予告されていたペリー来航と幕末情報戦争
千葉県　吉川　健二
千葉県　萩原　克美
神奈川県　村上　修三
②教科書に載せたい日本史
埼玉県　原　久夫
東京都　堤　猛史
石川県　塩谷　忠士
③明治の若き群像
茨城県　神長　彩子
京都府　田中　秀彦
奈良県　神田　英雄
④殿様の通信簿
愛知県　石田　哲也
滋賀県　高木　寛弘
愛媛県　西浦　啓之
⑤日本海海戦とメディア
千葉県　平賀　和也
埼玉県　関根　弘樹
静岡県　鈴木　孝治
⑥空母機動部隊の打撃力
埼玉県　深澤　隆
広島県　安藤　正孝
愛媛県　山本　満洋
⑦飛び道具の人類史
福島県　佐藤　良弘
神奈川県　鈴木　良太郎
滋賀県　桜井　剛

●新着情報
⑧アドバンスド大戦略 5
東京都　湯浅　将史
長崎県　竹山　良治
宮崎県　中沢　靖宗
⑨ブリッツクリーグ 2
石川県　久保　和正
愛知県　小塩　正人
福岡県　青野　明弘
⑩WINBACK 2
東京都　杉本　誠一郎
大阪府　高丸　俊治
熊本県　吉村　守弘
⑪METAL　SAGA
埼玉県　樽井　浩昭
愛知県　大河原　寛次
大阪府　松原　和弘
⑫戦艦大和の最期
東京都　公文　蔵人
神奈川県　初瀬　正
京都府　石原　修
⑬戦国BASARA2
北海道　高田　崇一朗
青森県　工藤　峰央
福島県　佐藤　幸治

●プレゼント
⑭プラモデル大和
茨城県　荒畑　章一
栃木県　中西　真一
東京都　西田　太郎
⑮プラモデル靖国
東京都　小久保　景市
静岡県　山岡　和弘
高知県　森田　圭介
⑯プラモデル零戦52丙型
福岡県　伊藤　栄一
大分県　田所　雄吾
鹿児島県　森園　俊介
⑰画集REBIRTH
埼玉県　吉田　剛士
埼玉県　島垣　一道
福岡県　松本　マミ
⑱写真付き切手セット
北海道　杉山　英徳
岩手県　沼倉　亮太
新潟県　田中　英一
⑲DVD-BOX 空自保有機大全
新潟県　高橋　正悦
長野県　樋口　幸一
⑳DVD-BOX コクピット・アイズ
埼玉県　今野　哲
福岡県　佐川　隆司
㉑フィギュアセット 世界の傑作機03
兵庫県　井口　弘昭



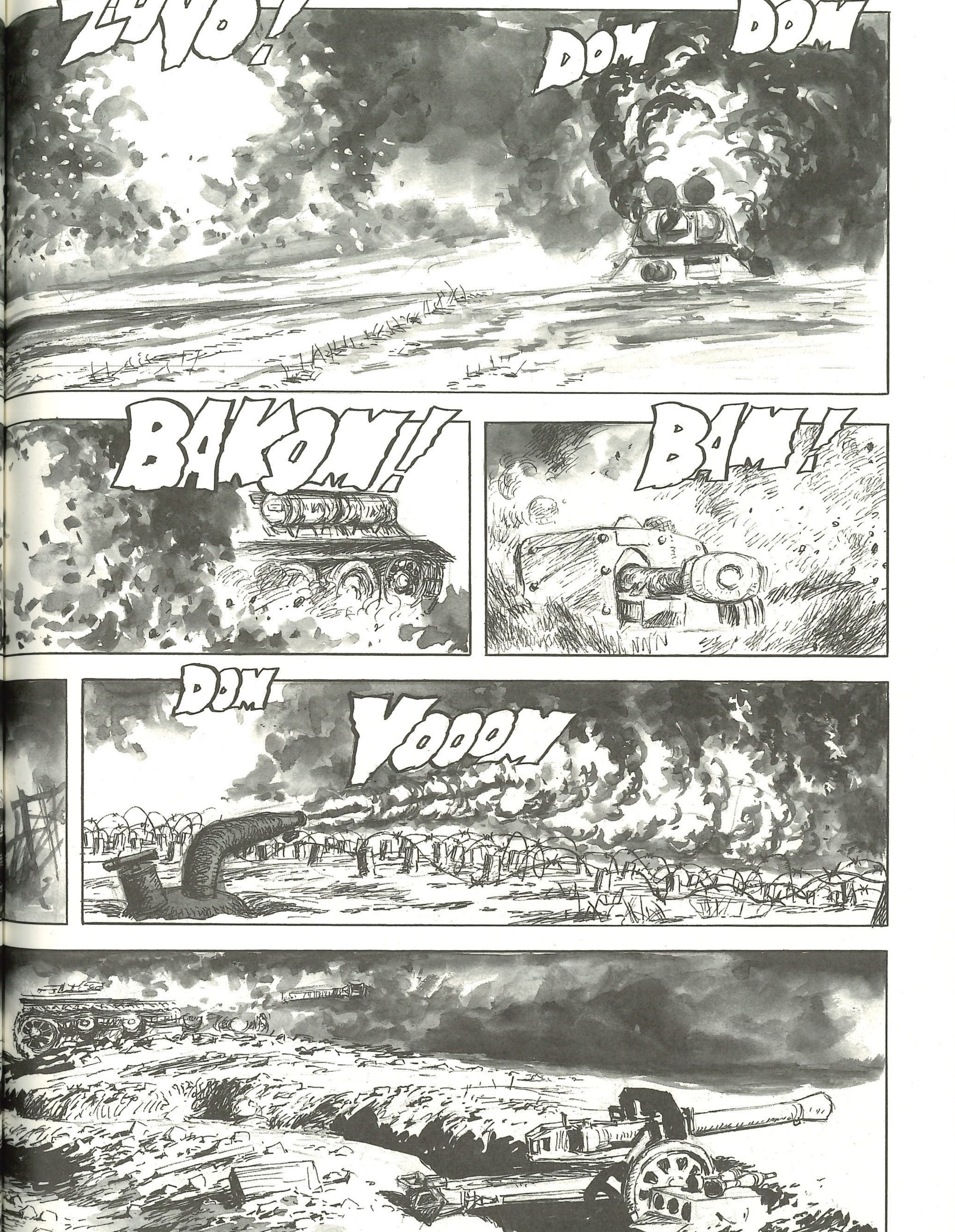


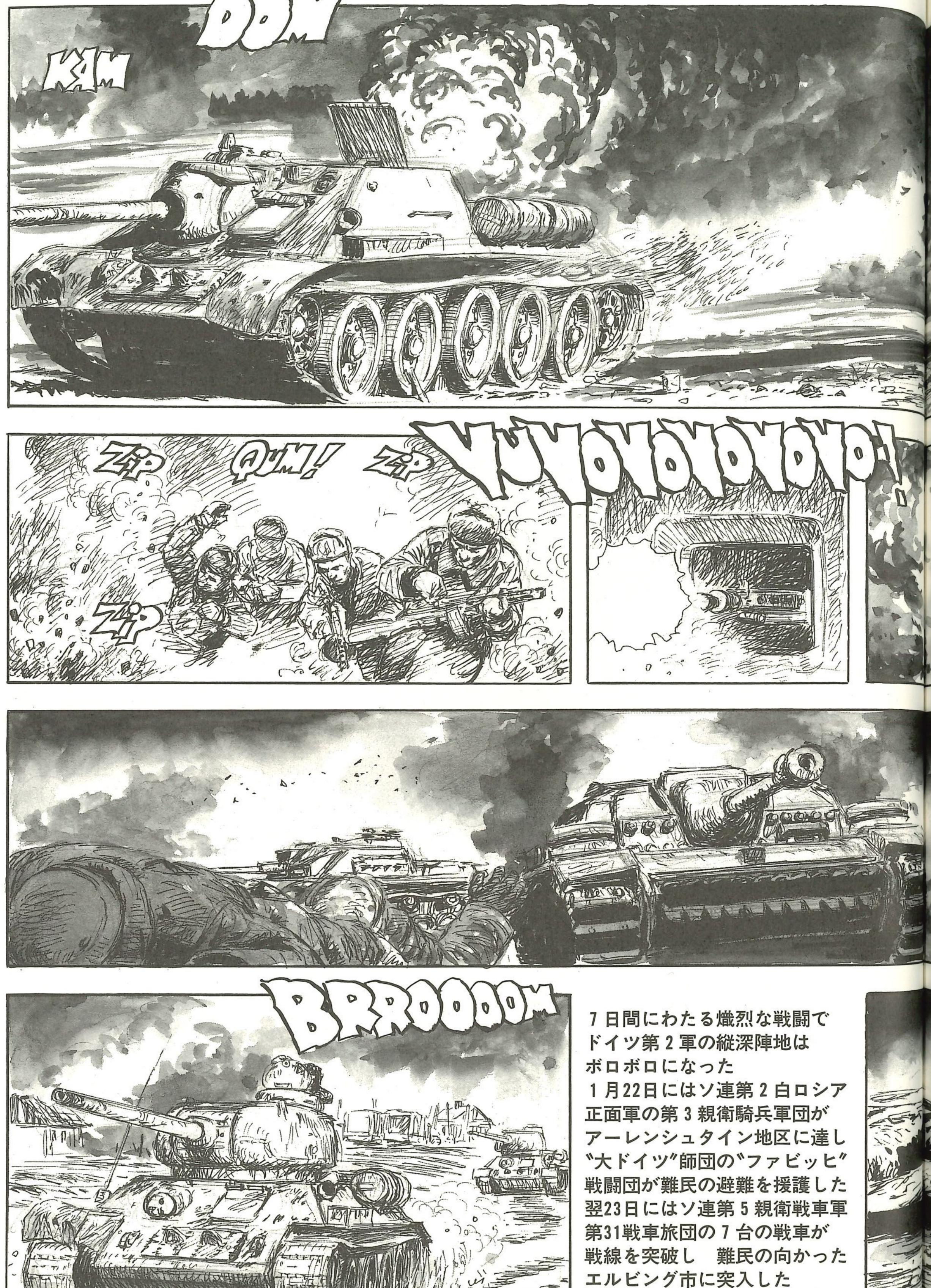
死は分け隔てなくやって来た
ドイツ人であるというだけで
老若男女区別なく爆撃された
ピラウを出てから3日目
サジェールたちは
〝大ドイツ〟師団がいるという
ダンチィヒにたどり着いた




サジェールたちが再編制本部の見当違いでダンツィヒに着いた頃
ポンメルンから東プロイセンにかけての戦線が崩壊した
——ソ連軍側の資料からこの過程を見てみよう
夏季攻勢を停止してから４か月後の
1945年１月 ソ連軍は再び攻勢を開始した
充分に準備して始めた大攻勢は
「ヴィスワ–オーデル作戦」と名づけられた
バルト海
ケーニヒスベルク
ダンツィヒ
コルベルク
エルビング
東プロイセン
ポンメルン
ベルリン
キュストリン
ワルシャワ
ドレスデン
プラハ
第１バルト正面軍
第３白ロシア正面軍
第２白ロシア正面軍
第１白ロシア正面軍
第１ウクライナ正面軍
第一段階は 第２白ロシア正面軍
第１白ロシア正面軍
第１ウクライナ正面軍が
１月13日に突破作戦を開始した
第二段階は 第２白ロシア正面軍と
第１白ロシア正面軍が共同で
北のバルト海へ達する東プロイセンを
分断する作戦で １月17日に始まった
このソ連軍の恐ろしい脅威に対して OKH(ドイツ軍参謀本部)は
東プロイセンの装甲予備兵力〝ヘルマン・ゲーリング〟装甲軍団と
〝大ドイツ〟装甲軍団を早期に投入した これが結果的にソ連軍を助けることになった


早期に投入された〝ヘルマン・ゲーリング〟装甲軍団と〝大ドイツ〟装甲軍団の
装甲予備兵力は行動の自由を奪われ 消耗戦に巻き込まれた
このため他の戦線はソ連軍の攻撃で弱体化していった
DOM DOM
DOM
BAM BAM BAM
撃てッ!!
ZUYO
ZUYO
DOM
BOM
DOM
BAOM!

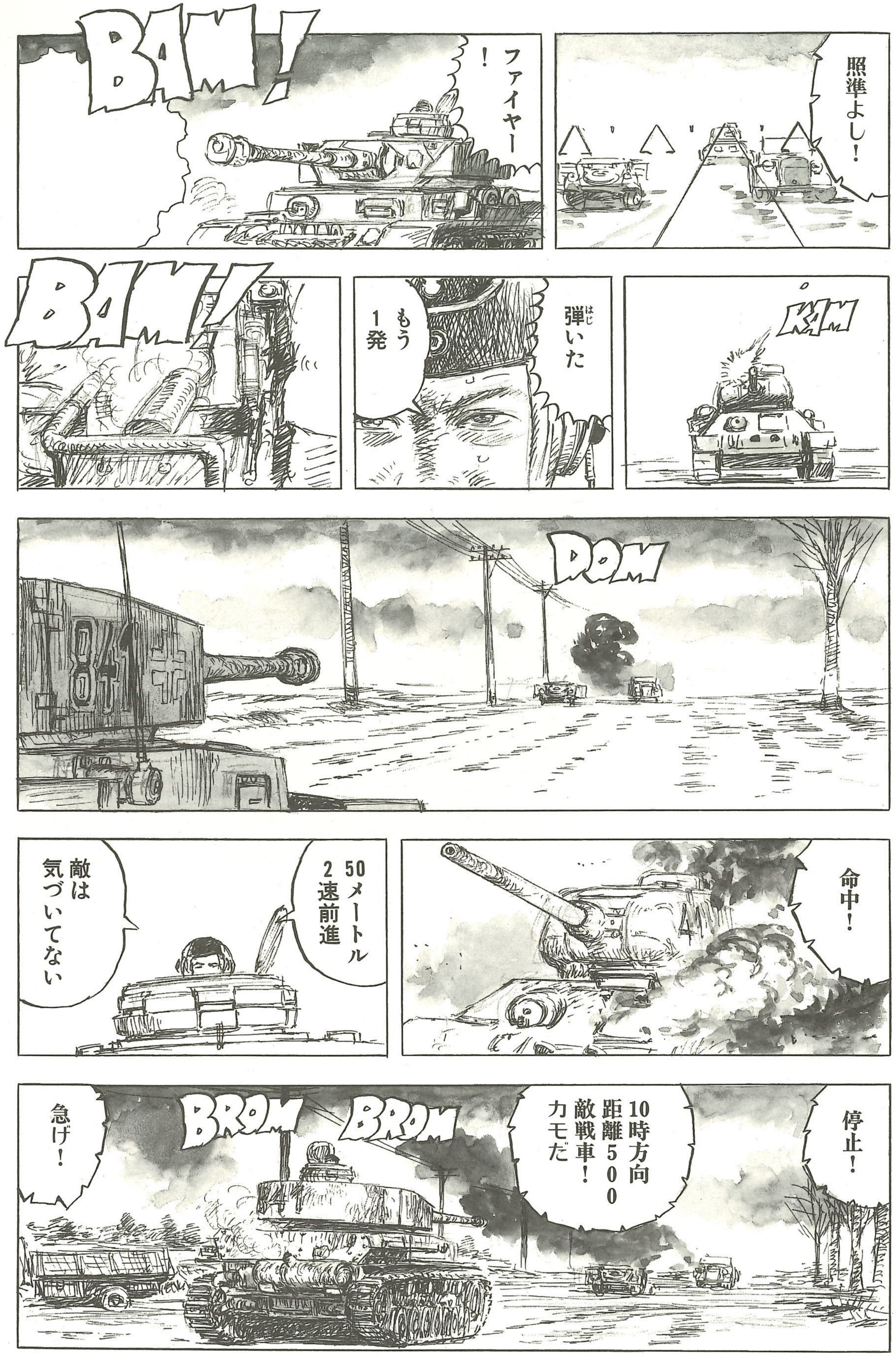

DOM
DOM
ZUVO!
BAM!
BAKOM!
VOOOM
DOM


DOM
KAM
VUVOVOVOVOVO!
ZIP
QUM!
ZIP
ZIP
BRROOOOM
7日間にわたる熾烈な戦闘で
ドイツ第2軍の縦深陣地は
ボロボロになった
1月22日にはソ連第2白ロシア
正面軍の第3親衛騎兵軍団が
アーレンシュタイン地区に達し
〝大ドイツ〟師団の〝ファビッヒ〟
戦闘団が難民の避難を援護した
翌23日にはソ連第5親衛戦車軍
第31戦車旅団の7台の戦車が
戦線を突破し　難民の向かった
エルビング市に突入した


BORRRRRRROOOOM
その日の午後にエルビング市に
入ったソ連軍戦車が砲撃を始め
予想外に早いソ連軍の進出により
街中が大混乱になった
戦車は街を縦断すると橋に向かい
列車を砲撃しフリッシュ潟まで出た
これに対して装甲擲弾師団〝フィルドヘルンハレ〟の
予備大隊が迎え撃ち　5 台を撃破した
兵力を全部送り込め！
DOM
TOTOTOTONK
この日
ソ連第 2 白ロシア正面軍の
先遣隊は
東プロイセンの分断に成功した
だが 戦いながら東プロイセンへ
後退するドイツ軍が
死に物狂いで反撃して
分断したソ連軍の前線を激しく
攻撃した
このため第 2 白ロシア正面軍は
ジューコフ将軍の右側面援護より
ポンメルン方面へ兵力を集中した
ほどだった

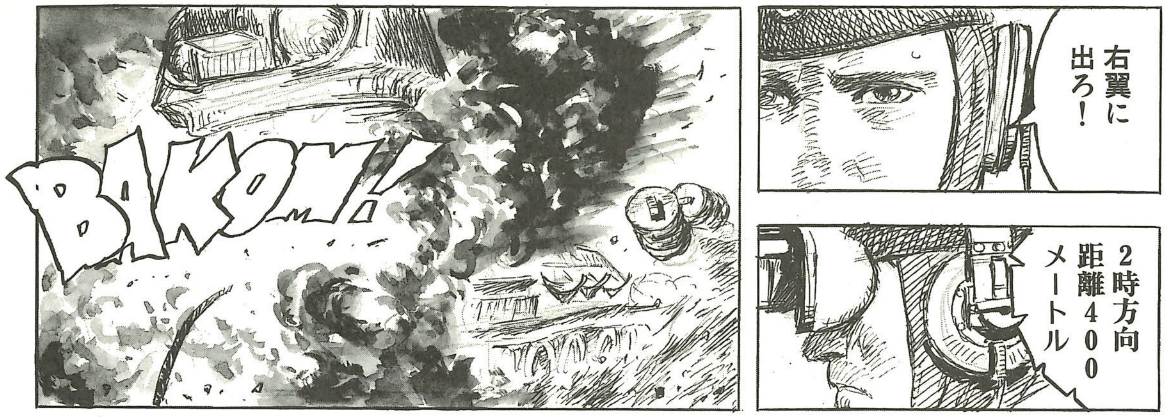

一方
ケーニヒスベルク正面でも
第 1 バルト正面軍および
第 3 白ロシア正面軍が
攻勢を開始した
砲撃と猛烈な空爆が
ドイツ軍防衛陣地を鋤き返す
戦線は徐々に崩れだし
ケーニヒスベルク要塞と
ハイルズベルク要塞地帯へ
ゆっくりと後退した
SH!
ZuVO
DOM
ZuVO
VVVRRROOOOOOM
BAOM!
BAOM!
BOM!
DOM DOM DOM
DOM DOM
BROOOOM
DOM


ホフ3より
モートル
応答しろ
DOOOM
DOOM
友軍の
姿なしだ
第549国民擲弾師団戦区
オットー少尉
ポンコツ
無線機が
いかれました
停止！
くそ！
ここは俺たち
だけだ
オットー
どうする
後退か？
戦闘放棄だ
砲弾が
ある限り
論外だろ
経歴が
汚れるぜ
DOM
BRROOOM
DOOOM
DOM
正面に
敵戦車！
ポンコツの
出番だ
早く
片づけよう

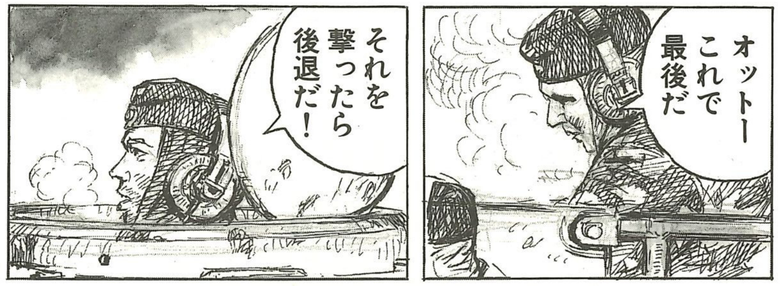

照準よし！
ファイヤー！
BAM!
KAM
弾いた
もう
1発
BAM!
DOM
命中！
50メートル
2速前進
敵は
気づいてない
停止！
10時方向
距離500
敵戦車！
カモだ
BROM
BROM
急げ！

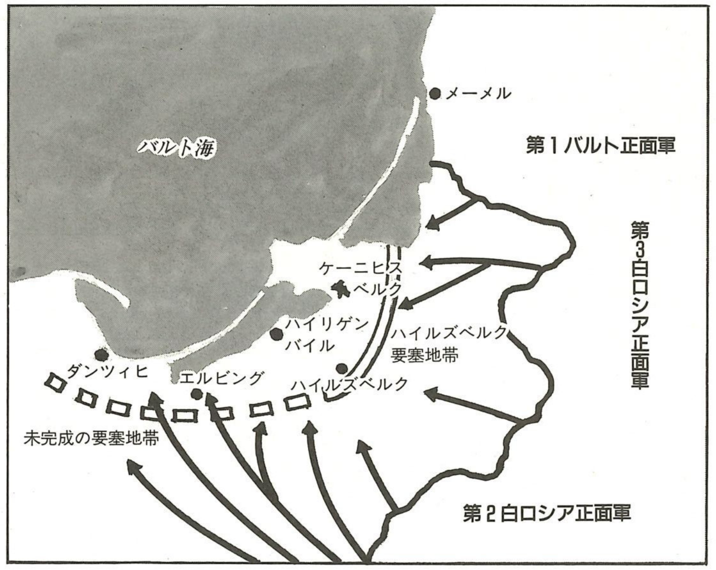


ザームラント1945



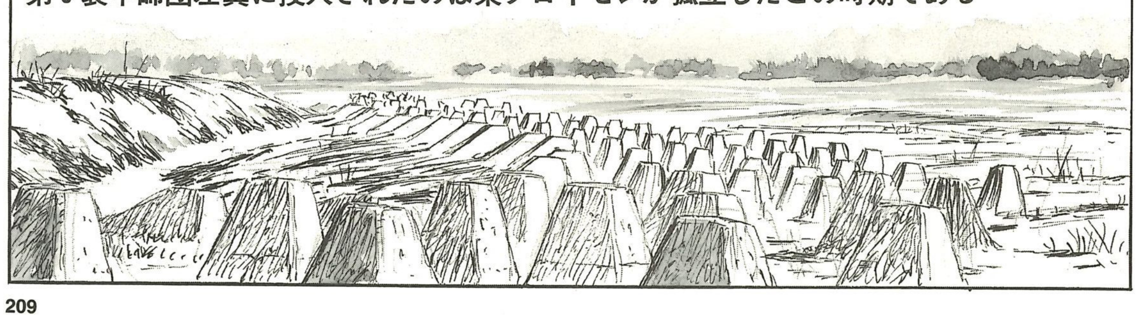
1945年１月17日 第５装甲師団第31戦車連隊第８中隊オットー・ハイマン少尉は第549国民擲弾師団戦区で歩兵支援もないまま単独で敵戦車25台を撃破したこの功績により３月17日に騎士十字章を授与された





ドイツは19世紀より北海やバルト海に面した沿岸の防衛と要塞化を進めてきた20世紀に入ると砲術の進歩に合わせて要塞の近代化も必要になった第一次大戦後の1930年にはポーランドを警戒し条約に準じて東プロイセンではケーニヒスベルク東部からハイルズベルク要塞地帯を経てバルト海に至るラインを永久築城してきた

第502重戦車大隊が移送されて
第５装甲師団左翼に投入されたのは東プロイセンが孤立したこの時期である




カルパネトすごい戦果だな
よォ!ケルシャー
やっと君に追いついた
運がよかったのさ
弾薬もあったしな
ソ連軍がバルト海に出たらしい
司令部は大混乱だぜ
東プロイセンは包囲されたってことか
クールラントに残ってたほうが安全だったな
本国からかなり遠いぜ
早く戦争が終わればいいな…
絵描きに戻るのか?
うん そうだな 絵描いて食えればいいよ
カルパネト 戦争が終わったら会おうな
ああ… ケルシャー 絶対連絡をよこせよ


おい ケルシャー
変速機がおかしいよ
またか… 直るか?
わからんよ
おーい ケルシャー
なんだ ゲーリング
故障だよ 先に行ってくれ
こっちも故障だ しかも重症だ 変速機に足回りだ
かなり手間がかかりそうだよ
ゲーリング わかった
直ったら先に行くよ

郵便はがき

料金受取人払
千鳥局承認
1019

差出有効期間
平成19年1月
5日まで
(切手をはらずに
お出しください)

146-8755

東京都千鳥郵便局私書箱
学研「歴史群像」編集部
2006.10月号 係

切り取り線

ご住所（〒　　　　　　） 都道 府県	電話番号
お名前	年齢 (1)18歳以下 (2)19〜22 (3)23〜29 (4)30〜39 (5)40〜49 (6)50〜59 (7)60〜69 (8)70歳以上
性別 1.男 2.女	ご職業 1.小中学生 2.高校生 3.大学・専門学校生 4.会社員 5.公務員 6.自営業 7.無職 8.その他（　　　）

1 歴史群像の定価についてどうお考えですか？
1.高い 2.適正な価格 3.安い

2 歴史群像の発売をどのようにして知りましたか？
1.前号予告 2.新聞広告 3.雑誌広告(雑誌名:　　　　)4.知人の紹介 5.その他

3 いつも歴史群像をお買い上げいただいていますか？
1.いつも買う 2.テーマによって買う 3.今回はじめて買った

4 テーマによってご購読されている方におうかがいします。今回ご購読のきっかけとなった記事はなんですか。裏面の番号でお答えください。

プレゼント希望番号	❶	❷	❸

プレゼント応募の締め切りは平成18年10月6日（当日消印有効）です。

●ご記入いただいた個人情報は、商品・サービスのご案内や企画開発のために使用させていただく場合があります。
個人情報に関するご依頼・お問い合わせは、(株)学習研究社 歴史群像編集部 電話03-5447-2314
受付時間：土日・祝日を除く(11:00〜18:00)までにお願い致します。
詳しくは弊社の個人情報保護に関する基本方針（ホームページ http://www.gakken.co.jp/privacypolicy/）をご確認ください。

切り取り線

1 本誌の記事の中で、おもしろかったもの、つまらなかったものをそれぞれ順に下記の記事一覧から番号でお答えください。

<おもしろかった記事>

1		2		3		4		5	

<つまらなかった記事>（なければお書きいただかなくても結構です）

1		2		3		4		5	

(1)甲斐 能見長塁 (2)二等輸送艦（SB艇）(3)B−24重爆撃機 (4)ボロディノ1812 (5)「タフな米空母」を支えた艦上作業 (6)中国の投射武器 (7)チュニジアの戦い (8)関ヶ原・島津退き口 (9)満州電撃戦 (10)日本駆逐艦発達史 (11)戦象の世界史 (12)シュトルモヴィク大研究 (13)小笠原戦跡を行く (14)信長の独断 (15)軍用ヘルメット② (16)戦場のミステリー (17)福山孝之インタビュー (18)再考 幻の秀次政権 (19)「明四事件」始末記 (20)津波作戦 (21)イランvs.アメリカ (22)ザームラント1945

2 本誌記事のページ量についてお聞きいたします。

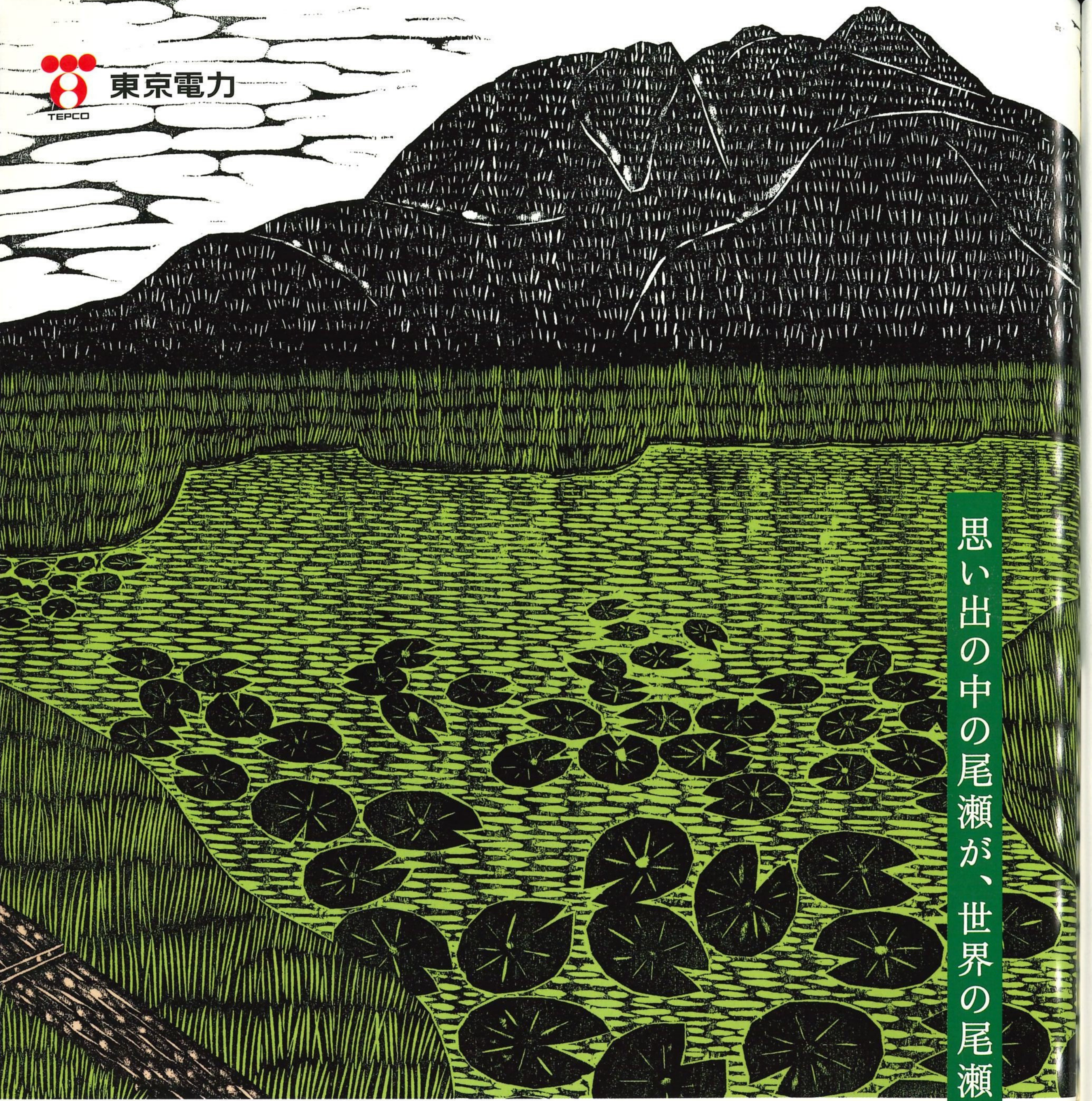
1.記事ごとのページ数をもっと増やしてほしい 2.ちょうどいい 3.記事ごとのページ数を減らしてタイトル数を増やしてほしい

3 兵器について知りたいことは何ですか？

1.メカニズム 2.発達史 3.運用マニュアル 4.実戦例 5.その他（ ）

4 本誌の内容についてのご意見・ご感想や「歴群フォーラム」への投稿など、ご自由にお書きください。記事に引用させていただく場合がございますので、ペンネームご希望の方は、その旨ご記入ください。
なお、ご要望、投稿は電子メールでも受け付けています。アドレスはrekishigunzo@gakken.co.jpです。どうぞご利用ください。

———ご回答いただきありがとうございました。



思い出の中の尾瀬が、世界の尾瀬になりました。

「♪夏が来れば思い出す、遙かな尾瀬遠い空」(江間章子作詞「夏の思い出」)と愛唱されてきた尾瀬。多くの人々を魅了してきたその尾瀬が、昨年末ラムサール条約※に登録されました。ご存知の方も多いと思いますが、広大な尾瀬の約7割の土地を東京電力が所有しています。東京電力は、多様な生命を育むこの豊かな自然を守るため、約半世紀にわたって地元の人々と力を合わせ、20㎞に及ぶ木道の整備や荒れ果てた湿原の植生復元などの保護活動に取り組んできました。もちろん現在もそれは継続されています。100年後もこの自然に出会えるよう、国民的財産である尾瀬を、私たちはこれからも大切に守り続けます。

※ラムサール条約：1971年にイランのラムサールで採択された、湿地の保護とそこに生息する動植物の生態系の保全を促し、湿地の賢明な利用(Wise use)を進めることを目的とした条約。



◆つづく◆